かつてハラハラドキドキしながら読んだ、黄金時代のSFをイメージして書きました。冒険、ファンタジー、ホラー、成長小説など、様々な要素が膨らみ、最終的に1760枚を超える過去最長の作品となりましたが、一気読みのエンターテインメントに仕上がったという自負があります。SFファンも、あまり読んだことがないという方も、変貌した千年後の世界で、ひととき現実を忘れていただければ、作者冥利に尽きるというものです。

——貴志祐介

新世界より

貴志祐介

Yusuke Kishi

講談社
NOVELS

新世界より

貴志祐介

キJ-01
講談社
Y1900

9784061826601

1920293019000

ISBN978-4-06-182660-1
C0293 ¥1900E (0)

新世界より
貴志祐介

定価：本体 1900 円(税別)

1000年後の日本。「呪力（じゅりょく）」こと、念動力を手に入れた人類は、「悪鬼（あっき）」と「業魔（ごうま）」という忌まわしい伝説に怯えつつも、平和な社会を築いていた。しかし、学校の徹底した管理下にあった子供たちが、禁を犯したため、突然の悪夢が襲いかかる！ 崩れ去る見せかけの平和。異形のアーカイブが語る、人類の血塗られた歴史の真実とは⁉

貴志祐介（きし・ゆうすけ）

1959年、大阪府生まれ。京都大学経済学部卒業。生命保険会社に勤務後、作家に。1996年、『十三番目の人格（ペルソナ）—— ISOLA』が第３回日本ホラー小説大賞長編賞佳作に選ばれる。1997年『黒い家』で第４回日本ホラー小説大賞、2005年『硝子のハンマー』で日本推理作家協会賞長編賞を受賞。その他の著書に、『天使の囀（さえず）り』『クリムゾンの迷宮』などがある。『十三番目の人格 —— ISOLA』『黒い家』『青の炎』が映画化されるなど、つねに話題作を発表し続ける、エンターテインメント界の鬼才。

新世界より

貴志祐介
Yusuke Kishi

講談社
NOVELS

KODANSHA NOVELS

新世界より

貴志祐介

講談社

9784061826601

1920293019000

ISBN978-4-06-182660-1
C0293 ¥1900E (0)

新世界より
貴志祐介

定価：本体 1900 円(税別)

1000年後の日本。「呪力（じゅりょく）」こと、念動力を手に入れた人類は、「悪鬼（あっき）」と「業魔（ごうま）」という忌まわしい伝説に怯えつつも、平和な社会を築いていた。しかし、学校の徹底した管理下にあった子供たちが、禁を犯したため、突然の悪夢が襲いかかる！ 崩れ去る見せかけの平和。異形のアーカイブが語る、人類の血塗られた歴史の真実とは!?

かつてハラハラドキドキしながら読んだ、黄金時代のＳＦをイメージして書きました。冒険、ファンタジー、ホラー、成長小説など、様々な要素が膨らみ、最終的に1760枚を超える過去最長の作品となりましたが、一気読みのエンターテインメントに仕上がったという自負があります。ＳＦファンも、あまり読んだことがないという方も、変貌した千年後の世界で、ひととき現実を忘れていただければ、作者冥利に尽きるというものです。

――貴志祐介

新世界より

貴志祐介

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

カバー・目次デザイン　鈴木正道(Suzuki Design)
シリーズデザイン　熊谷博人
カバー写真　©Frans Lanting/amanaimages

新世界より

目次

From The New World

I　若葉の季節　9
II　夏闇　177
III　深秋　369

VI 冬の遠雷 447
V 劫火 603
IV 闇に燃えし篝火は 799

岡圭介さんに捧ぐ

I

若葉の季節

1

深夜、あたりが静かになってから、椅子に深く腰掛けて、目を閉じてみることがある。

浮かんでくるのは、判で押したように、いつも同じ光景だ。

お堂の暗闇をバックに護摩壇の上で燃えさかる炎。地の底から響いてくる真言（マントラ）の朗唱に、合いの手を入れるように弾ける、オレンジ色の火の粉。

そのたびに、なぜこの光景なのだろうと不思議になる。

わたしが十二歳だったあの晩からは、すでに二十三年の月日が流れた。その間、本当にさまざまな出来事があった。想像だにしていなかった悲しく恐ろしい事件も。わたしが、それまで信じてきたことは、すべて、根底から覆されてしまったはずである。

それなのに、今でも最初に頭に浮かぶのは、どうして、あの晩のことなのだろう。

わたしに与えられた催眠暗示は、それほど強力だったのか。

ときどき、わたしは、いまだに洗脳から脱し切っていないような気さえするのだ。

今ごろになって、一連の事件の顚末を書き記す気になったのには、ちょっとした理由がある。

多くのものが灰燼に帰した、あの日から、十年の月日が経過した。

十年という区切りに、たいした意味はない。だが、山積みだった懸案に決まりがつき、新体制が軌道に乗り始めてから、皮肉なことに、将来に対する

疑いが芽生え始めたのだ。この間、時間を見つけては、過去の歴史をひもといてみたのだが、再認識させられたのは、人間というのは、どれほど多くの涙とともに飲み下した教訓であっても、喉元を過ぎたとたんに忘れてしまう生き物であるということだった。

　もちろん、誰一人として、あの日のとうてい言葉にはできない思い、あんな悲劇は二度と起こさないという誓いを忘れるはずはない。わたしは、そう信じたい。

　だが、もしかすると、いつの日か、人々の記憶が風化してしまった遠い未来に、我々の愚かさは再び同じ轍を踏ませてしまうのではないか。そういう危惧も、わたしは捨てきれないのだ。

　それで、急に思い立ってペンを手にし、この手記の下書きを作り始めたのだが、途中、幾度となく当惑させられることになった。ところどころ、記憶が虫喰いのようになっていて、重要な細部の事実を思い出せないのだ。

　当時の関係者何人かにあたって記憶を確かめてみたが、人の記憶の欠落部分というのは、捏造で補われる仕組みになっているらしく、共通の体験が、しばしば、お互いに矛盾する記憶になっていることに驚かされた。

　たとえば、わたしが筑波山でミノシロモドキを見つけることができたのは、直前に目を痛めて、赤い色のサングラスをかけていたせいだった。そのことは、今でも鮮明に覚えているのだが、覚（さとる）はなぜか、わたしはそんなものはかけていなかったと自信たっぷりに断言する。それどころか覚は、あのときミノシロモドキを見つけたのは自分の手柄であるとさえ、仄めかす始末だった。もちろん、そんな馬鹿なことは金輪際ないのだが。

　わたしは半ば意地になって、思いつく限りの人間にインタビューしては、矛盾点をつきあわせていったが、その過程で、否応なく、ある事実に気づかさ

れた。誰一人、自分にとって不利な方向に記憶をねじ曲げていた人間はいなかったのだ。

わたしは、憫笑しながら、人間の愚かさに関する新しい発見をノートに書き留めたが、ふと、自分だけをこの法則の埒外に置く根拠がないことに気がついた。他人から見れば、わたしもまた、自分の都合のいいように記憶を書き換えているに違いない。

だから、この手記は、あくまでもわたしの一方的な解釈であり、自己正当化のために歪曲された物語かもしれないということを付記したい。とりわけ、わたしたちの行動が後にあれほど多くの生命が失われるきっかけになったとも言えるのだから、わたしには、無意識にでも、そうする動機があるはずだ。

とはいえ、何とか記憶を掘り起こし、自分の心に真摯に向き合うことによって、事件の細部は可能な限り忠実に描写するつもりだ。また、古代の小説の手法を真似ることで、その当時、何を感じ、考えていたのかを、少しでも再現できればと思っている。

この草稿は、酸化しないために千年は保つというふれこみの紙に、褪色しないインクで書いている。完成した暁は、誰に見せることもなく（もしかすると、覚にだけは見せて、意見を聞くかもしれないが）、タイムカプセルに入れ、地中深く埋めることになるだろう。

その際、別に複写を二部作成し、計三部だけを残そうと思う。もし、将来、旧体制かそれに近いものが復活し、あらゆる書籍の検閲が行われるような社会が再来しているのなら、この手記の存在は、可能な限り秘密にしなければならない。三部というのは、そういう状況まで想定して考えた、ぎりぎりの数である。

つまり、この手記は、千年後の同胞にあてた長い手紙であり、これが読まれるときには、わたしたちが本当の意味で変わり、新たな道を歩み出せたのかどうかも、明らかになっているはずだ。

自己紹介が、まだだった。

わたしの名前は、渡辺早季（さき）。二一〇年の十二月十日、神栖（かみす）66町に生まれた。

わたしが生まれる直前、百年に一度しか花をつけないという竹がいっせいに開花した。三ヵ月間一滴の雨も降らなかったかと思うと、真夏に雪が降り、ありとあらゆる異常気象が頻発した。そして、十二月十日の晩には、天地がすっぽりと暗黒に包まれたかと思うと、稲光に照らし出されて、金色の鱗に覆われた竜が雲間を泳ぐ姿が、たくさんの人によって目撃された。

……などという事実は、いっさいない。

二一〇年はいたって平凡な年で、わたしは、その年神栖66町で生まれたほかの子供と同じく、ごく平凡な赤ん坊だった。

でも、母にとっては、違っただろう。わたしを妊娠したときには、母はすでに三十代の終わりで、一生子供は持てないと悲観していたようだ。わたしたちの時代では、三十代末は、かなりの高齢出産である。

しかも、母、渡辺瑞穂（みずほ）は、図書館司書という要職にあった。母の決断で町の将来が左右されるばかりか、場合によっては、多くの人命が失われる可能性すらある。日々、そんな重圧に耐えつつ、大切な胎教に気を配るのは、並大抵の苦労ではなかっただろう。

同時期に、父である杉浦敬（たかし）は、神栖66町の町長をしていた。こちらも、それなりに忙しい仕事だっただろう。だが、わたしが生まれたころ、司書という仕事には、町長とは比較にならないほど大きな責任が伴っていた。もちろん、今でもそうなのだが、当時ほどではないかもしれない。

母は、新たに発掘された書籍の分類を決定する会議の最中に、強い陣痛に見舞われた。予定日より一週間以上も早かったが、いきなり破水してしまったので、ただちに町はずれの産院へと搬送された。わ

たしが産声を上げたのは、それからわずか十分後のことだった。だが、運悪く臍の緒が首に絡んでいたために、わたしの顔は紫色で、泣き声も上げられなかったらしい。出産助手は、これが初仕事という若い人で、あやうくパニックに陥りかけたが、さいわい臍の緒は簡単に外れ、わたしはようやくこの世の酸素を肺に吸い込んで、元気な産声を上げた。

それから二週間後、同じ産院兼託児所で、もう一人の女の子が生まれた。後にわたしの親友になる、秋月真理亜だ。真理亜は、未熟児で逆子だった上に、わたし同様、臍の緒が首に巻き付いていた。わたしよりずっと深刻な状況で、生まれたときには、ほぼ仮死状態だったという。

出産助手は、わたしのときの経験から、落ち着いて対処できたらしい。少しでも手際が悪く、臍の緒を外すのが遅れていれば、間違いなく死んでいたということだった。

初めてこの話を聞いたときには、わたしは、自分が間接的に親友の命を救ったことに、大きな喜びを覚えたものだったが、今は、そのことを思い出すたびに複雑な思いにかられる。もし、真理亜がこの世に生まれてこなかったとしたら、結果的にあれほど大勢の人が命を落とすこともなかったはずだから……。

話を戻そう。わたしは、ふるさとの豊かな自然に抱かれて、幸せな幼年時代を送った。

神栖66町は、周囲五十キロメートルほどの地域に点在する七つの郷からなっている。外界と町を隔てるのは、八丁標である。千年後の世界には、八丁標自体が存在しないかもしれないので、一応説明しておくと、これは、たくさんの紙垂が下がった注連縄のことで、外から流れてきた悪いものが町に侵入してこないよう、堅く道切りをしてあるのだ。

子供たちは、けっして八丁標の外に出ないように、かたく言いつけられる。外界には、いたるところに様々な悪霊や妖怪がうろついており、子供が一

人で外に出ると、恐ろしい目に遭うのだと。

「でも、そんなに怖いものって、何がいるの？」

わたしは、ある日、そう父に訊いたことを覚えている。たぶん、六、七歳の頃だったと思う。しゃべり方は、もう少し舌足らずだったかもしれない。

「いろいろだよ」

父は書類から顔を上げた。長いあごに手を当て、わたしに慈愛のこもった視線を向ける。あの茶色くて優しい目は、今でも記憶の中に焼き付いている。父は一度として、わたしを厳しい目で見たことはなかった。一回だけ、大声で怒鳴られたことがあったが、それは、わたしが不注意にも、よそ見をしながら歩いていたため、すぐに警告しなければ、野原に開いた大きな穴ぼこに落ちそうだったからだ。

「ほら、早季も知ってるだろう？　化けネズミとか、猫騙しとか、風船犬の話は」

「そんなの、みんなお話だけで本当はいないって、お母さんが言ってたわ」

「他のはともかく、バケネズミは、ちゃんといるよ」

父がこともなげに言ったので、わたしはショックを受けた。

「嘘」

「嘘じゃない。この前の町の普請にも、バケネズミは大勢駆り出されてたしね」

「見たことないわ」

「子供の目には、触れさせないようにしてるんだよ」

父は、その理由については語らなかったが、バケネズミというのは、おそらく、子供に見せられないくらい醜いのだろうと、わたしは想像した。

「でも、人間の言うこと聞くんなら、怖くないじゃない？」

父は、目を通した書類を座卓の上に置き、右手をかざした。口の中で低く呪文を唱えると、細かい紙の繊維がざわざわと変化し、炙り出しのように複雑

な模様が浮かび上がった。町長が決裁したことを示す花押である。

「早季は、面従腹背っていう言葉を知ってるかな？」

わたしは、黙って首を振った。

「表面は従っているが、腹の中では違うことを考えてるっていうことだよ」

「違うことって？」

「相手を騙し、裏切る計画を立ててるんだ」

わたしは、ぽかんと口を開けた。

「そんな人、いないわ」

「そうだね。人が人の信頼を裏切るなんて、絶対にありえないことだ。だけど、バケネズミは人とは全然違う」

わたしは、初めて少し怖くなった。

「バケネズミは、呪力を持った人間のことは、神として崇めているから、絶対に服従する。でも、まだ呪力のない子供に対しては、どういう態度に出るかわからないんだよ。だから、子供とバケネズミとが出会うことは、なるたけ避けなきゃならないんだ」

「……でも、仕事させてるんなら、町の中へ入ってくるんでしょう？」

「そのときは、必ず、誰か大人が監督してるからね」

父は、書類を文箱に収めると、もう一度、そっと手をかざした。文箱と蓋は、みるみる融合して、中が空洞になった漆塗りの木の固まりになった。呪力を加えたとき、どういうイメージを持っていたかは、他の人にはわからないので、父以外の人間には、文箱の蓋を壊さずに開けるのは難しいのだ。

「とにかく、八丁標の外へは絶対に出たらだめだよ。八丁標の中は、強力な結界が張られてるから安全だが、一歩外に出たら、もう、誰の呪力も守ってくれないから」

「でも、バケネズミは……」

「バケネズミだけじゃない。もう、学校で、悪鬼や

業魔の話は習っただろう?」

わたしは思わず、うっと詰まった。

悪鬼の話と業魔の話は、発達段階に応じて繰り返し語られ、学習させられる。潜在意識に、深く刷り込まれるように。わたしたちが学校で聞かされたのは、その幼年版にすぎなかったが、それでも悪夢に見るくらい怖かったのだ。

「八丁標の外には、本当に、悪鬼とか……業魔がいるの?」

「うん」

父は、わたしの恐怖を和らげるように、優しく微笑んだ。

「それは昔の話で、今はいないって……」

「たしかに、この百五十年は一度も現れてない。だけど、万一ということがあるからね。早季は、薬草採りの少年みたいに、いきなり悪鬼に出くわしたりするのは嫌だろう?」

わたしは、黙ってうなずいた。

ここで、悪鬼の話と業魔の話の粗筋を紹介しておこう。ただし、幼年向けのおとぎ話ではなく、全人学級に入学してから学習する完全版の方である。

悪鬼の話

今から百五十年ほど前の話。山の中で薬草を採っていた少年がいた。夢中になって薬草を探しているうちに、八丁標の注連縄の前にやってきた。内側にある薬草はあらかた採り尽くしてしまっていたが、ふと目をやると、外側には、まだたくさんの薬草が残っているのが見えた。

以前から、絶対に八丁標の外に出てはいけないと、大人に釘を刺されていた。どうしても出る必要があるときは、必ず、大人に伴われてでなくてはならないのだ。

だが、近くに大人はいない。少年は迷ったのだが、少しくらいならいいだろうと考えた。八丁標か

ら出るといっても、目と鼻の先である。ぱっと出て、薬草を摘み、すぐに戻ってくればいい。

少年は、そっと注連縄をくぐった。紙垂が揺れて、かさかさという音を立てた。

このとき、彼は、とても嫌な感じを覚えていた。大人の言いつけを破ったことに加えて、これまでに感じたことのないような不安があった。

何でもないと強いて自分を励ましながら、薬草に近づく。

すると、向こうから悪鬼がやって来るのが見えた。

悪鬼は、少年と同じくらいの背丈だったが、見るも恐ろしい姿をしていた。あらゆるものを焼き尽くす怒りが、炎のような光背となり、ぐるぐる渦巻いている。悪鬼が通り過ぎると、近くにある草木はことごとく薙ぎ倒され、爆発し、めらめらと燃え上がった。

少年は真っ青になったが、悲鳴を上げないように我慢して、そっと後ずさりした。注連縄の下をくぐって、八丁標の中に入れば、悪鬼には姿を見られないはずなのだ。

だが、そのとき、少年の足下で枯れ枝が折れる音がした。

悪鬼は、無表情なまま顔を向けた。ようやく怒りの対象を見つけたというように、こちらを凝視している。

少年は、注連縄をくぐると、一目散に逃げ出した。八丁標の中に入ってしまえば、もうだいじょうぶなはずだった。

だが、振り返ると、なんと、悪鬼も注連縄をくぐって侵入してきたではないか!

このとき、少年は、取り返しのつかないことをしてしまったと思った。八丁標の中に、悪鬼を招き入れてしまったのだ。

少年は、泣きながら山道を走った。悪鬼は、どこまでも追ってくる。

少年は、注連縄に沿って、村とは反対の谷川に向かって走った。

背後を見ると、追いかけてくる悪鬼の顔が藪の間から見え隠れしている。両の眼だけがぎらぎら光り、口元には笑みがある。

悪鬼は、自分に村まで案内させようとしている。

このままではいけない。もし、このまま悪鬼をつれて村に戻れば、おそらく、村は全滅してしまうだろう。

最後の藪を抜けると、目の前は断崖絶壁だった。深い谷底から、轟々と川の流れる音が反響してくる。峡谷には、一本の真新しい吊り橋が架かっていた。

少年は、吊り橋を渡らず、今度は断崖に沿って谷川の上流に向かって走った。

振り返ると、悪鬼が橋のたもとに来て、こちらの姿を見つけたところだった。

少年は、ひたすら走った。

しばらくすると、前方に、もう一本の吊り橋が見えてきた。

近づくと、長年の風雨に曝（さら）されてぼろぼろになった吊り橋は、曇り空を背景に黒い影となり、おいでおいでをするように不気味に揺れていた。

この橋は、いつ落ちてもおかしくない状態だった。もう十年以上、誰ひとり渡った村人はおらず、少年はいつも、村の人から絶対に渡ってはならないと戒められていた。

少年は、ゆっくりと橋を渡り始めた。

負荷のかかった蔓が、ぎしぎしと嫌な音を立てる。足下の板はほとんど朽ちかけており、今にも砕け散りそうだった。

吊り橋の中程まで来たとき、ふいに橋が大きくたわんだ。振り返ると、悪鬼が橋を渡り始めたところだった。

悪鬼が近づくにつれ、橋の揺れは、どんどん大きくなる。

少年は、一瞬、目も眩むような谷底に目をやった。

顔を上げると、悪鬼はもう、すぐ間近まで迫っていた。

忌まわしい顔がはっきりと見えたとき、少年は隠し持っていた鎌を揮い、吊り橋を支える一方の蔓を一気に切った。

吊り橋の床は垂直になり、少年は危うく滑り落ちそうになったが、何とかもう一本の蔓にぶら下がった。

悪鬼は下に落ちただろうか。少年が見ると、何と、同じように蔓にしがみついているではないか。悪鬼はゆっくりと、こちらに恐ろしい目を向ける。鎌は、谷底に落としてしまった。もう一本の蔓を切ることはできない。

どうすればいいのだろう。少年は絶望して、天に祈った。僕の命はなくなってもかまいません。どうか、悪鬼を村に近づけないでください。

少年の願いが、天に聞き届けられたのか。それとも、ぼろぼろになった吊り橋の一本の蔓は、どのみち重みに耐えられなかったのか。

吊り橋はぶっつりと切れて、千仞の谷底へと落ちていった。少年と悪鬼の姿も見えなくなってしまった。

それ以来、今日に至るまで、悪鬼は一度も現れていない。

この話には、いくつかの教訓が含まれている。

小さな子供にも、八丁標を出てはならないという教えは、容易に理解できるに違いない。もう少し大きくなると、自分の身よりも村のことを案じる、自己犠牲の精神を汲み取れるかもしれない。

だが、本当の教えには、実は、聡明な子供ほど気づきにくくなっているのだ。

まさか、この話の真の狙いが悪鬼の実在を説くことにあるなどと、いったい誰が考えるだろうか。

業魔の話

今から八十年ほど前の話。村に一人の少年が住んでいた。とても聡明な子供だったが、一つの欠点があった。その欠点は、成長するにつれて、しだいに誰の目にもあきらかなものになってきた。

少年は、自らの頭の良さを誇るあまり、あらゆるものを小馬鹿にしていたのだ。

学校や村の大人たちから教わることを、表面的にはよく聞くふりをしていたが、大切な教訓はけっして彼の心には届いていなかった。

少年は、大人たちの愚かさを笑い、この世の倫理すら冷笑するようになり始めた。

傲慢は、業（ごう）の種を蒔く。

少年は、しだいに友達の輪からも遠ざかるようになった。孤独だけが彼の友人になり、話し相手になった。

孤独は、業の苗床になる。

独りぼっちになった少年は、思索に耽ることが多くなった。そのうち、考えるべきではないことを考え、疑ってはならないものを疑うようになった。

悪い思考は、とめどなく業を蔓延（はびこ）らせていく。

そして、少年は、知らず知らずのうちに業を積み重ね、しだいに、人間ではないもの、業魔へと変わっていったのだ。

いつしか、村は業魔を怖れて空っぽになってしまった。業魔は森の中に住んでいたが、いつのまにか、森の中からも、生き物という生き物が姿を消していた。

業魔が歩くと、まわりにあった植物は、奇怪にねじくれ、想像もつかないような形に変わり、生き腐れていった。

業魔が触れた食べ物は、たちまち致命的な毒に変じた。

業魔は、異様な死の森を彷徨（さまよ）い歩いた。

業魔はようやく、自分がこの世に存在していてはいけないことに気がついた。

業魔は、暗い森を抜けていった。すると、目の前が開け、きらきらとした輝きに包まれた。山奥にある、深い湖に辿り着いたのだ。

業魔は、湖の中に入っていった。この清浄な水が、すべての業を洗い流してくれるのではないかと思いながら。

だが、業魔の周囲の水は、急速にどす黒く変色していった。湖の水までもが、毒に変わりつつあるのだ。

業魔は、この世に存在していてはいけない。

そのことを悟って、業魔は、ひっそりと湖の底に姿を消したのだった。

こちらの教訓は、たぶん、悪鬼の話よりは単純明快だろう。

だが、もちろん、わたしたちに、その本当の意味を理解できたわけではない。あの日、限りない絶望と悲しみの中で、本物の業魔の姿を目の当たりにするまでは……。

どうも、ペンを手に文章を綴っていると、さまざまな思いがいちどきに押し寄せてきて、収拾がつかなくなってしまうようだ。子供時代のことに戻ろう。

先に書いたように、神栖66町を構成するのは、七つの郷である。その中心で、町の行政機関が集中しているのは、利根川の東岸にある茅輪の郷だった。その北には、森の中に大きな屋敷が点在している松風の郷、東側に開けた海沿いの地域には、白砂の郷がある。茅輪の郷の南に隣接しているのは、水車の郷だった。利根川を挟んで西岸には、北西に眺望のよい見晴の郷、南に水田地帯の黄金の郷が並び、最も西には櫟林の郷が位置していた。

わたしの生家があったのは、水車の郷である。こ

の名には、説明が必要かもしれない。神栖66町には、利根川を細かく分割して水を引いた数十本の水路が縦横に張り巡らされていて、人々は舟に乗り水路に沿って行き来する。にもかかわらず、水路の水は、不断の努力によって、顔を洗うのは平気だが飲むのは少し躊躇するという程度の清浄さが保たれていた。

わたしの家のすぐ前にも、鮮やかな緋色と白の鯉が泳ぎ、水車の郷の名の由来となったたくさんの水車が回っていた。水車はどの郷にもあったが、水車の郷には特に多くが並んでいて、壮観だった。上掛け、逆車（さかぐま）、下掛け、胸掛け……。わたしが覚えている水車の種類である。もしかすると、もっとあったかもしれない。それぞれの水車は、米を搗（つ）いたり小麦を挽（ひ）いたりという役割を分担し、意識を集中するには単調すぎる労働から人々を解放していた。

中で、ひときわ大きな金属製の羽根の付いた水車は、それぞれの郷に一つずつしかない発電用の水車だった。そこから得られる貴重な電力は、郷の公民館の屋根の上の拡声器から放送を流すために使われる。電力をそれ以外の目的に使うことは、倫理規定によって固く禁じられていたのだ。

毎日、日没少し前になると、拡声器から同じメロディが流れる。『家路』という題名で、ドボルザークという奇妙な名前の作曲家が、大昔に作った交響楽の一部ということだった。わたしたちが学校で習った歌詞は、こんなふうである。

遠き山に日は落ちて
星は空をちりばめぬ
きょうのわざを　なしおえて
心軽くやすらえば
風はすずしこの夕べ
いざや楽しまどいせん
まどいせん

やみにもえしかがり火は
ほのお今は静まりぬ
眠れやすくいこえよと
さそうごとく消え行けば
やすきみ手に守られて
いざや楽し夢を見ん
夢を見ん

『家路』が流れると、野原で遊んでいた子供たちは、揃って家路につく決まりだった。だから、この曲のことを思い出すたび、脳裏には条件反射のように夕方の情景が浮かんでくる。黄昏の町並み。砂地に長い影を落とす松林。鈍色（にびいろ）の空を映す、数十枚の鏡のような水田。赤トンボの群れ。だが、何といっても一番印象的なのは、見晴らしの丘から眺めた夕焼けだった。

　目を閉じると、一つの情景が浮かんでくる。夏の終わりか初秋だろう。いつのまにか、空気が冷たくなり始めていた。

「もう帰らなきゃ」

　誰かが言った。

　耳を澄ますと、たしかに、かすかなメロディが風に乗って伝わってくる。

「じゃあ、引き分けだな」

　覚が言うと、子供たちは隠れていた場所を出て、三々五々集まってくる。

　全員、八歳から十一歳の間で、朝からずっと、大規模な陣取り合戦をしていたのだった。真冬に行う雪合戦の延長のようなゲームで、二つのチームに分かれて陣地を蚕食し合い、最後に陣地の最後方に立てられた旗を奪い取ったら勝ちである。この日、わたしのチームは、序盤で犯したミスにより敗色濃厚だった。

「ずるいわ。もう少しで、わたしたちが勝ちそうなのに」

　真理亜が、口を尖らせた。他のみんなより色白

で、ぱっちりした目の虹彩は色が薄い。何より、燃えるような赤毛が、ひときわ異彩を放っていた。

「あんたたち、降伏しなさいよ」

「そうだよ。こっちが優勢なんだから」

　真理亜に引きずられるようにして、良（りょう）が言う。真理亜には、この頃から女王様としての素質があった。

「なんで、わたしたちが、降伏なんかしなくちゃならないのよ」

　わたしは、むっとして言い返した。

「だって、こっちが優勢なんだから」

　良は、飽きずに同じ主張を繰り返す。

「でも、まだ旗は取られてないわ」

　わたしは覚の方を見た。

「引き分けだ」

　覚は、おごそかに宣言した。

「覚は、こっちのチームでしょう？　なんで、向こうの肩持つのよ？」

　真理亜が覚に嚙みついた。

「だって、そういうルールなんだから、しょうがないだろう。日没時間切れだよ」

「まだ、太陽は沈んでないじゃない」

「屁理屈を言わないで。それは、ここが丘の上だからでしょう？」

　わたしは、あえて抑えた口調で真理亜を諭した。いつもは気が合う親友なのだが、こういうときの真理亜には、まったく苛々させられる。

「ねえ。もう、帰らなきゃ」

　麗子が気を揉んだように言う。

「『家路』が聞こえてきたら、すぐに帰らなきゃならないのよ」

「だから、向こうが降伏すればいいんだ」

　良が、真理亜の言葉を繰り返した。

「いいかげんにしろよ。おい、審判」

　覚が業を煮やしたように、瞬（しゅん）を呼んだ。瞬は、みんなから少し離れて立って、丘の上からの景色に見

入っていた。その横には、ブルドッグの『すばる』がちょこんと座っている。

「なに？」

一拍おいてから振り返る。

「なにじゃないよ。審判がちゃんと言ってくれよ。引き分けだって」

「そうだな。今日は引き分けだ」

瞬はそう言うと、また景色に目を向けた。

「わたしたち、もう帰るから」

そう言って、麗子たちは、ぞろぞろと丘を下りていった。それぞれの郷へ向かう舟に便乗させてもらわなければならないのだ。

「待ってよ。まだ、終わってないのに」

「帰る。だって、いつまでも外にいたら、ネコダマシが出るもん」

真理亜たちは不満を顔に表していたが、ゲームはなし崩しに終了した。

「早季。ぼくらも帰ろう」

覚が声をかけたが、わたしは瞬の方に近づいた。

「帰らないの？」

「うん。帰るよ」

そう言いながらも、瞬の目は魅入られたように景色から離れなかった。

「何見てるの？」

「おーい。帰ろうって」

後ろから、覚が焦れたように言う。瞬が、黙って景色を指さした。

「あそこ。見える？」

「なに？」

瞬が指さしたのは、彼方にある黄金の郷、水田地帯と森の境目のあたりだった。

「ほら、ミノシロ」

わたしたちは、幼いときから、何よりも目を大切にするよう教えられてきており、皆、視力には恵まれていた。このときも、数百メートルは離れた、夕暮れの光と影が交差する場所で、畦道の上をゆっく

りと移動する生き物の白い影を見分けることができた。

「ほんとだ」

「何だよ。ミノシロなんか、別に珍しくないだろ」

いつも冷静な覚の声が、どういうわけか、不機嫌を露わにしていた。

だが、わたしは動かなかった。動きたくなかったのだ。

ミノシロは、カタツムリが這うような速度で畦道から草地を横切り、森の中に姿を消していった。その間、目はミノシロの姿を追いながら、意識は隣にいる瞬に向かっていた。

まだ、自分の中にある感情が何なのか、わかっていなかった。だが、瞬と並んで暮色に染まった郷の景色を見つめているだけで、胸の中が甘くて切ない気持ちでいっぱいになるのだ。

もしかしたら、これもまた、記憶が捏造した情景なのだろうか。いくつかの同じようなエピソードを混ぜ合わせて脚色し、感傷というスパイスをふりかけた……。

たとえそうだとしても、この情景は、わたしには今もって特別な意味がある。完全無欠な世界に住んでいた時代の最後の記憶。すべてが正しい秩序に従って運行し、未来に対し、ひとかけらの不安も感じていなかった頃の。

そして、初恋の思い出は、今なお夕陽のような光輝を放っている。ほどなく、すべてが、底知れぬ虚無と悲しみの中に呑み込まれてしまうとしても。

2

もう少し、子供時代の話を続けよう。

神栖66町では、子供が六歳になると小学校へ通わなければならない。わたしが通っていたのは、『和貴園（わきえん）』だった。町には同様の学校が他に二校あり、『友愛園（ゆうあいえん）』、『徳育園（とくいくえん）』という名前である。

当時、神栖66町の人口は三千人を少し超えるくらいだった。後に古代の教育制度について調べてみてわかったのだが、その程度の規模の町に小学校が三校もあるのは異例らしい。だが、これこそ、わたしが生まれ育った社会の本質を、最も雄弁に物語る特徴なのである。別の数字を挙げれば、同時期に、社会を構成する成人の約半数が、何らかの意味で教育に従事していたことがわかっている。

これは、貨幣経済により成り立っている社会では、考えられないことだろう。しかし、助け合いと無償の奉仕を基盤としている、わたしたちの町には、そもそも貨幣などというものは存在しなかったし、真に必要とされる分野に自然に人材が振り向けられる仕組みが、出来上がっていたのだ。

和貴園は、わたしの家から歩いて二十分ほどの場所にあった。水路を利用すればもっと早く着けるのだが、子供の場合、舟を動かすには大きな重い櫂を使って漕ぐしかないので、歩く方がずっと楽だった。

小学校は、町の中心から少し離れた静かな場所に建てられていた。和貴園があったのは、茅輪の郷の南のはずれである。古く黒光りする木造の校舎は、Aの字形をした平屋だった。Aの横棒にある正面玄関を入ると、最初に目に飛び込んでくるのは、正面の壁に掛かった扁額の文字『以和為貴』である。聖徳太子という古代の聖人が作った十七条憲法の最初の一節で、『和（わ）を以（もっ）て貴（たっと）しと為（な）す』と読むのだという。それが和貴園という名前の由来らしいが、友愛

園と徳育園にどんな文字の額が掛かっていたのかは、わからない。

横棒に沿って職員室と教室があり、廊下を右に進むと、右の縦棒にもたくさんの教室が並んでいる。全校生徒を合わせても百五十人ほどしかいないのだが、教室は全部で二十以上あったと思う。左側の縦棒は管理棟で、生徒が立ち入ることは禁じられていた。

Ａの字形をした校舎の手前にある校庭には、運動場や、鉄棒などの遊具の他に、たくさんの生き物を飼育している囲いがあった。ニワトリや、アヒル、ウサギ、ハムスターなどである。生き物の世話は、当番制で生徒たちが見ることになっていた。校庭の隅には、白く塗られた木製の百葉箱がぽつんと立っていた。用途は不明であり、わたしが和貴園に通っていた六年間を通じ、何かの役に立ったのを見たことは一度もない。

校舎で三方を囲まれている中庭は、ひどく謎めいた場所だった。生徒の立ち入りは固く禁じられていたし、そこへ行かなければならない用事もなかった。

管理棟の部屋以外に中庭に面した窓はなく、中庭を垣間見る機会があるとすれば、教員が中庭へ通じる扉を開けたときに、たまたまその場に居合わせる以外になかった。

「……それで、中庭に何があったと思う？」

覚が、不気味な薄ら笑いを浮かべてみんなを見回すと、誰もが固唾をのんだ。

「ちょっと待ってよ。だってそれ、覚が見たわけじゃないんでしょ？」

覚があまり緊張状態を引っ張るので、わたしは、とうとう耐えきれなくなって言った。

「そりゃ、直接見たんじゃないけど。でも、ちゃんと見た証人がいるんだ」

話の腰を折られて、覚はむっとした顔になった。

「誰？」

「早季の知らない人だよ」

「生徒じゃないの？」

「生徒だけど、もう卒業してるから」

「何、それ？」

わたしは、あからさまな不信を見せた。

「ねえ、そんなことどうでもいいから、何を見たのか早く教えてよ」

真理亜が言う。まわりから、同意のざわめきが起こった。

「うん。まあ、信じたくない人は、聞かなくてもいいけど……」

覚が、皮肉な目でこちらを見る。わたしは、知らん顔をした。この場を歩み去ってもよかったが、やはり続きを聞きたかったのだ。

「生徒がいるときは、先生は絶対に、中庭に通じる扉は開けないだろう？　ほら、管理棟の手前にある樫の木の扉。でも、そのときは、たまたま後ろに人がいるのを確認せずに、扉を開けたらしいんだ」

「それは、もう聞いたよ」

健（けん）が先を促した。

「そこにあったのはね……信じられないくらい、たくさんの、お墓だったって！」

見え透いたこけおどしだったが、みなは、面白いように引っかかった。

「うわあ……」

「嘘」

「怖い」

真理亜に至っては、両手で耳を塞いでいる。ばかばかしくなって、わたしは言った。

「それ、誰のお墓なの？」

「え？」

ホラ話が予想以上の効果を上げて、にんまりしていた覚は、虚をつかれたようだった。

「だから、そんなにたくさんのお墓って、誰のよ？」

「そんなの、知らないよ。とにかく、物凄くたくさ

ん、お墓があったんだよ」

「なんでわざわざ、学校の中庭なんかにお墓を作らなきゃなんないの？」

「だから、僕は、そこまでは知らないって」

覚は、卑怯千万にも、説明できないことはすべて、伝聞だから知らないという論法で、押し通すつもりらしかった。

「……もしかしたら、生徒のお墓なんじゃないかな？」

健の言葉に、全員、静まりかえった。

「生徒って？　いつの？　何で、そんなにいっぱい死んだの？」

真理亜が、低い声で訊ねる。

「わかんないけど、和貴園を卒業しないで、途中でいなくなる人もいるって聞いたよ……」

わたしたちの町の小学校は三校とも、入学するのは学年毎に一緒だが、あとで説明する理由から、卒業はさみだれ式だった。だが、このときの健の言葉には何となく深い禁忌に触れるものを感じ、みな、言葉の接ぎ穂を失っていた。

そのとき、少し離れた席で本を読んでいた瞬が、こちらを振り向いた。窓の光に透けて、彼の睫毛がとても長いことがわかる。

「お墓なんか、なかったよ」

全員、瞬の言葉に救われた思いがしたが、すぐに大きな疑問が湧き上がる。

「なかったって、どういうこと？　なんでわかるの？」

みなを代表してわたしが訊くと、瞬は、こともなげに答えた。

「僕が見たときには、そんなものはなかった」

「えっ？」

「瞬、見たの？」

「本当か？」

「嘘でしょう？」

全員が、堰（せき）を切ったように質問を浴びせる。主役

の座を奪われた覚一人が、憮然としていた。

「言わなかったかなあ。去年、宿題の答案がなかなか集まらなかったことがあったよね。理科の自由観察の課題。先生に、全員の答案をまとめてから持って来なさいって言われて、僕は管理棟に入ったんだ」

みな、息をするのも忘れて瞬の次の言葉を待ち受けたが、瞬は、ゆっくりと読みかけの本のページにしおりを挟んだ。

「本がいっぱいある部屋の窓から中庭は見えたけど、あそこにあったのは、なんか変なもんだったな。とにかく、お墓じゃなかったよ」

どうやら、それで話はおしまいにするつもりらしい。わたしは、十くらいの質問を一息にするために、思いっきり息を吸い込んだ。

「ふざけるなよ」

一瞬早く、覚が、それまで聞いたことがなかったくらい不穏な声を出す。

「変なもんって、何だよ？　ちゃんと説明してみろよ」

自分は何も説明しなかったくせにと思ったが、とりあえず瞬の答えを聞きたかったので、口を挟まなかった。

「うーん。何て言ったらいいかな。広い場所の奥に、煉瓦でできた物置みたいなものが、五個くらい一列に並んでるだけなんだよ。前には、大きな木の扉が付いてて」

瞬の答えは、何の説明にもなっていなかったが、変な真実味があった。覚が、それ以上突っ込めなくなってしまい、舌打ちする。

「で、覚。卒業生の誰が、何を見たって？」

わたしが追い打ちをかけると、覚はどうやら形勢不利を悟ったらしく、口ごもった。

「だから、聞いた話だから、よくわからないよ。その人が見間違えたのかもしれないし、もしかしたら、そのときはまだ、お墓があったのかもしれな

い」
　こういうのを、墓穴を掘るというのだろう。
「じゃあ、なんで、お墓はなくなったのよ？」
「それはわからないけど……でも、知ってる？　その人が見た恐ろしいものって、お墓だけじゃなかったんだ」
　追いつめられた覚は、巧みに話題をすり替えた。
「何を見たの？」
　案の定、真理亜は、馬鹿な魚のように食いついていく。
「だめよ、すぐに訊いちゃ。覚が怖いものの話を思いつくまで、待ってあげないと」
　わたしが揶揄すると、覚はむきになった。
「嘘じゃないよ。その人は、たしかに見たんだって。正確には中庭でじゃないけど……」
「はいはい」
「だから、恐ろしいものって、何を見たんだよ？」
　健が、我慢できなくなったように言う。覚は、内心にんまりとしていただろうが、逆に無表情になって言い放った。
「物凄く大きな、猫の影だよ」
　しんとした。
　こういうところは、覚の話術の巧みさに感心する。もし、人を怖がらせる話を作る職業があれば、覚は、まちがいなく第一人者になれるだろう。むろん、どんな社会においても、そんな馬鹿な仕事が成立するとは思えないが。
「それ、ネコダマシ……？」
　真理亜が聞かずもがなのことを訊くと、みんなは、いっせいに喋り始めた。
「ネコダマシって、よく、小学校のそばに出るらしいよ」
「なんでなのかな？」
「決まってるじゃない。子供を狙ってるからよ！」
「季節は秋で、夕方くらいに出ることが多いんだって」

「家まで来ることもあるんだけど、たいていは真夜中で……」

　わたしたちは常に、闇を怖れると同時に惹きつけられていた。魑魅魍魎が出てくる怖い話には目がなかったが、その中でも、ネコダマシはひどくぞっとさせられる存在だった。子供から子供へ話が伝わっていく中で、様々な尾鰭が付いていったのだが、ネコダマシの基本形は、大人ほどの大きさの猫である。顔つきは猫そのものだが、異様なくらい四肢が長く、狙いをつけた子供の後ろを影のように追尾する。人気のない場所に来ると、背後から伸び上がり、前肢で肩を押さえるらしい。そうなると子供は、まるで催眠術にかかったように身体が痺れてしまうのだ。ネコダマシは、百八十度開く口で子供の首に喰らいつき、どこかへ引きずっていってしまう。その場には一滴の血も流れず、連れ去られた子供は、死体すら見つかることはない、云々。

「それで？　その人は、どこでネコダマシを見たの？」

「ネコダマシかどうか、わからない。見えたのは影だけだから」

　覚は、さっきの慌てぶりなどどこ吹く風で、自信たっぷりに言う。

「でも、その影を見たっていうのは、中庭のすぐ近くなんだ」

「近くって、どこのことよ？　外から中庭に出入りできる場所なんか、どこにもないじゃない？」

「外じゃないんだよ」

「え？」

　わたしは、覚の話に対しては常に懐疑的だったが、なぜかこのときは、背筋がうそ寒くなってきた。

「影が見えたのは、管理棟へ行く廊下の端なんだ。ちょうど、中庭への扉の前あたりで、消えたんだって……」

　これには、みな、一言も発することができなかっ

た。悔しいが、覚の思い通りの結果になったと言ってもいいだろう。いずれにしても、子供同士の他愛もない怪談ごっこにすぎない。このときはまだ、そう思っていた。

　振り返ってみても、和貴園に通っていた日々は幸せだったと思う。学校へ行って友達に会えるだけで、毎日が楽しくてしかたがなかった。

　朝から、算数、国語、社会、理科と退屈な授業が続くが、教室には学科を教える先生のほかに一人一人の理解度に目を配っていて、わからないところを懇切丁寧に教えてくれる指導教員の先生がいるので、誰かが取り残されるというようなことはない。一方、試験はやたらに多く、三日に一回は何かのテストを受けさせられていたように思う。ただし、そのほとんどは学科とは関係なく、『私は悲しい。なぜなら……』といった類の短文の後を完成させるようなものだったから、たいした負担にはならなかった。

　むしろ、たいへんだったのは自己表現の課題の方である。絵を描いたり、粘土で塑像を作ったりするのは楽しかったが、ほぼ毎日のように作文を書かされるのだけは閉口した。もっとも、そのとき修練を積んだおかげで、今、それほど苦労せずにこの手記を綴れるのかもしれないが。

　退屈な授業と課題をやり過ごすと、午後からは楽しい遊びの時間が待っていた。しかも週末の二日は休みだったので、思う存分野外を駆けめぐることができた。

　和貴園に入学したばかりのころは、緩やかに曲がった水路に沿って探検し、茅葺き屋根の家々を眺めるくらいだったが、やがて黄金の郷まで遠出するようになった。秋になると一面に稲穂が実るため、この名があるのだが、面白いのは、むしろ春から夏にかけてだった。水田を覗き込むと、水面を水黽（アメンボ）が走り、水中は泥鰌（ドジョウ）や蚊絶やし（カダヤシ）などが泳ぎ、水底には、

泥をかき混ぜて雑草を防ぐ兜蝦（カブトエビ）が、もぞもぞと動き回っている。農業用水路や溜め池には、田鼈（タガメ）や太鼓（タイコ）打（ウチ）、水蟷螂（ミズカマキリ）、源五郎（ゲンゴロウ）などの昆虫や、鮒（フナ）などの魚もいた。年上の子供が、わたしたちに木綿糸とスルメでザリガニを釣る方法を教えてくれ、丸一日かけてバケツいっぱい獲ったこともあった。

黄金の郷には、たくさんの鳥もやってきた。春には、天高く舞い上がるヒバリの鳴き声がこだまし、稲が育つ夏前までは、ドジョウを狙って多くの朱鷺（トキ）が水田を訪れる。朱鷺は冬に交尾して、近くの樹上に巣を作り、秋になると雛がいっせいに巣立つのだ。鳴き声はおよそ美的ではないが、うっすら桃色がかった朱鷺の群れが飛び立つさまは、壮観だった。そのほか、めったに地上に降りてこない大きな鳶（トンビ）や、鵯（ヒヨドリ）、四十雀（シジュウカラ）、雉鳩（キジバト）、膨雀（フクラスズメ）、三羽（サンバ）鴉（ガラス）なども、よく見かける鳥だった。

鳥ではないが、稀にミノシロに出会うこともあった。苔や小動物を漁るうちに、森から田んぼの畦道に迷い出てくるらしい。ミノシロは、土壌を改良し害虫を駆除する益獣として保護されているだけでなく、農家では、神の使い、あるいは吉祥として、大切に扱われていた。普通種でも数十センチから一メートル、オニミノシロに至っては二メートル以上もあって、無数の触手を蠢（うごめ）かせ、長い身体を波打たせながら進む姿は、神獣と呼ばれるにふさわしい威厳を備えていた。

同じように信仰を集めていた生き物に、白化型の青大将（アオダイショウ）である白蛇や、黒化型の縞蛇（シマヘビ）である烏蛇（カラスヘビ）があるのだが、ミノシロは、どちらも出会い頭に捕食してしまう。当時の民間信仰で、その事実にどういうふうに折り合いが付けられていたのかは、謎である。

子供たちは、高学年になると、町の最西端である櫟林の郷や、白砂の郷からずっと南下したところにある、美しい砂丘が続く波崎（はさき）海岸や、一年中花が咲き乱れている利根川上流の河岸まで遠征するように

なる。水辺には、篦鷺（ヘラサギ）や鷺（サギ）の姿があり、ときには丹頂鶴（タンチョウヅル）も飛来した。川辺の葦の間で大葦切（オオヨシキリ）の巣を探したり、山に登って芒（ススキ）の原っぱで茅の巣作り（カヤノスヅクリ）の巣を見つけたりするのは、楽しい遊びだった。特に、カヤノスヅクリの偽卵は、悪戯（いたずら）好きの子供たちにとっては格好の玩具だった。

だが、どんなに変化に富んでいるように見えても、八丁標の内側にあるのは、しょせん、ありのままの自然ではなく、いわば箱庭のようなものにすぎなかった。その意味では、昔、わたしたちの町にあった動物園と、その柵の外側とは、本質的になんの違いもなかったと言えるかもしれない。わたしたちが見ていた象やライオン、キリンなどは、実は、呪力によって創り出された、象モドキ、ニセライオン、キリンダマシにすぎず、万が一、檻から抜け出したとしても、人に危害を加える可能性はゼロだった。

八丁標の中の環境もまた、徹頭徹尾、人に対して優しかった。そのことは、後になって嫌というほど思い知らされることになるのだが、少なくとも当時は、わたしたちがどんなに野山を駆けめぐっても、毒蛇に咬まれることはおろか、虫にすら刺されないことを、まったく不思議に思わなかった。八丁標の内側には、毒牙を持った蝮（マムシ）や山棟蛇（ヤマカガシ）は一匹も棲息しておらず、いたのは、無害なアオダイショウ、シマヘビ、白斑（シロマダラ）、地潜（ジムグリ）、日計（ヒバカリ）、念珠蛇（ネンジュヘビ）などだけだった。

また、森に生えている檜（ヒノキ）や檜葉（ヒバ）の仲間は、過剰なほど強力な匂い物質を分泌することで、わたしたちの健康に有害な、黴の胞子、壁蝨（ダニ）、恙虫（ツツガムシ）、細菌を殺していたのだった。

子供時代を語るときに、忘れてはならないのは年中行事だろう。わたしたちの町には、代々受け継がれてきた祭りや行事が数多く存在し、四季折々の生活のリズムを作り出していた。

ざっと挙げても、春には追儺（ついな）と御田植祭、鎮花（はなしずめ）

祭。夏は、夏祭り（化物祭）、火祭り、精霊会がある。秋になると、八朔祭と新嘗祭。そして冬の風物詩といえば、雪祭、新年祭、左義長だった。

幼い頃、最も深くわたしの脳裏に刻み込まれていたのは、追儺の儀式である。

追儺は、『おにやらい』とも呼ばれ、真偽のほどは不明だが、二千年に及ぶ伝統を持つ最古の儀式の一つだという。

祭りの朝は、わたしたち子供も広場に集められる。乾ききらない粘土に胡粉を塗った、『無垢の面』を被り、『侲子』役として儀式に参加するのだ。

幼いころから、私はこの儀式が怖くてしかたがなかった。その理由は、登場する二体の鬼の面が、あまりにも醜悪だったことにある。

二体の鬼、『悪鬼』、『業魔』の面のうち、『悪鬼』は見るからに邪悪な哄笑面だった。後に儀式に関する知識が解禁されてから由来を調べてみたが、結局、判然としなかった。最もよく似ていたのは、古代の能面にある『蛇』である。これは、人間が鬼へ化していく過程を表した三つの能面の一つで、『なまなり』→『般若』→『蛇』という具合に変化する最終段階らしい。

一方、『業魔』の面は、それとは対照的に、恐ろしい苦悶から、どろどろに溶けるように歪み、ほとんど人の顔の形をとどめていない。

追儺の中心となる儀式は、次のようにして始まる。白砂が敷き詰められ、東西に篝火の焚かれた広場に、まず二、三十人の侲子が現れて、「鬼やーらい。鬼やーらい」と独特の節を付けて唱えながら、練り歩く。

すると、上手から、鬼を祓う役である方相氏が登場する。方相氏は古式に則った装束で、手には大きな矛を携えている。だが、何といっても、一番目を引くのは、四つの目のある黄金の仮面を被っていることだった。

方相氏は、侲子たちと一緒に「鬼やーらい」と唱

えつつ、ぐるぐる回り、災いや邪気を祓うという豆を四方にまく。豆は見物人にも投げつけられるが、目標になった者は合掌して受ける。

ここから、急に恐ろしい場面が始まる。方相氏がいきなり侲子たちの方を振り返って、手にしていた豆をすべてぶちまけるのだ。

方相氏は「穢（けが）れは、うちに」と大音声で呼ばわる。侲子たちも「穢れは、うちに」といっせいに唱和する。すると、それを合図に、あらかじめ侲子たちに混じっていた鬼役の二人が、『無垢の面』を脱ぎ捨てるのだ。その下には、さきほど述べた『悪鬼』と『業魔』の面を着けている。

侲子の一人として儀式に参加しながら、わたしにとってこの場面は、息が止まるくらい恐ろしかった。一度などは、わたしのすぐ隣にいた侲子が、突然、悪鬼へと変貌したのだ。侲子たちは二体の鬼を残して、蜘蛛の子を散らすように逃げ去るのだが、全員、まちがいなく本物の恐慌に駆られていたと思う。

方相氏は、「穢れは、そとへ」と唱えながら、矛で二体の鬼を追い立てていく。鬼たちは型どおり抵抗のそぶりを見せるが、全員が「穢れは、そとへ」と唱えるうち、見えない場所へと追い払われ、ようやく儀式は終わりになる。

侲子の面を取った覚の顔を見て、ぞっとしたときのことを、今でも覚えている。

「顔色が、真っ青よ」

わたしが言うと、覚は紫色になった唇を震わせた。

「何だよ。早季こそ」

わたしたちが、互いの目の中に見ていたのは、自分自身の裡に潜む恐怖だった。

覚が、大きく目を見開くと、わたしの背後にあごをしゃくった。振り返ると、舞台裏に戻ってきた方相氏が、黄金の仮面を外したところだった。

追儺で方相氏役をつとめるのは、自他共に認め

る、最強の呪力を持った人物でなければならない。そして、わたしが知る限り、鏑木肆星（かぶらぎしせい）氏は、一度たりともその座を他者に譲ったことはなかった。

鏑木肆星氏は、わたしたちの視線に気づいて、微笑した。奇妙なことに、彼は方相氏の仮面の下に、顔の上半分を覆う別の仮面を着けていた。素顔を見た人間はほとんどいないという噂である。鼻と口元は平凡な感じだったが、両眼が真っ黒なガラスで隠されているため、不気味な威圧感があった。

「怖かったか」

鏑木肆星氏がよく通る低い声で言うと、覚は畏敬の表情を浮かべてうなずいた。鏑木肆星氏の目は、続いてわたしに向けられたが、その間は、何だか、少し長すぎるように思えた。

「新しいもの好きの子だな」

何と応えたらいいかわからず、わたしは固まっていた。

「吉と出るか。それとも、凶と出るか」

鏑木肆星氏は、妙に軽薄な感じの含み笑いを残して、立ち去った。わたしたちは、しばらくの間、魅入られたように立ちつくしていた。やがて、覚が、ぽつりとつぶやいた。

「あの人、本気で集中したら、地球を真っ二つにするくらいの呪力があるんだって……」

覚のたわごとに、信憑性があると思ったわけではないが、このときのことは、その後も、ずっと心の片隅に残っていた。

幸せな時間は、いつか終焉を迎える。

わたしの子供時代もその例外ではなかったが、皮肉なことに、当時のわたしの悩みは、それが少々長すぎたことにあった。

前に述べたように、和貴園を卒業する時期は個々人で異なっている。クラスで真っ先に卒業したのは、瞬だった。誰よりも成績がよく、聡明で大人びた瞳をした少年は、ある日突然いなくなってしま

い、担任の真田先生が、残された生徒たちに向かって、誇らしげに彼の卒業を告げたのだった。

それからは、早く卒業して瞬と同じ学校へ行きたいというのが、わたしの唯一の望みとなった。ところが、クラスメートたちが、一人抜け、二人抜けしていくのに、いっこうにわたしの番はやってこなかった。親友の真理亜までが卒業してしまい、一人取り残されたときの気持ちは、どれだけ説明しても、とうていわかってはもらえないだろう。

桜が散って、二十五人いたクラスが五人になったとき、わたしと覚はまだ残されていた。日頃大きな口ばかり叩いていた覚も、さすがに元気がなくなり、わたしたちは、毎朝、お互いがまだ落伍者であることを確認しては、安堵の溜め息をつく日々を送っていた。できることなら、同時に卒業したい、もしそれがかなわないならば、先に行きたいとひそかに願いながら。

だが、わたしのささやかな願いは、完全に裏切られた。五月に入って、最後の心の拠り所だった覚まで、とうとう卒業してしまったのだ。ほとんど時を移さず二人が続いたため、残されたのは、ついに二人だけになった。奇妙に思われるかもしれないが、もう一人の名前は、どうしても思い出すことができない。たしか、何をやらせてもクラスで一番遅い、目立たない生徒だったはずだが、そのことが原因ではなく、おそらく、わたし自身が、無意識に記憶を封印してしまったせいだろう。

家に帰ってからも、わたしはめっきり口数が少なくなって、部屋に閉じこもる日々が続いた。両親も、そんなわたしを心配したようだ。

「早季。別に、焦る必要はないのよ」

そんなある晩、母は、わたしの髪を撫でながら言った。

「早く卒業することに、意味はないの。クラスのみんなが、先に卒業しちゃって寂しいでしょうけど、すぐにまた会えるから」

「別に……寂しくなんかないわ」
　わたしは、ベッドに突っ伏したまま言った。
「ねえ、早く卒業したから偉いってことじゃないのよ。呪力の強さや質にも、全然、関係ないわ。知ってる？　私もお父さんも、そんなに早いほうじゃなかったのよ」
「クラスの一番最後でも、なかったでしょう？」
「それはそうだけど、でも……」
「わたし、落ちこぼれにはなりたくない」
「そんな言葉は、使っちゃいけません！」
　母は、珍しく厳しい口調になった。
「誰から、そんな言葉を聞いたの？」
　わたしは、黙って、枕に顔をうずめた。
「卒業の時期は、神様に決められているんだから、あなたは、ただ待っていればいいの。遅れは、すぐに取り戻せるわ」
「もし……」
「え？」
「もし、卒業できなかったら？」
　母は、一瞬絶句したが、すぐに朗らかな声で笑った。
「まあ、そんなこと、心配してたの？　馬鹿ね。だいじょうぶよ。絶対、卒業はできるから。遅いか早いかだけで」
「中には、できない人もいるんでしょう？」
「ええ。でも、そんなことは、万に一つもないわ」
　わたしは、ベッドに身を起こして、母の目を見つめた。心なしか、母は動揺しているように見えた。
「ねえ、もし卒業できなかったら、ネコダマシが迎えに来るって、ほんと？」
「馬鹿ねえ。ネコダマシなんて、この世にいないの。もうすぐ大人になるっていうのに、そんなこと言ってると笑われるわよ」
「でも、わたし、見たの」
　その瞬間、まちがいなく、母の目の中に恐怖の色が走ったと思う。

「何言ってるの。ただの錯覚よ」

「見たのよ」

　わたしは、もう一押しして、母の反応を確かめようとした。嘘をついたわけではない。見えたような気がしたのは、事実だった。だが、完全に一瞬のことだったし、たぶん気のせいだっただろうと、自分でも思っていた。

「昨日の夕方、うちに帰る前。四つ辻のところで振り返ったら、ネコダマシみたいなものが横切るのが見えたの。すぐに消えちゃったけど」

　母は、溜め息をついた。

「枯れ尾花が幽霊に見えるって話、知ってる？　怖い怖いと思っていると、何でも、そんなふうに見えるのよ。きっと、早季が見たのは、普通の大きさの猫か、イタチでしょう。夕暮れどきには、よく、ものの大きさがわからなくなるから」

　母の態度は、いつも通りに戻っていた。母がおやすみを言って明かりを消すと、わたしは、すっかり安心して眠りについた。

　だが、真夜中に目を開けたとき、平和な気分は消し飛んでいた。

　心臓が早鐘のように打ち、手足は冷え切り、全身にぐっしょりと汗をかいていた。とても嫌な汗だった。

　天井の羽目板の上に、何か邪悪な存在が犇（ひし）めいているようだった。聞こえるか、聞こえないかの音。まるで、鋭い爪が板を噛んでいるような。

　ネコダマシが、来たのだろうか。

　わたしは、しばらくの間、金縛りにあったように動けなかった。

　しばらく我慢していると、呪縛が弛んだように、身体の自由が戻ってきた。わたしは、そっとベッドから滑り出て、音がしないように引き戸を開けた。窓から差し込む月明かりで、廊下を進む。季節はすでに春だったが、素足に貼りつく板張りの床は冷たかった。

もうすぐ、もう少しだ。両親の寝室は、廊下を曲がったすぐ先だった。

　寝室の戸の隙間から燐光灯の明かりが漏れているのに気づき、わたしはほっとした。引き戸に手をかけようとしたとき、中から声が聞こえた。母の声だった。今までに聞いたことのないような、深刻な懸念のこもった調子だ。わたしの手は、宙で止まった。

「心配だわ。このまま、もし……」

「君がそんなに気を揉んでいたら、かえって、早季に悪影響を与えるよ」

　父の声も、ひどく沈んでいるようだった。

「でも、このままじゃ。……ねえ、教育委員会は、もう動いてるのかしら?」

「わからない」

「図書館から教育委員会に影響力を行使するのは難しいのよ。あなたは決裁権者なんだから、その気になれば、何とかできるでしょう?」

「委員会は独立だ。私の職権では調べようがないし、まして、早季の父親という立場では」

「私、もう、子供をなくすのは嫌よ！」

「声が大きいよ」

「だって、早季は、不浄猫（ふじょうねこ）を見たって言ったのよ！」

「気のせいかもしれない」

「もし本当だったら、どうするの?」

　わたしは、そっと後ずさりした。両親の会話の内容は、わたしの理解を超えていたが、聞いてはいけない話を聞いてしまったことだけは、はっきりとわかった。

　来たときと同じように、音を立てずに寝室に戻る。窓ガラスの外側に、大水青（オオミズアオ）がとまっていた。わたしの掌（てのひら）ほどもある水色の蛾は、不吉な事象を告げる冥界からの使者のようだった。寒くはないのに、さっきから、身体の小刻みな震えがとまらない。

どうなるんだろう。

生まれて初めて、世界に裸で放り出されたような、よるべなさを感じた。

わたしはいったい、どうなるんだろう。

天井の羽目板が、みしっという嫌な音を立てた。

何かがやって来る……。

恐ろしいほど巨大な存在が、もう、すぐそばまで来ているように感じられた。

ああ。もうすぐ、ここへ来る。

オオミズアオが、ぱっとガラス戸を離れると、闇の中に消えていった。

次の瞬間、風もないのに、窓枠ががたがたと揺れ始めた。揺れは執拗に続き、収まるどころか、どんどん強くなっていった。まるで、外にいる何者かが、窓をもぎ取ろうとしているかのようだった。

襖がひとりでに開いたかと思うと、激しい音を立てて閉まった。

わたしは、あえいだ。息が苦しくなり、肺の奥に息を吸い込もうとした。ああ。だめだ。来る。来る。来る……。

突然、部屋の中にあったすべてのものが、凄まじい勢いで動き始めた。椅子や机が暴れ馬のように跳ね、筆記具が矢のように飛んで襖に突き刺さる。ベッドがゆっくりと宙に浮き上がった。

わたしは、絶叫した。

廊下を走ってくる足音。わたしの名前を呼ぶ両親の声。引き戸が、弾かれたように開く。

次の瞬間、両親が折り重なるようにして部屋に飛び込んできた。

「早季！　もう、だいじょうぶよ！」

母が、わたしを抱きしめる。

「これ……何なの？」

わたしは、叫んだ。

「心配しなくていいの。祝霊（しゅくれい）よ！　とうとう、あなたにもやって来たの」

「これが？」

目に見えない怪物が部屋の中で大暴れしているような現象は、両親が駆けつけてからは、ゆっくりと沈静化しつつあった。

「これで、早季も、大人になったっていうことだよ」

父が、安堵を滲（にじ）ませた笑顔で言う。

「じゃあ、わたし……？」

「和貴園は、今日で卒業よ。明日からは、全人学級に入るの」

ふわふわと宙を漂っていた本が、急に生命を失って床に落ちた。ベッドが傾きながら、吊っていた糸が切れたように、どさりと着地する。

母は、わたしを痛いほど堅く抱きしめた。

「ああ、よかった！　もう、何も心配いらないからね！」

暖かい涙がわたしの首筋を濡らし、わたしは、心の底からの安堵に包まれて目を閉じた。

だが、わたしの耳の奥にはずっと、「私、もう、子供をなくすのは嫌よ！」という母の悲痛な叫びがこだましていた。

3

古代の文献の中に、ポルターガイスト現象なるものが記載されていることを知ったのは、つい最近のことである。

わたしの手元には、母が司書をしていた図書館の残骸から発掘された書籍がある。表紙に押された焼き印は、『訞』という面妖な文字だ。わたしたちが和貴園や全人学級で閲覧を許されていたのは、第一分類の『薦』、『優』、『良』という印がある図書に限られていたが、これは何と第四分類に属する印で、本来なら、一般人の目に触れる機会はなかった代物だ。地下室の奥深く保管してあったために焼失から免れたのは、運命の皮肉と言うしかない。

この本によれば、古代、人類のほとんどが呪力を持っていなかった時代にも、しばしば、幽霊のノックのようなラップ音や、食器が宙に舞ったり、家具が踊り、家鳴りが起きたりという怪現象が見られたという。

しかも、ほとんどの場合では、こうした現象の起きた家には思春期の子供がいたらしい。このため、思春期に鬱屈した精神的、性的エネルギーが無意識の念動力（サイコキネシス）となって顕れたものであると分析されていたようだ。

再起性偶発的サイコキネシス（RSPK）なる別名を持つ騒霊（ポルターガイスト）と、わたしを訪れた祝霊とが、本質的に同じものであることは言うまでもないだろう。

あの晩に続く三日間に、様々な出来事があった。わたしの呪力の発現を、両親が町に届け出ると、ただちに教育委員会の人たちが家にやってきた。白衣の年配の女性と、学校の先生のような若い女性、それに作務衣（さむえ）のような服装で目つきの鋭い中年男性の三人組だった。年配の女性が中心になって、たっぷりと時間をかけて、わたしの健康と心理状態につい

て詳細な調査を行った。その後は、すぐにでも全人学級への入学が許可されると思っていたのだが、実は、本番はそれからだった。

わたしは、一時的に家から引き離されることになった。年配の女性は、全人学級に入学する準備の一環で、何も心配することはないと言う。両親も、わたしの手を握って笑顔で送り出してくれたが、そのときの心細さといったらなかった。

わたしは、窓のない屋形船に乗せられた。その際、酔い止めと言われて、塗りのお椀に入った液体を飲まされた。黒砂糖のような甘味があったが、舌に残る後味はひどく苦い。飲んでしばらくすると、頭がぼんやりとしてきた。

屋形船は、相当な速度で運河を航行しているらしいことは感じられたものの、どちらへ向かって走っているのかは、さっぱりわからなかった。だが、途中で波の揺れ方が変わり、舟に当たる風の音が聞こえたので、どこか広々とした場所に出たのではないかと思った。もしかしたら、利根川の本流に入ったのだろうか。訊いてみたかったが、余計なことは言わない方がいいと思い、黙っていた。その間も、付き添いの若い女性が、ひっきりなしに質問を投げかけてくるが、すでにさんざん訊かれた内容ばかりで、しかも、わたしの答えを書き留めている様子はなかった。

屋形船は、何度か方向転換しながら三時間以上走り、ようやく停泊した場所は、周りをすっぽりと囲いで覆われた船着き場だった。

やはり囲いで視界を遮っている階段を上がって、お寺のような建物に入るまで、周囲の景色はまったく見えなかった。

出迎えたのは、墨染めの衣を着た、まだ若い僧侶だった。頭の剃り跡が青々としている。付き添いの人たちは全員、ここで引き上げてしまった。

わたしは、がらんとした和室に通された。床の間には墨痕鮮やかな掛け軸があり、何と書いてあるの

かはわからないが、和貴園の扁額の文字に似ているような気がした。

わたしは畳の上で正座したが、僧侶の指示で結跏趺坐に組み直した。胡座から両方の足の甲を腿の上に載せるポーズである。瞑想をして、心を落ち着けなさいということらしい。和貴園では、毎日座禅の時間があったので、慣れていたが、もっとゆったりしたズボンをはいてくるんだったと後悔した。

深く腹式呼吸をして、できるだけ早く気持ちを落ち着けようとしたのだが、焦る必要はなかった。それから、二、三時間は待たされたのだから。そのうち、日が傾いてくるのがわかった。時間の経過が、いつもとは違っているようだった。思考がまとまらず、散漫になる。なぜか、一つのことに意識を集中できないのだ。

だが、部屋が暗くなってくると、しだいに、小さな違和感が膨らんできた。最初はなぜかわからなかったが、すでに日没の時間を過ぎているはずなのに、どこからも『家路』が聞こえてこないためだと気がついた。神栖66町の中であれば、どの郷でも夕刻には同じメロディが流れるはずだ。それが聞こえないほど遠くへ来たとすると、わたしは八丁標の外にいることになる。

そんな馬鹿なことが、あり得るだろうか。

わたしは、自然の欲求を感じて立ち上がった。誰かいませんかと声を出したが、応える人間はいなかった。しかたなく部屋を出る。鶯張りの廊下は、一足毎に耳障りな音がする。さいわい、廊下の突き当たりを曲がったところに手水場があった。

用を足して戻ってくると、部屋に明かりが灯っていた。中に入ると、腰が曲がり白髭を垂らした僧侶が端座している。十二歳当時のわたしより小柄で、かなりの高齢らしかった。襤褸布を継ぎ接ぎしたような、ひどく粗末な袈裟を着ているのだが、何とも言えぬ温雅な風格が備わっている。わたしは、促されるまま、向かい合う位置に正座した。

「どうです。お腹がすきましたか？」
白髭の僧侶は、にこにこしながら尋ねる。

「はい。少し」

「せっかくいらっしゃったのですから、精進料理などご馳走したいところですが、残念ながら、あなたは、明日の朝まで絶食しなくてはなりません。頑張れますか？」

わたしは、ひどくがっかりしたが、何とかうなずいた。

「ところで、私は、この破れ寺の和尚をしております、無瞋と申します」

わたしは、思わず居ずまいを正した。神栖66町で、無瞋上人の名前を知らない人間はいない。鏑木肆星氏が、最強の呪力を持つことで畏敬の念を集めているように、無瞋上人は、最高の人格者として、誰からも敬愛されていた。

「わたし……渡辺早季です」

「あなたのご両親のことは、とてもよく、存じ上げておりますよ」

無瞋上人は、にこにこしながらうなずいた。

「子供のころから、とても優秀でした。将来は、必ず町を担うような人物になると思っていましたが、やっぱり、そのとおりになりましたね」

どう応えていいかわからなかったが、親を褒められて不快な感じはしない。

「でも、お父さんは悪戯が好きでしたね。学校の銅像に、毎日のようにカヤノスヅクリの偽卵をぶつけるので、臭くて閉口しました。あれは、私の銅像なんです。ああ……そのころ、私は、和貴園の校長をしてたんですよ」

「そうなんですか」

無瞋上人が校長だったというのも初耳だったが、あの父が、まさか覚みたいな真似をしていたとは、想像できなかった。

「早季さんも、これから全人学級に入学して、大人の仲間入りをすることになりますが、その前に、今

晩は、ここの本堂で、お籠もりしなければなりません」

「あの、このお寺、どこですか？」

無瞋上人の言葉を遮るのは失礼だと思ったが、どうしても好奇心を抑えられなかった。

「この寺は、清浄寺といいます。ふだん、私は、茅輪の郷にある極楽寺の住持をしていますが、成長の護摩を焚くときは、必ず、ここへ来る決まりなんですよ」

「もしかして、八丁標の外なんですか？」

無瞋上人は、面にかすかな驚きを表した。

「そうです。あなたは、生まれて初めて、八丁標から外に出たことになります。しかし、心配はいりません。この寺の周囲には、強い結界が張られておりますから、八丁標の中にいるのと同じほどに安全なんです」

「はい」

無瞋上人の穏やかな声には、わたしの不安を和らげる力があった。

「さて、もう準備はできているようですが、護摩自体は、別にたいしたことはありません。ただの儀式ですから。その前に、軽く法話をいたしましょう。なに、しゃっちょこばって聞くようなもんじゃありません。それに、どうも私の法話は眠気を誘うようなんですよ。眠くなったら、眠っても別にかまいませんよ」

「そんな」

「いやいや、本当なんです。ずっと以前のことですが、不眠症の方が寺に来られましてね。どうせ一晩中眠れないのに、無為に過ごすのは勿体ないと思う。ひとつ有り難い法話でも聞かせてもらえないかとおっしゃるものですから、不眠症の方ばかりを集めて法会を催しましたところ、最初の十分で、全員が熟睡しました」

無瞋上人の話術は、高齢の人とは思えないくらいよどみなく、人を惹きつける力を持っていた。わた

しは、笑いながら、自然と話の中に引き込まれていった。

とはいえ、法話は、眠気こそ誘われなかったものの、特に目新しい内容ではなかった。人生における黄金律。己の欲せざるところを、人に施すなかれ。要は、相手の身になって考えるということらしい。

「……これは、簡単なようですが、なかなか会得できることではありません。たとえば、こんなことがあったら、どうでしょうか。あなたとお友達が、二人で、山に行きました。お友達は、竹苞（たけづと）に入れた握り飯を持ってましたが、一人で食べ、あなたにはくれません。あなたは、握り飯を一つ分けてほしいと頼みましたが、友達は、こう言いました。だいじょうぶです。その必要はありません」

「どうしてですか？」

「私は、あなたの空腹なら、いくらでも我慢できますからと」

わたしは呆れた。譬（たと）え話にしても、あまりにも滅茶苦茶な理屈である。

「そんな人、絶対いないと思います」

「もちろん、実際は、いないでしょう。でも、もし、そんな人がいたとしたら、あなたはどう思いますか？　その人の言い分は、どこが間違っているでしょうか？」

「どこが……？」

わたしは、途方に暮れた。

「それは、倫理規定に違反していると思います」

無瞋上人は、微笑して首を振った。

「あまりにも当たり前すぎることですから、たぶん、倫理規定には、定めはございませんでしょう」

たしかに、こんなことまでいちいち想定し、書き込んでいたら、母の図書館にある一般倫理規定集の厚さは、八丁標からはみ出すまでになるだろう。

「その答えはですね、頭で考えてもしかたがありません。ここで感じることなのです」

無瞋上人は、自分の胸に手を当てた。

「心で？」

「そうです。あなたの胸で相手の痛みを感じられるかどうか。感じられれば、何とかして、相手を助けてあげたいと思うはずでしょう。それが、人間として、一番大事なことなのですよ」

わたしは、うなずいた。

「あなたは、他人（ひと）の痛みを感じることができますか？」

「はい」

「ただ、想像するだけじゃありません。本当に、他人の痛みを我がこととして、あなたの胸で感じ取ることができますか？」

「はい。できます」

わたしは、元気よく答えた。これで、口頭試問は終わったと思ったのだが、無瞋上人の反応は、わたしが予期したものとは違っていた。

「それでは、ひとつ試してみましょうか」

試すという意味がわからず当惑していると、無瞋上人は懐から小刀を出した。無造作に鞘を払い、鈍く光る刀身を見せる。わたしは、ぎょっとした。

「試みに、私が、痛みを味わってみましょう。その姿を前に、あなたもまた、同じ痛みを感じられるでしょうか？」

上人はそう言うと、いきなり自分の膝に小刀を突き立てた。あまりのことに、わたしはただ、呆然と見守るしかなかった。

「修行を積むと、自分の、肉体の痛みには、耐えられるようになるものです。この年に、なると、もう、血もあまり出ません……」

無瞋上人は、切れ切れの声でつぶやいた。

「やめてください！」

ようやく我に返り、わたしは叫んだ。喉がからからになり、心臓が激しく動悸を打っている。

「これは、あなたのためなのです。あなたが、本当に、私の痛みを感じているかどうか。もし、感じて

いるのであれば、すぐに止めましょう」

「痛みは感じてます。だから、やめて！」

「いや、感じてはいません。あなたは、ただ想像しているだけです。本当の痛みは、その胸で感じるものです」

「そんな……」

　どうしたら、いいのだろう。わたしは、膝立ちの姿勢になったまま動けなかった。

「いいですか？　あなたが痛みを感じるまで、私は、これを続けねばなりません。それが、あなたを導く私の責務なのです」

「で、でも、どうやったら……」

「想像するのではない。認識するのです。あなたが、私をこうさせているのだと」

　無瞋上人の声は、苦しげだった。

「わかりますか。あなたが、私を苦しめているのですよ」

　息が停まりそうだった。いったい、どうすれば、上人を救えるのだろう。

「どうか、私を助けてください」

　無瞋上人は、低い掠れ声で言った。

「これを、やめさせてください。助けてください」

　その場の雰囲気を、どう説明したらいいだろうか。理不尽であることはわかっていても、しだいに、わたしが本当に上人を苦しめているとしか思えなくなってくる。とめどなく、涙が溢れてきた。

　無瞋上人が、苦しげに呻いた。小刀を突き立てている腕は、かすかに痙攣している。

　そして、信じられないことが起こった。ふいに身体が棒のように硬直し、動かすことができなくなったのだ。視界が、じわじわと周囲から狭まってくる。胸が強く圧迫されて、息ができない。

「私を殺さないでください」

　その言葉が引き金になった。左胸から脳天にかけて、まるで剣で刺し貫かれたような、鋭い痛みが走った。

わたしは、それ以上バランスを保つことができず、畳の上に横倒しになった。

心臓が。息が、息ができない。わたしは、陸に上がった金魚のように、口をぱくぱくさせるばかりだった。

無瞋上人が、上から、わたしの顔を覗き込んでいるのが見えた。まるで実験動物を観察しているように。

「しっかりしてください」

声が、ひどく遠くに聞こえる。

「早季さん、だいじょうぶですよ。ほら、私は、何ともありません」

かすむ目に、何事もなかったかのように立ち上がっている無瞋上人の姿が映っていた。どこにも、怪我はしていないようだ。

「よく見なさい。私は傷ついてはいない。この小刀は偽物です。絶対に刺さらないような、作りになっているんですよ」

小刀の刃は、無瞋上人が指で押すと、柄の中に引っ込んだ。

わたしは、しばらくの間、横たわったまま身じろぎもしなかった。何が起きたのかわからず、ひたすら混乱していた。

胸の痛みは、いつのまにか消えている。金縛りも解けているようだ。

わたしは、何とか身体は起こしたものの、一言も発することができなかった。悪ふざけに腹を立てたり、抗議する前に、自分の身体の変調にすっかり怯えていたのだ。

「びっくりしたでしょう。でも、これで、あなたは、最後の試験に合格したのです」

無瞋上人は、再び、元の慈顔に戻っていた。

「あなたは、他人の痛みを、我がこととして感じられる人です。それならば、もう、何の心配もない。あなたには、しかるべき真言（マントラ）を授けましょう」

身体は、もうすっかり元通りになっていたが、わ

たしはただ、うなずくことしかできなかった。

「でも、忘れないでください。たった今、あなたが感じた痛みを。折にふれて、思い出すようにするんです。そして、よくよく肝に銘じてください」

無瞋上人の声は、心の最も深い部分まで染み入ってくるようだった。

「呪力だけではなく、その痛みこそが、人と獣とを分かつものだということを」

祈禱を行っている僧侶が、丸薬のようなものを投げ入れ、香油を注ぐと、護摩壇の上で燃えさかる炎はひときわ大きくなった。

後ろで大勢の僧が読経する声が、蟬時雨のように、耳の奥に反響している。

わたしは、斎戒沐浴の後、まるで死人のような白装束に着替えさせられていた。祈禱を行う僧侶のすぐ後ろで正座し、合掌し続けなければならない。

いつ果てるともなく続く護摩に、疲労はピークに達していた。すでに、夜明けが近いのだろう。さまざまな思いが、泡沫のように浮かんでは消えていく。もはや、筋道だった思考は不可能だった。

炎の中に何かが投じられるたび、わたしの持っている原罪や煩悩が焼き尽くされていくらしいのだが、ここまで長く続くところを見ると、わたしは生来、よほど罪深く、煩悩の固まりのような人間だったらしい。

「さあ、心も身体も、ずいぶん軽くなりましたね。これから、煩悩の最後のひとつを焼き尽くします」

背後から、無瞋上人の声が響いた。

わたしは、合掌したまま一礼した。ようやく、これで解放される。

「炎を見なさい」

闇の中から聞こえてくるのは、無瞋上人ではなく、天からの声のようだった。

「炎を見なさい」

わたしは、護摩壇の上の三角形の炉で踊り上がる

炎に目を凝らした。

「炎を操ってみなさい」

「できません」

祝霊が訪れて以来、わたしは、まだ一度も、意図して呪力を使ったことはないのだ。

「だいじょうぶ。できます。炎を揺らしてみるのです」

わたしは、炎を見つめた。

「左に、右に。ゆらゆら……ゆらゆらと」

意識を集中するのは困難だったが、しばらくすると、急に焦点が合ったように、炎が大きく映り始めた。ひときわ明るく輝いている内炎、その内側にある、ほとんど透明な炎心。そして、最も激しく動いているのは、暗い外炎の部分だ。

動け。動け。

違う。炎じゃない。ふいに気がついた。炎は輝く粒子の集まりだが、あまりにも実体が希薄すぎる。

空気を動かすんだ。

さらに意識が澄んだ状態になると、外炎の周囲にある陽炎（かげろう）の動きまで、くっきりと見えるようになった。たゆたうように立ち上る、熱く、透明な流れ。

さらに、集中を深めていく。

流れろ。流れろ……。もっと速く。

陽炎の動きが、唐突に加速した。

次の瞬間、炎は、突風に煽られたように大きく左右に揺らいだ。

できた。

それは、輝かしい達成の瞬間だった。

自分にできるということが、信じられなかった。手を触れず、意のままにものを動かすことが。

わたしは、大きく息を吸い込んで、さらに炎の周囲に意識の触手を伸ばそうとした。

「そこまで。やめなさい」

厳しい声で制止されると、集中は、カードの家のようにあっけなく崩壊し、イメージは闇に呑み込まれてしまった。

「最後に残された、あなたの煩悩とは、あなたの、その呪力です」

瞬時には、言葉の意味がよく理解できなかった。

「煩悩を捨てなさい。解脱のためには、すべてを、いったん、清浄な炎の中で焼き尽くさねばなりません」

信じられない思いだった。なぜ、たった今手にしたばかりの呪力を、捨てなければならないのだろう。

「天から授かった能力は、神仏にお返ししなければなりません。今から、あなたの呪力を、この人形の中に封じ込めます」

逆らうことは、許されなかった。二枚の半紙を重ねて折った人形が、わたしの目の前に置かれる。頭部と胴体には、梵字と奇怪な文様とが書かれていた。

「人形を操って、立たせなさい」

今度の課題は、あきらかに、さっきより難しい。

しかも、心が千々に乱れているので、なかなか、集中することができなかった。

だが、しばらくすると、紙の人形は震えながら、視界の中で徐々に大きくなっていく。

「その人形に、ありったけの思いを籠めるのです」

紙の頭。紙の胴体。紙の手足。

しかし、それは、紛れもない人間の形をしている。

自分自身の身体感覚を、徐々に紙の人形に重ねていった。脚部に力を入れ、起きあがり小法師のような要領で、バランスを取る。

紙の人形は、ふわりと立ち上がった。

再び、心に歓喜と力の感覚が満ち溢れた。

「渡辺早季。おまえの呪力は、ここに封印された！」

お堂を揺るがす大音声が響き渡り、心の中の輝かしいイメージは、またもや粉々に飛散した。

六本の長い針が、まるで生き物のように唸りを上

げて宙を飛んでくる。針は、人形の頭、胴中、四肢を刺し貫いた。

「いっさいを焼施（しょうせ）せよ。すべての煩悩を焼尽（しょうじん）せしめ、灰は無辺の荒土に還るべし」

祈禱を行っている僧侶が、荒々しい動作で針の刺さった人形を摘み上げ、炎の中に放り込んだ。

爆発したように火の粉が飛び散り、お堂の天井近くまで火焔が立ち上がる。

「あなたの呪力は、消滅しました」

わたしは、ただ呆然として、なりゆきを見守っているだけだった。

「炎を見なさい」

また、無瞋上人の声が命じる。

「あなたには、もはや炎を操ることはできません。試してみなさい」

無情な声だった。わたしは、言われるままに炎を見つめたが、今度は、何も見えない。いくら力を加えようと焦っても、変化は何一つ起こらなかった。

もう、あの力の感覚は、二度と戻ってこないのだろうか。涙が一筋、頰を伝った。

「あなたは、深く神仏に帰依（きえ）し、自ら呪力を放擲（ほうてき）しました」

無瞋上人は、急に暖かみと柔らかさを取り戻した声で言った。

「されば、大日如来の御慈悲により、ここに、正しき真言（マントラ）を授け、新たな精霊を招聘し、再度、呪力を付与します」

両肩を、強く警策で打たれる。わたしは頭を垂れ、読経の声がひときわ大きくなった。

無瞋上人が、耳元に口を寄せて、わたしにだけ聞こえる囁き声で真言（マントラ）を授与した。

ここまで書いてきて、わたしはひどく当惑している。

どうしても、わたし自身の真言（マントラ）を、ここに書き記すことができないのだ。

わたしたちの社会では、現在も、真言（マントラ）はきわめて重要な意味を持っている。それは、諸仏、諸天に祈りを捧げ、呪力を起動する鍵となる言葉であり、みだりに口外すれば言霊（ことだま）が失われると、厳しく戒められている。

反面、それは、ただの呪文であり、意味を持たない音の羅列にすぎない。したがって、ここで明かしたところで、何ら不都合はないはずだ。

そのことは、理屈ではわかっているつもりだ。にもかかわらず、潜在意識の最深部には、真言（マントラ）を暴露することへの抵抗が、今も存在しており、真言（マントラ）を書こうとするペンの動きが、執拗な掣肘（せいちゅう）を受けるのである。

そこで、真言（マントラ）とはどういうものかを知りたい方のためには、以下に一例を記すにとどめたい。

なうぼう、あきゃしゃ、ぎゃらばや、おん、ありきゃ、まり、ぼり、そわか。

ちなみにこれは、覚に対して与えられた、虚空蔵（こくうぞう）菩薩（ぼさつ）の真言（マントラ）である。

わたしのための通過儀礼（イニシエーション）は、その後も延々と続いたものの、これ以上書き記すべきことはない。ようやく終了したときは、すでに東の空が明るくなり始めており、わたしだけでなく、全員が疲労困憊していた。

わたしは、それから一昼夜、泥のように眠った。目覚めた後は、丸一日、清浄寺の学僧たちとともに勤行（ごんぎょう）に励み、その翌日、ようやく帰宅を許された。

無瞋上人以下、清浄寺の僧侶たち全員が出てきて、わたしを祝福し、葉桜の下で見送ってくれた。再び窓のない屋形船に乗ると、今度は、ものの二時間ほどで水車の郷に着いた。

両親は、黙って、たっぷり五分間はわたしを抱きしめたと思う。その晩はお祝いだった。両親が思念

を凝らした料理が食卓に並んだ。すべて、わたしの好きなものばかりである。内側から炎で炙った山芋の団子。見かけも触感も生のままで、タンパク質の組成を変えたヒラメの身。コロイドの中に旨味成分を凝縮してある、トラバサミのスープ……。

そして、この晩をもって、わたしの長かった子供時代は終わり、翌日から新しい生活が始まった。

全人学級があったのは、和貴園と同じ茅輪の郷だったが、ずっと北の、松風の郷寄りの位置にあった。和貴園の先生に伴われて石造りの校舎に入り、一人で教室へ行くように言われたときは、口の中がからからになるほど緊張していた。

教室の引き戸を開けると、右手すぐの場所に教壇があった。入り口から見える場所には、全人学級の理念を示す標語が書かれた紙が貼ってある。左手は、奥へ行くほど高くなった階段教室で、三十人ほどの生徒たちが行儀よく座っていた。

担任の遠藤先生に促されて前に進み出たとき、不覚にも、脚が震えるのを感じた。これまでの人生で、これほど多くの視線に、無防備なまま曝されたことはなかったからだ。

教壇に立っても、教室をまっすぐに見上げる勇気は湧いてこなかった。それでも、ちらりと目を上げると、みな、視線をそらす。そのときふと、何かに似ているという気がした。和貴園ではない。だが、たしかに以前、こんな場所を見たことがある。何だろう、これは。クラスを覆っている、どこか靄（もや）がかったような雰囲気は。それは、奇妙な既視感（デジャヴ）だった。

「今日から皆さんのクラスメートになる、渡辺早季さんです」

担任の遠藤先生が、白板にわたしの名前を書いた。和貴園の先生のように手で板書（ばんしょ）するのではなく、どういう仕組みか、遠藤先生の呪力に応じて黒い粒子が板の上で寄り集まり、文字の形になるの

だ。

「和貴園から来た人は、みな、お友達ですね。それ以外の人たちも、一日も早く仲良くなってください」

　さざ波のような拍手が起きた。そのときになって、わたしは、クラス全体が、わたしに負けず劣らず緊張していたことに気がついた。

　少しだけほっとして、前よりは大胆にクラスを見上げる。すると、控えめに手を振っている三人の姿が目に入った。真理亜と覚、それに瞬だ。

　よく見ると、クラスのほぼ三分の一は、和貴園の同級生だった。全人学級は、入学こそさみだれ式だが、年齢別の編成なので、確率を考えれば、当然のことである。それで、かなり緊張は和らいだものの、最初の時間は何の授業だったか、いまだに思い出せない。

　休み時間になると、待ちかねたように、和貴園の卒業生たちが、わたしの周りに寄り集まってきた。

「遅かったね」

　瞬の第一声が、これだった。たぶん、同じことを覚が言ったら腹を立てていただろうが、わたしは微笑した。

「ごめん。待たせたわね」

「ほんとよ。待ちくたびれちゃったわ」

　真理亜が、後ろからわたしの首に手を回し、ぐりぐりと額を押しつけてきた。

「大器は晩成するのよ。別に、早くやって来た祝霊がいい霊とは限らないでしょう?」

「それにしても、和貴園組じゃビリだぜ。早季の祝霊は、いくら何でも、のんびりしすぎだよ」

　覚が、自分のことはすっかり棚に上げて言う。

「何よ。覚だって、ほとんど変わらないじゃ……」

　言いかけて、不審を感じる。

「ビリ?　そんなはずないわ。だって、わたしの後にまだ」

　全員が、はっとしたように口をつぐんだ。侲子が

被る『無垢の面』のように、すっかり表情が消え失せている。

「……全人学級には、学科だけじゃなくて、能力実技があるのよ。知ってる？　わたし、波紋干渉じゃ、クラスでトップの成績だったんだから」

「撃力交換の方は、全然駄目だったけどな」

「今はまだ、イメージングの方が大事だって、先生は言ってたわ」

皆が、いっせいにしゃべり始めた。何を言っているのか、ちんぷんかんぷんだったし、先に全人学級の課程をこなしている優越感を誇示されているようで、気分はよくなかった。しかし、わたしは、昔から身に染みついた習慣に従った。つまり、他人が避けようとする話題は、最初から存在しなかったようなふりをするのだ。

皆の話について行けなかったので、わたしは、もっぱら聞き手に回って、クラスの奇妙な第一印象について考えてみた。たしかに、いつか、どこかで、こんな感じを受けたことがある。

次の授業が始まる予鈴が鳴り、皆がぞろぞろと席に戻りかけたとき、わたしは、やっとそれが何だったのかを思い出した。

「妙法（みょうほう）農場だ……」

わたしのつぶやきに、覚だけが耳ざとく反応して、振り返った。

「何だって？」

一瞬ためらってから、わたしは答えた。

「このクラス、あの農場に似てるわ。ほら、和貴園で見学に行った」

覚は、和貴園という言葉を耳にするや、小さな子供の言葉を聞いているような、小賢しげな表情に変わった。

「全人学級が、農場に似てる？　何、それ？　どういうこと？」

「何だか、雰囲気がそっくりだってこと」

わたしは、しだいに、不愉快な気分を抑えられな

くなってきた。

「全然、意味がわからないよ」

覚の方も、何となく気分を害したようだったが、次の授業時間が始まったため、その話はそれっきりになった。

妙法農場は、黄金の郷にあり、和貴園の社会見学で訪れたことがあった。生徒たちは、小学校の卒業時期が近づくと、急に思い出したような慌ただしさで、いろいろな場所に連れて行かれる。将来、どんな職業につきたいか考えさせるのが狙いらしい。わたしたちは、生まれて初めて目の当たりにする生産現場に目を輝かせ、一日も早く大人になりたいという思いを新たにしたものである。

職能組合に所属する陶器やガラスの工房では、普通に焼成したのでは絶対に造りえないほど強靭なセラミックスや、ほとんど空気のような透明度のガラスを、呪力を使って製造するところを見せてもらい、早くも、全人学級の卒業後は弟子入りしたいと宣言する生徒が続出した。

だが、わたしたちに与えた衝撃という点では、最後に見学した妙法農場をしのぐものはなかっただろう。

妙法農場は、いくつかの郷に点在する実験農園を含む、町で最大の農場である。最初に見学したのは、白砂の郷にある海水田だった。わたしたちが消費する米は、黄金の郷にある水田で作られているのだが、ここでは、たくさんの稲が海水に浸かって育っていた。逆浸透膜というものの作用で、塩分を排出することができるらしい。わたしたちは、収穫された米を試食してみて、少し塩気があるものの、充分、食用に耐えることに驚いた。

次に見た養蚕場では、たくさんのカイコが、七色に輝く繭を作っていた。これらの繭から作られる絹織物は、まだ高級品だが、染料が必要ないばかりか、色落ちも褪色もしないという特長があるとい

う。

隣の建物では、品種改良の参考にされる外国産の絹糸虫が飼育されていた。黄金の繭で知られるインドネシアのクリキュラサン。繭の大きさが普通のカイコの十倍というインドのタサールサン。数百頭が集まって、ラグビーボールほどの繭を作るウガンダのアナフェなど。

圧巻だったのは、密閉された部屋で飼われている常陸蚕（ヒタチサン）だった。体長二メートルに達する三頭のカイコは、旺盛な食欲で大量の桑の葉を貪りながら、もう一つの口である吐糸口から、休むことなく糸を吐き続けている。もはや、繭を作るという最初の目的は忘れてしまったらしく、糸は四方八方にでたらめに吹き付けられるので、内部を観察するためのガラス窓からは、綿飴のような糸を頻繁に取りのけなければならない。農場を案内してくれた人の説明によれば、昆虫は体が大きくなりすぎると呼吸困難に陥るので、部屋は二重扉の気密室になっており、内部の酸素は、火を近づけると爆発するくらい高濃度に保たれているということだった。

養蚕場の隣には、ジャガイモ、山芋、ネギ、大根、イチゴなどを栽培している畑が続いていた。このときは、ちょうど真冬だったが、いくつかの畑は、まるで雪が降ったように、白い泡で覆われている。ジャガイモや山芋は霜害に弱いので、気温の急低下を感じると、苗床泡吹（ナエドコアワフキ）という虫が大量の泡を吹いて、保温する仕組みになっているのだという。この虫は、もともとは農業害虫だった泡吹虫（アワフキムシ）の一種を、呪力によって変異させたものらしかった。

一方、畑の周囲には、常に、深紅色の甲冑（かっちゅう）を陽光に輝かせた巨大な蜂が飛び回っていた。

赤雀蜂（アカスズメバチ）は、凶暴な大雀蜂（オオスズメバチ）と獰猛な茶色雀蜂（チャイロスズメバチ）を先祖に創り出された剽悍無比な種族であり、あらゆる害虫を攻撃し補食するが、人畜には無害である。

そして、畑の向こう、農場で一番奥まった場所に、畜舎があった。

小学校の卒業間近まで、わたしたちが農場を見学させてもらえなかったのは、おそらくこの畜舎が理由だったのだろう。植物や昆虫とは違って、呪力によって改造された家畜、中でも、食肉生産工場と化した牛や豚、同じく牛乳製造器となった雌牛、効率よく羊毛を採取するため絨毯に近い形状になった羊などを見るのは、けっして気持ちのいいものではなかった。そのため、ようやく普通の形をした牛が並んでいる牛舎を見たときには、少しほっとした気分になっていた。

「何だ。ここは、普通の牛ばっかじゃないか」

こんなときの覚の無神経さには、むしろ感心する。

「そうでもないよ」

瞬が、牛舎の隅の方を指さした。

「あれ、袋牛（ふくろうし）じゃないかな？」

わたしたちは、ぎょっとして、そちらを注視した。

「ほんとだわ！　袋がある！」

叫んだのは、真理亜だった。

牛舎の隅で餌を食べている、茶色い牛の後ろ足の付け根には、たしかに、小さな風船のような白い膨らみがくっついていた。

「ああ。あのへんの牛は、全部、フクロ付きなんだよ」

名前は忘れてしまったが、案内役の体格のいい男の人が、少し困ったような表情で言った。あまり、触れたくない話題なのだろう。

「なんで、取ってしまわないんですか？」

相手の困惑には頓着せず、覚が訊いた。

「うーん……。酪農をやってる家には、昔から、フクロの付いた牛は免疫系が強くて病気にならないっていう言い伝えがあるからね。ここでは、それが本当かどうかを、研究してるんだ」

今まで見学した家畜の方が、はるかに異常な形状をしていたにもかかわらず、わたしたちがフクロウ

シに強い興味を示したのには、理由があったと思う。

　それを説明するには、わたしの手元にある、もう一冊の本を参照した方がいいだろう。『新生日本列島博物誌』と題されたこの書籍には、『秘』という焼き鏝の文字が押されている。これは、有害である可能性があるため慎重に管理すべきという、第三分類の書籍であることを示している。一部を抜粋してみよう。

　フクロウシは、かつては牛袋と呼ばれていたが、前述の経緯から、フクロウシという種名を得ることになった。偶然とはいえ、フクロムシと酷似した名前に落ち着いたことは興味深い。

　フクロムシというのは、フジツボに近い甲殻類の仲間だが、読んで名のごとく袋のような生き物で、一見したところでは、とてもエビ、カニの仲間には見えない。これは、モクズガニなど、ほかの甲殻類に寄生するために、特殊化した結果なのだ。

　フクロムシの雌は、キプリス幼生を経てカニの体に付着し、ケントロゴン幼生に変態後、体細胞の塊をカニの体内に注入する。細胞塊は、カニの体内で定着すると、鋭い針でカニの表皮を突き破り、袋状の体外部を形成する。体外部の中身は、ほとんどが卵巣で、肢や消化器官はない。一方、細胞塊の体内部は、植物の根のような根系を伸ばして、カニの体組織から養分を吸収する。

　フクロムシに寄生されたカニは、生殖能力を失うが、この現象を寄生去勢と呼ぶ。

（中略）

　一方、牛袋は、古くから、牛の睾丸や子宮、鼠蹊部にできる袋状の腫瘤として知られてきた。牛の健康に悪影響を及ぼさないことから良性の腫瘍と考えられ、見過ごされていたのだが、近年になって、これが袋状の独立した生物であり、しかも、フクロムシに類似した進化を遂げた、牛の一種であることが

わかってきた。

フクロウシの起源は不明であるが、母牛の胎内にいる双子の牛の一方が、もう片方の牛の体内に取り込まれて腫瘤化するという現象から、何らかの偶然を経て進化したという説が有力である。

フクロウシに寄生された雄牛では、睾丸に蓄えられた精液の中に、大量のフクロウシの精子が混入する。また、雌牛に寄生した場合は、交尾時に、子宮内でフクロウシの精子が解放される。いずれの場合も、宿主である牛が交尾すると、健康な仔牛と一緒に相当数のフクロウシの幼生が産み出されることになる。フクロウシの幼生は体長4センチほどで、眼も耳もない。長い二本の前肢とイモムシのような身体を持ち、尾部には昆虫の産卵管に似た針状の器官がある。

フクロウシの幼生は、誕生後、二本の前肢で歩き、牛の身体をよじ登ると、皮膚の薄い部分に尾部の針状の器官から細胞塊を注入する。これが体内で成長し、新たな袋状の生物、フクロウシになるわけである。幼生の寿命は短く、使命を果たし終えると、ほぼ二時間で干涸らびて死ぬという。

幼生もフクロウシ本体も、一見すると宿主の牛とは似ても似つかないが、系統的には、紛れもなく、哺乳類偶蹄目ウシ科の動物である。フクロウシの幼生の前肢の鉤爪は、牛の蹄のように二つに割れており、これは先祖を示す唯一の名残と考えられている。

ただし、フクロウシの精子は子宮内部で宿主である牛の卵子と合体するのだが、これを受精と見なしていいのか、あるいは、単に卵子の養分を奪っているだけなのかは、論争が続いている。

フクロウシが牛の仲間であることについては、とても興味深いフォークロア、あるいは都市伝説がある。フクロウシの幼生が、牛の体を登っている途中で捕獲されると、身をよじって、牛にそっくりな声で鳴くというのだ。それを聞いた他の牛は、ひどい

不安にかられて、いっせいに鳴き始めるらしい。筆者は、何度かフクロウシの幼生を観察する機会に恵まれたが、残念ながら、鳴き声を聞くまでには至っていない。

呪力という奇跡の能力を獲得して、野心と希望に燃えている生徒たちと、フクロウシという異物に取り憑かれて、黙って餌を食んでいる牛たちの姿が重なるというのは、奇妙なことだった。

それは、わたしたちが学校から家畜のように管理されていただけでなく、自らが背負っていたものの正体に、まったく無知であったことによるのかもしれない。

4

カードの家は、みるみる高くなっていった。

わたしは、ちらりと隣の覚の様子を見た。順調なようだ。すでに四層目にかかっている。覚は、わたしの視線に気がつくと、宙に浮かせたカードを得意げにくるくると回転させて見せた。ハートの4だった。

負けるもんかという気持ちが湧き上がるのを抑え、目の前にあるカードの家に、意識を集中する。トランプのカードを三角形に組み合わせてピラミッドを作るだけの単純な課題なのだが、やってみるとすぐに、呪力を鍛えるのに必要な要素をすべて含んでいることがわかった。

まずは、何といっても集中力である。カードの家は、ちょっとした接触や振動、微風によっても崩れてしまう。それに、空間と位置関係を正確に把握す

る能力も、要求される。さらに、ある程度カードの家が大きくなってからは、全体に目配りしつつ、細部にすばやく注意を振り向ける技術も必要になってくる。崩壊の前兆をいち早く摑み、危険な箇所をうまく修復しなければならないからだ。

ちなみに、鏑木肆星氏は、全人学級で最初にこの課題に挑んだとき、八十四枚のカードの位置を完全にイメージして、瞬時にピラミッドを立ち上げたという逸話が残っていたが、大人でも、そんなことができる人はほとんどいないはずなので、たぶん、誇張か作り話だろうと思う。

わたしたちは、和貴園にいたときも、手を使ってカードの家を作るという課題を何度もやらされていたが、まさか、将来、全人学級の能力開発教室でやることの伏線だったとは、予想もしていなかった。

「早季。もっと、ペースを上げろよ」

覚が、横から、よけいな口出しをする。

「今んとこ、いい勝負じゃない。あんたには負けないから、安心して」

「馬鹿だな。班の中で競争しても、しょうがないだろう。見ろよ。五班が、めちゃくちゃ調子いいんだ」

ちらりと視線をやると、たしかに、五班は、全員がほぼ同じくらいの進行状況で揃い、トップをひた走っているようだ。

「うちは、相変わらず、エースは絶好調なんだけどな」

覚の言う通り、瞬は、クラスの中で圧倒的な一番だった。すでに七段目まで積み上げて、一段目を拡張にかかっている。一度に二枚ずつのトランプを、まるで蝶が羽ばたくように操る瞬のやり方は、クラスで誰ひとり真似手がなく、思わず見とれてしまうくらい鮮やかだった。

「……でも、足を引っ張ってくれる人もいるからな」

覚は溜め息をついて、向こう側に視線を向けた。

覚の隣にいる真理亜は、スピードそのものは瞬に匹敵するほど速いのだが、カードの組み方が雑なため、すでに、二度にわたって小さな崩壊を招いていた。しかし、その都度素早く立ち直り、だいたい、わたしたちと同じくらいのところまで、追いついてきている。

真理亜の隣にいる守は、対照的に、あまりにも馬鹿丁寧な積み方だが、その分安定感は抜群で、クラスの中では、ぎりぎり平均点といっていいだろう。

問題は、一番向こうにいる麗子だった。いまだに、満足に一段目も完成していない有様なのだ。

麗子のカードを見ていると、こちらが息苦しくなってくる。和貴園でも、カードを積むのが下手な子ほど緊張で手が震えているのが、見ていてわかったが、呪力を使っていても、同じようにカードが震えてしまうものらしい。麗子は黄金の郷にある徳育園の出身なので、直接見たことはないが、たぶん、そのころから、カードの家の課題は苦手だったに違いない。

それにしても、麗子の下手糞さは、群を抜いていた。やっとの思いでカードを立てては、突き崩してしまい、ようやくまとまったかと思ったら、すべておじゃんになるという繰り返しだった。

「だめだ。見てたら、こっちまでおかしくなる」

覚は、頭を振ると、自分のカードに戻った。

「麗子がいる限り、うちの班の優勝は永遠にないな」

「何よ。麗子はいい子じゃない。ただ、ちょっと、調子が出ないだけだわ」

言いながら、自分でも嘘だとわかっていた。天野麗子は、自分の呪力をうまく使いこなせなかった。課題をこなそうとするたびに、必ず、意図とは異なった結果が現れるのだ。

前に、イメージの再現能力を養うためらしい、伝言ゲームによく似た課題をやったことがあった。班ごとに一列になって、最初の一人が油絵を見せられ

る。一番手になった子は、そのイメージを呪力で砂絵にして、次の子に見せる。次の子は、一瞬見ただけの砂絵を、できるだけ忠実に再現しようとする。これを繰り返し、最後の子が作った砂絵が元の絵に最も近いと認められた班の勝利になるのだ。

わたしたちの一班は、イメージの形成でも、伝達能力においても、抜群のものがあったと思う。ここでも、群を抜いていたのは瞬だった。瞬の作った砂絵は、感光紙に念写したかと思う見事さなのだ。それに続くのは真理亜だった。悔しいが、イメージの正確さでも、絵心でも、わたしは、とうてい彼女には敵わない。

覚は、一番手になるとまごついたが、砂絵から砂絵のコピーは、かなりうまくこなした。わたしは逆で、最初に油絵からイメージを作る方がずっと得意だった。守は、芸術家肌で、はっとするほど美しい砂絵を作ったが、正確性という点では今ひとつだったと思う。

六人の連携は、常に、麗子のところで、無惨なまでにぶち切られた。彼女の作る砂絵は、酷な言い方をすれば、瀕死の蟹が這いずった跡に等しく、どれほど注意深く観察し、想像力を駆使しても、何の絵にも見えなかった。一番手から最後まで、彼女をどこに置いた場合でも、一班の提出する絵は、でたらめな模様以上のものにはならなかったのだ。

カードの家作り選手権でも、やはり、彼女の遅れが決定的なようだった。全員の作った家のカードを合計して、最も多かった班の勝ちになるというルールだが、その前に、全員が、七段目までをクリアーしていることという条件が付いているからだ。

そして、今回、麗子は、さらに致命的な失敗をやらかした。

注意深くカードを置いていく競技で、どうやったらあんな事態が起こりうるのか、わたしには、いまだにわからない。ふいに、麗子のカードが弾かれたように飛んだかと思うと、一人おいて隣にある、真

理亜のカードの家を直撃したのだ。

彼女の家は、やや不安定ながらも、班で二番手の大きさにまで成長していた。それが、一瞬にして、平坦なカードの堆積に戻ってしまった。

「あ……ご、ごめんなさい！」

麗子の狼狽ぶりは、言うまでもない。真理亜は、しばらく呆然としていたが、すぐにまた、以前に倍するスピードで家を建て始めた。さすがに、崩壊慣れしているだけのことはある。だが、残り時間からすると、たとえ瞬と真理亜が二人がかりだったとしても、間に合わなかっただろう。案の定、真理亜の家が三段目に達する前に、無情の笛が鳴り、競技終了となってしまった。

「ごめんなさい。わたし、どうして、あんなことに……」

麗子は、その後もずっと、わたしたちに謝り続けた。

「いいのよ。気にしないで。どうせ、わたし、自分で崩しちゃってたと思うし」

真理亜は、笑顔で麗子をいたわったが、どことなく目は虚ろなままだった。

ここで、わたしが入った一班の紹介をしておこう。メンバーは、青沼瞬、秋月真理亜、朝比奈覚、天野麗子、伊東守、それにわたし渡辺早季の六人である。こうしてフルネームを書くとわかると思うのだが、班分けは基本的に五十音順で行われる。その原則からすると、わたしは五班に入れられるのが当然だったのだが、なぜか、一班に入るよう指示された。一班にはたまたま、わたしの親友が三人も揃っていたので、てっきり、わたしを早く全人学級に慣れさせようとする配慮なのだと思っていたのだが。

その日の放課後、わたしと真理亜、覚、瞬、守の五人は、全人学級の近くにある水路沿いの小径を歩いていた。けっして、麗子を仲間はずれにしたわけではない。この頃は、一班の六人が行動をともにす

ることが多かったのだが、あんな大失敗の後では、麗子もわたしたちと顔を合わせたくないだろうと思って、誰も誘わなかったのだ。

「早く、思いっきり、呪力を使ってみたいなあ」

覚が、伸びをしながら言った。それには、全員が同感だっただろう。わたしたちはまだ、呪力は仮免許中の身であり、町中で使うことは許されていない。全人学級においてすら、和貴園より長く退屈な学科の時間を堪え忍んだ後、最後の能力開発教室で、やっと呪力の封印を解くことを許されるのだ。

「覚が思いっきり呪力を使うときは、わたし、できればうんと遠くにいたい」

わたしが茶々を入れると、覚はむっとしたようだった。

「何でだよ？」

「別にぃ」

「僕はもう、完璧にコントロールできてるぜ。早季の方が、よっぽど危ないね」

「二人とも、すごくうまいと思うよ」

取りなすように、瞬が言った。

「瞬に言われても、素直に喜べないね」

覚が、足下にあった小石を水路とは反対側に蹴る。

「なんで？」

瞬は、本当に理由がわからないような顔だった。

「嘘じゃないよ。二人ともかなり上手だと思う。カードが、あさっての方向に飛んでいくようなこともないし」

「ああ……もう、その話はやめて」

真理亜が、溜め息をついて耳を塞いだ。

「ちぇっ。瞬は、無意識に僕らを見下してるんだよ。早季も、そう思うだろ？」

正直に言えば、わたしもそう思ったが、口をついて出た答えは違っていた。

「一緒にしないで。見下されてるのは、覚だけだから」

「何だよ。そりゃないだろ」

覚はぶつぶつ言っていたが、ふと口をつぐんだ。

「どうしたの?」

真理亜が訊くと、六、七十メートル先の水路際を指さす。

「ほら、あそこ」

つられて顔を向けると、二つの人影のようなものが見えた。汚物色をしたマントのような布で、全身をすっぽりと包んでいる。

「……バケネズミ?」

赤毛の房をいじりながら、真理亜がつぶやく。

「本当だ。何してるんだろ?」

瞬は、ひどく興味をそそられたようだった。わたしもまったく同様だった。実を言うと、このときまで、間近でバケネズミを見たことはなかったのだ。

「あんまり、見ない方がいいよ」

守が、遠慮がちに言う。彼は、ひどい癖っ毛のために、いつも頭が爆発しているように見えた。

「友愛園では、バケネズミを見ても、近づいたり、じろじろ見たりしちゃだめだって言われてたし。和貴園じゃ、言われなかったの?」

もちろん、言われていたが、言われれば言われるほど好奇心を刺激されて、見たくなるのが人情である。わたしたちは、ゆっくりとバケネズミたちの方に近づきながら、彼らの行動を注視した。

子供のころ、父から聞かされた話を思い出す。見たところ、バケネズミたちは、水路の清掃のため使役されているようだった。水路の曲がり角には、どうしても流れが淀む場所ができ、上流から流れてきたゴミなどが溜まってしまう。バケネズミたちは、長い竹竿の先に付いたたも網を使って、大量の落ち葉や木の枝などを、せっせと掬い上げている。

呪力を使えば、あっという間にできる作業だろうが、人間が意識を集中してやるには、あまりにも単調で面白みのない仕事であるに違いない。

「よく働くなあ」

「でも、あの手じゃ、網を持つのも、たいへんみたい」

真理亜が、同情的に言った。

「たしかに、そうだね。骨格が人間とは違うから、二本肢で立つだけでも、かなり無理してるみたいだし」

瞬の言う通り、マントで隠されていて顔こそ見えなかったが、竹竿を握っている二本の前肢は、いかにも細くて齧歯類じみているし、体重を支えている後肢も、ひどく心許ない様子だった。

「……見ない方がいいって」

守は、わたしたちとは少し離れて歩き、バケネズミたちからは露骨に顔を背けていた。

「あっと……だいじょうぶかな……あ、あ、危ない！」

バケネズミたちとわたしたちの距離が、二、三十メートルに迫ったとき、覚が叫んだ。一頭のバケネズミが、網いっぱいの木の葉を掬い上げようとしたのだが、水を含んだ木の葉が予想以上に重かったらしく、大きくふらつき、前につんのめったのだ。

もう一頭のバケネズミが気づいて、摑まえようとしたが、一瞬だけ遅かった。バランスを崩したバケネズミは、そのまま水路に転落した。

大きな水音がして、水飛沫が上がった。わたしたちは、思わず駆け寄った。

転落したバケネズミは、岸から一メートルほど下の水面で踠いている。水泳は得意ではないようだ。加えて、分厚い落ち葉の層と全身を覆うマントのために、ほとんど身動きが取れないでいる。

残された方のバケネズミは、パニックに陥ったように右往左往するばかりで、たも網をさしのべる知恵すら働かないようだ。

わたしは、深呼吸して、精神を集中した。

「早季。どうするつもり？」

真理亜が、驚いたようにわたしを見た。

「助ける」

「え？　どうやって？」

「バケネズミには、関わらない方がいいよ！」

　後ろから守が、怯えたような声で警告した。

「だいじょうぶ。あそこから持ち上げて、岸に載せるだけだから、楽勝よ」

「おい、まさか……」

「だめよ！　勝手に呪力を使うのは」

「僕も、やめた方がいいと思う」

　わたしは、全員に等しく腹を立てた。

「ほっといたら、死んじゃうわ！」

　心を静めて、他人には聞こえないような小声で、真言（マントラ）を唱える。

「でも、やっぱ、まずいよ」

「生きとし生けるものには慈悲の心を持って接せよって、教えられたでしょう？」

　意識を、水面を浮き沈みするバケネズミに集中する。厄介なのは、しだいに沈んでいる時間の方が長くなり、枯れ葉などのゴミのせいで、バケネズミの全体の大きさがきちんと把握できないことだった。

「……まわりの葉っぱごと、持ち上げちゃえばいいよ」

　わたしの逡巡を察して、瞬が的確な助言をしてくれた。感謝のまなざしを返してから、わたしは、そのとおりに実行してみた。

　周囲の喧噪が、遠ざかる。

　ばらばらに崩壊しそうになるゴミを、意識の力でまとめ上げ、上昇するイメージを与えると、巨大な塊が表面張力を振り切り、水面から宙に浮き上がった。

　塊の中にあった水が、幾筋もの水流となって激しく水面を叩く。意識の網をすり抜けた木の葉が、ぽたぽたと落下していった。ゴミのちょうど真ん中あたりにバケネズミがいるはずだったが、直接、目では確認できない。

　ゴミの塊を、ゆっくりと岸の方へ誘導する。みな、後ずさりして、場所を空けた。

道の上に、そっとゴミを降ろした。

ほっとしたことに、バケネズミは生きていた。

ゴミの中でじたばたと足掻き、うつぶせの姿勢になった。低い声で唸り、咳き込んでは泡の混じった水を吐く。こうして間近で見ると、けっこう大きい。立ち上がれば、たぶん、一メートル以上あるだろう。

「すごいね。まるで大きな網ですくったみたいに、完璧な浮揚だったよ」

「ううん。アドバイスのおかげ」

瞬が褒めてくれたのもつかの間、覚が噛みついた。

「どうするんだよ？　こんな違反、学校に見つかったら……」

「見つからなきゃ、いいじゃない」

「見つからなきゃ？　もし見つかったらって、言ってんだよ」

真理亜が、助け船を出してくれた。

「みんな、このことは、絶対に秘密にしましょう。早季のためよ。いいわね？」

「いいよ」

瞬が、まるでノートを貸してくれと言われたかのように、安請け合いする。

「覚も、いいわね？」

「そりゃ、言いつけたりはしないよ。でも、バレないかな？」

「誰にも見られてなかったみたいだし、みんなが黙ってれば、大丈夫よ」

真理亜は、後ろを振り返る。

「守は？」

「何のこと？」

「何って……」

「今日は、何も変わったことはなかった。僕は何も見てない。バケネズミなんかに、全然、関わりは持ってない」

「よしよし。いい子ね」

「でも、こいつはどうだ？」

覚は、鼻の頭に皺を寄せて、助けたバケネズミを見下ろした。

「こいつが、誰かに言ったりしないかな？」

「言ったり？　バケネズミって、喋れるのかな？」

瞬は、興味津々という顔だった。

わたしは、いっこうに身体を起こそうとしないバケネズミに近づいた。もしかすると、どこかを痛めたのだろうか。だが、もう一頭の方を見ると、やはり、同じ姿勢で平伏している。

バケネズミたちが、ひどく人間を怖れていることに、ようやく気がついた。

「ねえ。わたしが、あなたを助けてあげたのよ。わかる？」

わたしは、できるだけ優しい調子で声をかけた。

「バケネズミに、話しかけない方がいいよ！」

守が、離れた場所から、押し殺したような声で叫ぶ。

「ねえ、聞こえてる？」

濡れ鼠になったバケネズミは、マントのフードに包まれた頭を、うなずくように上下させた。あきらかに四つん這いの方が楽らしく、そのままの姿勢で近づいてきて、わたしの靴に接吻するような動作をした。

「このことは、内緒よ。わかる？　今日あったことは、誰にも言わないで」

バケネズミは、再びうなずいた。どうやら、充分に意思は通じているらしい。ふと、どんな顔つきをしているのか見たいという、好奇心が生まれた。

「ねえ。こっち、見てごらん」

わたしは、軽く手を叩いた。

「早季。ちょっと、やめなさいよ」

さすがに、真理亜も呆れたような声を出した。

「だから、だめだって……バケネズミは」

守の声は、さっき以上に遠くから聞こえた。

「わたしの言うこと、わかる？　顔を上げてみて」

バケネズミは、おずおずと頭を上げた。

何となく、野ネズミのように愛嬌のある顔を想像していたわたしは、衝撃を受けた。

フードの下から見上げたのは、それまでに見たことのある生き物の中で、最も醜い顔貌だった。鼻面は寸が詰まっており、ネズミというよりむしろ豚を思わせる。細かい産毛の生えた白い皮膚は、だぶだぶに弛んで幾重もの皺ができており、その奥で小さなビーズのような目が光っている。口唇の中央部が大きく切れ込んでいるために、黄色い鑿（のみ）のような門歯は、鼻から直接生えているように見えた。

「ア★ガト、アイガト。キキキキキ。カカカカカ★ssh……サマ。カ・ヴィー・サマ」

いきなり、バケネズミが囀（さえず）るような甲高い声で話し始めたので、わたしは、固まってしまった。

「喋ってる……」

真理亜が、つぶやく。ほかの三人は、啞然としていた。

「君は、何ていう名前？」

わたしが訊くと、バケネズミは、歌うような調子で「§@★#◎&∈∂Å♪」と鳴いた。口角から、白い泡と涎を垂れ流している。名前はわかったが、日本語で表記することも、記憶することも、とうてい不可能だった。

「こいつが告げ口をする心配は、しなくてもいいみたいだな」

覚が、ほっとしたように言う。

「何言ってるか、誰にもわかるわけないもんな」

少し緊張が弛み、笑いが起きた。だが、わたしは、バケネズミの顔をしげしげと見ているうちに、なぜか悪寒のようなものを感じていた。

それは、心の最深部に隠されていた禁忌に触れるような感覚だった。

「名前は使えないけど、僕らの方では、一応、こいつを識別できるようにしておいたほうがいいな」

瞬が、考え深げに言う。

「入れ墨を見たらいいよ」

　意外にも、一番遠くにいた守から、有益な意見が寄せられた。

「入れ墨？　どこにあるの？」

「額のへんらしいよ。コロニーと個体を識別する番号が彫ってあるって」

　守は、顔を背けながら言った。

　わたしは、おっかなびっくりで、バケネズミの頭部を覆っているフードに手をかけた。そっと頭を剝き出しにしたが、バケネズミは、よく馴れた大型犬のように、大人しくしている。

「あった」

　前後に長い頭の額と頭頂の間あたりに、『木619』という文字が、青い染料で入れ墨されていた。

「この文字は、何かしら？」

「きっと、バケネズミのコロニーの印だ」

　瞬が言う。

　バケネズミは、他にあまり類を見ない、三つの特徴を持った生き物だった。

　第一に、その名が示すとおり、外見は毛のないネズミに似ているのだが、体長は六十センチから一メートルに達し、二本脚で直立すると、一・二メートルから一・四メートル、特に巨大なものは、ほとんど人間並みの身長になった。

　第二に、歴（れっき）とした哺乳類でありながら、アリやハチのような真社会性を持ち、女王を中心としたコロニーを作って生活している。これは、先祖とされている東アフリカ原産のハダカデバネズミから受け継いだ特色だった。コロニーは、小規模なものでも二、三百、大きなコロニーになると、数千から一万に及ぶ働き手（ワーカー）を抱えているらしい。

　第三に、バケネズミの智能は、イルカやチンパンジーより遙かに高く、ほとんど人間並みと言ってもいいほどだった。人間に忠誠を誓って『文明化された』コロニーは、貢ぎ物と役務を提供する代わりに、生存を保障されている。そうしたコロニーに

は、漢字の名前（通常は虫偏の付いた）が与えられることになっていた。

たとえば、神栖66町の土木作業などに頻繁に駆り出され、最大の勢力を誇っていたのは、『大雀蜂（オオスズメバチ）』コロニーだった。そのほか、『黒山蟻（クロヤマアリ）』、『盲虻（メクラアブ）』、『鬼蜻蜓（オニヤンマ）』、『鼈甲蜂（ベッコウバチ）』、『塩屋虻（シオヤアブ）』、『大鍬形（オオクワガタ）』、『竈馬（カマドウマ）』、『足長蜂（アシナガバチ）』、『筬虫（オサムシ）』、『斑猫（ハンミョウ）』、『木蠹蛾（ボクトウガ）』、『源五郎（ゲンゴロウ）』、『蟋蟀（コオロギ）』、『青頭蜈蚣（アオズムカデ）』、『大蟷螂（オオカマキリ）』、『浮塵子（ウンカ）』、『螟蛾（メイガ）』、『火取蛾（ヒトリガ）』、『宿蠅（ヤドリバエ）』、『馬陸（ヤスデ）』、『女郎蜘蛛（ジョロウグモ）』、『首切螽斯（クビキリギス）』などといったコロニーが、当時、町の周囲に点在していたはずである。

「『木』っていうのは、たぶん、『木蠹蛾』のことだ」

瞬が言った。

「全部書いたんじゃ、画数が多すぎるし、バケネズミには見分けられないからね」

「じゃあ、こいつは、木蠹蛾コロニーのワーカーか」

木蠹蛾コロニーは、全部で二百頭ほどの、弱小コロニーのひとつだった。

バケネズミは、覚の言葉に、敏感に反応した。

「ヴォ★トガ。ヴォクトーガー。チイチイ。コ★ニ……Ｇｒｒｒｒ」

そう言うと、急に寒さを感じだしたように、小刻みに身体を震わせ始める。

「寒そうね」

「びしょ濡れだし、バケネズミは、穴の中で暮らしてるから、もともと体温が低いんだと思うよ」

瞬が言う。それで、わたしたちは、バケネズミを解放してやった。二頭は、全身を地面に投げ出して平たくなる五体投地の姿勢で、わたしたちを見送った。途中で一度振り返ったときも、彼らは、ずっと平伏したままだった。

「やっぱり、フンコロガシ方式しか、ないんじゃない？」

真理亜が言った。バケネズミを救った日から、ひ

と月ほど後のことである。

「平凡すぎるよ」

覚が異議を唱える。

「どの班でも、最初に考えつきそうだし、球の方向が定まらないんじゃないかな」

わたしたちは、机の上に載せられた大きな粘土の塊を見ながら、討議を重ねていた。

「じゃあ、大きな輪っかを作って、球をその中に入れれば？　それで、輪っかを左右に回転させながら進むの。それだと、球の方向もコントロールできるでしょう？」

わたしは、机に座り、足をぶらぶらさせながら発言した。思いつきの提案だったが、案外、悪くないのではという気がしていた。

「それだと、途中で、輪っかの強度が足りなくなるんじゃないか？　球が輪っかを乗りこえちゃうかもしれないし」

覚が、またもや難癖をつけてくる。わたしがむきになって反論しようとしかけたとき、瞬が、より重要な指摘をした。

「輪っかを全部接地しながら回すのは、難しいんじゃないかな。一部でも浮かせたら、反則を取られるかもしれないし」

「……そっか」

わたしは、素直に引き下がった。

「いくら頭で考えても、らちが明かないんじゃない？　とりあえず、粘土を割ってみない？　そうしたら、押し子にどのくらいの重量を割けるか、だいたいの感覚がつかめると思うし」

真理亜の提案で、とりあえず、半分を押し子に使い、残りの半分を、攻め手に使うと想定して、粘土を真っ二つに分けてみた。

「これだけか」

覚が、がっかりしたように言った。

「球の重さは、どのくらいあるのかな？」

真理亜の問いに、瞬が腕組みをした。

「あれ、大理石だからな。たぶん、十キロ以上はあると思う」

「粘土全部合わせたのと、同じくらいだろ。つまり、押し子は、せいぜい、その半分ってことだな」

覚が唸る。

「でも、粘土は、焼くか乾燥させるかしたら、ずっと軽くなるでしょう?」

「そうだ！　だから、最終的には、押し子は球の三分の一くらいの重さになるね」

今度は、瞬がわたしの意見に賛意を示してくれたので、全員が難しい顔をしていたのに、わたし一人、笑みを浮かべていたはずだ。

「じゃあ、やっぱり、後ろから押すしかないか」

守が、ぼそりとつぶやいた。

「さっきから、堂々巡りね」

搬球（はんきゅう）トーナメントが行われるのは、五日後だった。つまり、たった五日で、各班は、基本的な戦略を決定し、粘土から押し子と攻め手、守り手を製作し、さらに、自在に操れるようになるまで、練習を積んでおかなければならないのだ。

ここで、搬球競技のルールを説明しておこう。二つの班が搬球側と妨害側に分かれ、搬球側は、大きな大理石の球を転がしてフィールドを運搬し、ゴールの穴に落とし込めば得点となる。妨害側は、阻止に努める。これを、それぞれ一回ずつ、十分の持ち時間で行い、ともに得点した場合は、得点するまでの時間の短かった班の勝利となる。ともに無得点に終わった場合には、双方が搬球と妨害を同時に行い、先に得点した方が勝ちになる総力戦に突入する。

競技は終始、呪力のみを使って行われるが、大きな縛りがある。球やフィールドに、直接呪力を及ぼしてはならないのだ。わたしたちが操ってもよいのは、与えられた粘土で創った駒、つまり搬球側になったときは押し子と攻め手、妨害側では守り手だけである。しかも、駒をフィールドから浮遊させるこ

とは禁止されていた。駒を空中に浮かべて球を押せば、ワンクッションおいただけで、球そのものを押しているのと、あまり変わらなくなるからだ。

学校の裏庭に作られた、幅二メートル、長さ十メートルほどのフィールドには、表面に細かい砂が敷き詰められ、ところどころに芝草などが配置されているので、押し子を使って球をまっすぐに転がすだけでも、かなりの集中力が必要とされる。ゴールになる穴は、試合ごとに妨害側が好きな場所にあけるのだが、それ以外にフィールドに手を加える行為——たとえば、落とし穴を掘ったり、山を作ったりすることは禁じられていた。

また、駒は、決められた重量以内なら、どんな形のものを何体作ろうと自由なのだが、あまり数が多いと、コントロールは難しくなる。

もう一つ、重要な禁止事項があった。相手の押し子は、直接攻撃してはならない。さもないと、押し子は、相手の守り手から集中攻撃を浴びることになり、開始早々に破壊されてしまうからだ。ただし、攻撃を免れるのは、あらかじめ押し子として申告してある一体だけである。したがって、複数の押し子を使うと、二体目以降は容赦ない攻撃に曝されるため、どの班も、たいてい押し子は一体だけだった。

「じゃあ、押し子は、こんな形でいいかな?」

瞬が言った。額に、少し汗が光っている。全員が、ああでもない、こうでもないと勝手なことを言うのに合わせて、自由自在に粘土を変形させていく芸当は、瞬以外にはとうてい無理だっただろう。全体の形状はずんぐりした円錐形で、フィールドを滑走するように、底部は船底のような浅いV字形になっている。球の左右の動きをコントロールするため、正面には、百二十度の角度で広げた二本のアームを付けたので、結果的に、両手を広げた人間を思わせる形になった。

「いいんじゃない。シンプルだけど、なかなか、かっこいいわ」

真理亜が評した。

「そうすると、あとは攻め手だな。瞬は押し子に専念して、残りを全員で分担しないと」

いつのまにか、覚が、議事進行を仕切っている。

「第一班の打ち合わせは、進んでるかな？」

遠藤先生が、にこにこしながら顔を出した。丸顔で、髪と顎髭が切れ目なく顔を縁取っているため、太陽王という変なあだ名がついている。

「やっと、押し子の形だけ、決まったとこなんです」

覚が、自慢げに、できたばかりのモデルを見せる。

「そう。こんな短時間で、よく、ここまでできたね」

「ええ。もう、これで硬化させようと思います」

「押し子は、誰が動かすの？」

「瞬です」

「やっぱり、そう」

遠藤先生は、大きくうなずく。

「じゃあ、今度は、攻め手だ。瞬を除く四人で、うまく分担するんだね」

「はい！」

わたしたちは、元気よく返事をした。

その後、侃々諤々の応酬があってから、攻め手は、五体作ることにした。瞬が押し子と攻め手一体を同時に操り、残りが一人一体ずつ受け持つ。

このとき、誰の頭にも、一班にはもう一人メンバーがいたんじゃないかという考えは、浮かびもしなかった。

一回戦の相手は、五班だった。かなり、籤運に恵まれたかもしれない。下馬評では、全体的に駒の完成度の高い三班が断トツの優勝候補で、対抗が、わが一班と、曲者ぶりが際立つ二班だろうと目されていたからだ。

じゃんけんの結果、まず、こちらが搬球側になった。緒戦とあって、ひどく緊張しながら、わたした

ちは五班の守り手に目を走らせた。壁形の守り手が六体、フィールド全体をカバーしてこちらの進路を塞ごうと、小刻みに左右に動いている。

　わたしたち五人は、円陣を組み、それぞれ、心の中で真言（マントラ）を唱えた。

「思った通り、一番平凡な戦略ね」

　真理亜が、嬉しそうに囁く。

「これなら、三十秒もかからないな」

　覚はすでに、優勝したかのように、ほくそ笑んでいた。

「中央突破しよう」

　瞬が、小声で全員に伝達する。

「こんな防御なら、どこから行っても同じだし、フィールドは、真ん中あたりが一番平坦みたいだ」

　こちらの押し子と攻め手がフィールドに登場すると、五班の面々の表情には、あきらかな動揺が走るのが見えた。

　アームを掲げた押し子が、ゆっくりとフィールドを滑り、球の後ろに陣取った。

　それに続き、五体の攻め手が整然と散開する。三体は、球の前方で三角形の位置取りを決め、二体は、球の両側面を守った。

　先鋒の三体は幅の広い三角錐で、尖った先端を前方に向け、真ん中の稜で接地しているため、紙飛行機に似た形状だった。側面をガードする二体は、重心の低いひしゃげた円柱で、表面にはたくさんの突起がある。突起には、実はさほどの意味はないのだが、なんとなく頑丈そうに見せる効果はあった。

「お互いに、フェアプレイで。最後まで協力し、全力を尽くして。いいね？」

　太陽王が、おごそかに宣言し、試合の開始を告げる笛を吹いた。

　先鋒の三体の攻め手がゆっくりと前進する。押し子が徐々に力を加えているが、重い球は、まだ動かない。動き始めまでが、たいへんなのだ。ここで焦って力をかけすぎると、押し子が破損してしまうこ

ともある。まあ、瞬に限っては、そんなへまをすることはありえなかったが。

守り手の六体の壁は、前に出てくる勇気もなく、すっかり気をのまれたように、左右に無駄な動きを続けているだけである。

動き出した。球が、ゆっくりと回転し、前へと進んでいく。速度はどんどん速くなり、フィールドを驀進し始めた。それに合わせて、先鋒の三体が中央に突っ込んでいく。

ようやくこちらの意図に気づいた五班は、真ん中に守り手を集めようとしたが、すでに間に合わなかった。鎧袖一触とは、このことだろう。三体の先鋒は、より重いはずの相手の壁に衝突し、いとも簡単に蹴散らした。そのすぐ後ろを、大理石の球が地響きを立てて通り過ぎる。わたしは、先鋒の左後ろを受け持っていたのだが、相手とのコンタクトは、ほんの一瞬だけだった。

いったん防御線を突破されてしまうと、五班は、すでになすすべがなかった。大理石の球は、一直線にゴールの穴に向かい、痛快な音を立てて落ち込んだ。所要時間は、たったの二十六秒。最も楽観的だった覚の予想すら上回っていた。

「いくら何でも、もうちょっと頑張ってくれないと、張り合いがないな」

覚が言う。

「ほんと。向こうの守り手なんて、完全に、いないのと同じだったよ」

ふだん無口な守まで、同調した。あまり油断していると、まずいことになるかもしれない。

「まだ、向こうの攻撃が残ってるわよ」

わたしは、すでに弛緩しかけている雰囲気を、懸命になって引き締めようとした。

「まだ、勝ったわけじゃないんだから」

「勝ったも同然だろう？　どう考えても、二十六秒以内にゴールされるなんて、考えられないよ」

覚は、依然、にやにやしていた。

「でも、何が起こるかわからないからな。油断は禁物だよ」

瞬が言い、わたしたちは、守り手を五体ともフィールドに運び込んだ。

五班の用意した駒を見たとき、わたしたちは唖然とした。

守り手の方が、あまりにも平凡で芸がなかったので、てっきり搬球側の駒も同じだろうと、高をくくっていたのだが、とんでもない。敵は、一か八かの奇策に打って出たのだった。

「どういうこと？　あれ？」

真理亜が、低い声で言う。

「六体とも、同じ形してるじゃない」

たしかに、五班の駒は、全部、全面に撞木（しゅもく）のようなアームが付いた直方体だった。

「あいつら、六体とも、押し子にしたんだ」

瞬が、つぶやく。

ここで、太陽王が、そっくりな六体の駒のうち、一体に筆で赤い二重丸の印を付けた。どうやら、それが、唯一、攻撃してはいけない押し子ということらしい。

「でも、二体目以降の押し子は、攻撃してもいいんでしょう？　あれだと、守ってくれる駒がなくなっちゃうのに……」

わたしが訊ねると、覚が答えた。

「押し子が、一体や二体壊されても、いいんだろう。六体で思いっきり押して、守り手は球の勢いで吹っ飛ばすつもりなんだ」

そのとおりだった。開始の笛が鳴ったとたん、球は動きだし、みるみる加速していく。

こちらの守り手のうち四体は、ドアストッパーのような形をしており、球の下に潜り込んでくさびになり、動きを止めるか、方向を狂わせようというもくろみだったが、二体は、相手の球が速すぎて、下に入る前に弾き飛ばされてしまった。

残る二体が、側面から赤い印のない押し子を攻撃

すると、一体の押し子は見事にひっくり返った。だが、残る五体の押し子の勢いは、衰えない。

「まずい。このままじゃ……」

覚が叫ぶ。たしかに、向こうの球の速度は、さっきのこちらの球よりはるかに速いので、このままゴールされたら、タイムで負けてしまうだろう。

わがチームの切り札となる五体目が、フィールドの中央に出た。球の進路の延長線上にうまく照準を合わせている。

「頼むぞ。瞬！」

覚が叫ぶ。

五体目は、分厚い円盤形だった。接地している面の中心に、大きな突起が一つだけある。相手の球が乗り上げると、円盤がくるっと回転して、球の進路を百八十度変えてしまうというのが、瞬の天才的なアイデアだった。

球が、猛烈な勢いで接近してくる。だが、瞬なら、一瞬のタイミングをつかんで円盤を回せるはずだった。

ところが、球のスピードが速すぎたことが、思わぬ現象を引き起こした。球が、地面の微妙な凹凸にぶつかって、小さくジャンプしたのだ。

球が円盤を飛び越えないよう、瞬は、すかさず円盤を後退させる。

大理石が円盤にぶつかった瞬間、固い物体が砕けるような嫌な音がした。円盤はすばやく回転したが、球が円盤の上で再度跳ねたために、進路は、ほとんど変えることができなかった。

「もうだめだ……」

覚が、あきらめたようにつぶやく。

このままの速度で球がゴールすれば、二十六秒どころか、ものの十六秒ほどしかかからないだろう。

わたしが目を伏せたとき、真理亜が叫んだ。

「あ。あ！　何、あれ？」

顔を上げると、思わぬ光景が目に飛び込んできた。球にあまりにも勢いがつきすぎたため、五班

は、完全にコントロール不能に陥ってしまったのだ。

押し子の一つが、回転する球に巻き上げられて、すぐ前に落ち、そのまま球に押し潰されてしまう。

片側を受け持っていた押し子の力が消えたために、球を押す力がアンバランスになり、球は、大きく横にそれていった。

もはや、押しとどめることなど、とうてい不可能だった。球は、すごい勢いでゴールの横を通過し、さらに転がり続けて、ついには、フィールドの外へと飛び出してしまった。

「五班は、競技続行不可能と認めて、一班の勝ちとします」

太陽王の声が、本当に天から聞こえてきたと思ったのは、これが初めてだった。

「やった」

「一回戦、突破！」

「五班は自滅だな。だいたい、あんな戦術が、むちゃくちゃなんだよ」

わたしたちは、手に手を取って喜び合ったが、ふと、瞬が一人、その輪から外れていることに気がついた。

「どうしたの？」

わたしが訊ねると、瞬は、五体目の守り手である円盤を手に、浮かない顔で振り向いた。

「まずいよ。ひびが入っちゃった」

「ええ？」

みな、瞬のまわりに集まってきた。円盤は特に高温で焼成してあるので、強度に問題はないはずだった。重い球が乗り上げ、そのまま水平に回転したとしても、充分耐え抜いたことだろう。だが、さすがに、大理石の球がジャンプして、上に落ちてくることまでは、予想できなかった。

「じゃあ、あと、一試合か二試合かわからないけど、これは使えないってこと？」

真理亜が、訊く。

「うん。たぶん、今度は、球が乗り上げただけで完全に割れると思う。水平に回して進路を変えるなんていう技は、まず無理だ」

「じゃあ、今度こそ、四体で戦わなきゃならないのか……」

　わたしたちは、善後策を話し合ったが、急にいい知恵が出るということもなく、相手が決まってから、再度考えるということにした。

　五つの班は、トーナメントには数が半端である。全人学級で採られた方法は、こういうものだった。まず、籤で二チームずつが対戦する。それぞれの勝者がまた籤を引き、一方は、そのまま決勝戦に進める。もう片方が、一回戦をシードされていたチームと戦い、その勝者が決勝の相手になるというものだった。

　したがって、籤運しだいで、二勝すれば優勝ということもあるし、三連勝しなくてはならない場合もあるのだ。

　わたしたちは、とりあえず、三班と四班の試合を観戦した。三班が、前評判に違わない強さを、攻守に見せつけた試合だった。

　三班の押し子は、複雑な曲面を持った馬蹄形で、ほぼ完璧に球をコントロールしていた。攻め手は、わたしたちのものと似てはいたが、より洗練されているような気がした。

　さらに驚いたのは、守り手の戦略だった。二体の小さなこけしの間に、生のままの紐状の粘土が張り渡してある。しかも、粘土の紐は表面を濡らして、粘着力を高めてあった。紐が地面に付かないようにしながら、二体のこけしは球の進路に紐を縦に置き、ちぎれて離脱する。すると、上を通る球の回転により、紐が自然にからみつくのだ。紐状の粘土がからんだ球は、まっすぐ進まなくなってしまう。最終的にはゴールできたとしても、大幅にタイムをロスしてしまうのである。

「よく、あんな手を考えついたな」

覚が、いまいましげに言う。

「粘土は硬くして使うっていう、思いこみにとらわれてたよ」

「ある程度、相手に時間を使わせれば、勝てるっていう自信があるみたいね」

「決勝の相手は、まちがいなく、三班ね」

真理亜も、珍しく脱帽という表情だった。

三班は、二十二秒対七分五十九秒という記録的大差で四班を降（くだ）した。続いて、わたしたちと三班の間で籤を引いたが、ほっとしたことに、わたしたちは、そのまま決勝進出が確定したのだった。

「まあ、ラッキーだったな」

「この間に、決勝をどう戦うか考えよう」

「円盤は、直せない？」

「僕の呪力では、まだ、高温で焼いた陶器を元通りくっつけるのは、無理だよ。せいぜい、応急処置くらいだな」

瞬とわたし、覚の三人が、戦略の練り直しをやって、真理亜と守が、三班と二班の準決勝を観戦することになった。

「とりあえず、円盤のひび割れを、くっつけてみよう」

「補修用に、粘土はもらえないの？」

わたしが質問すると、覚が太陽王のところへ訊きに行った。結果は、現在ある駒を放棄すれば、それと同じ重さの粘土がもらえるということだった。だが、放棄する駒は乾燥重量なのに対して、もらえるのは生の粘土なので、実質的には、かなり目減りしてしまう。

「しかたがないな。さっき、くさび形の守り手も一つ大破してるから、その分だけでも、粘土をもらおう」

円盤のひび割れ部分に粘土を塗って、瞬が念を送って硬化させた。余った粘土は、どう使おうか。手にとって伸ばしたり丸めたりしているうちに、紙のようにぺらぺらの円盤ができた。

待てよ。これは、もしかすると……。

「早季。遊ぶなよ」

覚が、仏頂面で声をかけた。

「ねえ、もしかしたら、これで三班に勝てるかもしれない」

「何言ってるんだよ?」

円盤の補修を終えた瞬が、こちらにつぶらな瞳を向けた。

「何か、思いついたの?」

わたしは、勢い込んでうなずくと、たった今頭に浮かんだアイデアについて、二人に説明した。

「すごい。天才的だよ」

瞬が絶賛してくれたので、わたしは、耳まで赤くなった。

「うーん。まあ、あまりにもせこいアイデアだけど、それだけにきっと、向こうも予想外だろうな」

覚は、相変わらず、可能な限りわたしを貶（おとし）めつつ、それでもアイデアだけは評価するような口ぶりだった。

「覚。やろうよ。それしかないよ」

「そうだな」

「時間がないわ」

わたしたちは、手分けして、新たに得た粘土を薄く引き延ばし、円盤のまわりに継ぎ足していった。全員が同じ対象にかかるときは、呪力を使うことはできないので、必然的に手作業になる。時間ぎりぎりになって、ようやく終わろうとしていたとき、真理亜と守が部屋に飛び込んできた。

「たいへんよ！　今、準決勝が終わったわ」

「どうせ、相手は、三班だろ?　でも、こっちも、何とか戦える方法を見つけたぜ」

覚が、まるで自分の手柄のように言う。

「それが、違うのよ」

真理亜は、言った。

「三班は、負けちゃったの。決勝の相手は、二班よ！」

5

わたしたちが裏庭に戻る途中で、ぞろぞろと帰ってくる三班の連中に出くわした。

「決勝の相手は、絶対、三班だと思ってたのに」

わたしは、押し子を抱えた弘に話しかけた。

「こっちが、優勢だったんだ」

弘は悔しそうに言う。

「あんな事故さえなければ……」

弘は、馬蹄形の押し子をわたしに見えるように掲げた。地面と擦れ合う底部が傷だらけなのはあたりまえだが、側面が大きく剝がれ落ちていた。

「どうしたの？」

「事故だったんだけど、向こうの守り手と、思いっきりぶつかって」

弘は、押し子の傷ついた部分を愛おしそうに撫でさすった。

「そのとき、球が反対方向に転がっちゃって、元に戻すのに一分以上かかったんだ」

「それで、結局、一分三十六秒対一分四十一秒で、二班の勝ちになったのよ。ひどいと思わない？」

クラスで一番大柄な美鈴が、弘の肩に手をかけて息巻く。

「ぶつかってきた向こうが、悪いのに」

「しかたがないよ。事故なんだから」

弘の声には、言葉とは裏腹の感情がこもっていた。

「気をつけろよ」

別れ際に、弘が言う。

「決勝戦でも、何が起きるかわからないからな」

試合前からそんな話を聞かされていたので、いくばくかの先入観があったことは否定できない。わたしたちは、純粋な競技以外の部分に気を取られていた。そのために、先攻で現れた二班の押し子を見たときには、すっかり仰天してしまった。

「あれ、車輪がついてるのか？」

覚は、とても信じられないというように、つぶやいた。

「うちも検討したけど、車軸がとても保たないから、やめたんだよな。おかしいな。粘土以外は、使ってないはずだろう？」

瞬は、目を細めて凝視していた。

「いや、よく見てみろよ。車輪じゃなくて、球だ」

二班の押し子は、本体の下に深い窪みがあって、球が一個嵌っているのだった。外から見えるのは球のちょうど半分くらいだから、車輪のように本体に固定されているわけではないようだ。

「まるで、球乗りみたいだよな。ちょっとの衝撃で、外れるんじゃないか？」

覚が、冷ややかな口ぶりで言った。

「どうせなら、もっと深く嵌めておけば、取れないのに」

「いや、球車輪は、深く嵌めれば嵌めるほど、砂を巻き込んだら悲惨なことになるんだ。だけど、あれだってたぶん、すぐに動かなくなると思うよ」

瞬も疑問を口にする。

「砂を巻き込んで動かなくなったら、ふつうに滑走させるつもりなんじゃない？　出だし、球車輪が動いてるうちに、こっちの防御網を突破するつもりなのかも」

真理亜が、冷静に分析する。

わたしたちの疑問は、試合が始まると、すぐに解けた。

「二人がかり……！」

わたしは、思わず叫んでしまった。二班の両エースである、良と明の視線の方向を見れば、二人とも押し子に集中しているのがわかる。

たぶん、良が、本体をコントロールして球を押し、明は、球車輪が外れないように抑えながら、砂や草などを吹き飛ばして、異物が挟まるのを防止しているのだろう。狭い範囲に二人の呪力が交錯する

のは危険なことだし、押し子だけに二人がかかりっきりになるのは、もったいないようだが、そこには、充分すぎるほどのメリットもあった。

球車輪は地面との摩擦が少ないため、呪力を、押し子から球にスムーズに伝えられる。二班の球は、一回戦で暴走した五班に迫るスピードで進みながら、しっかりコントロールも保っていたのだ。

こちらの守り手は、必死に相手の速度についていこうとしたが、敵の押し子は自在に左右に動くジグザグ走行で、あっさり間を抜いてしまった。

反転して追いかけようとした覚の守り手は、もたついた守の守り手に衝突して、フィールドの外に飛び出してしまった。

「やられたわ」

わたしは、溜め息をついて、瞬に言った。

「そうだね。あの押し子は、見事だった。あとは、早季のアイデアだけが頼りだよ」

わたしたちは、全員、それ以上守り手を操ろうともせずに、ただ突っ立って戦況を眺めていた。その様を見て、二班の連中は、勝利を確信したらしい。意気揚々と押し子を進めたが、突然、ストップした。あきらかに、とまどっている。

「どうなってるんだよ？　ゴールがないじゃないか？」

二班の学が、こっちへ振り返って叫んだ。

「ゴールはあるよ」

瞬が、澄まして答える。

「ある？　どこに？」

「敵に教える筋合いは、ないと思うけどな」

覚が嘲弄した。

「おい。ちょっと、時間を止めろよ。おかしいぞ！」

学は、口を尖らせて叫ぶ。

「だめよ。向こうが勝手なこと言っても、絶対に、時間は止めないでね」

真理亜は、タイムキーパーの四班の生徒に釘を刺

す。

「冗談じゃないよ！　ゴールがないのに、どうやって試合を続けるんだ？」

「だから、あるって」

いきり立つ学に対して、瞬は、あくまでも落ち着いていた。

「探せよ。ただし、そっちの時間を使って」

覚が、にやにやしながら言う。味方のわたしが見てもどうかと思うくらいだから、敵から見れば、さぞかし憎々しいことだろう。

「本当はゴールなんかないのに、こっちの時間を無駄に使えるかよ！」

「だから、あるって。もし本当になかったら、こっちの反則負けにすればいいだろう？」

瞬が静かに言うと、学は、猜疑の目を光らせて黙り込んだ。実際には、このやりとりはもっと長く続き、二分近くを消費したはずだ。

「……隠したんだな」

ようやく気がついた二班のメンバーは、目を皿のようにして、フィールドを探したが、依然としてゴールは発見できない。

「こんなの、反則だろう！」

学が、再び、噛みついてくる。

「ゴールを隠したらダメだっていうルールは、ないはずだよ」

「あるじゃないか！　フィールドに手を加えるのは、立派な反則だ」

「ところが、フィールドには、いっさい手は加えてないんだな。ヒントをやろうか？」

調子に乗った覚が、よけいなことを言いそうになったので、わたしはすばやく遮った。

「種明かしは、最後にしてあげるわ。今は、そっちの時間でしょう？　早く探さないと、時間切れになるわよ」

学は、あわてて、ゴールを探しに戻る。結局、見つかったのは、それからさらに一分以上が経過して

からだった。なかなか見つからなかったのも無理はない。ゴールの穴は、表面をフィールドの砂地そっくりに偽装した円盤で、すっぽり覆われていたのだ。しかも、海底に潜むエイのように、円盤を上下に煽ることで、まわりの砂が縁に被さるようにしたために、境界線はまったく見えなくなっていた。（覚の大見得とは裏腹に、フィールドに手を加えるという点では、ルール違反ぎりぎりの行為だったかもしれない）

二班は、しばらくの間、攻め手を使ってゴールを覆う円盤を取りのけようとして無駄な努力を払っていたが、ようやく正しい方法に思い至り、円盤の真上に大理石の球を進める。即席で粘土を硬化させた円盤は、十キロを超える重量には耐えきれず、二秒後、真っ二つに割れて、球もろともゴールの中に落ち込んだ。

「あーあ。やっぱり、簡単に壊されちゃったわね」

「でも、使命は、充分果たしたよ。向こうのタイムは、三分を超えてる。これだったら、楽勝だ」

覚は、例によって能天気なことを言う。だが、このときは、わたしたち全員が楽観の虜になっていた。二班の守り手がどれだけ優秀でも、まさか、三分間も足止めを食うことはないだろうと。

攻守ところを変え、こちらの押し子がフィールドに登場したときも、わたしたちはまだ、自信満々だった。

雲行きがおかしくなってきたのは、十体以上ある二班の守り手の、徹底的な波状攻撃が始まってからだった。一人が二体以上を受け持ち、壊れることもまったく厭わず、こちらの攻め手にがんがんぶつけてくる。向こうの方が数が多いために、全部は防ぎきれない。すり抜けた数体は、球に側面から衝突してくる。

相手のしつこさに辟易しながらも、瞬は、冷静に球を進めていた。三分以上の貯金があるため、急ぐ必要はないのだ。

フィールドの半分まで進むまでに、五十秒近く要したが、すでにゴールは見えている。敵の守り手は、数は多いが一体あたりの重量はないので、押しとどめる力はない。もはや、勝利は目前かと思われた。

　そのときだった。まるでどこかに引っかかったように、球ががくんと停まった。瞬が、ぎょっとした表情になる。そして、押し子に力をこめて、再び動き出そうとしたときに、事件は起こった。

　物凄いスピードで斜め前方から飛び込んできた敵の守り手が、球をかすめて、押し子に衝突したのだ。

　金属を打ち鳴らしたような甲高い音とともに、陶器の破片が飛び散った。

　わたしたちは息をのみ、その場に立ちすくんだ。ぶつかってきた守り手はフィールドの外に飛び出してしまっている。残されたわたしたちの押し子は、左側のアームが折れてしまっていた。

　試合はストップしていないが、わたしたちも、二班のメンバーも、動きを止めていた。ただ一人を除いて。

　斜め後ろから接近してきた守り手が、こちらの球を押した。大理石の球は、ゆっくりと転がって、フィールドの外に出る。

　誰がやったんだろう。茫然と二班の連中の間を見渡すわたしの目に、にやりとしている学の顔が映った。わたしは、ぞっとして、思わず目をそらした。見てはならないものを見てしまったような気がしていた。

「おい！　何するんだよ！」

　覚が怒鳴った。

「こんな……こんな」

　あまりのことに、それ以上、言葉が続かない。

「悪い。事故だ」

　殊勝げに、学が言う。

「事故？　そんな言い訳ってないでしょう？」

真理亜が叫んだ。

「よーし。時間を止めて」

太陽王が、わたしたちの間に割って入ってきた。タイミングがよすぎるところを見ると、どこからか、試合の様子をじっと観察していたのかもしれない。

「たいへん残念ですが、偶然の事故により、決勝戦は引き分けにします」

「そんな！　だって、こんなの、向こうの反則じゃないですか？」

珍しく、瞬が強い口調で抗議する。

「いや。今のは、偶然の事故です。一班と二班が同時優勝ということで、いいですね？」

教師にそう言われれば、それ以上、文句を言う生徒はいない。

クラス中が熱狂していた搬球トーナメントは、誰一人予想していなかったような形で、幕を引かれることになった。

「信じられない。絶対、わざとぶつかってきたのよ！」

真理亜は、憤懣やるかたないという様子だった。

「試合前、三班が言ってたとおりだったわ」

「そうだよ。あれは、事故じゃない」

守も、同調する。

「あいつ、タイミングを計ってたんだ」

覚が、醒めた口調で言った。

「球すれすれに入って、押し子のアームにぶつけるのも、計算通りだよ。瞬も、そう思うだろ？」

瞬は、ずっと腕組みをして、無言のままだった。

「何だよ？　瞬まで、あれが事故だったなんて、信じてるの？」

瞬は、首を振った。

「いや……僕が気になってるのは、むしろ、その前なんだ」

「前って？」

「こちらの押し子が、急に停まったんだよ。まる

で、壁か何かにぶつかったみたいに」

「えっ？」

「それ、間違いない？」

「うん。押し子の感触が、何だか、すごく変だった。地面には、特に大きなでこぼこもなかったのに」

わたしたちは、完全に言葉を失ってしまった。瞬は、誰よりも鋭い感覚を持っているし、もちろん、いい加減なことを言う性格ではない。

だとすれば、誰かが呪力を使って、こちらの押し子を止めたとしか考えられない。球に直接呪力を及ぼすことも反則なら、別の人間が呪力を及ぼしている対象に割り込むのは、それ以前の問題――倫理規定に明白に違反する。万が一、呪力同士がバッティングすれば、虹のような干渉模様が顕れて空間が歪（ひず）み、きわめて危険な事態となるのだ。

つまり、二班には、およそルールというルールを踏みにじっても平気な人間がいることになる。

そう考えるだけで、まるで足下の大地が崩れるような、不安な気分に襲われた。その日、わたしたちは、押し黙ったまま家路についた。たぶん、みな脅えていたのだと思う。だが、このときはまだ、心の障壁の向こう側で蠢（うごめ）いている恐怖の正体まではわからなかった。

思春期のころは、ほんの些細な悩みが、まるで世界の終わりのように深刻に感じられることがある。だが、若々しく躍動する心の中では、暗いムードは長続きしない。しばらくたつと、何をそんなに悩んでいたのかさえ思い出せなくなるものだ。

そして、皮肉なことに、忘却という心の防衛機構は、本当に深刻な問題も、取るに足らない悩みと同様に意識から消し去ってしまう。

搬球トーナメントが終わると、代わってわたしたちの関心を一手に集めるようになったのは、全人学級における最大の行事、夏季キャンプである。呼び

名は楽しそうに聞こえるかもしれないが、これは、子供たちだけでカヌーに乗って利根川を遡り、テントを張って七日間を過ごすという、スリルに満ちたものだった。日程だけは複数の班がぶつからないように先生に調整してもらうが、それ以外の計画はすべて生徒に任されており、通過儀礼のために清浄寺へ行って以来初めて八丁標（はっちょうじめ）の外に出ることを考えただけで、あたかも別の惑星に降り立つような興奮と緊張をもたらした。

期待と不安がないまぜになった焦燥感のような感情は日ごとに高まり、わたしたちは、いてもたってもいられなくなり、顔を合わせるたびに、どこからともなく流れてくる数多くの不確かな情報や、根拠のない憶測、わたしたちの計画について、夢中で話し合った。それで何か具体的な成果が得られたわけではないが、みんなで情報を共有し、話し合っていることで、多少は不安を和らげることができた。

そのため、撤球トーナメントの後味の悪い幕切れも、長くわたしたちの念頭に残ることはなかった。長期欠席を続けていた天野麗子の名札が外されたことにも気づかなかったし、もう一人の生徒、片山学の姿がいつのまにかクラスから消えてしまったことに対しても、ほとんど無関心だった。

もちろんそれは、わたしたちの思考そのものが、巧妙に誘導、管理されていた証なのだが。

「早季い。ちゃんと漕げよ」

覚が、後ろから、三十回目くらいの文句を言った。

「ちゃんと漕いでるわよ。そっちが合わせないんでしょう？」

わたしも、約三十回目の同じ言葉を投げ返す。カナディアン・カヌーは、男女がペアになって前後を漕ぐのが原則だが、お互いの息が合っていないと力を減殺しあってしまい、漕げども漕げども進まないという状況に陥ってしまう。その意味で、わたしと

覚のペアは、籤引きの結果とはいえ、考えられる限り最悪の組み合わせだった。

「あーあ。あっちの組と、なんでこんなに違うんだ？」

真理亜と守のカヌーは、傍目にも快調そのものだった。出発前日に、二時間ほどレクチャーを受けただけなのに、まるで何年もペアを組んでいるように見える。特に守は、珍しく余裕たっぷりで、漕ぎながら、川の水で噴水を作り、きれいな虹で真理亜を楽しませたりしていた。

「よく見てよ。向こうの組は、守の方が、しっかり真理亜に合わせてるでしょう？　前の人間には、後ろの様子は見えないんだから、そっちが合わせてくれないと」

「あっちは、前で真理亜がきちんと漕いでるから合わせられるんだ。早季は景色ばっかり見てて、全然漕いでないじゃないか」

覚は依然ぶつぶつ言ったが、もちろん、それは言いがかりというものである。

広い河面を渡ってくる初夏の風は涼しかった。しばし、櫂を操っている手を止める。麦わら帽子を脱いで風が髪をなぶるのにまかせると、ポンチョのように肩からかけているバスタオルの前を開いて、汗ばんだTシャツを乾かそうとした。ゴム製の救命胴衣が邪魔だったが、いつ何時カヌーが沈しないとも限らないので、脱ぐわけにはいかない。

河岸には見渡す限り葦の群落が広がり、どこからともなく、ギョギョッ、ギョギョッ、チチチチチというオオヨシキリの鳴き声が聞こえてくる。

ふと、カヌーがこれまでにないスムーズさで、波を切って進んでいることに気がついた。一瞬、覚が前非を悔い、心を入れ替えて必死になって漕いでいるのかと思ったが、そんなはずはない。

振り返ると、案の定、覚はカヌーに寝そべって頬杖をつき、もう片方の手を水面につけてスピード感を楽しんでいるところだった。

「何してるの？」
　わたしが厳しい声で言うと、覚は目を上げた。

「川って、気持ちいいよな。海みたいに、飛沫（しぶき）が塩っからくないし」

　まるっきり見当違いの返事をする。

「できるだけ呪力には頼らないで、行けるところまで、パドルで漕いで上がろうって言い張ってたのは、覚でしょう？　もう、あきらめたの？」

「馬鹿だな。川下りならともかく、手で漕いで川を遡れるわけないじゃないか」

　覚は、あくびをした。

「だから、川の流れの分だけ、呪力で相殺して……」

「わざわざ、そんな面倒くさいことするんなら、最初から、こんなふうに呪力で進んだ方が楽だろう？　ほら、帰りはどうせ、漕ぐことになるんだから」

　すっかり怠けモードに入ってしまった覚と議論するのは、時間の無駄である。わたしは、景色に注意を戻した。よく見ると、見事に同調している真理亜と守のペアも、ひとりで漕いでいる瞬も、あきらかに流れの影響を相殺する以上に呪力に頼っているようである。どうやら、易きに流れるというのは人間の本性らしい。

　河岸近くを進んでいた瞬が、こっちを向いて手を振った。葦原をパドルで指している。二艘のカヌーは、生き物のように方向転換して、瞬の舟の方へ寄っていった。

「ほら。あそこ。オオヨシキリの巣」

　瞬の指さす先に、小さな巣が見えた。ちょうどわたしの身長くらいの高さにあったので、カヌーをすぐそばまで寄せてから立ち上がり、伸びをして覗き込む。カヌーは大きく左右に揺れたが、覚が慌ててバランスを取るのを見越していた。

「ほんとだ。でも、これ」

　直径七、八センチほどのカップ形の巣は、三本の太い葦を支柱に、感心したくなるほどしっかりと作

られていた。中には、ウズラのような茶色い斑（ふ）の入った小さな卵が、五個産み付けられている。

「……本物のオオヨシキリの巣なの？　茅の巣作り（カヤノスヅクリ）が作ったんじゃなくて？」

白状するが、わたしには、当時も今も、両者の巣の見分けがつかない。

カヤノスヅクリは、その名の通りススキの原に営巣することもあるが、実際は、川原でヨシを材料にすることの方が圧倒的に多いのだ。

「それは、本物だよ」

座ったままで、覚が言う。

「カヤノスヅクリの方が、たくさん巣を作らなきゃならないし、別に雛を育てるわけでもないから、造りが雑なんだ。それに、その巣は上空から見えにくい場所にあるだろう？　カヤノスヅクリの巣は、たいてい、すごく目立つ位置にあるからな」

「それに、巣の縁を見ると、よくわかるよ」

瞬が補足してくれる。

「本物のオオヨシキリの巣なら、親鳥が縁にとまるから、少し平たくなってる。だけど、カヤノスヅクリの巣は、完成したときの形のまま、縁がとんがってるんだ。あと、本物は、ときどき親鳥の羽毛が混じってることがある。あたりまえだけど、カヤノスヅクリには、羽毛なんか一本も生えてないからね」

男の子たちにとっては、幼い頃から、カヤノスヅクリの偽卵は格好の玩具であり悪戯の道具だったので、詳しいのも当然だろう。わたしたちは、一度として、あんな悪臭を放つ代物に興味を惹かれたことはなかったが。

わたしたちは、オオヨシキリの巣を発見した場所をノートに記して、簡単なイラストを書き添えると、河岸にある鳥の巣を探しながらカヌーを進めた。

夏季キャンプは、単なる肝試し的行事ではなく、学科の一環という位置づけだったので、各班は、キャンプに際して研究課題を選択し、帰還してから発

表することになっていた。わたしたち一班が選んだのは、『利根川流域の生物相』という、かなり漠然としたテーマである。ここに落ち着くまでには、侃々諤々の議論があったが、最初のきっかけは（それだけは認めてもいいだろう）、例によって、覚のホラ話だった。

「風船犬？」

わたしは、噴き出した。

「そんな変な生き物、いるわけないわよ」

「それが、本当なんだって」

覚は、まじめな顔で言い張る。いつも、少々の冷笑にはめげず粘り強く自説を繰り返すために、聞いている方は、最初は一笑に付しても、しだいに半信半疑にさせられる。だが、今度の話は度が過ぎていた。

「それも、つい最近、見た人がいるんだ」

「見た人って、誰？」

真理亜が訊く。

「名前は知らないけど」

「ほら。いつものことよ。たしかな証人がいるとか、目撃者がいるとか言っといて、それが誰かとなると、とたんに曖昧になってくんだから」

わたしの態度は、自分でも鬼の首を取ったようだったと思うが、覚はけっして怒らず、話を続けた。そうまでして人をかつぎたいという情熱は、いったい、どこから来るのだろう。

「でも、もし聞いたら、たぶん名前はわかると思うよ。その人は筑波山に行ったときに、麓近くで風船犬を見たんだって」

「筑波山？　その人は、そんなところまで何しに行ったの？」

真理亜が覚の言葉の釣り針に引っかかり、証人問題は棚上げになった。

「教育委員会の仕事で、何か、調査に行ったらしいんだ。詳しいことは、子供には教えてくれないけ

ど。それで、筑波山の麓にさしかかったとき、大きな横穴の中から、のそのそと風船犬が這いだしてきたんだって」

さあ。どこから覚の話を論破していこうか。わたしがそう思った隙に、守が質問した。

「風船犬って、どんな形？」

「大きさは普通の犬くらいで、色は真っ黒だって。胴体は太いのに、頭は犬の半分くらいの大きさしかなくて、地面すれすれの位置に付いているらしい」

「それ、本当に犬なの？」

守が訊ねる。

「どうかな。たぶん、違うと思うけど」

「あんまり危険そうじゃないわね」と真理亜。

「うん。でも、怒らせると、身体が風船みたいに大きく膨れていくんだ。その段階で相手が引き下がればいいんだけど、もしも、限界を超えて怒らせると……！」

「そのままどんどん膨れてって、最後には、ぱんと破裂するんでしょう？　いくら何でも、言ってて馬鹿馬鹿しくならない？」

わたしの突っ込みに対して、覚は新しい切り返しを用意していた。

「そこなんだよ、問題は」

「えっ？」

「あまりにも、話が突飛と言うか、奇想天外だろう？　人を騙すために作り話を広めようと思ったら、もっと、いかにもありそうな話を作ると思わないか？」

たくさんの反論がいちどきに頭に浮かんできて、わたしは絶句した。その論法でいけば、馬鹿げた話ほど真実だという理屈になってしまうではないか。

ところが、覚はどうやら、一本取ったかのように錯覚したらしい。

「風船犬は、山の神様のお使いだって言われてるらしい。でも、僕は、やっぱり、普通の生き物だと思うんだ。相手を脅そうとして身体を膨らまして大き

く見せる動物は、たくさんいるだろう？　風船犬もたぶん、その極端な例なんだよ。破裂するときは、相手も死ぬか大怪我をするらしいからね」

覚は得意げに自説を開陳したが、それまで黙って聞いていた瞬が、ここでぼそりと発言した。

「でも、それは、ありえないと思うな」

「なんでだよ？」

覚は、むっとした顔になった。

「だって、脅しを実行に移したら、相手より前に自分が死んじゃうんだろう？　そんなことしてたら、風船犬はすぐに死に絶えちゃうよ」

単純だが、完璧な反論だった。覚は腕組みをして、生物学上の微妙な問題点を検討しているようなふりをしていたが、おそらく、ぐうの音も出ないはずだ。

そう思って見ていると、覚は、何事もなかったかのように口を開いた。

「……そうそう。その人は、風船犬を見た後で、悪魔のミノシロに会ったんだって」

わたしは、椅子から滑り落ちそうになった。

「そうそうって？　もしもし。風船犬の件はどうなったんでしょうか？」

「その人は、風船犬が膨れるのを見て、そっと後ずさりしたんだ。だから、風船犬も爆発しなかったらしい。でもまあ、もしかすると、爆発するっていう部分だけは眉唾かもしれないけどね」

覚は、トカゲのように、あっさりと自説のしっぽを切り捨てた。

「それで、その人が筑波山に登る途中、今度は、悪魔のミノシロに遭遇したんだ」

呆れているわたしたちを尻目に、強引に話を続ける。

「悪魔のミノシロって、ミノシロモドキって言われてる生き物のこと？」

守が訊ねた。

「うん。一見、ミノシロにそっくりなんだけど、よ

くよく見ると、全然違うらしい」

「でも、なんで悪魔なの?」

真理亜の質問に、覚は眉をひそめて答えた。

「悪魔のミノシロに出会った人間は、遠からず死ぬことになるからだよ」

無茶苦茶だ。

「じゃあ、その筑波山で出会ったっていう人は、どうして死なないのよ? 死んでないんでしょう?」

わたしは追及したが、覚は特に困った顔も見せず、「もうじき死ぬんじゃないかな」などとうそぶいた。

これで終わっていれば、いつも通りの無駄話にすぎなかったのだが、ここで瞬から意外な提案がなされた。

「夏季キャンプの課題なんだけど、それにしない?」

「それって、悪魔のミノシロってこと?」

わたしは驚いた。

「それも含めて、風船犬や、ほかの未確認な生き物も。せっかくの機会だし、本当にいるのかどうか、たしかめてみたい気がする」

「面白いんじゃない?」

真理亜たちも、すぐに乗り気になった。

「ちょっと待てよ。みんな、わかってるのか? 悪魔のミノシロに出会ったら、遠からず死ぬかもしれないんだぞ?」

予想通り、嘘がバレると困る覚は、懸命に、みなを思いとどまらせようとした。

「死ぬわけないわよ」

真理亜は、鼻で笑った。

「でも、どうやって捕まえるんだよ? 言い忘れてたけど、どうも、悪魔のミノシロには、呪力が効かないらしいんだ」

「どういうこと?」

苦し紛れとはいえ、いったい何を言い出すのか。

わたしたちは、顔を見合わせた。

「うーん。呪力が効かないっていう状態が、僕には、よくわからないな」

「説明して」

「…………」

　結局、全員から集中砲火を浴びた覚は、白旗を揚げ、夏季キャンプの課題は未確認生物の探索ということに落ち着いたのだった。

　ただし、冷静に考えれば、そんな珍獣が簡単に見つかるとも思えなかったので、前述したように、太陽王に対しては『利根川流域の生物相』という、とても幅広いテーマを出しておいた。何らかの配慮からストップをかけられるのを怖れたのと、いざというときは、普通のミノシロか、カヤノスヅクリの観察でお茶を濁すためである。

　夏季キャンプに話を戻そう。オオヨシキリの巣を発見してから十分もたたないうちに、わたしは小さな叫び声を上げた。

「あそこ！　見て見て、巣がある。大っきいわ！」

　瞬は、なぜか不審げに眉根を寄せた。

「葦五位（ヨシゴイ）みたいだね」

「ああ。あの大きさだと、たぶん、ヨシゴイだ」

　覚も同意する。この二人の意見が一致することは稀だが、その数少ない場合には、かなりの信頼が置けるのだ。

「でも、ずいぶん不用心な巣だな」

　三艘のカヌーは、わたしが発見した巣のそばに寄った。オオヨシキリの巣よりはずっと低い位置に営巣してあるのだが、ほとんど川に面した場所にあるため、とてつもなく視力がよければ、たぶん向こう岸からも見えるだろう。

　瞬は、カヌーの上で中腰になって、巣の中を覗き込んだ。

「卵がある。五個も」

　続いて近づいたわたしの舟も、舳先を並べる。むきだしの肩が瞬と触れ合いそうになり、少し胸がど

きめいた。動揺を隠すため、巣と卵を詳しく調べてみる。ヨシゴイは、サギの仲間では一番小さいとはいえ、スズメ大のオオヨシキリと比べれば倍以上の体長がある。巣も二回り以上は大きくて、ミニチュアの鶏卵のような卵はかすかに青みがかっていた。

瞬は、巣から卵を一個取り上げた。ためつすがめつして、ぽかんと口を開ける。

「うわー。驚いたな。まさかと思ったけど」

「何なの？」

「早季も、持ってみて」

瞬が、細長い指でつまんだ卵をわたしの掌に載せる。ひんやりとして、まるで陶磁器のような肌触りだった。

「これがどうかしたの？」

「わからない？」

瞬は、巣からもう一個の卵を取ると、覚に向けて放った。卵の扱いがあまりにぞんざいだったので、わたしは驚いた。

「ちょっと。かわいそうじゃない。これから、雛が生まれてくるのに」

「ああ」

瞬は微笑した。

「これは偽卵だよ。みててごらん」

瞬は、巣からもう一個卵を取ると、河岸近くにある岩の上に置いた。あっと思う間もなく、パドルの柄で、上から押し潰すように叩く。

卵の殻の割れ目から周囲に飛び散ったのは、黄身や白身ではなく黒く悪臭を放つ糞の塊である。もっと奇妙だったのは、小さな鹿の枝角のような形をした突起が、びっくり箱の人形のように、四方八方に飛び出てきたことだ。

「これ、何？」

「『悪魔の手』だよ。聞いたことあるだろう？」

実は、初耳だった。わたしは、奇妙な突起をそっと爪の先でつまんでみた。紙のように薄っぺらい。

「縁はすごく鋭いから、気をつけて」

『悪魔の手』の中心には葉脈状のものが走っており、弾力がある。縁は瞬の言うとおり、剃刀のように鋭く、ところどころに逆棘のようなものが生えていた。

「ふだんは卵殻の内側に折りたたまれてるんだけど、卵が割れると、飛び出してくるんだ」

「何のために？」

背後から、覚が答える。

「アオダイショウやネンジュヘビが普通の卵と間違えて呑み込むと、胃の中で殻が割れて弾けるんだよ。吐き出そうにも逆棘が引っかかるし、暴れれば暴れるほど、『悪魔の手』が柔らかい粘膜を切り裂き、糞に含まれる毒素が回るんだ」

ひどい話だった。念珠蛇（ネンジュヘビ）は卵喰いに特化した蛇であり、鳥の巣を襲ってはありったけの卵を呑み込んでしまう。殻を砕くのも後回しにする貪食ぶりで、たくさんの卵で膨れた身体を見てその名が付けられたのだが、こんな恐ろしい偽卵をまとめて飲んでしまえば、悲惨なことになるだろう。

この卵の中には、生命（いのち）ではなく、死が詰まっているのだ。

わたしはノートを出すと、手早く、割れた偽卵をスケッチした。

「松風の郷には、オオヨシキリに似せた偽卵はいくらでもあったけど、ヨシゴイのやつは初めて見たな」

偽卵を太陽に透かした覚が、感心したように言う。

「これほど大きな偽卵を産んだやつは、やっぱり、相当でかいんだろうな」

「いや。大きさは、ふつうのカヤノスヅクリと変わらないみたいだ」

瞬が言う。

「どうしてわかる？」

覚が顔を上げた。瞬は、黙ってあごを前方にしゃくった。

わたしもそちらに目を向け、はっとした。

密生した葦の間から、小さな顔が覗いている。数本の枯れ草を横咥えにした細い嘴は、サギの仲間にそっくりだった。だが、瞼のない真っ赤な目と鱗に覆われた顔貌、目尻から延びる黒いラインは、あきらかに鳥類のものではない。

カヤノスヅクリは、ゆっくりと鎌首を伸ばすと、太い葦に巻き付きながら、長い身体をスライドさせていく。カヤノスヅクリの体色は鶯茶色か渋い利休茶色のことが多いのだが、この蛇は鮮やかな萌葱色だった。全体を見ると、奇妙なほど鳥に似ているのは嘴だけで、それ以外は先祖であるシマヘビからほとんど変化していないのがわかる。

萌葱色の蛇の動く先を見ると、建設中の新しい巣があった。蛇は、口に咥えた枯れ草を巣の縁に差し込んで、巧みに巣作りを行う。ヨシゴイの巣は、葦の茎を折り曲げて互いにからませながら作るのだが、この蛇が作っている偽の巣は、むしろオオヨシキリのものに近い構造だった。これでも、充分騙せるということらしい。

「たぶん、あの偽卵を産んだのもあいつだよ。カヤノスヅクリには、通り道に順番に巣を作っていく習性があるからね」

覚の方に視線を戻すと、先に見つけた巣の方から偽卵を三個失敬して、ナップザックの中に入れるところだった。巣に残っているのは一個だけである。

「どうするの？　そんなもの」

後ろのカヌーにいる真理亜が訊く。

「風船犬や悪魔のミノシロが見つからなかったときは、夏季キャンプの課題には、これを提出すればいいよ。ヨシゴイに似せた偽卵は、めったに見られないし」

「でも、持ってっちゃったら、カヤノスヅクリが困るんじゃない？」

「偽卵は、たぶん、一個あればいいんだよ。ここが空の巣じゃないと、カッコウなんかに思わせればい

いだけだから」

覚の言うことには理屈が通っているようだが、本当にそれでいいのなら、カヤノスヅクリも、最初から一個しか偽卵を産まないのではないだろうか。

それにしても、この奇妙な顔つきをした蛇の狡猾さは、わたしには、少々度が過ぎているように感じられる。

カヤノスヅクリの戦略は、托卵を行う鳥の習性を巧みに利用するものだった。

托卵というのは、自ら巣を作って雛を育てる手間を省き、ほかの種類の鳥の巣に自分の卵を産み付け、育てさせることである。托卵された卵はすばやく孵化して、元からあった卵をすべて巣の外に放り出してしまう。生きるためとはいえ、あまりにも冷酷な仕打ちだと思う。アフリカ大陸に棲息する蜜教にいたっては、嘴に付いた棘によって、宿主の雛を刺し殺すようなことまでするらしい。

わたしの愛読している『新生日本列島博物誌』によれば、千年前、この托卵行動が見られたのは、カッコウやホトトギス、ツツドリなど、たかだか数種類の鳥にすぎなかった。現在では、その範囲は数十種類にまで拡大し、ふだんはまともに巣を作って雛を育てるが、たまたま都合のいい巣を見つけたときにだけ托卵する日和見型托卵や、同種への托卵まで見られるようになっている。鳥類の世界は、まったく世も末なのだ。

カヤノスヅクリは、鳥の巣を模倣したものを造り、大きさから模様まで本物の卵とそっくりな偽卵を並べておいて、騙されて托卵する鳥を待つ。あとは、定期的に自分の作った巣を巡回すれば、新鮮な卵の貢ぎ物が見つかるというわけだ。

わたしは、理科の授業で見せられた、カヤノスヅクリの骨格標本のことを思い出した。卵殻を割るための脊椎骨下突起が、他の蛇と比べて著しく発達しており、まるで臼歯を備えた大顎のようになっていた。殻は排泄されることなく、ここで細かく擦り潰

されて吸収され、偽卵の材料に使われる。体内に多量のカルシウムを取り込むため、カヤノスヅクリ自体の卵も鳥のように硬い卵殻を持っており、孵化する幼蛇は、硬い嘴を使って殻を割るのである。

だが、卵を狙う競争相手であるアオダイショウやネンジュヘビを排除する目的で偽卵に仕込まれた『悪魔の手』のことは、実物を見るまで知らなかったと思う。もしかしたら、授業中、寝ていたのかもしれない。

けっして後知恵で言うのではないが、このとき、わたしはかすかな違和感を覚えていた。教科書に載っている突然変異と自然淘汰だけで、はたして、ライバルに対する、これほどまでの『悪意』が進化しうるのだろうか。

しかし、再び利根川の遡航を開始すると、疑問は中途半端なまま川風に吹き飛ばされて、どこかへ行ってしまった。

カヌーによる一日の行程を終えると、わたしたちは、日が明るいうちに河原に上陸した。砂地には、前の班がキャンプした跡が、うっすらと残っていた。

まずは、テントを張らなければならない。砂に穴を掘って竹製の骨組みを立て、帆布をかぶせて革紐でくくりつけるだけなのだが、これが案外なまでに骨の折れる作業だった。悪戦苦闘するうちに、一人が呪力で骨組みや帆布を浮かせておき、もう一人が手作業で骨組みを正しい位置に固定して紐を結ぶという手順が一番効率的だとわかり、全員がそれに倣った。

今度は、夕餉（ゆうげ）の支度にかかる。一艘のカヌーには三百キロの荷物を積めるので、食材はふんだんに持ってきていた。河原の周囲から枯れ枝や薪を集めてきて、呪力で火をつける。鉄鍋の中に、呪力で浄化した川の水と生米、ざく切りにした肉や野菜、乾燥湯葉などをぶち込み、雑炊を作った。味噌と塩を適

当に入れただけの味付けだったが、丸一日運動して空腹だったため、みな旺盛な食欲を発揮して、あっという間に平らげてしまった。

そうこうするうちに日が暮れ、食後は、焚き火を囲んでおしゃべりに興じた。

そのときの情景は、今も瞼にしっかりと焼き付いている。一日運動した心地よい疲れと、焚き火の煙のせいで、目が少し潤んでいる。生まれて初めて八丁標を離れた大冒険のせいで、誰もが、いつも以上に興奮しているようだった。空が薄い青から濃紺へと変わっていく頃には、みんなの顔が焚き火で赤く染まって見えた。

正直に言うと、前半、何を話していたのか、ほとんど思い出すことができない。昼間の会話なら細部に至るまで思い出せるのに、最も楽しかった晩のことを覚えていないというのは、奇妙な話である。だが、話はただ意識の表面を流れていくだけだった。

このとき、わたしの注意力のすべては、焚き火の向こう側に座っている男の子に対して注がれていたのだ。

「……早季だって、見たことないだろ？」

覚から急に話を振られて、わたしは当惑した。いったい、何を見たことがないというのだろう。とりあえず、曖昧な返事をしておく。

「えー。どうかな」

「えっ？　見たの？」

しかたなく、わたしは首を振った。

「そうだろう。絶対、見てるわけないんだよ」

覚は、決めつけるように言う。反論してやりたかったが、何のことかわからないのでは、どうしようもない。

「それで……だよ！」

覚は、なぜか興奮の体だった。

「この間、初めて見てきたんだ。瞬と二人で。な？」

焚き火の向こう側で、瞬もうなずく。最近、この

二人が仲良くしているところは、あまり記憶になかった。

「けっこう、たいへんだったんだぜ。警戒厳重で」

「そうだね。とにかく、和貴園のときみたく偶然目に入っちゃうようなことは、まずないと思うよ」

瞬は、微笑しながら、独特の涼やかな声音で言う。

「扉が開いてても、正面に目隠しの壁があるから、全人学級の中庭がどうなってるかは、全然見えないんだよ。先生たちも、扉の開閉にはすごく神経を使ってるしね」

それでは、二人は全人学級の中庭に入ったというのか。わたしは、彼らの大胆さに驚いた。全人学級の中庭はロの字形の建物の中央で、和貴園の中庭と同様、生徒の立ち入りが明確に禁じられているわけではなかったが、窓すらないため誰も見たことがなく、通常は近づこうという気すら起きない場所だった。

「でも、太陽王が扉を開けるところを、二回ちらっと見て、裏側の閂の形を、しっかり目に焼き付けといたんだ」

今から千年後の錠前の形状は、どうなっているのだろう。わたしには想像もつかない。かつて、符牒となる刻み目をつけた鉄片を鍵穴に入れて開閉していた頃は、複雑きわまりない機構と時計並みの精度に進化したようだが、わたしたちの時代には、そもそも錠前が必要な場所がほとんどないため、きわめて単純な形に落ち着いていた。

扉の周囲に、小さな閂が一ダースばかり、放射状に取り付けてあるのである。外からはどこに閂があるのか見えないので、配置を記した図を持っているか、正確なイメージを記憶して思い浮かべられる者だけが、呪力によって開けられるのだ。

「……それで、僕が見張りをしている間に、瞬が閂を開けたんだ。中庭に入ると、すぐに扉を閉めた。しばらく息を殺してから、目隠しの壁の向こうに行

ってみたんだよ」

　覚は、言葉を切ると、話の効果をたしかめるように焚き火のまわりを見回した。

「何があったの？」

　真理亜が訊ねる。

「何だと思う？」

　覚は薄笑いを浮かべた。

「また、和貴園の中庭みたいに、お墓があったなんて言うんじゃないでしょうね？」

　わたしが言うと、事情を知らない守が、目を丸くする。

「え？　和貴園の庭には、お墓があったの？」

　覚は顔をしかめた。

「いや。あのときの話は、僕も聞いただけだから」

「いいから、もったいつけずに教えてよ。何だったの？」

「……僕が和貴園で見たのと、ほとんど同じものだった」

　瞬が答える。

「植え込みが少しあるだけで、後は広い場所がそのまま放置されてる感じだった。でも、一番奥に、頑丈な木の扉の付いた煉瓦製の物置が五つ、一列に並んでた」

「開けてみた？」

　真理亜の問いに、今度は覚が答える。

「そばには行ってみたけど、すぐに引き返したんだ」

「どうして？」

「何だか、嫌な臭いがして、あんまり、そばにいたくなかったんだよ」

　いつも大ボラばかり吹いて人を怖がらせようとする覚が、妙に言葉を濁すのには、逆に、気味の悪さを増幅させる効果があった。

「嫌な臭いって？」

「鼻につんとくる……アンモニアみたいな」

「それ全部、物置じゃなくて、雪隠だったんじゃな

いの？」

　覚は、わたしの軽口には反応しなかった。

「それだけじゃないんだ。空耳かもしれないんだけど、声が聞こえた」

　瞬が言うと、座はしんとした。

「声って、どんな？」

　聞くのが怖かったが、勇を鼓して訊ねる。

「よくわからない。動物の唸り声みたいな感じだったと思うけど」

　二人で共謀して、みんなを怖がらせようとしているに違いない。そうは思ったものの、少々背筋が薄ら寒くなったことは否定できない。それからは、ひとしきり馬鹿話に興じた。

　翌朝は早かったので、そのまま寝てもよかったのだが、みな、もう少し大冒険の余韻を味わいたかった。珍しく、守が、ナイトカヌーをやってみないかと提案する。真理亜が、すぐに賛成した。

　星明かりだけを頼りに、川に漕ぎ出すのだが、当初、わたしはあまり気が進まなかった。視界がほとんど利かない状態に、どこか本能的といってもいい恐れを感じたのだ。

　それでも、一人だけ尻込みして取り残されるのは、もっと嫌だったので、わたしも籤引きに参加した。二艘のカヌーに二人ずつが乗り込み、一人が焚き火の番をすることになる。もし焚き火が消えてしまうと、真っ暗な川の上にいると、元の位置がどこだかわからなくなってしまうのだ。

　言い忘れていたが、カヌーには、それぞれ名前が付いていた。わたしと覚が乗ってきたのがサクラマスⅡ号、真理亜と守がハクレンⅣ号、そして瞬が漕いでいたのがカムルチーⅦ号である。先端に二種類のドングリを突き刺した箸を順番に引いた結果、ハクレンⅣ号に乗るのは瞬とわたし、サクラマスⅡ号が真理亜と守に決まった。残念なことに、覚は、一人残されて火の番をしなくてはならない。

「今のは、ずるだよ！」

覚は、往生際悪く抗議した。彼は以前から、残り物には福がある教の信者で、最後まで籤を引かず果報を待っていたのだ。

「ほら、何だよこれ。上から缶を覗き込んだら、底まで丸見えじゃないか！」

「そうやって見ればね。でも、誰も見てないわよ」

籤を作った真理亜が、澄まして言った。実際、底を覗く必要などない。注意深く観察さえすれば、ドングリを刺した箸とそうでない箸は、立ち方が違うことがわかるだろう。

覚は、不承不承焚き火の脇に腰を下ろし、わたしたちは河原に引き上げていたカヌーを水際まで持って行った。

「しばらく、焚き火の方を見ちゃだめだよ」

瞬が言う。

「どうして？」

「教わっただろう？　ナイトカヌーの鉄則は、乗り込む前に、しっかり目を暗順応させておくことなんだ。そうでないと、しばらくは何も見えないからね」

瞬は先にハクレンⅣ号に乗り込み、わたしの手を引いてくれた。胸が高鳴り、暗い水の上に乗り出す不安をしばし忘れた。

カヌーは、ゆっくりと漆黒の世界へ滑り出していった。

視界の利かないところで、いきなり呪力を使うのは不安なので、最初はパドルを使って漕ぐことにする。

暗さに目を慣らしているとはいっても、やはり、ほとんど何も見えない。河面を照らしているのは満天の星明かりだけである。水面は、どこまでも続く真っ暗な小径のようで、二つのパドルが立てる小さな水音だけが耳に心地よく響いた。

「何だか、夢の中にいるみたい」

わたしは、恍惚としてつぶやいた。

「こうしてると、どれくらいの速さで進んでるのか

も、わからなくなるわ」

「水に手をつけてみれば、わかるよ」

　後ろから、瞬が言った。わたしは、漕ぐのをやめて、真っ暗な水面にそっと触れてみる。指先が水を切っていくスピードは、けっこう速かった。

　ずっと前の方から、笑い声が響いてきた。真理亜の声であることがわかる。夜の静寂のせいか、水面に反響するためか、昼間よりずっと声がよく通るようだ。

　すると、瞬が漕ぐのをやめ、パドルを舟に引き上げた。

「どうしたの？」

「漕いでると、さざ波が立つだろう……？」

　振り返ると、瞬は、河面を見つめているようだった。そのはるか向こうには、覚が守っている焚き火の光が見える。川を下っているせいか、わずかな間にずいぶん遠くまで来たようだ。

「うーん。川だから、どうしても波立って静かにならないか」

　瞬は、口の中で真言（マントラ）を唱えたようだった。

「いい？　波を消してみるよ」

　流れのままに川を下っているハクレンⅣ号の周りから、同心円状に波紋が広がっていった。さらに今度は、その内側から、いっさいの波が消えていく。

「ああ。すごい……」

　まるで、わたしたちを中心に周囲が急速に凍っていったように、水面から凹凸というものがなくなった。今や、水面は磨き上げられたガラスのように滑らかで、満天の星を映し出す漆黒の鏡面だった。

「きれい。まるで、宇宙を旅してるみたい！」

　この晩のことは、わたしは終生忘れないだろう。ハクレンⅣ号が旅していたのは、地上の川ではない。無数の恒星が輝いている、天の川だった。

　遠くから風に乗り、おーいというかすかな声が聞こえてきた。覚の声だった。振り返っても、すでに焚き火の光は目に入らない。ずいぶん遠くまで来て

しまったようだ。

「そろそろ、戻ろうか？」

瞬の問いに、わたしは黙って首を横に振った。

もう少し、この場所にとどまっていたかった。瞬と二人で、この完璧な世界に。

わたしたちのカヌーは、星空の中心をたゆたっていた。わたしは、前を向いたままで、そっと後ろに右手を伸ばした。

ややあって、瞬の掌が重ねられる。彼の細長く形のいい指が、わたしの指を握った。

このまま、時が止まればいいのにと思う。瞬と二人、永遠にこのままの姿で溶け合ってしまいたかった。

どれくらいの時間、そうしていたのかはわからない。わたしを現実の世界に引き戻したのは、小さく切れ切れに聞こえる、覚の叫び声だった。どうやら、いっこうに誰も戻ってこないので、パニックに陥っているようだ。

「帰ろう」

瞬が言い、今度は、わたしもうなずいた。このまま放りっぱなしでは、あまりにも覚が可哀想だ。

ハクレンⅣ号は、くるりと舳先を川上に旋回させた。瞬が呪力で舟を加速すると、川面に映っていた星々は、千もの断片に砕けて波間に没した。

心地よい速度に身を任せながら、わたしは、ふと、目眩（めくるめ）くような不安に襲われていた。

いったい、今、どれくらいの速度で進んでいるのだろう。

川の流れも、両岸の様子も、ぼんやりした闇の中に溶け込んでいて、はっきりと認識することができない。

人の感覚がこれほど曖昧なものなら、限りなく神の力に近いはずの呪力も、砂上の楼閣のように不安定なものにならざるを得ないのではないだろうか。

そして、さらにまた思った。

もし、この感覚が閉ざされてしまったとしたら、

それでも猶、わたしたちは呪力を行使することができるのだろうか。

そういえば、と思う。

わたしたちの町には、なぜ、視覚や聴覚を失ってしまった人たちが、一人として住んでいないのだろうか。

6

『新生日本列島博物誌』では、これまで、数多くの歴史学者、生物学者、国語学者が、『ミノシロ』の語源について頭を悩ませてきたエピソードが、興味深く綴られている。

古くは、『蓑代衣』をまとったような形態に由来するというのが、定説になっていたらしい。とはいえ、蓑代衣がどんなものなのかは、説明してくれる書物も見あたらないため、わたしには見当もつかないのだが。

また、『蓑代衣』ではなくて、『蓑』と白い体色から『蓑白』、死者の霊魂が宿るという信仰から『霊の代』、ふだんは陸棲だが海に戻って産卵するために『海の社』という説も、かなり有力なようだ。後者は、ミノシロが海松などの海藻や珊瑚に産み付ける赤や黄色の花弁に似た卵塊群が、まるで竜宮の飾

りのように見えるという説明が付いている。

かつては、ミノシロが外敵に出会った際に逆立ちして尾部を上げる様が、古代の城塞の天守閣を飾っていたシャチホコに似ているとして、『美濃城（みのしろ）』なりと主張する一派も存在したというが、その後の研究で、シャチホコなるものを戴いていたとされる名古屋城が、美濃ではなく隣国の尾張にあったことが判明してからは、すっかり昔日の勢いを失っているらしい。

さらに、『シロ』を『四郎』の略とする俗説にいたっては無数にあり、一メートル以上に達する大きさから、『三幅（みの）四郎』（三幅とは、反物（たんもの）の並幅の三倍で百八センチ内外）、蠢く無数の触手が蛇に見えることから、『巳（み）（蛇）の四郎』など、諸説入り乱れて収拾がつかないという。

ちなみに四郎とは、古い伝承に登場する若者の名と言われているが、白蛇の祟りに触れてミノシロに変身させられたというモチーフはかろうじて残っているものの、それ以外の内容がほとんど伝わっていないため、真偽のほどはわからない。

どの説も、わたしには、それなりにもっともらしく思われる。少なくとも、筑波山では、そこら中をやたらと這い回っていた蟾蜍（ヒキガエル）の語源が、同書では『気を以て子蟲（こむし）を引寄せて食べる』ためとされているよりは、はるかに理解しやすい。ヒキガエルに呪力があるなどという珍説を、いったい誰が信じるだろうか。

ミノシロの謎は、もう一つある。古代の文献を調べても、ミノシロについてはほとんど言及されていないのだ。特に、千年以上前に刊行された書籍では、多くが閲覧禁止の措置が取られているとはいえ、『ミノシロ』という文字は、まったくといっていいほど発見できない。だとすると、ミノシロが地上に生まれてきたのは、せいぜいここ数百年のうちということになるが、進化の常識に照らして、そんなに短期間に新しい種が生まれるとは考えられな

い。

　実は、これは、ミノシロに限った話ではなく、千年前の文明期と現在とでは、動物相（フォーナ）に大きな断絶が見られる。前からあった動物種が絶滅することは不思議でも何でもないが、ミノシロを含む数百種は、突然、天から降って湧いたように登場しているのだ。

　これについては、近年新たに提唱された仮説が、徐々に主流になりつつある。すなわち、ミノシロを含む多くの生き物は、人間の無意識が及ぼす働きで、急激に進化を加速されたというのである。

　だが、少し深入りしすぎたようだ。ここでは、最近突き止められたミノシロの直系の祖先が、房総沖などに棲息している蓑海牛（ミノウミウシ）らしいという事実を指摘するにとどめておこう。こちらは、体長わずか三センチほどの小動物で、あの巨大なミノシロに進化したとは信じられないが、その名の由来となった蓑状のエラ突起を見ると、たしかに似ていると思わざるを得ない。もし本当にミノウミウシがミノシロの祖先なら、『蓑』という文字が共通していることから、和名の由来も、『蓑代衣（みのしろごろも）』説もしくは『蓑白（みのしろ）』説が正しいという傍証になるかもしれないが、これについては、さらなる研究を待ちたいと思う。

　ミノシロについて書き出したのは、夏季キャンプでわたしたちが出会うことになるミノシロモドキについて理解するためには、ミノシロモドキが擬態しているミノシロの正しいイメージが必要になるからだ。

　もし、千年前にミノシロが存在しなかったとすれば、千年後には、絶滅している可能性もある。そこで、ミノシロについては、すでに何度か書いているが、ここで、あらためて解説しておきたい。

　全体の形状は、体長数十センチ～一メートルほどの、芋虫（イモムシ）ないし馬陸（ヤスデ）といったところだ。頭部にはYの字の形に大きな頭触手（とうしょくしゅ）が二本伸びており、その手前には、一対の小さな触角がある。目は小さくて

皮膚の内側に埋もれているため、視覚はぼんやりと明暗を感じられる程度の限定的なものと思われる。腹側には、イモムシかヤスデのような短い歩行肢が並んでおり（この点では、とてもウミウシのような腹足類とは思えない）、かなりの速度で歩行する。その様は、多数の肢の動きから、行軍などと形容される。背面には、白、赤、オレンジ、青など色鮮やかな触手や棘状突起を、蓑のように一面に生やしている。触手には、半透明のもの、先端が蛍のように強く発光するものなどがある。

　雑食性で、主な食物は、コケ、地衣類、キノコ、昆虫、百足、蜘蛛、土壌に棲む小動物、植物の種子など。有毒なものでも平気で食べ、毒を小胞に包み込んで、体内に溜め込む。このため、土壌を浄化する作用があるとされる。食事の後は、食べた物によって、著しく体色が変化する。特に、コケを飽食した直後には、全身鮮やかな緑色に染まる。これらの特徴は、イソギンチャクを主食とするミノウミウシによく似ている。

　また、外敵に出会ったときには、触手や棘を逆立てて威嚇する。このときの様は、無数の蛇が蠢くような動きと言われている。威嚇を無視して近づいた生き物は、猛毒を持った刺胞を見舞われることになる。ただし、人間に対してだけは、けっして刺胞を向けないことを特筆しておきたい。

　ミノシロ科には、オニミノシロ（体長二メートル以上になり、全身を銀色の剛毛に覆われている稀少種）、アカミノシロ（全身が半透明の朱色をしている）、アオミノシロ（触手の先端が青い）、ニジイロミノシロ（蝶の鱗粉のような微細な毛が生えており、玉虫のように美しい光沢を呈する）などの亜種が存在する。

　サイズの大きさと、非常に毒性が強く不快な味がするため、天敵はほとんどいないが、唯一、砂浜に潜む虎挟み（トラバサミ）によって捕食されることがある。ミノシロは、年に一度、産卵の際に海に帰るので、そのと

き襲われるケースが多いらしい。

念のため、トラバサミについても説明しておこう。獰猛な肉食性の蟹で、祖先は海棲の渡り蟹（ガザミ）というのが定説となっている。横が尖った菱形の甲羅は緑褐色と砂色の迷彩色で、甲幅は四十五～百二十センチに達する。鋏は長大で、歯は鋭い。額には三本の棘があり、甲羅の前面は鋸歯状になっている。元は遊泳に用いていた第四脚を巧みに使って、回転しながら砂を掘って身を隠し、獲物が接近すると、砂の中から二メートル以上も跳躍して、襲いかかるのだ。波崎海岸などに多く見られるが、草原や森、山の中腹まで遠征することもある。獲物は選り好みせず、カエル、トカゲ、ヘビから、小型哺乳類、海鳥、浜に打ち上げられたイルカやゴンドウクジラのような海獣まで捕食する。金属のように強靭で分厚い甲羅は、牙や爪も通らない。トラバサミ同士が出会うと殺し合い、共食いに至ることもしばしばだというが、トラバサミもまた、人間に危害を及ぼすことはない。

ミノシロがトラバサミに襲われ、胴体の一部を挟まれて逃げられなくなると、他に類を見ない興味深い状況が出来（しゅったい）することが知られている。

わたしは、その一部始終を偶然目撃したことがあった。和貴園を卒業する前の年のことで、季節は初夏だった。

「早季。あれ見て！」

真理亜が小声で叫んだ。

「どうしたの？」

わたしたちは、砂浜を見下ろす小高い丘の上、周りを藪に囲まれた秘密の場所にいた。天気のいい午後は、放課後、そこで二人だけで過ごすことが多かったのだ。

「ミノシロが、トラバサミに捕まってる……」

わたしも身を起こし、藪の上に頭を出した。潮風が鼻孔をくすぐる。海岸には、人気がなかった。真理亜の指さす先を見ると、海から二、三十メートル

ほど離れた砂浜で、一匹のミノシロが立ち往生しているのが見えた。海の方へ進もうとして、さかんに身体をうねらせるのだが、まるで砂浜に根が生えたように動くことができないのだ。

目を凝らすと、ミノシロの歩行肢の何本かを挟んでいる、黒褐色の鋏が見えた。

「助けに行かなきゃ」

わたしは、立ち上がりかけて、真理亜に腕をつかんで引き戻された。

「何やってるのよ、馬鹿！　誰かに見られたら、どうするの？」

「誰もいないじゃない」

「いつ来るか、わかんないでしょう？　あのへんの海岸は、たまに男の子が釣りに来てるもん」

たしかに、裸で海岸を疾走するというのは正気の沙汰ではない。わたしたちは、急いで服を身につけた。それから、藪を抜け、斜面を滑り降りて海岸に出たとき、トラバサミはすでに、砂の中から迷彩色の化け物じみた姿を現していた。両方の鋏でミノシロの歩行肢と棘状突起をつかみ、これからどう料理しようかと思案している体である。

わたしは、足がすくんでしまった。トラバサミは、たかが蟹とはいえ、ツキノワグマの成獣を捕殺した例さえ知られており、いくら人間を攻撃することはないと言われていても、呪力を持たない子供には手に余る存在だった。

このときほど、身近に男の子がいたらと願ったことはない。瞬とは言いません、神様。せめて覚でも、今ここにいてくれたら……。

「どうしよう。砂でもぶつけて、脅かしてみる？」

わたしは、ほとんど破れかぶれになっていたが、真理亜は、冷静に状況を見ていた。

「待って。だいじょうぶ。ミノシロが交渉を始めたみたい」

見ると、直前まで暴れていたミノシロが、無数の触手で、なだめるようにトラバサミの鋏を撫で始め

たところだった。トラバサミの方も、彫像のように動かず、おとなしく泡を吹いている。

　ふいに、ミノシロが、背中の上で、大きな触手を三本立てた。触手は、おいでおいでをするような動きを繰り返したあと、ぶつりと根元から切れて、砂地の上に落ちた。触手は、自切したトカゲのしっぽのように、のたうっている。

　トラバサミは、相変わらず、両方の鋏でミノシロの身体をつかんだまま、何食わぬ顔で泡を吹いているだけだった。

　ミノシロは、しばらくの間、身悶えするような動作をしていたが、やがて二本の触手を立てた。二本の触手は、痙攣するような動きを見せ、トラバサミの視界を左右に揺れてから、再び自切して、足下に落ちた。

　計五本の触手が、砂浜でのたうっている。トラバサミは、依然として反応を見せない。ミノシロも、そのまま動きを止めた。

　三十秒ほど経過したあとで、ミノシロは、新たな動きを見せた。今度は、さっきまでの宥（なだ）めるような動作ではなく、一転して、敵意に満ちたものだった。

　逆立ちして長い触手を振りかざし、毒のある刺胞でトラバサミの甲羅を叩く。二度、三度叩いたあと、今度は一本だけ棘状突起を持ち上げた。力を入れているように硬直すると、根元がすぼまっていき、自切する。それは、トラバサミの鋏にぶつかって、ぽろりと下に落ちた。

　すると、トラバサミが、ミノシロを拘束していた鋏をゆるめた。ミノシロは、すばやく身をふりほどくと、身体を慌ただしく波打たせながら、一直線に海へ向かって逃げ去っていく。

　トラバサミは、ミノシロの後ろ姿には目もくれず、まだ動いている六本の触手を二本の鋏で拾い上げて、悠然と食事を始めた。

「どうやら、交渉が成立したみたいね」

真理亜が言った。笑顔だが、生き物があまり好きではないので、頬のあたりが引きつっている。本当は、ミノシロの運命がどうなろうと興味はなかったのに、わたしのために付き合ってくれたのだろう。

「でも、あのミノシロ、六本も触手を切り離したわ。かわいそうに」

「それで命が助かれば、安いものでしょう？　下手をしたら、丸ごと食べられちゃうんだから」

　トラバサミに捕まって逃げられなくなると、ミノシロは、背中で蠢く触手のうちから、何本かを切り離す。トラバサミが触手を食べるためにミノシロを離せば、逃げられるのだ。他に類を見ない興味深い事態はここで出来する。両者の間でミノシロが切り離して与える触手の本数について駆け引きが始まり、落としどころは、何本まで触手を割けるかというミノシロの体力の余裕と、トラバサミの空腹の度合いによって決まるのだ。

　交渉が不調に終わった場合は、ミノシロは、毒のある鋭い刺胞を振りかざして捨て身の反撃を行う。トラバサミ側から見れば、戦闘力では圧倒的に有利とはいえ、万一、ミノシロの刺胞が甲羅の隙間に突き刺さり、多量の毒を注入されれば、死に至る可能性もある。

　双方とも、たいして知能の高い生き物ではないのに、ほとんどの場合、適当なところで折れ合う合理的な選択をするのは、驚くべきことではないだろうか。トラバサミの側からすると、ミノシロを安定的な食糧の供給者と見なし、あえて殺さずに触手だけを奪ってリリースするという選択肢は、理にかなったものなのかもしれないが。

　夏季キャンプに、話を戻そう。

　二日目の朝、わたしたちは飯盒炊爨（はんごうすいさん）を行い、昨晩よりは文化的な朝食を摂ると、昼食用に握り飯の弁当をこしらえた。それから、テントをたたんで、支柱の穴と焚き火の跡をきれいに埋めた。カヌーに荷

物を積み込むと、出発である。

朝靄の立ち上る川を、パドルと呪力を半々に使って進んでいく。左岸からは、しきりに小鳥の声が聞こえてくる。スズメより長く引っ張るような鳴き方は、頬白だろうか。

早朝から空がどんよりと曇っているのは残念だが、早朝の爽やかな空気を肺いっぱいに吸い込むと、眠気も吹き飛ぶようだった。

川幅は、あきらかに昨日よりずっと広くなっていた。右岸は靄の彼方にかすんでおり、ほとんど見えないほどである。

わたしは、和貴園の地理の時間に、霞ケ浦と利根川の変遷について習ったのを思い出していた。

今から二千年前、霞ケ浦は香取海と呼ばれる巨大な内海で、現在の利根川河口で海とつながっていたようだ。一方、利根川は、今よりずっと西寄りに流れており、東京湾へ注いでいたというのだ。

それが、度重なる利根川の氾濫を防止し、耕作可能な土地を増やすために、徳川家康なる人物の号令で利根川の東遷事業が始まり、数百年をかけて、利根川の河口を犬吠埼まで導いたのだという。一方、土砂の堆積によって香取海は縮小し、霞ケ浦という淡水の湖に変貌したらしい。（国家的な大事業を開始した徳川家康という人物には興味を惹かれたが、残念なことに、その名前が出てくるのは、地理と歴史の教科書を通じて、この一箇所だけだった）

そして、この千年間で、利根川と霞ケ浦は、さらなる変貌を遂げていた。まず、かつて東京湾に注いでいた川の多くは、進路を変えられて、利根川に合流させられた。言うまでもなく、呪われた不毛の地である東京を潤す必要など、まったくないからだ。そして、水量が増えて、再び暴れ川となった利根川は、治水のため運河で霞ケ浦につなげられたのだという。このため、現在の霞ケ浦は、かつての香取海に匹敵するほど膨張し、少なくとも面積においては、琵琶湖をしのぐ日本最大の湖になっている。

さらに、利根川の下流域、わたしたちの住む神栖66町の周辺まで来ると、利根川は交通の便のために十数本の運河と、数十本の水路に分割されていた。だから、利根川を遡航して、初めて本物の川に入ったときには、ひどく感動したものである。

「おーい。もっとスピードを上げよう」

三艘のカヌーが並んだとき、覚が提案した。

「どうして？　このあたりの葦原は、調べないの？」

わたしは訊ねた。

「パスパス。どうせ、こんなとこには、たいした生き物はいないよ」

「でも、キャンプの計画表では、もう少し行ったとこで今晩のテントを張ることになってるだろ？」

守が、不安げに口を挟む。

「何言ってんだよ。このキャンプの本当のテーマを忘れちゃったのか？　悪魔のミノシロと風船犬だぜ？　いいから、さっさと霞ケ浦を突っ切って、上陸しようぜ」

「うーん。太陽王からは、霞ケ浦の奥までは行っちゃいけないって言われてたでしょう。それにやっぱり、上陸するなんて……」

いつもは大胆な真理亜も、今回は、少々ためらいを見せた。

「だいじょうぶだよ。ちょっと上がって、ぱっと見て、すぐ戻ってくるだけだから」

覚は、パドルで水面を叩きながら、お気楽に言う。

「どうする、瞬？」

わたしは、一人で考え込んでいる瞬に意見を求めたが、返ってきたのは、予想外の答えだった。

「たしかに、バレるとまずいだろうね。でも、僕は、ちょっと行って見てみたい気がする。ここまで来るチャンスは、もう、あんまりないかもしれないし」

瞬の言葉で空気は一気に遠征論へと傾き、後は悪

知恵のはたらく覚の独壇場となった。今晩のキャンプ予定地へ行って、テントの支柱を立てる穴と焚き火の痕跡を作り、わざと雑に埋め戻しておく。

「これで、次の班が見たときには、僕らがここで一泊したと思うだろう？」

覚は満足げだった。良いこと、正しいことをした後では、こんなに嬉しそうな表情は、まず見せないのだが。

再び湖面に出ると、わたしたちのカヌーは、常識をはるかに超えた速度で疾走し始めた。上空から小鯵刺（アジサシ）が果敢に競争を挑んできたが、サクラマスⅡ号に付いてこられるのは、数秒の間だけだった。またたく間に後方へと置き去りにされた鳥は、反転して、どこかへ飛び去っていく。

わたしは、大きく伸びをした。舳先近くに座って、全身に風を受ける。風で吹き飛ばされる前に麦わら帽子を脱ぐと、髪がまっすぐ真後ろになびいた。ポンチョ代わりのバスタオルは、胸元で二ヵ所きつく結んでおいたが、強風にぶるぶると振動している。

三百六十度、水ばかりの景色だったが、飽きることはなかった。雲間から少し日が射してきていて、太陽の光が透明な水面に乱反射し目もあやな模様を作り出している。しかも、疾走するカヌーが立てる細かい水飛沫（しぶき）に、小さな虹までかかっているのだ。

わたしは、ただうっとりと景色に見とれていた。そのため、視界の変調に気づいたのは、しばらくたってからのことだった。目がひどくちかちかし、様々な色の残像とその補色の影とが、ゆっくりと視界を横切っていく。

覚の方を振り向くと、真剣な顔で湖面を見つめているところだった。水面に浮かぶ舟のような物体を動かす場合、最初は、前方の水面に神経を集中し、舟との距離を縮めるよう念じるのだが、ある程度の速度で動き出してからは、水面が斥力（せきりょく）によって舟を前方へ送り出してゆくイメージを作るのと同時に、

舟底が滑走していく感覚をも保持し続けなければならない。

　どちらも、極度の精神の集中を要するため、長く続けていると、かなりの疲労を感じる。しかも、波で舟が上下に揺れるため、水面を凝視しているだけで酔いやすいのだ。

　覚はわたしが振り向いたのを見て、誤解したらしく、ほっとしたように言った。

「もう、だいぶ来たと思うな。そろそろ、交代してくれる？」

　わたしは、ゆっくりと首を振った。

「だめだと思う」

「だめ？　だめって、どういうことだよ？」

　覚は、むっとしたようだった。

「目がおかしいの。ちょっと、強い光を見すぎたみたい」

　わたしは、症状を説明した。覚は、呆れたようだったが、渋々、了解してくれた。

「しょうがないな。じゃあ、いいよ。カヌーの進行は僕がやるから」

　わたしは、覚に礼を言ってから思い出し、ナップザックから赤い色のサングラスを出して、かけた。父が持たせてくれたもので、ガラス職人が思念を凝らして作った高純度のガラスに、眩しさを感じる青い光をブロックするよう、茜や柿渋などを調合した赤茶色の染料を薄く均一に混ぜ込んだものである。最初からかけていれば、目を痛めることもなかったのだろうが、うっかりしていたのだ。

　サングラスをかけると、霞ケ浦の景色はまるで夕闇に沈んでいるように見えたが、目がちかちかするのはかなり治まった。

　視力に少しでも不安を感じた際には、呪力を使うことは固く禁じられていた。鏑木肆星クラスの達人になると、暗闇の中でも自在に呪力を使いこなすと言われているが、わたしたちのような初心者の場合には、対象をしっかりと見てその状態を正しく把握

できなければ、予想もつかないような不都合が起きかねないからである。

わたしたちは、ものの一時間ほどで霞ケ浦を突っ切った。最深部に達したとき、葦原で大きな水音がしたかと思うと、水中を大きな影が横切り、素早く姿を消した。幅の広い菱形だったので、たぶんトラバサミのようだ。これまでは陸上でしか見たことがなかったので、想像していたよりはるかに泳ぎがうまいことに驚く。

葦の間から、深い森の間を縫って霞ヶ浦に注ぐ緑色の川が見えた。事前に調べておいたところでは、桜川という名前らしい。筑波山は、すぐ目の前にそびえているようだったが、しばらく遡って行くと、両岸から張り出した木の枝に隠されて、見えなくなってしまった。

途中で、川が二股に分かれていた。少し迷ったが、左手のより太い流れを選ぶ。さらに一キロほど進むと、うっそうと茂った木々の間から視界が開けた。桜川は筑波山の西側を北上しているようだ。

これ以上進んでも、かえって筑波山から遠ざかることになると判断し、わたしたちは、上陸することにした。

「やった！　とうとう、こんなとこまで、やって来たぞ」

真っ先に地面を踏みしめた瞬が、嬉しそうに言った。ついで、わたし、真理亜、守の順に降り立った。覚は最後だった。ずっと一人で精神集中を続けてきたので、ひどく疲れて気分が悪そうに見えた。覚は一人で茂みの方へ行って、少し吐いていたようだったので、わたしは、内心ひどく罪悪感を覚えた。

とりあえず、カヌーを葦の間に隠すことにする。ここまで来れば誰かに見られることはまずないだろうが、万が一に備えてというくらいの気持ちだった。念のため、波にさらわれないよう、泥の中に深く錨（アンカー）を打ち込んでおいた。

「どうする？　もう少しすると、お昼だけど」

守は、空腹を感じているらしく、期待を込めた表情で、みんなの顔を見回す。

「とりあえず、軽く背負えるだけの荷物を持って、山に登ってみようか。見晴らしのいいところで、お弁当を食べればいいんじゃないかな」

覚がまだグロッキーなので、瞬が、みんなを引っ張っていく役を買って出た。同じことを覚が言っていれば、文句が出たかもしれないが、瞬の言葉だとすんなりと通ってしまう。それで、ナップザックを背負って、山登りに出発することになった。

とはいえ、道なき道を進むのは、思った以上に骨が折れた。先頭を歩く人間が、呪力で蔦や雑草を切り開いていくのだが、五分もしないうちに疲れてしまい、交代しなければならなかった。

加えて、閉口したのは、藪蚊や蟆子（ブヨ）などの吸血昆虫の襲来だった。その手の厭らしい虫は、八丁標の付近には、まったくといっていいほど棲息していないのに、このあたりでは、殺しても殺しても、際限なく湧いてくるのだ。よけいなことに間断なく呪力を使わなければならないために、みな、消耗が激しかった。わたしはといえば、サングラスのせいで小さな虫を見るのが困難だったせいで、ほとんど疲れ果ててしまったと言ってもいい。

だから、唐突に目の前に異様な廃墟が現れたときには、誰もが、思わず立ちすくんでしまった。

「何、これ？」

真理亜が、気味悪そうに訊ねた。怖じ気づくのも無理はない。公民館ほどもある大きな屋根の建物が、蔦や苔などの緑にすっかり覆われて、半ば森と同化しながら、ひっそりと息づいているのだ。

「……たぶん、筑波山神社だ」

覚が、持ってきた古地図を眺めながら言う。まだ、いつもの調子ではないが、他のみんなとは違って、上陸したときよりは、多少、元気を取り戻しているようだ。

「神社？」

　反問しながら、わたしは、足下にいたヒキガエルを踏みつけそうになって上げかけた悲鳴を呑み込んだ。この山と来たら、そこら中に、この不格好な生き物がのそのそと這い回っているのだ。

「少なくとも、二、三千年の歴史がある由緒ある神社らしいよ。この建物も、千年前には、もう、相当古かったんじゃないかな」

　瞬が補足する。

「ここで、お弁当を食べる？」

　守が訊ねた。たしかに、みな、空腹にはなっていたが、こんなところで昼食というのも、ぞっとしない話だった。

　異議を唱えようとしたとき、左手から押し殺したような叫び声が聞こえた。また誰かがヒキガエルを踏みつけそうになったのだろうか。そう思って見ると、棒立ちになった覚の姿が目に入った。そして、駆け寄った瞬もまた、完全に硬直している。

「どうしたの？」

　気がつくと、わたしを除く四人が、完全に、木偶（でく）人形のような状態に陥っていた。誰一人、わたしの問いかけに応えようとはしない。

　いったい、どうしたというのだろう。わたしは、危うくパニックになりかけた。そして、四人の視線の先を見て、今度こそ金切り声で悲鳴を上げた。

　これまでに見たこともないような、奇怪な生き物がそこにいたのだ。

『悪魔のミノシロ』、『ミノシロモドキ』という言葉が、脳裏に浮かび上がる。たしかにそれは、一見、ミノシロに似ていた。だが、よくよく見ると、全然違う。

　長さは、五、六十センチくらいか。まるでゴムでできているように絶えず伸縮し続け、なおかつ表皮の一部が不規則に膨張と収縮を繰り返しているため、全体としては不定形と形容するしかない。しかも、背面には海胆（うに）の棘に似た半透明の突起が数多く

蝟集し、その一本一本が、ミノシロや蛍などとは比較にならないくらい強烈な、七色の光を点滅させているのだ。

千変万化する光は、重なり合い、干渉し合うことで、空中に、縞のような、渦のような模様を作り出している。赤いサングラスをかけていてさえ、その美しさは脳髄を痺れさせるようだった。

ミノシロモドキは、虹色の残像を背後にたなびかせながら、ゆっくりと社殿の下に滑り込んでいく。自分の悲鳴で、脳の一部が覚醒したようだった。わたしは、覚と瞬に向かって叫んだ。

「早く……覚！　瞬！　捕まえて！　逃げちゃうわ！」

だが、二人とも、何の行動も起こそうとはしない。ただ茫然と、ミノシロモドキが逃げ去るのを見送っているだけだ。

わたしは、呪力を発動しようとして、ためらった。前にも述べたが、同じ対象に向かって、複数の人間が呪力を及ぼすことは、非常に危険である。先に誰かが視線を固定していれば、後の人間は、どんな事情があっても遠慮すべきなのだ。

覚も、瞬も、ミノシロモドキを凝視している。普通なら、今にも呪力を使っておかしくない状態だった。にもかかわらず、二人とも、凍りついたように動かない。

長い長い時間に思われたが、実際には、ほんの数秒のことだったのだろう。ミノシロモドキは、悠然と、蔦と丈の長い雑草で覆われた社殿の縁の下に消えてしまった。

わたしは、依然として身動きしない四人を見て、途方に暮れていた。どうすればいいのかわからなかったし、そもそも、何が起こったのかさえ見当もつかない。肩に手をかけて揺すってみようかと思ったが、触ったとたんにぱったりと倒れて死んでしまうのではないかという理不尽な恐怖に囚われてしまい、まったく動くことができなかった。

最初に呪縛から解けたのは、意外なことに、守だった。

「……腹が減ったな」

小さな声でつぶやき、周りを見回す。

「ええと。いったい、どうしちゃったんだろう？」

ついで、真理亜、覚、瞬の順で動きがあった。三人は、その場にへたり込んだ。覚は、また、ひどく気分が悪そうな顔になっていた。瞬は、うつむいて両目を擦っている。

「わたしたち、死ぬのかしら？」

真理亜の言葉には人をぎょっとさせる効果があり、皮肉なことに、すっかり覚醒させてくれた。

「あの話だったら、たぶん嘘だから、気にしないでいい」

覚が呻く。『たぶん』と付けたのは、嘘つきは自分ではないというアピールだろう。

「それより、どうして、僕らは動けなかったのかな？」

「わたしも。え？　何で何で？　覚？」

真理亜は、不安げに自分の両肩を抱きしめている。

「わかんないよ。あの光の点滅を見てたら、何だか頭がぼおっとしてきて、精神集中できなくなっちゃったんだ」

「あ！」

わたしは、はっとして叫んだ。

「あのときの感じに、似てなかった？　ほら、清浄寺で、護摩壇の炎を見つめてたとき……」

「そうか」

瞬は、ようやく立ち上がりながら、うなずいた。

「やっぱりそうだ。さっきのは、催眠術なんだ」

「何、それ？」

「大昔からある、人の心を操る技術さ。暗示をかけることで、眠らせたり、自白させたり、好きなことをさせられるらしいんだ」

瞬は、どこからそんな知識を仕入れたのだろう

と、不思議に思う。

「でも、早季は、この中では、一番平気だったよな。捕まえろとか、大声を出してたし。鈍感なのかな」

覚の指摘に、わたしは、むっとした。

「違うわよ！　わたしは、サングラスをかけてたから……」

一番感受性が鈍かったのは、まちがいなく守だろうと思ったが、八つ当たりもいいところなので黙っていた。

「催眠術では、赤と青の光のちらつきが有効らしいんだ。赤いサングラスで、その効果が半減したんだな。ちょっと見せて」

瞬は、またもや、どこで知ったのかと思うような知識を披露すると、わたしが手渡したサングラスを、かけたり空に透かして眺めたりしていた。

「だけど、あいつに対して、まともに呪力を使えるのが早季一人だとすると、追いつめて捕まえるのは、かなり厳しいかもしれないな。あいつは、ああやって狭いところに潜り込むのが好きみたいだし」

「そうみたいね。ねえ、わたしたち、もう帰った方がいいと思うんだけど？」

真理亜も、珍しく弱気になっていた。

「じゃあ、カヌーのとこまで戻ってから、お弁当を食べるのはどうかな？」

守の意見は、はたして弱気に分類すべきなのかどうか、わからない。

そのとき、わたしの頭の中で、一つのアイデアがひらめいた。

「だいじょうぶ！　捕まえられるわ」

半信半疑だった四人の表情が、わたしの説明を聞いているうちに、やれそうだという希望に輝き始めた。正直言って、いい気分だったことは否めない。

ミノシロモドキを捕えるという行為がどういう意味を持つのかは、このときはまだ、知るよしもなかったのだ。

「よーし、いいぞ。大漁だ」

少し休憩を取ってすっかり元気を取り戻した覚が、満足げに言った。

「こいつらって、もしかしたら、けっこう美味しいかもしれないよ」

こちらも、弁当をたいらげて、たっぷりと英気を養った守が言う。

「これを見て食欲を刺激されるのは、千人に一人だろうな」

瞬は呆れ顔になったが、わたしも同感だった。

わたしたちの前方、二メートルほどの高さに浮かんでいるのは、三頭のトラバサミだった。いずれも、観念したように身動きせず、泡を吹いている。三頭とも、甲羅の全体的な色合いは、濃い緑色と薄緑、茶色が混じり合ったものだが、意匠はそれぞれ違っていて、一番大きな個体は地図のような模様だった。中ぐらいの一頭には植物の根を思わせる細い縞が、一番小さな個体には、苔が生えたような細かい斑点が入っていた。

地図模様のトラバサミを呪力で浮かせていた覚が、腹側がどうなっているのか見ようとしたらしく、くるりと回転させた。その瞬間、この蟹の獰猛な本性が、はからずも剝き出しになった。隣にいる細い縞の個体が視界に入ったらしく、遊泳用の第四脚を突っ張り、宙を泳ぐような動作をしながら、鋏をいっぱいに伸ばして襲いかかろうとしたのだ。

「うわっ。何だ、こいつ」

覚は、一瞬怖じ気づいて逃げ腰になったのをごまかそうとして、にやにやと笑みを浮かべる。

わたしたちは、頑丈なアケビの蔓で三頭の体を縛った。トラバサミができるだけ自由に動けるようにしつつ、蔓から抜け出せないようにくくりつけるのは、呪力を使っても容易なことではなかった。手芸が得意な真理亜が、両側に突き出たトラバサミの甲羅に二つの輪を引っかけて、中央で締める結び方を

編み出したが、蟹は思ったより狡猾で、蔓が緩んで手が届く範囲に来たとたんに、鋏で引きちぎろうとする。そのため、背中の結び目から数十センチくらいまでは、節を抜いた竹に蔓を通し、トラバサミの鋏が届かないように工夫しなければならなかった。

トラバサミの捕獲に始まり、予想以上に手間はかかったものの、結果は満足すべきものだった。三本の長い蔓の先に付けたトラバサミの姿は、どこか、太古の漁法である鵜飼いを彷彿とさせる。三頭を互いに近づけないように気を配りつつ、わたしたちは、ミノシロモドキの探索を開始した。

蔓の先に結びつけた凶暴な蟹を操ることが、多少なりとも楽しいのではないかと考えていたわたしたちの期待は、完全に裏切られた。トラバサミは、不幸にも鋏の届く範囲内にいた、ありとあらゆる生き物を捕らえては、胸のむかつくような貪食ぶりを発揮したのだ。

最初のうちは、トラバサミが満腹してしまうと、探索が滞るのではないかという心配で、捕まえた獲物をいちいち取り上げていたが、鋭い鋏で真っ二つにされて、もがき苦しんでいるアオダイショウやヒキガエルの姿には、心底うんざりさせられたので、なすがままにまかせるようになった。

もし、そのまま、何の成果もなかったとしたら、これほどまでに不愉快な猟を提案したわたしは、ただ、みんなに恨まれるだけに終わっていただろう。

だが、トラバサミを放して小一時間たったころ、真理亜が蔓を持っていた一番小さな蟹が、見事に金的を射止めた。

「また、何か捕まえたわ」

社殿の縁の下を覗き込みながら、真理亜が心底厭そうな顔をして言ったのを覚えている。

「今度は、ちょっと大きいみたい……」

それを聞いて、我々は全員、たじろいだ。哺乳類がトラバサミに捕まって喰われる様は、誰ひとりとして見たくないと思っていたはずだ。

「引っ張り出してみろよ」

覚が、そっぽを向いて言う。

「手伝ってよ」

「自分でできるだろう？　呪力で蔓を引くだけなんだから」

「だって、気持ち悪いじゃない」

真理亜は、訴えかける目をして、我々全員を見渡した。わたしは、自分の蟹が何か捕まえかけているというふりをして無二の親友の切なる願いを無視したことを、告白しなくてはならない。その少し前に、覚の蟹が捕まえた獲物をバラバラに解体しているのを見てしまったため、かなり気分が悪くなっていたのだ。

「じゃあ、僕がやるよ」

白馬の騎士役を買って出たのは、意外にも、守だった。

二人が縁の下からトラバサミを引き出す間、残りの三人は遠巻きにして見守っていた。ウサギか何か、可愛らしい動物だったら厭だなと思っていたのだ。

「あ……あっ！　あれ？　捕まえたんじゃないか？」

最初に気づいたのは、瞬だった。その声で、全員がいっせいに、トラバサミが挟んでいる物に注目する。

「ミノシロモドキだわ！」

真理亜が叫んだ。このとき、すぐに気づいてサングラスをかけたのは、わたしの目立たないファインプレイだったはずだ。

アケビの蔓の先に繋がれている蟹は、二本の鋏で、しっかりと獲物を確保していた。

まちがいない。さっき逃した奴だ。トラバサミが挟む凄まじい力にもかかわらず、その身体は切断されておらず、懸命に逃げようともがいている。そのとき、わたしたちの視線に気がついたらしく、突然、半透明の突起の先端が七色に輝き始めた。

「瞬！　覚！　捕まえて！」

そう叫んだとき、わたしは、さっきと寸分違わない状況に陥っていることに気がついた。わたし以外の四人は、ただ突っ立っているだけだ。ミノシロモドキの催眠術に、まんまと嵌ってしまったのだ。

わたしがやるしかない。さいわい、今度は強い味方がいる。催眠術など一切受けつけない低級な脳みそに、摑んだものは絶対に離さないという決意をみなぎらせ、ぶくぶく泡を吹いている凶暴な蟹が。

サングラスをかけていただけでなく、今回は、最初から、光のパターンを見ないように気をつけていたので、頭の芯がくらくらするようなことはなかった。わたしは、薄目を開けて呪力を使い、光る突起を順番にねじ曲げて、引き抜いていった。

「破壊行為をやめてください」

どこからか、突如として響いてきた柔らかい女性の声に、わたしはぎょっとした。

「誰？　どこにいるの？」

「あなたが損壊しているのは、公共の財産である図書館の備品です。今すぐに、破壊行為をやめてください」

声は、目の前にいるミノシロモドキから聞こえてきていた。

「あんたが、わたしたちに催眠術をかけるからよ」

「光による眩惑は、端末機械の自己防衛策として、法令４８８７２２－５項によって認められています。今すぐに、破壊行為をやめてください」

「そっちが催眠術をかけるのをやめたら、わたしだって、これ以上、光るものを引き抜いたりしないわ」

「重ねて警告します。今すぐに、破壊行為をやめてください」

ミノシロモドキの石頭ぶりに、かちんと来て、わたしは言った。

「こっちも警告するわ。そっちがやめなきゃ、こっちもやめないわよ。その光ってるやつを、全部引き

抜いちゃってもいいのね？」

驚いたことに、ミノシロモドキは、ぴたりと発光をやめた。単純きわまりない脅しだったのに、功を奏したらしい。

「だいじょうぶ？　みんな」

わたしは、四人の様子を見たが、全員、かなり控えめに表現したとしても、茫然自失の態だった。

「今すぐ、みんなにかけた催眠術を解いて！　さもないと、全部、毟ってやるから」

わたしが厳しい声で言うと、ミノシロモドキは、慌てたように応答した。

「光による眩惑の影響は、時間とともに減衰していきます。国立精神医学研究所の医学レポート４９４６３１６５号に示されるとおり、後遺症はいっさい認められません」

「催眠術を、解きなさい。今、すぐ、よ。さもないと……」

その先を続ける必要はなかった。ミノシロモドキは、突然、耳をつんざくような大音響を発した。思わず耳を押さえてうずくまると、四人が、夢から覚めたように動き出すのが見える。

わたしは、ゆっくりとミノシロモドキの方を振り返った。舌と口蓋の間には、顎が外れそうになるほどたくさんの質問が詰まっている。

「あんたは、誰？　いったい何なの？」

「わたしは、国立国会図書館つくば館です」

「図書館？」

「機種および型番をお尋ねでしたら、Panasonic自走型アーカイブ・自律進化バージョンSE778Hλです」

後の説明は何を言っているのかわからなかったが、いくら化け物とはいえ、あまりにも突拍子もない自己紹介だった。たとえば、街を歩いているときに、向こうからにこやかに近づいてきた人が、こんにちは、私は公民館ですとか、学校なんですとか言うようなものではないか。

「あんたは、あんた自身が図書館だって言ってるの？」

　わたしは、慎重な言葉遣いで訊ねてみた。

「そうです」

　あらためて、ミノシロモドキのボディをつくづくと眺めてみる。不規則なくねくねした動きや、発光が止んでしまうと、たしかにそれは、作り物のようにも感じられる。

「じゃあ、本はどこにあるわけ？」

「紙媒体に印字されたインターフェイスは、すでに、ほとんどが酸化して朽ち果てたか、戦乱および破壊行為によって焼尽（しょうじん）されたために、現在、存在は確認されていません」

「よくわからないけど、要するに、本はないってこと？　だったら、あんたは、空っぽの図書館なの？」

「すべての情報は、アーカイブに搭載されている、容量８９０ＰＢ（ペタバイト）のホログラフィック記憶デバイスに収められています」

　何を言ってるのか、全然わからない。

「……もし、あんたが、わざと難しい言葉を使って煙に巻こうとしてるんだったら、やっぱり、その触手みたいなやつを全部引き抜いた方がいいかもね」

　わたしは、常日頃からこんな脅しを得意にしているわけでは、けっしてないのだが。

「すべての書籍の内容は、私の内部にある記憶装置に保存されており、随時呼び出しが可能です」

　ミノシロモドキは、ほとんど即答した。依然としてほとんど意味不明だが、少しはましになったと思う。

「すべての書籍って、どういうことなんらよ？」

　ようやく喋れるようになった覚が、横から口を挟んだが、呂律が回っていない。

「西暦二一二九年までに日本語で出版されたすべての書籍、三千八百二十四万二千五百六冊及び、英語など他の言語で印刷されている参考図書、六十七万

千六百三十冊のことです」

　わたしたちは、顔を見合わせた。茅輪の郷にある神栖66町最大の図書館でも、ふだん公開されている蔵書はせいぜい三千冊足らずであり、地下の大書庫にあるすべての書籍を併せたとしても、おそらくは一万冊に満たないだろう。このちっぽけな身体に、その四千倍近い数の書籍が納まっているというのは、覚も真っ青なホラ話にしか思えなかったのだ。

「随時呼び出しが可能っていうのは、いつでも読めるっていうこと？」

「おっしゃるとおりです」

「じゃあ、たとえば、わたしが何か質問したとすれば、あんたは、その、すごく小さくてたくさんの本の中から、正解を探し出せる？」

　半信半疑で訊く。

「はい。検索に要する時間は、平均で六十ナノ秒です」

　ミノシロモドキ、あるいは国立国会図書館つくば館は、誇らしげに答えた。六十ナノ秒というのは、よくわからないが、六十秒なにがしとでもいう意味だろうか。

「そ、それじゃあね……訊くけど……！」

　わたしは、急に興奮を感じ始めた。今まで知りたかったことについて、ほとんど何でも答えが得られるというのだ。頭の中に、いちどきに百もの質問が駆けめぐる。

「なんで、このあたりには、こんなにヒキガエルが多いんだ？」

　タッチの差で、覚が、世にもくだらない質問をしてしまった。

「あなたは図書館なのに、どうして、そんな姿をしてるの？」

　これは、真理亜。瞬も何か訊こうとしたようだったが、まだ催眠術で頭が痺れているらしく、発音が不明瞭で聞き取れない。

「わたしはね……わたしが訊きたいのは」

ようやく、一番訊きたいことがまとまった。

「悪鬼っていうのは、本当にいるの？　それから、業魔は？」

　それから、わたしたちは、固唾を呑んで待ち続けた。だが、六十秒が過ぎ、二分、三分が経過しても、ミノシロモドキはうんともすんとも言わない。

「おい。答えはどうしたんだよ？」

覚が、とうとう我慢しきれなくなって詰問した。

「質問・検索サービスには、利用者登録が必要です」

　ミノシロモドキの声には、わたしたちを無用に待たせたことへの罪悪感は、微塵も感じられなかった。

「なんで、それを最初に言わないんだよ？」

覚の声が、少し険悪になった。

「利用者登録って、どうするの？」

　ミノシロモドキは、覚を無視して、後の真理亜の質問にだけ反応した。

「登録ができるのは、満十八歳以上で、氏名・住所・年齢を証明するために、以下のものが必要です。運転免許証。保険証（住所記載のあるもの）。パスポート（生年月日の記載《旅券部分》と、現住所記載部分のコピーが必要です）。学生証（住所・生年月日の記載のあるもの）。住民票の写し（三ヵ月以内に発行されたもの）。公的手帳及びそれに準ずるもの。これらは、すべて、有効期限内のものです」

「十八歳以上？　でも、わたしたちは……」

「なお、次の書類は不可となりますので、ご注意ください。社員証、学生証（住所または生年月日の記載のないもの）、定期券、名刺……」

　ミノシロモドキが羅列しているのは、たぶん、遠い昔に効力を持っていた紙切れの名前だろう。歴史の時間に、人間より紙切れに重きを置いていた奇妙な時代について習ったことがあったので、見当が付いた。

「そういうものは、何もないんだけど、どうすればいいの？」

　わたしは訊ねた。

「利用者登録が未完了の場合は、質問・検索サービスをご利用になることはできません」

　ミノシロモドキは、相変わらず柔らかく品のいい声で言った。

「じゃあ、しかたがないわね。とりあえず、あんたをバラバラに分解して、中に入っている本を見てみることにするわ」

「破壊行為は、刑事罰の対象となります」

「どうしよう？　とりあえず、触手を全部抜いてから、半分に割ろうか？」

　わたしは、覚に向かって料理の手順を相談するように言った。

「そうだな。真っ二つにする前に、あのゴムみたいな皮を剝いだ方がいいかもしれない」

　覚は、わたしの意図を察知して、にやにやしていた。

「……書類による手続きは省略されました。これより利用者登録を開始します！」

　ミノシロモドキは、前にも増して感じのいい女性の声で明るく叫んだ。

「ご利用になる方は、お一人ずつ、できるだけはっきりした発音でお名前をおっしゃってください」

　言われるままに、一人ずつミノシロモドキの前に立って、名前を言った。

「虹彩・声紋認証および脳核磁気共鳴画像認証が完了しました。利用者登録は有効です。青沼瞬様、秋月真理亜様、朝比奈覚様、伊東守様、渡辺早季様は、本日から数えて、三年間、質問・検索サービスをご利用になれます」

「じゃあ、このあたりには、なんで、こんなにヒキ……」

　またもや愚にも付かない質問をしそうになった覚の口を、瞬が右手で塞いだ。

「聞きたいことは山ほどあるんだけど、まず、さっき早季がした質問の答えが知りたい。……悪鬼っていうのは、本当にこの世にいるのか？　それから、業魔は？」

ミノシロモドキは、今度は一秒も考えなかった。

「悪鬼という言葉は、データベース上に六十七万千四百四十一件存在しますが、二種類のラフ集合に分類されます。①は古代からの伝承に散見される想像上の存在で、悪魔や妖怪、食屍鬼（しょくしき）などと同一視されることもありますが、実在はしていません。②は、先史文明の末期に現れたラーマン・クロギウス症候群、別名『鶏小屋の狐（フォックス・イン・ザ・ヘンハウス）』症候群に該当する精神病質者を指す言葉です。現在は、その存在は確認されていませんが、かつて存在したことは厳然たる事実であり、将来、再び誕生する可能性は高いと思われます」

わたしたちは顔を見合わせた。ミノシロモドキが語る言葉が十全に理解できたわけではなかったが、その内容が、わたしたちがけっして教えられることがなく、絶対に知ってはならないはずの知識であることは直感できたのだ。

「業魔とは、やはり先史文明が崩壊する直前に出現した、橋本・アッペルバウム症候群の重篤期患者に対する俗称です。悪鬼と同様、現時点で生存している業魔はいないと考えられますが、再発生の危険性は常にあります」

「それは……」

瞬が、質問をしかけてためらった。

わたしは、青ざめた横顔を見て、彼が考えていることは痛いほどわかった。

これ以上、訊かない方がいい。無意識からの警告はそう告げていた。

だが、いけないとわかっていてもパンドラの箱を開けてしまうのが、有史以来変わることのない人間の性なのである。

7

「……先史文明において、長くオカルトの薄闇の中に置かれてきた念動力現象、すなわちサイコキネシス（PK）が、科学の曙光によって照らし出されたのは、キリスト教暦二〇一一年のことでした」

　ミノシロモドキは、淡々と説明した。抑揚には知性が感じられ、女性らしい潤いもある、とても魅力的な声だったが、発音が端々まであまりにも正確なため、かえって非人間的な感じがした。

「それ以前に、公衆の面前や科学者の監視下で行われたPKの実験は、必ずといっていいくらい、無惨な失敗に終わっていました。しかし、二〇一一年に、アゼルバイジャン共和国の認知科学者イムラン・イスマイロフが首都バクーで行った実験は、ほぼ完璧な成功を収めました。量子力学の分野では、観察すること自体が対象に影響を及ぼし変化させるというパラドックスが知られていましたが、PKにおいては、それが微視的（ミクロスコピック）な世界から巨視的（マクロスコピック）な事象にまで拡大されるだろうと予言したのは、科学者としては、イスマイロフが初めてです。実験結果に対して否定的な予想を抱いている観察者は、PKの発動への潜在的な対抗力（カウンターパワー）としてはたらき、実験に深刻な影響を及ぼすことから、イスマイロフは、観察対象を可能な限り細分化し、観察者の誰一人実験内容の全体像がわからないようにした上で、イスマイロフ本人を含め実験意図を知る人間からは日時と場所を隠すという、多重盲検法によって……」

　わたしたち五人は、魅入られたようにミノシロモドキの語る長い話に聞き入っていた。話の内容は一パーセントも理解できなかったが、わたしたちの耳から脳に流入した言葉は、乾いた地面を潤す雨水のようにスムーズに吸収されていった。

　それまでのわたしたちの世界に関する知識は、一群の最も重要なピースが欠けている、ジグソーパズ

ルのようなものだった。そして、ミノシロモドキの言葉は、その欠落を埋め、好奇心の渇をいやしてくれるものだったのだ。

だが、それにより浮かび上がってくるのが、身の毛もよだつような地獄絵図であるとは、想像もしていなかった。

「……イスマイロフが見出した世界で最初の超能力者、ノナ・マルダノワという十九歳の女性にできたのは、透明なチューブに密閉された羽毛のように軽いプラスチックのボールを動かすことだけでした。しかし、ある種の化学物質の溶液中で、最初に生まれた一つの結晶が周囲を同じ結晶に変えていくように、彼女はいわば、人類全体の変化を促すための種結晶の役割を果たしたと考えられます。彼女に続いて、世界中の人々の中で、それまで眠っていた力が目覚め始めました」

いつのまにか、真理亜が横に来ていて、わたしの手を強く握った。人類は、いかにして、神の力である呪力を手にしたのか。その最初の挿話は、わたしたちの歴史の教科書の中でも、どこか曖昧にぼかされていた。

「……PKを獲得した人間の数は急激に増加して、最終的に、世界の総人口の〇・三パーセントにまで達しましたが、そこで高原状態（プラトー）に移行しました。その後、長期にわたった社会的な混乱状態のために、資料や統計類はほとんど消失してしまいましたが、PK能力者には統合失調症型（シゾイド）のパーソナリティが占める比率が高かったという調査結果が残っています」

「たったの、〇・三パーセント？」

覚が、不審げにつぶやいた。わたしも、その点は不思議だった。残り九十九・七パーセントの人間は、いったい、どうなってしまったのだろう。

「社会的な混乱状態って、どういうこと？」

真理亜が訊ねた。

「最初は、一般人の側において、PK能力者に対す

る排斥運動が起きました。黎明期においては、能力者は、きわめて微弱なパワーしか揮うことができませんでしたが、それでも、当時の社会秩序を破壊するのに充分な可能性を秘めていました。日本においてその決定的な引き金となったのは、少年Aが起こした事件でした」

「少年Aって？　それ、名前？」

守が、眉間に皺を寄せて訊く。

「当時、未成年者が犯罪を犯した場合、実名報道がされることは、ほとんどありませんでした。そのため、Aという符号で呼ばれていたのです」

「その子は、何をしたの？」

わたしは訊ねた。最悪でも、人のものを盗んだというくらいの答えを予期して。

「Aの能力は微弱なものでしたが、ある日ふと、PKを使えば、どんな錠前も自在に開けられることに気づきました。彼はその能力を使って、深夜、集合住宅の部屋に侵入を繰り返し、就寝中の女性十九人に性的暴行を加え、うち十七人を殺害したのです」

わたしたちは、凍りついた。自分の耳で聞いている言葉が、とても信じられなかった。性的暴行。そして、殺人。……人を殺すこと。

「待ってくれよ。そんな、馬鹿な。ありえないだろう。だって、その、Aって奴だって、人間なんだろう？　人間が、人間を殺したって？」

覚が、かすれた声で叫んだ。

「そうです。さらに、Aの逮捕後にも同様の事件が相次ぎましたが、それらの多くは、結局、犯人が特定できず、迷宮入りとなりました。それも、監視カメラの機能を狂わせるなど、PKを使った手口によるものでした。その結果、一般人の怒りは、PK能力者全体に向けられ、隠微な嫌がらせから公開処刑に近いリンチまで、様々な暴力事件が頻発しました。こうした状況に対して、能力者の側でも、防衛のための組織が続々と生まれましたが、そのうち最も尖鋭化した組織では、一般人を淘汰して能力者だ

けの社会を樹立することを謳い、ついにはPKを使った無差別テロを行うに至りました。これに、様々な政治的、人種的、思想的対立が複雑に絡み合い、世界中は、いつしか、混沌とした戦いの時代に突入したのです。かつて経験したことのない、万人の万人に対する戦闘状態が、いつ果てるともなく続きました」

わたしは、啞然としてみんなの顔を見回した。誰もが恐怖のあまり、表情を失っていた。守は、両手で耳を塞ぎ、その場にうずくまっている。

「……軍事超大国アメリカでは、ついに、能力者を根絶するための内戦が始まりました。電気ショックを与えて能力者を見分ける簡易判別機と、国中に溢れていた銃器によって、北米大陸の能力者は、一時期、人口の〇・三パーセントから、〇・〇〇四パーセントにまで激減しました」

覚は、ずっと首を振りながら、嘘だ、嘘だとつぶやき続けている。

「……一方、科学技術大国のインドでは、能力者と非能力者のDNAの差異を突き止めることに成功し、すべての人類に遺伝子操作によってPK能力を付与する研究が急ピッチで進められていました。残念ながら、この試みは実を結びませんでしたが、このときの研究データは、後になって、別の形で役立てられることとなりました」

わたしは、夢から覚めたような気分で、トラバサミに挟まれている奇怪な生物・機械を見た。これは、もしかしたら、地獄からよこされた悪魔ではないのか。わたしたちを迷わせる奇怪な言葉を吐き続け、最後は、精神の平衡を失わせてしまうために。

「……皮肉なことに、間断なく生命の危機を感じさせられる状況により、生き残った能力者たちのPKは、飛躍的な進化を遂げました。当初、PKは、脳で糖を分解して得られたエネルギーを投射しているのにすぎないと考えられていたのですが、それが間違いで、事実上、使えるエネルギーに上限がないこ

とが判明しました。この当時、最強の能力者は、すでに、核兵器をしのぐ力を手にしていたようです。そして、能力者側の反攻で形勢は逆転し、地球上のすべての政府は事実上瓦解しました。ここにおいて、現在の史書には載っていない文明、すなわち先史文明は完全にリセットされました。時計の針は逆回りして、再び暗黒時代へと戻ったのです。世界の人口は、戦乱と飢餓、疫病の発生等により大幅に減少し、最盛期の二パーセント以下になったと推計されています」

頭の芯が痺れている。実に嫌な気分だった。わたしは、ミノシロモドキのお喋りを止めたいと思ったが、何を言っていいのかわからず、唇から言葉を発することすら困難になりつつあった。おそらく、みんなも同じ状態だったと思う。

「……約五百年間続いた暗黒時代に関して、世界の状態を正確に記述することは不可能です。インフラの崩壊に伴い、インターネットは寸断され、自然消滅しました。情報が、再び、地理的な壁によって阻まれるようになり、人々は閉ざされた狭い世界に住むようになりました」

ミノシロモドキは、まるで楽しいことを話しているような声で続けた。

「しかし、この間も、細々とながら書籍は発刊されていました。この時代で最も信頼が置ける文献では、東北アジアにおいては、人間の社会は四種類の相容れない単位に分断されていました。人口が激減したことで、皮肉にも、ある程度の棲み分けが可能になったのです。第一は、少数のPK能力者が多数の一般人を支配する奴隷王朝。第二は、山野に隠れ住み、移動し続けることで奴隷王朝の脅威から逃れていた非能力者の狩猟民。第三は、家族単位で放浪し、PKによって襲撃と殺戮を繰り返していた略奪者たち。そして最後は、先史文明の遺産により電力供給を維持し、細々と科学技術文明を伝承していた集団です。いうまでもなく、書籍の発行を継続して

いたのは、第四の人々です」

「書籍って……さっき言ってた、君の中に入る、ものすごく小さな本を作ってたってこと？」

瞬が、咳払いをして、わたしたち五人の沈黙を破った。ようやく話題が変わって、少しほっとした空気が流れた。

「いいえ。古い活版印刷の技術を復活して作られた、普通の書籍です。私たち図書館は、それをスキャンして、文字データを取り込むのです」

肝心なところになると、急に何を言っているのかわからなくなる。

「じゃあ、君たちは、第四の集団と一緒にいたの？」

「定期的な接触はありましたが、かといって常に行動を共にしていたわけではありません。図書館の存在意義は、人類の財産である知識を守ることにあるのですが、残念なことに、ある時点から、図書館は多くの人々にとっての攻撃目標になってしまいました。そのため、ロボット工学の発達に伴い、待避能力を持つ自走型アーカイブが考案されたのです。都市部においては、一時期、下水道の中を自由に往来できる機種なども作られました。しかし、都市そのものが核攻撃などによって機能を停止してからは、野生の生物と同様に、野外において雨露に耐え、自らエネルギーを摂取することにより完全な機能を保てるタイプだけが生き残りました。さらに改良が加えられ、環境に応じて自らの形を変えていけるようになったのが、自律進化バージョンである、私です」

ミノシロモドキは、誇らしげに言う。

「自らエネルギーを摂取……って、君は何を食べてるの？」

守が、しゃがみ込んだまま顔を上げて訊ねた。

「利用できるサイズの生物です。水中にいる微生物などは、そのまま吸収し、消化します。また、好機に恵まれれば、小型哺乳類などを捕獲して、吸血す

る機能もあります」

　想像するだけでもおぞましく、わたしは、ミノシロモドキから目をそむけた。

「……それから、どうなった？　暗黒時代から、僕らの時代の間までには、いったい何があったの？」

瞬が、話を元に戻す。

「暗黒時代には、人間の集団は、さっきの四つしか残ってなかったんでしょう？　だったら、そのうちのどれが……？」

　わたしも、ようやく気がついた。わたしたちは、四種類しかなかった集団の、いずれかの直系の子孫だということに。

「四つの集団のうちで、最初に衰微していったのは、略奪者たちでした」

　ミノシロモドキの言葉に、少しだけほっとする。

「略奪者は、数人から二、三十人までの血縁者によるグループで、敵に対してはためらいなくPKを行使し、場合によっては、一村を皆殺しにするなどの大量虐殺も厭わなかったため、非常に怖れられていました。しかし、その存在は常に不安定でした。略奪者の側は、獲物である奴隷王朝の民や遊牧民を根絶やしにするわけにはいかなかったのに対し、相手から見れば、略奪者は危険な害虫でしかありません。そのため、非能力者たちは、あらゆる手段を使って略奪者を駆逐しようと努めたのです」

「あらゆる手段って？」

　よせばいいのにと思ったが、覚が訊ねる。

「略奪者は、なぜか、先史文明の遺物である自動二輪車を好んで移動に用いていました。エンジンとタイヤは、すでに製造不可能でしたが、当時、PKを使った製鉄の技術は復活していました。略奪者たちは、重さ数百キロの鋼鉄製の骨組（フレーム）みに鋼鉄の車輪を取り付けると、PKによって時速三百キロものスピードで火花を上げながら平原を疾駆し、村々を襲っていたのです。非能力者である村人たちにとって、地平線に見える砂煙と轟音は死に神そのものを意味

していました。このため、村人たちは、略奪者の通り道に陥穽（おとしあな）を掘り、尖った竹を底に槍衾（やりぶすま）のように立てたり、肉眼では見えにくい細いワイヤを、首の高さに張り巡らせたりしました。また、単純ながら殺傷能力の高い地雷や、間抜け罠（ブービートラップ）を仕掛けたり、略奪されるであろう食物に遅効性の毒を仕込んだりしておいたほか、略奪者に暴行される娘を人身御供（ひとみごくう）として選び、致死的な伝染病に感染させた例すらあったようです」

再び気分が悪くなってきて、わたしは、吐き気をこらえなければならなかった。

「もちろん、略奪者側の報復はさらに恐ろしいもので、多くの村が容赦ないＰＫの行使で根絶やしにされました。しかし、略奪者の凋落に決定的だったのは、略奪者同士の抗争と仲間割れでした。もともと、共通の敵や獲物に対する利害だけで結びついていたグループだったので、構成員の間に、いったん些細な敵意が兆すと、先にやらなければやられるという妄想的な恐怖が際限なくエスカレートしていって、最後は破滅的な結果を迎えるしかなかったのです」

全員、汗を拭ったり頭や腹を押さえたりと、具合が悪いように見えたのだが、とうとう、守が茂みに向かって嘔吐し始める。

「やめろ！　黙れ！」

覚が叫んだ。

「みんな、もうこれ以上、こいつの話を聞くな！」

「いや……待ってくれ。あと少しだけ、訊きたい」

瞬が、真っ青な顔をしながら言った。

「略奪者のことは、もういい。他の三つの集団は、どうなったんだ？」

「東北アジアに割拠していたおよそ十九の奴隷王朝は、互いに不可侵、不干渉を守ることで六百年以上永らえました。その期間、日本列島には四つの奴隷王朝が併存しましたが、私の中に記録があるのは、関東一円から中部地方までを支配していた神聖サク

ラ王朝についてのみです。神聖サクラ王朝は、関西以西を版図とした新ヤマト王朝に次ぐ長い治世を誇りましたが、五百七十年の間に即位した王は、実に九十四代を数えます」

「九十四人全員の伝記は、いらないわよ」

真理亜が、眉を顰(しか)めて言った。

「なんで、そんなに頻繁に、王様が交代したんだ？」

瞬は、五人の中でも一番気分が悪そうだったが、歯を食いしばるようにして訊ねる。

「『神聖サクラ王朝の研究』という書物は、先史文明の歴史学者J・E・アクトンの箴言(しんげん)、『権力は腐敗し、絶対権力は絶対的に腐敗する』を引用しています。奴隷王朝を支配するPK能力者は、人類の歴史に類を見ない、文字通り神に近い絶対的権力を手にしましたが、その代償もまた、途轍もなく大きなものでした」

ミノシロモドキの語り口は巧みで、わたしたちは、ついつい聞き入ってしまう。

神聖サクラ王朝の権力機構は、数人のPK能力者による寡頭政治から、粛清に次ぐ粛清をへて、最終的には、一人の能力者による絶対王政へと収斂(しゅうれん)していったらしい。

「王は常に所在を隠し、また無数の影武者を帯同していましたが、数多くの能力者が王朝に存在していた場合、ただ単に姿を見て念じるだけの暗殺の企てを、すべて防ぎきるのは不可能だったのです。そのため、略奪者が姿を消して以降は、PK能力を持つたった一つの家系が数十万人の国民を統(す)べるようになりました。しかし、そうしてもなお、真の平和と安定は訪れなかったのです」

「……もう、帰ろうよ。何だか、すごく疲れたし、さっきから、喉も渇いてきたんだ」

守が、両手で耳を塞いだまま泣き声で訴えたが、誰一人としてその場から動かなかった。

「『神聖サクラ王朝の研究』は、比較的長く権力を

保った六人の王について考察を加え、共通する特異な精神疾患について分析しています。この調査のために、『フィールド歴史調査学会／サクラ観察グループ』では、十数人の調査員が命を落とさなければなりませんでした」

わたしたちのうち、守を除く四人は、このときすでに新たな催眠術にかかっていたのかもしれない。ミノシロモドキの声は、まるで、鼓膜を貫いて、直接脳の内側に響いてくるようだった。

「それぞれの王の死後には、生前の業績に応じて諡が付けられましたが、それとは別に、一般民衆の付けた悪諡も残っています。第五代皇帝、大歓喜帝の即位に際しては、民衆の歓呼と喝采が三日三晩止まなかったという記述があります。単に誇張した表現だと思われていたのですが、後に、これが事実であったことがわかりました。最初に拍手をやめた者から百人までを、祝典の生け贄としてPKで人体発火させ、苦悶する黒い炭の像を造って王宮に飾ることになっていたからです。民衆は、このことから、大歓喜帝に阿鼻叫喚王という悪諡を奉りました」

ミノシロモドキは、単調な声で続けた。

「第十三代愛隣帝は、酸鼻女王という悪諡で知られています。少しでも自分の意に添わない人間を、毎朝、この上なく酷たらしいやり方で公開処刑することに、彼女が無上の喜びを感じていたからです。このため、宮中で働く者の間では、嘔吐をしないように、絶食で胃を空にしてから出仕するのが、当時の習わしとなっていました」

「……第三十三代皇帝、寛恕帝は、生前より、豺狼王という異名で呼ばれていましたが、それがそのまま悪諡に変わりました。帝が気まぐれに市中を散歩した後には、まるで禽獣に食い荒らされたような無惨な死体の山が築かれたからです。寛恕帝のPKのイメージは、巨大な獣の顎で、生きた人間の四肢を食いちぎることを好みましたが、一部の遺体には、

寛恕帝自身の歯形が残っていたとも伝えられています」

「……寛恕帝の息子、第三十四代皇帝醇徳帝は、死後、外道王と号されました。十二歳のときに、長椅子でうたた寝をしていた父、寛恕帝の首を生きたまま引きちぎって、犬の餌にしたことは、むしろ民衆の賞賛を得ました。しかし、後に醇徳帝の胸中に兆したのは、自らも殺されるのではないかという恐怖でした。そのため、醇徳帝は、幼い弟や従兄弟、子供たちが成長すると、次々と命を奪い、遺体をゴカイやフナムシなどに喰わせました。ところが、PK能力を持った後継者が数少なくなってくると、醇徳帝の権力基盤は、別の危機に曝されました。非能力者である民衆による暗殺の企てが起き始めたのです。やがて、醇徳帝は、誰彼かまわず、人間を生きながら下等な動物の餌食にすることに異常なまでの情熱を傾けるようになりました」

「……第六十四代皇帝、聖施帝には、即位のはるか以前から鴟梟女王という仇名がありました。奇怪な神秘主義に傾倒した挙げ句、怪物のようなフクロウのイメージを創り出し、満月の晩に、妊娠している女性を攫っては、腹を割いて胎児を取り出し、串刺しにして、異様な神を祀った祭壇に捧げることを、自らの使命と考えていたからです」

わたしは、身震いした。わたし自身、呪力を使うのによく似たイメージを用いたことがあり、闇を飛翔する巨大な猛禽の姿が、はっきりと脳裏に浮かんだのだ。

「……王朝の末期になると、王を後継者が殺害して王位を簒奪するのが通例になりました。後継者が思春期になり、PKが発動した瞬間から、先王の命は風前の灯火となったのです。そのため、王子たちは常に厳しく監視され、もし叛心ありと見なされれば、先手を打って殺害されたり、両目を潰されて地下牢に幽閉されたりということも、日常茶飯事でした。第七十九代皇帝、慈光帝は、九歳の誕生日の深

夜に、ＰＫが使えることに気がつきました。慈光帝は、払暁（ふつぎょう）の王宮へ赴き、ずらりと並んだ壁龕（へきがん）に飾られている巨大な壺の一つの背後に隠れました。そこは、ちょうど玉座を見通せる位置にあったのです。やがて、朝早く、父である誠心帝（せいしんてい）が現れて玉座に座った瞬間に、慈光帝は誠心帝の心臓を停止させました。さらに、ＰＫを使って誠心帝が生きているような姿勢を保たせておき、謁見に現れる先王の腹心や側近の首をニワトリのように捻って殺し、壁龕の壺の中に隠しました。その数は二十数人にも及びましたが、神聖サクラ王朝史上でも最悪の大量殺戮者とされる慈光帝にとっては、ほんの小手調べに過ぎませんでした。慈光帝は、呼吸をするように人を殺すと評され、ときには半ば無意識のままＰＫを行使して、臣下や領民を虐殺したのではないかとも言われています。その治世で、王朝の人口は半減し、野山に放置された遺骸のため、市中至るところが蠅の大群で真っ黒になり、腐敗臭は、何キロも先まで臭ったと伝えられています。今では、慈光帝という名は忘れ去られ、残っているのは屍山血河王（しざんけつがおう）という悪諡だけですが、そのあまりにも人間離れした性格を今に伝えるエピソードとして……」

「やめろやめろ！　やめろって言ってるんだ！」

覚が、絶叫した。

「こんな話に何の意味がある？　こんなの、全部、でたらめかもしれないじゃないか？　瞬。もう、やめようぜ。聞かされてるだけで、頭がおかしくなりそうだ」

「……僕だって、こんな話を聞きたいわけじゃない」

瞬は、血の気を失った唇を舐め、ミノシロモドキを見据えた。

「僕らの社会は、どうやって生まれたんだ？　知りたいのは、それだけだ。いいか、よけいなことは何も言うな。ただ、僕らの社会の成り立ちだけを説明しろ」

「五百年間の暗黒時代は、奴隷王朝の終焉によって幕が引かれました。すでに、大陸とはまったくの没交渉となっていましたが、日本列島を支配していたすべての王朝は、世代間の厳しい淘汰によって、ついにＰＫ能力者の血統が絶えてしまったのです。重しの取れた王朝は分裂して相争いました。山野を漂泊していた狩猟民は、王のいない奴隷王朝の村に対して攻撃を仕掛けましたが、村々はこれに合従連衡して対抗したため、戦火は拡大の一途を辿りました。わずか数十年の戦乱により、過去五百年の間にＰＫによって虐殺された死者をはるかに超える犠牲が生じました。この混乱を収拾するために、それまでは歴史の傍観者に徹してきた科学文明の継承者たちが、ついに立ち上がったのです」

やっぱり、そうだったんだ。わたしの胸の中には、安堵とともに熱いものが広がった。わたしたちは、奴隷王朝の王の血を引いているのでもなく、ましてや略奪者の子孫なんかじゃない。ずっと人類の理性を守ってきたグループの、末裔だったんだ。

「……だけど、そこからどうやって、今の社会ができたんだ？　それに、奴隷王朝の民や狩猟民たちは、呪力……ＰＫがなかったんだろう？　その人たちは、いったいどこへ行ったんだ？」

瞬は、矢継ぎ早に問いかけたが、ミノシロモドキの答えは、期待はずれだった。

「その後、現在に至る歴史について、信頼のおける文献はきわめて少数です。そのため、残念ながら、ご質問の点に関しては不明です」

「なぜ？　科学文明の継承者たちは、ずっと本を出版してたんでしょう？」

真理亜が、唇を尖らせた。

「暗黒時代においては、そうでした。しかし、混乱状態を収拾し、新しい社会を作る中で、新しい方針が採用されたようです。あらゆる知識は両刃の剣であるとして、厳しい管理の対象となり、多くの書籍が焚書の憂き目にあいました。国立国会図書館つく

ば館、つまり私は、そうした状況を総合的に見て危険と判断し、多数の分身（バックアップ）とともに、当分の間、筑波山中に待避する決定を下しました」

　ミノシロモドキの時間の感覚では、数百年というのも当分の間ということらしい。

「その後、図書館の外殻の意匠を変更して、無数の触手を持つミノシロに擬態しました。たとえ呪力を持った人間に発見されても、催眠術を駆使して逃れられるように、発光する機能をも開発し、付加したほか……」

「違う。そんなことが訊きたいんじゃない！」

　瞬が、苛立ったように言った。

「僕たちの社会は、いったい、それまでと何が変わったんだ？　いや、変わったんじゃないな。今のこの社会を築いたのは、科学文明を受け継いだグループだろう？　僕らの先祖だとすると、呪力を持っていたはずなのに、奴隷王朝の王や、略奪者たちとは違って、互いに争ったりしなかった。なぜなんだ？」

「そんなこと……」

　あたりまえじゃないと言いかけて、わたしは言葉を呑んだ。

　それが、あたりまえではないことに気づいたのだ。もし、この世にも醜い語り部（シェラザード）が語った話がおおむね真実で、人類の歴史が、そこまで血塗られたものだったのなら。つまり、もし、ヒトという生き物の本性が、トラバサミも真っ青なほどに暴力的なものであるなら、なぜ、わたしたちの社会だけが、例外的に争いとは無縁でいられるのだろうか。

「先史文明の末期に、PKに潜んでいる無限の可能性、裏を返せばその恐るべき破壊力についての認識が深まってからは、いかにして対人攻撃を防ぐかが最大の懸案となりました。これに対しては、心理学、社会学、生物学などの分野から様々な研究がなされましたが、最終的に採用された方策が何かという点については、資料がありません」

「たとえば、どんな方法が考えられてたの？」

わたしは、訊ねた。

「早くから指摘されていたのは、教育の重要性でした。幼児期の情操教育、母子関係から、道徳・倫理教育、洗脳的な宗教教育にいたるまで、あらゆる教育方法についての徹底的な議論が行われました。しかし、その結果わかったことは、教育はたしかに死活的に重要ではあるものの、万能ではないということです。どれほど完璧な教育制度を作ったとしても、人間の攻撃性を完全に封じ込めることは、とうてい不可能であると結論づけられました」

様々な書籍から該当する箇所を抜き出してつなげているのだろうが、ミノシロモドキの口調は、まるで自らの信念を語っているように滑らかだった。

「その次に模索されたのが、心理学的な手法です。怒りの管理（アンガー・マネージメント）から、禅やヨガ、超越瞑想（TM）などを応用した精神的鍛錬、さらには、向精神薬を用いた極端な手法までが研究されました。いずれも有効ではあるものの、こちらも万能薬（パナセア）たりえないことは、すぐにあきらかになりました。しかし、心理テストや性格検査を駆使すれば、問題を起こす可能性のある児童は、ほぼ百パーセント事前に抽出できるという研究結果は、次の重要なステップである『腐ったリンゴ理論』につながりました。危険な因子を持った子供はあらかじめ排除するという考え方が、その後の主流となったのです」

背筋を、冷たいものが流れた。考えたくないと思っても、考えずにはいられない。

その考え方は、もしかしたら、今でもまだ引き継がれているのではないだろうか。和貴園でも。全人学級においても……。

「しかし、それでもまだ、危険を完全に回避するには不充分でした。ごく普通の市民、温厚で、多くの友人を持ち、円満に社会生活を送っている人間でも、怒りに我を忘れる瞬間はあります。研究によれば、人間の感じるストレスの九割以上は、他の人間

に起因します。ほんの一瞬、激しい怒りと敵意を抱けば、目の前にいる人間の頭が破裂してしまうとしたら、いったいどうやって、平穏な社会生活を継続すればいいのでしょうか？」

ミノシロモドキの語り口は巧みで、わたしたちは、反論することもできずに聞き入っていた。今から考えると、あの話術もまた、ミノシロモドキの自己防衛術の一つだったのかもしれない。

「心理学的なアプローチが行き詰まると、それを補う手段として、向精神薬などを用いた脳内ホルモンのバランス管理が導入されましたが、これも、すぐに限界を露呈しました。すべての人間に対して、常時薬を投与し続けることはできないからです。代わって脚光を浴びたのは、動物行動学でした。中でも注目されたのは、ボノボという霊長類の社会です。ボノボは、かつて、ピグミーチンパンジーと呼ばれていましたが、チンパンジーが頻繁に同種の仲間を攻撃し、ときには死に至らしめるのとは対照的に、ボノボの群れにおいては、ほとんど争いというものが見られません」

「どうして？」と、わたし。

「ボノボは、個体間の緊張やストレスが高まると、濃密な性的接触によって解消します。成熟した雄と雌の場合には性行為になりますが、同性間や未成熟な個体の場合でも、性器を擦り合わせるなどの疑似的な性行為を行うのです。これによって、争いは未然に防がれ、群れの秩序も維持されるわけです。霊長類の研究者と社会学者らは、人間の社会もまた、チンパンジー型の争いの社会から、ボノボ型の愛の社会へと作り変えることが急務であると主張していました」

「作り変えるって、どうするの？」

「『愛の社会へ』という本の中では、三段階の提言がなされています。第一段階としては、肉体的な接触を頻繁にすることです。握手する。抱擁する。頻に接吻をする。第二段階は、幼児期から思春期まで

の間は、異性間だけではなく同性愛的接触をも奨励することです。オルガスムスを伴う疑似性行為によって、対人的な緊張を和らげる習慣を付けさせること。そして、第三段階は、成人間においての完全なフリーセックスです。ただし、これには、簡便かつ信頼できる避妊法が不可欠になりますが」

わたしたちは、互いに目を見合わせた。

「……じゃあ、昔の人は、そうじゃなかったの？」

真理亜が、眉間に皺を寄せ、半信半疑の表情で訊ねる。

「現在の状況に関する資料がないため、比較は困難ですが、先史文明では、肉体的接触において様々なレベルのタブーがありました。また、多くの地域において、同性愛は忌避されるか抑圧を受けていました。フリーセックスに関しても同様です」

わたしたちは、日常のあらゆる局面で他者と触れ合う。男の子と女の子、女の子同士、男の子同士、大人と大人、子供と子供、大人と子供。人と人との親密な交流は、基本的に善なのだ。もっとも、妊娠に至る可能性のある行為だけは特別であり、所定の条件を満たした上で、倫理委員会による許可を受けなくてはならないのだが。

「しかし、それでもなお不充分だということが、わかってきました。コンピューターによるシミュレーションでは、これまでに述べた措置をすべて完璧に講じた社会であっても、十年以内には、すべてが崩壊するという衝撃的な結果が出たのです。原因は明らかでした。PK後の社会では、社会の構成員全員が核ミサイルのボタンを所有しているのと同じことであり、たった一人の暴走によって、社会全体が崩壊に導かれうるからです」

ミノシロモドキの話す内容は、相変わらず、半分くらいしか理解できなかった。にもかかわらず、語られている事態の深刻さだけは、ひしひしと伝わってくる。

「人間の行動は、教育や心理学、不良品を選別する

生産工学の手法で、かなりの程度までコントロールが可能ですし、人間を一個の霊長類と見なした動物行動学の応用によって、さらに安全性を高めることができます。しかし、社会というダムを本当に守ろうとすれば、蟻の一穴も許すことはできません。そのための最終的な解決方法は、ヒトという生き物を社会性を持った哺乳類にすぎないと捉え直すことで、もたらされました」

皮肉な話だった。ようやく人類は神の力を手に入れたのに、あまりにも強力すぎる力を制御するため、自らを、人から猿、猿からただの哺乳類へと、貶めていかなければならなかったのだ。

「先史文明期の動物行動学者であるコンラート・ローレンツは、オオカミやワタリガラスのように強力な殺傷能力を持ち、かつ社会生活を行う動物には、同種間攻撃を避けるための生得的な機構が備わっていることを指摘しました。これが攻撃抑制です。一方、ネズミや人間のように、それほど強い攻撃力を持たない動物では、攻撃抑制が不充分であるため、しばしば同種間での過剰な攻撃と殺戮が行われます。したがって、PKを持った人間が、なおかつ集団で社会生活を営むためには、強力な攻撃抑制を与えることが不可欠だったのです」

「でも、与えるって、いったい、どうやって？」

瞬が、まるで独り言のようにつぶやいた。

「唯一有効な方法は、人間の遺伝子を改変することでした。すでに、オオカミのDNAは解読が完了しており、攻撃抑制を司る遺伝子も解明されていました。ただし、それをそのまま導入しただけでは不充分です。攻撃抑制の強さは、攻撃能力に見合ったものでなければならないからです」

「つまり、人間に与えられた攻撃抑制は、オオカミどころじゃなく、桁外れに強力なものだったっていうこと？」

「現実に遺伝子操作によって付与するところまで進んだのかどうかは、資料がないため、推測の域を出

ません。しかし、人間の遺伝子に組み込む予定のメカニズムは、二種類ありました。一つは、オオカミなどと同じ、普通の攻撃抑制。そして、もう一つは、『愧（き）死機構』と呼ばれていたものです」

衝撃が走った。愧死という言葉は和貴園時代から繰り返し学習し、わたしたちの意識に深く刻み込まれている。それは、すべての人間にとって、最も恥ずべき悪い死に方なのだ。

「当初、攻撃抑制を補完するために構想されていた『良心機構』は、ＰＫによる対人攻撃を実行しようとした場合に、思考の集中を妨げるような脳内のメカニズムでした。しかし、その効果は不安定で、結局、実現できませんでした。代わって開発されたのは、はるかに単純かつ決定的な効果を持つ『愧死機構』だったのです。『愧死機構』の作用機序は、以下のようなものです。最初に、自分が同種の人間を攻撃しようとしていると脳が認識すると、無意識にＰＫが発動して、腎臓および副甲状腺の機能を停止させます。これによって、不安、動悸、発汗などの警告発作が起きますが、その効果は、学習や、動機付け、暗示などによって、増強が可能です。この段階で、ほとんどの人間は攻撃を中止しますが、なおも攻撃が続行された場合には、低カルシウム血症による強直（テタニー）の発作で窒息死するか、カリウムの濃度の急増によって心停止にいたるのです」

「そんな……馬鹿な」

覚が、悲痛な声で呻いた。

それが本当だとしたら、わたしたちがそれまで信じてきたことは、いったい何だったのだろうと思った。わたしたちは、人間は、高い徳性を持つがゆえに神の力を授けられたと教えられてきた。だが、実際は、死の軛（くびき）がなければ互いに争うこともやめられない、オオカミやカラスよりはるかに劣る愚かな動物でしかなかったのだろうか。

「嘘よ、そんなこと！　全部、でたらめだわ」

真理亜が、噛みつくように言った。

「でも、筋は通ってる」

瞬が、低い声でつぶやく。

「信じるの、こんな話？」

わたしは問いただしたが、瞬は、わたしに答える代わりにミノシロモドキに質問した。

「……悪鬼が現れたのは、その後のこと？」

瞬の質問に、わたしは眉をひそめた。たしかに、わたしたちの質問はそこから始まった。だが、今のミノシロモドキの話に、悪鬼がどう関係するというのだろう。

「いいえ。悪鬼、すなわちラーマン・クロギウス症候群は、先史文明の崩壊以前にも存在していたという記録があります。また、業魔と呼ばれている橋本・アッペルバウム症候群も、ほぼ同時期に発生したと推定されています。ただし、その後に続いた混乱期と暗黒時代、戦乱の時期には、その存在が注目を浴びることはありませんでした」

このときには、ミノシロモドキの言葉の意味がよく理解できなかった。今から思えば、暴力が世界を支配していた時代には、あまりにも死と流血が日常的だったために、彼らの存在がカモフラージュされたということだろうか。

「現在の、僕たちの社会が誕生してから、悪鬼と業魔が注目されるようになったわけか。だけど、今ある社会のシステムっていうのは、まるで、悪鬼と業魔を防ぐことだけを目的に構築されてるみたいじゃないか？」

瞬は、鋭い声で質問を投げかけた。

「現行の社会体制については、資料がないので、お答えできません」

「しかし、どうして、悪鬼は、さっき言ってた愧死機構を……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

覚が、あわてたように質問に割り込んだ。

「瞬にはわかってるのかもしれないけど、僕らは、話についていけてないんだよ。悪鬼って……そのク

ロギウス何とかというのは、何のことなんだ？　それから、業魔っていうのは、悪鬼とはどう違うの？」

「ラーマン・クロギウス症候群とは、その別名が示すとおり……」

わたしたちは耳をそばだてたが、その続きを聞くことは永遠にできなかった。

ミノシロモドキは、突如として、胴中を挟んでいるトラバサミもろとも白熱する炎の渦に包まれたのだ。

わたしたちは、思わず、その場から飛びのき、事態を呆然と見守った。さしもの頑固なトラバサミも、ミノシロモドキを放して炎から逃れようとした。ハサミをめちゃめちゃに振り回しながら突進し、身体を地面に擦りつけたが、超自然の炎は、いっかな消えようとはしない。トラバサミは、ガラスを引っ掻くような鳴き声を発すると、十本の肢を縮めて仰向けになり、とうとう動かなくなってしまった。

ミノシロモドキも身体をくねらせて、泡だらけの粘液を大量に分泌し、消火に努めたが、地獄の業火には抗すべくもない。たくさんの触手は炎に炙られて萎び、黒く炭化していく。全身を覆っているゴムのような皮膚は、高熱で穴だらけになり、みるみるうちに燃え尽きてしまった。

すると、燃えているミノシロモドキの上に、奇妙なものが現れた。

小さな赤ん坊を抱いた、母親の姿。立体映像だった。母親は、涙を浮かべて、哀訴するようにこちらを見る。わたしたちは、息が苦しくなり、さらには身体が完全に硬直して、動くことができなくなった。

不思議なことに、母子の映像が出現した直後、炎は消えた。だが、ミノシロモドキは、最後の切り札を出すのが遅すぎたのかもしれない。映像は、ちらついて奇妙な線が入り始めると、徐々に暗くなり、

ふっつりと消えてしまった。

　ほどなく、ミノシロモドキは、トラバサミと同様に、まったく動かなくなった。表面は黒く焼け焦げ、悪臭のする白い煙が立ち上っている。

「誰だ……？」

　覚が、みんなを見回して、かすれた声で言った。

「誰って？」

　唖然としていた真理亜が、反問する。

「今の、見てただろう？　あんな燃え方をするなんて、ありえない。呪力で発火させたとしか思えないじゃないか。いったい、誰がやったんだ？」

　その答えが背後から聞こえてきたため、わたしは、文字通り飛び上がった。

「私だ」

　振り返ると、僧形の人物が立っていた。驚くほど背が高くて、眼光は鷹のように鋭い。剃り上げられた頭は青々としているが、面長の額には汗が浮いていた。

「それは、妄言を吹き込んでは人心を惑わす魑魅魍魎の類だ。見つけしだい、焼尽せねばならないのだ。君たちは、いったい、ここで何をしている？」

「僕たちは……」

　覚が答えようとしたものの、とっさにうまい言い訳が浮かばなかったらしく、絶句してしまう。

「夏季キャンプで、利根川を遡ってきたんです」

　真理亜が、フォローしようとする。

「君たちは、こんなところまでくる許可を、学校からもらっているのか？」

　僧形の人物は、腕組みをした。ますます、表情が険しくなる。これ以上、嘘を重ねると、とんでもないことになりそうだった。

「……すみません。許可は、いただいてません。つい、ここまで来てしまいました」

　瞬が、しおらしく言う。

「なるほど。つい、ここまでか？　それで、蟹を捕まえて遊んでいたら、偶然にも、その妖怪を捕獲し

てしまい、それで、ついつい、悪魔の言葉に聞き入ってしまったわけだな」

誰も、一言もなかった。この状況下では、弁解のしようがない。

「私は、清浄寺で西堂（せいどう）を勤めている、離塵（りじん）だ。君たちのことは、よく知っている」

西堂とは、寺で教育を担当する最上位の役職のことだ。わたしは、はっと思い出した。清浄寺での成長（イニシエーション）の儀式で、無瞋上人（むしんしょうにん）の傍らに、この離塵という僧侶が控えていたのを。

「君たちには、これから寺へ来てもらう。無瞋上人のお沙汰を頂かないうちは、町へ戻すわけにはいかない」

「ちょっと、待ってください。その前に、一つだけ教えてほしいんです」

瞬が、ミノシロモドキの残骸を指して言った。

「そいつが言ったことは、全部、嘘だったんですか？」

わたしたちは、聞きながらはらはらした。そんなこと、訊かなければいいのにと思う。案の定というべきか、離塵師の目には異様な光が宿ったようだった。

「本当だと思うのか？」

「わかりません。僕らが学校で習った知識とは、あまりにもかけ離れてて。だけど、それなりに、整合性はあるように思いました」

瞬の言葉は、わたしたちの正直な気持ちを吐露したものだった。だが、こういう場合、正直が必ずしも美徳とは限らない。

「君たちは、規則を破って、来てはならないところに来た。しかも、禁を犯して、悪魔の言葉に耳を傾けた。それだけでも重大な罪だ。だが、問題は、その先にある」

離塵師の声音には、わたしたちの心胆を凍りつかせるほど冷たい響きがあった。

「君たちは、倫理規定のさらに根幹にある十重禁（じゅうじゅうきん）

戒、その第十条、不謗三宝戒に背いた。悪魔の声に従い、仏の教えに異を唱えたのだ。よって私は、君たちの呪力をただちに凍結せねばならない」

離塵師は、懐から紙束のようなものを取り出した。二枚の半紙を重ねて折った人形。それを五つ、わたしたちの前に置く。

人形の頭部と胴体に書かれた梵字と奇怪な文様を見て、わたしは清浄寺での儀式を思い出した。無瞋上人が、わたしの呪力を、一時的に封印したときのことを。

嫌だ、と思った。呪力を失うのだけは、絶対に嫌だ。和貴園を卒業する前の、あのどうしようもない無力感と、よるべなさは、二度と味わいたくない。

しかし、わたしたちに、逆らうすべはなかった。

「今より、君たちの呪力を、この人形の中に封じ込める」

離塵師は、宣告した。

「各自、人形を操って、立たせなさい」

わたしは、目の前にある人形を立たせた。ふいに、涙が一筋、頰をこぼれ落ちた。

「青沼瞬！　秋月真理亜！　朝比奈覚！　伊東守！　渡辺早季！」

離塵師は、野山にこだまするほどの大声を発した。

「おまえたちの呪力は、ここに凍結された！」

離塵師の手元から、無数の針が放たれた。針は、まるでアカスズメバチの群れのように、五つの人形に向かって正確に飛来し、頭、胴中、四肢を刺し貫く。

「いっさいを焼施……すべての煩悩を焼尽せしめ……灰は無辺の荒土に……」

離塵師が低い声で呪文を朗唱すると、五つの人形は燃え上がり、一瞬にして消滅した。

まやかしだ。これは単なる暗示にすぎない。こんなことで、呪力が使えなくなるはずがない。前に効いたのは、わたしがまだ幼く、呪力を自分のものに

していなかったからだ。今では、呪力は完全にわたしたちのものだ。誰も、奪うことなどできるものか。

　わたしは、必死になって、そう思いこもうとした。だが、離塵師による凍結の儀式は、まだ終わっていなかった。

「君たちは、覚えているはずだ。清浄寺で、神仏に帰依して、自ら呪力を放擲（ほうてき）したことを。君たちは、無瞋上人によって、大日如来の御慈悲の証である正しき真言（マントラ）を授けられた上、新たなる精霊を招聘され、再度、呪力を付与されたのだ」

　離塵師の声は、さらに低くなり、心の底まで染み通るような不吉な響きを帯びた。

「だが、仏の道に背いた君たちからは、精霊は飛び去り、真言（マントラ）も消え失せた。肝に銘じるがよい。君たちは、二度と再び真言（マントラ）を思い出すことはないだろう」

　おそらく、成長の儀式（イニシエーション）のときに、わたしたちの潜在意識には、暗示による鉤（フック）が埋め込まれていたに違いない。新たな暗示をかける際は、その鉤を利用することによって、自由自在に心を操れるのだろう。

　このときのわたしたちにとって、それは魔法にも等しい効果を発揮した。それまでは、常に意識の中心を占めていたはずの真言（マントラ）が、きれいさっぱり消滅してしまったのだ。

　わたしは、一縷（いちる）の救いを求めて仲間の顔を見回したが、どうやら全員、同じ状況にあるらしかった。覚が、泣きそうに顔を歪めながら、首を振ってみせる。

「さあ、行こうか」

　離塵師は、わたしたちに、家畜を見るような一瞥をくれた。

「のろのろ歩くんじゃないぞ。日が暮れるまでには、寺に着きたいからな」

II

夏闇

1

小一時間も歩くうちに、軽かったはずのナップザックが、まるで鉛が詰まっているように重くなり、それ以降の道のりは、遅々として捗らなくなってしまった。

　全人学級に入学してからは、ともすれば呪力に頼りがちだったために、肉体的な鍛錬がおろそかになっていたこともあったかもしれないが、それ以上に、わたしたちの活力を奪い去っていたのは、どうしようもない無力感だった。

　離塵師は、ときおり蓮華座の上から振り返っては、わたしたちの亀のような行軍ぶりに侮蔑と苛立ちの表情を浮かべたが、何も言わなかった。何を言っても無駄なことは、重々承知していたのだろう。

　蓮華座は地面から二メートルほどの高さを浮遊しており、離塵師は、瞑想するように、その上で結跏（けっか）趺坐（ふざ）を組んでいた。その三十メートルほど後ろを、とぼとぼとついて行っているわたしたちは、まるで、見えない水が満ちた池の底を歩かされているような、奇妙な感覚にとらわれていた。

「あれが、本物の自己浮遊術なのか」

瞬が、感に堪えたようにつぶやいた。たしかに、全人学級で呪力の全課程をマスターした大人でも、誰もができることではない。わたしたちも、自分の乗ったカヌーを水上で走らせることまではできたが、それとは、まったく次元が違う技だった。

「自分が乗っている物体を宙に浮かせてるんだ。しかも、それで前に進んでいくなんて、いったい、どんなイメージを作ってるんだろう」

　初級課程の呪力では、動かない座標軸があって、

初めて何かを動かすことができる。自分自身が宙を飛んで移動するイメージは、自分以外の場所に不動点を置かなければならないため、ひどく難しかったのだ。離塵師のように修行を積んだ僧侶であれば、宇宙の中心に動かない自分を置き、それ以外の森羅万象が後方へ流れ去っていくように想像しているのかもしれない。

「どんなイメージだろうが、もう、関係ないだろう？」

覚が、吐き捨てるように言う。

「どうせ、僕らには、二度と呪力を使える日は来ないんだから」

全員が、それを聞いて押し黙る。守は、ずっと涙ぐんでいたが、とうとう、ぽろぽろと落涙し始めた。それにつられたように、真理亜がむせび泣き始めた。

「そんなことないわよ。いい加減なこと言わないで！」

わたしは、覚をにらんだ。

「きっと、また、呪力を使えるようになるんだから！」

「どうして早季に、そんなことがわかるんだよ？」

覚もまた、いつになくきつい視線を返してきた。

「わたしたちの呪力は、なくなったんじゃないのよ。ただ一時的に、凍結されただけなんだもの」

「本気で、凍結を解いてもらえると思ってるのか？」

覚は、わたしの方に顔を寄せると、脅迫じみた低い声でささやいた。

「ミノシロモドキの話を覚えてるだろ？　よけいなことを知った僕らは、『腐ったリンゴ』なんだ。こうなったらもはや、排除の対象なんだよ」

「そんなこと……」

わたしは反論しようとしたが、何も言うことができなかった。

「早季。ちょっと変じゃないかな？」

前を歩いていた瞬が、わたしの方を振り返って、覚よりさらに低くした声で囁く。

「変って、何が？」

「あの離塵っていう坊さん。さっきから、何だか様子がおかしいんだ」

そう言われて、あらためて観察してみた。

「おかしいって、何がだよ？　もともと、ああいうやつなんだろう？」

覚は、ろくに見もせずに、ぶつぶつ言う。

「待って。本当……おかしいわ」

それまで、自分たちのことに気を取られすぎていたために、目に入らなかったらしい。たしかに、離塵師の様子はおかしかった。蓮華座の上で頻繁に身じろぎするだけではない。座禅を組んでいるときは腹式呼吸と決まっているのに、肩で息をしているようだ。こちらから見える後頭部には、一面に細かい汗が光っている。

「病気かな？」

瞬が言う。

「どうだっていいだろ？　なんで、あんなやつのことなんか、僕らが心配してやる必要があるんだよ？」

覚は、ピントのはずれた文句を言う。

「いや……やっぱり、そうか」

瞬は、何事かを確信したようだった。

「やっぱりって、何？」

「ミノシロモドキの呪いだよ」

覚が、鼻で笑う。

「だからさー、あれは嘘だって何度も言ってるだろ？　ただの噂だよ」

「いや、それが、どうやら、そうでもなかったみたいだ。ミノシロモドキが炎上したときのこと、覚えてる？」

後半は、わたしに向かっての問いかけだった。

「ええ、もちろん」

「あのとき、一瞬だったけど、ミノシロモドキの上

に人の姿が見えただろう？　赤ん坊を抱いているお母さんだった」

「それがどうかしたの？」

「あれは、たぶん、ミノシロモドキが人間から身を守るために作った映像だと思うんだ」

「それは、わたしも、そうじゃないかとは思ったけど」

「あれを見ただけで、僕は、ものすごく気分が悪くなった。みんなもそうだっただろ？　まして、ミノシロモドキを攻撃していた離塵大先生には、影響が大きかったはずだと思う。呪力の炎が消えたのも、たぶん、それで、集中が途切れたせいだと思うよ」

「どういうこと……気分とか、影響って？」

わたしには、まだ、話がよく呑み込めていなかった。

「愧死機構だよ。ミノシロモドキが言ってた」

はっとした。どうして、瞬に言われるまで、気がつかなかったのだろう。

「ミノシロモドキにしたら、あの映像を見せてほんの一瞬でも攻撃を躊躇させ、その隙に逃げようというだけのことだろう。でも、愧死機構を備えている人間にとっては、それだけじゃすまないはずだ。本当に人間を攻撃したわけじゃないから、即死することはないだろうけど……」

あの時点でそこまで見抜いていた瞬の慧眼には、舌を巻くしかない。その後の研究でも、ミノシロモドキの呪いと呼ばれていた現象が愧死機構の欠陥に根ざしている可能性は高いとされている。ああいう映像を見せられた場合、たとえ錯覚であっても、自分が対人攻撃を行ったという忌まわしいイメージが潜在意識に蟠り続ける。それが、一、二ヵ月後、理性のコントロールが弱まったときに暴発して、愧死機構を発動させ、命を奪うことがあってもおかしくないというのだ。

「じゃあ、もしかしたら、あいつは、ひと月くらいしたら死ぬのかな？」

瞬の説明を聞いた覚が、小気味よさげに言う。

「図書館の備品を燃やした罰だ」

「……ひょっとすると、もっと早いかも」

瞬は、離塵師の後ろ姿を見ながら、考え深げに言う。

「その方が、好都合じゃないか？　ここで死んでくれたら、僕らのやったこともバレないだろうし」

覚が応じた。

「馬鹿なこと言わないでよ！」

わたしは、小声で叫んだ。

「わたしたちは、今、誰も呪力が使えないのよ？　もし、あの人が死んじゃって、こんなところで放り出されたら、いったい、どうやって、家まで帰ったらいいの？」

自分の言葉ではあったが、二人の目に現れた恐怖の色を見て、わたしは、あらためて、心底ぞっとした。いかに自分たちが無力な状態にあるか、再認識させられたのだ。

このまま清浄寺に連れて行かれれば、覚の言うとおり、寛大な扱いは期待できそうもなかった。できるだけ想像しないようにはしていたが、『処分』されてしまうかもしれない。だからといって、ただ闇雲に逃げ出すのは、鍋から飛び出して炎の中に落ちるようなものである。状況はまさに、八方塞がりだった。

それから、さらに二時間ほどが経過した。わたしたちの足取りはますます鈍くなり、カタツムリにも追い抜かれそうな有様だった。この分では、清浄寺に着くのはいつになるだろうと、わたしは危ぶんだ。

左前方の茂みで、何か音がした。

離塵師が、目を向ける。とたんに、灌木と蔓草、雑草が、四方八方に吹き飛んだ。

遮蔽物を剝ぎ取られ、その場に立ち竦んでいる生き物の姿が顕れた。

「バケネズミだ」

瞬が、つぶやいた。

いつだったか放課後に、水路で溺れていたバケネズミを思い出したが、あのときの個体より二回りは大きいようだ。もしかすると、身長は、わたしとあまり変わらないかもしれない。いまだ事態がのみこめない様子で、皺の寄った豚のような鼻面を上げて、しきりに空気の臭いを嗅いでいる。

「でも、様子がおかしいわ」

真理亜の言葉通り、わたしも、違和感を覚えていた。弓矢を背負い、革製の鎧のようなものを着た、奇妙ないでたちだけではない。何かがおかしい。

「何だ、あいつ？　えらく態度でかいな」

覚の言葉で、ようやく違和感の正体がわかる。前に見たバケネズミと決定的に違うのは、その挙動だった。

水路で救った木蠹蛾（ボクトウガ）コロニーの個体は、相手がわたしたちのような子供だったにもかかわらず、終始、卑屈なまでの慇懃さだった。ところが、このバケネズミは、蓮華座に乗った離塵師を目の前にしながらも、まったく畏れている様子がないのだ。

ふいに、バケネズミは、背後を振り返って大声を張り上げた。

「ガガガガ！　Ждюк！　Grrrrr。チチチチチ。☆▲Å！」

続いて取ったのは、およそ、信じられないような行動だった。赤く光るビーズのような目で離塵師を睨みつけると、背中から弓を引き抜き、すばやく矢をつがえようとしたのだ。

瞬時に、弓と矢は白熱する炎に包まれ、バケネズミは甲高い悲鳴を上げて取り落とした。遅まきながら、背中を見せて逃げようとしたものの、呪力で捕まえられてしまい、じたばたと踠（もが）きながら、離塵師の真正面に吊り下げられた。

「これ。畜生の分際で、お前は人に刃向かうか」

離塵師の冷徹な声に対しても、バケネズミは、意味不明な奇声を上げるだけだった。

バケネズミの被っていた、兜のような円錐形の帽子が吹き飛ぶ。

「額に、入れ墨はないか。お前は、いったい、どこから来た?」

バケネズミは、黄色い門歯を剝き出し、唾を飛ばしながら威嚇した。言葉が通じている様子は、まったくない。

「日本には、野生のコロニーはないはず。外来種か」

離塵師は、つぶやいた。わたしたちがトラバサミにしたように、バケネズミをくるりと回して検める。さらにもう一回転させたが、今度は、頭は回さず、固定したままだった。バケネズミは、再び、齧歯類に特有の甲高い悲鳴を上げたが、頸椎が折れる音がすると、静かになった。

離塵師は、こちらを振り返った。呪力の支えを失ったバケネズミの死骸が、音を立てて地面に落ちる。

「どうやら、このあたりには、危険な外来種のバケネズミが侵入しているようだ。私には、君たちを安全に寺まで連れ帰る責務がある以上、これは、少々厄介な事態だな」

離塵師は、こけた片頰を歪めて笑った。

「したがって、君たちにも、協力してもらわねばならない。もちろん、今の君たちにできる範囲でだが」

かすかな物音を聞きつけたらしく、覚は、弾かれたように後ろを見た。その表情の中にある怯えが、ひどくわたしの神経に障った。

「十秒に一回ずつ振り返るんなら、ずっと後ろ向きに歩いたら?」

覚も、むっとしたようだった。

「何言ってんだよ。だいたい、よく、そんなに、平気で歩いていられるな。前から思ってたけど、早季は鈍感なんだよ」

「瞬と真理亜を見なさいよ。一番先頭を歩いてるのに、あんたみたいにびくびくしてないわよ」

「馬鹿！　全然わかってないな。一番後ろが、一番危険なんだよ！」

覚は、怒りのため真っ赤な顔になった。

「さっきのバケネズミのことを、思いだしてみろよ。後ろに向かって叫んでたじゃないか。どこかに、仲間がいたはずなんだ」

「そんなことぐらい、わかってるわ」

「だったら、仕返しに来るかもしれないこともわかるだろう？　そのとき、正面から襲ってくると思うのか？　仲間が、あんなふうにやられたのを見てるのに？」

認めたくはないが、覚の指摘は、至極もっともだったと思う。

認めたくはないというのは、別に、覚に負けたくないからというのではない。先鋒より後詰めが危険ということは、離塵師も百も承知だったはずだということだ。つまり、五人の中では惜しいと思った瞬と真理亜を先頭で歩かせ、消耗してもかまわないと思った覚とわたしを最後尾に回したというふうに、推測できるのだ。

だが、その伝で行くと、一見、最も優遇されているようで、実は最も過酷な扱いを受けていたのは、守だっただろう。

守は、蓮華座に載せられていた。見張りという名目で、離塵師が乗っていたときよりさらに高い、三メートルほどの位置に浮かんでいたが、実際には囮（おとり）でしかないことは、誰の目にも明らかだった。

離塵師は、そのやや後方を歩いていた。猛禽のように鋭い目で絶えず四方に気を配っているようだが、ひどく汗をかいているのが奇妙に映る。ミノシロモドキが投影した映像を見た時点で変調を来してはいたが、さっきのバケネズミを殺してから、あきらかに悪化しているようだ。

「何かいる！」

蓮華座の上で、守が叫んだ。

「止まれ！」

離塵師が命令する。わたしたちは立ち止まり、ひどく緊張して、きょろきょろと周囲を見渡した。

「何が見えた？」

離塵師の問いに、守は、唇を震わせながら答えた。

「よくわからないけど、何か……何か、動いてたんです。百メートルくらい先で」

離塵師は、思案しているようだった。

「あの人、何を考えてるのかな？」

わたしは、覚に訊いてみた。

「もし、バケネズミが待ち伏せてるとすると、もう少し行ったら、弓矢の射程に入る」

覚は、乾いた唇を舐めながら、冷静に分析してみせた。

「あの坊主だって、いくら凄い呪力の持ち主でも、しょせん生身の人間だからな。敵の先制攻撃を受けると危ない。ここは、慎重に行かなきゃならないんだ」

神の力、呪力を備えた人間であっても、たった一本の矢で絶命する。そんなあたりまえの事実を突きつけられて、わたしは、ぞっとした。

こんなことになるのなら、わたしたちの呪力を凍結したりしなければよかったのに。離塵師も、きっとそう後悔したのではないかと、わたしは思った。もしかすると、その場で凍結を解除してくれるのではないかという期待もあったが、残念ながら、事態はそう好都合には進展しなかった。

「伊東守君」

離塵師は、蓮華座を見上げた。

「いいか？　バケネズミがどこにいるか、よく見てくるんだ。なに、心配は無用だ。君の身は私の呪力で守護し、きゃつらの矢はおろか、指一本差させない」

意味を察知して、守は真っ青になった。

「い、いやだ……やめて！」

　わたしたちは、息を呑んだが、どうすることもできない。守の乗った蓮華座は、ゆったりとした速度で宙を前進し、バケネズミが待ち受けているのではないかと疑われる場所の上を、これ見よがしに旋回した。わたしたちは固唾を呑んで見守ったが、何事も起こらなかった。やがて、蓮華座が戻ってくると、離塵師が厳しい目をして守を見た。

「どうだ？　バケネズミはいたか？」

「わかりません」

　守は、顔色からすっかり血の気を失い、小動物のように震えていた。

「何も……見えませんでした」

「何かが、動いたと言っただろう？」

「でも、今見たら、何もなかったんです。さっきのは、間違いだったかも」

　離塵師は、うなずいたが、すぐに動こうとはしなかった。呪力だけではなく、慎重さも並はずれているようだ。しばらく思案に耽ってから、鋭い目を上げる。

「動くものが見えたというのは、あのあたりだったな」

　離塵師が指を差すと、守は黙ってうなずいた。

「一応、消毒しておこうか」

　地鳴りのような音とともに、少し離れた斜面の土が、ゆっくりと動き始めるのが見えた。まわりにある立木が、次々と倒れていく。地滑りはしだいに速度を速めていき、ついには、大蛇を思わせる一筋の土石流となって、まっしぐらにくだんの場所を襲った。

　美しい緑の藪木立のあった場所が、茶色の土塊（つちくれ）で完全に埋め尽くされてしまうまでに、ものの五分とかからなかった。

　これでは、本当にそこにバケネズミが待ち伏せていたかどうかさえ、わからなくなってしまったが、たぶん、そんなことには、とんと関心がないのだろ

う。

それ以降、わたしたちの歩みは、さらに遅くなった。

言うまでもなく、少しでも怪しいと思われた場所は、離塵師が丁寧に『消毒』したからである。向こう側からすれば、わたしたち一行は、破壊神シヴァの載るジャガーノートさながらに、平和な緑の野山に醜い爪痕を刻み、死と恐怖をまき散らしつつ進軍していたことだろう。いくら好戦的な外来種のバケネズミでも、その様子を見ていながら、正面から対決しようと考えるほど馬鹿ではないはずだった。

関係者全員にとって不運きわまりないことに、わたしたちが相手のコロニーを直撃する進路さえ取っていなければ、正面衝突は避けられたことだろう。その進路も、日が暮れるまでに清浄寺に着けないと危険だと離塵師が判断して、あえて野山を突っ切るような近道に変更したものだった。

だが、いうまでもなく、わたしたちが遅れた一因は、外来種であるバケネズミの出現にある。原因と結果は、しばしば、自分の尻尾を呑み込もうとしている蛇のようなものらしい。

丘をちょうど半分くらいまで登ったとき、わたしたちの目の前に、バケネズミの最初の防衛線が現れた。

「わ！　何だ、あれ？」

先頭を歩いていた瞬が、棒立ちになる。

丘の頂上付近に、突如、数百もの影が出現したのである。影は、いっせいに金属製の武器や銅鑼（どら）のようなものを打ち鳴らし、大地を震わすような鬨（とき）の声を上げた。

「こっちへ攻めてくる気だわ」

真理亜の声が、悲鳴のように裏返る。

「本来、三界にその住み処なく、仏の格別の恩寵によって、人外畜生道を生きる身分でありながら、この離塵に向かって蟷螂の斧を振り上げるか」

離塵師は、重々しく宣（のたま）った。

「ならば、調伏せねばなるまい」

　違う、とわたしは思った。彼らは、けっして戦いたがってはいない。

　もし、本気でわたしたちを攻撃するつもりなら、背後から奇襲をかけるはずだ。それをしないのは、こちらが自ら進路を変え、戦いを避けることを望んでいるからだ。そう思って彼らの鬨の声を聞くと、祈りにも似た悲痛な思いが伝わってくるような気がした。

　一陣の風が、頰を撫でる。

　見ると、離塵師の上空に、みるみる巨大な竜巻のようなものが発達しつつあった。

　それに対抗し、押し戻すかのような、バケネズミの鬨の声。

　次の瞬間、竜巻が巻き上げた丸太や岩石などが、丘の上に向かって次々と飛んでいき、ずらりと並んだ影のうち、少なくとも十数体を薙ぎ倒した。

　異様な沈黙が訪れる。わたしは、目を閉じた。

　一呼吸の間をおいて、恐怖と怒りの叫び声とともに、報復の矢が雨霰と飛来した。

　だが、視界がいっぱいになるほどの数の矢も、強風によって、すべてあさっての方向へ押し流されてしまう。

「醜き害虫どもが……鏖殺してくれるわ」

　再び訪れた沈黙の中、離塵師の嗄れた不吉な声が響いた。

「やめて！」

　わたしは叫んだが、おそらく、その声は誰の耳にも届かなかっただろう。

　耳をつんざくような異様な風音に、かき消されてしまったのだ。滑らかな絹布を刃物で擦ったような音。あるいは、通常より一オクターブ高い女の悲鳴を思わせる。そのため、一瞬、翼を生やし鎌を持った無数の女怪が、谷底から吹き上げる風のように疾く丘を上り、バケネズミたちに襲いかかる幻影が見えたような気がした。

だが、実体のない幻影に襲われたはずのバケネズミたちの影は、あっけなく、次々と倒れていった。

鎌鼬（カマイタチ）だ、とわたしは気がついた。激しく渦巻く空気の中心部にできる真空により、まるで鋭利な刃物のように肉を切り裂くことができる。呪力によりカマイタチを発生させるのは、空気というつかみどころのないものを正確にイメージしなければならないだけに、ごく限られた人間にしかできない難度の高い技だった。

齧歯類らしい悲鳴と咆哮が渦巻く中、数百もあった影は、あっという間にその数を減らしていく。

わたしは、しだいに頭がくらくらしてきた。距離からいってとうてい見えるはずのない血煙が見え、嗅げるはずのない血の臭いまでが鼻孔に感じられるような幻覚に襲われる。

「よし。やった……そら……そこだ！　逃がすか！」

わたしのすぐ横では、両の拳を握りしめた覚が、能天気にも、一方的な殺戮のゲームにすっかり興奮し、熱狂さえしていた。

「馬鹿じゃないの？　何、喜んでるのよ」

わたしが険のある声で言うと、覚は、ぽかんとした顔をした。

「だって……あいつら、敵じゃないか？」

「本当の敵は、あいつらじゃないわ」

「じゃあ、誰なんだよ？」

わたしが答える前に、仏に仕える僧侶の手になる大虐殺は、すでに終焉を迎えていた。丘の上に立っている影は、一つとしてない。

「よし……行こうか」

離塵師が号令する。だが、その声は、どこか苦しげだったので、わたしと覚は顔を見合わせた。

丘を上っていくと、徐々にバケネズミたちの蒙った惨状が目に入ってきた。カマイタチの威力は想像以上で、顔を半分に割られたり、首や手足を飛ばされた死骸が、辺り一面に折り重なっている。むっと

する鉄錆のような血の臭いに、わたしは顔をしかめた。地面は、流れ出た大量の血液で黒っぽく染まり、どこからともなく集まってきた無数の蠅によって、騒々しい饗宴が始まっていた。

先頭を歩く瞬と真理亜が、真っ黒な蠅の群れにたじろいで、歩みを止めた。

わたしたちの誰もが、蠅の群れを消去してくれることを期待して、離塵師を見た。だが、長身の僧侶は、立ち止まったまま、何の動きも見せなかった。

「どうしたんだろう？」

覚が、小声で囁いた。

影だ、とわたしは直感した。バケネズミの影は、遠目には、人間とほとんど見分けがつかなかったではないか。ミノシロモドキの呪いを受けた離塵師は、カマイタチでバケネズミを切り刻んでいる間、潜在意識においては、忌まわしい対人攻撃のイメージを払拭しきれなかったのかもしれない。もしそうなら、今度こそ本当に、愧死機構が発動しかけている可能性があった。

「離塵さん？　だいじょうぶですか？」

瞬が、声をかける。

「……ああ。心配にはおよばん」

ややあってから、離塵師は返事をしたものの、どことなく目は虚ろで、呂律も怪しい。わたしたちは、すっかり離塵師の様子に気を取られていたため、このとき、バケネズミの死骸の間から蠅のスクリーンを縫うようにして這い出してきたものに、気がつかなかった。

「な、何、あれ？」

真理亜の息を呑む声で、ようやく視線を前に戻す。

そこには、奇妙な生き物がいた。

全身、真っ黒で長い毛に覆われており、大きな犬くらいある胴体はずんぐりと太かったが、対照的に、頭部は異様なほど小さく、地面すれすれの位置からこちらを窺っている。

「……風船犬だ！」
　守が、押し殺したような声で叫ぶ。
「何言ってんだよ。そんなもの、本当にいるわけないだろう？」
　かつて大まじめに風船犬の目撃談を披露したはずの覚が、にべもなく否定する。
「でも、どう見たって、これ、そうだよ」
　守は、珍しく、自説を譲ろうとはしなかった。
「じゃあ、こいつが、風船みたいに大きくなるっていうのか？　そんな馬鹿なこと……」
　覚の言葉が合図になったように、その生き物、風船犬は、胴体を一回り大きく膨らました。
「わ。本当に膨らんだ」
　単に、胸郭に息を吸い込んで身体を大きく見せるだけかと思ったが、風船犬は、わたしたちを睥睨すると、さらにもう一回り大きくなった。
「みんな、後ろに下がれ！」
　瞬の言葉で、全員が駆け出し、風船犬から遠ざかる。
「これ、いったい、どうなるの？」
　わたしは、瞬に訊いた。
「わからない」
　瞬は、興味津々という顔だった。
「でも、ここまでは、覚の話通りだっただろう？　もし、この後も正しいとすると、破裂するまで、膨らみ続けるはずだ」
　とても、信じられなかったが、風船犬は、瞬の言葉を裏付けるように、さらに、もう一段階膨らむ。
「何のために？」
「僕らを、威嚇してるんだ」
　瞬が、つぶやく。
「威嚇？」
「たぶん、この場所から、追い払いたいんだろう」
　風船犬は、わたしたちが後退したため、先頭に一人残った形になった離塵師に向かって、じりじりと接近した。離塵師が無反応なのを見て、さらに大き

く膨れる。最初こそ大型犬くらいの体軀でしかなかったが、今では、太った羊くらいの体積になっていた。

しかし、なぜ、離塵師は動こうとはしないのか。訝しく思って長身の僧侶を見やると、立ったまま、固く目を閉じて動かない。意識が、朦朧としているのかもしれなかった。

風船犬の方は、しばらく、音無しの構えで対峙していたが、ついに業を煮やしたように、一気にそれまでの三倍以上に膨張した。身体はほとんど球状になり、逆立った黒い剛毛の間から、放射状に走る白い稲妻のようなラインが顕れた。

「警告のサイン……？　まずい、逃げろ！」

瞬が、叫んだ。わたしたちは、弾かれたように、全速力で丘を駆け下った。他の四人は脇目も振らなかったのだが、わたしは、つい好奇心に負けて立ち止まってしまった。振り返ると、風船犬は恐ろしいまでのサイズに膨れ上がっていた。

そのとき、離塵師は、ようやく目を開いた。やめろと、警告する間もなかった。呪力によって、風船犬の全身は眩いばかりの炎に包まれる。

戻ってきた瞬が、わたしの腕をつかんで、地面に引き倒した。

次の瞬間、轟音が響く。倒れて転がったわたしたちの上を、凄まじい爆風が通り過ぎていった。

わたしたちと風船犬の間は、三十メートルほど離れていたが、もし、そこが丘の斜面でなかったら、まちがいなく即死していたことだろう。

その直後に見たことについては、あまり詳しくは書きたくない。わたしたちには、ショックから立ち直るために、茫然としたり、少し泣いたりする時間が必要だった。それから、何とか気を取り直し、クレーター状に大きく土がえぐれた爆発地点を確認した。

至近距離から爆風に曝された離塵師の遺骸は、襤褸布のような状態で、まったく原形を留めていなか

った。呪力を喪ったわたしたちには、埋葬もままならなかったので、簡単に土を被せただけだったが、それだけの作業で、胃の中のものをすべて戻しそうになった。

「早季。これ、見てみろよ」

瞬が、地面に深く突き刺さっていた物体を掘り出して、わたしに手渡そうとした。

「何？」

わたしは、尻込みして、手を伸ばすことができなかった。瞬は、手にした物体を、よく見えるようにかざしてくれる。それは、円柱を輪切りにしたような形で、周囲には六枚の羽根のような形の突起と鋭い棘とが交互に生えていた。

「水車のプロペラみたい」

「これはたぶん、風船犬の背骨の一部だよ」

「え？　背骨？」

後ろから近づいてきた覚が、瞬から物体を受け取って、手の中でひねくり回す。

「石みたいに硬いな。それに、ずっしりと重い。こんなのがまともに当たったら、たぶん死ぬだろうな」

「きっと、風船犬が破裂したときに、回転しながら飛ぶように、こんな形になってるんだ」

「飛ぶって、何のために？」

「相手に突き刺さって、殺すためだよ」

あらためて周囲の地面を見回すと、あたり一面に無数の穴が穿たれていることに気づき、思わず鳥肌が立った。風船犬の身体に含まれる骨片は、すべて、爆発によって飛び出して、相手をずたずたに引き裂く凶器の役割を果たすのだろうか。

覚は、骨に鼻を近づけ、しきりに臭いを嗅いでいた。

「どうしたの？」

さぞかし血腥いのではないかと想像し、わたしは顔をしかめた。

「なんか、花火みたいな臭いがする」

「そうか。なるほどね」
　瞬が、納得したようにうなずく。

「風船犬には、たぶん、身体の中に硫黄と硝石を蓄えて、火薬を作る能力があったんだ。ただ空気を吸い込んで風船みたいに破裂しただけじゃ、あんなすごい爆発になるわけないもんな。……きっと、どっかの骨の一部を燧石（ひうちいし）みたいに擦り合わせて、発火する仕組みになってたんじゃないかな」

「ちょ、ちょっと待って。自爆するように進化する生き物なんて、本当にありうるの？」

　威嚇のために身体を膨らませる動物は数多いが、警告に従わない相手を、自ら爆発して殺傷するというのは、本末顚倒もいいところではないか。

「そうだ。ここへ来る前に、瞬が言ってたじゃない。脅しを実行に移したら相手より前に自分が死んじゃうんじゃ、風船犬はすぐに死に絶えちゃうって」

　わたしの疑問に、瞬は、自信たっぷりに答えた。

「うん。僕もそう思ってたけど、たった今、思い出したんだよ。昔の生物学の本に載ってた生き物で、風船犬みたいに爆発するやつがいたことを」

「ほかにもいるの？」

　期せずして、わたしと覚が唱和した。

「うん。そして、その生き物から類推すれば、風船犬の正体も、だいたい見当が付くんだ」

「風船犬の正体？」

「へえー。それって、風船か、犬か、どっちなんだ？」

　覚が茶々を入れる。ショックから抜け出した反動で、わたしたちは少しばかり躁状態になりつつあった。

「さっきから、みんな、何くだらないことばっかり言ってるのよ！」

　それまで黙って聞いていた真理亜が、とうとう爆発した。

「状況、わかってるの？　わたしたち、こんな、ど

こだかわかんない場所に放り出されて、迷子になっちゃったのよ？　しかも、今は、この中の誰も呪力を使えないのに……」

　みんなの顔から、一瞬にして笑みが消えた。

「そうだな」

　重苦しい沈黙のあと、瞬が言った。

「とにかく、来た道を引き返そう。今晩は、野宿するしかないだろうけど」

「おい……！」

　覚が、瞬の肘をつかんで、緊張した声で囁いた。瞬が目顔で問いかけると、クレーターの向こう側に顎をしゃくる。そちらに視線を向けたわたしたちは、凍りついた。

　四、五十メートル先に、無言でわたしたちを見つめる、たくさんの影がある。バケネズミだ。

「……どうしよう？」

　真理亜の声は、不安に揺れていた。

「決まってるだろう？　踏みとどまって、戦うしかないよ」

　覚が言った。

「戦う？　どうやってよ？　わたしたち、呪力がないのよ？」

　わたしは、反論する。

「でも、あいつらには、そんなことは、わからないはずだ。もし、ここで逃げ腰になって弱みを見せたら、調子に乗って追撃してくるぞ」

「だけど、このままここにいたら、やっぱり、いつか襲われるよ」

　守が、か細い声で言った。

「そうよ！　逃げるしかないわ」

　真理亜が、守に同調する。

　わたしは、彫像のように動かないバケネズミたちを見ているうちに、あらためて確信を抱いた。

「彼らは、絶対、戦いたがってないと思う。わたしたちに、ここから帰ってもらいたいだけなんだわ」

「何でだよ？　それだったら、あいつらの方が逃げ

ればいいじゃないか」

　最強硬派の覚が、反問する。

「きっと、あの向こうに、巣穴があるのよ」

　だからこそ、第一陣の防衛隊は皆殺しの憂き目も覚悟して、わたしたちの前に姿を現したのだ。そして、おそらくは、あの風船犬も……。

「よし。じゃあ、ゆっくりと撤退しよう」

　瞬が、いざというときだけに見せるリーダーシップを発揮した。

「絶対に、音を立てるな。連中を刺激しないように。あと、こっちが怖がってると思わせるのも、まずいから」

　それ以上の議論は、不要だった。わたしたちは、足音を忍ばせて後退する。すでに暗くなりかけていて、うっかり石ころを踏んで音がするたびに、ひやっとした。

　丘の途中でそっと振り返ると、バケネズミたちは、ぴったりとわたしたちをマークしていたが、それ以上、距離を詰めてくる気もないようだった。

「やっぱり、早季の言うとおりだったわね？　あいつら、戦う気はないみたい」

　真理亜が、弾んだ声で言った

「まだ、そう決めるのは、早いかもな」

　覚が、陰気な声で冷水を浴びせる。

「油断させといて、いきなり襲ってくるつもりかもしれないぞ」

「どうして、そんなことばっかり言うのよ？」

　わたしは、覚に噛みついた。

「わたしたちを怖がらせて、おもしろいわけ？」

「じゃあ、意味もなく、楽観的なことばっかり言ってればいいのか？」

　覚は、むっつりと言った。

「あんたが言ってることだって、無意味でしょう？」

「……いや、覚の言ってることは、正しいかもしれない」

意外なことに、そう言ったのは瞬だった。

「どういうこと？」

「早季が言ったように、あいつらは、さっきの場所では戦いたくなかったようだ。たぶん、巣穴がすぐそばにあったからだろう。でも、充分、巣穴から遠ざかったと思ったら、どうなるかわからない」

「でも……何のために、わたしたちを襲うの？」

「おいおい、ついさっき、離塵のやったことは見てただろう？　いったい何匹殺したって思ってるんだ？　こっちは一人が死んだだけで、チャラになると思うのか？」

覚の言葉には、不愉快なくらい説得力があった。

「だけど、あいつらは、わたしたちに呪力があると思ってるはずでしょう？　だったら、戦って、これ以上、無駄な犠牲が増えるのは避けるはずだわ」

真理亜が、わたしの援護に回ったが、瞬は首を振る。

「あいつらは、離塵さんが言ってたように、野生化した外来種だ。いったんは文明化されたはずだけど、その後ずっと、人間との接触が途絶えてたんだろう。最初に偵察で現れた一匹を覚えてる？　呪力の存在すら、知らなかったみたいじゃないか」

「それは、そのとおりだけど、ちょっと前に、呪力の恐ろしさは、いやというほど学んだはずでしょう？」

わたしは、バケネズミの方を窺いながら、小声で言う。

「うん。だからこそ、まだ攻撃を仕掛けてこないんだ。でも、僕たちにも同じ力があるかどうかは、いいとこ、半信半疑だろう」

「どうして？」

「あいつらは、当然、こう考えていると思う。もし、僕らにも同じような呪力があるなら、自分たちはとっくに皆殺しにされているはずだと」

今度の沈黙は、おそろしく濃密で、息苦しいものだった。

「……あいつら、これから、どうするつもりかな？」

覚が、瞬に訊く。

「僕らが、充分巣穴から離れたと思ったら、とりあえず、試しに攻撃をかけてくる可能性が高いんじゃないかな」

「それで、もし、こちらが反撃できなかったら？」

瞬は無言だったが、答えは聞くまでもなかった。

「充分、巣穴から離れるっていうのは、どのあたりだと思う？」

真理亜が、心配そうに訊ねる。

「はっきりとは、わからないけど」

瞬は、丘の上を見上げた。

「最初の危険は、この丘を下りきったところだろうな」

2

わたしたちの足取りは、来たときにもまして遅くなったため、丘を下る前にとっぷりと日が暮れてしまった。

全身に脂汗をかいていて、気持ちが悪かった。緊張のためだろうか、手足の末端は氷のように冷たい。

バケネズミたちは、送り狼のように一定の距離を保って、ぴったり追尾してきていた。

運命の分かれ目となる地点が、すぐそこまで迫っている。

瞬の説明によると、人間が開戦のような決定的な行動を起こすきっかけは、しばしば、焦点（フォーカル・ポイント）なるものに左右されるという。焦点というのは、目を引きやすく自然と意識が集中する場所のことである。たとえば、弓に矢をつがえ、鹿を狙っている猟師

がいるとしよう。鹿が森の小径を抜けて川岸にさしかかったとき、猟師が矢を射る可能性は高まる。景色の変化で気分が変わり、川面に乱反射する光で意識が覚醒するだけでなく、視界が開けているために狙いやすいという現実的な理由も、行動を後押しするのだ。

これまでにわたしたちが見てきたバケネズミの行動は、とても人間的だった。そのため、瞬は、人間と同様に、地形上の焦点が行動の引き金となる可能性があると予想していた。もし、彼らの巣穴が丘の上にあるのなら、丘と平地の間は心理的にも明確な境目となる。

「どうするの？」

わたしは、瞬に訊ねる。もはや、頼れるのは彼だけという気持ちだった。

「森に入ったら、ばらばらになって逃げるしかない」

五人が一緒にいれば、バケネズミが追ってくるのに都合がいい。ばらばらになるのは、わたしたち全員にとって耐え難いことだが、瞬の言うとおり、それ以外に選択肢はなさそうだった。

「バケネズミから見えない位置に来たら、とにかく全力で走るんだ。捕まったら終わりだから、スタミナ配分なんか気にするな。できるだけ遠くまで走って、どこかに身を隠せ。そこで、周囲の安全を確認してから、やつらに見つからないように今日来た道を戻るんだ。カヌーを隠した場所で、落ち合おう」

全員が無事に再会できる可能性を考えると、目の前が真っ暗になる。そもそも、分散して逃げるという発想自体が、何人かの犠牲は覚悟して、誰か一人でも逃げ延びればよいという考えにもとづくものではないか。

「森に入るまでは、どうする？」

覚が、瞬の横に来て訊いた。言いたいことは、わたしにも、すぐにわかった。

丘の麓から森までは、五十メートルほどの距離が

あった。その間に、身を隠せるような木立や岩は見当たらない。ゆっくり歩いていれば、絶好の標的になるだろう。

　真理亜が、堪えきれなくなったように、啜り上げた。事態の深刻さを、あらためて感じずにはいられない。わたしは、真理亜の震える肩にそっと腕を回して、額をすり合わせて慰めた。

　しばらくは、声をひそめての議論が続く。

　すべては、相手の出方次第なのだ。ここで、攻撃してくるのか。見送るつもりなのか。

　攻撃してくるのなら、こちらは、全速力で走って森に逃げ込まなければならない。だが、走った瞬間、わたしたちには呪力がないことを暴露してしまう。しかも、逃げ出すこと自体が、確実に、バケネズミの攻撃を誘発するはずだ。そうなれば、五人全員が無事に逃げおおせる可能性は、ほとんどない。

　一方で、攻撃がないことに賭けてゆっくり歩いていた場合、もし、いっせいに矢を射かけられれば、誰一人として助からないだろう。

「……ぎりぎりまで粘って、向こうの態度を見極めるしかないだろうな」

　瞬の言葉には、あきらめと開き直りのようなものが感じられた。

「それ、誰が判断するんだ？」と、覚。

「五人全員の運命がかかってるんだ」

　瞬は、吐息とともに言葉を吐き出した。

「多数決で決めよう」

　微妙な起伏が続いているため、丘の麓と平地の境界線は曖昧だった。徐々に濃くなっていく夕闇が、周囲のものの輪郭をぼんやりと滲ませていく。わたしたちは、気がつくと焦点（フォーカル・ポイント）を大きく踏み越えて、いつ矢が飛んでくるかわからない危険地帯を歩いていた。

　呼吸が、速く、浅くなっていた。こめかみの血管は、ずきずきと脈打っている。

いつでも飛び出せる準備をしていなければならないのに、下肢は妙に頼りなく、ふわふわとして力が入らない。

わたしは、そっと振り返り、かすかな月明かりを頼りに丘の方を透かし見た。

バケネズミたちには、動きはなかった。見晴らしのいい中腹に陣取って、わたしたちを注視しているようだ。

いい子ね。そのまま、じっとしてて。わたしたちは、すぐいなくなるから。誰も、あなたたちを脅かしたりしないから。矢なんか射たら、どうなるかわかってるでしょう？　このままわたしたちを帰してくれたら、あなたたちも無事よ。だけど、もしわたしたちを傷つければ、あなたたちは殺されるわ。一匹残らず。だから、お願いよ。もう少しの間だけ、おとなしくしてて。このまま、動かないでいて。

わたしは、懸命に、心の中で語りかけた。それから、前に向き直って、どきりとした。

四つの黒いシルエット。そのうちの一つが、手を挙げている。

「誰？」

低い声で問いただす。

「ぼ、僕」

答えたのは、あえぐような守の声だった。

「今すぐ、走って逃げた方がいい」

「何言ってるの？　だいじょうぶよ。ね？　もう少しだから」

守が手を下ろしたので、わたしは少しほっとした。挙手が三つになった瞬間、多数決は成立する。だが、実際には、三人といわず一人がパニックに駆られて走り始めた時点で、万事休すだ。バケネズミは攻撃を開始し、全員、命からがら走って逃げざるをえない。

「早季。歩くのが速すぎるぞ」

瞬の声で現実に引き戻される。無意識にだが、小走りに近い状態になっていたようだ。

「あ、ごめん」

　わたしは、自分に鞭打つような気持ちで、ゆっくりとした歩調に戻した。

「あと少しだ」

　覚が、囁く。

「瞬。残り二十メートルになったら、走ろう。狙いを付けてから矢が飛んで来るまでに、三、四秒かかるはずだ。充分、逃げ切れる」

「……僕は、最後まで走りたくない」

　瞬の声には、迷いが感じられた。

「走れば、やつらは追いかけてくる。森に入れたって、安全地帯っていうわけじゃないんだぞ」

「でも、森の中だったら、隠れられる。速く逃げないと、もし、今……」

　守が早口に言って、また手を挙げた。

「ねえ……後ろ！　何だか」

　真理亜が、押し殺した声で言う。わたしは、さっと振り向いて、心臓に、痛みのようなショックを感じた。丘の中腹にいたバケネズミたちが駆け下りてくる。

「来るわ！」

　真理亜は、悲鳴を上げて、挙手した。二票。

「待て。まだだ。まだ、攻撃してきたわけじゃない」

　瞬は、守と真理亜を宥めようとしたが、二人は、手を下ろそうとはしなかった。迷いながら、覚がゆっくり腕を持ち上げかける。

「やめて！」

　わたしは、覚を制した。

「あと少しなんだから。まだ、もうちょっと……」

　鋭く風を切る音がした。一本の矢が、笛のような、蜂の唸り声のような音を立てながらわたしたちの上空を飛び越えていき、森の入り口付近に突き刺さる。

　鏑矢という名前は知らなくても、それが宣戦布告の印であることはわかった。三人目の挙手を待た

ず、次の瞬間、わたしたちは脱兎のごとく駆け出していた。

あれほど必死に走ったのは、生まれて初めてだった。なのに、いくら足を動かしても、いっこうに前に進まない。それは、悪夢の中にいるような奇妙な感覚だった。

それでも、森の入り口は、しだいに目の前に迫ってくる。

あと、もう少しだ。

木々の間を縫うようにして飛び込んだときに、初めて自分がかなりのスピードで走っていることに気がついた。

「かたまるな。ばらばらになって逃げろ！」

瞬の叫び声が響く。

わたしは、道から大きく右にそれて、下生えの中を疾走した。みんなの声や走る音は、まったく聞こえない。いつのまにか、一人になっていた。

自分の荒い息遣いだけが、頭の中に響いていた。こんな無茶なペースでどこまでもつか、見当もつかない。とにかく、走れるところまでは走り続けるしかなかった。

ついさっきまで、四人の仲間たちと一緒にいたのに、突然、独りぼっちになってしまった。バケネズミが追いかけてくる恐怖に加えて、寂しさによる不安が、胸を締め付ける。伴走しているのは、木々の梢の間から見え隠れする月だけだった。

息が苦しい。肺はより多くの酸素を求めて喘ぎ、気管は悲鳴を上げていた。太腿はだるく、膝から下は、もはや感覚がなかった。

限界だ。立ち止まって、休みたい。

だが、ここで止まったら、死ぬかもしれない。

あと少し。あと、もうちょっとだけ、走ろう。

そう思った瞬間、何かに躓いた。

体勢を立て直そうと思ったが、どうすることもできない。わたしの身体は、走ってきた勢いで、ふわりと宙に浮き、したたかに地面に打ち付けられた。

すぐに起きあがらなきゃとは思ったものの、どこかを痛めたらしく、思うように身体が動かない。何とか仰向けになると、黄色い月が、これまでに見たことがないくらい明るく網膜に映った。

冷えた土が、薄いTシャツとナップザック越しに背中の熱を奪い取っていく。ふいごのような荒い息をつくほかは何一つできずに、わたしはその場に横たわっていた。

ここで、死ぬのだろうか。ふと、そんな思いがよぎる。わたしは、まだ若すぎて、死はあまりにも実感がなかった。

「早季！」

遠くから、わたしを呼ぶ声が聞こえた。

覚だ。近づいてくる。

「早季。だいじょうぶか？」

「覚……逃げて」

わたしは、ようやく、声を絞り出した。

「動けるか？」

今度は、すぐ間近から、声が聞こえる。続いてわたしを覗き込んだのは、逆光で表情は見えないものの、まちがいなく覚の顔だった。

「無理みたい」

「頑張れ。早く、ここから逃げないと」

覚は、わたしの手を引っ張って引き起こした。わたしは、覚に支えられて、よろめきながらも何とか立ち上がった。

「走れる？」

わたしは、首を振った。

「じゃあ、歩こう」

「ううん……もう、遅いわ」

「何言ってるんだよ？」

わたしは、覚の肩越しに後ろを見やった。覚も、振り返る。闇の中に、たくさんの目が光っていた。耳を澄ますと、かすかな獣の息遣いも伝わってくる。

「すっかり、バケネズミに囲まれてるわ」

てっきり、その場で殺されるものと思ったが、さいわい、その予想は当たらなかった。わたしたち二人は、槍を構えた数匹のバケネズミたちによって、追い立てられるように連行された。バケネズミたちはまだ警戒しているらしく、わたしたちの三メートル以内には近づこうとはしない。そのおかげか、高手小手にくくられたり小突き回されたりすることはなかったが、背後の槍ぶすまに加えて、少し離れた場所では数匹が弓を並べてこちらを狙っていたため、生きた心地がしなかった。

「ほかのみんなは、逃げたの？」

わたしは、小声で覚に訊く。

「わからない。森に入ってから、すぐに姿が見えなくなった」

バケネズミに会話を咎められるかと思ったが、彼らが無関心なようだったので、なおも訊ねてみる。

「どうやって、わたしを見つけたの？」

「走ってる途中で、後ろ姿が見えたんだ」

それで追ってきてしまっては、ばらばらになって逃げるという趣旨に合わないのだが、非難する気にはなれなかった。

「みんな、たぶん、逃げたよね」

「そうだな。たぶん」

気休めにすぎないとは思ったが、覚の言葉で、ほんの少しだけ気が楽になった。

そのとき、わたしたちを先導していたバケネズミが、止まれという身振りをした。

そこは、森の中の小さな空閑地だった。いよいよ殺されるのか。わたしは、目を閉じた。だが、棒のようなもので胸を突かれ、すぐに目を開ける。

「キキキキ……Grrrr!」

目の前には、一匹のバケネズミが立っていた。身長は、ほとんどわたしと変わらない。房飾りの付いた鎧兜に身を固め、長柄の槍を携えている。さしずめ、この一隊を指揮する隊長といったところか。わ

たしは、鈍く痛む胸にそっと触れてみた。Tシャツは破れていない。出血もないようだ。見るからに鋭利な穂先ではなく、石突きで突かれたらしい。

「早季……！」

覚が、わたしに駆け寄ろうとしたとたん、別のバケネズミの槍で足を払われて、地面に倒れ伏した。

「だいじょうぶ。動かないで」

わたしは、とっさにそう叫んだ。もちろん、おとなしくしていれば危害を加えられないという確信があったわけではない。むしろ、このときは、二人とも処刑されることを半ば覚悟していた。

眼前のバケネズミが、再び鋭い叫び声を発した。それで、わたしは初めて、隊長らしきバケネズミの顔を至近距離から眺めることになった。

漆黒の兜の下で光っている残忍そうな赤い目も、豚のような鼻面も、前に水路で助けたバケネズミや、ほんの数時間前に離塵師が殺した個体とそっくりだった。だが、一点だけ、はっきりと異なっている部分がある。額から目のまわり、鼻面の上面から頬、顎にかけて、松毬（まつぼっくり）のような鱗でびっしりと覆われているのだ。

鱗を持つ哺乳類には、穿山甲（センザンコウ）のような例はあるが、バケネズミのような齧歯類では聞いたことがない。しかも、同じ種類の中で、鱗がある個体とないものが混在しているのは、いかにも奇妙だ。

そんな考えが、脳裏を一瞬だけ駆けめぐって、消えた。冷たい金属が頬に当たる感触。わたしは槍を突きつけられているのだ。穂先に反射する月光が眩しい。

これが最後なのだろうか。そう思う間もなく、穂先は、すっと引き戻された。わたしを串刺しにするつもりなのだろう。

気合いのつもりなのだろう、松毬隊長が、瀕死の豚のような奇声を上げた。わたしは、観念して目を瞑った。

そして、数秒後、また目を開ける。

何事も起きていなかった。見ると、松毬隊長は、すでに覚の前に移動している。覚は、二匹のバケネズミに両側から腕を取られていた。

あっと思った刹那、松毬隊長の槍がすばやく繰り出され、覚の顔面を襲っていた。だが、穂先が突き刺さる直前、間一髪で止められる。続いて、二突き、三突き。

覚は、気丈に頑張っていたが、とうとう恐怖のあまり膝の力が抜け、へたり込みそうになって両側のバケネズミに支えられた。その瞬間、寸止めされていた槍の穂先が額をかすめた。

「覚！」

わたしは、思わず飛び出そうとしたが、別のバケネズミの槍で制止される。

「だいじょうぶ。平気だ」

覚が、こちらを振り向いて言う。額の創傷からは、血が流れ出していた。胸が痛んだが、浅手らしいので、命に関わることはないだろうとほっとする。

松毬隊長以下のバケネズミたちも、一様に安堵しているような様子だった。とはいえ、覚の傷が軽かったことが理由ではないようだった。どうやら彼らは、わたしたちが呪力を持っているのではないかという疑念を捨てきれなかったらしい。そのため、巣（コロニー）へ連れて行く前に、わたしたちを脅かすことによって確認したのだろう。

再び、わたしたちは、追い立てられ、森の中を歩かされた。

「痛い？」

わたしが囁くと、覚は黙って首を振った。出血はなかなか止まらず、覚の目の上から頬、顎のあたりまで、黒っぽく見える筋を何本も作っている。

「わたしたち、どうなるのかな？」

「たぶん、すぐに殺されることはないよ」

覚は、小声で言う。

「どうしてわかるの？」

「殺すんなら、とっくにやってるはずだ」

「そんなの、ただの希望的観測じゃない」

「それだけじゃないよ。あいつらは、森に入る前に大きな音の鳴る矢を放っただろう？　あれは、たぶん、止まれという警告だったんだ。最初から僕らを殺すつもりなら、あんな手間をかけたりしないよ」

「じゃあ、わたしたちを捕まえて、どうするつもりなの？」

「さあ。でも、あいつらが、今日、初めて呪力の存在を知ったんなら、驚いてるはずだし、何としても詳しく知りたいと思うはずだろう？　僕らは、あいつらにとって、今のところ唯一の手がかりだ。絶対、簡単には殺さないよ」

覚の推測は、たぶん、的を射ていたのだろうと思う。わたしたちは、実際、それからしばらくの間は、生命の危機を感じることはなかった。

わたしたちは、森を抜けて、再び丘を上らされた。疲労はとうにピークに達しており、背後から槍で追い立てられていなければ、たぶん、一歩も前へ進めなかっただろう。

そんな状態でも、わたしたちを護送するバケネズミたちの姿は、自然に目に入ってくる。驚いたのは、全部で二十匹ほどの中で、標準的なバケネズミの姿形といえるのは、半分の十匹にすぎず、残りの十匹については身体の一部に著しい変形が見られたという点である。しかも、それらはいずれも自然に発生した畸形ではなく、何らかの合目的的な改造の結果としか考えられなかった。

前述の隊長と、副隊長とおぼしき二匹は、松毬のような鱗に覆われていたが、よく観察してみると、鱗がカバーしているのは、露出した両手など、鎧の隙間にあたる箇所であるようだった。

また、弓兵の中でも、他より二回りほど大きな強弓を持った四匹は、左右の腕の形状に、シオマネキのような差異があった。弓を持つ方の手は、棒状で

長く、半ば硬直しているようだった。一方、矢をつがえて弦を引き絞る側の手は、弓手に比べるとずっと短かいものの、肩から胸にかけての筋肉が逞しく盛り上がっている。肘から先はずっと細く、指先は癒着して二本の鉤のようになっていた。

さらに、別の二匹はそれぞれ、カメレオンのように大きく飛び出した眼球や、コウモリを思わせる巨大な耳殻を持っており、絶えず目や耳を忙しく動かしては、周囲を警戒しているようだった。

そのほか、頭部に一本の長い角が生えた個体や、異様にひょろ長い手足を持った個体がちらりと視界に入ったが、それらの変異が何の役に立つのかは想像もつかない。

「どうなってるんだ、こいつら。化け物行列じゃないか」

覚が、呻いた。

「だって、化けネズミだもん」

「そんな意味だったとは、知らなかったよ」

まったく笑えない軽口だったが、心の余裕を取り戻し、事態を客観的に眺めるためには、多少の効果はあったと思う。

丘を上りきると、右手には月光に照らされて無気味なシルエットを浮き立たせている木立に囲まれた道があった。だが、バケネズミたちは、その反対側、野荊が密生している狭い隙間を縫って入っていく。わたしたちも、否応なしに棘だらけの灌木を掻き分けていくはめになった。

このノイバラは、外敵を巣に近づけないように、バケネズミたちが植えたものだろう。そう考えながら、左右に曲がりくねった道を行くと、突然、視界が開けた。

そこは、漫然と見過ごせば、ただの草地にしか見えなかったが、大きな水楢の木の根本からバケネズミが現れるのを見て、巣の存在に気づく。巣の入り口は丈の高い雑草で巧妙にカモフラージュされており、そこから次々とバケネズミたちが湧き出してく

る様は、まるで手品を見ているようである。

　その中で、ひときわ体格が大きいバケネズミが、他を押しのけてのっそりと前へ出た。革製の鎧の上にマントをまとっており、このコロニーではかなりの高位にある個体らしい。だが、何よりも大きな特徴は、まるで金槌のように前後に張り出した才槌（さいづち）頭（あたま）だった。

　松毬隊長が四つ足になり、へりくだった様子で進み出ると、才槌頭の方は逆に直立する。二匹は協議を始めたようだった。才槌頭は、ぎらぎら光る目でわたしたちを睨み付けると、松毬隊長に何事か指示を与える。

　わたしたちは、真っ暗な地中のトンネルに連れ込まれるのを怖れていたが、ほっとしたことに、巣穴の入り口からは遠ざけられ、木立の奥へと追いやられた。そこにあったのは、円錐形に立てた木の支柱にノイバラの蔓を巻き付けて作った、直径が二メートル、高さ一・五メートルほどの、巨大な鳥籠のようなものだった。

　鳥籠には入り口らしいものは見当たらなかったが、一ヵ所だけ支柱がなく、ノイバラの茎だけが張られている箇所があった。二匹のバケネズミが、二本の槍で押してノイバラの茎の間を広げ、わたしたちを鳥籠に入れる。槍が引き抜かれたとたん、棘だらけの茎の間隔は二、三十センチほどに戻ってしまった。もはや、ひどい切り傷を負う覚悟なしに外へ出ることはできない。その上、槍を持った歩哨が一匹、陰気な目つきでわたしたちを見張っているのだ。

　鳥籠の中は、立っていられる高さがなかったので、わたしたちは、やむをえず冷たい地べたにナップザックを敷いて腰を下ろす。月の光で、お互いの顔がかろうじて見えるくらいの明るさだった。

「ひどい一日だったね」

　思いがけないほど優しい覚の口調に、緊張が途切れ、不覚にも涙がこぼれそうになった。

「もう本当に、最っ低。……覚、怪我は？」

「全然何ともないよ。血も乾いてるし、皮をちょっと切られただけだから」

覚は、だいじょうぶだというように、耳をぴくぴく動かして見せた。これは、クラスで、彼しかできない得意技だった。わたしは、ほっとして、少し笑った。覚の額には幾筋もの血の痕がこびりつき、見るからに恐ろしげな形相になっていたが、本人が言うように、傷そのものはたいしたことがないらしい。

「これから、どうなるの？」

「とりあえず今は、ここで助けを待つしかないよ。瞬たちが、うまく逃げ切ってくれたら、町に報せてくれるだろうし」

救援が到着するまでに、どのくらいの時間待たなければならないのだろう。想像するだけで気が滅入りそうだった。

わたしたちは、狭い鳥籠の中で、肩を寄せ合うようにして時間を過ごした。

「まだ、見てるね」

鳥籠に入れられてから小一時間はたっていたが、歩哨は、相変わらず胡乱な目つきで、ちらちらと様子を窺っている。わたしと目が合うと、いったんは顔を背けるのだが、すぐにまた、こちらに視線を戻すのだ。

「気にすんなよ。あんな馬鹿な、ネズミ一匹」

覚は、わたしの腰に手を回しながら言う。

「でも、何だか……ねえ、何するの？」

後半のセリフは、覚の行動に向けたものだ。

「神経が苛ついてるだろう？　僕が慰めてあげるよ」

覚は、窮屈な姿勢のまま、わたしに覆い被さってこようとする。逆光で顔は暗い影になっていたが、目だけはきらきらと輝いていた。

「いいわ。わたしがしたげる。覚は、じっとしてて」

わたしは、覚の胸に掌を当てた。覚は、動きを止める。Tシャツ越しに、心臓の鼓動がとくとくと伝わってきた。わたしは、微笑して、ゆっくりと彼を仰向けに押し倒した。

月明かりに青白く浮かんだ覚の顔を見下ろしながら、指の背で優しく頰を撫でてやる。覚は、うっとりと目を閉じ、まるで飼い猫のように大人しく、されるがままになっていた。

両手で頰を挟み、額にキスすると、覚は、わたしの胸に顔を埋めた。

首筋から胸、両腕、脇から下腹部まで、順番に掌と指で愛撫していく。

このときまで、わたしたちがこうして触れ合う機会はあまりなかった。だが、ふだんの生意気な言動とは裏腹な態度に、たまらない愛しさを感じた。

彼のペニスは、すっかり固くなっていた。それまで、わたしは、女の子同士での経験しかなかったから、男の子を可愛がる方法には不慣れだった。ジーンズの上からさすってやると、厚い生地を通しても、その部分が熱くなり、脈打っているのがわかる。ここは、どうしたらいいのだろう。

とりあえず、そこは先延ばしにして、内腿やお尻を爪の先で引っ搔いたりしていると、覚の方が焦れたように、わたしの手を局部に押しつけてきた。

ジーンズが窮屈そうだったのでボタンを外し、少しだけ前を開いてやる。トランクスを突き破りそうな膨らみが露わになった。

もう一度、男の子の一番敏感な部分をさすってあげた。今度は、薄い布を一枚隔てているだけなので、形や大きさがはっきりとわかる。それが、まるで独立した生き物、小さなペットのように、真摯にわたしの愛撫に反応するのが面白かった。

ふと、ミノシロモドキの言葉が、耳朶（じだ）に蘇る。

『ボノボは、個体間の緊張やストレスが高まると、濃密な性的接触によって解消します。成熟した雄と雌の場合には性行為になりますが、同性間や未成熟

な個体の場合でも、性器を擦り合わせるなどの疑似的な性行為を行うのです。これによって、争いは未然に防がれ、群れの秩序も維持されるわけです……』

違う。わたしたちは、猿なんかじゃない。

わたしは、頭を振って、雑念を追い払おうとした。

しかし、と思う。倫理規定は、男女間の性行為についてはきわめて厳格な要件を定めており、ほとんど禁止に近い扱いなのに、その一歩手前の行為や、同性間の接触は、むしろ奨励しているのは、なぜなんだろう。

『第一段階としては、肉体的な接触を頻繁にすることです。握手する。抱擁する。頰に接吻をする。第二段階は、幼児期から思春期までの間は、異性間だけではなく同性愛的接触をも奨励することです。オルガスムスを伴う疑似性行為によって、対人的な緊張を和らげる習慣を付けさせること。そして、第三段階は、成人間においての完全なフリーセックスです』

もし、ミノシロモドキが言ったことが真実で、これがすべて、わたしたちの社会を守るためであるなら……。

「どうしたの？」

わたしが急に手を止めたので、覚が不審そうに訊いた。

「うーん、ごめん。何でもない」

わたしが謝ると、覚は、「今度は、僕が気持ちよくしてあげるよ」と言って、わたしの身体をまさぐり始めた。

「ちょ、ちょっと……！」

本人は、ベルベットのように優しくタッチしているつもりらしいが、やたらにくすぐったい。わたしは、身悶えした。のけぞるように顔を上げたとき、射るような視線に気づく。例のバケネズミの歩哨だった。瞬きもせずに、こちらを注視している。

大人であれ、子供であれ、親密な触れ合いの最中にじろじろ観察されることは好まない。したがって、たまたまそういう場面に行き合った人は、すぐに視線を外し、その場を立ち去らなければ、不作法とされている。

もっとも、傍観者が人間以外であれば、当然その限りではないし、わたしも以前、波崎砂丘で真理亜と抱き合っていたとき、どうしてそうなったのかは覚えていないが、傍らに、瞬の愛犬であるブルドッグのすばるが控えていたことがある。

だが、このときのバケネズミの視線は、すばるとは違ってひどく不愉快だった。あきらかに、わたしたちの行為の意味を理解しているだけでなく、下等な脳に宿る卑猥で陋劣な妄想の色眼鏡を通して、涎を垂らさんばかりの表情で見入っているのだ。

またもや、わたしが動きを止めてしまったので、覚は薄目を開けた。

「何だよ、焦らすなよ」

「違うの。……あれ」

わたしは、バケネズミの歩哨の方を目で示した。

覚は、舌打ちした。

「だから、あんなの気にするなって」

「無理よ」

覚は、快楽を中断された恨みの籠もった目で、バケネズミの歩哨を睨んだ。

「畜生。邪魔なやつだな。どうにかしてやろう」

「呪力もないのに、どうやって？」

わたしの言葉に嘲弄の響きを感じたらしく、覚は、むっとした顔をした。

「呪力なんかなくたって、人間の知恵があるさ」

辛辣な返答が浮かんだが、胸にしまっておくことにする。

「……だけど、どうにもならないわ。ここからじゃ、手も届かないし、言葉も通じないんだから」

覚は何かを思いついたらしく、急に目を輝かせた。

嫌な予感がしたが、黙って見守っていると、ご

そごそと、ナップザックの中を探り始める。

「何探してるの？」

「これだよ」

覚が自慢げに取り出したのは白い水鳥の卵、いや、カヤノスヅクリの偽卵だった。

「そんなもの、どうするつもり？」

偽卵をぶつけると、中から『悪魔の手』がバネ仕掛けで飛び出して、悪臭を放つ糞塊（ふんかい）が周囲二、三メートル四方を汚す。とはいえ、もちろん殺傷能力などはないし、せいぜい、相手を激怒させる程度の効能しかないのだが。

「まあ、見てろって」

覚は、膝立ちの格好で鳥籠の入り口に近づき、偽卵を持ってバケネズミの歩哨に合図を送った。向こうの方は、初めてこちらからコミュニケーションを取ろうとしたので、ひどく警戒したらしく、居丈高に槍を振り立てる。

「おーい。そんなに、怒るなよ。立ちっぱなしだから、腹が減ってるだろう？　美味しい美味しい、ヨシゴイの卵だよー」

覚は、猫撫で声で敵意のないことをアピールしつつ、手にした偽卵を、ノイバラの蔓の間から相手の方に転がした。

バケネズミの衛兵は、転がってきた偽卵を見て、首を傾げる。しばらく躊躇していたが、槍を持ったまま、一本の前脚で器用に持ち上げた。

「馬っ鹿じゃないの？　バケネズミだって、偽卵のことくらい知ってるわよ」

「そうかな？　そうとも限らないと思うけど」

覚の声は、緊張と期待からか、ややかすれていたが、妙に自信ありげでもあった。

「こいつらは、最近、大陸からやって来た外来種だろう？　カヤノスヅクリっていうのは、東関東の固有種らしいから、もしかすると、見たこともないかもしれない」

「だとしても、せいぜい糞まみれにして、かんかん

に怒らせるだけよ。だって、まさか、蛇みたいに丸呑みにでもしない限り……」

覚が、あっと小さく叫んだ。視線の先に目をやると、バケネズミの歩哨が今まさに上を向き、ぱっくり開いた口の中に偽卵を落とし込んだところだった。

続いて眼前で起きたことは、あまりにも残酷で、とても正視に耐えなかった。

こんなにひどいことをしなくたっていいじゃないかと、覚を難詰しようと思ったが、彼の横顔を見ると、わたし以上にショックを受けているのがわかったので、何も言えなかった。

バケネズミの歩哨は、とうとう動かなくなった。おそらく絶命したのだろう。鳴き声を発することもできなかったので、わたしたちの犯行は、まだ露見していないはずだ。

「どうしよう？」

わたしは、そっと覚に訊ねた。わたしが優柔不断で、いつも誰かにお伺いを立てているように思われると心外である。このときは、何でもいいから口火を切りたいという気持ちからだった。

「……逃げるしかないな」

覚は、つぶやくように言った。

「こいつを殺したことがわかったら、やつらは、こんどこそ、僕らを生かしてはおかないはずだ」

「でも、どうやって？」

わたしは、太いノイバラの茎に手をかけようとして、指を刺し、あわてて引っ込めた。全身血まみれになるのを覚悟しても、無理やりここを擦り抜けるのは難しそうだ。

「あれだ！」

覚は、死体の横に落ちている槍を指さした。ノイバラの茎の間からは、かろうじて腕を突き出すことができる。覚は、ナップザックの中身を全部出すと、肩ひもの一端を握って槍の方へ放り投げた。何とか引っかけてたぐり寄せようというのだが、なか

なかうまくいかない。それでも、何度か試みるうち、ナップザックが柄の部分に引っかかり、少しだけ手前に引き寄せることができた。

「代わるわ」

わたしは、覚の腕がノイバラの棘で傷ついているのを見て言ったが、覚は首を振って、飽くなきチャレンジを続ける。

「やったぞ！」

どうにか槍を手にしたときには、覚の腕には無数の傷がつき、出血で赤く染まっていた。

覚はさっそく、鳥籠に入れられたときにバケネズミたちがやった方法を真似して、槍を梃子（てこ）にしてノイバラの茎を押し広げようとしたが、その結果わかったのは、槍が一本では、どうやってもうまくいかないということだった。隙間を広げるためには、二本を交差して使わなければならないのだ。

「しかたない。切り開こう」

今度はノイバラの茎を切断にかかったが、驚いたことに、歩哨が持っていた槍の穂先は石器だった。松毬隊長の槍には、金属製らしい穂先が付いていたのだが。

「早くしないと、見つかっちゃう！」

わたしは、気を揉んで言った。

「もうちょっとだよ」

覚は、不平ひとつ言わず、懸命の努力を続けている。日頃の彼、ほら吹きで、皮肉屋で、ちょっと批判されただけでむきになって言い返す覚からは想像もつかない姿で、わたしは意外の念に打たれていた。

さいわい、黒曜石か何かでできた穂先は、意外なくらい鋭利だった。覚は、ものの二、三分でノイバラの茎を挽き切った。それ以上、時間を費やすことはできない。覚は、切った茎を槍の柄でねじ曲げて、手前に押し上げた。

「早く！　ここから外に出るんだ」

茎一本分の隙間は、わたしが通り抜けるのにもや

っとだったが、すばやく四つん這いになって外に出た。

わたしにナップザックを手渡すと、今度は、覚が出てくる番だった。鳥籠の中に向かって曲げた茎を槍の柄で外から支えるのは骨が折れたが、何とかやり遂げる。覚の横幅は、わたしより少し大きかったらしく、脇腹を二、三ヵ所、棘で引っ掻いたようだが、すでに満身創痍の状態だったから、今さら大勢に影響はなかっただろう。

わたしたちは、身体を低くして木立の向こうの様子を窺った。多くのバケネズミたちは瞬たちの追跡に駆り出されているらしく、立っている後ろ姿が見えたのは、二、三匹だけだった。そのほかに、数匹が、しきりに巣穴から出たり入ったりしている。

「よし。逃げるぞ」

わたしたちは、早足で巣穴とは反対方向に向かった。カヌーを隠した霞ケ浦の岸からはますます離れてしまうが、背に腹は代えられない。足音を忍ばせ数十メートル進んでから、駆け出した。

「どっちへ行くの？」

「とりあえず、まっすぐ行こう」

捕まってから、どのくらいの時間がたっていただろう。すでに、月はかなり傾いてきており、遠くの山の稜線にかかっていた。

わたしたちは、暗い山道をひた走った。今度こそ、捕まれば確実な死が待っていることだろう。

「それ、捨てた方がいいんじゃない？」

わたしは、早くも息を切らしながら覚に言った。彼は、例の槍を後生大事に持ってきていたのだ。

「まだ、役に立つかもしれない」

覚は言葉少なに答えたが、その意味するところを考えると暗然とせざるを得ない。呪力を喪失した二人の人間の子供にとって、今や唯一の武器といえるのが、この貧弱な槍一本なのだから。

それから、四、五十分は、何事もなく経過した。

わたしたちは、ほとんどへたばりそうになりながら

も、何とか逃げ続けていた。さいわい、追っ手がかかったような様子はまだなかったものの、不安はいや増す一方だった。

哀調を帯びたメロディとともに、和貴園で習った昔の歌の一節が浮かんだ。

お家（うち）がだんだん遠くなる。遠くなる。
今きたこの道かえりゃんせ。かえりゃんせ。

「いつまで、こっちの方に行くの？」

わたしは、とうとう我慢できなくなって訊いた。

「とりあえず、やつらの巣穴から遠ざからないと」

覚の頭には、追ってくるバケネズミの幻影しかないようだった。

「でも、わたしたち、西へ向かってるでしょう？　このままじゃ、霞ケ浦からはどんどん遠ざかっちゃうわ」

「だけど、まさか戻るわけにもいかないだろう？　どこか、大きく迂回できる道に出るまでは、このまま行くしかないよ」

「だって、どこまでもずっと一本道みたいじゃない。いったんこの道からそれて、森の中を歩いて戻ったら？」

「夜中に森の中なんか歩いたら、絶対、迷うだけだよ。どっちの方角へ行ってるのかわからなくなるし、下手すると、元来たとこに戻っちゃうぞ」

覚は、身震いしたように見えた。

「だけど、このまま一本道を逃げてたんじゃ、あいつらが追いかけてきたとき、簡単に見つかっちゃうわ」

「だから、今のうちに、少しでも距離を稼いどくんだよ」

わたしたちの議論は、まったく嚙み合わなかった。覚は、その間も歩調を緩めようとはしなかったので、しかたなく、わたしも後に付いていく。

だが、その覚が、唐突に立ち止まった。

「どうしたの？」

覚は、唇に指を当てて、喋るなという身振りをした。姿勢を低くして、前方を凝視している。

私も、彼が見ている方に視線をやった。何も、変わったものは見えない。

再度、覚に話しかけようとしたとき、前方の茂みで、がさっという音がした。

わたしたちは、凍りついた。

二、三十メートルほど先の道の両側から、小人のような影がいくつも現れた。それぞれ、手には、槍や刀のような武器を携えている。

「バケネズミだわ……」

絶望で、気が遠くなりそうだった。覚は、粗末な槍を握りしめて一歩前に出た。

3

バケネズミは、全部で六匹いた。ゆっくりと、こちらに向かって近づいてくる。

「覚。槍を捨てて」

わたしは、なるべく平静に聞こえるような声でささやいた。

「逆らったら、殺されるわ」

「どっちみち、殺される」

覚は、首を振った。

「いいか。僕が戦ってる間に、森に入って逃げるんだ」

「そんな無理よ。逃げ切れるはずないじゃない。でも、おとなしくしてれば、すぐには殺されないわ。助けが来るのを待ちましょう」

「だめだ。間に合わない」

覚は、頑固に言い張る。

「それに、もう、あんな檻に閉じこめられるのはいやだ」
「覚！　お願いだから、早まらないで」
　六匹のバケネズミたちは、わたしたちから四、五メートルほどの位置で止まった。警戒しているのだろうか。だが、それにしては、どことなく様子がおかしい。
「……ちょっと待って」
　わたしは、槍を構えなおした覚の腕に手をかけた。
「邪魔するな」
「そうじゃなくて……これ、さっきのやつらとは違うわ」
「え？」
　覚は、怪訝そうに訊き返す。
　そのとき、横一列に並んだ六匹のバケネズミは、いっせいに槍を降ろしたかと思うと、突然、その場に跪（ひざまず）いた。
「何だ？」
　覚が叫ぶ。わたしは、ただ、口をぽかんと開けて見ているだけだった。
「キキキＧｒｒｒ……カ・ヴィ・サマ」
　真ん中のバケネズミだけが顔を上げ、奇怪な発音で口上らしきものを述べる。
「ｓｓｈ……シオア☆アーヴ・コロニ……∈∂Å。ツチクモ★Ｂｒｒｒ……キケン！」
　何を言っているのかは、さっぱりわからない。だが、跪いているバケネズミの額には、入れ墨らしきものが見えた。
「助かった！　人に従順なコロニーのバケネズミよ！」
　わたしは、安堵のあまり腰が抜けそうになった。覚はまだ半信半疑の顔だったが、意を決したようにバケネズミたちに向かって歩いていった。おっかなびっくりという感じで、三メートルほどの距離で立ち止まると、覗き込むようにして入れ墨を確認し

た。
「『塩６０４』か。もしかしたら、『塩屋虻（シオヤアブ）』コロニーのことかな？」
「キキキキキ……シオア☆アーヴ！　シオア☆アーヴ！」
　口上役のバケネズミが、覚の言葉に反応して、米搗きバッタのように大仰な動作で頭を上下させる。
「ツ☆クモ★……キケン……ツチクモ★キケン！」
　後になって知ったことだが、保健所はこのときすでに、わたしたちを拘束した外来種のコロニーを認知しており、『土蜘蛛（ツチグモ）』と命名していた。ただし、その前に半島から渡ってきた『馬陸（ヤスデ）』コロニーが比較的穏和で、さしたるトラブルもなくバケネズミの秩序に組み込まれていたこともあって、『土蜘蛛（ツチグモ）』コロニーの危険性は過小評価されていたらしい。
　ちなみに、土蜘蛛というのは奇しくも、太古に日本列島を統一した大和王朝（神聖サクラ王朝と同時期の新ヤマト王朝とは別）が、先住民である縄文人たちに与えた蔑称と同じである。巡り巡って、その名がバケネズミ、それも外来種のコロニーを指すのに使われるようになったのは、歴史の皮肉と言うべきだろう。
　ともあれ、わたしたちは、六匹の塩屋虻コロニーのバケネズミに先導されて、暗い森の中を抜けて行った。
「また、厄介なことになったな」
　深刻な表情で考え込んでいた覚が、ぽつりと漏らす。
「どうして？　わたしたち、助かったんじゃない。この連中は、絶対に人は襲わないわ」
「たしかに、今はね」
「今は？」
　覚は、憐れみがこもった目つきで、わたしを見た。
「バケネズミが人間を神として崇拝してるのは、どうしてだと思う？　呪力があるからだろう？　今だ

って、僕らが呪力を持ってると信じてるから、こんなにへりくだった態度を取ってるけど、もし、僕らの呪力が消えてしまったことを知ったら、どうなると思う？」

前を歩くバケネズミに聞かれるのを怖れているためか、後半はひそひそ声になる。

「考えすぎよ。だって……」

わたしは、不安に駆られて、何とか覚を論破しようとした。

「塩屋虻コロニーは、人間に服従してるんでしょう？　もし、わたしたちをどうにかして、それを人間に知られたら、全滅させられることくらい、よくわかってるはずよ。それに、だいたい、わたしたちに危害を加える動機がないわ」

「バケネズミの動機なんか、わからないよ。人間そっくりの考え方をしてると思うときもあるけど、しょせんは齧歯類だしな」

覚の声は、急に二十歳以上も老け込んでしまったかのようだった。

「とにかく、こいつらは油断ならない。僕らが呪力を使えないことは、絶対に悟られたらだめだ。早季も気をつけろよ」

いったいどう気をつければいいのかと思ったが、わたしは、覚に食ってかかる代わりに、短く「うん」と答えた。今は、口論しているときではない。

だが、森の中の道なき道を進むうち、徐々に不安が兆してくる。

わたしたちは、一度も呪力を見せずに、塩屋虻コロニーのバケネズミたちを騙しおおせることができるのだろうか。新たな不安は、背後から迫ってくる土蜘蛛への恐怖が薄らぐのと反比例して、どんどん膨らんでくるようだった。

それから、どのくらい歩いただろうか。ふいに一匹のバケネズミがこちらを振り返って、何かを叫んだが、疲労と眠気で頭が朦朧としていたためか、一言も理解できなかった。

「何て言ったの？」
「よく聞き取れなかったけど、たぶん、到着したんじゃないかな」
覚の言葉で、さざ波のような緊張が身の裡（うち）に走る。

すると、前方の藪の隙間から、新たな個体一匹が出現した。わたしたちを先導していた六匹とは、明らかに様子が異なっていた。体格も一回り大きかったし、鍬形のついた兜を被り、鱗状の鉄片を編んだ鎖帷子（かたびら）を着用している。土蜘蛛コロニーの松毬隊長と同格程度か、もっと上位の個体かもしれない。

兜は、しばらくの間、口上役をした一匹から報告を受けていたようだったが、やがて、慎重な足取りでこちらに近づいてきた。
「神様。ようこそ、いらっしゃいました」
兜を脱ぎ、驚くほど流暢な日本語で言う。
「私（わたくし）は、塩屋虻コロニーの奏上役を務めます、Θξ%∞★∀∂と申します」
名前の部分だけが、半ば超音波のように甲高く複雑な発声だった。
「ですが、神様方には、たいてい、簡単にスクィーラとお呼びいただいております。どうか、そのようにお呼びください」
「じゃあ、スクィーラ」
覚が、平静な顔で言う。
「僕たちは、キャンプに来て道に迷ったんだ。霞ケ浦の岸まで送ってくれると有り難いな。そこまで行けば、後はだいじょうぶだから」
「かしこまりました」
あっさりとスクィーラが答えたので、わたしたちは、ほっと身体の力を抜きかけた。
「ただ、まことに生憎ですが、今すぐというのは、少々困難です」
「どうして？」
思わず、わたしは叫んでいた。
「夜だから？　それとも……」

「私どもは嗅覚が発達しておりますので、夜間でも森の中を歩くのに支障はございません。したがいまして、もし神様がお疲れでなければ、もちろん、ご案内することにやぶさかではありません」

　スクィーラは、恭しく答える。

「ですが、現在、この辺り一帯は、たいへん危険な状況にあるのです。土蜘蛛と呼ばれる危険な外来種のコロニーが侵入して来たために、私ども在来種のコロニーとの間で緊張が高まり、昨日、ついに戦闘状態に突入しました。もしかして、ここまで来られる途中で、神様は遭遇なさらなかったでしょうか？」

　わたしは、答えようとして、覚の顔を見た。

「いや、遭わなかったな」

　覚は、ポーカーフェイスで言う。スクィーラは、覚の持っている槍と額の傷にちらりと目をやったように見えたが、気のせいだったかもしれない。

「それは、重畳でした。土蜘蛛は、神様の威に服さぬ不逞の輩ですので、身の程もわきまえず襲ってくる可能性がございます。もちろん、神様であれば呪力でひと捻りでしょうが、何しろ、隠れていきなり毒矢を射かけてくるような卑怯な者どもですので」

　皺だらけの鼻面にさらに皺を寄せ、唾を飛ばして土蜘蛛を罵る。

「いや、失礼いたしました。そのようなわけで、目下私どもは防御に大童でございまして、私も元来いたって柔弱なたちなのですが、このように似合わぬ戦装束など着せられておる次第です」

「それで、勝てそうなの？」と、わたしは訊ねた。

すると、その質問を待っていたかのように、スクィーラはまくし立て始めた。

「それが、容易ならざる形勢なのです。大雀蜂のような大コロニーであればいざ知らず、私ども塩屋虻は、総員で七百匹ほどの弱小コロニーにすぎません。対して、土蜘蛛の兵力は、四千は下らぬと推計されております」

わたしは、ぞっとした。離塵師が死ぬ前に『駆除』した数をいくら大目に見積もっても、せいぜい千匹というところだろう。あれでほぼ壊滅状態だと思い込んでいたのは大甘で、おそらく、まだ三千匹以上が残っているのだ。

「昨日、近隣の三つのコロニーに特使を出しまして、救援を要請したところなのですが、到着するまでには、今しばらく時間が必要かと考えます」

「じゃあ、今すぐ攻めてこられたら、ひとたまりもないんじゃないの？」

わたしは、思わず反問していたが、スクィーラが妙な目つきをしたので、失敗を悟った。呪力を持った人間なら、バケネズミが何匹来ようと心配するはずがないではないか。

「そうだ。もし僕らが来なかったら、どうするつもりだったんだよ？」

すかさず、覚がフォローに回る。趣味が法螺話なだけに、話を繕うのも手慣れたものだった。

「はい。神様にご心配いただき、衷心より感謝いたします」

スクィーラは、深々と頭を下げた。

「ですが、私どもの種族がコロニー間で行う戦闘は少々特殊なものでして、彼我の戦力差が相当ある場合でも、決着するまでには、常にとても長い時間がかかります」

「どういうこと？」

「百聞は一見にしかずと申します。今からご覧に入れますので、どうぞ、こちらまでお越しください」

スクィーラは、わたしたちに向けて叩頭しながら、すばやく後ずさりし始めた。それがどうやら、目上の相手に対するバケネズミ流の礼儀作法というわけらしい。

藪の間を抜けると、ぱっと視界が開けた。すでに月は沈んでいたが、星明かりに照らされ、草原が遥か彼方まで広がっているのが見えた。丈の長い草の間には、蟻塚のような尖った塔が、点々とそびえて

いる。

「ここは、塩屋虻コロニーの巣なの？」

わたしの質問に、スクィーラは首を振った。

「神様が巣とおっしゃるのは、女王の居住する竜穴（りゅうけつ）のことかと思いますが、それはまだ、ずっと向こうです。ここは、土蜘蛛の勢力に対抗するために築かれた前線の一つなのです」

「前線？」

「トーチカや塹壕、地中壁、戦闘用のトンネルなどからなる、防衛線のことなのですが。……神様は、もしかして、囲碁や将棋のような盤上競技は嗜（たしな）まれますでしょうか？」

突拍子もない質問を受けて、面食らう。

「ええ、まあ。両方とも、学校で習ったから」

正直に言えば、どちらも最初のうちはおもしろかったのだが、すぐにやる気が失せてしまったので、わたしは未だに初心者の域から脱していない。やる気がなくなった最大の理由は、ある時点から、どうしても、特定の二、三人に勝てなくなってしまったからである。その一人が瞬だったのはまだしも許せたが、毎度、覚の勝ち誇った表情を見せられるのは、どうにも我慢ならなかったのだ。

「では、こういう説明の方がわかりよいと思います。私どもβ★ė◎Ȧ、失礼しました、バケネズミのコロニー同士が戦闘に突入した場合、戦いの様相は必然的に将棋より囲碁に近いものになるのです」

バケネズミという単語でつっかえたのはなぜだろうと、ぼんやりと思った。

スクィーラは、それからバケネズミの勢力争いについて、ミノシロモドキを思い出させたくらい滔々と解説した。

バケネズミの先祖は、東アフリカに棲息していたハダカデバネズミという穴居性の齧歯類で、地中に掘った狭いトンネルの中で生活していたのだという。人類の助けで体格と智能を引き上げられ、文明を築くようになった現在でも、その点は基本的に同

じであり、住居の単位はほぼ垂直に掘られた縦穴で、浸水時に備えて、各部屋は縦穴から上方に向かって枝分かれするように配置されている。また、縦穴同士は水平なトンネルで網の目のように結ばれており、地上を通らずに行き来できるようになっているらしい。

「私どもが、地上に出て戦うようになったのは、比較的最近のことです。機動力という点では、どんなに重武装をしていても、地上を行く方が地下を掘り進むより遥かに早いのは、自明の理ですから。とはいえ、地上軍同士の戦闘ならいざ知らず、相手コロニーの拠点を攻略しようと思えば、地上から進軍しても意味がないのです」

「どうして?」と、覚。

「地下にいるβ★e◎Å……私どもの同胞は、音と振動により、地上軍の位置は手に取るようにわかります。ところが、地上軍からすると、地下にいる敵はとうてい探知不能です。したがって地上軍は、突如として陥没した穴に落ち込んだり、足下から突き出される槍に串刺しにされるなどして一方的に攻撃を受け、結局は、なすすべもなく全滅するしかありません」

おそらく、そういった戦闘が、実際に何度も繰り返されたに違いない。人間であれバケネズミであれ、たった一つの教訓を得るために、どれだけの血が流されなければならなかったのだろう。

「つまり、バケネズミ同士の戦争では、常に守ってる方が有利だっていうわけだ」

覚が、したり顔で言う。

「その通りです。したがって、攻める側は地中を掘り進むしかありませんが、その場合も、音によって察知されますし、守る側は、あらかじめ地中に堅い防御壁を築いたり、剃刀のように鋭い石を並べておいたり、トンネルを掘ると頭上から重い石が崩落してくるような罠を仕掛けることもできます。つまり、地中の戦闘においても、攻撃するのは簡単なこ

とではないのです」

「じゃあ、どうするの？」と、わたしは訊いた。

「果てしない睨み合いが続いた末に、攻撃側が幾ばくかの代価を得て撤退するというのが、当初のパターンでした。しかし、そこに天才的な軍略家、Ж◎∞Σ∴……イォーキーが現れました。イォーキーは、神様から授かった一冊の書物から霊感を得て、コロニー攻略のための戦略・戦術体系を独力で作り上げたのです」

「どんな本？」

覚が、眉をひそめて訊ねた。いったい、なぜ、戦争のやり方を教えるような危険な本が、禁書にもならず、あろうことかバケネズミに下げ渡されたりしたのだろう。

「残念ながら、その聖なる書物は現存しませんが、かろうじて『三歳から打てる囲碁入門』という題名だけが、今に語り伝えられています」

わたしたちは、顔を見合わせた。そういう題名の本なら、和貴園の遊戯室で見たことがあったからだ。

「イォーキーの戦術は、囲碁そのものでした。まず、地上部隊を派遣、展開すると、要所に縦穴を掘り、拠点を確保します。さらに、拠点と拠点の間、各拠点と竜穴との間に新たな拠点を設けて連絡を強化していくのです。拠点と拠点が地下で結ばれると前線になります。こうして、点から線、線から面へと支配領域を拡大していき、最終的に、敵を狭い範囲に閉じこめてしまうのが目標ですが、逆に、守る側は外に向かって脱出路を確保しようとします。完全に封鎖されてしまうと、食料の調達に支障を来す上に、地下水脈を遮断されて干上がってしまうからです。そのため、封鎖を企図する敵の拠点の間に割って入るように自らの拠点を作り、相手の連絡を阻止しつつ自軍の連絡を図るのですが、これはちょうど囲碁において、敵の封鎖網の間を出切っていくようなものですから、ここに至り、初めて熾烈な接近

戦が始まるのです」

　あらためて、平野を眺め渡してみた。そう思って見ると、蟻塚のような塔は、戦略的に整然と配置されているような気がする。

「イォーキーのもたらした戦術上の革命は、瞬く間に、すべてのコロニーに広まりました。それまで難攻不落と思われていたコロニーがいくつも陥落し、勢力図は大幅に塗り替えられました。新思考をいち早く取り入れたコロニーが勃興し、旧来のやり方に固執していたコロニーは、すべて淘汰されていったのです」

「それで、イォーキーは、どうなったの？」

　バケネズミの英雄譚がこれほど心をとらえるとは、自分でも意外だった。イォーキーは、現在最大勢力を誇っている、大雀蜂コロニーの繁栄の礎を築いたのだろうか。それとも、ここまでスクィーラが熱を込めて語るところをみると、塩屋虻コロニーの中興の祖だったのかもしれない。

「イォーキーは、激しい戦闘のさなか、命を落としました」

　スクィーラは、どこか悲しげに言った。

「イォーキーの出身母体であった蜻蛉（カゲロウ）コロニーは、総員わずか四百余の弱小コロニーでした。そのため、イォーキー自身が、常に前線に立って指揮を執らなければなりませんでした。隣接するコロニーとの囲い合いの最中に、前線の中程に敵の橋頭堡（きょうとうほ）が接触したことから、いきなり、激しい戦闘が起きたのです。どちらが連絡を確保して、どちらが切断されるかで、戦争の帰趨は決まります。イォーキーの読みは相手より一段上でした。イォーキーは、拠点を一つわざと犠牲にすることで、自軍を完全に連絡させて、相手のラインを分断できることに気づいたのです。ただし、それには問題が一つありました。捨て石にしなければならない拠点とは、まさに彼がいる場所だったのです」

　覚が、ほっと溜め息をついた。

「イォーキーは、自らの軍略に殉じました。そして、読み通り、彼の拠点は敵に包囲され、イォーキーら六匹の守備要員は最後まで勇敢に戦いましたが、全員、文字通り挽肉（ひきにく）にされてしまいました。しかし、殺戮に酔っていた敵が我に返ったときには、敵方の前線は真っ二つになっており、連絡を回復することは不可能だったのです。敵の竜穴を含む本体は、封鎖され、命綱である外部への脱出路を失いました。一方、本体から切り離され補給路を失った前線の方は、立ち枯れる運命しかありません。そして、蜻蛉コロニーは、見事に、この戦争に勝利したのです」

わたしたちは、すっかり、スクィーラの話の中に引き込まれていた。いつしか、ミノシロモドキの語った歴史の続きを聞いているような、錯覚に陥っていたふしもある。両者の声は、似ても似つかなかったのだが。

「ところが、勝利の美酒に酔う暇もなく、蜻蛉コロニーは滅びました」

スクィーラの態度は、束の間の光芒を残して歴史の表舞台から消え去ったコロニーを、悼んでいるかのようだった。

「もともと規模が小さかった上に、切り札のイォーキーを失った蜻蛉コロニーは、周囲のコロニーのまぐさ場と化すしかなかったのです。それでも、戦争が旧来のやり方のままであれば、じっと守りを固めて耐え抜くことも可能だったかもしれません。皮肉にも、イォーキーが作り上げた攻略法により、蜻蛉コロニーは完全に封鎖され、兵糧攻めで徐々に戦力を削がれていった結果、無条件降伏を余儀なくされたのです」

「負けたコロニーのバケネズミたちは、どうなるの？」

わたしは、訊いた。まさかとは思うが、皆殺しにされるのだろうか。

「女王は処刑されますが、それ以外は全員、奴隷と

して使役されます。生きている限り、家畜以下の過酷な扱いを受け、死ねば、野山に捨てられるか、畑の肥料となるのです」

わたしたちは、沈黙した。今思えば、それも、スクィーラの思惑通りだったのだろうが。覚の口がかすかに動いたので、わたしは唇を読んだ。「蟻だ……」と言ったようだ。

たしかに、蟻だった。バケネズミたちは、一方では、人間に酷似した性質を見せるかと思えば、他方では、社会性昆虫のような酷薄さも示す。彼らの戦争というのは、労働力を奪うために他の蟻の巣を襲うサムライアリと、何ら本質的に変わらないではないか。

「……実は、このような事情を、縷々ご説明申し上げたのには、わけがあります」

スクィーラは、地面に座り、威儀を正した。

「ここ数日来の土蜘蛛との戦闘で、塩屋虻コロニーは、外界への突破口となる拠点をすべて失ってしまいました。近隣のコロニーへ救援要請に向かった特使も、土蜘蛛の重囲をくぐり抜けて行かなければならなかったため、捕らえられ、殺されてしまった公算が大です。つまり、現在、私どものコロニーは存亡の危機にあるのです。そこへ若神様たちがおいでになったのは、私どもを破滅から救う天の御意思であると心得ます。まさに地獄に仏、死中に活を得た思いなのでございます」

覚が、ちらりとわたしを見た。話は、わたしたちが最も望まない方向に進もうとしている。

「私どもの争いに関して、このようなことを神様にお願いするのは筋違いであり、僭上（せんじょう）であることは、重々承知しております。しかし、どうか、私どものコロニーを救っていただけないでしょうか。神をも畏れぬ土蜘蛛どもに、膺懲（ようちょう）の鉄槌を下されますよう、伏してお願い申し上げます」

覚が、咳払いをした。

「助けてあげたいのは山々なんだけど、僕らが勝手

に、そんなことをするわけにはいかないんだ」

「なぜですか？　神様なら、ほんの一瞬念を送るだけで、やつらを全滅させることもできるはずです」

覚は、一語一語、慎重に選んで話した。

「バケネズミは、一応、保護鳥獣の扱いだから、僕らが好き勝手に殺すわけにはいかないんだよ。処分を下すときには、町役場と保健所に有害鳥獣の駆除申請を出して、認められないと」

「おっしゃることは、重々わかります」

スクィーラも、必死だった。

「ですが、このままでは、私どもは、早晩、全滅を余儀なくされます。どうか、後生です。土蜘蛛を皆殺しにしていただく必要はないのです。ただ、前線にささやかな打撃を与え、奴らの包囲網さえ破っていただければ、後は、私どもの自助努力でなんとかいたします。どうか……」

スクィーラがさらに食い下がろうとしたとき、伝令らしきバケネズミの兵士が一匹近づいてきて、何事か耳打ちした。スクィーラは、我々に対するのとは打って変わった尊大な態度で耳を傾ける。やがて、こちらに向き直ったスクィーラは、やや困惑しているように見えた。

「わかりました。時間も遅いですし、明朝、再びお願いをさせていただきたいと思います。お二人には、お休みいただきたいと存じますが、その前に、私どもの女王にお会いいただけないでしょうか？」

「女王様に？」

わたしは、考えた。バケネズミの女王というのを見てみたい気もする。だが、すでに夜明け前であり、昨日一日、あまりにも多くの出来事があったので、疲れ切っていた。

「女王は、すぐそこのトーチカまで参っております。神様にご光臨いただいたということを聞き、ぜひ、お目にかかりたいと申しておる次第です」

「わかった。いいよ。ちょっと会うだけなら。でも、その後のことは明日だ」

覚が、生あくびを噛み殺しながら言う。

「かしこまりました。それでは、どうぞ、こちらに」

スクィーラに案内されるままに、草原を進む。ひときわ大きな蟻塚のような尖塔の前で止まったが、どこから入るのかは、皆目見当もつかなかった。

「どうぞ。むさ苦しいところですが、こちらが入り口です」

スクィーラが、枯れ草を掻き分けて、直径が一メートルくらいある穴を露出させた。

「え？　ここから入るの？」

わたしは、怖気をふるった。

「できれば、女王の方から出てきてもらった方がいいんだけどな」

覚も、やはり気が進まないようだった。

「申し訳ございません。しかし、トーチカの入り口につながるトンネルは兵士の大きさに合わせてありますので、女王は、ここから地上に出てくることができないのです。女王は、地下の広間でお待ちしておりますので」

しかたがない。今から謁見を断るのも面倒だったし、呪力を失っている今は、とにかく、悶着を起こしたくなかった。

覚、わたしの順番で穴に入る。中は、外気よりずっと温度が低く肌寒いほどだった。出入りを円滑にするためらしく、入り口の周囲には粘土が塗りたくってあったが、トンネル内部は、逆に滑り止めに干し草を混ぜた土で押し固めてある。垂直の縦穴を落下するのは恐ろしかったが、わたしたちの下に付いた二匹のバケネズミのおかげで、快適に降りることができた。バケネズミたちは、トンネルの内壁に手足を突っ張って、毛皮のクッションのように、わたしたちが下降する速度を和らげてくれたのだ。わたしたちの方も、自力でブレーキをかけようとしても無意味であることを悟り、ただじっと、バケネズミの上に腰掛けていた。

縦穴は斜めに二、三十メートル続いたかと思うと、唐突に広い空間に出た。わたしたちが立ち上がっても充分な高さがあったが、周りが真っ暗なので、広さまではわからない。黴臭さと獣の臭気が鼻孔をくすぐり、鳥肌が立つような気分だった。

「少々、お待ちください」

わたしたちの後から滑り降りてきたスクィーラが、すぐ後ろで言う。振り返って見ると、暗闇の中で双眸だけが光っていた。野生動物の目が夜光るということは知っていたものの、やはり気味が悪い。

スクィーラは、燧石（ひうちいし）を打ち合わせ、小さな松明（たいまつ）に火を点けた。一瞬、ひどく眩しく感じたが、すぐに目が慣れる。明かりがあるというのは、こんなに心強いものかと、あらためて思った。

「こちらです」

広い空間だと思ったのは、炎に照らし出されてみると六畳ほどの踊り場に過ぎなかった。三方に水平のトンネルが続き、松明を持ったスクィーラが先に立って案内する。直立した齧歯類の影が、奇怪に引き伸ばされて洞窟の壁に揺れていた。

「頭にお気を付けください」

トンネルの天井は、しだいに低くなっていた。それに反比例するように、横幅は広くなってきている。バケネズミがここを通るときは、たぶん、すばやい四つ足で走るのだろう。

暗い地下を、松明の明かりだけを頼りに歩いていると、しだいに非現実感が押し寄せてきた。こんなところにいること自体、信じられないような気分になってくるのだ。

その一方で、超現実とでも言うべき存在が、わたしたちの感覚器官に対して、圧倒的な存在感で訴えかけてきていた。最初に襲ってきたのは臭気だった。トンネルの中はどこもバケネズミの体臭が充満していたが、進んでいくうちに、それがどんどん強くなってくるのだ。基本的には、スクィーラや兵士たちと同じ臭いだったが、単なる獣臭というよりは

腐敗臭に近く、しかも噎せ返るほどに濃密だった。

　次に、わたしたちの耳朶が、複雑な重低音を捉えた。かすかに聞こえてくる、ふいごのような響き。それに、ときどき遠雷のような唸り声が混じる。さらに、トンネルの壁を通して不規則な振動も伝わってきた。まるで、とてつもなく重く巨大な物体が、這いずっているかのような……。

　振動は、しだいに足下からも感じられるようになった。身が竦むような恐怖を感じたが、覚に向かって引き返そうとは言えなかった。ここでスクィーラに弱みを見せてしまえば、後にどんな結果になるのか想像もつかない。

「あと、どのくらい？」

　覚が、平静を装って訊ねたが、語尾は震えていた。

「もう、すぐそこです」

　その言葉は、嘘ではなかった。それから二十メートルあまり進むと、トンネルは大きく右へカーブしていた。その手前で、スクィーラは平伏し、甲高いネズミのような鳴き声を上げる。

　それに対する返答は、ものすごい唸り声だった。強風のような低周波が、わたしたちの身体をびりびりと震わせる。

「女王が、お目にかかれて光栄ですと申しております」

　スクィーラが、こちらを向いて言う。覚が何か言おうとしたが、舌がこわばって言葉が出てこないようだった。

「……こちらこそ、女王様にお目通りできて、嬉しく思ってます。そう伝えて」

　代わってそう返事をすると、スクィーラはうなずき、再びチイチイという鳴き声で奏上した。

　すると、突然、女王が人間の言葉で返答してきたので、わたしたちは驚愕した。

「Ｇｒｒｒ……カ・ヴィ・サ・マ……★Θ。ド・ゾ……∫△θ……コ・ザ・ラ」

地鳴りのような低音に、鼓膜がおかしくなりそうな歯軋りの音が混入していたが、どうやら、わたしたちを請じ入れようとしていることだけはわかる。

わたしたちは、目を見合わせてから、ゆるやかに湾曲した角を曲がった。悪臭は、ますます強く、耐え難いものになる。

松明を持ったスクィーラは、曲がり角の手前に留まった。明かりは、背後からかすかに射し込んでくるものの、逆光のため女王の姿を視認することはできない。それでも、そこに蹲っている生き物のサイズが尋常ではないことは、押し寄せてくる圧倒的な熱量と、黒々としたシルエットから判断できた。

「☆★……ガガ！　□■！　……◇◆！」

真正面から、熱風のような吐息が浴びせられる。思わず顔を背けたが、続いて耳に飛び込んできた声には、再度驚かされることになった。

「カカカ……カ・ヴィ・サマ。カ・ヴィ・サマ。ヨウコソ。トテモ・コウエイ・デス」

バケネズミの女王は、おそらく、長い声帯を分割振動させて、裏声を使ったのだろう。そのおかげで、音程が人間並みになり、ずっと聞き取りやすくなった。だが、それ以上にわたしたちを驚かせたのは、それがまぎれもなく、女性の声に聞こえたことだった。

その後五分くらい、わたしたちは、バケネズミの女王と会話を交わした。残念なことに、その内容は、まったく思い出すことができない。極度の疲労と異様な緊張状態のためかもしれないが、たぶん、その直後の出来事があまりにも劇的だったせいだろう。

きっかけは、些細なことだったと思う。わたしたちを立たせたままなのが申し訳ないと女王が謝り、わたしたちは固辞したのだが、結局、椅子になるために二匹のバケネズミが呼ばれた。その際、松明を持ったスクィーラが一緒に入ってきてしまったのだ。

松明の強すぎる光から反射的に逸らしたわたしたちの目に、煌々と照らし出された穴の中と、そして、女王の姿が飛び込んできた。

それまでに交わした会話と、案外優しげにも聞こえる女王の声の効果で、わたしたちが当初感じていた恐怖はかなり薄らいでいたと思う。だからこそ逆に、実際にその姿を目の当たりにしたときの衝撃は倍加された。

女王の印象を一言でいえば、短い四肢と尻尾がついた、途方もなく巨大な芋虫だった。

日光に当たらないせいか病的に白い体色と、身体を環状に取り巻く無数の皺も、ますます芋虫めいた印象を強めていた。だが、決定的に異なっているのは、その顔だった。巨大な頭部の半分を覆っている褐色の斑紋は、自然光のもとで見れば真っ赤なのかもしれない。半ば皺に埋もれてビーズのように光る小さく残忍そうな目。そして、鋭い鑿（のみ）のような牙が見え隠れする強大な顎（あぎと）。首輪のようなネックレスには、赤い鉄礬柘榴石（てつばんざくろいし）や、ぼんやりと光を放つ蛍石、緑柱石（りょくちゅうせき）、菫青石（きんせいせき）など、きらきらと輝く貴石がいくつも揺れていた。

姿を暴かれて激怒した女王は、虎のように一声咆吼したかと思うと、縮み上がっているわたしたちの横を、すり抜けるように突進した。

軽々とスクィーラを咥（くわ）え上げると、左右に激しく振り回す。スクィーラは、キイキイという悲鳴を上げ、松明を取り落とした。ほどなく、洞窟に真の闇が訪れる。聞こえるのは、女王の激しい息づかいと唸り声、途切れ途切れのスクィーラの悲鳴、ぶるぶる震えながら隅に蹲っている二匹のバケネズミが、爪で土を引っ掻く音だけだった。

「女王様。待って」

わたしは、ありったけの勇気をかき集めて、語りかけた。

「スクィーラを殺さないで！　悪気はなかったのよ」

覚が、ぎゅっと、わたしの腕をつかむ。怒りに狂っている女王を宥めようとするのは、危険な賭かもしれない。だが、こんな場合に、神である人間がまったく介入しようとしなければ、逆に疑念を呼ぶ可能性があった。

　女王は、しばらくの間、無反応だったが、やがて、無造作にスクィーラを放り出した。それから長い身体で器用に方向転換すると（なにせ真っ暗なので、気配でそう感じただけだが）、再びわたしたちの横をすり抜けて、穴の奥へと消えていった。

　スクィーラは、しばらくの間震えていたが、ようやく気を取り直したらしく、わたしたちの方に向き直る。

「お取りなしいただき、ありがとうございました。おかげさまで、命拾いをいたしました」

「びっくりしたよ」

　ようやく声が出るようになった覚が、しわがれた声で言う。

「だけど、女王様だって、まさか、あなたを殺すつもりはなかったんでしょう？」

　わたしの質問に、スクィーラは答えなかった。

「……神様も、お疲れでしょう。寝所を用意させていただきますので、どうか、今夜は、ゆっくりお休みください」

　スクィーラは、落ちた松明を拾い上げると、燧石のようなものを打ち合わせて再び点火した。

　わたしは、スクィーラの着ていた鎖帷子を見て、思わずぞっとした。鋭い牙により鱗状の金属片は食いちぎられており、その下の革製の戎衣にも大きな穴が穿たれ、血が滲んでいたのだ。スクィーラは明らかに負傷していたが、懸命に痛みをこらえて、わたしたちの前ではそんなそぶりは見せようとはしなかった。

「ぜったい変だ。あの女王は、おかしくなってる」

　寝所へ案内される途中、覚は、わたしの耳元でさ

さやいた。

「気をつけろ。怒らせたら、何をするかわからないぞ」

害意を持つ外来種のコロニーから、やっとのことで逃れたと思ったら、身を寄せたのが、狂った女王によって治められている巣だったとは。

それにしても、女王は、どうして、あんなに激昂したのか。あんな姿はしていたものの、話しているときは、女性であることに違和感を覚えなかった。もしかすると、それほど、わたしたちに素顔を見られたくなかったのだろうか。

だが、このときには眠気が強くなりすぎていて、何もかも、どうでもよくなっていた。

わたしたちが案内されたのは、ただの土室で、少々ひんやりしすぎていたが、乾燥した藁が敷き詰められていて、案外快適だった。わたしたちは、奥まった場所に倒れ込むと、ほとんど瞬時に意識を失った。

はっと目が覚めた。

周囲は真っ暗で時間はわからないが、たぶん、一時間くらいしか眠っていないだろう。

疲労は、まだ、澱（おり）のように身体全体に滞留している。にもかかわらず、起きなければならないという急迫した思いがあった。何かが、心の中で、しきりに警報を打ち鳴らしているのだ。

「覚……覚！」

揺り動かしても、なかなか覚醒しない。無理もないが。覚の顔に触れると、乾いた血が筋になってこびりついていた。ろくに手当をする暇もなく、眠り込んでしまったのだ。

「覚！　起きて！」

可哀想だとは思うが、優しくお目覚めを待っているような余裕はないのだ。わたしは、覚の鼻と口を掌で押さえた。

覚は、しばらく踠（もが）いていたが、窒息しそうになって、乱暴にわたしの手を撥ねのけた。

「何だよ……もうちょっと、寝かしてくれ」

「だめよ。今すぐ起きないと。わからない？　危険なのよ？」

覚は、観念したように目を開けたが、まだ夢の世界に未練があるらしく、起き上がろうとはしなかった。

「危険って……？」

「感じるのよ。危険が迫ってる」

「だから、何の危険だよ？」

わたしは、答えられなかった。覚は、呆れ返ったらしく、しばらく無言のままだったが、「お休み」と言って、向こう側に寝返りを打った。

「覚。眠いのはわかるけど、今起きなかったら、もう二度と、起きるチャンスはないかもしれないわ」

覚は、ごしごしと頭を掻いた。

「何言ってんだよ？　怖い夢でも見たんだろ？」

「夢じゃない。予知能力でもない。眠ってる間に、脳が、それまでに起きたことを整理したのよ。それで、ようやく、危険がすぐそこに迫ってることに気がついたの」

「じゃあ、どんな危険なんだか言ってみろよ。整理が付いてるんだろ？」

わたしは、暗闇の中で腕組みをして考えた。もう少しで、何かがわかりそうなのだが。何かが、おかしい。わたしたちは全員、何か、とんでもない危険を看過している。

「……わたしたちは、スクィーラの言うことを鵜呑みにしすぎたのかも」

「あいつが、何か、嘘をついてるっていうのか？」

覚は、ようやく、現実の世界に戻ってきたようだった。

「そうじゃない。もちろん、すべてとは限らないけど、おおむね、本当のことを言ってると思う。スクィーラ自身も、気がついてない。思い込み。たぶん、それが一番危険なことなんだわ」

話しながら、わたしの頭の中で、非常警報の正体

が、徐々に形を取り始めた。

「襲ってくる。間違いない。今晩中よ。それも、一番警戒が手薄になってる夜明け前に、土蜘蛛が攻撃してくるはずだわ」

「そんなわけないだろ？　スクィーラが言ってたじゃないか。バケネズミのコロニー同士の戦いは、囲碁みたいな陣取り合戦になるって」

「それが、思い込みなのよ。考えてみて。土蜘蛛は野生化した外来種なのよ。どうしてイォーキーと同じ戦略を踏襲するって言えるの？」

「でも、穴に潜ってる相手を攻略するんだったら、それなりに理にかなったやりかただと思うよ」

「たしかに、それは、世界中のバケネズミに共通の、戦いの基本型なのかもしれない。でも、土蜘蛛は、それ以外の戦術を編み出してる可能性もあるわ」

「そりゃあまあ、そういう可能性も、なくはないけどなあ……」

覚は、溜め息をついた。わたしの言っていることは杞憂で、積極的な根拠は何一つないと言いたいのだろう。

「そうだ！　何がおかしかったのか、やっとわかったわ！」

わたしは、思わず叫んでいた。

「その前よ。離塵師が土蜘蛛を掃討したとき。あいつら、穴の中に引っ込んで籠城なんてしなかったじゃない？　地上戦で立ち向かってきたわ」

覚は、ぐっと答えに詰まった。ようやく、眠気も吹っ飛んだようだ。

「でも、それはほら、坊さんが奴らの大部隊を生き埋めにしたじゃないか。それで、巣穴に籠もっても無駄だって悟ったんだよ」

「あいつらが呪力を見たのは、今日が初めてだったんでしょう？　それなのに、そんなに臨機応変に戦略を変えられる？」

「自分たちが不利なのを知って、大軍を見せて、僕

らを追い払おうとしたのかもしれない」

「それは、わたしもそう思った。でも、戦いが始まってからは、穴の中に隠れるはずじゃない？　ところがあいつらは、真っ正面から矢を射かけてきた。それが、あいつらの戦い方だからよ」

「だけど、地下にあるコロニーを攻略するには、地上から攻撃しても……」

「きっと、何か別の方法があるのよ。拠点を作って相手を封鎖していくより、ずっと早い手段が」

覚は、沈黙した。

「……もし、早季が言ってることが正しいとすると、呪力の存在を知った今、土蜘蛛たちは、奇襲攻撃以外に生き残る道はないと気づいてるだろうな」

暗闇の中で、絶望したように頭を振るのがわかった。

「それだけじゃない。たとえ呪力を持った人間が塩屋虻コロニー側に付いていたとしても、不意を衝きさえすれば、人間だって殺すことが可能だ。奴らは、そのことを、離塵師との戦いから学んだはずだ」

背筋がちりちりするような不吉な感覚は、ますます強くなっていた。

たぶん、残された時間は、もうあまりない。

4

「逃げよう」

覚が言った。

「どこへ？」

「どこでもいい。とにかく、この巣から離れるんだ」

覚は立ち上がって、寝所の外の様子を窺った。

「早季は、覚えてる？　ここへ連れてこられるまでに、かなり複雑な道筋を辿ってきたと思うけど」

「うーん。どうかな。頭が朦朧としてたから、あんまり自信ない……」

わたしは、女王に謁見した場所から、どうやってここまで来たのか、順番に道筋を思い出してみた。

「だめ。最初に左の方へ来たのは覚えてるけど、その後は、もう、ごっちゃになってる」

わたしは、もともと道順を覚えるのはあまり得意な方ではない。ましてや、同じ道筋をもう一度行くのならともかく、引き返すとなると、頭の中で図を一度ひっくり返さなくてはならないため、混乱は必至となる。

覚は、腕組みをして、懸命に記憶の引き出しをひっくり返しているようだった。

「道が分かれてるとこは、そんなになかったよな。せいぜいが、三叉路くらいで。最初は二股の道を左、次は右、その後は……どうだったかな」

「でも、わたしは、道順はともかく、はっきり覚えてることがあるの。ここへ来るまでに通った道は、ずっと、平らか下り坂だったわ」

まるで黄泉の国へと案内されて行くような気がしていたので、覚えていたのだ。

「そうだっけ？　そうか……一度も登ってないのか」

覚は、わたしのそばに来て、手を握った。

「だったら、今度は、登り続ければいい。途中で下

りになったら、その道は違うんだから、その前の分岐点まで戻って、選び直せばいいんだ」

「でも、登ってるからといって、正しい道とは限らないでしょう？」

私は、当然の疑問を呈する。

「それはそうだけど、もし別の道だったとしても、登り続ければ、いつかは地上に出られるはずだろう？」

そんないい加減なことでいいのだろうか。わたしは、覚の判断に従うことに不安を感じ始めた。はたして、真っ暗闇の中でどう来たのかなんて、覚えていられるものだろうか。せめて、ロープのようなものがあったらと思った。ミノタウロスの迷宮を脱出したテセウスにも、アリアドネの糸の導きがあったのだ。

「ねえ。バケネズミを呼んで、外に出たいって言って案内させた方がいいんじゃない？　だって、もし、迷ったら……」

「だめだ。スクィーラか女王かに報告が行けば、絶対、不審に思われる」

覚は、わたしに顔を近づけた。

「どうして僕たちが、こんな時間にこそこそ逃げ出さなきゃならないのか、説明できないだろう？　呪力がないことがバレたら、あいつらがどう出るか、予測がつかないんだ」

耳を澄ませてみたが、近くに、バケネズミがいる気配はなかった。夜明け前というのは、最も彼らの活動が低下する時間帯のようだ。だが、外のトンネルは、部屋よりもっと暗い。墨汁を流したような濃密な闇が支配していた。そこへ一歩を踏み出す勇気は、なかなか出てこない。

「ねえ、これって、ちょっと変じゃない？」

わたしが言うと、覚はうんざりしたような声を出した。

「ここじゃあ、何もかも変だよ。変じゃないことが何かある？」

「どうして、部屋の中の方が、外より明るいの？」

覚は、はっとして動きを止めたようだった。そう。ぼんやりとではあるが、部屋の中では、動きが判別できるのである。外のトンネルでは、たぶん、何も見えないだろう。

「本当だ。……そうか。きっと、どこかに光源があるはずだ！」

わたしたちは、部屋の中を見回したが、不思議なことに、どこにもそれらしいものは見あたらなかった。

覚は、土蜘蛛から奪った槍をまだ後生大事に持っていた。左手でわたしの位置を確かめながら、右手で槍を突き出して、しきりに部屋の奥を探るようにしている。すると、槍の穂先、黒曜石のようなガラス質の石に、針の先で突いたくらいの小さな光の雫が宿った。

「何だ、今の？」

わたしたちは、ゆっくりと部屋の奥へと進んだ。うっすらと上方から降り注ぐ光を感じ、視線を上げる。そして、思わず息をのんだ。

天井には、丸く大きな切り込みが入っていた。そのずっと上方に、満天の星空のような輝きが見えたのだ。

「外？　ここ、地上に通じてるの？」

「いや、違う。……星じゃない」

覚が、信じられないというようにつぶやく。

「星みたいに見えるけど、全然、瞬いてない。いったい何なんだ、あれ？」

覚は、何百何千というエメラルドグリーンの光の粒に向かって、槍をいっぱいに伸ばす。まさか届くはずがないと思って見ていると、意外にも、あっさり槍の穂先に触れて、光がいくつかの束になって揺れた。

覚は、槍をゆっくりと降ろした。たしかに光の粒をいくつも捉えたはずなのに、穂先には、粘液の玉を糸で連ねたようなものが、まとわりついているだ

けだった。

覚が、指先で触れてみる。

「ねばねばしてる。早季も触ってみる？」

わたしは、頭を振った。

このとき天井で光っていたのは、バケネズミが家畜化した土蛍（ツチボタル）の変種だった。

ツチボタルとは、グローワームともいい、ニュージーランドなどオセアニアの洞窟に太古から棲息していた昆虫である。ホタルという和名が付いているが、ハエや蚊、虻などに近い種類らしい。幼虫は洞窟の天井に巣を作り、粘液の玉を連ねた糸をいくつも垂らして、引っかかった虫を補食する。その際、ホタルのように発光して獲物をおびき寄せるのだが、その光が粘液の玉に反射して、まるで緑色の銀河のような不思議な光景を呈するのだ。

ツチボタルは、元々日本列島には分布していなかったが、古代文明が崩壊する少し前に、釣りの餌にする目的で移入されたという。その一部が生き延び、バケネズミによって品種改良され、貴賓室のためのシャンデリアとして利用されていたのだろう。

覚は、もう一度槍を使って粘液を採取し、発光しているのが何かの幼虫であることがわかった。そこで、短い話し合いの後、わたしが覚を肩車して、ツチボタルを採取することにした。体重の軽いわたしが上にならなかったのは、緑色に発光する蛆虫がどうにも気味悪く、触るのが嫌だったからである。

覚は何匹かのツチボタルを捕まえると、槍の先端に（彼ら自身が分泌した糸を使って）括り付けた。バケネズミが品種改良をしたおかげなのか、そんな無茶な扱いを受けても、ツチボタルは光るのを止めなかった。

「よし、行こう」

覚は、部屋の出口に立って、決然と言った。わたしたちは、ナップザックを背負い、しっかりと手を握り合うと、虫の放つ光だけを頼りに、さらに真っ暗な闇の中に一歩を踏み出した。

今思い返してみても、何という奇妙な道行きだったことか。

明かりといえば、覚の持つ槍の先で人魂のようにぼんやりと光っているツチボタルだけ。それ以外の場所は、自分の足下も含めて、まったく見えないのである。試みに横を向いて、顔の前で掌を振ってみたが、影さえ認めることができなかった。こんな状態で歩き続けることができたのは、わたしたち二人が横に並ぶのがやっとという穴の狭さが逆に幸いし、身体のどこかが常に壁に触れていたからだろう。

「今、登ってるかな?」

ときどき、自信がなくなったように、覚が言った。そのたびに、わたしは、「登ってる」とか「わからない」とか「さあ、どっちかな?」などと返事をしたが、どう応じようと、別段、状況が変わるわけではなかった。

槍の先の明かりは、ときおり二叉や三叉に分かれた道を照らし出した。微弱な光でも、すぐにそれとわかったのは、分かれ道ごとに標識のように植えられていた、光苔（ヒカリゴケ）のおかげだった。

ヒカリゴケとは、その名のとおり薄緑色に光るコケだが、ツチボタルとは違って自力で発光しているのではない。光の乏しい洞窟内で光合成を行うために、レンズの役目をする細胞で周囲からかすかな光を集めているのだが、その反射光が輝いて見えるのだ。

バケネズミも、ただ狭い穴の中を右往左往しているだけなら、触覚と嗅覚だけで、充分用が足りただろう。だが、文明を発達させてからは、より効率的に移動する必要が生まれ、こうした生物の性質を利用するようになったに違いない。

わたしたちは、黙々と歩き続けた。その間、一匹のバケネズミにも出会わなかったのは、たぶん、巣全体が眠りにつく時間帯だったせいだろう。最初の

うちは幸運を信じて疑わなかったのだが、しだいに雲行きがおかしくなってきた。

「ねえ、もう、かなり歩いたよね？」

　わたしは、覚に問いかけた。

「うん」

「この道、やっぱり、違うんじゃない？」

　わたしたちは、立ち止まった。間違えたとすれば、どこだろう。わたしは、記憶の中で歩いてきた経路を振り返った。

「おかしいな。僕は、歩いてるうちに、ほとんど完全に思い出せたんだ。来たときに、何回、どっちに曲がったか。だから、ここまでの間で、違う道を選んだはずはないんだけど……」

「でも、やっぱり、どこかで間違ってると思う。だって、こんなに時間がかかったはずないもの」

「そうだな。引き返そうか」

　わたしたちは、暗いトンネルの中で方向転換し、来た道を戻り始めた。穴底へ向かって下っていくのはさらに気が滅入ったが、他に選択肢はない。ところが、しばらくすると、驚愕の事態に直面することになった。

「分かれ道だわ！」

　わたしは、息をのんだ。

「そんな馬鹿な。だって、さっき、こんなとこに分かれ道なんてなかったじゃない？」

　ずっと辿る道を頭に入れながら歩いていたので、その点はかなりの自信があった。

「……なかったよな」

　覚は、道が分かれている部分の土を手にとって、調べ始めた。

「う……そうか！　畜生」

　いきなり噛みつくような調子で言ったので、わたしは、ぎくりとした。

「どうしたの？」

「そうか。そういう可能性もあったんだ。だけど、まさか、こんなに短い間に……」

覚は、深く溜め息をついた。

「何言ってるの？　ねえ、どういうこと？」

「ここの土は、まだ新しいってことだよ……」

覚の説明に、わたしは、顔から血の気が引くのを感じた。

バケネズミの巣には、絶えず新しいトンネルが作られ、形を変えている。したがって、あの部屋に案内されたときと今とでは、途中の分岐点の数が同じである保証は、まったくないのだ。

「今は巣の活動が停止してるから、だいじょうぶだと思ってた。でも、それ以外の活動はやめても、トンネルは掘り続けてたみたいだ。今、巣は臨戦態勢にあるからかもしれない。たぶん、僕らが通り過ぎたすぐ後で、どっかから掘り進んできたトンネルがぶつかって、この分岐ができたんだよ」

覚は、握っていた土を、忌々しげに投げつけた。

「じゃあ、わたしたち……」

「うん。迷子になっちゃった」

もし、覚の顔が見えたなら、さぞかし情けない半べそをかいていたに違いない。

それから、わたしたちは、あてどなく地下の暗いトンネルをさすらった。時間にすれば、せいぜい三十分程度だったかもしれない。だが、ほとんど何も見えない真っ暗闇の中で、地の底にある身動きも不自由な狭い穴の中からどうしても這い出ることができないというストレスは、想像を絶するものだった。薄着なので、鳥肌が立つくらい寒かったが、じっとりと脂汗が滲んでくる。

わたしたちは、めったに使わないような汚い言葉で罵り合い、我が身の不運を呪い、神に哀訴し、めそめそと泣き、だが、それでもしっかりと手をつないだまま、歩き続けた。

そして、しだいに、一時的な精神錯乱に陥っていった。

わたしの場合、その最初の兆候は、幻聴だった。

どこからか、「早季、早季」と、わたしを呼ぶ声が聞こえてくる。

「何か言った？」

覚に訊ねても、ほとんど上の空で、たまに「何も」というううるさそうな声が返ってくるだけである。

「早季。早季」

今度は、はっきりと聞こえた。

「早季。どこにいるんだ？　早く、かえっておいで」

父の声だった。

「お父さん。お父さん！」

わたしは、叫んだ。

「助けて。わたし、迷子になってるの」

「早季。いいかい。八丁標の外へは絶対に出たらだめだよ。八丁標の中は、強力な結界が張られてるから安全だが、一歩外に出たら、もう、誰の呪力も守ってくれないから」

「わかってるわ。でも、帰れないの。帰り道が、わからない」

「早季。早季。バケネズミに気をつけるんだ。バケネズミは、呪力を持った人間のことは、神として崇めているから、絶対に服従する。でも、呪力のない子供に対しては、どういう態度に出るかわからないんだよ。だから、子供とバケネズミとが出会うことは、なるたけ避けなきゃならないんだ」

「……お父さん」

「おい、何言ってんだよ？　しっかりしろ」

幻聴より、覚の声の方が、遠くから響いてくるようで現実感が希薄だった。

「第五代皇帝、大歓喜帝の即位に際しては、民衆の歓呼喝采が三百年間止まなかったという。最初に拍手をやめた者から生け贄としてＰＫで人体発火させ、苦悶する黒い炭の像を王宮に飾ることになっていたからだよ。民衆は、このことから、大歓喜帝に阿鼻叫喚王という悪諡を奉ったんだ」

「お父さん。助けて」

「第十三代愛隣帝は、酸鼻女王という悪諡で知られて……自分の意に沿わない人間を毎朝、この上なく酷たらしい……無上の喜びを……嘔吐をしないように絶食……第三十三代、寛恕帝は、生前より豺狼王という異名……遺体を貪り食っていた……息子第三十四代皇帝醇徳帝は、外道王と……十二歳のときに父、寛恕帝の首を生きたまま引きちぎって……自らも殺されるのではないかという恐怖……幼い弟や従兄弟、子供たち……遺体をゴカイやフナムシやウミケムシの大群に……第六十四代皇帝、聖施帝には鵩梟女王という仇名が……満月の晩に妊婦を攫っては、腹を引き裂き胎児を丸呑みにして、あたり一面に人骨のペレットを吐き散らす……」

父の声は、ひどく歪んだかと思うと、異様に単調なものに変わっていった。

「いいかい。先史文明の動物行動学者コンラート・ローレンツは、オオカミやワタリガラスのように強力な殺傷能力を持って社会生活を行う動物には、同種間攻撃を避けるための生得的な機構、攻撃抑制が備わっていると指摘した。ネズミや人間のように強い攻撃力を持たない動物では、攻撃抑制が不充分で、同種間での過剰攻撃と殺戮が行われるんだ」

「お父さん。やめて」

「イォーキーは、拠点を一つわざと犠牲にすることで、自軍を完全に連絡させて、相手のラインを分断できることに気づいた。ただし、それには問題が一つあったんだ。捨て石にしなければならない拠点とは、まさに彼がいる場所だったんだよ。そして、読み通り、彼の拠点は敵に包囲され、イォーキーら六匹の守備要員は最後まで勇敢に戦ったけど、全員、挽肉にされ、湯気が立つ、ほかほかのハンバーグステーキへと生まれ変わった」

「馬鹿。しっかりしろ！」

覚が、わたしの肩をつかんだ。

「だいじょうぶ……」と、わたしは答えたものの、

幻聴は去らなかった。そればかりか、ぼんやりとした幻覚まで現れ始めていた。

「君たちは、こんなところまでくる許可を、学校からもらっているのか？」

　僧形の姿になった幻覚は、嘲るように言う。

「君たちは、倫理規定の根幹である十重禁戒の第十条不謗三宝戒に背いた。悪魔の声に従って、仏の教えに異を唱えたのだ。よって私は、ここに君たちを凍結し、永遠に人形の中に封じ込める。残りの一生を人形として過ごすがいい……」

「早季！　早季！」

　鞭打ち症になりそうなくらい強く揺さぶられ、わたしは、ようやく我に返った。

「覚……」

「さっきから、何、一人でぶつぶつ言ってたんだ？　頭が変になったかと思ったよ」

「変になりかけてたわ」

　わたしは、つぶやいた。

　おそらく、本当に危ないところだったのだろう。互いの存在がなければ、本当に精神に異常を来していたかもしれない。

　わたしたちは、それからさらに、かなり長い間、地中のトンネルを彷徨った。その間、一匹としてバケネズミには遭わなかったが、今考えてみると、向こうの方が、ずっと遠くからわたしたちが来るのを察知して、道を譲っていたのだろう。

　最初に異変に気づいたのは、わたしの方だった。

「今の、聞こえた？」

　返事はなかった。わたしは、覚の手を強く握りしめたが、反応はなかった。

「覚？」

　頬を二、三度たたくと、ようやく、低い呻き声のようなものを漏らす。

「しっかりして！　今、変な音が聞こえたの」

「音だったら、ずっと鳴ってる」

　覚は、か細い声で答えた。

「地の底から、僕らを呼んでるんだ。あれは、死んだ人の声だよ」

わたしは、ぞっとした。わたしと交替したように、覚がおかしくなりかけているのは、あきらかだった。だが、それ以上に、聞こえてきた音が気になった。真っ暗なトンネルの中を歩いている間に、直感が研ぎ澄まされていたのだろう。わたしの第六感は、危険が迫っていると告げていた。今は、覚の状態を心配している暇はない。

耳を澄ませると、また聞こえた。トンネル内部に反響しているため、音の出所は判然としない。だが、音は、徐々に大きくなってきた。もう、はっきりと聞こえる。たくさんのバケネズミの上げる金切り声や鬨（とき）の声、悲鳴。銅鑼を打ち鳴らすような金属音。そして、拍手か潮騒のように聞こえる正体不明の音。

すべて、神経を逆撫でするような不協和音、合戦の音だった。わたしは、最悪の予感が的中したことを悟った。

「早く、逃げなきゃ！　土蜘蛛が襲ってきたのよ」

わたしは、覚の手を強く握りしめたが、ほとんど反応はなかった。

目の前に、また分かれ道が現れた。どちらに逃げればいいのだろう。右か、左か、引き返すべきなのか。

わたしは、覚の右腕を探り、槍を前方へ向けた。だが、闇の中でぼんやりと浮かび上がる緑色の光が見えない。あわてて穂先を調べてみると、ツチボタルはすでに死んでしまっていた。

だが、まわりが真の闇ではないことに、わたしは気がついた。分かれ道に置かれているヒカリゴケは、かすかに発光している。どこからか、微量の光が射し込んできているのだ。トンネルの中で彷徨っていた時間を考えると、もう夜が明けていたとしてもおかしくない。だとすると、この先には出口があるはずだ。

闇を透かしてみると、左側の方が、若干明るいような気がした。わたしは、覚の手を引きながら、慎重に進んだ。前進するにつれ、トンネルは、どんどん明るくなってきた。だが、それに比例して、バケネズミの戦いの音もますます大きくなっていく。

　このまま、出口に行き着いても、バケネズミの戦場の真っ只中に出てしまったら、呪力のないわたしたちに身を守る術はない。

　周囲は、すでに、新月の晩くらいの明るさになっていた。ゆるやかな登りになっている道の突き当たりに目をやると、大きく右にカーブしているのがわかった。光はそちらから射し込んできている。

　しばらくためらってから、わたしは、前に一歩踏み出した。このまま、ずっと、ここにいるわけにはいかない。とりあえずは、出口の様子を確認しようと思ったのだ。

　そして、結果的には、その短い躊躇が、わたしたちの命を救うことになった。

　突然、バケネズミの悲鳴が至近距離から聞こえてきた。続いて、一匹のバケネズミが、カーブの向こうからまろび出る。

　バケネズミは、断続的に身体を痙攣させていた。こちらに向かって這いずってこようとしているが、すでに致命的なダメージを受けているのは明らかだった。

　ほぼ同時に異状を感じたのは、わたしの嗅覚だった。卵の腐ったような臭いがするのだ。瀕死のバケネズミの背後を見ると、出口から射し込む光が、トンネルの中に侵入してくる煙を浮かび上がらせている。

　あの煙を吸ってはいけない。それは、ほとんど本能的な警告だった。

「こっちよ！」

　わたしは、その場でくるりときびすを返すと、覚の手を引いて、今来たばかりのトンネルを必死で駆け戻った。

だが、下り坂をかなりの速度で駆け下りているのに、異臭は消えない。それどころか、逆に、どんどん強くなってくるようだった。

　ほとんどパニックに陥りそうになったとき、それまでずっと無反応だった覚が、突然、嘲るように言った。

「どこまで逃げたって、無駄だよ。僕らは、袋のネズミなんだから」

　わたしは、かっとなって覚に言い返す。

「わたしたち、ネズミなんかじゃないわ！」

「同じだよ」

　覚は、いたってのんびりとした口調でつぶやく。

「ネズミは、みんな、煙で燻（いぶ）されて、穴の奥まで追い詰められるんだ」

「煙？」

　わたしは、ようやく、少し前から感じていた違和感の正体に気がついた。

「おかしいわ。ふつうの煙だったら天に向かって立ち上るはずなのに。下に向かって追いかけてくるなんて」

「そんなの、当然のことだろう？」

　覚は、簡単な問題が理解できない生徒を見下す、鼻持ちならない優等生のような口調で言った。

「穴の中に隠れてる相手を、攻撃するんだぜ。空気より重い有毒ガスを使うに決まってるじゃないか」

　わたしは、息をのんだ。

「それがわかってたんなら、なんで、もっと早く……！」

　わたしは、覚に対する怒りを抑えつけ、地の底へと逆戻りしながら、ここへ来るまでに通った道順を反芻した。一ヵ所、かなり長く上りが続いた場所があり、地上へ通じているのではないかと、大いに期待したものである。だが、おそらくは地表から遠くない場所まで上がってきた道は、まるで、わたしたちをがっかりさせるだけの目的で作られたように、再び下りへと転じていた。もし、あそこに避難でき

たら、下へと沈んでいく有毒ガスは、避けられるかもしれない。

ツチボタルのかすかな明かりすら失われた状態で、わたしたちは、パニック寸前になりながら錯綜したトンネルの迷路を疾走していた。正しい道順を選び取れたのは、ほとんど奇跡に近かったと思う。

「上りだわ！」

足下の感覚が、長い上りに入ったことを示していた。さんざん歩き回った後だったので、腿や脛の筋肉は悲鳴を上げていたが、わたしたちは、歯を食いしばって歩を運び続けた。苦痛こそ、生きていることの証明にほかならない。

やがて、道は平坦になり、その先は再びゆるやかな下りに変わっていた。

「しばらく、ここで待ちましょう」

ガスが巣の中に充満して、その地点まで迫り上がってこないことを祈るしかなかった。一本道なら、さらに先に逃げた方が賢明だろうが、バケネズミの巣には、網の目のようにトンネルが張り巡らされている。有毒ガスが、別ルートで、わたしたちの先回りをする可能性があるので、一番高い場所に留まっているよりないのだ。

暗闇の中で、わたしたちは、腰を下ろした。

「だいじょうぶ？」

訊ねると、覚は、低い声で「ああ」とだけ答えた。

「ガスって、どのくらいで消えるのかな？」

あいかわらず覚の姿は見えなかったが、首を振ったような気配がした。

「消えないよ」

「そんなわけないでしょう？　永遠に穴の中に溜まってるっていうの？」

「そうじゃないけど、たぶん、数日間は消えないんじゃないかな」

覚は、深い溜め息をついた。

「まちがいなく、その前に、ここの空気がなくなる

か、ゆっくりとガスが拡散して、ここまで上がってくると思う」

　口の中に、苦い唾がこみ上げてくる。それでは、わたしたちは、文字通り、座して死を待っているだけなのか。

「……じゃあ、どうすればいいの？」

「わからない」

　覚の答えは、にべもなかった。

「万が一、塩屋虻コロニーが戦いに勝てば、掘り出してくれるかもしれない。その場合も、ふつうは、有毒ガスが消えるまで待つと思うけど」

　絶望が、全身から力を奪っていった。必死の思いで安全地帯に辿り着いたはずなのに、気がついたら、生きながら墓穴の中に埋葬されていたとは。

　なすすべなく最期の時を待たなければならないというのは、精神的な拷問に等しかった。これなら、有毒ガスに追われてトンネルの中を逃げまどっていたときの方が、まだ楽だったかもしれない。

「ねえ。こんなことになっちゃったけど……」

　わたしは、ごく自然に口を開いていた。

「うん？」

「一人じゃなくて、よかった」

「せめて僕を道連れにできたから、気が晴れた？」

　わたしは、少し笑った。

「一人だったら、本当に、絶対耐えられなかったと思う。きっと、ここまでだって来られなかった」

　最後まで諦めることなく、最善を尽くせた。たとえ、辿り着いたのが、この袋小路だったとしても。

「僕も、同じだよ」

　覚の口調も、ふだんと同じに戻っている。わたしは安堵した。もしかしたら、精神的に錯乱していた方が、苦痛を味わわずにすむのかもしれないが。

「真理亜たち、無事に逃げたかな？」

「うん。たぶんね」

「よかった」

　そこで、会話が途切れた。

真っ暗闇の中で、無為に時間だけが過ぎていく。

一分後か、五分後、あるいは、三十分くらいたっていただろうか。わたしは、はっと、半覚醒の状態からさめた。

「覚！　覚！」

「……なに？」

覚の返事は、心許ない。

「臭い。わからない？　ガスが、ここまで来てるのよ！」

卵の腐ったような異臭は、まちがいなく、出口の近くで嗅いだものだった。

「ねえ、ここはもうだめだわ。向こうに逃げる？」

「いや。ここより高い場所はなかったと思うし、低い方に逃げるのは自殺行為だ」

覚は、懸命に思案しているようだった。

「僕より君の方が、嗅覚が鋭い。ガスは、どっちから来てる？　出口の方？　それとも、両方かな？」

「そんなの、わからないわよ」

音であれば、条件次第では、だいたいの方向はわかるかもしれない。だが、臭いがどちらから来ているかなんて、判別できるわけがないと思った。

「ううん。ちょっと待って」

わたしは、出口に近い方の異臭を嗅いでから、穴の中を小走りに進んで、逆側の下り坂で臭いを確かめた。その姿が覚の目に映っていなくてよかったと思う。きっと、さぞかし鼻をひくつかせているバケネズミにそっくりだったろうから。

「……たぶん、一方向から来てると思う。さっきの出口の方から」

「だったら、たぶん、まだ間に合う。トンネルを塞ごう」

「塞ぐ？　どうやって？」

「埋めるんだ」

覚は、ガスがやってくる側の天井を槍で突き崩し始めた。その姿はまったく見えないが、空気の動きと、ときどき飛んできて顔に当たる土塊（つちくれ）で、奮闘ぶ

りは想像に難くなかった。

「早季！　危ない！」

　突然、覚がぶつかってきて、わたしは、数メートル後方に吹っ飛ばされた。その上に、覚が覆い被さる。

　なにが起きたのかと思っていると、上から大量の土砂が降り注いできた。目を閉じて、両手で顔を覆い、ひたすら崩落が静まるのを待つ。口を開けるわけにいかないので、悲鳴も上げられなかった。ようやく終わったときには、全身が土で覆われ、膝から下は完全に埋まっている感覚があった。

「だいじょうぶ？」

　覚が、心配そうに訊く。

「うん。わたしは」

「危なかったよ。もう少しで、二人とも生き埋めになるとこだった」

　冷静に考えれば、穴の中で天井を突き崩そうとするなど、正気の沙汰ではないのだが、生き延びたいという本能が、わたしたちを後先考えない行動に走らせ、そして、そのことが結果的に幸いしたのだった。

　わたしたちは、慎重に土の下から身体を引き抜くと、通路が完全に遮断されたのを確かめた。さらに、念のため、土山の表面をよく掌で叩いて、ガスが浸透してこないよう押し固めた。

「ねえ、上。もう少し崩したら、外に出られるんじゃない？」

　わたしは、大きくえぐり取られているはずの天井を見上げて（もちろん、なにも見えないのだが）、訊ねた。

「外の音が、全然聞こえないだろう？　たぶん、まだ、三メートル以上はあるよ。それに、下から上に掘っていくのは、いくら何でも無茶だ。今度こそ、完全に生き埋めだよ」

　わたしたちは、結局、手をこまねいたまま、再び暗闇で腰を下ろすしかなかった。

通路を埋める騒ぎで、一瞬、進展があったような錯覚にとらわれていたが、よく考えると、状況はまったく改善していない。わたしたちの居場所は、さっきよりさらに狭まり、もし今度、反対側からガスが上がってきたら、お手上げなのだ。反対側の通路も同じように埋められたとしても、狭い空間に残された空気はあっという間に尽きて、窒息死を余儀なくされるだろう。

今度こそ、もう、だめだと思った。

こんなところで死にたくはなかった。でも、もう、打つ手は何も残っていない。人生の最期を迎えようとしながら、自分があまりにも無感動なのが信じられないほどだったが、心身ともに疲れ切り、感情を爆発させるエネルギーさえ残っていない。

わたしは、覚からも離れて、暗闇の中でただ膝を抱えて座っていた。すると、またぞろ幻覚が現れた。外の世界では、よほどのことがない限り、現世に存在しないものの姿など見ることはない。それが、ここでは、スイッチを入れるように、簡単に現れてしまう。暗闇の中を長時間彷徨っていると、意識の支配力が弱まり、無意識の奥に潜んでいた魑魅魍魎が、自由に跳梁跋扈するようになるのだろうか。

最初に現れたのは、ミノシロだった。半透明の姿で、右から左へ、ゆっくりと視界を横切っていく。それは、幻影とは思えないくらいリアルな映像だった。Yの字状の頭触手と、背中に生えている数多くの触手の先端は、白、赤、オレンジ、青などの鮮やかな色に輝いている。

すると、天井から、緑色に輝く無数の粘液の糸が垂れ下がってきた。ツチボタルの作る銀河は、あっという間に、視界いっぱいに広がった。

ミノシロは、粘液に搦め取られそうになりながらも、身をよじり、歩き続ける。だが、とうとう捕まってしまった。粘液の糸は、シャンデリアのように揺れながら、ミノシロをしだいに雁字搦めに縛り上

げていく。

すると、ミノシロは、粘液の糸にくっついた触手を、次々と自切していった。

触手のなくなったミノシロは、背中から、強烈な七色の光芒を放ち始めた。千変万化する光は、重なり合い、干渉し合うことで、空中に、縞のような、渦のような模様を作り出している。その美しさは、わたしの脳髄を痺れさせた。

いつのまにかミノシロモドキへと変化したミノシロは、虹色の残像を背後にたなびかせながら、ゆっくりと視界の外に消えていく。

光の饗宴は、徐々に闇の中に没していった。

このまま、すべてが暗黒の中に閉ざされてしまうのか。そう思ったとき、周囲の景色は一変した。

真正面に、突如、オレンジ色の輝きが出現した。護摩壇の上で、あかあかと炎が燃えさかっている。

地の底から響いてくるような真言（マントラ）の朗唱が聞こえる。それに合いの手を入れるように弾ける、オレンジ色の火の粉。

これは、あの日の光景だ。

祈禱を行っている僧侶が、丸薬のようなものを投げ入れ、香油を注ぐと、護摩壇の上の炎はひときわ大きくなった。

大勢の僧が読経する声が、蟬時雨のように、耳の奥に反響している。

あの日、わたしが呪力を授けられた、通過儀礼（イニシエーション）。

なぜ、最期の時に見るのが、父や母のいる家庭ではなく、幼い頃遊んだ田園でもなく、この光景なのか。

唐突に、まったく別の記憶がよみがえった。

「だめに決まってるだろ。真言（マントラ）は、誰にも教えちゃいけないんだ」

覚が、小面憎い（こづらにくい）顔で言う。日頃、ろくなことをしていないくせに、こんなときだけ妙に優等生ぶるのが、気に障った。

「いいじゃない。友達でしょう？　絶対、秘密にするから」

　わたしは、食い下がった。

「なんで、人の真言（マントラ）なんか聞きたがるんだよ？」

「だから、どんなのか知りたいのよ。ほら。自分のとどう違うのか、とか」

「……だったら、早季のを言ってみろよ」

　覚が、ひどく狡そうな表情になったので、わたしは、ますます闘志を掻き立てられた。いいわ。そっちがそう来るのなら、裏をかいてあげる。

「わかった。じゃあ、こういうのはどう？　お互いに真言（マントラ）を紙に書いて、一、二の三で、見せ合いっこするの」

「……うーん。やっぱり、だめだ。真言（マントラ）は人に教えたら、効力がなくなるんだ」

　そんなわけないじゃないと、わたしは心の中で突っ込んだ。

「だからー。別に、覚えられるほどちゃんと見せなくてもいいんだって。本当に、ほんの一瞬だけ見せ合うの」

「そんなの、意味ないだろう？」

　覚は、疑わしげに言う。

「それでいいのよ。だって、それでも一応、友達同士見せ合ったっていうことになるし。それに、どのくらいの長さかとか、だいたいの感じがつかめるでしょう？」

　なおも渋る覚を説き伏せ、わたしたちは、互いの真言（マントラ）を鉛筆で藁半紙に書いた。

「じゃあ、いい？　一、二の、三よ」

　わたしたちは、半紙を持って向かい合い、電光石火の早業で、〇・一秒ほど裏返して、真言（マントラ）を見せ合った。

「見えた？」

　覚が、心配そうな顔で言う。

「全然。でも、何となく長さはわかった。そんなに長くなかったね」

「うん。早季のも、そうだったな。だいたい、同じくらいかな」

覚は、安堵した顔になると、手に持った半紙をくしゃくしゃに丸め、空中で発火させた。半紙は、あっという間に灰になり、焼失した。

「……でも、一字くらいは見えた？」

案外心配性らしく、なおも、しつこく訊ねる。

「一字もわからなかった。だって、覚の字って、ちゃんと見ても読めないもんね」

覚は、ようやく安心して立ち去る。わたしは、覚が真言（マントラ）を書いたときに下に敷いていた紙を透かして見た。覚は筆圧が強いので、くっきりと、跡が残っている。柔らかい鉛筆で擦ってやると、明瞭に字が浮き出てきた。

後に図書館で調べてみると、それは、虚空蔵菩薩の真言（マントラ）であることがわかった。

うまくいくかもしれない。わたしは、息を殺して、覚の様子を窺った。

まるで眠っているような、静かな息を立てている。だが、それに混じって、ときどき、意味不明なつぶやきが漏れ出していた。

覚は、今、意識のレベルが極端に低下して、催眠術にかかっているのと大差ない状態にある。無意識の蓋が開き、日頃は抑圧されている様々な想念が心に湧き出しているとすれば、ついさっきわたしが見たような、幻覚に支配されていても不思議ではない。

催眠術において難しいのは、ここまで意識レベルを下げることだろう。この状態からであれば、できるはずだ。何といっても、わたしは、覚の意識下に深く刻み込まれた魔法の呪文、真言（マントラ）を知っているのだから。

とはいえ、失敗は、絶対に許されない。失敗すれば、二人とも、ここで死ぬことになる。わたしは、言うべき台詞を慎重に頭の中で反芻、整理した。そ

れから、大きく息を吸って、厳かな声で呼びかけた。

「朝比奈覚」

　顔が見えないので、覚の反応はわからない。

「朝比奈覚。おまえは、規則を破って来てはならないところに来た。しかも、禁を犯して、悪魔の言葉に耳を傾けた。だが、問題は、その先にある」

　かすかに、身じろぎする気配。

「おまえたちは、倫理規定のさらに根幹にある十重禁戒　その第十条、不謗三宝戒に背いた。悪魔の声に従い、仏の教えに異を唱えたのだ。よって私は、おまえの呪力をただちに凍結せねばならない」

　覚はあえぎ、すすり泣くような声を漏らした。わたしは、胸が痛んだが、心を鬼にして先を続ける。

「炎を見なさい」

　覚の反応はわからない。

「炎を見なさい」

　やはり、返事はなかった。

「おまえの呪力は、あの人形の中に封印した。人形が見えるか？」

　深い溜め息。そして、「はい」という覚の返答。

「今から、人形を火の中にくべる。いっさいを焼施すべし。すべての煩悩を焼尽せしめ、灰は無辺の荒土に還るべし」

　わたしは、ここぞと声を励ました。

「見よ！　人形は燃え尽きた。おまえの呪力は、ここに凍結された！」

　覚は、悲痛な呻き声を上げた。

「煩悩を捨てよ。解脱のためには、すべてを、いったん、清浄な炎の中で焼き尽くさねばならない」

　さあ、ここからが、いよいよ正念場だ。わたしは、覚のすぐそばまで歩み寄る。

「朝比奈覚。おまえは、深く神仏に帰依し、自ら呪力を放擲した」

　声音に、精一杯の優しさを込めようと努める。覚の意識の奥底まで染み通り、そこにからみついてい

る、鉄の鎖のような暗示を解かなければならないのだ。

覚を救いたいという一途で純粋な気持ち。方便とはいえ、彼を苦しめなければならないことへの謝罪。ここまで、懸命になって自分を助けてくれたことへの感謝の念。すべての思いが、一時に、奔流のようになって押し寄せてきた。涙が声を曇らせる。

「されば、大日如来の御慈悲により、ここに、再度、正しき真言（マントラ）を授け、精霊を召喚し、呪力を返還する！」

彼の両肩を拳で強く打つと、わたしは、彼の耳元に口を寄せてささやいた。

「なうぼう、あきゃしゃ、ぎゃらばや、おん、ありきゃ、まり、ぼり、そわか」

しばらくの間は、何事も起こらなかった。

だが、やがて、周囲がゆっくりと明るくなっていく。

「覚！」

わたしは、泣きながら叫んだ。輝いているのは槍だった。黒曜石のような穂先の部分が、赤熱し、眩いばかりの光を発している。

「覚。これ、覚がやってるのね？　わかってる？　呪力が戻ったのよ！」

「うん。……そうみたいだ」

覚は、長い夢から覚めたような声で言った。

「早く、天井に風穴を開けて！　邪魔な土を、全部どこかにやっちゃって！」

「わかった」

「あ。待って。外には、有毒ガスが充満してるかもしれないから……」

「うん。安心して。全部、いっぺんに吹き飛ばしてやるよ」

覚は、頼もしい笑顔を見せた。

「一時的に、空気が薄くなるかもしれない。耳と鼻を押さえてて」

あわてて両手の中指と親指を使い、何とか、耳と

鼻の両方を同時に押さえる。頭上で、膨大な土の塊が、地震のようにぶるぶると震えだした。

次の瞬間、竜巻を思わせる轟音とともに、頭上を覆っていた土の天井がすっぽりと消え失せた。

5

土蜘蛛たちが、敵コロニーを短時間で制圧するために開発した手法は、巣穴を致死性のガスで燻蒸するという非道なものだった。

国内のコロニー同士の戦いでも、近くの川の水を引いてきて、水攻めにした例はあったらしい。だが、戦争の主な目的が、相手コロニーの構成員を奪って労働力として利用することだったので、敵兵を皆殺しにするようなやり方は、そぐわなかったのだろう。一方、大陸においては、限られた資源を巡っての争いが多かったため、敵兵を効率的に抹殺する手段が発達したのかもしれない。

彼らが使用した毒ガスの正体は、今もって不明である。現場に残されていた毒ガス発生装置の残骸からわかることは、土蜘蛛が、石と粘土を使って塩屋虻コロニーの風上に奇妙な形をした即席の炉を作

り、何かを燃やしたということだけだ。

あの卵が腐ったような異臭から、彼らが、どこかの火山からイオウの塊を採取してきたことは想像できる。イオウの燃焼でできる硫化水素や二酸化イオウは猛毒であり、しかも空気より重いために、バケネズミの巣穴の奥まで浸透していくはずだ。ただし、それだけで一つのコロニーを壊滅に追い込むほどの威力があるとは、考えにくいらしい。

覚は、土蜘蛛が人類の古代都市を盗掘し、廃棄物の中から塩素を含んだプラスチックを持ち出したのではないかという意見だった。たとえば、塩化ビニールの燃焼によって得られる塩化水素には強い毒性があり、こちらも空気より重いために地下へと流れ落ちる。複数のガスの相乗効果で致死率は高まるし、多くの材料を配合して燃やすことで、さらに恐ろしい未知のガスが発生する可能性もあるというのだ。

塩屋虻コロニーの上に滞留していた有毒ガスの一掃には、十数秒の時間が必要だった。

たとえ呪力を使っても、大量の空気を入れ替えるのは容易なことではない。どこに空気を押しやろうとしても、押し返す力がはたらくからだ。覚は、強い竜巻を作ることにより、低い位置にある汚染された空気を巻き上げて遠くへ運び、周囲からきれいな空気が流れ込むようにした。即席で創ったイメージにしては、なかなかのものだったと思う。

暴風がやんだ後、頭上に空いた風穴からは、のどかな青空が覗いていた。朝の光は目に眩しく、わたしたちは、誤って掘り出された土竜（モグラモチ）のように目を細め、胸いっぱいに新鮮な空気を吸い込んだ。久しぶりの外気は冷たく、体中の毛穴を引き締めるようだった。

明るさに目が慣れてから、覚が視線を向ける。穴の縁はみるみる後退していき、大きく広がった。わたしたちの正面に何とか攀（よ）じ登れそうな緩斜面がで

き、表面には、見えない型押し機でプレスしたように階段が生じた。ステップに足を載せると、テラコッタ煉瓦のように堅固な感触が伝わってきた。

「僕が先に行くよ」

「待って」

わたしは、両手で覚を制した。

「わたしが先に見てくる」

「だめだよ。土蜘蛛が、遠くから弓で狙ってるかもしれないし」

「だから、わたしが先に行くのよ。覚に万一のことがあって、呪力が使えなくなったら、二人とも終わりなんだから」

わたしは、それ以上覚に言わせず、階段を上った。地上に出る前に耳を澄ましてみたが、あたりは完全な静寂が支配していた。鳥の声すら聞こえない。

身を低くして、そっと頭を出す。

竜巻によって周囲の草は放射状に薙ぎ倒されていたが、頭を出しただけでは、何も見えない。わたしは、そっと穴から抜け出した。四つん這いで、しばらく様子を窺ってから、ゆっくりと立ち上がる。

まわりにあったはずのものは、きれいに吹き飛ばされていた。死体も、残骸も、何一つ見あたらない。

後から、覚が上がってきた。

「どう？」

「近くには、何もいない」

遠くを見渡してみると、百メートル以上離れた木の梢に、バケネズミの死骸と思われるものが引っかかっていた。たぶん、さっきの竜巻で舞い上がったのだろう。この距離だと、ほとんど人間と見分けがつかず、背筋に悪寒のようなものが走った。

「やつら、絶対、どっかにいるはずだ。さっきの風くらいで全滅するわけがない」

わたしたちは、すぐには動かず、慎重に周囲を観察した。鏑木肆星氏のような達人なら、宙に真空の

レンズを作って望遠鏡の代わりにすることもできるのだが（ふつうのレンズとは逆で、凹レンズで映像を拡大するのだ）、覚には、もちろん、そこまでの技倆はない。

「ねえ、あそこ見て！」

わたしは、北側にある丘の上を指さした。何かが動いたように見えたのだ。

しばらく、二人でそちらを注視していたが、その後は、何も不審なものは見えなかった。

「ごめん。錯覚だったのかな」

「いや……そうじゃないかもしれない」

覚は腕組みをし、険しい表情で、そちらの方向を見つめていた。

「この地形で毒ガスを撒くなら、あそこからやるのが一番都合がいいはずだ。丘の上なら、空気より重いガスが逆流してくる心配はないし、ここまでの間に、障害物はほとんどない」

覚は、草をちぎって宙に撒き、風向きを調べた。

「微風だけど、北から吹いてるな。たぶん、間違いないと思う。やつらは、あそこにいるはずだ」

「じゃあ、南へ逃げなきゃ！」

覚は、歩き出そうとしたわたしの腕をつかんだ。

「何言ってんだよ？　逃げたりしたら、やつらは絶対追いかけてくる。いつ背後から攻撃されるかわからないんだぜ？」

「だって……」

わたしは、覚の真意を図りかねていた。

「じゃあ、どうするのよ？」

「決まってるじゃないか。こっちから攻撃をかけるんだよ。やつらを全滅させない限り、安全とは言えない」

「そんな」

わたしは、絶句した。

「無理よ。だって、戦えるのは覚だけなのに」

「無理でも、やるしかないんだ」

覚は、てこでも動かない構えだった。

「坊さんがやられたのを見ただろう？　呪力は守りには向かない。攻撃に使ってこそ生きるんだ。……だけど、早季は、怖いんなら逃げてもかまわないよ。君の言うとおり、戦うのは僕一人でいいから」

　そう言われて、はいそうですかと逃げるわけにはいかない。しばらく抗ってはみたが、結局、わたしたちは北に向かうことになった。いくら呪力があっても、見えない場所から攻撃されれば、それまでである。わたしは、覚の視野を補い、警告を発するという役目に徹するつもりだった。

「もう、きっと、弓矢の射程に入ってるだろうな。うかつに出ると危ない。試しに、ここから攻撃してみようか」

　わたしたちは、丘の手前にある大きな岩陰から向こうの様子を窺っていた。

「弾だ」

　覚が妙に楽しげな声で命じると、岩の上部に幾筋もの亀裂が走り、細かく砕けて石礫を作った。覚は、岩越しに丘を睨み、狙いを付ける。

「飛べ」

　たちまち、たくさんの岩のかけらが唸りを上げて飛んでいき、敵に襲いかかった。

　次の瞬間、丘の上では恐慌が起きた。大勢のバケネズミの悲鳴や怒号が響く。あわてて戦闘態勢を取ろうとしているのだろう。甲冑や槍が触れあう金属音や、矢を一斉掃射する弦の響きも聞こえてきた。

「馬鹿め」

　覚は、鼻で笑った。

　浅い放物線を描いて降り注ぐ矢のほとんどは、空中で方向転換し、飼い主の元へと走る忠犬のように、矢を射た兵士の方に逆戻りした。

　次々と、苦痛の叫びが上がる。

「本当は、カマイタチを作りたいんだけどな。しかたがない」

　覚は、まるで楽しい遊びの計画を練っているような口調でつぶやき、背後に目を向ける。四、五十メ

ートルほど離れたところに生えていた数本の大木が、根こそぎ引っこ抜かれて宙に浮かんだ。

「行け」

六本の大木は、丘の上へ飛んでいく。すぐさま敵陣らしき場所に突っ込むのかと思っていたら、相手を威嚇するように、悠々と上空で旋回する。

恐怖の叫び声が飛び交った。頭上の大木に向かって、空しく無数の矢が放たれる。

「ふん。怖がってるみたいだ」

覚の態度は、撥球トーナメントで無心に押し子を操っているときと変わらなかった。

「でも、このままじゃ少し芸がないな。……よし、燃えろ！」

大木は、一斉に発火して、巨大な松明となった。そして、樹冠から火の粉を撒き散らしながら、矢が放たれた場所に落下する。

バケネズミたちは、完全に狂乱していた。炎が何かに燃え移って火災が発生したらしく、太い黒煙が幾柱も天に向かって立ち上る。

「よし、今のうちだ。丘を登ろう」

遮蔽物に使っていた大岩が、露払いをするように斜面の少し上を飛び、わたしたちは、遅れないように駆け上がった。丘の頂上に達する直前に、わたしたちをめざとく見つけたバケネズミが、警戒の叫び声を上げたが、次の刹那、白い高温の炎に包まれて、ばったりと倒れる。

「あれ、毒ガスを作る機械じゃない？」

わたしは、石と粘土で作ったらしい、蚊遣り豚のような奇妙な形をした物体を指さした。五、六基が、象の鼻のように伸びた開口部を丘の下に向けている。

瞬時に、一番近くにあった毒ガス製造器が粉微塵に弾け飛んだ。続いて手前から順々に爆発していく。急行してきたバケネズミの一隊が、破片の直撃を食らったらしく、その場に打ち倒された。

「ちょっと、遊んでやろうか」

仲間が斃れたのを見て、後の連中は突撃を躊躇したようだ。そこへ、突如として、倒れていたバケネズミの死骸が起き上がり、操り人形のような動きで襲いかかる。たちまち、部隊は総崩れになった。

あれほど好戦的だったバケネズミの士気を挫いたのは、あきらかに、超自然的なものへの怖れだった。

「なるほど……力ずくでやるより、恐怖で操った方が効果的みたいだな」

覚は、さっそく、今学んだばかりの戦術を実行に移した。バケネズミたちの目の前や、背後、さらには真っ只中から、続々と死体が起き上がり始める。およそ人間的な感情とは無縁と思われていた彼らは、想像もできなかった怯えを見せ、ついには、パニックに駆られて悲惨な同士討ちを始めた。

戦意を喪失して逃げようとするバケネズミは、一匹ずつ見えない手で摑み上げられて、首を捻られる。結局、丘の上に陣取っていた一隊が全滅するまでに、わずか五、六分しかかからなかった。

「この草原をまっすぐ突っ切るのは、きわめて危険と思われます。向こうの森から丸見えですし、どこかに土蜘蛛の射手が潜んでいる可能性がございます」

スクィーラが、平伏して覚に奏上する。最初から慇懃な態度だったが、今は、文字通り恐懼していた。呪力の本当の恐ろしさを、見せつけられたからに違いない。

「でも、土蜘蛛コロニーは、あの森の中にあるんだろう？」

覚が、不満そうに唇を尖らせた。

「ここから攻撃したって、相手が見えないんじゃ、みすみす取り逃がすだけじゃないか。こんな草原くらい、簡単に焼き払ってやるのに」

「おっしゃるとおりでございます。ですが、たとえ一匹であっても、土蜘蛛が生き残り、土中に潜んで

いた場合、畏れ多くも、神様を毒矢で狙ってくるやもしれません」

スクィーラは、怖々といった顔で覚を見上げた。鼻に大きな切り傷を負い、あちこちに血と泥がこびりついている。

「私どもが鏃（やじり）に塗るのは、せいぜい痺れ薬ですが、土蜘蛛が暗殺のために使うのは、異国の蛙から取った命を奪う猛毒です。万が一、お身体にかすり傷でも付けば、取り返しがつきません。斥候（せっこう）が安全な迂回路を見つけておりますので、どうか、そちらをお通りいただきますよう、お願い申し上げます」

スクィーラが、再びわたしたちの前に現れたのは、微妙なタイミングだった。丘の上の毒ガス部隊を一掃した後、わたしたちは、口論になっていた。わたしは、敵が追ってくる危険性がほとんどなくなった以上、すぐにこの場から逃げるべきだと主張した。ところが、覚は、頑固に、土蜘蛛を全滅させると言い張ったのだ。

覚は、いったい、どうしてしまったのだろう。わたしは、彼の顔を見ながら呆然としていた。そこにいるのは、わたしのよく知っている覚、皮肉屋でほら吹きだが根は優しくて穏やかな少年とは、まったくの別人のようだった。

覚は、カヌーを隠した霞ケ浦の岸まではかなり距離があり、叩けるときに叩いておかなければ禍根を残すことになると力説したが、その日の異様な輝きを見ると、単純にもっと殺したがっているとしか思えなかった。わたしは、現実的な問題点を列挙して、覚の頭が冷えるのを待った。昨日の夜中に一度見たきりなので、土蜘蛛コロニーの場所もうろ覚えだし、まして、竜穴（女王の居住する穴）がどこにあるのかなど見当もつかない。そんな状態で闇雲に攻撃したところで、土蜘蛛を全滅させるのは、とうてい不可能だし、その前に、生身の覚が反撃を食らったら、万事休すではないか。

わたしの粘り強い説得が功を奏し、ようやく覚が

軟化し始めたときだった。丘の下から、わたしたちを呼ぶ声が聞こえてきた。土蜘蛛の罠ではないかと警戒しながら覗いてみると、スクィーラを始めとする塩屋虻コロニーの生き残りが、ひれ伏して、わたしたちを遥拝していた。全部で五、六十匹しかいなかったところからも、毒ガスの威力は窺えるだろう。

スクィーラの説明によると、毒ガスの異臭を感じた塩屋虻コロニーの構成員は、ひたすら巣穴の深い場所に逃げ込んだために、全滅したのだという。（土蜘蛛が毒ガスにイオウの臭いを添加したのは、バケネズミの習性を逆手にとって、相手を巣の奥に追い込むという企みによるものかもしれない）一方、スクィーラが率いる親衛隊は、女王を移送するため、巨体でも通れる比較的浅い位置にある穴を選んで逃げたことが、命拾いにつながったようだった。

コロニーが壊滅的な敗北を喫したばかりなのにもかかわらず、彼らの士気は高かった。一つは、女王が安全な場所に移されていて無事であること（巣で唯一、生殖能力を持った女王が死ねば、生物としては終わりなのだ）、もう一つは、覚の呪力によって、憎むべき土蜘蛛兵があっけなく全滅したのを見たからだろう。

塩屋虻コロニーの残党は、凶暴な復讐欲に突き動かされていた。冷静沈着なスクィーラもその例外ではなく、事前の調査によって敵女王の所在まで正確に把握していると言って、覚を焚きつけ、騎虎の勢いで土蜘蛛を討伐することになってしまったのだ。

話を元に戻そう。わたしたちは、スクィーラの言うとおり、草原を大きく左に迂回して、森づたいに土蜘蛛の巣を目指すことになった。

「この道は、本当に安全なの？」

わたしは、歩きながら、スクィーラに訊ねた。かなり遠回りではあるが、下生えの中を通る道はきちんと踏み固められている。戦慣れしている土蜘蛛

が、これほど重要なルートに防備を施さないとは、考えにくかったからだ。

「ご心配には及びません。先ほど、斥候を放ちましたが、敵兵の姿はありませんでした。やつらは、毒ガスで我々を仕留めたと思い込んでますから、その直後に、コロニー本陣が急襲を受けるとは、想像もしていないはずです」

土蜘蛛は、それほど甘い相手なのだろうか。つい二日前であれば、スクィーラの言葉に納得していたことだろう。だが、昨日来の異常な経験の連続は、わたしをひどく疑り深くしていた。

わたしは、スクィーラに命じて、簡単な衣装替えをすることにした。気休め程度のものだったが、それでわたしの気が済むのならと覚も協力してくれる。そして、それが正しい処置だったことがわかったのは、わずか十分後のことだった。

先頭を歩いていた兵たちが、鋭い警戒の叫び声を上げた。わたしは、何が起きたのかわからず、当惑するばかりだったが、続いて、彼らが頭上に向かって矢を射始めたために、ようやく敵襲があったことに気づいた。

「神様。お隠れください！　土蜘蛛です！」

スクィーラが、金切り声で叫ぶ。

「どこ？」

「木の上です……『影』が、やられました！」

見ると、地面に倒れ伏しているのは、わたしが覚の影武者に指名したバケネズミだった。隊の中では最も体格が大きかったので、遠目には人間の子供に見えないこともないと思い、頭の上に兜を二重に載せてマントを被らせたのである。今、その身体には三本の矢のようなものが突き立っていた。一見して奇妙なのは矢羽根がないことで、代わりに糸巻き状に紐が巻き付けてあった。

「吹き矢です！　毒矢……気をつけて！」

スクィーラは、わたしの疑問を読み取ったかのごとく、警告を発する。敵は、いったいどこにいるの

だろう。わたしは、梢を見上げたが、どこにもバケネズミらしい影は見あたらなかった。さかんに矢を射ている兵士たちには見えているのかと思ったのだが、彼らも、どうやら、盲滅法乱射しているだけのようだった。

そのとき、姥目樫の大木の梢で、がさりという音がした。目を凝らしてもわからなかったが、何かがここにいることは確かだった。

「覚！　この木よ。揺らしてみて！」

覚の上には数匹の兵士が折り重なって、肉の盾となっていた。覚は、スクィーラの制止を振り切り、その下から這い出してきた。次の瞬間、台風の直撃を受けたように、大木は大きく撓み、梢を揺らした。ギザギザのある葉が大量に降り注ぎ、枝が折れる音が響く。

木の葉に混じって、何か重いものが落下してきた。たちまち、バケネズミの兵士たちが、それを取り囲む。

「何、これ？」

わたしは、落ちてきたものを見て、息をのんだ。いったい、それを、どう形容すればいいのだろうか。最も近い形態を持つ生物を挙げれば、木の葉虫という南方産の昆虫か、さもなくば、リーフィーシードラゴンと呼ばれるタツノオトシゴの親戚になるだろうか。

身体のサイズは、一メートル強で、一般的なバケネズミと変わらなかった。よく見れば、頭や手足の形状も、それがバケネズミであることを示している。違うのは、異様に痩せこけている身体の色はウバメガシの幹や枝にそっくりで、しかも、全身に緑色の葉が付いた枝状の突起が生えていることだった。それ、土蜘蛛の叢葉兵は、上空を向いて化鳥のような叫び声を上げた。そのとたん、塩屋虻コロニーの兵士たちがいっせいに槍を突き立てて、叢葉兵にとどめを刺す。

今の様子からすると、どこかすぐ近くに仲間が潜

んでいるはずだ。わたしは、もう一度、周囲にある木々の梢を見上げた。いったんタネが見えてしまうと、擬態の効果は半減してしまう。今度は、さほど時間をかけずに、二本の木に潜んでいた三匹の叢葉兵を発見することができた。

　わたしが指をさすまでもなく、覚の呪力と一斉に放たれた矢が、息を殺していた三匹を仕留め、地面に叩き落とした。

「これ、いったい何なの？」

　わたしの質問に、覚は、難しい顔で死骸をあらためた。わたしには、とても触る勇気がなかったが、叢葉兵の身体に生えている突起も、その先にある葉っぱそっくりの器官も、作り物でないことは明らかだった。

「今さら、驚くこともないかもな。昨日の晩見たときだって、こいつらの軍隊は、化け物行列だったじゃないか」

　わたしは、松毬隊長の皮膚を覆っていた鱗を思い出した。

「でも……じゃあ、あいつらって、どんな形にでもなれるの？　どうして？」

「それはまだ、わからない。まあ、仮説ならあるけど」

　覚は、もう一度、頭からマントを被り直した。

「とにかく、これからは気をつけた方がいいな。こいつら、どんな擬態をして待ち伏せしてるか、わからないし」

「だったら、引き返しましょう。そんなの、危険すぎるわ」

「ここまで来たら、後戻りはできないよ。逃げれば、やつらは必ず追ってくる」

　覚は、とりつく島もない。しかたなく、わたしたちは前進を続けた。

　しばらく行くと、森の中の道は大きく右にカーブしていた。徐々にだが、土蜘蛛の巣に近づきつつあるのだ。

叢葉兵にふいを衝かれた反省から、覚は、大きな木の枝を呪力で飛ばし、行く先にある藪や木々の梢を騒々しく叩き回りながら進んでいった。

さらに行くと、密生していた木々がやや疎ら（まば）になった場所にさしかかった。左手には、一面、緑の紙吹雪を散らしたような、青浮草（アオウキクサ）に覆われた小さな沼がある。

「待って」

わたしは、進もうとする覚を、肘をつかんで押しとどめた。

「ここ、何だか、すごく嫌な感じがする」

一笑に付されるかと思いきや、覚も、真剣な表情になり立ち止まった。

「罠があるってこと?」

「わかんないけど……」

わたしは、沼の表面を凝視していた。ときおり上がってくる泡（あぶく）は、いったい何に由来するのだろうか。覚も同じことを考えたらしく、呪力で大きな岩をいくつも持ち上げて、泡が出ていた箇所に猛烈な勢いで撃ち込んだ。

巨大な水飛沫（しぶき）を上げて、沼の水は四方八方に飛び散る。

しばらく様子を窺っていたが、何事も起こらなかった。

「だいじょうぶだ。行こう」

覚が、待ちきれなくなったように言う。

「……でも」

「いくら何でも、哺乳類が、そんなに長く潜ってられるはずがないよ」

今や、最終的な決定権を持つのは、覚である。全員が再び、ゆっくりと前進を始めた。

そのときだった。沼でガボッという異音が聞こえたのは。

振り向くと、沼の表面に川獺（カワウソ）のような扁平な頭が三つ浮かんで、じっとこちらを見ていた。

その瞬間には、誰も反応することができなかっ

た。三つの頭は、水の中から長い筒を出して構え、すばやく吹き矢を吹くと、トプンという音とともに引っ込んだ。後にはただ、アオウキクサを揺らす同心円状の波紋が残るばかりだった。

「畜生。ふざけやがって」

覚の怒りは、瞬時に沸騰した。筒の中の毒矢は水に浸からない仕組みらしく、命中した塩屋虻コロニーの兵が二匹、静かに息絶えていたのだ。

「いいさ、そのまま隠れてろ。……すっかり茹で上がるまで」

沼の水は、みるみる、温泉のような湯気を立て始めた。

そのとき、なぜ、わたしが沼とは逆方向に視線を向けたのかはわからない。とにかく、わたしは背後を振り返った。そして、信じられないものを目にしたのだった。

沼の反対側は、雑草がまばらに生える湿った砂地だった。そこに、高さ二十センチくらいの小さな盛り上がりができていた。奇怪なのは、まるでモグラが通る畑の畝のように、その盛り上がりが、ゆっくりと動いていたことである。

はっとして、周辺を見渡すと、土の盛り上がりは一つだけではなかった。全部で四つ、緩慢だが着実な動きで、あたかも血の臭いに集まる鮫のように、こちらへ向かって来る。

恐怖のためか、まるで金縛りにあったように、言葉を発することができなかった。ようやく「覚……！」というかすれ声を絞り出したが、彼の耳には届かなかった。もうもうと湯気が立ち上る沼の方へ首を捻じ曲げると、今まさに獲物を捕らえようとする瞬間だった。見守るバケネズミの間から、歓声のようなものが沸き起こる。

沼の底から、熱死した三体の死骸が浮き上がってきたのだ。一瞬視界に入ったそれは、カワウソと言うより太ったカエルのような生き物で、四肢の先にはよく発達した水掻きがあった。

「覚。後ろにいる……砂の下」

わたしは、覚に向かって、ささやき声で告げる。

覚の動きが、ぴたりと止まった。

「どこ？」

「一つは真後ろ、六、七メートル。その左に二体。右斜め後ろに一体」

覚が振り向くのと、ずんぐりした流滴形の土竜兵が四匹、砂の下から姿を現したのは、ほぼ同時だった。

間髪を容れず、ぐらぐら煮立った沼の水が、大蛇のような迸りとなって襲いかかった。小型の弩を構えようとした土竜兵たちは、頭から熱湯の奔流を浴び、ひとたまりもなく倒れた。

「ふー。カエルは、捨て駒だったのか」

覚は、額の汗をぬぐいながら言う。

「油断ならないな。やつら、騙し討ちが得意技なんだ」

「覚。少し疲れたんじゃない？」

「え？　そんなことないよ。このくらい」

「でも、少し、休んだ方がいいと思うけど……」

わたしの問いかけに、覚は、笑って答えなかった。

わたしが覚を気遣ったのは、単に、彼が汗びっしょりになっていたからで、このときは、まだ、きわめて簡単な理屈にも気がついていなかった。呪力は、無限のエネルギーを駆使することができる。だが、そのためには、極度の精神集中が必要であり、人間の集中力と体力には、当然ながら限界があることを。

「危ない！」

竹林の手前で、わたしは、叫んだ。

遥か上空から、正体不明の物体が、いくつも落下してくる。

「だいじょうぶだ。みんな、動くな！」

覚が、地面に根の生えたような直立不動の姿勢に

なり、空を見上げる。

　ぽつんと点のように見えていた物体が、みるみる大きくなっていく。それが岩であることがわかった瞬間、まるで見えないトランポリンにぶつかったように、弾き返された。

「また来るわ！」

　第二波は、さっきよりも数が多かった。すべて、覚の呪力に捕らえられて、元来た方へ投げ返された。

「盲撃ちじゃ、ダメージもないか」

　覚がつぶやくと、うち三個の岩が粉々に破裂して、敵陣とおぼしき場所に無数の破片を撒き散らした。

　それっきり、何の音も聞こえなかった。

「やっつけたの？」

「わからない」

　敵の攻撃は、やんでいる。もしかすると、今の反撃が、思った以上に効果的だったのかもしれない。そう思いかけたとき、突如として、第三波が到来した。

　今度は、竹林の上をかすめるような低い軌道でやって来た。一個、二個……覚が、岩をあさっての方向へと弾く。見えてから着弾するまでの時間が短いので、とても一つずつ投げ返すような余裕はなかった。

　そして、ついに一個が、呪力による捕捉が間に合わず、わたしたちの隊のど真ん中へと飛来した。

　肝を冷やすような一瞬の後、岩は地面に激突し、大きな土煙が上がった。二、三秒後、頭上から大量の砂や枯れ葉が降り注ぐ。生き残ったバケネズミたちは、まるで蜘蛛の子を散らすように四方八方へ逃げ去った。

「くそ……！」

　互いの無事を確認する暇もなかった。覚は、続いて飛んできた二つの岩をブロックするのに追われている。

「後ろよ！」

　わたしたちは、岩を避けるために、急遽、三、四十メートルほど後退した。だが、続いて飛来した岩は、まるでわたしたちの動きを見通しているように、位置を修正していた。どう見ても、正確に狙撃されているようだ。

「どこかにいる！」

　覚が、怒鳴った。

「敵が、どっかから見てるんだ。早季！　探してくれ！」

　間諜（スパイ）は、すぐそばにいるはずだった。だが、いったい、どうやって見つければいいのか。もし、叢葉兵のような擬態をしているなら、そう簡単には見破れない。わたしは、途方に暮れた。攻撃は再び途切れ、第四波はまだ来ない。向こうも、岩を準備するために時間がかかっているのかもしれない。

　そのとき、はっと気がついた。ただ漫然と、わたしたちの動きを追っているだけでは、意味がない。間諜は、わたしたちの位置を敵に伝えているはずではないか。

「覚。後ろに下がって！」

　わたしたちは、さらに三十メートルばかり後退した。それを監視している相手の姿は、依然、まったく見えない。だが、わたしが目を凝らしていたのは、それに続いて送られる合図の方だった。

「あれだわ！」

　わたしは、竹林の上を指さした。風のそよぎに似せてはいるが、竹の梢が、あきらかに不自然な動きをしている。

「あそこから、位置を知らせてる！」

　みなまで言う必要はなかった。瞬時に、竹林から激しい炎が噴き上がったかと思うと、黒煙を上げて燃えさかる。どこか竹管楽器を思わせる、悲しげな断末魔の悲鳴が響き渡った。

「今のうちよ。移動しなきゃ。いったん下がる？」

「いや、前進だ」

覚が歩き出すと、逃げ去ったはずのバケネズミたちが、どこからともなく集まってきて、再び隊列を作った。

「神様。神様」

追いついてきたスクィーラが、息を切らしながら言う。

「ご無事で何よりでございました。こうなればもう、こちらのものです。どうか、邪悪な土蜘蛛どもに、正義の鉄槌を下されますよう」

「調子のいいことばっかり、言わないでよ！」

わたしは、スクィーラに嚙みついた。

「あんたが、こっちの道が安全だって言ったのよ。いったい、どこが安全なの？　そこら中、伏兵だらけじゃない」

「まことに申し訳ございません」

スクィーラは、わたしの剣幕に身を竦めた。

「事前に、斥候を放って安全を確認したのですが、そのときは、まったく何の攻撃も受けなかったのです」

「あたりまえでしょう？　あいつらは、あんたの斥候じゃなくて、わたしたちを待ち伏せしてたんだから」

「もう、いい。とにかく、ここまで来たんだから」

覚が、わたしの二の腕を強く握り、宥めようとした。

「さっさと片をつけて、家に帰ろう」

わたしは、おや、と思った。覚の様子は、どことなくおかしい。ただ疲れているというのではなく、何となく目の焦点が合っていないような感じだった。そういえば、大岩が一つ、難なくブロックをすり抜けてしまったのも、ふだんの覚からは考えられないようなヘマだった。

「でも、この先は通れないわ。どこから岩が飛んでくるか、わからないし」

わたしは、ひそかな危惧を抱いて言った。

「引き返すべきよ」

「それはだめだ」

覚は、首を振った。

「もう、戦端は開かれてる。敵の真ん前で回れ右するなんて、自殺行為だ」

「でも、竹林より先に出れば、岩が飛んでくるのよ？　だからといって、竹林の中を通ることもできないし。それこそ、どんな罠があるかわからないでしょう？」

「私どもが、偵察に参ります」

汚名返上のチャンスとばかりに、スクィーラが口を出した。

「敵が石を投擲している場所を見つけますので、あとは、神様のお力で、一つずつ潰していただければ……」

「簡単に言わないでね。覚は疲れてるんだから」

スクィーラが、ひどく胡乱（うろん）な目つきで、こちらを見る。わたしは失言を悟った。すでに、うすうす気がついていたかもしれないが、わたしが呪力を使えないことは、これで完全にバレてしまったかもしれない。

沈黙を了承と捉えたのだろう、スクィーラは、耳障りなバケネズミ語で、部下に指示を与えた。塩屋虻コロニーの兵士たちは、一瞬のためらいも見せず、竹林の中に散っていった。ここまで、かなりの数的損失はあったものの、依然として士気は高いようだ。

だが、二分もたたないうちに、数匹が駆け戻ってきて、緊迫した様子でスクィーラに報告する。スクィーラは、わたしたちの方へ向き直った。バケネズミの表情は読めないが、なにやら深刻な情報であることは想像がついた。

「竹林の向こうには、視界を遮るような木々もなく、かなり開けた場所になっています。敵の主力は、そこに散開している模様です」

「見通しがいいなら、こっちに好都合じゃない」

「それが……何と言っていいのか、どうか、直接、

ご覧になってください。こんどこそ、竹林の中には敵兵がいないことは確認しておりますので」

わたしたちは、半信半疑でスクィーラについて竹林に踏み入った。四、五十メートルほど進むと、向こう側がうっすらと透けて見えた。相手から見えないように姿勢を低くして、ぎりぎりの場所までにじり寄る。

そこは、百メートル四方はある空き地になっていた。土蜘蛛は、コロニーの周囲にある樹木を伐採して、最後の決戦場としたらしい。

「すごい……」

わたしは、絶句した。空き地の幅いっぱいに犇（ひし）めく土蜘蛛の軍勢は、まさに壮観としか言いようがない。中天高く昇った太陽の光が、無数の鎧兜や刀剣に当たって反射し、きらきらと輝いていた。

「三千匹はいるな。全部で、五つの部隊に分かれてるみたいだ」

覚も、言葉少なになっていた。

「でも、丸見えなんだから、やっつけるのは簡単でしょう?」

すぐに肯定的な返事が返ってくると思ったのだが、覚は、少し間をおいて答えた。

「そうとも限らないよ」

「どうして?」

「あの布陣を見てみろよ。前に、重武装の歩兵を並べて、その後ろに隠れるように、弓兵を配置してる」

それは、太古のギリシャで主流戦法とされた密集（ファランクス）歩兵という陣形だった。最前列の兵士が大きな盾と長槍を持ち、敵が入り込むスペースを与えずに前進してくる。先頭が斃（たお）れれば、鮫の歯が次々と抜け替わるように、次列の兵士が前に出てくるのだ。

「それだけじゃない。一番後ろに大きな岩が積んであるだろう?　その横にいる連中が、たぶん投石機だ」

「投石機?　どこにあるの?」

そう言ってから、わたしは気がついた。
「今、あの連中が投石機だって言った？」
遠目には細部の様子まではわからないが、岩のそばにいるバケネズミたちは、それまで見た中で、身体が最も極端な変形を受けていた。その度合いたるや、叢葉兵や土竜兵などの比ではない。体長が三メートルはありそうな巨大なもの。信じられないほど胴が長く、アコーデオンのように伸び縮みするもの。胴体よりはるかに太く強大な両腕を備えたもの……。
投石機兵は、数十匹が寄り集まり組体操のように合体することで、いわば生きた投石機となって、重さ数百キロの岩を百五十メートル以上飛ばすことができるらしい。もちろん、こうした能力も投石機兵という名前も、叢葉兵や土竜兵などと同様に、ずっと後になって知ったのだが。
「たとえ呪力で攻撃をかけても、あれだけ重装備の部隊を一つ壊滅するには相当な時間がかかるだろう。その間に、向こうはいっせいに矢を射かけ、投石機から岩を飛ばしてくる。こっちに命中しそうな矢や岩は、呪力で防ぐしかない。そうすると、こっちの居場所は明らかになり、ますます集中砲火を浴びる。その結果、呪力で敵を攻撃する余裕がなくなり、防戦一方に陥ることになる」
覚は、溜め息をついた。
「実は、それだけじゃない。……さっきから、ちょっと、調子がおかしいんだ」
「おかしいって？」
覚は、少し離れたところにいるスクィーラに聞こえないよう、声をひそめた。
「疲れてるせいだと思うけど、集中力が切れかけてて、イメージがうまく作れない」
最悪だ。わたしは、天を仰ぎたくなった。
「じゃあ、もう、呪力は使えないってこと？」
「いや、使えるのは使えるけど、あれだけ大勢をいっぺんに相手にすると、分が悪いってことだよ」

やはり、丘の上の毒ガス部隊を斃した後、すぐに逃げるべきだったのだ。あのときならまだ、覚も余力があったから、追ってくる敵を叩きながら、充分、逃げおおせたはずだ。スクィーラの甘言など退け、殺戮に酔って判断力を失っていた覚を、身を挺してでも止めるべきだった。

だが、いくら過ぎたことを悔いても、詮無きことである。今は、どうやったら生き延びられるのか、脳漿を振り絞って考えるしかない。

「神様」

いつの間にか、そばに来ていたスクィーラが、遠慮がちな声で呼びかける。

「今、どうやって土蜘蛛を全滅させるか考えてるの。邪魔しないで」

わたしは、知恵者のバケネズミを睨んだが、向こうは動じなかった。

「申し訳ございません。しかし、どうやら、敵に動きがあるようです」

「え？」

わたしたちは、あわてて土蜘蛛の軍勢の方に目を戻した。たしかに、敵の五つの部隊は、ゆっくりと位置取りを変えつつあるようだ。中央の部隊はほとんど動いていないが、その横の二つの部隊は、あきらかに少し前に出ようとしている。さらに、外縁の二つの部隊にいたっては、すでに互いを隔てる距離を半分近く縮めていた。つまり、土蜘蛛の軍勢は、わたしたちを迎え撃つのに、巨大なＶ字形の陣形を敷きつつあるのだ。

鶴翼の陣。鶴が翼を広げる形に似ているところから、この名が付いたという。本来は、突撃してくる敵を包み込むようにして応戦する受け身の形なのだが、土蜘蛛の狙いは別にあったのかもしれない。つまり、前線を横に引き伸ばすことで、呪力による攻撃の目標を分散し、かつ、反撃の角度を多彩にすることで防御を困難にする……。

ここまでお読みになった方は、わたしや覚が、戦争や軍事用語に詳しいことに、疑問を抱かれたかもしれない。もちろん、この時点では、わたしたちの知識は白紙の状態だった。戦争に関する記述がある書籍はすべて、閲覧禁止の第三分類か、永遠に葬るべき知識とされる第四分類なのだから。わたしが、ここに記した知識を得たのは、ずっと後のことで、瓦礫と化した図書館の地下室から発見された『国盗り無双・完全攻略ガイド』という本によるものである。

話を元に戻そう。敵が作り上げた堂々の陣立ての前に、わたしたちは、完全な手詰まりに陥っていた。

「どうする？」

こんな訊き方しかできない自分が情けなかったが、わたしは、呪力も、事態を打開する知恵も持ち合わせていなかった。

「とりあえず、様子を見るしかない」

覚は、じっと目を閉じ、精神的な疲労が少しでも回復するのを待っているようだった。

「逃げた方がいいんじゃない？　ここで正面衝突するよりは、森に入った方が……」

「だめだ。向こうがすぐに攻めてこないのは、こっちの力を怖れてるからだ。向こうは、まだ、自分たちが追い詰められてると思ってるんだよ。だけど、ここで逃げたりすれば、敵は、こちらの弱みを見透かして、かさにかかって追撃してくる」

とはいえ、敵は、遅かれ早かれ、こちらからの攻撃がないことを不審に思い、一気に仕掛けてくるのではないだろうか。

悪い予感は、思った以上に早く的中した。

左右非対称な腕を持つ弓兵が前に進み出ると、巨大なスズメバチのような羽音を立てて、鏑矢が飛んできたのだ。矢は、わたしたちの頭上をはるかに飛び越えていく。

続いて、通常の矢による一斉掃射。わたしたちは身を伏せたが、背後で、バケネズミの悲鳴が聞こえた。

「くそ。反撃するか」

覚が、目を開ける。

「まだ、だめ！」

わたしは、必死で彼を押しとどめた。

「あいつら、こっちがどう出るか、様子を見てるのよ」

「だったら、なおさら反撃しとかないと、相手を勢いづけるぞ」

「中途半端な反撃だと、こっちの能力を見透かされるだけよ。何もしない方が、かえって不気味なはずだわ。こっちが、向こうの突撃を待ち受けてると思わせないと」

「だけど、このままじゃ……」

鶴翼の陣は、密集歩兵を先頭に、じりじりと前進してくる。どうすればいいのか。

「スクィーラ！」

わたしは、背後に控えているバケネズミを呼んだ。

「はい。何でございましょう？」

「敵の本拠……竜穴は、どこにあるの？」

「確証はありませんが、おそらく正面にある木立の奥かと思われます。どのコロニーでも、最後の防衛線は竜穴の前に置くのが定石ですから」

「覚！　あそこの木に火をつけて！」

わたしの意図を察して、覚は、前方を見据えた。

ふだんなら、一瞬で燃え上がるはずが、数秒の時間がかかった。だが、エゴノキの葉が燻り、めらめらと燃え上がると、敵の前進は止まった。後衛の兵士が巣の方に駆け戻り、燃えている木の根本に斧を入れ始める。原始的な破壊消防だが、わずか数分で炎は消し止められた。

「もっと燃やそうか？」

「待って。向こうの出方を見てから」

無駄に呪力を使って、覚の体力を消耗させることは、極力避けなければならない。

竜穴の前の木に火を点けたのは、向こうが前進してくるなら、いきなり本丸を攻撃するという脅しだった。それがどこまで効くかは、未知数だったが。

土蜘蛛軍は、しばらくの間、音無しの構えだった。だが、巣から伝令らしきバケネズミが駆けてくると、再び、全軍が前進を始める。

「地下トンネルを通って、女王を避難させたんだ」

覚がつぶやく。

「やつら、後顧の憂いを絶って、今度こそやる気だ」

キィという悲鳴を上げると、スクィーラが逃げ出す。部下のバケネズミたちも、それに倣った。

「いよいよ、か」

覚が溜めていた息を吐き出したとき、再び、一斉掃射が始まった。前回とは比較にならない数の矢が空を埋め尽くし、雨霰と降ってくる。

続いて、ほぼ同時に、五つの部隊の投石機兵たちが大岩を発射した。

6

ほとんどの岩は、わたしたちの頭上を飛び越えていき、はるか後方へと着弾した。距離的には、近いものも二、三あったが、幸運なことに、まったく方向が違う。

「あいつら、わたしたちがどこにいるか気づいていないわ」

わたしは、声を潜めて言った。

「逃げよう！」

驚いたことに、この期におよんでも、まだ、覚は動こうとはしなかった。

「だめだ」

「でも……！」

「後ろへ逃げれば、やつらが全力で攻撃してる場所に飛び込むことになる。この状態じゃ、どこへも動けないよ」

「じゃあ、このままじっとしてて、やられるのを待つの？」

わたしは、竹藪から、土蜘蛛軍の様子を透かして見た。軍勢は、鶴翼の陣を崩さずに、じわじわとこちらに迫りつつある。周囲に警戒を怠らず、慎重に歩を運んでいたものの、あと二、三分で、ここに到達するだろう。

「やつらに、こちらの居場所を誤認させられたらいいんだけど……」

覚は、苦しげにつぶやく。何かが、わたしの頭の中で閃いた。

「覚。あと、どのくらい呪力を使える？」

「わからないけど、たぶん、二、三回くらいかな。イメージの難しさにもよるよ」

覚は、頭痛を堪えているように、こめかみを揉んだ。

「飛んでくる岩の中で、一番離れた場所に向かってるのを弾き飛ばして」

「そんなことをして、何の……」

覚は、すぐに、わたしの作戦を理解したようだった。

「わかった」

呪力を使うためには視界を確保しなければならないが、これ以上竹林の際に近づけば、土蜘蛛に気づかれる恐れがある。わたしたちは竹林の奥に後退して、なるたけ上空が開けている場所を探した。地面に岩盤が露出していて竹が生えていないスペースを見つけると、覚は、大きく深呼吸をした。初めて呪力を使った日のように、一心に口の中で真言を唱え、精神を統一する。

ふいに、大きな岩が、西側の空を横切ろうとした。どこへ着弾するかはわからないが、方向も見当外れだし、あの高度なら、遠くに落ちることは間違いないだろう。

岩が、見えない壁に貼りついたように、ぴたりと静止する。敵の間から驚愕のどよめきが聞こえてきた。

「これでも、食らえ！」

覚が、歯を食いしばって、何かを地面に叩きつけるような動作をする。

宙に止まっていた岩は、隕石のような急角度で落下した。

目標である土蜘蛛の軍勢は、ここからは見えないので、狙いはつけられない。頼りは、覚の勘と幸運だけだった。わたしは、両手を組み合わせ、命中することを神に祈る。

大惨事を予感させる、恐ろしい悲鳴が沸き起こった。続いて興奮した喚き声。それから、大勢の兵士たちが甲冑を鳴らして走り回る音。

わたしは、前方に匍匐していった。密生した青い竹の間から目に映ったのは、三千匹の重武装したバケネズミが、狂ったように空き地を右往左往する姿だった。整然とした陣形は、痕跡もとどめていない。呪力による攻撃に備え、できる限りばらばらに

散ろうとしているようだった。

岩が落ちた場所は、すぐにわかった。地面に大きな隕石孔（クレーター）ができており、まわりには、数十体のバケネズミの死骸が散乱している。どうやら、一組の投石機兵（カタパルト）に、まともに命中したらしい。角度的には、おそらく、あの岩を撃ち出した投石機兵ではないだろうが、これ以上効果的な報復は、まず考えられない。敵は文字通り、神と戦っているような気分になったはずだ。

最も望ましいシナリオは、これで敵が戦意を喪失してくれることだったが、もちろん、それが儚（はかな）すぎる望みであることはわかっていた。混乱が収まると、土蜘蛛は、すぐに反撃に移った。

前回に劣らない数の岩が空に向かって打ち上げられ、無数の矢が風を切り裂く。異なっているのは、それらがすべて、比較的狭い範囲に集中していることだった。

「誰もいないとこばっかり、攻撃してる」

もくろみが的中して、わたしは、ほっとしていた。

「今なら、逃げられるわ」

「待って。もう一発だけ、だめ押ししておこう」

覚は、大きく息を吐くと、両の拳を握りしめた。

「無理しないで」

彼は、あきらかに、足下がふらついていた。額にも汗の玉が浮かんでいる。

「だいじょうぶ。もう一回だけだ」

再び、竹林の奥に退避し、西側の上空を睨む。来た。大きな岩が、放物線を描いて通過しかける。

今回は、岩はまったく静止することなく、回転しながら空中でくるりと向きを変えた。鋭い警戒の叫びがこだまする。岩が視界から消え、地上に近づいた瞬間、大音響を発した。爆発したらしい。細かな破片が竹に跳ね返る音が、連続して響く。竹の間を擦り抜けて、ここまで飛んでくるものもあるのではないか。わたしは、内心、ひやひやしていた。

「あいつら、きっと、さっきよりダメージは大きいぞ」

覚は、得意げにのたまったが、声には力がなかった。たぶん、心身の疲労は限界に近いのだろう。

「さあ、早く逃げよう！」

北は戦場だし、南に竹林を抜けると、西に向かうであろう土蜘蛛軍に見つかってしまう可能性がある。わたしたちは、東に向かって、昼なお鬱蒼と暗い竹林の中を歩き出した。すばやく。音を立てずに。誰にも見られないように気を配りながら。

生い茂った野竹の間を縫うように進む。地面の起伏が大きく、いたるところで、倒れた竹や蔓草が道を塞いでいる。頻繁に枝に頰を引っかかれたり、足を取られたりするので、短い距離を進むのも骨が折れた。スクィーラの後について竹林に入ったときは、前もって道が切り開いてあった場所だったのだろう。

「だいじょうぶよ。安心して。絶対、家に帰れるから」

「うん」

覚は、よろめきながら、わたしについてくるのが、やっとのようだった。視線は虚ろで、口数も極端に減っている。

もう少しだ。もう少しで、ここを抜けられる。この迷路のような竹林さえ抜けられれば、あとは、元来た道を引き返せばいいのだ。

瞬たちはどうしているんだろうと思いかけたとき、自然に、ぴたりと足が止まった。覚に向かって唇に手を当て、静かにというサインをする。

耳を澄まさずとも、それははっきりと聞こえてきた。会話だ。バケネズミ特有の甲高く耳障りな声。

わたしたちは、四つん這いになって、地面の窪みに這い込んだ。目の前には倒れた竹が折り重なり、枯れた蔦が幾重にも絡んでいる。こちらの姿は完全に隠れているはずだが、バケネズミの嗅覚を考えると不安はぬぐえない。こちらが風下だといいのだ

が。

見えた。武装した土蜘蛛の兵士が、やって来る。一匹……二匹だ。捕虜のようなものを連れているようだが、そっちは兵士の陰になっていて見えない。付近の偵察と哨戒をしている土蜘蛛の遊撃隊だろう。たった二匹しかいないのに、全然緊張が感じられないのは、わたしたちが別の場所に釘付けにされていると思い込んでいるからに違いない。

わたしたちは、息を殺して、彼らが通り過ぎるのを待った。

狭い隙間から、兵士たちの姿が見える。鉈のようなものを左右に振り回し、悪戦苦闘しながら荒廃した竹林を進んでいる。

両手を縛られ、腰縄をつけられた捕虜の姿も視界に入った。

スクィーラだった。

かなり手ひどく殴られたらしく、片目は完全に塞がり、鼻と口のまわりには乾いた血がこびりついていた。それでも、きょろきょろと周囲を見回し、さかんに空気の臭いを嗅いでいる。

昨晩来の出来事で、多少の情は移っていたが、危険を冒して助けようという気は起こらなかった。覚を焚きつけてここまで来させておきながら、敵の一斉攻撃を前にして、わたしたちを置いてさっさと逃げ出したのだ。その結果捕まる羽目になっても、自業自得ではないか。

さようなら、スクィーラ。あなたのことは、忘れないわ。

わたしは、心の中で手を振って見送ろうとした。ところが、スクィーラは、いっこうに視界から消えようとしない。とうとう土蜘蛛の兵士に手荒く縄を引っ張られたが、何やら鳥の囀りのような声で抗弁しながら、空気の臭いを確かめている。

どきりとした。スクィーラが、こちらを見ているのだ。こちらは陰になっているため、向こうからでは見にくいはずだと思ったが、塞がっていない方の

目が、たしかに、倒れた竹と蔦の隙間越しに、わたしの目と合っている。

スクィーラが、突然、大声で叫び、こちらを指さした。

この裏切りもの。わたしは、怒りと恐怖で体中の血液が沸騰しそうだった。

二匹の兵士は、色めき立った。一匹が抜刀すると、もう一匹は、背負っている弓を取り、矢をつがえようとした。

「……止まれ」

背後から、覚の声が響く。弓と矢を持ったバケネズミは、糸が切れた操り人形のように、その場に崩れ落ちた。もう一匹は、幅の広い蛮刀をかまえたまま、どうしていいのかわからず、呆けたように立ちつくしている。

すると、どうやって隠していたのか、スクィーラが、口からナイフを吐き出した。縛られている両手でしっかりと握ると、背後から、兵士の頸動脈を一気に切断した。

土蜘蛛の兵士は、穴を開けられた水筒のように大量の血を噴出させながら、よろめき、ばったりと倒れる。

スクィーラは、器用にナイフを銜え直して、自ら縛めを切り払った。

「神様。ありがとうございました！　おかげさまで、命拾いをいたしました」

駆け寄ろうとするスクィーラを、わたしは、睨みつけた。

「よく、そんなセリフが出てくるわね。わたしたちを売ろうとしたくせに！」

「とんでもございません。それは、誤解です」

スクィーラは、弱々しく言った。

「きっかけさえ与えていただければ、一匹は始末する自信がありました。それに、神様のお力からすれば、あんな兵士どもが、何ほどのものでしょうか？」

覚の状態については話したくなかったので、わたしは、言葉に詰まった。

「それなのに、売ろうとしたなどとおっしゃられるのは、心外です。万が一、私が神様を裏切ったとしても、それで私がやつらに赦されることなどあり得ません。塩屋虻コロニーの最高幹部である私は、捕らえられれば、どのみち処刑される運命なのです」

「でも、敵に対して、わたしたちのことを教えたのは、事実よ」

「申し訳ございません。でも、ああでもしなければ、神様は、私のことをお見捨てになるのではないか。もちろん、そんなことはあろうはずもないのですが、つい、心配が勝ってしまいまして」

図星を指されて、それ以上追及する気が失せた。

「先に、逃げ出したくせに……」

腹立ちまぎれに、捨て台詞をつぶやく。

「はい。それについては、本当に、弁解の言葉もございません。万死に値します。私は、怖くなったのです。スクィーラは臆病者です。神様からすれば、虫けらにも等しい生き物です。糞虫の幼虫にも唾を吐きかけられるような存在です。肥溜めに蠢く蛆虫にも劣る、下等で、醜くおぞましい……」

「もういい。やめろ」

覚が、うんざりしたように、スクィーラの際限のない卑下慢を遮った。

「それより、ここから抜け出すには、どうすればいいんだ？」

覚は、竹に寄りかかるようにして、目を閉じている。わたしは、彼の様子が心配だった。とうに限界を超えているはずなのに、今もまた、呪力を使わざるを得なくなってしまい、この先、はたして体力が保つのだろうか。

「そのことですが、土蜘蛛どもは、なぜか、西側の一帯に神様がいると思っているようで、そちらの包囲に全力を注いでおります。ですから、このまま東に抜けるのが最も安全かと思われます」

スクィーラは、何事もなかったように、平生の口調に戻っていた。

「じゃあ、東には、敵はいないのね？」

ほっとはしたものの、一応、念を押してみる。

「はい。精鋭部隊はすべて、西側に重点的に投入されていますから。東の方をうろついているのは、先ほどのような、取るに足らぬ者ばかりです」

目の前が暗くなるようだった。

「いるんじゃない……。数は、どのくらい？」

「全部併せても、せいぜい、百か百五十といったところでしょうか。武器も粗末ですし、練度も低く、神様なら、いないも同然です。まさに、無人の野を行くがごとく、お進みになれますことでしょう」

わたしは、溜め息をついた。ここまで来て、いよいよ進退窮まったのか。

「どうなさったのでしょうか？　行くなら早いほうがいいと思われます。もし、あちらに神様がいらっしゃらないことに気づいて、西から精鋭部隊が戻って来れば、面倒なことになります」

スクィーラは、わたしたちを急かす。だが、すでに、わたしたちの戦闘能力は、限りなくゼロに近づいているのだ。

「神様」

この馬鹿なネズミに、本当のことを教えてやろうか。だが、もちろんそれは、危険すぎる。わたしたちに利用価値がなくなったと知ったら、こいつがどういう態度に出るかは、誰にも予想がつかない。

「神様」

「うるさいわね。ちょっと、黙ってて」

「ですが、神様。最悪の事態が近づいているようです」

スクィーラは、咳き込むような声で言った。

「西から、相当な数の兵士がやって来るようです。もしかすると、神様が、包囲網を破って逃げたと考えているのかもしれません」

わたしは、西の方を見たが、竹に遮られて何も見

えない。軍勢の足音も聞こえないが、スクィーラが嘘を言っているようには見えなかった。バケネズミの聴覚は、人間よりずっと優れていたとしても、おかしくない。

「どうしよう……！」

「今すぐに、東に抜けるべきです。同じ戦うのであれば、あちらの方が、斃すのはずっと容易ですし、さらに言えば……」

「しっ！　静かに」

　わたしは、スクィーラを黙らせた。聞こえる。嘘ではなかったのだ。竹を切り払ったり、枯れ枝を踏んだりする音が、かすかにだが漏れ伝わってくる。細心の注意を払った静粛な行軍は、かえって、内に秘めた強烈な害意を感じさせた。

「神様。もう、一秒の猶予もなりません。行きましょう！」

　スクィーラの叱咤に従い、東に向かって移動する。音を立てないようびくつきながらも、もう少しで竹林が切れるという場所までやって来た。だが、そこで、とうとう怖れていたものにぶつかってしまった。

　土蜘蛛の遊撃隊だ。七、八匹が所在なげにたむろして、油を売っているようだ。まだ、こちらに気づいてはいない。しかし、これ以上進むと、否応なく直面せざるをえない。

「神様。どうか、あの者どもを疾く始末してください。なるべく音を立てないようにしていただければ、祝着に存じます」

　わたしは、覚の顔を見た。覚は、ゆっくりと首を振る。もう、あれだけの敵を倒す余力は残っていないのだ。

「神様。どうなさったんですか？　神様？」

　スクィーラは、気が気でないようだった。

「迷っている暇はないのです！　今すぐここを抜けて行かなければ、後ろから追ってくる部隊に追いつかれます」

スクィーラの口調が、だんだん、不吉な調子へと変わっていった。

「神様。どうなさったのですか？　なぜ、あの者どもを始末なさらないのでしょうか？　もしかすると、神様は……」

　ぎょっとして見ると、スクィーラの目には、これまでに見たことがないような怪しげな光が宿っていた。

「……もう、神様ではなくなったのですか？」

　凍りつくような一瞬。わたしは、スクィーラの目を睨み返す。

　冷たい静寂を破ったのは、野太い笛のような響きだった。

　呪縛を解かれたように、わたしたちは、周囲を見回した。

「何の音、あれ？」

　再び、聞こえた。一ヵ所ではない。様々な方向から、互いに呼応するように山野にこだましている。

「神様、神様！」

　見ると、スクィーラは、狂喜乱舞していた。

「お喜びください！　足音が遠ざかっております。西から迫っていた部隊が、撤退していくようです！」

「どうして？」

　わたしは、安堵したというよりも、狐につままれたような気分だった。

「援軍です！　あの法螺貝の音は、おそらく大雀蜂コロニーです。もう、心配いりません。大雀蜂は関東最大のコロニーで、総兵力は二万を超えています。土蜘蛛ごときは鎧袖一触（がいしゅういっしょく）、あっという間に蹴散らしてくれるでしょう！」

　気がつくと、さっきまで道を塞いでいた土蜘蛛の遊撃隊も姿を消していた。

　これで、本当に助かったのだろうか。わたしは、こっそりと覚の顔を見やったが、そこには、喜びや安堵の表情は微塵も見出すことができなかった。

大雀蜂軍は、数で勝っているのみだけでなく、剽悍なこと、この上なかった。

戦いは、互いに遠間から矢を射ることで始まったが、矢が尽きると、肉弾戦となった。大雀蜂軍のうちで、軽装で身軽な兵士の一群が、土蜘蛛の密集歩兵の脇を走り抜けざま、投網のようなものを投げかける。動きがとれなくなった密集歩兵は、続いて四方八方から飛んでくる投げ槍に串刺しにされ、まるで海胆のような無惨な屍をさらすしかなかった。

体長が三メートルを超えるような土蜘蛛の変異個体に対しても、標準サイズの大雀蜂の兵士が臆せず襲いかかっていく。三倍も大きな相手の身体に嚙みついて食い下がりながら、大刀で相手の身体を滅多刺しにするのだ。どんなに怪物的な個体も、これにはひとたまりもないようだった。

「敵の主力は、撃滅いたしました。あとは、女王を捕らえるだけです」

大雀蜂軍の総司令官である奇狼丸は、しばらくの間、戦況を見守っていたが、こちらを振り返って涼しい顔で言う。

「およそ同種とも思えぬほどに奇態な者どもでしたが、しょせんは虚仮威し。とうてい、我が方の敵ではありませんな」

「それは、少々不敬なお言葉ではないでしょうか」

スクィーラが、口を挟む。

「ほう、不敬とは？」

奇狼丸は、頭二つ分以上小さなスクィーラを見下ろした。

人間から漢字名を授かったバケネズミは、傑出した能力を認められたものばかりであり、すべてのコロニーを合わせても二十匹に満たないという。そのことを知ったのは、ずっと後のことだが、奇狼丸は、見るからに非凡な雰囲気を漂わせていた。身長は、わたしたちより高く、女王や土蜘蛛の変異個体を除けば、これほど大きなバケネズミはあまり見た

ことがない。長い顔や吊り上がった目は、名前の通り、狼を連想させた。目を細めていると笑っているように見えるが、上機嫌なまま相手の喉笛に食らいつきそうな獰猛さを感じさせる。また、大雀蜂の兵士は、全員が黥面文身していた。黥面とは顔に、文身とは身体に、それぞれ入れ墨をすることである。ほとんどの兵士は顔を縁取るように黒い縞を入れているだけだったが、奇狼丸の場合は、目元から鼻筋に沿って描かれている複雑なアラベスク文様が、押し出しにいっそう奇怪な迫力を加えていた。

「たしかに、大雀蜂の諸兵は勇猛果敢です。しかし、あれほどたやすく土蜘蛛を打ち破れたのは、あらかじめ神様が打撃を与え、戦力を磨り減らしておいてくださった賜物ではありませんか。投石機兵など、もし全部が無傷で残っておれば、たいへんな脅威になったのでは……」

「投石機兵など、ものの数ではない」

奇狼丸は、スクィーラなど歯牙にもかけていないようだった。

「あのような変異個体は初めて見たが、本来、投石機は攻城兵器として用いるべきもの。平地の矢戦では、いたずらに的となるだけだし、白兵戦となれば、あのように撫で切りの憂き目を見るのだ」

「しかし、そうはおっしゃるが……」

「貴殿は、文官であるから、戦の常道をご存じない。したがって、今の見当外れの指摘も大目に見よう」

奇狼丸は、鷹揚な態度で、わたしたちの方を振り返った。

「とはいえ、土蜘蛛がかくも馬鹿げた攻撃陣を採ったのも、神様の存在があったればこそかもしれません。コロニーの正面に全軍を投入し、背後の守りを放擲するという愚策に及んだのも、同断でしょう。奇狼丸が、あらためて篤く御礼を申し上げます」

「いいえ、どういたしまして」

わたしは、素っ気なく答えた。「こちらこそ、助

けてくれてありがとう」と言おうかと思ったが、何か、心の奥の方でブレーキをかけるものがあったのだ。

　そのとき、大雀蜂の伝令が駆け込んできて、バケネズミの言葉で報告を行った。

　奇狼丸は、満足げにうなずき、わたしたちを見た。

「竜穴が見つかりました」

「えっ。そ、それは、素晴らしい……」

　何かを言おうとしたスクィーラを無視して、奇狼丸は、わたしたちの方を向く。

「私は、任務ですので立ち会わねばなりませんが、お二方はどうなさいますか？」

　わたしが断ろうとすると、ずっと目を閉じて腕組みをしていた覚が、先に答えた。

「僕らも、立ち会うよ」

「さようですか。それでは、私が露払いをさせていただきます」

　奇狼丸の先導で、わたしたちは、陣幕を出た。警護の兵士が最敬礼する中、奇狼丸は、我が家の庭を闊歩（かっぽ）するように悠然と先導する。わたしは、ひそひそ声で覚に問いただした。

「どうして、立ち会うなんて言ったのよ？」

「ここで、あいつに、弱みを見せるわけにはいかないんだ」

　覚は、上と下の瞼がくっつきそうになっていた。すでに、意識を保っているだけでも、相当な努力が必要なようだ。

「でも、大雀蜂って、一番、人間に忠実なコロニーじゃない。どうして、そこまで警戒しなくちゃならないの？」

　わたし自身、奇狼丸には何か得体の知れない不安を感じていたのだが、あえて楽観的な口調で訊ねてみる。

「一番、人間に忠実だからこそ、注意が肝要なんだよ」

「どういうこと？」

「僕が思ったことを、今ここで説明するのは、難しいけど……」

覚は、大儀そうに眉をしかめた。

「なあ。昨日から、僕らは、生きるか死ぬかという場面が続いてきただろう？」

「うん」

「だけど、賭けてもいいよ。今現在が、たぶん、これまでで一番危険な状態なんだ」

どういうことか、さっぱりわからない。重ねて質問をしようとしたわたしを、奇狼丸が振り返った。

「ご覧になれますか？　前方に見えるのが、竜穴への入り口です」

見えないわけがない。小さな丘の斜面に、象でも通れそうな大穴が開いている。カモフラージュに使われていた大木が掘り起こされた跡らしい。

「だけど、奥には、抜け穴がいっぱいあるんでしょう？　女王様は、秘密の通路を通って、逃げちゃったんじゃない？」

奇狼丸は、にやりと笑った。

「心配は、ご無用です。我々は、まず反対側の出口を封鎖してから、こちら側に向かって女王を追い詰めました。女王は、神様の力に恐れをなし、逃走を図っていたようです。そもそも竜穴というのは、神聖な場所でありますから、他の穴とは違い、あまり多くの隧道（トンネル）は走っていないのです」

「じゃあ、女王様は、今どこにいるの？」

「この穴の一番深い位置にある、小部屋に潜んでいる模様です」

このとき、竜穴から、大勢の大雀蜂の兵士たちが、湧き出るように現れた。それぞれ、大切そうに、何かを腕に抱えている。

「あれは……？」

質問の途中で、わたしは気がついた。赤ちゃんだ。

「竜穴の途中には、多くの産室があります。あれは

全部、土蜘蛛の女王が産んだ幼獣なのです」

「でも、どうして？」

奇狼丸は、胸糞が悪くなるほど満足げな表情を見せた。

「あれこそ、貴重な戦利品。我々のコロニーの明日を支える労働力となるのです」

赤ん坊を抱いた兵士が、奇狼丸のそばに来た。抱えている赤ん坊は、まだ目が開かず、しきりに上肢を突っ張って、何かに触れようとしている。肌はきれいなピンク色で、成獣と比べると、ずっとネズミっぽい顔つきだった。

わたしは、スクィーラの言ったことを思い出した。

『女王は処刑されますが、それ以外は全員、奴隷として使役されます。生きている限り、家畜以下の過酷な扱いを受け、死ねば、野山に捨てられるか、畑の肥料となるのです』

赤ん坊が辿る運命を思うと、暗然とするしかなかった。人間に近い知能を保ちながら、バケネズミの習性は、やはり蟻に似ている。いったいなぜ、こんないびつな動物が生まれてきたのだろう。それは、昨夜来、何度も頭に浮かんだ疑問だった。

すると、わたしたちの後を付いてきていたスクィーラが、奇狼丸に対し、しきりに何かを訴え始めた。バケネズミの言葉なので、何を言っているのかはわからない。

「神様の御前だ。日本語で話せばよかろう」

奇狼丸は、吐き捨てるように言う。

「ああ、神様。これは、たいへん失礼いたしました。私は、今、塩屋虻コロニーを代表し、私どもの権利について訴えていたのです」

スクィーラは、今度は、こちらに向かって三拝九拝する。

「権利？」

奇狼丸は、憫笑するように言った。

「なぜ、権利があるなどと思うのだ？」

「当然ではありませんか。塩屋虻コロニーは、危険な侵略者、土蜘蛛と最前線で対峙して、何とか、来援まで持ちこたえたのです。しかし、その間、敵の残虐かつ卑怯な攻撃により、大部分の兵を失いました。もし、これが他のコロニーであったとしても、同様に壊滅的な被害を余儀なくされたはずです。塩屋虻コロニーは、いわば、全コロニーのための防波堤の役割を果たしたのですから、それなりの補償があってしかるべきではありませんか！」

　スクィーラは、身振り手振りを交え、涙を流さんばかりに訴えていたが、わたしには、話がどちらへ向かおうとしているのかが、まったく見えなかった。

「ふん。なに、ごくごく単純な話なのですよ」

　奇狼丸は、わたしの不審を見透かしたかのように言った。

「いいだろう。小さなコロニーでも、このまま消滅させるのは不憫だ。戦利品は、成獣が二千匹、幼獣が三千匹ほどになる。それぞれ、一割をくれてやろう」

　スクィーラは、米搗きバッタのように、ぺこぺこと頭を下げ始めた。

「ありがとうございます！　これで私も、胸を張って女王に報告ができるというものです。奴隷が二百匹に幼獣が三百匹いれば、コロニー再建のめども付きましょう。本当に、何とお礼を申し上げてよいか……！」

「まあ、時が来れば、それなりの働きはして貰うことになるがな」

　奇狼丸の目には、ぞっとするほど冷たい光が宿っていた。

　ふいに、竜穴のまわりでざわめきが起こる。中から飛び出してきた大雀蜂の兵士たちに、周囲から応援の部隊が加わり、槍ぶすまでぐるりと入り口を包囲した。

「おや、まだ、穴の中に残党が潜んでいたようで

す」

　奇狼丸が、むしろ愉快げに言う。

　ゆっくりと穴から姿を現したのは、かなりの巨体を持ったバケネズミだった。奇狼丸と比べても、それほど遜色はないかもしれない。前後に大きく張り出している才槌頭（さいづちあたま）と、革の鎧の上にマントをまとった姿には見覚えがある。昨晩、土蜘蛛のコロニーに連行されたとき、松毬隊長がへりくだっていた様子からすると、土蜘蛛の最高司令官なのかもしれない。

　才槌頭は、その場に直立すると落ち着いた様子でまわりを見渡し、こちらに目を留めた。奇狼丸に向かって両手を広げ、武器を持っていないことをアピールする。そして、意外に繊細な声で、何かを呼びかけた。

「ふん」

　奇狼丸は、鼻で嗤った。

「何て言ってるの？」

　わたしが訊ねると、奇狼丸の大きな口は、笑みを浮かべるように耳元まで広がった。

「片言なので、完全には理解できません。我々の言葉も、国や地方によって違いますから。しかし、どうやら、降伏するので、女王の命を助けてほしいと言っているようです」

「じゃあ、助けてあげるの？」

「まさか」

　奇狼丸は、目を細めた。

「今さら降伏云々というのも滑稽の極みですし、コロニー間の戦争で女王の助命などありえないことくらい、あの凸助（でこすけ）にも、よくわかっているはずですが」

　才槌頭は、また、ひとしきり何かを囀（さえず）った。

「はて。私と話し合いたいと言っておるようです。女王の命と引き替えに、何か大切なものを我々に差し出すとか。何を言い出すつもりなのか、一応、聞いてやりましょうか」

奇狼丸は、にやにやしながら、歩を進めた。

土蜘蛛の総大将なら瞬たちのことを何か知っているかもしれない。わたしが、そう思ったとき、竜穴から何かが這い出してきた。才槌頭のマントの背後に隠れているため、姿はよく見えない。奇狼丸は、一瞬、警戒して立ち止まった。だが、のそのそとマントの後ろから現れたものに目をやると、緊張を解いて歩き出す。

たしかにそれは、初めて見る者の目には、ただの二頭の大型犬のように映っただろう。ずんぐりとした身体は黒いぼさぼさの毛で覆われており、頭部は異様なほど小さく、地面すれすれの位置に付いている。

「風船犬……！」

わたしは、叫び声を上げようとしたが、唇から漏れたのは、かすかな喘ぎ声だけだった。奇狼丸は、すでに才槌頭から六、七メートルの距離まで近づいている。

突然、離塵師が爆死したときの映像が、あたかも今現在体験しているかのごとく鮮明に蘇った。

風船犬が、膨らんでいく。密生した黒い剛毛が、ひどく疎らになり、放射状に走る白いジグザグのラインが顕れる。こちらが警告を無視し、退却しないのを見ると、いよいよ、最後の膨張が始まる。死を目前にした風船犬は、眼球が上転して白目になって涎を垂らし、えもいわれぬ快感に包まれて笑っているように見えた。限界ぎりぎりまで膨らんだ皮は、薄くなり、ほとんど透けて見える。その内側で、小さな青白い火花が走った。（わたしは、このとき初めて、風船犬が体内の爆薬に点火する瞬間を、はっきりと目撃していたことに気がついた）

そして、風船犬は、弾けた。

背面の皮は無数の断片に割れ、チェシャ猫じみた笑いを貼り付けた頭部も、薄っぺらい切れ端となって爆風の中で霧消する。だが、解放された球面波は

一気に加速し、砂嵐のように砂塵を巻き上げながら、風船犬の魂が乗り移ったかのように際限なく膨張していく。鋭い棘や刃を持った骨片は、真正面に立っている離塵師の肉体を貫通し、ずたずたに引き裂き、さらに、目の粗い鑢をかけるように削り取っていく……。

わたしは、はっと我に返った。幻視は二、三分も続いたように思われたが、実際には、わずか一、二秒のことだったらしい。

二頭の風船犬は、才槌頭の前に出てきたところだった。奇狼丸は、再び歩みを止めた。風船犬が膨らみ始めるのを見ると、本能的に危険を悟ったらしく、すばやくきびすを返す。だが、指揮官としての体面が、命からがら逃げ出すのを、ほんの一瞬だけ遅らせた。

風船犬は、前回見せたような威嚇のディスプレイはすべて省略して、一気に臨界点まで膨張する。

「覚！」

わたしは、覚の腕を強く握りしめた。覚が、目を開ける。

世界から音というものが消え去り、周囲のあらゆるものの動きが、ひどく緩慢になった。時間の感覚が何十倍にも引き伸ばされて、すべては、夢の中の出来事のようだった。

二頭の風船犬は、二個の巨大な鞠となった。逆立った黒い剛毛の間から、白い稲妻のような警告模様が露わになる。

そして、そのまま爆発……するかと思われた。

だが、寸前のところで、覚の呪力がそれを食い止めた。一個目の黒い鞠は、竜穴の中へ吸い込まれるように姿を消す。二個目は、間に合わない。覚は、風船犬の身体を無理やり押さえつけた。外へ向かって爆発しようとする力と、それを阻止しようとする呪力とが、一秒の何百分の一という短い時間、せめぎ合う。

風船犬の身体は、見えない手に包まれて奇怪に波打ち、そして、爆縮した。

外へと発散しようとした爆発力が、呪力に跳ね返されて、内攻し中心へと向かったのである。だが、すぐにそれは、遥かに巨大な力となって戻ってきた。

あのまま、さらに強い力で押さえつけていたら、いったいどうなっていたのだろうか。火薬を密封破裂した場合、密封が完全で圧迫が強いほど、爆発力は凄まじいものになる。万一、呪力の障壁が破られていたら、誰一人として生き残れないほどの大惨事が出来していたかもしれない。

このときは、覚の作ったイメージが巨大な人の手だったのが、さいわいしたようだった。固く握った拳の上側、折りたたんだ人差し指と親指の間から、一筋のジェットが空高く噴出し、爆発のエネルギーを逃がしたのである。

ほぼ同時に、竜穴に押し込まれた黒い鞠は破裂して、トンネル内部の空気を激動させ、大量の土砂を中天高く吹き飛ばした。

わたしは、一瞬早く、持てる力を使い果たして抜け殻のようになった覚に飛びついて、地面に押し倒していた。

爆風が通り過ぎ、降り注ぐ土砂が収まるのを待つ間、わたしは、もしかすると風船犬は自爆することに性的な快感を覚えていたのではないか、だとすれば、きっと雄に違いないなどと、奇妙な思考に意識をゆだねていた。

竜穴は、巨大な墓穴へと変じていた。

大雀蜂の兵士が掘り出す死骸は、どれもかなりの損壊を受けていた。もちろん、すべて即死だろう。手裏剣のように飛散する風船犬の骨片も、曲がりくねったトンネルの隅々にまで到達することは不可能なはずだから、爆轟（伝播速度が音速を超える爆発）で生じた衝撃波によって殺されたに違いない。

発掘作業をしていた兵士の間から、どよめきが起こった。一匹がひどく興奮した様子で飛び出してくる。

「土蜘蛛の女王の、死骸が見つかりました」

兵士の報告にじっと耳を傾けていた奇狼丸が、低い声で言った。さっきの爆発で背中と肩にひどい裂傷を負い、包帯は血で赤く染まっている。わざわざ掘り出さずとも、すでに地表は死体の山であるため、あたりには無数の蝿が飛び回り、奇狼丸の周りにもうるさく付きまとっていた。

「これより、検分してまいります」

奇狼丸は、足下にあるボロ雑巾のような死骸を見下ろした。マントの切れっ端が残っていなければ、それが才槌頭のなれの果てであることはわからなかっただろう。才槌頭は、自らの死を代償に奇狼丸を道連れにしようとしたに違いない。奇狼丸は憎々しげに死骸を踏み躙って、歩を進める。歩くことさえ苦しそうだったが、それ以上に、勝ち戦に驕った自らの油断から、味方に多大の犠牲を出してしまったことに、深い後悔と怒りの念を抱いているようだ。

わたしは、昏睡状態にある覚を見やった。意識はないが、大きな怪我はしていないし、寝息も規則正しい。二、三分くらいなら、そばを離れてもだいじょうぶだろう。

「わたしにも、見せてくれる？」

奇狼丸は、振り返って、爆発以来初めてとなる、あの不気味な笑みを見せた。

「……特に、お勧めはしませんが」

「では、私もお供させてください」

奇狼丸に遠慮しながらも、スクィーラが、わたしたちに付き従った。うまく立ち回ったらしく、爆風にもほとんど怪我はなかったようだ。

竜穴のあった場所は、トンネル内を伝わった衝撃波のためか、広範囲にわたって陥没していた。その中で、最も深い裂け目の前に立ち、下を覗き込む。

わたしは、ぎょっとして息をのんだ。

「あれが、本当に女王様なの？」

わたしの問いに、奇狼丸はうなずいた。

「女王は、多くの仔を産み育てるため、必然的に身体は大きくなります。とはいえ、ここまで巨大なものは、国内ではあまり例がないと思いますが」

女王の遺体は、竜穴の最深部で掘り出されはしたものの、重すぎて地上に引き上げられなかったらしい。

体長は、どう見ても、中型の鯨くらいはある。その大部分は子宮で占められているらしかった。あまりにも巨大な身体との比較では、頭部は不釣り合いなほど小さい。

「ひっくり返してみましょう」

奇狼丸はそう言うと、穴の底で作業をしている兵士に向かって、早口で命令を下した。兵士たちは、直ちに長い身体に取り付くと、タイミングを合わせて女王の遺体を転がして、腹側を上に向けた。硬直した死に顔が見える。昨夜見た塩屋虻コロニーの女王に似ているが、ずっと醜く恐ろしかった。よほど強烈な憎悪を燃やしながら絶命したらしく、顎から十センチはありそうな白い牙を剝き出している。

だが、それ以上に衝撃的だったのは、その異様に長い腹部の外観だった。数え切れないほどの乳頭が見えるのは、たくさんの子供に一度に授乳する都合上、当然かもしれない。しかし、それとは別に、芋虫かミノシロを思わせる無数の歩行肢が見えるのは、目の錯覚だろうか。

「どうして、あんなに、たくさん肢があるの……？」

わたしの言葉に反応したのは、スクィーラだった。

「とんでもないこと……これは、とても恐ろしいことです。けっして、許されることではありません！」

奇狼丸が、皮肉な調子で言う。

「土蜘蛛の兵士には、やけに変異個体（ミュータント）が多いとは思っていましたが、よもや女王までとは、恐れ入りま

すな」

「変異個体……？　でも、どうやって？」

「女王がいけないのです！　変異個体を作り出すのは、常に女王です。この女王の身体を変異させたのも、産みの親である前の女王ですから！」

スクィーラが、叫ぶ。

「え？　それって……？」

奇狼丸が、怒りのこもった唸り声を上げて、スクィーラを睨みつけた。スクィーラは、竦み上がって口をつぐむ。

「申し訳ありませんが、これ以上は、ご説明できません」

奇狼丸が、わたしに向かって一礼する。

「どうして？　わたしは、神様なのよ！」

「わかっております。先ほどは、私の命を救っていただきました。ご恩は、死ぬまで忘れません。しかし、子供の神様には有害な知識があるため、お話ししてはならないことがあると、倫理委員会よりお達しをいただいておりますので」

どう頑張ってみても、それ以上の情報を引き出すことは無理そうだったので、わたしは諦めて、覚のそばに戻った。振り返ると、奇狼丸は、どうやら女王の遺体を解体する指示を出しているらしかった。何のためにそんなことをするのだろうと疑問に思ったが、答えが怖くて聞くことができない。それに、急に疲労が押し寄せてきて、今にも倒れそうだった。バケネズミのことは、もう、何もかもどうでもいい。勝手に好きなだけ殺し合えばいいんだと思う。

ほどなく、わたしたちは、大雀蜂コロニーの野営地に案内された。二匹のバケネズミに運ばれている間も、覚は、まったく目を覚ます気配がなかった。

ふかふかの藁の上に敷かれた褥の上に身を投げ出し、ほっと溜め息をつく。

思えば、昨日から、信じられないくらい様々な危険が、矢継ぎ早に襲いかかってきた。だけど、もう

だいじょうぶだという思いがこみ上げてきた。わたしたちは、家に帰れる。奇狼丸に、カヌーを隠してある場所まで護衛してもらえば、あとは自力で川を下ることができる。

わたしは、隣ですやすやと寝息を立てている覚を見やった。もう、心配ないわ。あなたが目を覚まさなくても、わたしが家に連れて帰るから。

瞬と真理亜、守のことは、ずっと心に重苦しくのしかかっていた。無事でいるとは信じたいが、わたしたち二人に降りかかった災難の連続を考えると、楽観はできない。もし、カヌーがそのまま残っているようなら、奇狼丸に頼んで捜索してもらわなくてはならない。

だが、それは、一眠りして、目覚めてからでいいだろう。すでに、土蜘蛛という脅威は取り除かれた。もし、三人がまだ無事でいるのなら、これから危険に晒される可能性は、ほとんどないはずだ。

そこまで考えると、硬く張り詰めていた神経が、ようやくほぐれていくのを感じた。

もう、限界だ。少しだけ、ほんの少しだけ眠らせて。

意識が、ゆっくりと暗転する。

眠りに落ちる直前、唐突に、覚の言葉が蘇った。

「なあ。昨日から、僕らは、生きるか死ぬかという場面が続いてきただろう？」

「うん」

「だけど、賭けてもいいよ。今現在が、たぶん、これまでで一番危険な状態なんだ」

危険って、いったい何のことだろう。覚の取り越し苦労ではないのだろうか。

ひどく気がかりではあったが、すでに、睡魔に抵抗する力は残っていなかった。

わたしは、半ば失神するようにして、深い眠りの中に引き込まれていった。

7

目覚めたときには、部屋の中は、すっかり暗くなっていた。

直前まで、ずっと夢を見ていた。みんなが一緒だった。お父さん。お母さん。覚。瞬。真理亜。守。はっきり思い出せないが、たぶん、ほかにもいたと思う。

懐かしい夕餉を囲んでいるうち、食卓は、いつのまにか撥球競技のフィールドに変わっていた。わたしと覚は撥球側で、呪力を使って押し子を動かし、球を運ぼうとしていた。妨害側の人物の姿は、薄暗い闇に溶け込んでおり、誰なのかわからない。無数の敵駒は、地面の下から湧き出るように現れ、こちらに向かって押し寄せて来る。わたしたちには、ゴールがどこにあるのかもわからず、ただひたすら逃げ回るしかなかった。

敵の駒は、無闇矢鱈に追いかけては来なかった。囲碁の戦術を思わせるような狡猾さで、着実に地歩を築きながら圧迫してくるのだ。わたしたちは、徐々に逃げ道を狭められていき、とうとう隅に追い詰められた。すでに、まわりは敵駒によって完全に包囲されている。

いよいよ二進（にっち）も三進（さっち）もいかなくなったと思ったとき、一番近くにいた敵の駒が、パーンという乾いた音を立てて弾け飛んだ。続いて、もう一つ。さらに、数体が連鎖反応のように破裂する。

間違いない。覚が、やっているのだ。明らかなルール違反。いや、それ以上の……。

粘土でできた敵駒は、気がつくとバケネズミの姿に変わっていた。恐慌を来したように逃げまどうが、なすすべもなく殺戮されていく。

わたしは、呆然として覚を見た。

彼の顔の上半分はちょうど影になっており、目の

表情を読み取ることはできなかった。だが、その口元には、うっすらと笑みが浮かんでいるようだった。

目覚めてからも、しばらくの間、心臓がどきどきしていた。

それから、自分がどこにいるのかを思い出した。たちまち現実世界の緊張が押し寄せてきて、不気味な夢の残滓は一掃される。いったい、どれくらいの時間眠っていたのだろう。覚の勘が正しければ、わたしたちは、まだ、危険の真っ只中にいるのだ。

耳を澄ませてみたが、覚の寝息以外、何の音も聞こえない。

それから、枕元に何かが置いてあるのに気がついた。木製の盆の上に、椀が二つ載っているようだ。持ち上げて、中を透かし見たが、正体はわからない。臭いを嗅いでみると、うっすらと、味噌のような匂いがした。とたんに、ひどい空腹を感じて、現金にも腹が鳴る。考えてみれば、昨日の昼から何も食べていないのだ。

箸はなく、椀には竹を削った粗末なレンゲのようなものが添えられている。わたしは、一瞬躊躇したが、レンゲを取って椀の中身を口に運んだ。何が入っているかわからないと思い、最初の一口は慎重に味見する。ひどく味が薄くて、ほとんど具らしきものが入っていない雑炊だったが、気がつくとすごい勢いで椀の中身を掻き込んでいた。

椀は、あっという間に空になった。

わたしは、ひもじく、さもしい思いで、もう一つの椀を見た。これは覚の分だが、もし、このまま眠り続けるのであれば、今晩、彼には必要ないかもしれない。

もちろん、黙って彼の食事を横取りするなどということは、考えられなかったが、中途半端に胃に食物を入れたことで、かえって、耐えがたいまでに空腹を刺激してしまったようだ。

わたしは、覚を起こすことにした。せっかく眠っているのだから、そっとしておいた方がいいのはわかっていた。正直に言えば、彼を揺り起こして、食事があると告げれば、要らないから代わりに食べてくれという答えが返ってくるのを期待していたのだ。

肩を揺すっても、覚はなかなか起きなかった。無理もないだろう。彼が一匹の風船犬の爆発を止め、もう一匹を穴に押し込んだときには、すでに脳は疲労のピークに達していて、本来ならとても呪力を使えるような状態ではなかったはずなのだ。覚が最後の力を振り絞らなければ、間違いなく、あの場にいた全員が爆死していたことだろう。

わたしは、急に恥ずかしくなって、覚を揺する手を止めた。

それから、今度は心配になり始めた。肉体的、精神的な限界を超えて呪力を使ったことで、覚の脳にダメージが残ったという可能性はないだろうか。しかも、離塵師に呪力を凍結され、わたしの出鱈目な催眠術によって無理やり呪力を取り戻させたことの影響もあるかもしれない。

覚が、低い呻き声を上げた。はっきりとは見えないが、苦しげに眉根を寄せているような感じだった。

わたしは、彼に顔を近づけて、そっとキスをした。それから、彼の顔を見て微笑んだ。黒目のところが、うっすらと光っている。王子様のキスでなくても、目覚める効果はあるらしい。

「早季……どのくらいたった？」

覚は、かすれてはいるが、しっかりした声で訊ねた。

「わかんない。もう、外は真っ暗みたいだけど」

覚は、ゆっくりと身を起こした。

「何か、食べる物があるんだろう？」

わたしは、残った椀を覚に手渡した。

「どうしてわかったの？」

覚は、黙って、わたしの唇に人差し指で触れた。

どうやら、王子様を目覚めさせたのは、王女様の愛ではなく、粗末な雑炊の残り香だったようだ。覚もかなり空腹だったらしく、わたし以上のスピードで椀の中身を平らげる。椀の底まで舐めそうな勢いだったが、さすがにわたしの目を気にしたようだった。

「ねえ、わたしたちって、まだ、危険の真っ只中にいると思うの？」

一番訊きたかった質問をぶつけてみると、覚は、あっさり「うん」と答えた。

「でも、どんな危険？　だって、土蜘蛛は、もう全滅したんだし……」

覚は、また、わたしの唇に人差し指を当てた。もちろん、さっきとは意味合いが違っている。

「部屋の外。見張りはいない？」

正直、そんな可能性は、考えてもいなかった。わたしたちが正体なく眠りこけていたのは、大雀蜂コロニーが夜営するために作ったらしい掘っ立て小屋の中だった。地面に穴を掘って竹で枠組みを立て、篠で屋根を葺く簡便な作りである。出入り口は一ヵ所しかなく、筵のようなものが垂れ下がっている。

わたしは、息を殺して藁の上を這っていき、筵の間から外の様子を窺った。いた。鎧を着たバケネズミが二匹、立ち番をしている。わたしは、音を立てないように、元の場所に戻った。

「いるわ」

報告すると、覚は、わたしの肩を抱き寄せて、耳元に口を近づけた。

「下級の兵士には、難しい日本語はわからないと思うけど、念のため、こうやって話そう」

耳朶に吐息がかかって、くすぐったかった。お返しに、覚の耳に口を付けるように囁いてやる。

「でも、どうして、そこまで警戒するの？　だって、大雀蜂コロニーは……」

眠りにつく前、同じ質問をしたことを思い出す。

「たしかに、人間には忠実だよ」

覚は、ひそひそ声で言う。

「でも、それは、僕らに忠実だっていうわけじゃない。奇狼丸たちが無条件で従うのは、大人たちの言葉だろう？」

「だから？」

「最終的に、一番優先されるのは、倫理委員会の意思だよ」

覚は、そこで言葉を切った。

「まさか、倫理委員会が、わたしたちを、どうにかするって言うの？」

わたしの肩をつかむ手に、力が入った。

「僕たちは、ミノシロモドキに出会って、知ってはならないことを知ってしまった」

「そんな……だからって！」

「しっ。声が大きい」

覚は、入り口の方を気にして、しばらくの間、無言だった。

「ミノシロモドキが言ったことを、真実だと仮定してみろよ。想像するだけでもおぞましいけど、もし人が呪力を使って人を攻撃するなんてことがありうるなら、僕らの社会は、一瞬にして崩壊してしまう。それを防ぐためだったら、どんな恐ろしいことでもやるはずじゃないか？」

「でも、だからといって、わたしたちを？」

「問題を起こす可能性のある児童は、事前に抽出するとか、何とか言ってたじゃないか。つまり、処分するんだよ」

「処分って……まさか。馬鹿なこと言わないで。そんなこと、あるわけないじゃない！」

「思いだしてみろよ。和貴園でも、全人学級でも、毎年必ず、何人かいなくなった生徒がいたじゃないか。どう考えたって、おかしいよ。処分されたんじゃなければ、あいつら、いったい、どこへ行ったんだよ？」

わたしは、文字通り、総毛立つのを感じた。ミノ

シロモドキの話を聞いたときは恐ろしかったが、まだ半信半疑だったし、そのまま自分に引き寄せて考えることはできなかった。昨夜来、何度も死線を越えるような体験をしてきたが、これほどまでに恐怖を感じたことはなかった。

「だけど……だけど、わたしたちがミノシロモドキから話を聞いたことは、誰も知らないはずだわ」

唯一の生き証人だった離塵師は、風船犬の爆発によって死んでしまったからだ。

「状況証拠がある」

覚は、ぞっとするほど冷たい声音で言い放った。

「僕らは、あの坊さんに呪力を凍結されてるじゃないか。よっぽど重大な規則違反を犯さなければ、そんなことをされるはずがないんだ」

「……じゃあ、わたしたち、もう助からないっていうの？」

もし、町がわたしたちを排除すると決めたら、それはつまり、わたしたちに帰る場所はないということだ。涙が溢れ出そうになるのを感じる。

「いや、まだ、望みはあるよ。町に帰りさえすれば、申し開きもできるかもしれないし、みんなの両親だって、何とかして僕たちを助けてくれるだろう。特に、早季のお母さんは、図書館の司書じゃないか」

「そ、それはそうだけど」

頭が、混乱してきた。

「じゃあ、覚は、いったい何を心配してるの？」

まだわからないのかというように、覚は、溜め息をついた。

「奇狼丸は、土蜘蛛を殲滅したことと併せて、僕らのことも町に報告してるはずだ。もし、早季が呪力を使えない状態だということを知れば、何が起きたのかは想像が付くだろう。だとすれば、ここで僕らを始末するように、奇狼丸に指令が下るかもしれない」

いくら何でも、考えすぎじゃないかという気がし

た。

「始末するなんて……そんな。何があったのか、確証もないのに？」

「僕らが町に帰ってからじゃ、遅いんだ」

覚の声が震えた。

「悪い知識は、僕らが誰かと一言話をしただけで、あっという間に広まってしまう」

「……でも！」

「それに、もしミノシロモドキの言うとおりで、すべての人間が『愧死機構』というものを備えてるとしたら、町の人たちは、誰一人、僕らを殺すことはできないはずじゃないか。他人を殺そうとすれば、自分の心臓が止まっちゃうんだから。だとすると、危険な子供の排除は、通常、八丁標の外で行われてるはずだ。……僕の想像では、バケネズミを使って」

わたしは、絶句した。本当に、そんな恐ろしいことが行われているとしたら。

背筋に、冷たいものが走った。祝霊が訪れた後の通過儀礼（イニシエーション）が、八丁標の外にある寺で行われているのも、もしかしたら、そのためではないのか。

「奇狼丸は、報告には伝書鳩を使ったと思う。それが、一番早いからね。伝書鳩は、早ければ日が落ちる前に町に着いている可能性がある。それから、倫理委員会が内容を検討するなら、こちらへの指令は、明日の朝一番になるはずだ」

「じゃあ、すぐに逃げなきゃ！」

「ああ。追っ手がかかるとしても、明るくなってからだ。その前に、カヌーを隠してあるところまで辿り着ければ、何とか逃げ切れるかもしれない」

最悪の状況に、さらに追い打ちをかける事実が判明したのは、その直後だった。

覚は、短い睡眠を取ることによって、思考能力こそ回復していたものの、元通り呪力を使える状態には程遠かったのだ。対象に意識を集中しようとした

だけで激しい頭痛に見舞われるため、事実上、呪力を凍結されていたときの状態に逆戻りしたようなものだった。

それでは、小屋の外にいる二匹の兵士を、どうすればいいのか。いきなり難題に直面したかに思えたが、冷静に考えてみれば、土蜘蛛に監禁されていたときとは、状況がまったく違う。

わたしたちは、何食わぬ顔で小屋を出た。わたしたちを護衛するために配置されていた二匹の兵士は、深々と敬礼して後を見送った。

「ゆっくり行こう。あわてたようなそぶりは禁物だよ」

覚が、押し殺した声で言う。

「何となく、そのあたりを見て回ってるか、食後の散歩でもしてるように見せるんだ」

「腹ごなしが必要なほどのご馳走じゃなかったけど」

遠征軍の夜営地には、ざっと見ただけで、二、三十の小屋が立ち並んでいた。もちろん、すべての兵士を収容するのは不可能だろうから、大部分の兵士は、地面に掘った穴の中で夜を過ごすのだろう。小屋の間の道には篝火が焚かれ、大きな蛾が何匹も、火の粉の周りを輪舞していた。

土蜘蛛との戦が終わった直後だけに、歩哨をしている兵士たちの間にも弛緩した空気が流れていた。わたしたちの姿を見ても、黙礼して道を譲るだけであり、とりたてて変わった動きは見られない。

この分なら、兵士たちの目が途切れた隙に、夜の闇にまぎれて姿を消すのも難しくはないだろう。そう思った矢先だった。背後から響いた素っ頓狂な声に、わたしたちは、立ち竦んだ。

「神様！　どちらへ行かれるのですか？」

スクィーラの声だった。わたしたちは、ゆっくりと振り返った。

「お目覚めになったのですね。お食事は、もう、召し上がりましたか？」

「うん。食べたよ」

覚が、ぎこちない笑顔で言った。

「なかなか、うまかったな」

「そうですか？　私の食事とは、全然違うものだったのでしょうね。何しろ、こちらは、薄い味噌味の雑炊が一杯だけでしたから。大雀蜂の連中は、賓客をもてなすという経験に乏しいようです。参考までにお訊きしたいのですが、神様が召し上がったのは、どんなお料理だったのでしょうか？」

そんなこと、どうだっていいでしょう。どうして、そんな余計なことを訊きたがるの。わたしは、スクィーラに対して、ひどい苛立ちを覚えた。

「そんなことより……あなたは、何してるの？」

「はい。実は、さっきまで、仕事をさせられておりました。けっして文句を言うわけではありませんが。大雀蜂軍は、我が塩屋虻コロニーを救ってくれたのですし、奇狼丸将軍も、あの爆発で思わぬ怪我をされて、報告書を書くのはお辛そうでしたから。とはいえ、これだけの大軍勢でありながら、まともな日本語を読み書きできるのが、奇狼丸将軍お一人というのは、何ともしまらない話で」

「報告書って？」

覚が、鋭い声で遮った。

「はあ。土蜘蛛討伐に関して、簡単な顛末をしたためまして、神栖66町の方へ、お送りさせていただきました」

それに対し、わたしたちが同時に質問を発しようとしたので、スクィーラは、きょとんとした顔をした。

「早季。先に言えよ」

「あ、うん。顛末って、どんなことを書いたの？」

「もちろん、この戦の経緯です。我が塩屋虻コロニーの精鋭が、敵の非道な毒ガス攻撃といかに戦い、援軍が来るまで……」

「わたしたちのことも、書いたの？」

「は？」

スクィーラの顔に、不審の色が浮かんだ。

「違うのよ。ほら、変なこと書かれてたら、わたしたち、町に帰ってから先生に怒られるかもしれないから」

「それは、だいじょうぶですよ。私が、大恩あるお二人の不名誉になりかねないことを、書くはずがないではありませんか」

「でも、何かは書いたんでしょう？」

「ええ、まあ。道に迷われて、偶然、我が塩屋虻コロニーにおいでになったことと、その後、土蜘蛛の奇襲に際しては、神様のご助力によって、無事、撃退なったことなどを」

「それ以外のことは、書いてないのね？」

わたしは、ほっとして、訊ねた。

「もちろんです。ただ……」

「ただ、何？」

「お二人のご体調がやや勝れないように存じましたので、お迎えが必要ではと考えまして、老婆心ながら要請させていただきました」

「体調が悪いって？」

「はあ、今回の戦において、呪力をお使いになられたのは、もっぱら男神様だけのようにお見受けいたしました。男神様は、さぞかしお疲れであろうと思いましたし、おそらく、女神様は、ご病気なのではないかと拝察しまして」

このお節介ネズミめ。絶望と腹立ちで視界が暗くなった。わたしは、助けを求めるように、覚の方を振り仰いだ。

「……スクィーラ。さっきまで、仕事してたって言ったよね？」

覚は、なぜか、関連のわからない質問をする。

「はい。つい先ほど、終わったところです」

「じゃあ、報告書は、どうやって送ったの？　だって、もう、すっかり暗くなってるから、伝書鳩じゃ送れないだろう？」

「はあ。大雀蜂コロニーでは、緊急の連絡用に、昼

間は鳩を使うのですが、夜間は蝙蝠（コウモリ）を飛ばすようなのです」

　わたしたちは、ぎょっとして顔を見合わせた。通信にコウモリを使っているのなら、町からの指令も、夜が明ける前に届く可能性があるではないか。

「……ところが、最近、協定に違反し、鷹を使って伝書鳩を襲わせるコロニーが出てきております。そのため、むしろ、コウモリの方が安全と言えるのですが、私が聞き及んだところでは、すでに、あるコロニーでは、コウモリを捕らえるために木菟（ミミズク）を訓練しているようで……」

　スクィーラの饒舌は、放っておけば一晩中続きそうだった。

「ねえ、スクィーラ」

　わたしは、できるだけ、何気ない口調で話そうと努めた。

「わたしたち、ちょっと、歩きたいの。そのあたりを一回りしてくるわ」

「どちらへ行かれるのですか？」

　スクィーラは、驚いた様子だった。

「日が落ちてから、もう三時間はたっています。あまり遠くへ行かれるのは、危険です」

　日没後三時間ということは、現在の時刻は、午後十時くらいだろうか。

「だいじょうぶだよ。だって、もう土蜘蛛の残党だっていないだろう？」

　覚の、いかにものんびりとした話し方は、わたしよりずっと自然だった。

「しかし、万一のことでもあれば、私どもは、一切申し開きができないことになります。すぐに護衛の者を付けさせますので……」

「いらない。僕らは、気分転換に二人っきりで歩きたいんだ。いいな？　すぐ戻ってくるから。それから、誰にも、余計なことは言うなよ」

　覚は、そう言い捨てると、さっさと、わたしの手を引いて歩き出した。しばらく行ってからそっと振

り返ると、スクィーラは、さっきと同じ場所に佇んで、わたしたちを見送っていた。

「スクィーラに、変に思われなかったかな?」

わたしは、覚の耳元に囁いた。

「多少怪しまれてたって、しょうがない。とにかく、今は、逃げるしかないだろう?」

わたしたちは、一定の歩調を保ちながら、ゆっくりと夜営地を離れた。夜空を眺めているような格好で、背後を窺う。誰もこちらを見ていないと確信できたとき、すばやく木の陰に隠れた。それから、姿勢を低くして、野原を突っ切り木立の中に入った。

「どっちへ行けばいいか、わかる?」

ナップザックには磁石が入っていたはずだが、命からがら逃げ回っているうち、どこかへ行ってしまった。

「うん。だいたいはね」

覚は、梢の上にかかっている橙色の月を見上げた。

「ほとんど満月ということは、月は東の空に出て、真夜中に南天を通り、明け方西に沈むはずだ。今が午後十時だとすると……」

覚が、うろ覚えの知識をひっくり返しつつぶつぶつ言っている様子は、はなはだ心許なかったが、天文学の素養に乏しく、かなりの方向音痴であるわたしは、彼の判断を信じるしかなかった。

わたしたちは、野山を越え、ひたすら東を目指した。昨晩来、かなり複雑な経路を辿って移動してきたので、霞ケ浦の岸辺から直線距離でどのくらい離れているのかも定かではなくなってしまった。だが、思い返してみると、清浄寺を目指して離塵師に連行されてきたときは、とてつもなく足取りが鈍かったはずだし、その後も、何となくだが、ジグザグに動いていたような印象がある。なぜか、まっすぐ東に向かって歩けば、夜が明けるまでにカヌーの隠し場所に着けるという、確信めいたものがあった。

三時間ほど道なき道を早足で歩き続けると、足の

裏が痛くなり、しかもスタミナ切れで頭がふらふらし始めた。空腹はますます強まっていたが、それ以上に喉の渇きは耐え難いレベルになりつつあった。とはいえ、水筒一つ用意してきてないので、我慢するよりない。とりあえず休憩を取ることにして、わたしたちは、できるだけ夜露に濡れていない場所を選んで草の上に腰を下ろした。

「もう、だいぶ来たのかな？」

「うん。たぶん、半分以上はね」

覚は、力強く請け合った。さほど根拠があるとは思えなかったが、追及しても、あまりいいことがあるとは思えなかったので、素直に信じておくことにした。

瞬と真理亜、守は、今ごろどうしているだろう。

そう思って、何気なく覚の背後を見たとき、ぎくりとした。

「どうした？」

「ううん。何でもない。……それが、なんとなく風船犬みたいに見えたから」

わたしが指さした朽ち木の残骸を見て、覚は、微笑した。

「たしかに、ちょっとだけ似てるな」

「怖がりだって、思わないでね」

「思わないよ。もっとも、こんなところに、風船犬がいるわけないけど」

「どうして？」

「早季だって、風船犬の正体は気がついてるだろう？」

そう言われて、まだ見当もつかないとは言いづらかった。

「まあ、おぼろげには……」

「おぼろげ？」

覚は、笑った。

「自爆する生き物なんて、自然界には一種類しか存在しないよ。ほかに考えられるのは、バケネズミが家畜として品種改良したってことくらいだけど」

「そういう可能性はないの？」

「まず、ありえないな。呪力を授かる以前の人間は、長い年月をかけて家畜を改良してきたらしいけど、その方法は、都合のいい性質を持った個体を掛け合わせるだけだからね。気性を温和にしたり、乳の出をよくするとか肉質を変えるなんてことはできるだろうけど、爆発する家畜なんて、とても作れるとは思えないよ」

いつもなら、覚の勝ち誇った態度にかちんと来て、何らかの反論を試みるところだが、空腹で血糖値が下がっているせいか、頭がまったく働かない。わたしは、あっさり白旗を揚げた。

「じゃあ、風船犬って何なの？」

「昔の生物学の本に、ちょうど風船犬みたく自爆する生き物の話が載ってたんだ。何だと思う？」

「さあ……」

わたしは、急速にその話題に対する関心を失いつつあった。もう、別に何だっていい。虎河豚（トラフグ）でも、殿様蛙（トノサマガエル）でも。それより、別れた三人のことが心配でならなかった。

「蟻だよ」

覚は、得々と説明を始める。

「東南アジアのマレーシアに棲んでる蟻の一種は、敵が近づくと自ら破裂して、空気中に揮発性の成分を撒き散らすんだって。敵が近づいたことを、巣に伝えるためらしいんだけど」

空腹を通り越して、目眩がする。このままここに座り込んでいたら、もう二度と立ち上がれないかもしれない。

「つまり、こういうことなんだよ。普通の生き物が、敵を撃退するために、いちいち自爆してたら、子孫を残せなくて絶滅してしまうだろう？　だけど、蟻のような社会性生物にとっては話が違う。自分は元々生殖能力がないんだから、巣と女王を守るためであれば、我が身を犠牲にしても引き合う。そう考えると、風船犬は、土蜘蛛の変異個体以外にあ

りえないんだ……」

覚は、心配も疲労も空腹も、まったく感じていないかのように喋り続けているが、もはや制止するのさえ面倒だった。ゆっくりと目を閉じたとき、わたしの耳は、かすかな物音を捉えた。

「……だとすると、土蜘蛛の女王は、胎内で何種類もの変異個体、叢葉兵やカエル兵みたいなヤツを自在に作り出す能力があったとしか思えない。その中で、風船犬が、まったく違う生き物みたいに見えたのは、たぶん、頭蓋骨の容積を小さくして知能を犬並みに抑えたからだろう。つまり、自爆という使命を果たすためには、無条件の忠誠心と、きっと、あまり頭がよくないことが必要で……」

また、聞こえた。背後から。枯れ枝と草を踏む音だ。誰かが……何かがいる。

わたしが、人差し指を唇の前に当てると、覚は、はっとしたように口をつぐんだ。

うしろ。おとがする。わたしは、声を出さずに唇で言葉を模った。

覚は、ちょっと逡巡したが、意を決したように立ち上がると、大声で怒鳴った。

「そこにいるのは、誰だ！」

ほとんどやけくそのようだったが、ほかにどうしようもなかった。今のわたしたちには、何の武器もない。逃げ出したところで、すぐに追いつかれるだろう。相手が誰だろうと、まだ呪力を使えるかのようなはったりをかけるしかないのだ。

「神様。いったい、どこまで行かれるのですか？」

茂みの陰から現れたのは、スクィーラだった。わたしたちは、虚を衝かれて絶句する。まさか、こんなところまで跡をつけてくるとは、思いもしなかったのだ。

「土蜘蛛の残党がいなくなっても、こんな真夜中に野山を歩くのは危険です」

「どうして？　なんで、こんなところまでついてきたの？」

　わたしの問いかけに対して、スクィーラは、首を捻るようにかしげた。人間であれば、肩をすくめる仕草にあたるのかもしれない。

「神様方に万一のことでもあれば、私どもは、一切申し開きができないことになりますので」

「わたしたちが、勝手にいなくなったんだから、いいじゃない」

「よくはないのです。その場合、間違いなく、私どものコロニーは取り潰されるでしょう。大雀蜂コロニーとて、無事では済まないはずです。過去の例からすると、奇狼丸将軍も、切腹しなければならないはずです」

「せっぷくって何？」

「大刀で自らの腹を切って、命を絶つのです。これは、通常、最も重いお詫びの印として行われます」

　これには、ただ唖然とするしかなかった。わたしたちの辞書には、そんな奇怪な言葉は載っていなかったし、ましてや、遠い過去には人間も同じことをしていたなどというのは、想像の外でしかなかった。

「そうか。まさか、そこまで迷惑をかけるとは考えてなかった」

　覚が、神妙な声で言った。

「でも、それは、本当に万一の場合だろう？　つまり、僕たちが、事故に遭って死んだりとか」

「そうです。しかし、その万一に備えるために、私は、どうしても、お二方を見守らせていただかねばなりませんでした」

　本当だろうか。毛を毟ったネズミのようなスクィーラの醜い姿を見ながら、考える。

「他にも、誰かついてきてるの？」

「いいえ。私のみです」

「それは、ちょっと変だな。僕らを守るためだったら、誰か兵士を連れてきた方がよかったんじゃないか？」

「それは……とっさのことで、その暇（いとま）がありません

でした」

　覚の質問で、わたしたち二人が同じ疑いを抱いていたことがわかった。スクィーラは、奇狼丸の命令で、わたしたちを監視していたのではないか。あえて単独行動を取ったのも、手柄を独り占めするためだったとすれば、一応の筋は通る。ほんの二日前のわたしたちであれば、そこまで疑心暗鬼に陥ることもなかっただろうが。

「それより、喉がお渇きになってるのではありませんか?」

　スクィーラは、腰に下げていた瓢簞をわたしたちに差し出した。中でちゃぷちゃぷいっているのは、水らしい。わたしたちは、目を見合わせたが、喉を潤したいという誘惑には勝てず、受け取って栓を抜いた。一口、二口、生ぬるい水を喉に流し込む。すると、たちまち全身の血が巡り始め、生き返ったような気分になった。わたしが、瓢簞を渡すと、覚も夢中で水を飲む。

「こんなものを用意してる暇はあったのね」

　スクィーラに対する感謝の気持ちを表したいと思ったのに、口を突いて出てきた言葉はあてこすりのようになってしまった。

「急いで跡を追いながら、手近にいた兵士から徴発しました。瓢簞一個なら問題はありませんが、神様をお守りするためとはいえ、別のコロニーの兵士を連れて来るとなると、もろもろ厄介なことも生じてきますので」

　わたしは、ふと、手渡されたとき、瓢簞の水がほとんど満杯だったことに気がついた。道中、スクィーラも、さぞかし喉が渇いたに違いないだろうに。

「ありがとう。あなたも、飲んで」

　覚から戻ってきた瓢簞を、スクィーラに返してやる。

「いただきます」

　スクィーラは、自分が持ってきた瓢簞を押し頂くようにして、遠慮がちに一口飲んだ。その短い間

に、わたしたちは、すばやく目で合図を送り合い、ほとんど以心伝心で意思を疎通した。

「スクィーラ。あなたの助けが必要なの」

　わたしが言うと、バケネズミは、まっすぐ顔を上げた。

「もちろん、何でもいたします。どうか、何なりとおっしゃってください」

「僕たちは、霞ケ浦の西岸に行きたいんだ。一番早く着ける道を案内してくれ」

「……しかし、なぜ、そんなにお急ぎなのですか？明日の朝までお待ちいただけたら、大雀蜂コロニーの兵士が警護して、安全にお連れできるはずですが」

「理由は、明日まで待ってたら、僕らの命が危ないからだよ」

　覚は、あえて正面からぶつかっていった。スクィーラは、塩屋虻コロニーを再興するという口約束を餌に、奇狼丸に取り込まれているかもしれない。だが、今は、あえて手の内を明かしても、こちらの味方に付けるしか活路はないのだ。

「それは、いったい、どういうことでしょうか？」

「奇狼丸が、僕らを殺そうとする可能性があるんだ」

「そんなことは、絶対にありえません！　私どもβ★ë◎Å……バケネズミの、それも、最大コロニーの将軍が、神様を害しようなどと考えるはずが！」

「わけは言えないけど、信じて」

　わたしが、スクィーラの手を取ると、びくりとしたが、それでも手を引っ込めようとはしなかった。

「そうじゃなかったら、こんな真夜中に、逃げ出したりしないわ」

　スクィーラは、しばらく考え込んでから、重々しくうなずいた。

「わかりました。近道をご案内しましょう。ただし、追っ手がかかるとしたら、同じ道を来る可能性があります。急がねばなりません」

谷底の川に沿って歩くのは、険しい山道を行くより、足下がずっと楽だった。おかげで行程はかなり捗ったが、反面、精神的な重圧は比較にならないほど大きくなった。

　前方で何に出くわすかわからない状況では、見通しのきかない山道は、一歩進むのにも勇気を奮い起こさねばならない。しかし、追われる身にとって、背後が開けていて左右に逃げ場のない谷川の地形がこれほどまでに恐怖をかき立てるものだとは、想像したこともなかった。

　谷の底までは、月明かりさえほとんど射し込まない。川の水は墨汁を流したように黒く、ただ轟々と流れる響きが周囲を圧していた。水音は、いつしか意識をいっぱいに占拠し、耳殻の外からやって来るのか、心の奥底から湧き上がってくるのかすら判然としなくなる。ともすれば、その音は奇怪に歪み、無数の船団に満載になったバケネズミたちの鬨の声や、もっと恐ろしい化け物の唸り声のようにも聞こえてきた。

　覚とわたしは、ほとんど一分おきに後ろを振り返り、何もいないことを確認しなくてはならなかった。だが、闇の彼方から途切れることなく流れ下ってくる川は、わたしたちの意識を現実に連れ戻してくれるどころか、逆に冥界へと誘うかのようだった。

「この川は、何ていう名前？」

　覚の声が、遠くに聞こえる。

「神様の付けられた名前は、存じません。私どもは、∀Ξ☆ξ∋……日本語に直すと、そうですね……『忘れ川』と呼んでおります」

「どうして、そんな名前なの？」

　わたしは、訊ねた。自分の声なのに、妙に嗄れていて、まるで他人が喋っているように聞こえる。

「はっきりとは、わかりません」

　スクィーラの声も、どこか地の底から響いてくる

ようだった。

「ただ、霞ケ浦に下るのなら、桜川など、もっと大きくて安全な川が他にありますから、ふだんは忘れられている川という意味ではないでしょうか」

「奇狼丸も、忘れてくれてるといいんだけど」

わたしは、軽口を叩こうとした。

「そう願いたいものですが、あれほどの名将が、この川のことを失念するとは、考えられません」

スクィーラの返答は、予想外に重苦しいものだった。

「忘れ川は浅瀬や岩が多いために、ふつうなら、真夜中に船で下ることはありえません。そのことも、この道を選んだ理由の一つです。しかし、奇狼丸将軍は、通常ならとても通れないような道を踏破することで、これまでに数多の戦いを制してきました。たとえば、軍隊蟻コロニーとの有名な合戦、『緑壁の逆落とし』が、その代表例です」

「軍隊蟻？　そんな名前のコロニーあったっけ？」

覚が、不審そうに言う。

「今は、もう存在していません。五年前、大雀蜂コロニーとの全面戦争に敗れて、消滅しました」

今のわたしたちにとって役に立ちそうな話ではないが、こうして話をしていることで、正気を保つ効用はありそうだった。

「軍隊蟻コロニーの総兵力は当時、一万八千を超え、同胞の中で最大の勢力を誇っておりました。数的な優位を生かして相手コロニーを包囲する持久戦が得意の戦法で、このときも大雀蜂コロニーの周囲に着実に拠点を築きつつありました。封じ込めが最終段階にさしかかると、軍隊蟻コロニーの将軍クィークルは、竜穴に女王の守備隊だけを残して、とうとう主力部隊に出動を命じました」

よほど戦いの歴史が好きで、日頃から史書に読み耽っていたに違いない。スクィーラは、よどみなく語った。

「軍隊蟻コロニーから大雀蜂コロニーの包囲網まで

は、数キロの距離があり、その間は、地上を移動しなければなりませんでしたが、何しろ、兵員が多かったために、出発の準備にもたつき、先頭の隊が道半ばまで来たとき、最後尾はまだコロニーを出たばかりでした。そのため、部隊の先頭で指揮をしていたクィークルは、山の麓で休息を取って、後発部隊が追いついてくるのを待つことにしました。数の上で劣勢な大雀蜂コロニーは穴に籠もって防戦するだろうと決め込んでいた上、背後は俗に緑壁と呼ばれていた断崖だったので、そちらから襲撃を受けることはないと高をくくっていたのです。これに対し、奇狼丸将軍率いる精鋭部隊は、ひそかに山に登って奇襲を企てました。目指す敵は、普通ならとても駆け下りることなど考えられぬ断崖絶壁の下にいます。しかし、奇狼丸将軍は、岩肌を這うヤモリを見て、後世まで語り伝えられる名言を吐きました。『ヤモリも四つ足、我らも四つ足、ヤモリが越す坂ならば、我らに越えられぬ道理はない』」

いくら何でも滅茶苦茶、というより、スクィーラの冗談としか思えなかったが、後に、バケネズミの戦争の歴史について記した本を読んで、それが事実だと知ったときは、しばし唖然としたものである。

「このように、奇狼丸将軍は神出鬼没で知られております。最初に神様からいただいた名前自体、奇道丸ないし詭道丸だったと言われているくらいですから」

スクィーラは、漢字の偏と旁を、ていねいに説明する。

「わかったわ。要するに、奇狼丸に追われたら最後、どんな要害険阻な地に逃げ込んでも安全じゃないってことね？」

わたしは、あえて冗談めかして訊ねた。

「はい。奇狼丸将軍が本気で追撃を決意したら、おそらく、逃れる術はないと思います」

しばらくの間、沈黙が続いた。

土蜘蛛を撃破した指揮ぶりを見ても、奇狼丸が恐

るべき戦術家であることはあきらかである。追いつかれてしまえば、チャンスはないとみるべきだろう。

すべては、奇狼丸が、いつ、わたしたちの追跡を開始するかにかかっていた。倫理委員会からの返書が夜のうちにコウモリによって届けられ、そこに、わたしたちを『処分』すべしという命令があったとしても、追っ手の出発まで、しばらく時間差がある。うまくいけば、その前に、わたしたちはカヌーに乗り込んでいるはずだ。問題は、返書が届く前に奇狼丸がわたしたちの逃走を知って、自らの判断で追ってきた場合である。

もしかすると、今この瞬間、すぐ後ろまで迫っている可能性もあるのだ。

わたしたちの足は、自然に速くなった。とはいっても、ほとんど視界がきかない中で、滑りやすい河原の石を踏みしだきながら歩くのだから、その速度には自ずから限界があったが。

三十分ほど汗だくになりながら進んでいると、突然、スクィーラが立ち止まった。

「どうしたの？」

スクィーラは、唇に手を当て、シーッというような音を立てた。この不思議なサインは、先史文明の文献を見ても、時代や地域を越えて使われてきたことがわかっている。だが、さらに種の壁すら超越しているというのは、驚きだった。

「聞こえますか？」

スクィーラは、小声で囁く。

わたしたちは、黙って耳を澄ませた。

聞こえた。鳥が鳴いている。こんな真夜中なのに、飛び回りながらしきりに囀っているのだ。

キョキョキョキョキョキョキョキョキョ……。

鳥というより巨大な虫の音を思わせるような、気味の悪い鳴き声だった。スクィーラの身振りに従い、わたしたちは、化石したように動かない。怪鳥は、谷川に沿って飛び回り、わたしたちの頭上を何

度か往復すると、いずこへともなく飛び去った。

　最初に声を発したのは、覚だった。

「何だ、ただの鳥じゃないか」

「こんな真夜中なのに？」

「たぶん、夜鷹（ヨタカ）だよ。フクロウなんかと同じで、夜になると飛び回るんだ」

　本当に、ただそれだけのことなのだろうか。

「でも、なんで、わざわざ、こんな谷底まで下りてくるの？」

　さすがに、ヨタカの習性にまでは詳しくないらしく、覚は、少し考え込んだ。

「ヨタカっていう名前は付いてるけど、鷹みたいな猛禽じゃなくて、たしか、虫を食べるんだよ。川で羽化する虫を狙ってるんじゃないかな」

　それまで沈黙を守っていたスクィーラが、咳払いをする。

「……今のは、ただの野生のヨタカかもしれません。しかし、私は、そうでない可能性の方が高いと思います」

「どういうこと？」

「奇狼丸将軍は、斥候や索敵に、しばしば鳥を用います。夜間には、夜目の利くヨタカを使うという話を聞いたことがあるのです」

　ぎょっとする。そう思ってみると、たしかに、今の飛び方は、わたしたちを偵察しているかのようだった。

「本当か、それ？　ちょっと信じがたいな」

　覚は、声に疑わしさを滲ませる。

「鳥が、どうやって、見つけたものを報告するんだよ？」

「私も、詳しくは存じません。しかし、ミツバチのような昆虫ですら、巣に帰ってから、仲間に蜜の在処（ありか）を教えられるということですから、訓練しだいでは、目指す相手がいたかどうかくらいは伝達できるのではないでしょうか」

　もし、スクィーラの推測が当たっているとする

と、奇狼丸は、ここからほど近い場所にいるのかもしれない。

　最前にもまして重苦しい沈黙の中、わたしたちは、先を急いだ。

　奇狼丸は、すでにわたしたちを発見し、音もなく追尾しているのかもしれない。すぐに攻撃してこないのは、まだ倫理委員会からの命令を受け取っていないためかもしれないし、覚の呪力が使えない状態であることを知らないため、慎重になっているのかもしれない。

　あるいは、ただ単に、最も攻撃に都合のいい場所にさしかかるのを、待っているだけなのかも……。考えれば考えるほど、姿が見えない敵の重圧は増すばかりだった。

　とはいえ、明けない夜がないように、どんな苦難にも終わりはある。さらに歩くうち、わたしたちが目指す東の空が、うっすらと明るくなってきた。

「夜明けだ……！」

　覚が、押し殺した叫びを上げる。

「もう少しで、たぶん、あそこを越えれば、霞ケ浦が見えてくるはずです」

　スクィーラが、二百メートルほど先の、川が大きく蛇行している場所を指し示した。

　それでは、あのヨタカは、やはり、野生だったのか。奇狼丸が背後に迫っているという幻影に、踊らされていたのかもしれない。

　そう思って、ほっとしかけた瞬間だった。

「あれ……何だ？」

　覚が、何かを見つけた。

　彼の視線の先を見て、わたしは、愕然として歩みを止めた。

　そこには、わたしたちを待ち受けるように川岸の砂の上に佇む、複数の影があった。

8

わたしたちは、一瞬、足を止めた。疑惑と恐怖が一気に沸き上がる。

影は三つ。向こうもまた、こちらを見ているようだ。

期待が、むくむくと頭をもたげる。確率から言えば、万に一つの儚い望みだろう。だが、焼けつくような願望、祈りにも似た思いは、恐怖よりも強く、わたしたちを突き動かした。

わたしと覚は、ほぼ同時に相手を見やり、うなずきあった。

そのまま、ゆっくりと歩を進める。どのみち、逃げ出すには接近しすぎていた。ここで逃げるというのは、呪力が使えないというこちらの弱みをさらけ出すのと同じだ。今は、たとえどんなに危険でも、相手の姿を見きわめなくてはならない。

そう自分に言い聞かせながら、一歩、また一歩と近づいていった。

黒い、薄ぼんやりとした影を見ながら、再び、逃げ出したい思いが再燃して膝が震える。わたしは、今、自分から破滅の顎の中へ飛び込もうとしているのではないのか。

いや、そんなはずはない。あれは、あの影は……きっと、わたしがよく知っている姿だ。そうに決まってる。懸命に、自分にそう言い聞かせた。だが、向こうは、わたしたちとは対照的に微動だにせず、どこまで近づいても、いっかな正体を見せない。

もう少しで見きわめられるかと思ったとき、進行方向にある山の稜線が金色に輝いて、眩いばかりの光が射し込んできた。

逆光というより、目潰しを喰らったようなもので、三つの影は、光の波に呑み込まれ、見えなくなってしまった。

わたしは、その場に立ち止まる。だが、そのとき

だった。

「早季！　覚！」

叫び声が聞こえた。すぐにわかる懐かしい声。瞬の声だ。覚が、一足先に飛び出す。

「瞬！　真理亜！　守！」

わたしも、夢中で走り出していた。何度も転びそうになりながら、光の中に飛び込む。

わたしたち五人は、夢中で抱き合っては肩をたたき合い、馬鹿みたいに笑い合いながら涙を流していた。この瞬間だけは、それまで乗り越えてきた苦しみも、前途に待ち受ける恐怖も、遠い宇宙の彼方へと吹っ飛んでいた。ただ、五人が、ようやく再会できた喜びと、全員が無事だったという奇跡に、ひたすら酔いしれていたのだ。

わたしは、このまま時が止まればいいのにと願った。

あの瞬間、時間が凍結されていれば、やがて五人が櫛の歯のように欠けていくことはなかったはずだった……。

「さあ、とにかく、カヌーのところへ急ごう！」

最初に我に返ったのは、瞬だった。

「話は、それから、ゆっくりすればいい」

わたしたちは、互いに山のような質問を浴びせかけ始めたところだったが、瞬の言葉で、すべてを、いったん胸の中にしまった。

視線をわたしの背後に移して、真理亜は、ぎょっとした表情になる。

「そこにいるの、何？」

わたしは、緊張で鳥肌が立った真理亜の腕を、そっとさすってやった。

「ああ、スクィーラっていうの。わたしたちを、ここまで案内してくれたのよ」

「初めまして。スクィーラと申します。塩屋虻コロニーの奏上役をしております」

スクィーラの流暢な言葉に、三人は驚いた表情を

見せた。

「塩屋虻コロニーは、兵士の大部分を失うほどの打撃を受けながら、土蜘蛛と戦ったんだ。土蜘蛛を破った、陰の立て役者なんだよ」

覚の説明に、みな、さらにびっくりしたようだった。

「土蜘蛛をやっつけたって？　本当？」

守は、目をまん丸にしている。

「うん。大雀蜂コロニーが援軍に来て、やつらを全滅させたんだ。だけど、その話も後にしよう。時間がない。今は、一秒でも早くカヌーのとこへ行かなきゃ」

「ちょ、ちょっと待って」

頭脳明晰な瞬も、さすがに、事情がよく呑み込めず、混乱したようだった。

「土蜘蛛が全滅したんなら、僕らも、あわてて逃げる必要はなくなったんじゃないのか？」

「それが、そうじゃないのよ。事情は、後で説明するから」

わたしは、みんなをせき立てて、強引に歩き出させた。

「でも、じゃあ、わたしたち、いったい何から逃げてるの？」

真理亜が、先頭を行くスクィーラに、ちらちらと視線を送りながら言う。

「大雀蜂コロニーだよ。奇狼丸っていう将軍から」

覚が、答えた。

「えっ？　だ、だけど、大雀蜂は、人間に忠実なコロニーだよね？」

守が、怪訝な表情で訊く。

「だからこそ、危険なんだよ」

言いかけて、覚は、ぐっと詰まった。スクィーラが聞いているところで、わたしたちがなぜ処分される可能性があるのかを、軽々しく話すわけにはいかない。

「詳しい説明は、後でするから。とにかく、僕らを

信じてくれ」

三人は、若干当惑した様子ではあったが、黙ってうなずいてくれた。わたしたちには、固い信頼で結ばれた仲間がいる。そのことを、これほど心強く感じたのは、初めてのことだった。

ほどなく、川が大きく右に曲がっている地点を越える。スクィーラが予告したとおり、急に視界が開けるようになった。もう少しで、谷は終わり、平地に出る。さらに一キロほど先には、朝日を受けてきらきらと輝く、霞ケ浦の湖面が覗いているではないか。

わたしたちは、勇躍したが、その矢先だった。先頭を歩いていたスクィーラが、ぴたりと立ち止まり、耳をそばだてるような動作をする。その理由は、すぐにわかった。

背後の谷間に、奇怪な鳥の鳴き声がこだましていた。

キョキョキョキョキョキョキョキョキョ……。

ヨタカだ。

このとき、わたしは、初めて確信した。これは、野鳥などではない。わたしたちを監視するために放たれた、奇狼丸の目なのだ。

「走れ！」

覚が、大声で叫んだ。

後知恵で批判するようなことはしたくないが、このときの覚の判断が正しかったかどうかは、疑問が残る。霞ケ浦までは、まだ走って逃げ切れる距離ではなかったし、葦の間に隠してあるカヌーを見つけて乗り込むには、さらに時間が必要だった。しかも、逃げ出すということは、追っ手に対して、わたしたちが有罪である（つまり追われる理由がある）こと、呪力が満足に使えない状態にあることまで、洗いざらい自白するに等しいのだ。

だが、いったん走り出してしまえば、もはや、冷静に議論する暇はない。わたしたちは、谷を抜け、野原を下り、息が切れるまで走り続けた。

「ちょっと、待って。もう、走れない！」

情けないことに、最初に音を上げたのは、わたしだった。もともと、長距離走は得意なたちではないし、昨日からの一連の出来事で、かなり体力が消耗していたのだ。五人と一匹は、荒い息をつきながら、その場に立ち止まった。

「もう、少しだよ。このあたりには、何となく見覚えがある。あそこの木立を抜けたら、霞ケ浦の岸辺に着くはずだ」

瞬が、二、三百メートルほど先にある雑木林を指さした。

「急ごう。走らなくてもいいから、歩き続けるんだ」

覚が、わたしのナップザックに手をかけて言う。まるで足手まといを見るような視線にかちんときて、わたしは、先頭に立って歩き始める。

「さっきのは、何？　鳥の鳴き声みたいだったけど」

真理亜が、後ろを振り返って訊ねる。

「ヨタカよ。大雀蜂コロニーで飼われてるの」

わたしの説明に、真理亜は、半信半疑の表情を浮かべた。

「本当です。ヨタカは夜目が利くので、夜間の偵察に使われているのです」

スクィーラの説明に、真理亜は、納得したようだった。親友のわたしより、こんな醜い生き物の言葉を信用するというのは、ちょっとひどいと思う。

「夜間っていうけど、もう、かなり明るくなってきてるよ」

守が、空を見渡しながら言った。すぐ足下では、朝露に濡れたツユクサの青い花も開きつつある。

「昼間は、ヨタカ以外の鳥を偵察に使ってるんだろう？」

覚が、スクィーラに訊く。雑木林からは、無数の鳥の囀りが聞こえ始めていた。

「はい。夜明けから日没までは、ヨタカよりずっと

智能の高いカラスを使うと聞いたことがあります」

その言葉が終わるか終わらないうちに、今度は、澄んだカラスの鳴き声が響いてきた。

「どこだ？」

覚が、ぎょっとしたように周囲を見回す。

「あそこ― あの木にとまってる」

わたしたちの中で一番目のいい真理亜が、ぱっと右手を指さした。百メートルほど先に、一本の枯れ木があり、その梢付近に、カラスらしい不吉な黒い影が見えた。

「本当か？ あのカラスが、僕らを監視してるって？」

瞬が、信じがたいといった調子でつぶやいた。たしかに、そう思って見れば、わたしたちを見張っているようにも見えるが。

「とにかく、急ごう。カラスに見られたって、奇狼丸自身が来る前にカヌーに乗れば、だいじょうぶだ」

覚が、早足になって、わたしに並んだ。

川に沿って、コナラや栗が入り交じった林を抜けると、かすかに、ちゃぷちゃぷという水音が聞こえてきた。陸地が暖まったせいか風向きが変わり、東から吹き寄せる微風には、湖に特有の臭いも感じられる。わたしたちは、矢も楯もたまらなくなって、走り出した。

とうとう、わたしたちは、霞ケ浦の湖岸に到達した。広漠とした淡水の海を渡る風に、岸辺一面に広がる葦の群落がそよいでいる。

「こっちだ！」

瞬が、カヌーを隠した方を指して、再び駆け出す。わたしたちも、すぐ後を追ったが、そのとき、すぐ上空を大きな影が横切った。

見上げると、それは、一羽のカラスだった。さっき見た個体だろうか。四、五メートルほどの低空を悠然と飛翔し、松の枝にとまった。わたしたちの方を見ながら、まるで挑発しているかのように鳴く。

どうやら、まだ人間の恐ろしさを知らないらしい。

呪力を使えないのが、何とも残念だった。よっぽど石でも投げてやろうかと思ったが、今は、それどころではない。わたしたちは、くるぶしまで泥に埋まりながら葦の間に分け入って、カヌーを探した。ない。たしか、このあたりだと思ったのに。

捜索を始めてから五分ほどが無為に過ぎると、焦りを感じるようになった。カラスは、いっこうに飛び立たとうとはせず、わたしたちを見下ろしながら、しきりに耳障りな声で鳴いている。

「おかしいな。まさか、流されたはずはないし……」

頼みの瞬の表情からも、徐々に自信が失われていくようだった。そんなとき、救いは、見当外れとも思われる場所を探していた、思いがけない人物によってもたらされた。

「あったぞ！」

かつて、守の声が、これほど頼もしく聞こえたことがあっただろうか。わたしたちは、泥に足を取られながら、嬉々として声のした方へ駆け寄る。

引き綱で繋がれた三艘のカヌーは、風に押されたらしく、葦の間をかなり移動していた。泥の中に深く打ち込んでおいた四つ爪の錨（アンカー）がなければ、本当に、どこか遠くへ流されてしまったかもしれない。

さっそく、錨を上げて乗り込んだ。行きと同じく、わたしと覚は、サクマラマスⅡ号に。そして、真理亜と守がハクレンⅣ号、瞬がカムルチーⅦ号である。

「それでは、私はここで失礼いたします」

スクィーラは、岸辺に立って、わたしたちを見送る。

「ありがとう。ここまで来られたのは、あなたのおかげよ」

わたしは、心からの感謝を込めていった。少なくとも、この時点では、わたしの気持ちは本物だった。

「どうか、道中、ご無事で」

恭（うやうや）しく一揖（いちゆう）するスクィーラを見ながら、カヌーは、徐々に岸を離れていく。

「さあ、行くぞ」

覚の声に、わたしは、前に向き直ってパドルを水に浸けた。

来たときと決定的に違うのは、誰一人呪力を使えない今となっては、手漕ぎで霞ヶ浦を縦断しなければならないという点である。

わたしたちは、ぎこちなくパドルを操って、巨大な湖に漕ぎ出した。利根川に入れば、後は流れのままに下っていけばいい。そこまでは、最も原始的な方法、自分たちの筋力に頼るしかなかった。

だが、最初のうちに頑張りすぎたのが、よくなかったのかもしれない。わたしたちは、ものの数キロも行かないうちにバテてしまった。両腕の筋肉が痛くなり、皮が剝けた掌はひりひりする。まだ午前中のはずなのに、容赦なく照りつけてくる日差しは、じりじりと皮膚を灼いた。五分おきくらいに頭からかぶる水も、あっという間に蒸発してしまう。

「おーい。ちょっと、休憩しよう」

心配そうにわたしたちを振り返って見ていた瞬が、叫ぶ。一人で漕いでいるというのに、瞬のカヌーは、ほかの二艘よりずっと速かった。

「まだ、だいじょうぶだよ！」

覚が、怒鳴り返す。

「先は長いんだ。余裕があるうちに、少し休憩した方がいい」

気持ちは逸（はや）っているが、昨日から疲労が蓄積していることは、否定しがたい事実だった。わたしたちは、瞬の意見を受け入れ、小休止することにする。

さいわい、絶妙のタイミングで太陽に雲がかかったおかげで、カヌーの上に寝そべって、のんびり青い空を見上げることができた。

湖のさざ波に揺られていると、眠気が兆してきた。だが、ようやく虎口（ここう）を脱したという安心感はあ

ったものの、気持ちの奥に固いしこりのようなものが残っていて、どうしても眠りに落ちることができなかった。

これから、いったい、どうなるのだろう。

わたしたちは、知ってはならない事実を知ってしまった。覚の推測が当たっていれば、町から『排除』される対象になってしまったのかもしれない。どうすれば、それを免れることができるのか。

Tシャツの下で、胸元から何かが滑り落ちようとする感覚があった。反射的に、右手で押さえる。

何気なく襟元から引き出して眺める。首からかけた太い紫の紐にぶら下がっているのは、錦のお守り袋だった。表には、複雑な模様とともに、『除業魔符』という刺繍がしてある。この春、全人学級から神社に参拝した後、全員が貰った業魔除けの護符なのだ。

先生からは、絶対に袋を開いてはならないと言われていたのだが、あまりしつこく言われると、逆らいたくなるのが人情である。わたしは、みんなに袋が配られている最中から、好奇心が疼くのを感じていた。一人になるのを待ちかねるようにして、中身を確かめたものである。

袋の口は縫い合わされているわけではなく、紐を緩めると、簡単に内容物を取り出すことができた。入っていたのは、折りたたんだ白い紙と、ガラス製の円盤である。紙には、黒い墨で、図案化された奇妙な文字が書き連ねてあった。何となく気味が悪くて、すぐに折りたたんで元通りにしまう。だが、円盤の方は、わたしの目を釘付けにした。

直径が五センチほどの透明なガラスの円盤は、さながら、ひとつの小宇宙だった。背景には、見えるか見えないかという細さの金線が複雑な幾何学模様を織りなしており、手前には、様々なものが浮かんでいる。小さな南天の木には、目を凝らして見ると、精巧に作られた極小サイズの葉っぱや赤い実までが付けられていた。その横には、鉛筆やカップ、

花など、身近な品々がいくつも浮遊している。そして、一番奥にあって、それらすべてを見下ろしているのは、『無垢の面』だった。

『無垢の面』は、追儺の儀式で『侲子（しんし）』役の子供たちが被る面で、乾ききらない粘土に胡粉（ごふん）を塗っただけの単純なものである。うっすらと人間の顔の形が作られているだけで、本来、表情も個性もない。だが、この『無垢の面』は違っていた。じっと眺めていると、どことなく、わたし自身の顔に見えてくるのである。

カヌーの上で、目を閉じて、お守り袋の上に手を置いていると、ガラスの円盤の手触りが感じられた。

わたしは、静かに顔を上げて、すぐ後ろで寝そべっている覚の様子を窺った。ナップザックを枕にすっかりリラックスして、波のリズムに身体をゆだねているようだ。規則正しい息の音からすると、まどろんでいるのかもしれない。

見てはならないものを見るという悪癖にも、ときに、気持ちを安定させてくれる効用がある。わたしは、そっとお守り袋の口を開けて、中からガラスの円盤を引き出した。

ガラスが太陽光を反射すると、他のカヌーから気づかれてしまうかもしれない。両手で覆うようにして、円盤の中を覗き込む。

このときに感じた違和感を、どう表現すればいいだろう。

それは、ふつうに一瞥しても、気づかない程度の違いだっただろう。だが、わたしは、折に触れては、この円盤を眺めていたため、その構図は映像として脳に焼き付いていた。しかもこのときは、安心感が欲しくて、それこそ食い入るように見たのである。

違う。何かが、微妙に違っている。完璧なバランスだった南天の木が、歪んで見えるのは、気のせいとは思えない。いや、それはむしろ、背景の精妙な

幾何学模様に、かすかな狂いが生じているためなのか。

そして、目の焦点が『無垢の面』に合ったとき、肌に粟が生じるような感覚に襲われた。

溶けかけている……。それは、ほんのわずかな変化だったが、認識できたのは、元の形がわたしの顔と瓜二つだったからに違いない。『無垢の面』は、まるで『業魔の面』へと変身しつつあるかのように、ゆっくりと崩れ始めていたのだ。

わたしは、反射的に、ガラスの円盤を湖に投げ捨ててしまった。

水音が聞こえたらしく、背後で、覚が顔を上げる気配がする。

「どうかした？」

「ううん。何でもない」

わたしは、無理に笑顔を作ってから、振り返った。

「そろそろ、出発した方がいいんじゃない？」

「そうだな」

覚は、大声で他のカヌーに合図を送り、わたしたちは、再び、カヌーを漕ぎ始めた。

あの顔は、いったいどうしてしまったのか。

気持ちには、そのことが重くのしかかっていた。

あの顔は、なぜ、溶けかけていたのか。

いや、本当に、溶けかけていたのだろうか。ふと、疑問が湧いてきた。気のせいということはないのか。精神的な疲労が溜まって、あらぬ幻影を見ただけではないか。

後先考えずに、ガラスの円盤を水中に投棄してしまったことが、急に悔やまれ出した。もう一度見さえすれば、はっきりするのに。

いや、そんなはずはない。さっき感じた戦慄は、気のせいなどではない。ガラスの円盤に埋め込まれた顔は、たしかに崩壊しつつあった。

では、なぜ、あの顔、わたしの顔は、変形していたのか。いや、ちょっと待て。あれは別に、わたし

の顔というわけではない。似ていたとしても、単なる偶然でしかないはずだ。お守りは、無作為に配っていたのだから。

……しかし、本当に、そうだっただろうか。パドルで水を掻く手を止めて、わたしは、考えた。

無造作に配布しているように見せて、実際は、それぞれの子に渡すお守りは、決まっていたのではないか。そうでなければ、全員を出席番号順に並ばせて、一人ずつ手渡しする必要はない。お守りの入った箱を回して、一個ずつ取らせればいいだけのことだ。

「おい、早季！　ちゃんと漕げよ」

覚が、後ろから文句を言う。

……この推測が当たっているなら、お守りの内容は一個一個違うことになる。わたしのお守りの中にあった『無垢の面』が、わたしの顔に似ていたのも、偶然ではないはずだ。それぞれのガラスの円盤に埋め込まれた『無垢の面』は、意図的に、持ち主となる生徒の顔に似せてあったのではないだろうか。

「早季ー」

「はいはい。わかりました」

わたしは、お座なりに水を掻くふりをしながら、またも思考に没頭する。

だとしても、それが何なのだ。それぞれの面は、生徒の容貌を写していた。そのことに、何か意味があるのだろうか。

いくら考えても、答えらしきものは浮かんでこない。ただ、そこまで手間をかけているなら、あれには、単なるお守り以外の意味があるのかもしれないと思う。

ミノシロモドキの話を聞いて以来、大人たちに対するわたしの認識は一変した。ともすれば、わたしたちは常に管理され、選別されているのではないかという、疑心暗鬼に似た考えに陥ってしまうのだ。

……あのお守りもまた、わたしたちを管理するた

めの道具だという可能性はないだろうか。だとすると、業魔除けというのは、単なる口実なのかもしれない。

わたしは、ハンカチを湖水に浸して、頭に載せた。冷たい滴がこめかみから頬を伝って落ち、すべてその途中で蒸発してしまう。それでも、わたしは、何かに憑かれたように、一心不乱に考え続けた。

残念ながら、業魔の正体について、ミノシロモドキから聞くことはできなかった。だが、どうやらそれは、悪鬼と同様、実在する脅威であるらしい。だとすると、このお守りには、実際に、業魔除けの効能があるのだろうか。

いや、待てよ。このとき、はっと、頭の中で閃くものがあった。

わかったような気がする。その正体は、すでに直感では捉えている。それを、なかなか言葉に翻訳できないのが、もどかしかった。

そうだ。このお守りは、もしかしたら、業魔を『探知』するものではないのか。きっとこれは、わたしたちに危険を教えてくれるのだ。

業魔が接近しつつあることを。

あるいは……。

「早季！」

わたしの思考は、覚の緊迫した叫び声によって中断される。一瞬、わたしの手を抜いた漕ぎ方に業を煮やしたのかと思ったが、そうでないことはすぐにわかった。

頭上を、通り過ぎる影。ぎょっとして見上げると、さっきのカラスだった。カラスは、一声長鳴きしてから、大きく旋回し、後方へと飛び去っていった。

振り返ると、視界いっぱいに、数艘の船が迫ってくる。風に帆をいっぱいにはらませ、みるみる近づいてきた。正面からでは大きさはわからないが、たぶん、こちらのカヌーの三倍以上の艇身長があるだ

ろう。船縁から盛りこぼれんばかりに、バケネズミの兵士を満載しているようだ。

「早季……」

　覚が、溜め息とともに吐き出した言葉には、諦めの響きがあった。

「捕まった。見てみろよ。あそこに、奇狼丸がいる」

　わたしたちは、手を握り合い、バケネズミの船が近づいてくるのを待った。覚の手は、汗でじっとりと湿っていた。たぶん、わたしの手も同じだっただろう。

　わたしたちは、無言のまま、霞ケ浦の景色を見つめていた。カヌーは、漕ぎ始めたときとは比較にならない速度で、湖面を疾走している。

　三艘のカヌーは、それぞれ、太い綱でバケネズミの軍船に繋がれていた。軍船は、三角形をいくつも組み合わせたような独特の形の帆を上げ、湖上の風を巧みに捉えて帆走しているのだ。

「バケネズミの船がこんなに進んでるなんて、知らなかったよ」

　覚が、ぽつりと言う。

「もしかしたら、こういう技術に関しては、人間より上なんじゃないか？」

「だって、わたしたちには、呪力があるもの。帆を張って船を進める必要なんか、ないでしょう？」

　いくら大きな帆を使ったところで、出せる速度には上限があるだろう。呪力には、そうした物理的な制約は、ほとんどないのだ。

「それは、そうだけど……」

　覚は、腕組みをして、遠くに青く霞む山を見つめていた。

「バケネズミのことなんか、もう、どうでもいいわ。それより、さっき話したことだけど」

「うん」

　覚は、襟から、業魔除けのお守りを引っ張り出し

た。

「覚も、確かめてみて」

覚は、さしてためらう様子もなく、お守り袋の口を開けた。

「前にも、中を見たことあるの？」

「あたりまえだろう？　こっそり見たことないやつなんか、いないんじゃないか？」

覚は、円盤を目の前にかざした。

「どう？」

こちらを向いた覚の顔は、青ざめていた。

「見せて」

「だめだ」

覚は、指が白くなるほど、円盤を固く握りしめる。

「どこか、変になってた？」

「ああ」

覚は、それ以上詳しくは語ろうとしなかったが、わたしは、少しだけ安心した。もし、異変が起きているのが、わたしのお守りだけだったとしたら、嫌だろうなと思ったのだ。

「もしかしたら、暑さで溶けたってことない？」

自分でもあまり可能性はないと思いながら尋ねたのだが、覚に、言下に否定されてしまった。

「いくら熱に弱い素材だったとしても、ありえないと思うな。袋の中に入ってるんだし。それに、僕らは、ずっと肌に付けてたんだから、そんなに熱くなったはずがないよ」

「じゃあ、どうして？」

「わからない」

覚の表情は、暗かった。

「どちらにしても、いい徴じゃないことだけは、たしかだけど……」

覚は、しばらくの間、湖の岸の方を見ながら思案していた。

「やっぱり、これは、捨てた方がいいな」

「え？」

覚は、止める間もなく、首からかけていたお守りを外して、湖に投げ捨ててしまった。錦の袋に入ったお守りは、ぽとりと水面に落ち、ガラスの円盤の重みでゆっくりと沈んでいった。

「ちょっと、何するの？」

「いいから、早季も、早く捨てちゃえよ」

「どうして？」

「帰って、これを見られたら、まずいことになるかもしれない。『無垢の面』が溶けたのは、絶対、何かよくないことを表してるんだ。瞬たちのも調べて、もし少しでも変形してたら、捨てさせなきゃ」

「でも、もしかすると、これは、業魔が近づいてることを警告してるんじゃない？」

「もしそうだとしても、どのみち、対処のしようがない。僕らは、業魔が何なのかさえ、知らないんだから」

覚は、腕組みをして言う。長めの前髪が、微風になぶられている。

「だけど、どう言い訳するの？　だって、一人ならともかく、何人も同時にお守りを失うなんて、不自然でしょう？」

「うーん。そうだな……いや、だいじょうぶだ！　土蜘蛛に捕まったとき、取り上げられたって言えばいいんだよ。だとすると、瞬たちも、いったん捕まったという話にしといた方がいいな」

さすがに、よく悪知恵が働くものである。わたしは、納得して、覚と同じように、お守りの袋を投げ捨てた。よく考えてみると、ガラスの円盤は先に捨ててしまっているので、全部捨てない限り、筋の通った言い訳はできそうにない。覚のときとは違い、軽い袋は、いつまでも波間に漂いながら後方へと消えて行った。

そうこうするうちに、バケネズミの帆船に曳航されたカヌーは、目的地へと近づいた。

大雀蜂コロニーの兵士が、船尾に身を乗り出すようにしてもやい綱を解く。綱は、カヌーの船首にあ

る輪っかを通してあるだけなので、こちらに乗り移らなくても、向こうからは簡単に引き抜くことができた。

帆船の船尾に、ひときわ大きなバケネズミが姿を現した。奇狼丸である。昨日の爆発で肩と背中には重傷を負っているはずだが、首から頭を覆っている包帯こそ痛々しいものの、きびきびした動作には怪我の影響は感じられない。

「ご気分は、いかがですか？」

「ありがとう。おかげで、楽ちんだったわ」

わたしが答えると、奇狼丸は、耳まで裂けた口に狼のような笑みを浮かべた。

「向こうに見える、ちょうど太陽が当たって水面が光っているあたりが、北利根川に入る境界です。……残念ですが、我々は、この先へは進めません」

「だいじょうぶ。ここからだったら、自力で漕いでいけるから」

霞ケ浦のように巨大な湖を、わずか三時間ほどで縦断できたのは、バケネズミの帆船に引っ張ってもらったおかげだった。わたしたちがどんなに頑張って漕いだとしても、日が暮れるまでにここへ辿り着くのは、とうてい無理だっただろう。

だが、これ以上進めないというのはどうしてかと思う。覚もまた、いぶかしげな表情を浮かべていたが、何も言わなかった。

「神様。神様」

奇狼丸の後ろから、スクィーラが、顔を出した。

「今度こそ、ここでお別れです。どうか、道中、ご無事で」

こいつに対しては、少々複雑な思いを抱かざるをえない。たしかに、わたしたちのことを心配しているようではある。だが、こうしてちゃっかり帆船に乗り込んでいるところをみると、わたしたちに道案内をしていたときから奇狼丸の命を受けており、したがって、わたしたちの居場所も筒抜けになっていたとしか思えないからだ。

「……あなたも、元気でね。コロニーが再建できるといいわね」

わたしは、そうした感情を押し殺して、できうるかぎり大人の対応をした。

カヌーを漕ぎ出すと、後ろから、奇狼丸の声が聞こえた。

「一つ、お願いがあるのですが」

「何？」

覚が、振り返って尋ねる。

「お帰りになってからも、私どもがカヌーを曳航したことは、ご内聞にしていただきたいのです」

「どうして？」と、無邪気に訊ねてしまった。

「あえて理由は申せませんが、このことが発覚すると、私は、間違いなく死を賜ることになりますので」

わたしは、ようやくはっとした。奇狼丸の目には、戦争のさなかにも見せなかったほど真剣な光が宿っている。

「わかった。絶対、秘密にするよ」

覚が、わたしに代わって、神妙な声で答えた。

ゆっくり休んで英気を養ったせいか、あるいは、北利根川へと向かう水の流れに乗ったためなのか、カヌーはぐんぐん進んだ。しばらく行ってから振り返ると、引き返していくバケネズミの船影は、もう、だいぶん小さくなっていた。

「奇狼丸は、危険を冒して、わたしたちを助けてくれたのね」

わたしは、覚にというより、自分に向かってつぶやいた。

「ああ。あいつは、やっぱり、倫理委員会から、僕らを殺すか拘束するよう命令を受けてたんだ」

覚の言葉は、憶測が当たったことで、むしろ自慢げに聞こえた。

「あそこで帆船が引き返したのも、きっとそのせいだ。船の帆は、かなり遠くから見える。万一、誰かに見られたら、命令を無視して僕らを送ってきたこ

とがバレちゃうもんな」

「でも、どうして……？」

「決まってるだろう」

なぜ、そんな簡単なことがわからないのかというように、覚は笑った。

「僕らが、昨日、あいつの命を助けたからじゃないか。僕が、風船犬を穴に押し込まなければ、奇狼丸は、間違いなく、離塵師と同じ運命を辿ってたよ」

「おーい！」

前の方から、わたしたちを呼ぶ瞬の声が聞こえた。

「おーい！　今行くよー！」

覚が、大声で返事をする。その声を聞いたとたん、わたしの中で、ふいに、何かの堰が決壊したようだった。それはまるで、この三日間に経験した出来事は何もかも白昼夢にすぎず、わたしたちは、ただ夏季キャンプでカヌーを漕いでいただけだと錯覚させるようなのんびりとした声だったのだ。

「おい、早季！　どうしたんだよ？　おい……」

覚のあわてたような口振りがおかしくて、わたしは、嗚咽を続けながらも、くつくつと笑い始めた。わたしの情動失禁は、たっぷり十分以上は続き、やがて、カヌーで近づいてきた真理亜にも伝染して、容易に収拾のつかない騒ぎに発展したのだった。

だが、思う存分泣いてしまうと、気持ちはむしろすっきりした。（付き合わされた男の子たちは、相当げんなりしていたようだが）わたしたちは、北利根川に入り、川を下った。その後は特筆すべきこともなく、順調に町まで辿り着くことができた……と書きたいのはやまやまだが、実際は波乱の連続だった。まず、わたしたちには、呪力に頼らずに川下りをした経験が、一度としてなかった。また、肉体的、精神的な疲労はピークに達していて、しかも、途中で日が暮れて視界が悪くなり始め、さらに、最悪の事態は過ぎ去ったという安堵感から、緊張の糸がぶっつりと切れてしまっていたのだ。わたしたち

のカヌーは、幾度となく岩にぶつかりそうになったり、互いと接触して沈没しかけたりした。このとき、一人の犠牲者も出さずにすんだのは、奇跡に近いことだったと思う。

　夜の帳が下りると、川は、再びその貌を一変させた。星明かりが点々と煌めく黒曜石のような水面を見ていると、まるで自分たちが静止しているような錯覚にとらわれるが、轟々という水音は逆に、緩やかだった流れが勢いを増したかのように感じさせる。

　わたしは、どこか根源的ともいえる不安を感じていた。それは、誕生前の神秘的な体験に根ざしているような気もするし、わたしたちの遠い先祖が穴居生活を送っていたときの記憶が、今に蘇ったようでもあった。

　みな心細さを感じ、一刻も早く家に帰りたいと願っていたはずだ。それは、帰ってから待ち受けているものに対して強い懸念を抱いていた、わたしと覚も同じだった。とはいえ、心身の消耗度合いを考えれば、このまま夜を徹して川下りを続けるのは自殺行為だった。しかたなく、夜営をするための川原を探したが、なかなか適当な場所が見つからなかった。日が落ちる直前に通った広々とした川原を思い出して、舌打ちしたくなる。全員、少しでも前進したいと気持ちが逸っていたため、そのまま行き過ぎてしまったが、あのときすでに、ノンストップで町まで帰り着くことは不可能とわかっていたのだから、諦めて上陸すべきだったのだ。

　ようやくテントを張れそうな場所が見つかったときには、わたしたちは、すっかり疲労困憊していた。川原の幅は狭く、ちょっと増水すれば簡単に水に浸かってしまいそうだし、石ころがごろごろしていて、とても快適な寝床にはなりそうもなかったが、贅沢は言っていられない。

　わたしたちは、最後の気力を振り絞って、三つの

テントを張った。習い覚えた手順で、地面に穴を掘って竹の骨組みを立て、上から帆布をかぶせ、革紐でくくりつける。キャンプの初日には成功したはずなのに、どうしてもうまくいかない。

「おかしいなあ。どうして、できないんだ？」

覚のぼやき声にも、力がない。

「あのときは、僕ら、みんな呪力が使えたからね」

隣で悪戦苦闘している瞬が、答える。そういえばそうだったなと、思い出した。わずか二日前の出来事が、遠い昔のことのように思える。

「覚。まだ、呪力を使うのは無理そう？」

わたしは、一縷の望みを込めて尋ねたが、覚は首を振った。

「うーん。疲れてるから、あんまり集中できないけど、少しだったら何とかなるかも」

「え？　どういうこと？」

わたしたちの会話を不審に思ったらしく、真理亜が割り込む。わたしは、たまたま覚の真言（マントラ）を覚えていたために、催眠状態を利用して彼の呪力を復活できたことを話した。

「そうか！　じゃあ、真言（マントラ）さえわかってれば、全員、呪力を取り戻せるんだ」

瞬が、興奮した様子で言う。

「あの離塵っていう坊さんのはったりに、すっかり騙されてたな。あんな暗示、本当は、たいしたことないんじゃないか！　早季にだって解けるんだから」

早季にだって、というのは余計である。

「でも、みんな、自分の真言（マントラ）はわからないでしょう？　わたしは、たまたま、覚のを聞いて覚えてたんだけど」

わたしは、みんなの顔を見回した。ほとんど真っ暗だが、目が慣れているせいか、何となく表情が判別できる気がした。

「僕は、わかる」

瞬が言った。

「え？　どうして？」

「思い出したんだよ。いろいろ努力して。でも、その後、いくら心の中で真言を唱えても、呪力は復活しなかった。催眠暗示を解くための手順が必要だったんだな」

わたしたちから真言を奪い取る、つまり、わたしたちが真言を思い出せないようにすること自体、催眠術による暗示だったのだから、瞬が自力で真言を思い出したというのは、驚くべきことだった。瞬の説明では、何かの拍子に真言を忘れてしまった場合でも、後から再現できるように、さまざまな語呂合わせを作っておいたのだという。

「でも、わたしは、真言を思い出せない」

真理亜が、悲しげに言う。

「家に帰ったら、どっかに書き留めてないかな？」

わたしと真理亜、守の三人は、目を見合わせた。

「書いてある」

わたしは、縁の下にこっそり埋めた、真言を彫ったお札のことを思い浮かべた。

「僕も」

「わたしも……日記帳に」

真言は、一音一音に言霊が宿る聖なる言葉であり、けっして他人に教えてはならない。厳密に言えば、文字にすることさえ許されない性質のものだった。だが、三人とも、記憶の中だけにとどめておくことに不安を感じ、記録を付けておいたらしい。わたしと覚も、半紙に書いて互いの真言を見せ合っていたし、これほど規則破りが横行するというのは、ほかの班では考えられないことだった。後述するように、わたしたちの班には特別な生徒が集められていたという証拠かもしれない。

「だったら、だいじょうぶだよ。町に帰ったら、僕と覚が呪力を使えるところを見せる。そうすれば、まさか、凍結されたとは思われないだろう？　あとのみんなは、疲労が限界に達したとか何とか言って寝込んでるんだ。その後、真言さえわかれば、隙を

見て早季に呪力を復活させてもらえばいい」

瞬の言葉で、行く手に漂っていた暗雲が、一瞬にして吹き払われたような感じになった。離塵師がバケネズミに殺されたことを喜ぶわけではないが、結果として、死人に口なしという形になったことは否めない。

そう思うと、現金なもので、みんな急に元気を取り戻した。覚が、呪力で帆布を浮かせ、わたしたちは、三つのテントを張った。それから、枯れ枝を集めてきて焚き火を起こし、鉄鍋に雑炊を作って腹ごしらえをする。初日に作ったとき以上に大雑把な味付けだったが、わたしは、それ以来今日に至るまで、あれほど美味だった食事の記憶はない。

食後は、焚き火の炎を見つめながら、交代に、離ればなれになっていた間の話をした。瞬と真理亜、守の三人の話には、たいしてドラマチックな部分はなかった。わたしと覚が土蜘蛛に捕まった後、何とか奪還しようとして、彼らのコロニーのすぐそばまで行ったのだという。だが、警戒が厳しく、とても近づけないことがわかり、町へ助けを呼びに行くことにしたらしい。昼間は発見される可能性があるので、慎重に進むことにしたのだが、途中で合戦の音と鬨の声が響いてきたのに肝を潰し、ほとんどずっと藪の中に潜んでいたようだ。夜になって、あたりが静かになってから、夜陰に乗じて野山を横切り、霞ケ浦を目指したのだが、そこでわたしたちが追いついてきたのは、嬉しい驚きというのを超え、真理亜の表現によれば、「筑波の狸に化かされている」と思ったとのことである。

それに対し、わたしたちが語った話は、彼らをとことん仰天させたと思う。土蜘蛛の牢に入れられてから、歩哨を殺して脱出した部分では、興奮してさかんに質問を投げかけてきたが、塩屋虻コロニーに行ってから土蜘蛛の襲撃を受け、地下のトンネルをさまよったくだりになると、すっかり固唾を呑んで聞き入っていた。さらに、絶体絶命の場面から、奇

跡的に覚の呪力を復活させ、一気に反攻に転じたあたりでは歓声が沸いたものの、その後延々と続いた恐ろしい戦闘の場面では、想像もしていなかった展開に唖然としてしまったようだ。

語り手は覚で、わたしは、もっぱら要所で訂正・補足する役に回った。面白く語るという才能では、覚に一日の長があると思ったからである。途中、いつも嘘ばかりついている覚の言うことなので、話半分に取られるのではないかと思い出したが、杞憂だったようだ。目を輝かせ、口を半開きにした三人の顔は、このときだけは年齢相応というより、ずっと幼い子供のように見えた。

覚の話が終わってからしばらくは、沈黙の中で焚き火のパチパチとはぜる音だけが響いていた。やがて誰かが口火を切ると、堰を切ったように質問が押し寄せてきた。中でも、特にみんなが訊きたがったのは、安全なはずの奇狼丸の庇護下から、なぜ、わたしたちが脱出しなければならなかったのかという点だった。

再び、覚が説明する。わたしたちが倫理委員会から『処分』されるかもしれないという話は、みんなの反発を受けることを覚悟していたが、意外にもあっさり受け入れられた。わたしには悲観的にすぎるように感じられた、覚の憶測を、瞬がすんなりと肯定したのも、一因だったかもしれない。さらに、このとき場を支配していた楽観的な空気が、ショックを和らげるクッションになった。瞬の言うとおりにすれば、わたしたちが離塵師に呪力を凍結されたことは隠し通せるはずである。そうすれば、せいぜい、教師に大目玉を食らうくらいで済むのではないかと、全員が考えていたのだ。

「じゃあ、早季。頼むよ」

話が一段落すると、瞬が、わたしに紙切れを手渡しながら言った。

「僕の呪力を復活させてくれ」

わたしは、大きく息を吸い込むと、うなずいた。

瞬から受け取った紙切れを開き、焚き火の明かりにかざして読む。かなり長い真言（マントラ）で、八語、三十六文字もあった。最初は、暗記して、すぐに燃やしてしまうつもりだったが、これだけ長いと、アンチョコなしには少し心許ない。わたしは、紙片を掌にそっと握り込んだ。

だいじょうぶ。やれるはずだ。覚のときと同じようにやればいいのだから。気持ちを落ち着けるために、自分にそう言い聞かせる。実際には、覚のときとは決定的に違っている点が三つもあった。瞬は、あのときの覚とは違い、意識レベルはまったく低下していない。さらに、これから催眠術にかかることを自覚しているばかりか、すでに真言（マントラ）を思い出しているのである。だが、そうしたことはまったく、わたしの念頭には浮かばなかった。

「炎を見て」

通過儀礼（イニシエーション）のことを思い出しながら、瞬の注意を焚き火に引きつける。無瞋上人（むしんしょうにん）は、わたしに炎を揺らしてみるように命じたが、呪力が凍結されている瞬に同じことを言っても、逆効果かもしれない。

「炎が揺れるのを眺めるの。右に。左に。ゆらゆら……ゆらゆらと」

わたしは、囁くように言った。瞬は、ずっと無言だった。ほかの三人も、息をひそめて、わたしたちを注視している。

長い枝を焚き火に差し込み、火の粉を掻き立てた。護摩壇の炉と同じような効果までは期待できないだろうが、闇の中で鮮やかな軌跡を残して飛び散る火の粉は、見る者を夢見心地に誘うはずだと思った。

「青沼瞬」

瞬は、みじろぎもしなかった。催眠状態にあるのかどうかは、まったくわからない。

「青沼瞬。おまえは、規則を破って来てはならないところに来た。しかも、禁を犯して、悪魔の言葉に耳を傾けた。だが、問題は、その先にある」

瞬は、無反応だった。

「おまえたちは、倫理規定の根幹にある十重禁戒、その第十条、不謗三宝戒に背いた。悪魔の声に従い、仏の教えに異を唱えたのだ。よって私は、おまえの呪力を凍結せねばならない」

瞬は、深い溜め息をついたようだった。はたして、かかっているのだろうか。わたしは、確信を持てないまま、先を続けた。

「もう一度、炎を見なさい」

答えはない。

「炎を見るのです」

依然として返事はないが、瞬の瞳の中に、炎が映っているのが見えた。

「おまえの呪力は、あの人形に封印した。人形が見えるか？」

今度は、はっきりと深い溜め息が聞こえた。そして、「はい」という明瞭な返答。

「今より、人形を火の中にくべる。いっさいを焼施すべし。すべての煩悩を焼尽せしめ、灰は無辺の荒土に還るべし」

わたしは、大きく息を吸って、強く声を張り上げた。

「人形は燃え尽き、おまえの呪力は、ここに凍結された！」

覚は、喉の奥で、うっという声を漏らした。呼吸が速くなっている。

「煩悩を捨てよ。解脱のためには、すべてを清浄な炎で焼き尽くさねばならない」

さあ、ここだ。わたしは、立ち上がり、瞬のすぐそばへと歩み寄る。

「青沼瞬。おまえは、深く神仏に帰依し、自ら呪力を放擲した。大日如来の御慈悲により、ここに、もう一度、正しき真言を授け、精霊を召喚し、呪力を返還する！」

彼の両肩を拳で強く叩いてから、わたしは、彼の耳元に口を寄せ、紙片に書かれていた真言をささや

いた。

「おん、あぼきゃ、べいろしゃのう、まかぼだらまに、はんどま、じんばら、はらばりたや、うん」

　後にわかったことだが、それは、最高位の仏である大日如来に属する、光明真言だった。そのこと自体、瞬に対する評価の高さを示していると思う。彼は、生まれながらにして、将来の指導者たるべき期待をかけられていたのだ。

　突然、焚き火の炎が、三倍くらいの大きさに膨れ上がった。さらには八岐大蛇のように四方八方に鎌首を伸ばし、うねるような、踊り上がるような、奇怪な動きを見せる。

　顔を上げた瞬が、微笑する。わたしを含めた残りの全員が、拍手喝采した。手を叩き、足を踏みならし、口笛を吹く。歓呼は、いつまでもやまなかった。瞬は、もくろみ通りに呪力を取り戻したのだった。

III

深秋

1

わたしたちは、石ころがごろごろしている川原で、眠れぬ一夜を過ごした。心身ともに疲れ切っているというのに、意識の核に、いがいがのある芯のようなものが残っていて、眠りに落ちようとするたびに、不安の棘で、ちくちくと妨害するのだ。とはいえ、それでも、何度となく短いまどろみを繰り返したことで、多少は元気が回復したのかもしれない。

翌朝、日が昇るとすぐに、わたしたちはカヌーに乗り込んだ。川下りを再開してみて、わかったことは、夜営した川原は、すでに神栖66町から目と鼻の先だったということである。こんなに近いのなら、夜を徹して帰ることもできたのではないかと思ったが、昨晩の状態を冷静に振り返ってみると、やはり休息を取るのが正解だっただろう。

ほぼ正面から朝焼けに照らされた利根川の水面は、わたしたちの帰還を祝うかのように、鮮やかな朱金色に煌めいていた。ほんの数時間前、わたしたちがあれほど悪戦苦闘した、真っ黒な冥界の川は、いったい何だったのだろうと思う。

わたしたちは、パドルを操る手を休め、流れがカヌーを運ぶのにまかせた。

周囲の景色は、しだいに、見慣れたものに変わっていく。だが、あんなに家に帰ることを心待ちにしていたのに、いざ町が近づくと、不安ばかりが増幅されるようだった。

てっきり、わたしたちを迎え、補導するための船がたくさん出ていると思ったのだが、息栖神社の横を通ったときも、それらしい船影は見えなかった。

やや拍子抜けだったこともあり、わたしたちの緊張は、目に見えて弛緩した。

　だが、本当は、このときに気づくべきだったのだろう。早朝だということを勘案しても、周囲に他の船が一艘も見えないのは、逆に不自然だということに。

　四日前に、わたしたちが出発した茅輪の郷の船着き場に到着すると、ようやく、わたしたちを出迎える人影が現れた。

「君たち、ずいぶん早かったねえ」

　太陽王こと遠藤先生だった。髪と顎髭が切れ目なく顔を縁取る丸顔には、器用なことに、わたしたちの無事を喜ぶ微笑と、規則違反をとがめる顰めっ面を、同時に浮かべている。七日間の夏季キャンプを中途でリタイヤすること自体はよくあることだが、そうなるに至った事情が問題なのだ。

「すみません。ちょっと、信じられないようなことばかり起こって……」

　瞬が、説明しかけて、声を詰まらせた。それを聞いて、わたしたちは、みな、泣き出しそうになった。

「まあまあ。詳しい話は、後で聞くから。ね？　とにかく、岸に上がりなさい」

　みな、懸命に涙を堪えながら、カヌーをもやい、船着き場に上がった。カヌーに積んだ荷物は、結んであるロープがはらりと解けると、次々に宙を飛んで地面に整列する。

「あ。僕らがやります」

　覚が申し出たが、太陽王は、優しく首を振った。

「いいから。君たちは疲れてるだろう？　それより、すぐに、そこの児童館へ行きなさい。朝ご飯が用意してあるから」

　わたしたちは、なぜ児童館へ行かされるのだろう。ぼんやりと疑問を感じる。児童館は、船着き場のほぼ真ん中にあり、休憩や宿泊の設備も整っているが、和貴園を卒業して以来、一度も足を踏み入れ

たことはなかった。

「先生。僕らは、家に帰りたいんですけど……」

瞬が、全員の気持ちを代弁する。

「ああ。それは、そうだろう。でも、その前に、いろいろと、訊かなきゃならないことがあるんだ」

「いったん家に帰って、ひと眠りしてからじゃいけませんか？」

真理亜が懇願する。わたしも、お風呂に入りたくてたまらなかったが、太陽王は、にべもなかった。

「いいかい？　君たちは、重大な規則違反をしたってことを忘れちゃいけないよ。疲れてるのは、よくわかるけど、まず、やるべきことをやってからだ」

あいかわらず鷹揚な笑みを浮かべてはいるものの、なぜか、太陽王の鼻の頭には、玉の汗が光っていた。

「わかりました」

わたしたちは、ぞろぞろと、児童館へ向かった。

「なあ、早季。どう思う？」

覚が、隣に来て、耳打ちする。

「どうって？」

「太陽王の顔、なんだか引きつってなかった？　それに、わざわざ児童館へ行けだなんて、おかしいと思わないか？」

「それは、おかしいけど。でも、今の状況自体、かなりおかしいんだから……」

蓄積した疲労がどっと押し寄せてきて、歩いている足さえ、自分のものではないような感覚に襲われる。こんなときに、わかりきったことを質問する覚に、腹が立った。おかしければ、いったいどうすればいいというのか。

瞬が、児童館のガラス戸を呪力で引き開ける。私は、瞬の機転に感心した。疲れ切っている今は、わざわざ精神集中をして呪力を使うより、手で開ける方が楽なはずだ。だが、太陽王か、あるいは他の誰かが、今この瞬間も、わたしたちを観察しているはずだから、これで少なくとも、わたしたち全員が呪

力を凍結されたのではないかという疑いは晴らせただろう。

　児童館に入ると、太陽王の言ったとおり、食堂に朝食が準備されていた。お櫃に入った温かいごはんに、塩鮭、トラバサミの味噌汁、生卵、海苔、野菜サラダ、昆布の佃煮など。デザートには、黒蜜をかけたところてんまで用意されていた。

　急に空腹を感じ、わたしたちは、我がちにご飯を茶碗によそって、猛烈な勢いで食べ始めた。

　しばらくの間、全員が無言だった。

「僕たち、無事、帰ってきたんだね……」

　守が、しみじみと言う。

「無事？　まだ、これから何があるか、わからないよ」

　覚が、無愛想に応える。

「でも、とにかく、帰ってきたんだから」

　真理亜は、守の肩を持つ。わたしも、覚よりは、二人に同調したい気分だった。

「うん。もしかしたら、ちょっと、考えすぎだったのかもね」

「どういうこと？」

　真理亜が、訊く。

「ほら、だって、いくらミノシロモドキから悪い知識を得たっていっても、わたしたちが処分されるなんて……」

「しっ！」

　瞬が、わたしの言葉を制した。

「誰が聞いてるか、わからないんだぞ」

「あ。ごめん」

　わたしは、はっとして口をつぐんだ。どうしたというのだろう。妙に浮き浮きした気分になって、何でも喋ってしまいそうだった。

「待てよ。もしかすると……この中に」

　瞬が、あらかた食べ終えた朝食を、ひどく嫌な目で見た。以心伝心のように、全員に、彼の感じた懸念が伝わってきた。

まさか、朝食に、何か入っていたのだろうか。気分をリラックスさせ、心の中にあるものを吐き出してしまいたくなる何かが。

　きっとこれだというように、覚が、ところてんの入った椀を指さした。みんなが、黙々とご飯とおかずを食べている間、わたしだけが、待ちきれずにところてんに手を出していたのだ。たしかに、少し、アルコール類が入っているような香りがしたが、もしかすると、それ以外の薬品も混ぜられていたのかもしれない。

「あれ？」

　全員の注意がところてんの方に向いているとき、守が、窓の外を見て、妙な声を上げた。

「どうしたの？」

　真理亜の問いかけにも応えず、窓に向かって走り寄る。その瞬間だった。わたしの目にも、何か大きな影が窓を横切るのが見えたのは。

　守は、しばらく、窓に顔を押しつけて外を眺めていた。それから、こちらを振り返る。そこには、奇狼丸の影に怯えながら必死に逃げていたときにさえ見たことがないような、無惨なまでの恐怖が浮かんでいた。

　柱時計が、ボーン、ボーンと時を告げる。八回鳴るのを数えて、わたしは、奇妙なことに気がついた。午前八時であれば、そろそろ子供たちの声が聞こえてきてもいい時間である。だが、どんなに耳を澄ませてみても、何も聞こえない。児童館は、わたしたちの貸し切り状態が続いているのだ。

　重苦しい沈黙が続く。守は、なぜか、窓の外に何を見たのか、頑として話そうとはしなかった。

「待たせたね。君たち」

　引き戸が開いて、太陽王が入ってきた。さらに、顔は知っているが、話したことのない中年の男女二人も。たしか、二人とも教育委員会の人だったはずだ。

「もう、朝ご飯は済ませたのかしら？　眠かったら、寝ててもよかったんだけど」

女性の方が、にこやかに言った。わざとらしい作り笑顔のせいで、馬面で口が大きいという特徴が、やけに強調されて見える。

「これから、君たちと、一人ずつ面接しなきゃならないの。さあ、誰からお話を聞かせてくれるかな？」

誰も、返事をしなかった。

「あれあれ、どうしたんだ？　積極派、個性派揃いの一班なのに。いつもだったら、先を争って手を挙げるだろう？」

太陽王が、今にも噴き出しそうな声で言う。だが、その目は、けっして笑っていなかった。

結局、出席番号順に面接をすることになった。青沼瞬、秋月真理亜、朝比奈覚、伊東守、そして、わたし、渡辺早季である。

それまで、一度も見たことがなかったが、児童館の奥には、二畳ほどしかない小部屋が、たくさん並んでいた。わたしたちは、一人ずつその部屋で、二人の面接官から質問を受けることになった。

……さっきから、そのときの模様を思い出そうとしているのだが、不思議なことに、何一つ思い出すことができない。部屋に入ってから出るまでの記憶が、すっぽり抜け落ちているようなのだ。先史時代の精神医学の本によれば、こういう現象を島状記憶喪失と呼ぶらしいが、覚も、面接室での出来事はほとんど思い出せないようだ。唯一、妙に苦い味がするお茶を勧められた記憶があるというのだが、だとすると、あのときの『面接』とは、ところてんに一服盛った手口の延長で、かつて『薬物面接』と呼ばれていたものだったのかもしれない。

いずれにせよ、わたしたちは、表面上は何事もなく面接を終了し、それぞれの家に帰ることを許された。瞬の計画によれば、まだ呪力を恢復していない真理亜と守、わたしの三人は、仮病を使って寝込む

ことになっていたが、そんな必要はなかった。三人とも、その日から高熱を発して、寝付いてしまったからだ。

　わたしの場合は、一両日ほどで熱は下がったが、両親から、無理をせず寝ていなさいという厳命を受けたのをいいことに、それから一週間ほどは、一日中寝間着を着たままで、ひたすら怠惰に徹した。そして、二人ともいなくなった日中を見計らって、縁の下に埋めてあったお札を掘り出し、ようやく自分の真言（マントラ）に対面することができた。

　自ら真言（マントラ）を唱えることで呪力を取り戻したときには、してやったりという気分だった。禁忌（タブー）を犯しながらも、まんまと大人たちを出し抜き、ついに再び神の力を得ることができたのだから。

　それが、とんでもない錯覚であるとは、想像だにしなかった。

四十歳の大人にとっては、二年というのは、さほどの意味を持たない歳月かもしれない。せいぜい、ちょっぴり髪の毛が白くなり、身体に締まりがなくなり、いくぶん体重が増え、ほんの少し息切れしやすくなる。それが、二年という月日の平均的な効果だろう。

　だが、十二歳の少年少女にとって、二年というのは、いつの時代も、劇的な変化をもたらすのに充分な時間である。

　十四歳になったわたしにとって、変化は単に、身長が五センチ伸び、体重が六キロあまり増えたというにとどまらなかった。男の子たちの成長はさらに急激だったが、身長が十三センチ、体重が十一キロも増加したという以上に、外面、内面の質的な変化が著しかった。

　わたしは、徐々に、瞬や覚を見上げるのに慣れていった。それが不快でなかったのが、自分でも意外だった。物心ついてからずっと、遊び仲間であり競争相手でもあった彼らの存在は、いつしか別のもの

へと変化していた。そして、そのことを、自然な変化として受け入れつつあった。

わたしの目は、気がつくと、二人の姿を追いかけていた。そして、その視線には、いつのまにか、ある曰く言い難い感情が混じるようになっていた。

いや、はっきりと言ってしまおう。嫉妬である。

わたしにとって、瞬は、最初から特別な人間だった。夕焼けの野原で、彼の前髪が風になびくと、わたしは、目を離すことができなくなった。爽やかな声と、きらきら輝く瞳は、いつだって、わたしを魅了した。わたしは、自分が瞬と結ばれることを夢想していたし、いつかはそうなるものと信じて疑わなかったのだ。

一方で、覚は、平凡な男の子にすぎなかった。頭がいいのは認めるが、それも、溢れる才気によって周囲の空気まで変えてしまうような瞬と比較すると、いかにも地味だった。だが、二人で土蜘蛛の襲撃をかいくぐって生還を果たして以来、わたしが彼を見る目も、かなり変化してきたように思う。わたしにとっての彼は、いつも、最も気のおけない存在だったし、一緒にいて、一番居心地がいい相手でもあった。

だから、わたしの抱いた嫉妬は、かなり複雑なものだった。たぶん、二人の仲のよい姿を見せられるたび、自分が一人だけ取り残されたような寂しさを感じていたのだと思う。

この二年で最も変化したものは、瞬と覚の関係かもしれない。昔から、別に仲が悪いわけではなかったのだが、覚が一方的に瞬をライバル視しているふしがあって、ときおり、ぎくしゃくすることがあった。

しかし、二年の間に、覚の瞬に対する感情は一変したようだ。以前なら、瞬が輝くような笑顔を見せても、覚は、妙なひがみ根性から、そっぽを向いていることがあったのだが、今は、覚の方も満面の笑みを浮かべて、じっと瞬の顔を見つめ返すことが多

くなった。

わたし自身、ずっと瞬に恋をしていたから、はっきりとわかる。覚が瞬に対して抱いていたのは、あきらかに恋愛感情だったと思う。

一方、瞬が覚のことをどう思っていたのかは、はっきりしなかった。彼は、持って生まれた美貌と聡明さによって、幼い頃より、周囲の人間から賛嘆の目で見られるのに慣れていた。だから、自分の賛美者に対して、鷹揚、といって悪ければ、ある種寛大な態度が身についていた。しかし、二人の行動を見ると、覚が一方的に瞬に憧れて付きまとっているという感じでもなかった。おそらく、積極的だったのは覚だと思うが、瞬も、結局、その気持ちを受け入れたのだと思う。

事実を決定的に思い知らされたのは、ある日、偶然、野原を歩いている二人を見かけたときだった。二人の少年は、恋人同士のように手を繋いで、ひと気のない方へ歩いていくところだった。

わたしは、すぐにきびすを返し、その場から立ち去ろうとした。だが、思いとは裏腹に、距離を置いて二人の後を付けている自分に気がついた。二人の親密な姿を見れば、傷つくことはわかっていた。それでも、見ないではいられなかったのだ。

二人は、町が見えなくなる場所まで来てから、二匹の仔犬のようにじゃれ合い始めた。特に、覚の方は、しきりに瞬のまわりを跳ね回ったり、後ろから抱きついたりしている。わたしは、自分も男の子に生まれたらよかったのにという、痛切な思いにとらわれていた。そうすれば、瞬も、覚なんかではなく、きっと、わたしを選んだはずなのに。

倫理委員会も、教育委員会も、男女の交際に対しては、きわめて厳格だった。そのため、わたしたちの年齢では、異性に対する思いは抑圧され、プラトニックに限定されていた。

その一方、男の子同士、女の子同士の場合であれば、度を超した親密さも大目に見られる雰囲気があ

ったために、少数の例外を除くほとんど全員が、同性を、とりあえずの恋愛と性の対象にしていたはずだ。

　二人は、丘の陰に来ると、シロツメクサの上に寝そべって、話をし始めた。わたしは、二、三十メートル離れた草の陰で、息を殺してその様子を見守っていた。

　覚が何か冗談を言ったらしく、瞬は、真っ白な歯を見せ、のけぞって笑い出した。

　それをじっと見ていた覚が、急に匍匐前進してきたかと思うと、瞬の上に覆い被さる。二人は、しばらく動きを止めた。

　わたしの位置からは、はっきりとは見えなかったが、二人がキスをしていることだけは、疑う余地がなかった。覚は、上から瞬を抱きしめて、瞬は、されるがままになっている。やがて、瞬も、覚を抱き返して身体を捻り、今度は自分が上になろうとしたのだが、覚は意地悪く、それを許そうとはしなかった。しばらくは、二人とも上になろうとしたため、まるで力比べのような状態が続いたが、最初に上になっていた方が有利なのは、当然である。そのうち、瞬が、根負けしたように、ふっと身体の力を抜いた。どうやら、あきらめて、女の子役に甘んじることにしたらしい。

　それを見た覚は、すっかりのぼせ上がった様子だった。瞬の上に馬乗りになって押さえつけると、唇といわず頰といわず、さらには喉から首筋にいたるまで、熱烈なキスを浴びせ始める。

　見ているだけで、わたしの身体は、火照ってきた。無意識のうちに、自分の身体に手を伸ばしてしまう。あんなふうに瞬を可愛がってあげたいのか、それとも、覚にああされたいのかは、わからなかった。どちらにせよ、わたし一人が除け者にされて、こんなに胸を焦がしているのは、いったいなぜなんだろうと思った。

　覚は、瞬の上下の唇を、指先でなぞるように愛撫

し始めた。抵抗を受けないと見るや、調子に乗って親指を口の中まで突っ込み、無理やりしゃぶらせようとする。そんな失礼な行為さえ、瞬は、寛大に微笑しながら許していたが、それでも、ときどきは指に噛みつくふりをした。

わたしは、覗き見に熱が入るあまり、身を乗り出しすぎていたようだった。瞬が、覚の指を噛む真似をして頭を起こしたとき、一瞬だが、視線が交錯したような気がした。

ぎくりとして、とっさに草の陰に身を沈めたが、瞬に見られたかもしれないと思うと、恥辱で胸が張り裂けそうだった。しばらくの間は、身を伏せていたのだが、意を決して、もう一度、草の間から顔を出し、様子を窺ってみた。

覚が、瞬に覆い被さりながら、懸命な努力で彼のズボンを脱がせているところだった。真っ白な大理石で作った天使像のような太腿が露わになると、呆れるくらいうっとりした表情で頬ずりする。それから、まるで小動物を慈しむような優しい手つきで、瞬のペニスを撫でさすり始めた。

瞬は、くすぐったそうに笑いながら身をよじるが、真剣に抗ってはいない。

どうやら、さっき、わたしと目が合ったと思ったのは、気のせいだったらしい。

わたしは、姿勢を変えずに、そっと後退した。これ以上、窃視を続けていると、自分が変になってしまいそうだった。

この先、二人がどういう行為に及ぶのかは、おおよその見当がつく。やはり偶然だが、少し前に、三班の男の子が二人、愛し合っている様を目撃したことがあったのだ。

そのときは、興味本位で観察していただけだったが、男の子は、性欲で頭がいっぱいになると、他のことは考えられなくなることがよくわかった。二人とも、無我夢中といった様子で、一方が逆さになった姿勢で相手に覆い被さり、お互いのペニスを口で

愛撫する。たまに喉の奥を突いてしまい、えずいたりすると、わたしまで、つられて吐き気を催した。しかも、彼らは、それだけでは、まだ満足できないらしかった。本来、男の子同士では、性行為ができるような身体のつくりになっていない。なのに、何とかその真似ごとをしようとして二本のペニスを突き立て合っている様は、まるでミノシロの交尾のようだった。

瞬と覚が、あんな愚かしい行為に耽っている光景だけは、絶対に見たくない。

わたしは、みじめな思いで、その場を離れた。無性に誰かに慰めてもらいたいと思ったが、その相手は、もちろん一人しかいなかった。

町に戻って真理亜を捜すと、家の裏手の縁側にいた。さいわい、家の人は出払っているようだったが、例によって、一人だけ邪魔者がいた。守である。

「早季。どうしたの？」

真理亜が、明るく澄んだ声で言った。この二年で、彼女は、すっかり大人の女性に成長していた。きれいな円弧を描いた眉と、怜悧な光を湛えた双眸、高い鼻筋、しっかり引き結ばれた口は、どれも、他人に左右されない強い意志を示しているようだ。昔とちっとも変わらないのは、炎のように赤い髪の毛くらいなものだろう。

「うん。急に、会いたくなっちゃって」

わたしは、笑顔で真理亜にそう言うと、白い目で守の方を見やった。守は、伏し目がちで、どこか、わたしの視線を避けているようだった。

真理亜は、縁側に座って、革靴を履いた足をぶらぶらさせていた。守は、そこから少し離れた場所に座り込んでいた。いつものように、癖っ毛で爆発した頭を掻きながら、一心不乱になって彼女の絵を描いているのである。絵といっても、和貴園でやっていたような、絵の具と絵筆を使ったお絵かきではない。木の板に薄く白い粘土を敷き、柘榴石（ざくろいし）や蛍石、

緑柱石（りょくちゅうせき）、菫青石（きんせいせき）、コルンブ石など様々な貴石の粉を載せて、イメージを呪力で形作っていくのだ。

守が描いた真理亜の肖像画は、そっくりというだけでなく、彼女の内面まで生き生きと表現しており、わたしも、彼には素晴らしい才能があったことは認めざるを得ない。

守は、幼い頃に腸チフスの流行でお母さんを亡くしているため、その面影を真理亜に重ねているらしかった。彼のお母さんは、真理亜と同じく、わたしたちの町には珍しい赤毛の持ち主だったからだ。覚によると、赤毛の遺伝子は、もともと、アジアには存在しなかったということなので、二人は、何代か遡れば、遠い国からやって来た共通の先祖に行き当たるのかもしれない。

守が真理亜に惹かれるようになったのは、全人学級に入学した直後のことだったと思う。しかし、思春期になっても、守は、ひたすら真理亜のことだけを想い続けており、どんな可愛い男の子に誘われても、まったく興味を示さなかった。守が住んでいたのは、町の一番西にある櫟林の郷だったが、真理亜の家は、東海岸の白砂の郷にあった。にもかかわらず、守は、毎朝、舟に乗って真理亜を迎えに行っていたほどである。その忠実さには感心するよりないが、わたしたちの年では、まだ男女の恋愛は稀であり、特に性行為は、絶対の禁忌（タブー）である。その結果、守の想いは、ひたすら彼女の絵を描くという遠回りな形を取るしかなかった。

守は、常に、真理亜のそばにいて、彼女だけを見ていた。真理亜の方も、守の純情に、しだいにほだされていったようだ。そのため、二人の間は徐々に親密さを増していった。はたから見ると、それは、まるで、女主人と忠犬のような間柄ではあったが。

だが、わたしは、周囲の誰もが認める真理亜の恋人であり、そんな守の存在は、ときに鬱陶しいものでしかない。

「ねえ、ちょっと、散歩しない？」

わたしは、真理亜に誘いをかけた。散歩という言葉には、二人だけに通じる意味合いがあった。

「うん。いいけど……」

真理亜は、わたしを見て、すべて了解したというような含み笑いを見せた。

「じゃあ、わたしたち、二人で散歩してくるから。……守も、ちょっと休憩してて」

わたしがそう言うと、守は、わたしたちのことを察したらしく、ひどく悲しげな表情を見せる。

「ありがとう、上手に描いてくれて。嬉しいわ」

真理亜が、絵を覗き込んでそう言うと、守の表情には、一転して、喜色がみなぎった。わたしがいると、極端に無口になるのだ。たぶん、真理亜に対する度を過ぎた献身ぶりを、女の子であるわたしに見られるのが、恥ずかしいのだろう。だが、いつも一言も口をきかないために、わたしは、守がいるときでも平気で無視して真理亜と話すという、悪い癖が付いてしまった。

わたしたちは、寄り添って歩き、運河に係留してある小舟に乗り移った。青いイルカの絵が付いているのは、町の共用の舟で、いつ誰が利用してもかまわないし、用がすめば、数十ヵ所ある所定の船着き場のどこかに乗り捨てておけばいいのだ。

わたしが、呪力で舟を操って、水面を滑走させていると、真理亜は、髪留めを外した。頭を振って、赤い髪をいかにも心地よさそうに風になびかせる。それから、わたしの首に両手を回して、耳元に唇を寄せた。

「ねえ、本当に、どうしたの？」

真理亜の優しい言葉に、涙が溢れそうになるのを堪えた。

「何でもないって。本当よ。ただ、会いたくなっただけだから」

嘘だとわかっていても、それ以上訊かないのが、親友だった。真理亜の手が、わたしの頭を撫で、髪を指で梳いてくれる。それだけのことで、心の中に

あったわだかまりが解きほぐされていくような気がした。

わたしたちが向かった先は、波崎海岸の砂浜を見下ろす小高い丘の上で、まわりを藪に囲まれた秘密の場所だった。和貴園のころから、天気のいい放課後はよく、そこで二人だけで過ごしていたのである。最初に裸になることを提案したのは、わたしだったが、同級生に先駆けて、一糸もまとわぬ姿で抱き合ってキスするようになったのは、真理亜の大胆さに引っ張られてのことだった。

杭に舟を係留すると、わたしたちは、先を争うように、砂の上を駆け出した。しばらく行っていなかった間に、秘密の場所が誰かに荒らされているのではないかと心配していたのだが、さいわいにも、まだ手つかずのままのようだった。

藪があるおかげで、どこからも見られないことはわかっていたが、わたしたちは、一応、周囲に誰もいないことを確認してから、服を脱いだ。最初は気恥ずかしかったが、二人で嬌声を上げながら、一枚ずつ服を取り去っていくと、無邪気だった子供の頃に戻ったような気がした。

まだ、夏には間のある季節だったので、少し肌寒かった。鳥肌が立っている背中や腕を、互いに擦り合う。

「早季。おっぱい、大きくなったわね」

真理亜が、急に、後ろからわたしの胸に手を回してきた。

「……くすぐったい」

わたしは、身をもぎ離そうとしたが、真理亜は、追いかけてきて、さらに身体のあちこちを触ろうとする。いつのまにか、胸当ても取られてしまった。

「う。やめて」

あまりにも微妙な感触に、わたしは、耐えきれなくなって、その場にしゃがみこんでしまった。

「何言ってるのよ。こうして欲しかったんでしょう？　だから、早季ちゃんは、わたしに会いに来た

のよね？」

　真理亜の容赦のない攻撃にさらされて、わたしは、笑い、震え、身悶えた。快楽と苦痛、愛撫と拷問は、紙一重である。

「さあ。しばらく見てなかったから、早季の身体を調べてあげるね。あれから、どうなったのかな。ちゃんと、発育してる？」

「いい。そんなこと、しなくても……！」

　話している間も、真理亜のしなやかな指は、わたしの身体の上を行ったり来たりして、刺激を与え続けていた。それは、あまりにもすばやくて、しかも滑らかな動きだったので、まるで千手観音に愛されているようだった。

「うん。すごく綺麗な身体ですね。よぶんなお肉なんか、全然付いていないし、どこもすべすべだし」

「う、うん。もう、いいでしょう？　次は、真理亜の番よ……」

「うん。あとで、たっぷりしてもらうからね。だけど、まだだめ。早季の身体は、外見は合格だったけど、やっぱり、感度のチェックもしておかないとね」

　真理亜の責めは、それから三十分は続いた。わたしは、笑ったり哀願したりするうちに、最後は、息も絶え絶えになり、どう反応していいのかさえわからなくなってしまった。

「すごーい。早季って、こんなふうにいじめられたり、いやらしいことされたりするのが、ほんとうに大好きなのね。身体全体が喜んで、反応してるもの」

　そんなことを言われても、すでに、反論することすらできない。わたしは、潤んだ目で、訴えるように真理亜を見上げるばかりだった。

「うふ。可愛い」

　真理亜は、息がかかるくらいの距離まで顔を近づけて微笑した。それから、ゆっくりと、唇を重ね合わせてきた。ああ。その柔らかさを、いったいどう

形容したらいいのだろうか。わたしは、これまで、数多くの男の子や女の子とキスを交わしてきたが、あんな感触は、他に一度も経験がない。唇というのは、緊張したり、意識すればするほど固くなるものだ。だが、真理亜の唇だけは、ゼリーのように柔らかくて、わたしの唇に吸い付いてくるようだった。それだけでも、陶然として、身体が溶けてしまいそうになるのだが、その次は、わたしの唇を割って、彼女の舌が侵入してくる。その生々しい感触には、いつでも鳥肌が立つような感覚に襲われた。真理亜の舌は、わたしの口腔内のあらゆる場所、歯茎や歯の裏、頰の裏側までを貪欲に探索し、最終的には、わたしの舌にたどりつく。触覚と触覚、味覚と味覚で、わたしたちは、互いの存在を感じ合うのだ。

　真理亜に身も心もゆだねつつも、わたしは、その舌の動きを正確に記憶しようとした。真理亜のやることは、とりもなおさず、彼女自身がやって欲しいことであり、すぐ後で、わたしがお返しをしてあげなくてはならない。

　それから、わたしたちは、お互いの身体をぴったりと重ね合った。膝頭がぶつかり合い、乳首が固くなった二組の乳房が、柔らかく潰れる。

　真理亜の指が、横手からそっと、わたしの下腹部に触れてきた。軽く和毛（にこげ）を撫でてから、さらにずっと下の方へ。すでに暖かく潤っているどころか、洪水のような状態であるのを知られるのが恥ずかしく、わたしは腰を引いて身体をずらそうとするが、もちろん、逃げ切ることなどできない。

「あれー？　どうしたの、こんなに興奮して？」

　自分が、そうした張本人であるにもかかわらず、真理亜は、とぼけて訊く。

「う……うーん」

　わたしは、抗議の唸り声を上げるが、まったく言葉にならない。そのうち、彼女の指は、女の子の一番敏感な場所、小さな真珠のような突起に触れ、螺旋を描くようにして弄ぶ。すると、わたしの頭の中

は真っ白になり、もう、身体の芯から蕩けてしまうのだ。

　それから、濃密な時間が流れた。真理亜とわたしは、すべてを忘れるくらい深く愛し合った。後半は、わたしが責める側にまわり、真理亜は、前半とは別人のような可憐かつあられもない姿で、涙を流しつつ喜びに悶えていたものである。

　わたしたちのやることに、ほとんど禁忌（タブー）はなかったが、唯一、破瓜（はか）を伴うような行為だけは厳禁だった。学期の終わりにある身体検査で、わたしたちは、保健担当の女性教諭によって、生娘であるかどうか徹底的に調べられるからだ。もし、処女膜など特定の部位に損傷があった場合、その原因が追及され、万が一、不純異性交遊の事実が発覚した場合、その子は退学処分となる。

　その頃、わたしたちの身近には、そういう理由で実際に全人学級を去った生徒はいなかった。唯一、聞いたことがあるのは、我々より七つ上の学年で、退学処分になった女生徒が一人いたらしいという噂だった。その後、その女生徒の姿は二度と見られなかったということだが、例によって覚のホラ話、といって悪ければ彼がどこからか聞いてきた学校伝説が出所なので、信頼が置けるかどうかは、はなはだ疑問である。

　事が終わり、真理亜と二人で、汗びっしょりになって砂の上に横たわっていたときに、わたしは、ふと、ミノシロモドキの言葉を思い出していた。わたしたちの社会は、争いを排除するために、チンパンジーのような闘争型の社会から、その一回り小柄な従兄弟、ピグミーチンパンジー＝ボノボのような、性愛を基調とする社会へと作り変えられたという……

　その年の夏あたりから、わたしたちを巡るさまざまなものの歯車が、微妙に狂い、不協和音を立て始めた。思春期の真っ只中で、自身の急激な変化にと

まどっていたわたしたちには、なかなか、そうした警告に耳を傾けるゆとりがなかったのだが。

最初の兆候は、何だっただろう。はっきりとは思い出せないが、わたしたちは、わけもなく苛立ち、不安を感じることが多くなっていたような気がする。真理亜は、頻繁に頭痛に悩まされていたし、わたしも、疲れてくると、しばしば吐き気を感じるようになった。他のみんなも、大なり小なり、心身の不調を抱えていたようだ。わたしたちは、それらは、いわば成長痛のようなものだとばかり思い込んでいた。

そうした中で、まず、一つの親密な関係が終焉を迎えた。

わたしがそれに気づいたのは、町で、二人の姿を見かけたときだった。

運河沿いの道を、瞬が早足で歩き、それを覚が追いかけている。おやっと思ったのは、以前に見たときと比べて、瞬の態度が明らかによそよそしかったからだった。

「なあ。機嫌直してくれよ」

覚は、瞬に追いつくと、後ろから肩に手をかけた。だが、瞬は、それを邪険に振り払う。

「どうしたんだよ、瞬？」

覚の声は、川面を吹く風に乗ってはっきりと聞こえてくる。みっともないくらい、うろたえているようだ。

「何でもないよ。ちょっと、一人にしてくれ」

瞬は、とりつく島もなかった。

「僕が悪かったよ。頼むから……」

覚は、瞬の両肩をつかんで言った。

「悪かった？　何が？」

瞬は、冷たい笑みを浮かべて吐き捨てた。

「それは……」

可哀想に、覚は、途方に暮れているようだった。

わたしは、生涯でただ一度だけ、覚に同情し、瞬に対して反感を覚えたものである。

「覚。恋愛ごっこは、もういいだろう？　僕は、君のお人形さんになるのに、いいかげん飽き飽きしたんだ」

　覚は、信じられないという表情になり、絶句する。

「う、うん。わかった。これからは……」

「わかってないね。そんなふうに、四六時中ずっと付きまとわれても、暑苦しいだけなんだよ。とにかく、僕は一人になりたいんだ。だから、今日からは、お互い別行動にしよう。じゃあな」

　瞬は、早口にそう言うと、覚を押しのけ、こちらに向かって歩き出した。その顔を見て、わたしは、どきりとした。さっきまでの冷笑は影をひそめ、悲痛に歪んでいる。次の瞬間、向こうもわたしに気づいたようだった。瞬は、即座に表情を消し、わたしを無視したまま、通りを横切って行ってしまった。

　覚は、さっきの場所に、悄然と佇んだままだった。声をかけようか迷ったが、彼の心中を慮って、やめにした。

　なぜだろう。わたしの頭の中では、疑問が渦巻いていた。なぜ、瞬は、あんなに冷たい態度を取らなくてはならなかったのか。わたしたちのグループの中でも、瞬は、誰よりも優しくて、思いやりの心が深いのに。別れ際に垣間見た彼の表情も、そのことを裏付けていた。あれは、あきらかに、苦痛の面持ちだったではないか。

　だが、翌日学校で会っても、瞬には、別段、動揺した様子は見られなかった。それとは対照的に、覚の表情は冴えないというのを通り越していた。誰が見ても、ふられたことは歴然としており、しかも、ときどき、諦めきれない様子で瞬の方を盗み見ていたりするのが、ひどく痛々しかった。

　それから、数日後のことだったと思う。もう一つの、不吉な予兆が現れたのは。

　この頃までに、全人学級の実技の時間では、それぞれが適性と習熟度に応じて、異なる課題を与えら

れていた。同じ呪力の技といっても、単純な撃力交換から常温核融合まで、百数十段階の難易度が存在するのだが、わたしたちは、ほぼ真ん中あたりまで来ており、中には、きわめて高度な技に挑戦する者もいた。

瞬の進度は、ここでも群を抜いていた。彼に与えられた課題は、鶏卵を二時間あまりで孵化させるという、とんでもなく難しいものだった。通常、鶏の卵は、産み落とされてから孵化するまで、二十一日を要する。つまり、外からは見ることのできない卵の中の胚に、呪力によって働きかけて、発生の過程を二百五十倍も加速しなければならないのだ。

生物に対し、直接呪力で干渉を行うというのは、技術面もさることながら、人格的にも優れていると認められた人間にだけ許可される技である。その意味でも、瞬に向けられた期待の大きさが、よくわかった。

意外なことに、覚もまた、上位グループの一角に食い込んでいた。彼の得意技は、おおむね光の反射に関連しており、中でも、空中に鏡面を作る技は、瞬の課題を除けば、クラスでも最高難度の一つだった。以前にも書いたかもしれないが、中が真空の空気レンズを作って遠くの映像を拡大するのは、鏑木肆星氏のような達人にしかできない技である。だが、微小な水滴を材料に空気中に想像上の壁を作り、光を全反射して鏡のように見せるのは、それより多少は容易なのだという。

ちなみに、わたしは、割れたガラス瓶を、熱で溶融させることなくつなぎ合わせるという、そこそこ難しいが、ひどく地味な課題に取り組んでいた。真理亜はというと、わたしとは逆に、身体浮揚という、みんなの注目を集める技の習得に努めている。守は……残念ながら、何をしていたのかよく覚えていない。

「早季。見てみろよ」

覚の声で頭を上げると、わたしの前方一メートル

ほどのところに、空間をすっぽり切り取ったように、銀色をした不定形の鏡面が浮かんでいた。真剣に課題に取り組む凛々しいわたしの顔が、正面から映し出されている。

「これ、ちょっと歪んでるんじゃない？」

わたしが素っ気なく言うと、賛辞を期待していたらしい覚は、膨れっ面になった。

「そんなことないよ。完璧な平面を作ったんだから」

「わたしの顔、こんなにしゃくれてないわ」

「何だよ。歪んでるのは、早季の心の方だろう？」

そう捨て台詞を残して、覚は、撤退して行った。銀色の鏡面は、空気に溶け込むように消滅する。その後、何となく、覚の後ろ姿を追っていると、こっそりと瞬の方へ近づいているのがわかった。瞬に気づかれないように、背後からそっと見守っているようだ。

まだ未練があるのかと思って呆れたが、さすがに、彼も、元通りに関係を修復するのは不可能であることを悟っているようだった。かすかに頭を振ると、五班の怜という小柄な少年に歩み寄る。怜は、媚びるような笑顔で覚を迎えた。前から、覚のことが好きだったということだが、瞬の存在があったので諦めていたらしい。覚が、怜の前に鏡面を作ってやると、怜は、クラスでも有名なナルシストぶりを発揮して、女の子のように可愛らしい自分の顔に見惚れていた。

その間も、瞬は、ざわついたクラスには我関せずといった様子で、集中力を保っていた。瞬の前には、素焼きのエッグスタンドに載せられた鶏卵が一個、ぽつんと置いてあるだけである。だが、彼に与えられた課題の難しさを知る生徒たちは、誰一人としてそばに近寄ろうとはしなかった。

そのとき、実技演習室の後方の入り口から、誰かが入ってきた。何気なくそちらを見たわたしは（誤解しないでほしいが、別にわたしが注意散漫だった

というわけではない）、驚いた。鏑木肆星氏その人だったからだ。ぴったり目の周囲を覆うゴーグルのようなサングラスをかけているが、細い鼻梁や顎、引きしまった皮膚は、かなり若々しいイメージを与えた。

　実技の監督をしていた太陽王が、あわてたように、鏑木肆星氏の方へ駆け寄る。小声で話している内容は聞き取れなかったが、どうやら、見学に来たと言っているらしい。

　鏑木肆星氏は、太陽王をお供に引き連れ、わたしたちの課題を見て回り始めた。たちまち、さっきとは打って変わった緊張感がクラス内を包む。最初から、このくらい真面目に取り組んでいれば、今頃、全員が課題を達成していたのではないかと思われるほどだった。

　鏑木肆星氏が、こちらに近づいてきた。もしかすると、わたしの課題に興味を示すのではないかと思い、かつてないほど真剣になって、瓶をつなぎ合わせた。ぴったりと合わせた断面から、氷が再氷結するように亀裂が消えていく。

　反応を窺おうと思い、顔を上げると、すでに鏑木肆星氏は、わたしの前を通り過ぎていた。

　がっかりした。やはり、この課題は地味すぎて、人の目を惹かないのだ。

　鏑木肆星氏は、数歩行ったところで立ち止まり、空中浮揚をしている真理亜に、たっぷり数秒間は視線を固定していた。技術的に興味深い点などあろうはずもないので、おそらく、真理亜の美貌と若々しい肢体を観賞していたのだろう。外見が若々しくても、年代的には、わたしたちの親と変わらないはずである。なのに、そんな目で少女を見る男には、いかに素晴らしい能力の持ち主であっても、本能的な厭悪（えんお）を感じずにはいられなかった。

　鏑木肆星氏は、覚の前では、かなり長い間足を止め、鏡面を値踏みし、アドバイスを与えていた。覚は、すっかり舞い上がったらしく、紅潮した顔で受

け答えする。

最後に、鏑木肆星氏は、白い鶏卵とにらめっこをしている瞬に、ゆっくりと近づいた。

誰もが、歴史的な出会いを期待した。瞬は、いずれは、鏑木肆星氏の衣鉢を継ぐと目されている生徒である。ここで初めて、直に指導を受けることになるのだろうと。

だが、途中で、鏑木肆星氏の足は、ぴたりと止まった。

どうしたのだろう。いぶかっていると、鏑木肆星氏の足は、逆に一、二歩後ずさりをした。それから、くるりときびすを返すと、みなが呆気にとられる中、さっさと実技演習室から出て行ってしまった。

瞬が、顔を上げ、後ろ姿を見送る。その表情を見て、わたしは、ぞっとした。

そこに浮かんでいたものが何だったのかは、今でも確信が持てない。冷笑に似ているが、はるかに恐ろしく、救いがない感情。あえて表現すれば、底知れぬ絶望を突き抜けた末の、狂気の笑みのような。

あわてふためいて鏑木肆星氏を追いかけていった太陽王が、戻ってきた。

「ええと……都合により、今日の実技の時間は、中止になりました。各自、課題に使ったものを片付けて、教室に戻ってください」

太陽王は、いつもの陽気な笑みを浮かべていたが、声は妙に嗄（しゃが）れた感じで、鼻の頭にはいっぱいに汗をかいていた。

「早季」

覚が、わたしのそばに来た。

「ねえ。いったい、何が起きたのかな?」

わたしの質問には答えずに、瞬の方へ顎をしゃくる。瞬は、身じろぎもせず、卵の前に座ったままだった。

「覚。行こうよ」

怜が、覚の腕をつかんで引っ張ろうとする。

「先に行っててくれ。僕も、後から行くから」

覚は、優しい声で怜の尻を押し、実技演習室から出て行かせる。

「君たちも、早く片付けなさい」

太陽王が、両手を叩きながら促す。

わたしは、割れた瓶のかけらを箱に入れて、立ち上がった。

「瞬。行かないの？」

真理亜が、声をかける。その後ろには、守が付き従っていた。他の生徒たちは、次々に実技演習室を出て、すでに、太陽王と一班の五人だけしか残っていない。

「ああ」

瞬が、立ち上がった。やや顔色が青白く感じられたものの、さっき見た歪んだ笑みは、影をひそめている。

「それ」

真理亜が、エッグスタンドを指さす。瞬が手を伸ばしたが、ふいに、立ち眩みを起こしたように身体が傾く。指先が滑り、エッグスタンドから卵が落下した。

みな、瞬が、卵を空中で止めることを信じて疑わなかった。訓練の賜物というべきか、この頃のわたしたちは、どんなに長い真言でも、瞬時に、圧縮した形で、心の中で唱えることができた。ましてや、瞬なら、間に合わないはずはなかった。

だが、卵は、なすすべもなく床に落下して、割れた。

どうしたんだろう。身体の調子でも悪いのか。みな、唖然として瞬の顔を見つめていた。だから、割れた卵自体に注目したのは、わたし一人だったと思う。

いや、もう一人いたかもしれない。

「さあさあ、君たち、早く行きなさい！　後は、先生が片しとくから」

太陽王が、びっくりするほどの素早さで割って入

ると、瞬と真理亜の背を押す。わたしたちは、あっという間に、実技演習室から追い立てられてしまった。

「瞬。だいじょうぶなのか？」

覚が、心配そうに訊ねた。もはや、自分がふられたことなど、念頭から消え失せているようだ。

「ああ。たいしたことない……ちょっと、疲れただけだから」

瞬は、覚と目を合わさずに答える。

「もう、今日は、早退した方がいいんじゃない？」

真理亜も、不安そうに眉間に皺を寄せている。

わたしは、誰よりも瞬のことを心配していたが、声をかけることができなかった。いや、声を出すことができなかった。

さっき見た、卵の中身のことが、網膜に焼き付いていたのだ。

粘液にまみれたそれは、どう見ても鶏のヒナとは程遠い形の、奇怪な化け物だった。

2

瞬は、一匹の犬を飼っていた。名前は、すばる。

清少納言の『枕草子』で「星はすばる」と謳われたプレアデス星団のことである。さらにその由来を調べてみると、数多くの星々が集って一つに見えることから、「統ばる」と呼ばれたことによるのだという。

枕草子が書かれてから二千年以上たった、ある真冬の晩に、一匹の仔犬が生を享けた。難産だったため、母犬は命を落とし、同胞たちもすべて死産だったらしい。しかし、唯一生き残った仔犬は、満天の星の下で、すばると命名された。

だが、すばるは、けっして、夜空に美しく輝く星のように見映えのいい犬ではなかった。神栖66町で飼われていた犬の大部分は、立耳、巻尾の純日本犬で、すばるのようなブルドッグは、他に見たことが

ない。（もっとも、皆無であれば、とうに血統が絶えているはずなので、単に、わたしが知らなかっただけかもしれないが）

　他の犬と比べると、すばるは、いかにも不格好だった。何のために、こんな犬を創らなければならなかったのかは、今も謎である。足が短くてずんぐりしており、顔は皺だらけ。斜め上から押し潰したような口吻（こうふん）の真ん中で、鼻が天井を向いている。図書館の跡地から発掘された本でブルドッグの由来について調べてみると、奇妙なことに、すべて第三分類とされていた。第三分類とは、「有害である可能性があり、慎重に管理すべき」とされる、通常は閲覧禁止の本のカテゴリーである。いったいなぜ、たかが犬種の成り立ちに関する知識が、そこまで神経質に扱われるのだろうか。

　覚は、以前こっそり読んだ本の中に、ブルドッグは、古代の英国で牛と戦わせるために創り出されたという記述があったと言う。もしそうだとすれば、ブルドッグの成り立ちは、我々の持つ闘争本能や攻撃性と密接に関連していることになり、禁書扱いになるのもうなずける。

　しかし、覚の言うことだからホラと決めつけるわけではないが、いくつかの理由から、わたしは、どうしてもその説を信じることができなかった。第一に、なぜ犬を牛と戦わせなければならないのかが、とうてい理解できない。覚が見た本では、娯楽のためとされていたようだが、わたしは、人間がそこまで無意味に残酷になれるとは思いたくないのだ。第二に、当時の牛のサイズはわからないものの、犬と比べればはるかに巨大なはずであり、いくら何でも両者が戦うのは無理があると思われる。第三に、わたしが知っている唯一のブルドッグ、すばるは、とても優しい犬だった。戦うために創出された犬の末裔が、他のどんな犬より温和な性質であるというのは、ちょっと納得しがたい。現に、わたしが知るかぎり、すばるが戦闘姿勢を見せたのは、生涯で、た

だの一度きりだった。そのことは、後述することになる。

ひとりっ子だった瞬は、すばるが仔犬の時から母親代わりになって世話をし、可愛がっていた。すばるは、歩幅が小さいため歩く速度が遅く、しかもすぐにバテてしまうため、いつも連れて歩くわけにはいかなかったが、ときどき、一緒に散歩しているところに行き合うことがあった。瞬のすらりとした脚に身体を擦り付けるようにしながら、ずんぐりむっくりの犬が早足で付いてくる様子は、かなりユーモラスだった。

だから、ある日、町を見下ろす丘の上を瞬が一人で歩いているのを見たとき、わたしは、すばるがいないのを不思議に思ったものである。悲しいほど空気の澄み渡った、秋の夕暮れ時で、先に述べた全人学級の実技の時間から、二週間ほどたっていた。

「瞬」

うつむいて何かを考えながら、こちらへ向かって歩いて来る少年に、わたしは、呼びかける。瞬は、はっとしたように顔を上げ、立ち止まった。

「早季」

瞬は、夢から醒めたような声で答える。誰(た)そ彼(かれ)時、彼(か)は誰(たれ)時とはよく言ったものである。夕刻に特有のおぼろな光のために、表情までは読み取れなかった。

「どうかしたの?」

彼が動こうとしないので、一歩近づこうとすると、瞬が、鋭い声で制した。

「来るな!」

わたしは、当惑して立ち止まった。二人の間隔は、二十メートルほどあっただろうか。

「どうして?」

わたしの問いかけは、悲しげに響いた。

「……ごめん。でも、僕は、一人になりたいんだ」

「一人に?」

「ああ」

瞬は、まっすぐ、こちらを見つめかけてから、目を逸らしたように見えた。

「だから、覚とも別れたの？」

「まあ、そうかな」

「でも、なぜ？　どうして、友達をみんな捨てて一人になりたいの？」

「それは……説明しても、早季にはわからないよ」

瞬は、ポケットから、何かを取り出した。夕日が反射して、それが、金属製の球であることがわかる。ハチ玉だ。呪力によって宙に浮かせ、高速で回転させると、ぶーんという蜂の唸りのような音を発する。全人学級に入学して、能力開発教室で最初に与えられた玩具の一つだった。今では、クラスの誰一人見向きもしないような代物であり、ましてや、瞬のような優等生がそんなものを弄ぶのは、かなり違和感があった。

「しばらく、会えなくなると思う」

ハチ玉は、大小三個あった。瞬の顔の前で夕日に煌めきながら回転し、微妙に上下する三つの音階で、不安定な和音を奏で始める。

「会えなくなるって、どういうこと？」

「当分、学校へは行けない。僕は、療養しなきゃならないんだ」

「瞬、病気なの？」

わたしは、ひどく心配になった。もしかして、わたしを近づけようとしないのは、伝染性の病気にかかっているせいなのか。

「うん。病気……って言っても、風邪とか腸炎みたいなもんじゃない。どう言えばわかるかな。身体の病気じゃなくて、いわば、心の病気なんだよ」

このとき、わたしには、心の病気という意味がわからなかった。心に感染する、細菌やウイルスがいるのだろうか。

「じゃあ、僕は、もう行かなきゃ」

「待って」

わたしは、きびすを返しかけた瞬を、呼び止め

た。

「学校じゃ会えなくても、ときどき、お見舞いに行っていいでしょう？」

「それは、どうかな」

瞬は、何かを言うのをためらっているようだった。

「僕は、もう、あの家にはいられないし」

わたしは、驚いて、息をのんだ。

「どこへ行くの？」

「療養のための小さなバンガロー、というより、ただの小屋だけどね。二、三日中には、そこへ移って、自活を始めなきゃならない」

「それ、どこにあるの？」

「場所は、言ってはいけないことになってる」

わたしは、絶句した。これまでなら、誰から口外を禁止されようと、わたしたちの間に隠し事などありえなかった。それが、本当に何も喋れないというのなら、すでに、事態は想像を絶するくらい悪化しているのかもしれない。

「瞬」

何を訊けばいいかわからなくなり、頭が真っ白になる。

「本当に……本当に、一人ぼっちになっちゃったの？　すばるは、どうしたの？」

わたしは、ひそかに最悪の答えを予期していた。

「家にいるよ」

瞬は、あっさりと言う。

「散歩したくなったから、一人で、こっそり抜け出してきたんだ」

すばるが無事とわかって、少しだけほっとしたものの、不安は、ますます高まってきた。いったい、瞬は、どうしてしまったというのだろう。

「わたし、瞬の力になりたいの」

答えはなかった。ずっと、三つのハチ玉の唸りだけが聞こえている。

「瞬。わたし、ずっと、瞬のことが……」

わたしは、思い切って告白しようとしたが、瞬は、途中でわたしの言葉を遮った。

「早季。迷ったんだけど、やっぱり、このことだけは、言っておいた方がいいと思う」

「え？」

「二年前の夏季キャンプを覚えてるだろう？　僕らは、離塵師に呪力を凍結されたことを隠し通せたと思ってた。でも、そうじゃなかったんだ」

「そうじゃないって？」

何を言い出すのかと思い、わたしは、ぽかんとした。

「たぶん、全部、バレてたんだ。どういう意図かはわからないけど、僕らは、単に処分を保留にされてただけなんだよ」

「言ってる意味が、よくわからないんだけど」

「僕らは、ずっと監視されてた。僕がそれに気づいたのは、つい最近のことだ」

まるで鉛を呑んだように、身体が重くなる。ゆっくりと冷や汗が流れ出した。

「今さら、こんな警告をしても無意味かもしれない。でも、早季。猫には気をつけろ」

「猫？　何、それ？　ネコダマシのこと？」

瞬は、曖昧に首を振る。肯定とも否定とも取れる所作だった。

「そうだ……これを、早季にあげるよ」

瞬は、首回りに付けていたチョーカーのようなものを外すと、わたしに投げてよこした。

両手で受け取ると、ずしりと重い。固くて分厚い革の首輪に、金属の輪がいくつも嵌っていて、蝶番で開くようになっている。むしろ首枷（くびかせ）と呼ぶべき代物かもしれない。

「これ、何？」

「猫除けのおまじない。僕が作ったんだ」

「もしかして、すばるのと、おそろいなの？」

比べると、すばるの首輪の方がまだしもという感じがしないでもない。わたしの冗談に、瞬は、ちら

りと白い歯を見せたが、笑い声までは立てなかった。

「とにかく、僕が言ったこと、みんなにも伝えてくれ」

そう言うと、瞬は、わたしに背を向けた。歩き出そうとして、すぐに足を止める。

瞬のやって来た方から、小さな白い生き物が近づいてくるのが見えた。すばるだ。短い足を懸命に動かして、瞬を追ってきたらしい。

「すばるの馬鹿……。あれほど、付いてくるなって言ったのに」

瞬は、小さな声で独りごちた。そして、わたしからも、すばるからも、逃げるように、一人で丘を駆け下っていった。

その後を、尻尾を振りながら、小さなブルドッグが追う。もともと走ることが得手ではないとはいえ、妙におぼつかない足取りだった。

そして、気がついた。すばるが、右の後肢に何らかの傷害を負っているらしいことに。いや、それだけではない。もっと、何かがおかしい。

だが、違和感の正体を見きわめようとする前に、ブルドッグの後ろ姿は、夕闇の中へと溶け込んでいってしまった。

「はっきりしてるのは、僕らは、瞬の行方を捜さなきゃならないってことだ」

覚が、静かな声で宣言した。

「でも、どうやって？」

覚の言葉は心強かったが、わたしは、あえて反問してみる。

「どうやって？　思いつくかぎり、あらゆる方法を使ってだよ」

覚の確信は、小揺るぎもしないようだ。

「覚は、もしかして、まだ、瞬とやり直したいって思ってるんじゃない？」

真理亜は、少々皮肉っぽい眼差しを向ける。

「瞬が離れていったのが、自分を嫌いになったせいじゃないってわかったものね」

「そんな気はないよ」

覚は、素っ気なく答えた。

「そんなことより、瞬に会ってじかに訊かなきゃならないことが、山ほどあるだろう？　僕らが監視されてるっていうのは、本当なのか。猫に気をつけろっていうのは、どういう意味なのか。そして……」

覚は、拳を握りしめていた。

「瞬が抱えている問題は、いったい何なのか」

わたしは、心が疼くのを感じた。実技演習室で見た割れた鶏卵の中身については、まだ誰にも話していなかった。直感では、それが、瞬の直面している問題に関係しているのは間違いないと思ったが、口に出すことで、恐ろしい事態が現実になってしまいそうな気がして、どうしても話すことができなかったのだ。

瞬が学校に姿を現さなくなって、すでに四日が経過している。わたしたちは、放課後に、校舎の裏に集まって鳩首会談をしていた。

「……でも、もし、僕らが監視されてるんなら、あんまり目立つような動きはしない方がいいんじゃないかな？」

守が、遠慮がちに言う。

「うん、そうね。わたしも、危険すぎると思う」

真理亜が、守に同調する。

「じゃあ、瞬を見捨てろっていうのか？」

覚が、気色ばんだ。

「そうは言ってないけど。でも……」

真理亜は、神経質そうに周囲を見回す。

「今だって、誰かから見られてるような気がするのよ」

「誰もいないじゃないか。馬鹿馬鹿しい」

覚は、唇を歪める。わたしは、はっとした。

「ねえ、覚えてる？　わたしたちが、奇狼丸から逃げ出した晩のこと。気持ち悪い鳥が、どこまでも尾

行してきたじゃない」

「早季まで、何を言ってるんだよ？　そりゃあ、バケネズミは、偵察にヨタカやカラスを訓練して使ってるみたいだけど」

「バケネズミに、そこまでできるんなら、倫理委員会なら、もっと巧妙なやり方をするんじゃない？」

「そうよ！　わたし、聞いたことがある。鏑木肆星とか日野光風クラスの達人や、建部優みたいな専門の技術者なら、遺伝子を改変するか発生過程を操作して、思い通りの生き物を創り出せるんだって。そのへんを飛んでるミツバチが、わたしたちを見張ってたって、おかしくないのよ」

　全員が沈黙した。重苦しい空気がのしかかってくる。たしかに、昆虫に監視されているとしたら、わたしたちには注意のしようがないから、お手上げだろう。昆虫が、アジトに帰って自分の見たものをどこまで伝えられるかは、別問題だろうが。

「……わかった。とにかく、僕は、瞬の行方を捜してみる。気が進まないなら、やめればいい。無理強いはしないから」

「わたしも、捜すわ」

　わたしは、間髪を容れず、支持を表明する。

「ちょっと、待って。まるで、わたしたちが瞬のことを心配してないみたいな言い方は、やめてよ」

　真理亜は、抗議した。

「ただ、四人揃って、ぞろぞろ移動したりするのは、目立ちすぎるから、やめた方がいいっていうことよ。そうでしょう、守？」

　守は、ぽかんと口を開けた。彼が言いたかったこととは若干の乖離があったようだが、結局、何も言わずにうなずいた。

「そうだな。じゃあ、手分けして調べてみよう」

　覚の言葉に従って、わたしたちは、二手に分かれた。真理亜と守は、とりあえず、瞬と親しかった他の班の生徒たちに会って、聞き込みをしてみるという。わたしと覚は、直接、瞬の家を訪ねてみること

にした。

　近くの船着き場を見ると、うまい具合に、青いイルカの絵のある舟が係留されていた。わたしと覚は、舟に乗り込み、町に網の目のように張り巡らされている水路を進んだ。

　神栖66町を構成する七つの郷（さと）のうち、松風（まつかぜ）の郷は、一番北に位置している。瞬の家は、さらに、その北の外れにあった。周囲を圧する入母屋（いりもや）造りの大きな家屋で、黒光りがする大黒柱は直径が一メートル、その上で大屋根を支えている大梁（おおばり）は、長さが三十メートル以上あったと思う。幼い頃は、よく遊びに行き、木造建築とは思えない偉容に畏怖の念に打たれたものである。和貴園でも高学年になると、遊び場は野外に移り、互いの家を訪問することも稀になってしまったのだが。

　わたしたちの舟は、軽快に水路を縫って走ったが、松風の郷へ行く分岐点を前にして、覚が、急に速度を落とした。

「どうしたの？」

「あれ、見てみろよ」

　覚が目で指したのは、分岐点のあたりに停泊している数隻の船だった。どれも、わたしたちが乗っている舟よりずっと大きい。側面には、『神の眼』を象っている町章と、赤い番号が見える。これらは町の公用船である印で、さらに、守り本尊を示す数種類の梵字によって、どこの部署に属する船かは、おおまかにわかるようになっていた。ちらりと見えたのは、阿弥陀如来や千手観音などを意味する𑖮𑖿𑖨𑖱𑖾（キリーク）という梵字だったから、おそらく、環境衛生課か保健所の船だろう。

「いったん、通り過ぎよう」

　わたしたちの舟は、水路をまっすぐに走った。横目でこっそり分岐点の方を盗み見ると、水上二メートルほどの高さに、黄色と黒の縞模様の綱が張り渡されているのがわかった。通行禁止を意味する標識である。

「どうなってるの？　わたしたち、松風の郷には入れないってこと？」

「たぶん、そうだ」

覚は、深刻な表情で言った。

「でも……まさか」

何か、瞬に関係があるのだろうか。そう訊きたかったのだが、怖くて、とても口に出すことができなかった。

「松風の郷へは、歩いて入るしかないな」

「でも、道筋には、見張りがいるんじゃない？」

「この先をぐるっと迂回して、森の中を通って行こう」

わたしたちは、さらに一キロほどいった船着き場で上陸し、舟を係留した。そこから、いったん反対方向へ歩く。左手は草地で、右の方には、裏白樫（ウラジロガシ）や藪椿（ヤブツバキ）などの照葉樹林が広がっていた。誰にも見られてないのを確認してから、林の中へと踏み入る。

「何だか、嫌な予感がする」

「ああ。僕もだ」

一歩進むごとに、奇妙な胸騒ぎのような感覚は強くなっていった。後ろ髪を引かれるというが、まるで前方に何か反発する磁場のようなものが存在し、身体が物理的に、後ろに引き戻されるような感じを覚えるのだ。

どのくらいの距離を進んだだろうか。しばらくすると、またもや、黄色と黒のだんだら模様が目に飛び込んできた。森の中にまで、しっかりと通行禁止の綱が張られているのだ。

「嘘でしょう？　こんなとこ、誰が通るっていうの？」

「おそらく、松風の郷を、ぐるりと取り囲んでるんだ」

覚は、腕組みをして、綱の行方を眺めていた。途中、何本もの木々に結びつけられて、ジグザグに走っているが、大きくカーブしているように見えないこともない。

「とにかく、これを越えるしかない」

覚は、目の高さに張られた網をくぐった。わたしも、すぐ後に続く。重大な規則違反をしているという罪の意識で、鼓動が少し速くなったが、選択の余地はなかった。

「しっ」

突然、覚が立ち止まり、静かにしろというサインを送ってきた。わたしは、化石する。

三十メートルほど先、木立の間に、動くものが見える。

覚が振り返って、唇の形で、見たものを伝える。バ・ケ・ネ・ズ・ミ……。どうやら、歩哨に立っているバケネズミの兵士らしい。

わたしたちは、しばらく、木陰にしゃがみ、息をひそめていた。呪力で微風を起こし、こちらの臭いが向こうに伝わらないようにする。

永遠と思えるほど長い時間、おそらく十分ほどが経過した。どこからか、鋭い鳴き声が響いてくる。林の中で油を売っていたらしいバケネズミは、弾かれたように飛び起きると、走り去っていった。

「よし、行こう」

わたしたちは、再び、前進し始めた。やがて、照葉樹林が途切れると、赤土の道に出た。反対側には、松風の郷という名の元となった、広大な赤松（アカマツ）の林が広がっている。

念には念を入れて、人間も、バケネズミもいないことを確かめる。それから、大急ぎで道を横切り、アカマツ林に入った。

そのとたん、ぞっと身の毛がよだつような感覚に襲われた。

わたしは、半分パニックに陥り、慌ただしく周囲を見渡した。アカマツと小楢（コナラ）、それに粽笹（チマキザサ）などの群落。別段、変わったものは見られない。それなのに、この不気味な感じは、いったい何だろう。

「やっぱり、変だな。ここの雰囲気は、良くないよ。長くいてはいけない場所だ」

覚も、わたしと同じく、嫌な感じを味わっているらしかった。

「どうする？」

「ここまで来て、引き返すわけにはいかないでしょう？」

覚は、うなずいたが、表情には、あきらかな不安の影がよぎっていた。

アカマツの林を、さらに四、五十メートル進む。すると、信じられないものに出迎えられた。ちょうど目の高さに張られた、一本目の綱。だが、今度は、単なる立ち入り禁止を示す、黄色と黒の綱ではなかった。

「八丁標（はっちょうじめ）だわ！　どうして？」

それは、たくさんの紙垂（しで）が下がった、真っ白な注連縄（しめなわ）だった。神栖66町と外界を隔てているはずの八丁標が、どうして、町の中である、松風の郷に張られているのだろう。

「まさか、町の大きさが、ここまで縮んじゃったってこと？」

「いや、違うな」

注連縄を調べていた覚が、言う。

「この縄は、新しい。どう見ても、作られたばっかだ。古い八丁標は、たぶん、前と同じ場所に張られたままだと思うよ」

「じゃあ、これは、何？」

「町の中に、別の結界を作ったんだ。松風の郷を、すっぽり包み込むように」

どう考えても、異様だった。本来、外から悪いものが入ってこないように道切りをする八丁標が、町の中にある地域を封じ込めるように張られているのだ。

覚は、大きく溜め息をついた。

「とにかく、この先に進もうと思ったら、八丁標を越えて行くしかないな」

わたしは、うなずいた。八丁標を越えるのは、単なる立ち入り禁止の綱を無視するのとは意味が違

う。もし発覚すれば、ただではすまないだろう。だが、すでに覚悟はできている。瞬に会うためには、どうしても、ここを越えなければならないのだ。

わたしたちは、紙垂に触れないよう気をつけながら、注連縄の下をくぐった。

最初は、取り立てて変わったところもないように思えた。だが、進むにつれて、次々と、異状が露呈し始めた。

アカマツとコナラの林には、令法（リョウブ）や山漆（ヤマウルシ）、鬼縛り（オニシバリ）、捩木（ネジキ）などの下生えが豊富だったが、ある地点を境にして、それらが竜巻に薙ぎ倒されたかのように渦状に捻れ、枯死しているのだ。

覚の表情が険しくなった。わたしたちは、無言のまま先を急ぐ。

空は薄曇りだったが、太陽はまだ傾いていない。それなのに、周囲は、しだいに薄暗くなっていく。アカマツ林の樹冠が、日光を遮っているせいだ。見上げると、鬱蒼と茂った枝と枝が融合し、屋根のようになっている。下生えとは逆に、アカマツは、異常なまでに増殖し、繁茂していた。

覚は、呪力で太い枝を折り取ると、松脂が滴る先端部を発火させた。真っ昼間だというのに、松明を頼りに歩かなければ、足下がおぼつかないのだ。

途中、木々の間から、光が射し込む小さな空閑地が見えた。だが、そこへ辿り着くと、地面は、アカマツの根によって埋め尽くされていた。大蛇のように太い根が、辺り一面を這い回り、絡み合い、とぐろを巻いている様は、この世のものとも思えず、通行するにも不可能だった。よっぽど、呪力で切り払ってしまおうとも思ったが、ここを通ったという痕跡を残すのは、得策ではないだろうと思い直す。やむをえず、空閑地を避け、密生した木々の間を擦り抜けるようにして歩いた。

「早季」

松明をかざした覚が、振り向いた。

「見てみろよ」

　覚が示したのは、木々の表面だった。普通に見る、亀甲状に割れ目が入ったアカマツの樹皮ではなかった。至るところで、丸い瘤のようなものがいくつも重なり合い、癌細胞のように無秩序に成長しつつあるのだ。

　さらに、そのいくつかからは、人間の顔にそっくりの模様が浮かび出そうとしている。想像を絶する苦痛に顔を歪め、絶叫する、無数の亡者の顔が。

　わたしは、心底ぞっとして、目をそむけた。

「早く、行きましょう」

　その先には、さらにおぞましい景色が待っていることを、半ば覚悟していた。だから、続いて目に飛び込んできた光景には、啞然とする。

　そこは、大きな岩やごろた石が転がっている斜面だった。アカマツは疎らで、代わりに群生していたのは山躑躅（ヤマツツジ）だった。奇怪なのは、秋にもかかわらず、それらが開花していることである。本来は春に咲くはずの赤みがかったピンクのヤマツツジの花は、いっせいに狂い咲きし、しかも、今までに嗅いだことがない噎（む）せ返るような芳香を放っていた。

「きれい……」

　わたしは、花に吸い寄せられるように近づきかけた。

「やめろ。触るんじゃない」

　覚が、わたしの腕をつかんだ。

「この花、絶対おかしいって。見てみろよ、これ」

　覚は足下を指す。そこには、夥しい数のアリやハチ、甲虫、クモなどの死骸が散乱していた。

「この匂いだって、きつすぎると思わないか？　もしかしたら、有毒な成分が含まれてるのかもしれない」

「ヤマツツジに？」

「どう見たって、普通のヤマツツジじゃないだろう」

その言葉で、呪縛が解けたようだった。わたしは、さっきまで美しいと思っていた花を見て、その毒々しさ、おぞましさに身震いした。

いや、身体が震えたのは、ヤマツツジのせいばかりではなかった。

「これ、何なの？　この冷たさって？」

風に乗って、林の奥から冷気が漂ってきたのである。

「……見てみようか」

覚は、腹を括ったようだった。わたしたちは、何かに憑かれたように冷気の源へと突き進んでいった。

「雪だ！」

一目見て、覚が叫んだ。

「まさか、そんな。まだ秋なのに。雪なんか、どこにも降ってないはずよ」

わたしも、自分の目が信じられなかった。

覚は、雪のように木々の根元を覆っている、白いものに手を伸ばす。

「いや……違う。これ、雪じゃない」

「じゃあ、何なの？」

わたしは、手を触れる勇気がなかった。

「霜だよ。あんまり大量に降りてるから、雪みたいに見えるんだ。原因はわからないけど、ここの地面だけが異常な低温になって、空気中の水分が氷結したんだろう」

霜がいつまでも溶けずに残っているのは、その部分の土だけが、大地の底まで永久凍土のように凍りついているからに違いない。

何もかも、滅茶苦茶だわ。わたしは、口の中でつぶやいた。ここでは、あらゆるものが、本来あるべき秩序から逸脱しているようだった。

霜で滑りやすくなっている地面を迂回し、百メートルほど進んだところで、アカマツの林は唐突に終わりを告げた。

「気をつけて」

覚が、小声で注意を促す。わたしたちは、腹ばいになって、林の際に近づいた。

眼前に広がった景色に、くらくらと目眩（めまい）がする。直径が二百メートルはあろうかという擂（す）り鉢状の穴。わたしの目の前から、巨大な蟻地獄を思わせる急斜面が、百五十メートル以上の深さまで続いている。

「信じられない。まさか、隕石でも落ちたの？」

「しっ」

覚が、唇に指を当てた。

「あそこに、人がいる」

覚のささやき声で、やっと気がついた。擂り鉢の底に、人影が見えるのだ。

「……隕石なわけがないよ。もし、こんなクレーターができるほど大きな隕石が落ちたら、大爆発になる。何の音も聞こえなかったはずがないだろう？」

さっきのわたしの質問に、ほとんど歯擦音だけのささやき声で答える。

「じゃあ、この穴は、何よ？」

わたしも、覚を真似て、ささやき返した。

「何でも、僕にばっか訊くなよ」

「なーんだ。わからないんだ？」

そう言うと、覚は、むっとしたようだった。

「推測ぐらいはできるけどね。おそらく、この穴は、あそこにいる人たちが、呪力で掘ったんだと思う」

「何のために？」

「しっ」

再び、覚が、わたしを制した。

底にいた二人の人物が、ゆっくりと浮かび上がってくる。こちらに来るのではないかと思って、ひやひやしたが、反対側の縁に降り立つと、どこかへ立ち去った。二人の姿が見えなくなると、覚は、普通の話し方に戻った。

「……きっと、何かを発掘しようとしてるんだよ」

わたしは、擂り鉢の底を透かして見た。何か黒い

ものが見えるが、ちょうど砂の隆起の陰になっているため、判然としない。たぶん、反対側からなら、よく見えるはずなのだが。そう思ったとき、急にひらめいた。

「覚。あのあたりに、鏡を作ってみて」

指で示すと、彼は、即座に、わたしのアイデアを理解した。

わたしたちとは反対側の斜面の中程で、空気が陽炎のように動いた。乱反射した光が、燦々と輝く。それは、揺らぎながらも、徐々に、銀色の鏡面へと収斂（しゅうれん）していった。

「もっと、下に向けて」

「わかってるよ。うるさいな」

今や、完全な実在感を伴って風景を映し出している鏡を、覚は、ゆっくりと傾けていく。ほどなく、擂り鉢状の穴の底で頭を出している物体が捉えられた。

わたしたちは、愕然とした。ここへは、何度となく来ていたはずではないか。どうして、この場所だったということに、今の今まで気づかなかったのか。

鏡面に映っているのは、ほとんどが土に埋まった、巨大な木材の一部である。それが、瞬の家を支えていた黒光りする大梁であることは、一目見ただけであきらかだった。

わたしたちは、言葉少なのまま、帰路についた。アカマツ林の中で見た、奇怪な現象もさることながら、意識の大半を占めていたのは、瞬のことだった。

何が起きたのかはわからないが、瞬の家は、大地に呑み込まれてしまったようだった。あの中にいたのなら、まず生存は絶望だろう。だが、なぜか、瞬はまだ生きているという確信があった。

今、彼は、どこにいて、どういう状況に置かれているのか。無事なのか。もしかすると、助けを求め

ているのではないだろうか。答えの得られない質問ばかりが、次々に頭の中を駆けめぐる。

「瞬は、家を出るって言ってたんだろう？　きっと、無事だよ」

覚は、わたしにというより、自分に言い聞かせるように言った。

「明日の朝、捜しに行こう。絶対に、見つけるから」

「今すぐ、行った方がいいんじゃない？」

「もう、そろそろ、日が暮れる。瞬の居場所がどこなのか、今は手がかりさえないんだ。焦る気持ちはわかるけど、今日は出直した方がいい」

なぜ、そんなに冷静に、大人の意見を述べられるのかと思う。瞬のことが心配ではないのだろうか。わたしは、覚に対し、かすかな不信感を抱いた。

真理亜たちと待ち合わせをしていた公園に来たが、彼女たちの姿はない。しばらく待ってみたが、結局、先に家に帰ることにした。

「じゃあ、また、明日」

まるで、ピクニックに行ってきた帰りのような挨拶を交わすと、四つ辻で覚と別れた。覚の家は茅輪の郷だった。わたしは、船着き場に繋いであった自分の舟に乗って、水車の郷へ戻る。

筑波山の彼方に夕日が没すると、町には薄闇の帳が下りた。方々に篝火がともり始め、暗い水面にオレンジ色の斑紋をちりばめる。それは、夢見心地を誘うような風景だった。いつもであれば、心穏やかに一日の出来事を振り返って明日に思いをはせる、一番好きな時間帯なのだが。

家の裏手にある舫柱に舟をつないで、勝手口から入ると、両親が二人とも揃っていたので、少し驚いた。珍しく、二人とも、仕事が早く終わったらしい。

「お帰り、早季」

母が、優しい笑みを浮かべて出迎えてくれる。

「ご飯ができてるわよ。久しぶりに、三人一緒に食

べましょう」

食卓に着くと、父が、わたしの顔をじろじろ見て、にやりとする。

「何だ。泥だらけじゃないか。顔と手を洗っといで」

言われたとおりにして、席に着き直す。父に、どこへ行ってたのか訊かれると思ったが、案に相違して、何も言われなかった。父は、今論議されている、町の中心部に街灯を設置しようという計画について話してくれた。篝火だけが照明だと、いろいろと支障を来すことがあるらしい。だが、街灯に白熱灯を使うには、電力は公民館の拡声器から放送を流すためにしか使ってはならないと定めた、一般倫理規定を見直す必要があるのだという。

「いくら陳情しても、倫理委員会のお歴々が、なかなか、うんと言ってくれなくてね」

町長である父は、箸の先で煮魚をほぐしながら、こぼした。

「でも、それなら、図書館の照明を、先に何とかしてほしいわね」

母は、町長より格上の図書館司書として、注文を付ける。

「図書館には、今年度、町の予算の五分の一を使ってるんだよ」

「わかってるわ。でも、最近は、夜も仕事をすることが多くなったから、こういう燐光灯だけだと、不便なのよ」

母は食卓の照明を指さす。当時、燐光灯は、広く使われていた照明器具だった。ボンタン球と呼ばれる大きな丸い管球の内側に、白金だかイリジウムだかを含んでいる特殊な塗料を分厚く塗ったもので、呪力でエネルギーを与えることによって、一定時間発光する。だが、光が持続するのは、せいぜい三十分で、光が減衰するたびに呪力で尻を叩いてやらなければならないという、煩わしさがあった。

「今のところ、発電の余力があるのは、水車の郷の

七号水車だけだからね。図書館のためだからといって、茅輪の郷まで電線を引っ張るのは、無理な話だよ」

「図書館前の水路に、新しい水車を作ればいいじゃない」

「それは、難しいな。交通の妨げにもなるし、あのあたりの水路は、発電には、ちょっと流れが遅すぎるんだ」

二人は、真剣に議論を続けたが、わたしには、何かが不自然に思えた。まるで、話題がもっと不都合なものへ移行するのを避けるために、議論する演技をしているような印象を受けたのだ。

「……ねえ、瞬のこと知らない？」

わたしがそう言うと、二人は、ぴたりと話をやめた。

わたしは、鼓動が速くなるのを感じた。危険な質問であることは、重々知っていたはずなのに、なぜか、口をついて出てきてしまったのだ。わたしたちが、こんなに瞬のことを心配しているのに、延々と無意味な議論を続けている両親に、腹が立ったからだろうか。その裏には、いちかばちか訊ねてみて、手がかりを得られないかという計算もあったかもしれないが。

「瞬というのは、青沼瞬君のことかな？」

父が、静かな声で訊く。

「そうよ。急に、全人学級に来なくなっちゃったから」

わたしの声は、少し掠れていたと思う。

「そういうことは、話すのを禁じられてるのよ。早季も、知ってるでしょう？」

母が、たしなめるような笑みを浮かべて言った。

「うん……でも」

わたしは、うつむいて黙り込んだ。涙が溢れそうになる。

「早季……さっちゃん」

父は、わたしの涙に弱かった。さっちゃんという

のは、わたしがせいぜい四、五歳くらいまでの呼び名である。

「あなた」

　母が、気遣わしげに、父を見やった。

「うん、いいんだ。……早季。いいかい。人生というものには、何度か試練がやって来る。親しい友達との別れも、その一つだよ」

「瞬は、どうなったの？」

　わたしは、父の言葉を遮って、叫んだ。父は、困ったように眉根を寄せる。

「行方不明だ」

「どうして？」

「数日前に、松風の郷で、大きな事故があった。それ以来、青沼瞬君とご両親は、所在がわからなくなってる」

「事故って、何？　そんなの、全然聞いてないわ。どうして、今まで……？」

「早季！　いいかげんにしなさい」

　母が、厳しい口調で言った。

「でも」

「私たちは、あなたのことを心配してるの。いい？　口答えなんかしないで、お父さんと、お母さんの言うことを聞きなさい。これ以上、よけいなことを詮索したりしたら、絶対にだめよ」

　わたしは、渋々うなずくと、席を立った。

「早季、お願い」

　わたしが食堂を出ようとしたとき、後ろから、母の涙声が迫ってきた。

「私は、二度と……いいえ、あなただけは失いたくないの。言うとおりにして」

「わかった。今日は疲れたから、もう寝る」

「おやすみ、早季」

　父は、そう言いながら、目頭を押さえている母の肩を抱き寄せた。

「おやすみなさい」

　二階への階段を上がる途中ずっと、わたしの耳の

中には、母の言葉がこだましていた。

『私は、二度と……いいえ、あなただけは失いたくないの』

その声は、ずっと以前に聞いた、もう一つの悲痛な叫びと二重になって聞こえた。

『もう、子供をなくすのは嫌よ！』

ベッドに入ってからも、様々な思いが去来して、なかなか寝付かれなかった。

わたしに姉がいたのではないかという思いは、以前からあった。最初にそういう疑いが芽生えたのは、十歳前後の頃だったと思う。母がたまたま書斎に置きっぱなしにしていた、昔の漢和辞典（第三分類）を見たのがきっかけだった。和貴園の授業で、子供の名前には親の期待や願いが投影されているということを知り、わたしの名前『早季』には、どんな意味が込められていたのか知りたいと思ったのだった。

『早』には、『よあけ』、『はやい』、『わかい』という三つの意味があったが、どうも、ぴんと来ない。子供なのだから、若いのは当たり前としか思えない。次に、『季』という文字を見てみる。『おさない、わかい』、『とき』、『ちいさい』……。代わり映えしないと思ったとき、最後の意味が目に入った。

『末っ子』

もちろん、それだけで、わたしが現実に『末っ子』だったとまでは断定できないだろう。だが、母は、誰よりも、漢字の持つ意味に敏感だった。もし、わたしが長女であったなら、おそらく『季』という文字は使わなかっただろうという気がした。

そうして考えるうちに、幼年期のおぼろげな記憶が、ゆっくりと蘇ってきた。わたしが、まだ二、三歳の頃だったと思う。いつもそばにいて、わたしを可愛がってくれた人がいた。その人は、わたしよりは年長で大きかったが、母と比べると、ずっと小さかった。そして、両親は、わたしを「さっちゃん」、

その人を「よっちゃん」と呼んでいた。

　そうだ。姉の名前は、吉美だった。

　これが、自己暗示による記憶の捏造でないという証拠は、どこにもない。だが、二度と子供を失いたくないという、母の悲痛な叫びを考えあわせてみると、わたしに姉がいたという仮定は、とたんに現実味を帯びてくる。

　もし、それが事実だったとすると、姉は、どうして、いなくなったのだろう。やはり、不適格ということで、排除されてしまったのか。それとも、瞬に起きたことと何か関係があるのだろうか。

　いくら考えても、結論は出ない。思考は、途中から堂々巡りに陥っていた。

　そのとき、窓ガラスを叩く音がした。

　はっとして、頭を起こす。カーテンは開けたままだったため、月明かりに照らされて、二階の窓の外に浮かんでいる人影が見えた。

　一瞬、超自然の存在に対する迷信じみた恐怖にとらわれて、腰が抜けそうになったが、月光に光る赤い髪の毛のおかげで、真理亜であることに気がついた。

「どうしたの？　こんな時間に」

　わたしは、すぐに窓を開けながら訊ねる。

「ごめん。公園にも寄ってみたんだけど、もう、誰もいなかったから。さっき家に帰って、大目玉をくらったわ」

「早く、入って」

　両親に気づかれると、まずい。わたしは、真理亜を窓から中に招き入れた。

「どうして、こんなに遅くなったのよ？　みんなに話を聞いただけなんでしょう？」

　真理亜は、わたしの首っ玉に、ひしとしがみついた。

「真理亜？」

「怖かったわ！　もうちょっとで、わたしたちも、殺されてたかも」

「どういうこと？　ちゃんと、わかるように説明して」

真理亜は、しばらく震えていたが、少し落ち着くと、わたしと並んでベッドに座って、語り始めた。呆れたことに、彼らは、当初、瞬と親しかった子を、行き当たりばったりに探し回っていたらしい。守には、なぜか、捜し物を見つける能力が備わっており、そんなやり方でも、二、三人には話を聞けたという。だが、手がかりは、皆無だった。

そのうちに、奇妙なことに気がついた。瞬の友達というのは、わたしたち一班以外では、同じ松風の郷に住んでいる子供たちが多かったが、その大半が全人学級を欠席しており、かろうじて一人だけ見つけた子も、堅く口をつぐんで、何も語ろうとしないのだ。

松風の郷へ行こうかとも思ったらしいが、すでに、わたしと覚が向かっているために、全人学級へ戻ってみたのだという。

だが、放課後、何時間もたっており、当然のことながら、生徒はほとんどいなかった。帰ろうかと思ったとき、以前、瞬と覚が話していたことを思い出した。全人学級の中庭にこっそり入ってみると、奇妙な物置のような建物が並んでおり、アンモニアのような臭気とともに獣の唸り声が聞こえたという、あの話だ。

「……だから、中庭を調べてみようと思ったのよ。もちろん、それで、瞬の行方がわかるという確信があったわけじゃないけど、もしかしたら、何かの手がかりがつかめるんじゃないかと思って」

どうやら、真理亜と守のペアは、ひたすら僥倖を恃（たの）んで突き進むのが持ち味らしい。

「だけど、どうやって、中庭に入ったの？　瞬たちは、たしか、鍵の配置を覚えてたって言ってたけど」

「忘れたの？　わたしは、空中浮遊ができるのよ。誰にも見られないよう気をつけながら、校舎を飛び

越えたの。守には無理だから、先に入って鍵を開けたんだけど、もう何もかも、瞬が言ったとおりだったわ。小さな閂（かんぬき）が一ダースくらい、放射状に並んでて……」

閂のことなど、どうでもいい。わたしは、真理亜を急かした。

「それより、何があったの？」

「覚と瞬が入ったときと、おんなじよ。何もなかったわ。煉瓦造りの小屋みたいなものが五つ、奥に並んでる以外は」

瞬が、和貴園にも同じものがあったと言っていたのを、思い出した。

「小屋には、木の扉が付いてるんだけど、これが、ものすごく頑丈そうなやつだったわ。たぶん樫だと思うけど、厚さ四、五センチはありそうな板を、黒い鋳鉄（ちゅうてつ）の帯で束ねてあって、しかも蝶番（ちょうつがい）は……」

「扉のことなんか、どうでもいいわ。何を見たのか、要点を教えて！」

わたしは、いらいらして叫ぶ。真理亜は、昔から、集中力や観察力には長けているが、かいつまんで話すということが苦手だった。

「ごめん。つまり、私たちは中に何があるのか見たかったんだけど、壊さないで扉を開けることは、できなかったってわけ」

「こっちこそ、ごめん。ただ、何を見たのか、早く知りたかったから」

「うん。それで、扉に耳を当ててみたの。音が聞こえたわ」

「どんな音？」

「低い唸り声みたいな。それから、大きな生き物が、足音を立てずに行ったり来たりしてるような気配も。向こうも、わたしたちのことに気づいたのがわかったわ」

「ちょっと、待って。その物置みたいな小屋の中って、そんなに広いの？」

「ううん。たぶん、そこはただの入り口で、地下に

ある、大きな穴蔵っていうか、地下牢みたいなスペースに続いてるんだと思うの。気配も、地下から伝わって来るみたいな感じだったわ」

「ふーん。でも、結局、その音の主は見えなかったんだ?」

「早合点しないで。その後で、見たんだから。とはいっても、全身がはっきり見えたわけじゃないけど」

わたしは、それが早道だと悟り、できるだけ話の腰を折らず、黙って聞くことにした。

「わたしと守が小屋の中の様子を窺っていると、急に、門が開く音が響いたの。誰かが、中庭に入ってこようとしてたのよ。ほかに隠れる場所がなかったから、とっさに、小屋の後ろ側に回ったの。間一髪だったわ。次の瞬間、中庭への扉が開き、誰かが入ってきた」

「誰?」

「顔は、見てないの。でも、話し声が聞こえたから、全部で三人いることがわかったの。一人は、たぶん、太陽王だった。後の二人は男と女だったけど。女の方は、わたしたちが夏季キャンプから帰ってきたときに面接した教育委員会の人に、声が似てたわ」

わたしは、生唾を呑み込んだ。

「どんな話をしてたの?」

「切れ切れにしか聞こえなかったんだけど、男の方が、急がなきゃならないって言ってた。完全にゴウマカする前に、けりを付けなきゃならない。万一、失敗したら、大変なことになるとか何とか。ゴウマカって、何のことかわからないけど」

心のどこかで、予期はしていたと思う。それでも、まるで鉄棒で頭を殴られたような、衝撃を受けていた。ゴウマカするというのは、業魔化するということではないのか。

「……後は、何を言ってた?」

わたしは、喉から声を絞り出した。

「女が、すぐに不浄猫を送るよりないって。それで、太陽王が、今すぐ使えるのは、黒と虎斑だとか答えてた」

　真理亜の声は、戦慄でうわずった。

「それで、彼らが、開けたのよ。二番目と四番目の小屋の扉を。そしたら、中から、大きな動物が、するりと出てきたみたいだった。小屋の陰から、ちらっと覗いただけだけど、昔、動物園にいたライオンくらいの大きさがあったわ。それを、もっと細長くしたような」

「その生き物……不浄猫は、あなたたちの気配を感じてたんじゃない？」

「うん。でも、すぐに呪力で動きを封じられて、どこかへ運ばれていったから、三人には、わたしたちのことを気づかれずにすんだわ。……だけど、肝心なのは、その後なのよ！　太陽王が、誰のところに不浄猫を送るのか、名前を漏らしたの。あんなに優秀な子だったのに、残念だって」

　それが誰なのかは、言われる前に、すでにわかっていた。

「この耳で、はっきり聞いたのよ！　青沼瞬って」

3

その後、どうやって真理亜を宥（なだ）めたのかは、よく覚えていない。とにかく、瞬には差し迫った危険はないと言い含めて、納得させる必要があった。わたしは、覚のような嘘つきの才能には恵まれていないが、窮すれば通ずると言うべきか、翌朝、みんなで瞬を捜しに行こうと約束して、何とか、真理亜を家に帰すことができた。

一人より、二人の方が心強いことはわかっていた。だが、生きて帰れるという見通しも立たないのに、親友の命まで危うくすることはできない。

彼女を見送ってから、手早く身支度を調えた。セーターの上に風を通さないジャンパーを着て、バレッタで髪の毛を後ろに束ねる。野外で活動することが多かったため、傷薬や包帯などの救急用品や方位磁石などは常備していた。それらをナップザックに詰め込んで背負ってから、ふと思いついて、瞬に貰ったおまじないを身につけた。

そっと、窓から屋根へと抜け出る。わたしには、まだ、真理亜のような空中浮遊はできない。口の中で真言（マントラ）を唱えながら、思い切って跳躍する。呪力を発動した瞬間、空気から受ける抵抗が水のように重くなり、身体に急制動がかかった。まるで、夢の中で落下するような感じだった。着地するときに、バランスを崩してたたらを踏み、ひやりとしたが、さいわい足は挫かずにすんだ。

ぐずぐずしてはいられない。すぐに立ち上がると、足音を忍ばせて家の裏手に回った。わたしの舟をすばやく舫い柱（もやいばしら）から解き放つと、真っ暗な水路を進む。初めのうちは、極力、音を立てないようにして。家から充分離れたと思ってからは、全速力で航行した。

間に合うという確証はなかった。それどころか、視界も利かない中で、無茶なスピードを出している

のだから、ちょっとでも呪力による操船を誤れば、何かに激突して沈没する危険性もある。

それでも、ためらいはなかった。どんなことをしても、瞬を救う。絶対に、間に合う。間に合わせるという一念しか、わたしの頭の中にはなかった。

暗い水路の上を滑走していると、ふと、不思議な既視感（デジャ・ヴ）に襲われた。

夏季キャンプの初日だった。瞬と二人でナイトカヌーに乗ったときのこと。瞬が、波を消し去ったために、川面は、まるで真っ黒な鏡面のように、天上の星を映していた。

瞬が、ハクレンⅣ号を加速すると、星明かりは無数の断片に砕けて、波間に溶け去った。

川の流れも、両岸の景色も、ぼんやりとした闇の中に溶け込んで、はっきりとは見えなかった。そうすると、速度の感覚というものがなくなっていく。ちょうど、わたしの舟が今そうであるように。

わたしは、自分の舟に、あのときのカヌーと同じハクレンⅣ号という名前を付けていた。同じ名前は登録できないので、船体に書き込むこともできなかったが、わたしにとって、ハクレンⅣ号以外の名は考えられなかった。

常識外れのスピードで来たため、あっという間に、松風の郷に向かう水路の分岐点へと到達した。いったん、舟を止める。昼間、数隻の船が検問していた場所だったが、すでに真夜中に近い時間であるためか、そこにとどまっているのは、一隻だけだった。船上には篝火（かがりび）が焚かれているが、人影は見えない。

昼間のように、迂回して陸路を行く暇はなかった。ここを突破するよりないのだ。再び、ゆっくりと進み始める。わたしは、すべての呪力を集中して、波音を消すことに専念した。ハクレンⅣ号は、滑るように明かりの中を進み、進入禁止の綱の下をくぐる。

今、誰かが船から顔を出せば、万事休すである。

向こうから見て、ハクレンⅣ号の姿が完全に闇に没し去っただろうと思えるまで、わたしは、息を詰めていた。

見張りの船も、たぶん、誰かが禁を犯して松風の郷へ入ろうとすることなど、想定していなかったのだろう。そうでなければ、こうも易々と検問を突破することはできなかったに違いない。

ハクレンⅣ号は、静かな航行を続け、ほどなく、二本目の境界である八丁標の注連縄が張られている下を通過した。ここには、もはや、監視の船もいなかった。

月明かりに照らされて、正面に、大きな二本松が見えた。すでに、中心部に近いところへ来ているはずだ。闇を透かして、岸に沿って並ぶ家々の影がわかったが、松風の郷は、すべての明かりが死に絶え、無人地帯と化しているようだった。

北へと向かう細い水路に入る。

瞬の居場所が、はっきりわかっているわけではなかった。だが、どちらの方角へ行ったのか、おおよその見当はつく。瞬の家があったのは、松風の郷でも北の外れだった。もし周囲に人のいない場所に小屋を造り、そこに移されたのなら、人家が多い郷の中心部や、別の郷を通ることは避ける可能性が高い。たぶん、まっすぐ北に向かって、八丁標を越えたのではないだろうか。方角は、磁石があれば何とかなる。問題は、そこから、どのくらいの距離があるかだが。

細い水路は、五百メートルほど行ったところで、行き止まりになった。狭い船着き場は数隻の船でいっぱいだったので、ハクレンⅣ号を澪標（みおつくし）のような杭にもやって、船づたいに上陸する。途中、一艘の船に、立派な松明（たいまつ）が置いてあるのが目にとまった。わたしたちがいつも使っているような松の丸太ではなく、割れ竹を縛って作った筒に、ボロ布や麦藁、マグネシウムの針金などの燃料が詰め込んである。呪力で発火させると、眩いばかりの炎を上げて燃え、

ぱっと視界が開けた。

松風の郷の地理には不案内だったので、正確な現在位置はわからなかったが、とにかく、北を目指すことにした。

通りを歩くと、松明に照らし出されたのは、文字通りの廃墟だった。松風の郷の住人が疎開させられてから、まだ、そんなに時間はたっていないはずである。にもかかわらず、路上には木っ端やゴミが散乱し、建物は、どれも朽ちかけているように見えた。

だが、そんな不気味な町並みでさえ、途切れてしまうと、急に不安に襲われた。

なまじっか松明の光度が強すぎるために、視界は半径数メートルの球に限られてしまい、野原の中を続く道は、まったく先を見通すことができない。その一方で、眩しい明かりを掲げて歩いてくるわたしの姿は、数キロ先からでも認めることができるだろう。

危険だという理性の警告と、せっかく手にした明かりを手放したくないという本能的な欲求が、激しい角逐を演じる。呪力を使って松明の光を弱めようとしてみたのだが、炎を目いっぱい燃え上がらせたり消したりするのは簡単でも、適度な大きさに保つのは至難の業だということがわかった。

たまたま足下に落ちていた、枯れた松の枝を拾い上げる。これなら、ずっと小さな光源になるだろう。最初から、こういうものを選べばよかったと後悔しながら、松明を消した。

一瞬、視界が真っ暗に閉ざされ、闇の中に赤や緑の落書きのような模様が乱舞した。

それから、松の枝の先端を発火させる。

目の前に、大きな黒猫がいた。

それは、大きいなどというものではなかった。真理亜が言ったとおり、体長はライオンほどもある。四肢と首はきわめて長く、頭は比較的小さいが、それでも豹くらいはあり、ぎらぎらと燐光を放つ双眸

は、わたしの目と、さほど変わらない高さにあった。

黒猫は、甘えるようにごろごろと喉を鳴らしながら近づくと、伸び上がって、わたしの肩に前肢をかけた。

はっと思ったときには、大きな口で首を咥（くわ）えられていた。

ぎりぎりと、猫の牙が軋む音がする。まるで催眠術にかかったように頭が真っ白になり、真言（マントラ）を唱えることもできない。

これが、不浄猫なのか……。恐怖に痺れた脳に走ったのは、そんな思考の断片だった。

熱い吐息が髪をなぶり、涎がだらだらと首を伝って流れ落ちるのを感じる。猫族特有のアンモニアのような悪臭で、鼻が曲がりそうだった。

それから、自分がまだ意識を保っていることに気がつく。

不浄猫の牙は、凄まじい力でわたしの首を締め付けているが、頸動脈は止まっていない。瞬がくれた、猫除けのおまじないだ。分厚い革に金属の輪が嵌った頑丈な首枷が、脳への血流を確保して、意識が落ちるのを防いでくれたのである。

我に返った瞬間、反射的に、真言（マントラ）をつぶやいた。

がっちりと首を挟んでいる、不浄猫の顎をこじ開けにかかる。どうやら、いったん咬みつくと、上下の牙が顎関節がロックされる構造になっているらしく、容易に開かないが、際限なく呪力のパワーを高めていくと、とうとう、骨が嫌な音を立てて割れた。不浄猫の下顎は、破壊されて真下に垂れ下がり、わたしの首は自由になった。

数歩後ずさって、火がついたままの松の枝をかざした。小さな炎に照らされ、恐ろしい不浄猫の顔貌が露わになる。大きな眼球でわたしを睨みつけ、喉の奥から、蛇を思わせる威嚇音を発していた。わたしの首を挟んでいた、太古の剣歯虎のような上顎の牙からは、かなりの量の血が滴り落ちている。

仁王のように逞しい二本の手を、宙に思い描く。一方の手で不浄猫の首を固定すると、もう一方の手で身体を摑んで、雑巾を絞るように捻った。頸椎が砕ける乾いた音がする。不浄猫は、激しく全身を痙攣させ、完全に動かなくなった。

わたしは、しばらくの間、座り込んで、荒い息をついていた。涙が流れて、止まらない。首が苦しかったので触れてみると、さしもの頑丈な首枷も、ひしゃげているようだった。金具が変形して外せないので、呪力で強引に左右に引き裂いて、むしり取る。

それから、ようやく気力を振り絞って立ち上がり、不浄猫の死骸を確認した。それは、学校伝説で語り継がれていた、ネコダマシの姿そのものだった。体長は、三メートルはあるだろう。虎やライオンと比べると体軀はスリムで、首と四肢が異常に長い。顔つきは、一見すると普通の家猫そっくりなのだが、口ははるかに後方まで裂けている。わたしは、大きな弧を描いて口からはみ出している牙に触れてみた。十五センチ以上はあるだろうか。鮫の皮膚のようにざらざらした感触で、断面は楕円形だった。ふだんは、上顎の裏に折りたたんで、隠せるような構造になっているらしい。剣歯虎と異なる点は、下顎にも同様の長い牙が備わっていることである。上下の牙の先端は、尖っていなかった。獲物に突き刺すのではなく、首を挟んで頸動脈を圧迫することにより、獲物を瞬時に失神させ、扼殺するのだろう。

そんな殺し方をする理由は、一つしか考えられない。子供を攫っていく、ネコダマシの伝説さながらに、現場に血を流さず、犠牲者の遺体を持ち去ることで、殺害の証拠を消すためである。不浄猫は、どう見ても、人殺しのために創られたとしか思えなかった。

わたしは、道ばたに嘔吐した。これほど大きくて、しかも温血の動物を殺したことに対する生理的

な嫌悪感もあった。しかし、それ以上に、この呪われた生き物の存在を知ったことに、衝撃を受けていたのだ。

一時間ちょっと歩いて、ようやく、瞬の家が埋まっていた擂り鉢状の穴の縁まで来た。急がないと。汗だけではなく、セーターの下を流れ落ちた粘っこい不浄猫の唾液が、胸から下着、靴下にいたるまでぐっしょりと濡らしており、冷たい上に、ひどく気持ちが悪かったが、立ち止まって拭いたりするには時間が惜しかった。

さっき危うく殺されかけた教訓から、明かりは持たなかった。目が明順応した状態では、光が消えたときに、完全に視力を奪われてしまう。それくらいなら、たとえ不完全にしか見えなくても、暗さに順応していた方がいいからだ。

磁石を見ながらひたすら北へと向かっていたが、正しい方角へ来ていると確信できたのは、うっすらと月明かりに浮かび上がった蜘蛛の巣を見たときだった。網目模様が歪み、ところどころに、人の顔や文字のような、特徴的な図形が表れている。このときは、まだ知らなかったが、こうした場合、自然界で最も敏感で、最初に偏倚が現れるのは、蜘蛛の巣なのだという。

さらに、八丁標を越えたあたりから、まわりの木々の変形が顕著になり始めた。まるで、一年中強風に吹かれている地域のように、ほとんどの木が同一方向に捻じ曲げられているのだ。

少し前から、漠然とした不安や不快感に襲われ始めていた。

帰りたい。今すぐに、ここから逃げ出したい。それは本能の声だった。たとえ一秒でも、この場所には留まりたくないと思った。

だが、瞬のことを思って、必死に自分を奮い立たせる。今、引き返すわけにはいかない。彼を救えるのは、自分しかいないのだ。

とにかく、前に進んだ。奇怪に拗（ねじ）くれた植物も、よく見ると道標の役を果たしている。全体を俯瞰すると、森は、渦巻き状に変形しているような気がした。だとすれば、瞬は、その中心部分にいるのではないか。

木々は、無数の触手を持つタコの化け物のようなシルエットに変わっている。わたしは、絶えず蠕動（ぜんどう）し続ける、その触手に差し招かれるようにして、歩を進めた。

いつしか、まわりには、ミルクのような濃霧が立ちこめていた。今や、いくら目を凝らしても、十センチ先も見通すことができない。耳には、絶えず、ささやき声のような音が聞こえていた。風音や、笑い声のようでもあり、ときどきは、言葉のようにも聞こえるが、意味を取ることはできない。

五官の受け取る情報すべてが変質し、あやふやになっていくようだった。靴底に伝わってくる大地の感触さえも、妙にふわふわと柔らかく、頼りない。磁石の針すら、いつのまにか、ぐるぐる回るようになっていた。

やがて、まったく視界が利かなくなり、暗いのか明るいのかすら判断できなくなると、わたしは、完全に見当識を失った。

ここは、いったい、どこなんだろう。

激しい頭痛が起きる。まるで、万力で頭を締め付けられているようだった。しだいに、思考すること自体が困難になってきた。わたしは、その場に立ち竦んだ。だが、もはや、身体感覚まで消えかけているようで、立っているのか座っているのかも判然としない。

ここは、いったい、どこ。

「瞬！　どこにいるの？」

わたしは、大声で叫んでいた。

自分の声が耳に届いたときだけ、一瞬、意識がはっきりしたが、すぐにまた朦朧となる。このまま、気が遠くなってしまうのかと思ったとき、声が聞こ

えた。

「早季！　こんなところで、何をしてるんだ？」

「わからない。いま、どこにいるのかも……」

　次の瞬間、目の前を覆っていた霧が、何かに吸い取られたように消え失せた。足下には、しっかりした大地が復活している。

「瞬！」

　二十メートルほど先に立つ、少年の姿が見えた。なぜか、追儺の儀式で侲子がかぶる、『無垢の面』を着けていたが、聞こえてきたのは、間違いなく、懐かしい瞬の声だった。

「こんなところに来たらだめだ。早く、家に帰れ」

「嫌よ」

　わたしは、首を振る。

「これを、見てごらん」

　瞬が、地面を指さした。最初のうちは、暗くてよくわからなかったが、周囲がぼんやりと発光し始め、無数の虫が蠢いている様が、はっきりと見えるようになった。

　どれも、著しく畸形化していた。大小様々な蛾は、羽が萎縮して網の目状になっていたり、胴体が異常に膨満していたりして、まともに飛ぶことができない。竹馬に乗っているように見えたのは、むやみやたらと肢が長くなったゴミムシだったが、身体の左側の肢が長いために、まっすぐに歩くことができず、大きな円を描いて、ぐるぐると回っている。さらに異様なのは、ムカデだった。頭と尻尾が融合して、完全な輪になってしまっている。無数の歩行肢を動かしながら、ただ無意味に回転することしかできないのだ。

「こんなふうになりたくなかったら、今すぐ帰るんだ」

「嫌」

　わたしは、断固として言った。

「説明して。いったい、何が起きたのか。そうじゃないと、わたしは、ここから動かないから」

「馬鹿なことを言うな！」

瞬の声が、尖った。

「馬鹿でけっこうよ。わたしは、あなたを助けるために、ここまでやって来たのよ。途中、不浄猫に襲われて、もう少しで殺されそうになったんだから」

わたしは、声を詰まらせた。

「猫に遭ったのか？」

「うん。瞬に貰ったおまじないのおかげで、助かったわ。でも、たぶん、もう一匹いる」

「そうか……」

瞬は、深い溜め息をつく。

「わかった。十分だ。十分間だけ、ここにいていい。その間に、できるだけの説明はする。でも、それが過ぎたら、家に帰るんだ」

ここで押し問答をしていても仕方がないので、わたしは、うなずいた。

すると、突然、舞台に照明を当てたように周囲が明るくなった。見上げると、空一面に、極光（オーロラ）が現れていた。薄い緑色の光が、巨大なカーテンを思わせるドレープを作っており、その上に、赤やピンク、紫の光が滲んでいる。

「どうして……？　これ、瞬がやってるの？」

オーロラが、両極の周辺地帯にしか現れないということくらいは、わたしも知っていた。太陽風とかプラズマとかいう話は理解できないが、日本の、それも関東地方でオーロラを発現させるなどという離れ業は、鏑木肆星氏でもできないはずだ。

「……話の途中で不浄猫に襲われるのは、願い下げだな。バンガローに入ろうか」

瞬は、背後に立っている建物に、顎をしゃくった。この時初めて、そんなものがあることに気がつく。オーロラのおぼろな明かりに照らされた小屋は、全体が、粗悪なレンズを通して見ているように、奇妙に歪んでいた。外から見ても、柱が曲がり、梁が捻れているのがわかるほどだ。しかも、茅葺きの屋根は、茅の一本一本が重力に逆らう意思を

持っているかのように逆立ち、怒った山荒（ヤマアラシ）のような外観を呈していた。

「なんで、この家は、こんな変な具合になってるの？」

「これでも、絶えず、まともな形に修正し続けてるんだ」

瞬は、いびつな形の戸口から、中に入る。わたしも、後に続いた。

「十分間……それくらいなら、何とか抑えられるだろう」

床に転がっていた無数のハチ玉が、宙に浮き上がった。たちまち、蜂の巣の中に入ったような騒がしい唸りが、周囲の空間を満たす。

「何、これ？　うるさいわ」

「しかたがないんだ。ちょっとの間だけ、我慢して」

瞬は、殺風景な部屋を横切り、大きな木のテーブルに向かって座った。四隅が反り返ってひどく凸凹な天板の上には、十数冊の本と大量の紙束が載っている。

「君も、そのあたりにかけたら？」

わたしに、部屋の反対側にある椅子を勧める。わたしは、首を振って、部屋の中を見回した。本来は堅固なはずの木材や石材が、あらゆる場所で、ぐにゃぐにゃに変形している。見ていると、神経に障るばかりか、現実感まで希薄になっていくようだった。

「何から話したら、いいのかな。……すべての問題は、人間の心から来るんだよ」

瞬が何を言っているのかわからず、わたしは、眉をひそめた。

「人間の心のうち、意識というのは氷山の一角に過ぎない。水面下にある無意識の方が、はるかに広大なんだ。だから、自分自身の心の動きも、なかなか理解することができない」

「わたしは、心理学の講義を聴きに来たんじゃない

わ。知りたいのは、あなたに何が起きたのかよ」

「今、そのことを説明してるんだよ」

瞬は、くぐもった声で言った。

「ねえ、どうして、そんなお面着けてるの？　取って。何だか、落ち着かないの」

「だめだ」

瞬は、にべもなかった。

「それより、時間がない。……いいかい。人間は、どうやっても、自分の心を完全に制御することはできない。意識では、完璧にコントロールできてると思っても、無意識下では、思ってもみないことが起きている。それは、呪力において、最も顕著に表れるんだ」

「どういうこと？」

「物理的な行動を起こす場合、心に思い描いたことが実際に起きるまでには、いくつかの段階がある。動機は無意識から発していても、行動に移す前には、意識の領域を通過しなければならないから、理性によってストップをかけたり、修正したりすることができる。だけど、呪力の場合、思ったことが実現するまで、ほとんど同時と言ってもいい。かりに間違っていたとしても、修正する暇がないんだよ」

「でも、わたしたちは、決められた手順に従い、はっきりとしたイメージを頭に思い浮かべてから、呪力を発動してるはずでしょう？」

「そのイメージにも、明確に意識されているものと、無意識の闇に隠れたままのものが、あるんだ」

部屋に浮いている、無数のハチ玉が唸るオクターブが、少し上がったような気がした。

「言ってることが、わからないわ。心の奥に、自分では気づかないイメージがあったとしても、それが発現するまでには、強い歯止めがあるのよ。真言（マントラ）を唱えなければ、呪力は、発動できないんだから」

「君には、わかってない。暗示や真言（マントラ）を使い、どれほど厳格に管理しようとしたところで、無意識下に開いた出口から、必ず漏出が起きるんだ」

「漏出？」

「ああ。呪力は、常に漏れ出している。僕らは、ある意味では、無意識の命ずるままに、周囲の世界を改変し続けてるんだよ」

「そんな……！」

わたしは、絶句した。そんな馬鹿なと思うが、すぐには反論が出てこない。

「早季は、いったい、八丁標は何のためにあると思ってた？　外から何かが襲ってきたとき、あの注連縄が防ぎになると思うか？」

「わからないわ。何を言ってるの？」

わたしは、頭が混乱していた。

「八丁標は、外敵ではなく、内なる敵に対処するために作られたんだ。この場合の敵は、絶えず漏出している僕らの呪力だ。悪鬼にせよ、業魔にせよ、僕らにとって、恐怖とは、内からやって来るものなんだよ」

瞬の声は平静だったが、宙に静止して回転していたハチ玉が、ぐらぐらと揺れ始めた。

「もちろん、漏出する呪力は、ごく微弱だから、一朝一夕にどうにかなるものでもない。でも、長期間、お互いの思念に被曝し続ければ、その影響は計り知れないんだ。だから、どうしても、それを外に向けてやる必要がある」

「どうやって？」

「僕らは、幼い頃から繰り返し、外の世界に対する恐怖を、無意識に刷り込まれてきた。巨大な暗黒世界のイメージは、僕らの内にある、もう一つの暗黒の宇宙、無意識と同一化されるようになる。心の中で、無意識を外の世界と直結させることで、漏出する呪力を、八丁標の外へと導くんだ。八丁標は、『穢れ』、つまり漏れ出した呪力を外に放出するための心的装置なんだよ」

瞬の言っていることは難しくて、わたしには、よく理解できなかった。

「……じゃあ、その、外へと放出された呪力は、ど

うなるの？」

「たぶん、いろいろな影響を及ぼしてるだろうな。誰も調べた人がいないから、わからないと言うしかないけど」

瞬が手を広げると、ハチ玉の大群は、部屋の中を、ゆっくりと遊弋し始めた。

「でも、それで謎が解けると思うこともある。たとえば、ミノシロだ。ほんの千年前には、あんな生き物はいなかった。進化の尺度で言えば、千年なんて、昨日みたいなものだよ。ミノシロの祖先は、おそらく、海にいるミノウミウシだろうけど、そんなに短い時間で、どうやって、あんな大きな生き物に進化できたんだろう？」

「わたしたちから漏出した呪力が、ミノシロを作ったっていうの？」

「ミノシロだけじゃない。トラバサミも、たぶん、カヤノスヅクリだってそうだ。僕は、この千年の間に作られた生物図鑑に、一通り目を通してみた。そういう常識外れの進化の加速が始まってるのは、きわめて限られた場所、八丁標の周辺かららしいんだ」

瞬の言うことは、突飛すぎて、わたしには、にわかに信じられなかった。

「……だけど、漏出した呪力なんて、ばらばらの思念の集まりにすぎないんでしょう？　それが、どうして、ミノシロのような、まとまった一つの形を創り上げるの？」

「人間の集合的無意識には、共通の鋳型から生まれた類型のようなものが、数多く存在している。ユング心理学では、それを元型と呼んでいる。影とか、太母とか、老賢者とか、トリックスターとかね。世界の神話で、共通したキャラクターがたくさん見られるのも、そういう元型が投影された結果らしいんだ。ミノシロとかカヤノスヅクリが、どんな元型の影響下で生まれたのかは、調べてみれば、興味深いだろうね」

わたしは、今聞いた話を反芻してみたが、充分理解できたかどうか心許なかった。

「その説が正しいのかどうか、わたしには、わからない。だけど、正直言って、どうでもいいわ。わたしが知りたいのは、あなたの身に何が起きたのかよ」

瞬は、沈黙した。

「瞬。あなたが……」

そのとき、部屋の隅から、何かが、よたよたと近づいてきた。それが視界に入っても、すぐには、何だかわからなかった。それから、わたしは、悲鳴を上げた。

「だいじょうぶ。すばるだよ」

瞬は、すばるの横へ行って、顎の下を撫でてやった。

「どうして？　すばるに、何をしたの？」

「何も……僕は、本当に、何もしたくなかった」

ハチ玉が、部屋中を狂ったように飛び回り始めたが、瞬が目を上げると、静かになった。

「わかるだろう。これが、僕に起きたことの結果なんだよ」

すばるの背中は、一面、堅い甲羅と棘状の突起に覆われ、アルマジロの化け物のような外観を呈していた。

「呪力の漏出が、止まらないんだ。それも、どんどん激しく、制御不能になりつつある。無意識の暴走により、呪力の異常漏出が起きて、周囲のものすべてが破壊的な影響を受け、異形化してしまう。これが、橋本・アッペルバウム症候群だ。僕は、業魔になったんだよ」

「そんな……そんなの、嘘よ！」

わたしは、叫んだ。

「残念ながら、本当だ」

瞬は、棘に触らないように注意しながら、すばるを抱き上げた。

「ここにある本は、全部、第四分類。永遠に葬り去

るべき知識とされているものばかりだ。ふだんは、図書館にある秘密の地下室に保管されている。君のお母さんが、特別に貸してくれた」

「お母さんが？」

「業魔化という現象について知識を得るには、ここにある本を読む以外にない。これが、わかっているすべてなんだ」

煤けた図書の表紙には、第四分類の書籍を示す焼き印があった。第一種の『訞』は、『妖しい言葉』、第二種の『裁』は『災い』を、そして最も危険とされる第三種に属する『殃』は、『神の災い。とがめ。それにより、死に至るべきもの』を意味している。

「これらの本を貸してもらう交換条件として、僕は、自分自身の記録を付け続けている。やがては、一番新しい症例として、僕の名前もここに加わることになるんだろうな」

「そんなこと、言わないで！　それより、治療法は？　どうすれば、瞬は治るの？」

「治療法は、今のところないんだよ」

瞬は、すばるを降ろした。すばるは、今度は、よたよたと、わたしの方に近づいてくる。

「橋本・アッペルバウム症候群は、当初は、統合失調症との関連が疑われてたらしいが、今では否定されている。脳の中で起きていることは、どちらかというと、パニック障害に近いらしいんだ」

瞬の口調は、他人事のように淡々としていた。

「現実が、確固として不動のものだったら、妄想や恐怖症を治療することも可能だろう。でも、その不安定な心の動きに従って、現実の方がどんどん変化してしまうんじゃ、もう、どうしようもないだろう？　妄想と現実との間に、いわば負のフィードバック、悪循環が起きるんだよ。しかも、それがすべて、無意識のレベルで起きていることだから、対処のしようがない」

「あなたの呪力を、封印することはできないの？」

「封印というのは、意識的に呪力を使うのを妨げる

だけで、無意識下の穴を塞ぐ効力はないらしいんだ。それでも、心理的な柵を付けることで、何とか呪力の漏出を減らせないか、無瞋上人に施術してもらったんだけどね。結果は、無効だった。僕の呪力は、何というか、蓋が壊れたような状態で、封印することもできないと言うんだよ」

わたしは、愕然とした。

「じゃあ、もしかしたら……わたしが、間違ったやり方で、瞬の呪力を復活させたから、二度と封印ができなくなっちゃったの？」

あのときの瞬は、覚とは違って、意識レベルは低下しておらず、催眠術にかかることを自覚していた。しかも、真言は、すでに思い出していたのだ。そうした状況下で無理やり封印を解くことで、彼の心に埋め込まれていた暗示の錨は、消滅してしまったのかもしれない。

「いや。今も言ったように、もともと、封印には、たいした効力は期待できないんだよ。早季。君のせいじゃない」

涙が、溢れてきた。わたしには、ただ、足下に来たすずるの顎の下を、撫でてやることしかできなかった。

「そろそろ、十分たつ。もう、帰った方がいい」

わたしは、泣きながら首を振った。

「ごく短時間であれば、異常漏出を抑えられることがわかった。何か、単純だけど集中力を要する課題に、ありったけの呪力を振り向けてやればいい。その間は、ほとんど異状は起きないんだ。僕は今、七百個のハチ玉を操ることで、君に影響が及ぶことを防いでる。ただし、これを続けられるのは、十分か、せいぜい、十五分だ。疲れて集中力が鈍ると、いつ暴走が始まるかわからない……」

「嫌！　わたしは、帰らない！　瞬と一緒にいる」

「早季。僕は、この病気のために、両親を死なせてしまった」

瞬の言葉は、わたしの胸を貫いた。

「両親は、何とかして、僕を助けようとした。でも、どうすることもできなかった。僕は、意思の力で、何とか呪力が暴走するのを抑えようとしたけど、それは、最悪の方法だった。結局は、かえって反動を強くしてしまったんだよ」

「瞬……」

「家鳴りがしたかと思うと、大地が突然、液状化して、家ごと呑み込んでしまったんだ。僕が助かったのは、たぶん、両親のどちらかが、とっさに呪力を使って家から放り出してくれたからだ」

瞬は、仮面の奥で嗚咽した。

「だから、帰ってくれ。頼む。もう、これ以上、僕のために、愛する人が死ぬのは見たくないんだ」

わたしは、ゆっくりと立ち上がった。絶望と無力感が、わたしを押しつぶしていた。

わたしには、瞬は、救えない。

わたしには、何もできない。

わたしは……。

ドアを開けて、瞬の方を振り返った。

「瞬。わたしに何か、して欲しいことはない？」

瞬は、首を振る。

ふいに、巨大な生き物が、わたしの脇を擦り抜け、小屋に入ってきた。

グレイの虎斑（とらふ）模様の不浄猫。あの黒猫より、さらに一回り大きかった。わたしには目もくれず、ごろごろと喉を鳴らしながら、まっすぐ瞬に向かっていく。

鋭い眼光で、相手が動けないように射すくめながら、その一方で、まったく敵意がないことを示すように喉を鳴らして、ゆったりとした歩調で近づく。同時に、相反する二つのメッセージを受け取った人間は、とっさにどう行動していいかわからなくなるのだ。これは、不浄猫が人を狩る際に用いる、二重（ダブル）拘束（バインド）というテクニックだった。

虚を衝かれたものの、一度経験済みだったわたしは、我に返るのも早かった。すばやく真言（マントラ）を唱え

る。

「早季。やめろ！」

　瞬の声が響いた。

「もう、いいんだ……」

　瞬の言葉に、わたしは立ち竦んだ。どうすればいいのか。何もせず、瞬が殺されるのを傍観するなんてできない。だが……。

　体長三・五メートルはある不浄猫は、まるで瞬にキスをするように伸び上がり、大きな口を開ける。わたしは、呪力を発動しようとした。

　その瞬間だった。だしぬけに、恐ろしい咆吼（ほうこう）を上げながら、すばるが突進してきたのである。

　不浄猫は、すばるを一瞥すると、右の前肢で、すばやい一撃を見舞った。剃刀のように鋭い爪が、すばるの背中を引き裂き、血飛沫が上がる。しかし、固い甲羅と棘に覆われていたためか、致命傷には至らない。それどころか、すばるの勢いはまったく衰えなかった。不浄猫の喉笛めがけて一直線に飛びかかる。不浄猫は、巨大な体軀に似合わない敏捷さで身をかわそうとしたが、すばるは、自分の十倍以上もある猫の前肢に喰らいついた。

　わたしには、今も、よくわからない。ブルドッグは、長い間品種改良を重ねることで、凶暴な性格は一掃されたはずではないのか。現に、すばるは、わたしの知るかぎり、他の犬に吠えられても、いや、噛み付かれたときでさえ、我関せずという態度を保っていた。不機嫌だったことすらないと言っても、過言ではない。

　にもかかわらず、あのとき、すばるの中で、いったい何が起きたのだろう。なぜ、突如として、先祖の専売特許だった血腥（ちなまぐさ）い闘争本能が蘇ったのか。

　戦えば確実に殺されるとわかっている相手に、猛然と襲いかかっていく姿は、自分よりはるかに強大な牛や熊に立ち向かったという、伝説の、最強の闘犬そのものだった。

　すばるは、強靭な顎を食いしばって左右に振り立

てる。上を向いた鼻は、どんなに深く相手の身体に牙を埋めても、呼吸が困難になることはない。

不浄猫は、苦痛の叫びを上げた。だが、人を獲物とするように作られた猫は、狡猾さも並外れていた。咬みつかれた前肢ともう一方の前肢を使って、すばるを回転させ、巧みに裏返しにする。

「やめて！」

わたしが悲鳴を上げたとき、不浄猫のナイフのような爪は、すばるの柔らかい腹部を、大きく切り裂いていた。

続いて起こった一連の出来事は、とても現実のものとは思えなかった。

不浄猫が、ムササビのように四肢を広げた形で、天井近くまで浮き上がった。十八本の爪を剝き出し、二十センチはある上下四本の牙を蠢かしながら、激しい威嚇音を発しているが、身体は十字架にかけられたように硬直している。

その周囲に、きらきらと煌めく無数の結晶（クリスタル）のようなものが現れた。結晶は、不浄猫に付着し、みるみる全身を覆い尽くしていく。

さらに結晶同士が融合することで、全体が宝石のような半透明に変わり、目も綾な光を放ち始めた。

そして、突然、不浄猫の姿は宙に消滅した。ふいに生まれた真空に、周囲から空気が流れ込み、小さな渦を巻く。

瞬は、いったい、何をしたのだろう。不浄猫は、まるで異次元の彼方へ弾き飛ばされたとしか思えなかった。

手を触れずに物体を動かせる呪力は、ある意味、物理法則を超越しているかもしれない。しかし、通常、頭にイメージできない現象を発現させることはできない。

業魔と化した瞬は、無意識の扉を開くことによって、短時間とはいえ、どんな達人をも凌駕する能力を身につけていたのかもしれない。

気がつくと、瞬は、愛犬の亡骸（なきがら）の前に跪（ひざまず）いてい

た。

「可哀想に……」

　すばるは、すでに息をしていなかった。床一面には、大量の温かい血液が溢れている。不浄猫の爪は、ブルドッグの腹部から心臓までを、一気に抉っていたのだった。

「瞬」

　わたしは、彼の隣にしゃがんだ。

「すばるは、僕を助けようとしたんだ。そんなことをしても、何にもならないのに」

　瞬は、小さな声で言った。

「何度も、置いてこようとしたんだ。でも、どうしても、ついてくる。……いや、本当は、僕の方が寂しかったのかもしれない。すばるがいなくなったら、独りぼっちになっちゃうから」

　瞬は、すばるの顎の下を撫でた。

「もっと早く、決着を付けるべきだった。僕が、ずるずると引き伸ばしたから、すばるを、こんな目に遭わせちゃった」

「瞬のせいじゃないわ」

　わたしには、そう言うのが精一杯だった。

「あの猫だって、別に、悪くなかったんだ。ただ、命令通り、僕の始末を付けに来ただけなんだから。……僕が、やるべきことを決断するタイミングが、少しずつ遅かった」

　瞬は、壁際にある戸棚を指さした。

「あの中に、たくさんの錠剤が入った瓶がある。ここへ来る直前に貰ったんだ。中身は、いろんな種類の毒の詰め合わせだよ。ひどい餞別だと思わないか?」

　それでは、大人たちは、瞬に対し、自ら命を絶つよう仕向けていたのか。そう思っても、今さら、何の感情も湧いてこなかった。あまりにもショックなことが矢継ぎ早に起こったために、感受性が鈍麻していたのかもしれない。

「そんなの、のまなくてよかったわ。捨てちゃえば

いいのに」

「のんだんだよ」

「えっ？」

「だけど、効かなかった。決心するのが、遅すぎたんだ。分子性の毒は、簡単に変性してしまうらしいね。でも、砒素まで無効になってたのには驚いたよ。僕の影（シャドー）か、死にたくないという無意識が、元素まで変換してしまったのかもしれない」

わたしは、黙って、瞬の手に自分の手を重ねた。

「……来るみたいだな」

瞬が、ぽつりという。

「来るって、何が？」

「早季。早く、ここを出るんだ！」

瞬は、わたしの手を引っ張って立たせた。

どすんという、大きな家鳴りがした。いつのまにか床に転がっていたハチ玉が、振動で飛び上がって、ぱらぱらと落ちる。

「あのときと、同じだ。僕の家が大地に呑み込まれた……。笑っちゃうだろう？　あんまり、祝霊（しゅくれい）にそっくりだから。こっちは、祝福を与えてくれるどころか、死の使いだけどね」

瞬は、わたしの背中を押した。

「さあ、早く！」

わたしは、抵抗しようとしたが、瞬は、有無を言わせなかった。

「今度こそ、終わりにするよ。もう、たくさんだ」

目の前で、堅いはずの土壁が、ぐにゃぐにゃに歪み、震え始めた。気泡のようなものが、次々に現れては消える。見ているだけで、発狂しそうな光景だった。再び、激しい頭痛が起き始める。

「早季」

瞬が、わたしを戸口から押し出して、静かな声で言った。彼の被っている無垢の面は、熱もないのに、ぐずぐずに溶け始めている。

「ずっと、好きだった」

「どうして、今、そんなことを言うの？　瞬！　わ

たしは……」

「さようなら」

次の瞬間、わたしの身体は、地上数百メートルの高さにあった。眼下に、月明かりに照らされた瞬のバンガローが見える。

見渡すかぎりの地面が、擂り鉢状にくぼんだ。

バンガローがあった場所に向かって、周囲から、山津波のように土砂が押し寄せてくる。低周波のような地鳴りに、木々が根こそぎになり、へし折れる音が混じった。

世界の終末のような恐ろしい景色は、どんどん、前方へと遠ざかっていく。わたしは、自分の身体が、大きな放物線を描いて、後ろ向きに飛んでいることに気がついた。激しい風を受けて、着ていたジャンパーがぶるぶると震えている。バレッタが吹っ飛んで、髪が夜空にたなびいた。

このまま、どこかに叩きつけられて死ぬのも、悪くないかもしれない。

そんな思いに駆られ、わたしは、目を瞑った。

だが、すぐにまた、目を開けた。

瞬は、最後の力を使って、わたしを助けてくれた。

わたしは、生きなければならない。

正面に向き直り、激しい風を顔に受けたが、もう、目は閉じなかった。涙が、後方へと吹き飛ばされていく。

着地点は、開けた草原になりそうだった。瞬は、わたしを放り投げるときに、そこまで狙ったのだろうか。

ゆっくりと、地面が目の前に迫ってくる。

まだ、長い夢を見ている途中であるかのように、ゆっくりと。

Ⅵ

冬の遠雷

1

喧噪が、わたしを包む。椅子を引く鈍い響き。木の床の上を歩くリズム。生徒たちが跳ね回り、駆け出す振動。教室の中央に置かれたストーブの上で、やかんが、シューシューと音を立て、蒸気を上げている。

奇妙な抑揚の話し声。笑いさざめき。まるで水中で聞いているようなくぐもった会話。誰が発しているのかわからない、低いつぶやき。

一人一人の言葉には、相手に伝えたい意味があるはずだ。だが、大勢の声が合わさると、言葉は渾然と溶け合い、ただ無意味に空間を満たすだけの蜂の唸りに変わってしまう。

ここにいる全員の思いが、声になって聞こえたとしても、もしかすると、同じことかもしれない。一人一人の思いには、はっきりした意味があっても、すべてが合わさると方向性を失い、混沌とした雑音でしかなくなる。それらは、漏出した呪力のように。

何の脈絡もなく頭に浮かんだ言葉に、わたしは、戸惑った。漏出した……。いったい、何のことだろう。

『早季（さき）。何、ぼんやりしてるの？』

ノートの上に、太い文字が浮き上がった。**『何』**の中にある口が漫画の目に変わって、ウインクし、**『の』**の字がにやりと笑う。振り返ると、真理亜（まりあ）が、少し気遣わしげな目でわたしを見ていた。

「ちょっと、考えごとしてただけ」

「当ててみようか。良（りょう）のことでしょう？」

「良？」

わたしは、眉をしかめた。思ってもみなかったからだが、真理亜は、別な意味に取ったようだった。

「隠さなくてもいいって。選んでくれるかどうか、心配なんでしょう？　だいじょうぶ。良は、絶対、早季のこと好きだから」

稲葉良。幼馴染みの、元気で活発な男の子。いつも、みんなの中心にいて、引っ張っていくリーダーシップの持ち主。だが……ふいに、違和感に襲われる。どうして、彼なのだろうか。

「良は、二班じゃない。どうして、わたしを選ぶの？」

「何言ってるのよ？　今さら」

真理亜は、噴き出した。

「そんなの、一番初めだけでしょう？　一班に入ってから、ずっと、わたしたちと一緒に行動してたじゃない」

そうだった。良は、途中から、わたしたちの班に編入されたのである。それというのも、二班には六人いたのに、わたしたち一班は、最初から、四人しかいなかったからだ。

でも、そもそも、なぜ人数が少なかったのだろうか……。

「早季。どうしたの？　ちょっと変よ」

真理亜が、熱を測ろうとするように、わたしの額に手を当てた。黙って、されるままになっていると、隙を突いて、いきなり唇を合わせる。

「もう、やめてよ」

わたしは、あわてて顔をそむけた。誰もこちらを注視している子はいなかったが、妙に気恥ずかしかったのだ。

「ほーら、もう元気になった」

真理亜は、あっけらかんと言う。

「別に、こんなこと、して欲しかったわけじゃない」

「して欲しい人は、今は、別にいるもんね」

「全然、そんなこと思ってないって！」

「君たち、いつも仲がいいね」

　真理亜の後ろから顔を出した少年は、当の良だった。思わず、顔が赤くなるのを感じる。それを真理亜に誤解されるのではないかと思うと、ますます、頭に血液が上った。

「わたしたち、愛し合ってるのよ。妬ける？」

　真理亜が、座ったままのわたしを、胸元に引き寄せて言う。

「正直言うと、ちょっとね」

「どっちに？」

「両方かな」

「嘘つき」

　良は、簡単に言えば、明るく、背が高く、誰からも好かれ、一目置かれる存在だった。

　だが、その反面、物事を深く考えるタイプではない。けっして頭が悪いわけではないが、何事に対しても表面的な反応しか示さないところが、少し物足りなかった。呪力についても、特に抜きん出ているわけではないし……。

　また、違和感がつのってくる。わたしは、いったい、良を誰と比べているのだろう。

「早季。午後の授業が始まるまで、ちょっと、話をしない？」

　良が、わたしを誘った。

「ふーん。邪魔者は消えるから、お幸せにね」

　真理亜は、浮き上がると、空中でピルエットをするように方向を転換した。赤い髪が、ふわりとなびく。

「守が、ずっと君の方ばっかり見てたよ」

　良が、真理亜の後ろ姿に声をかけた。

「事前の人気投票で、真理亜が圧倒的な一位だとわかってからは、気が気じゃないみたいだね」

「うふふ。もてすぎるのも、罪なものね」

　真理亜が、気まぐれなトンボのように飛んでいってしまうと、良は、わたしの方に向き直る。

「ここは騒がしいから、外へ行かないか？」

「いいけど」
　断る理由もなかった。良が先に立ち、わたしは後に続いて、教室を出た。だが、廊下の突き当たりを左に曲がりそうになったので、どきりとする。

「待って。そっちは、行きたくない」

「どうして?」

　良は、振り返って、不思議そうな顔をした。

「それは……そっちに行って、どうするの?」

　わたし自身、どうしてそちらに行きたくないのか、よくわからなかった。

「こっちは、誰も来ないから、落ち着いて話ができると思って。ほら、この先にあるのは、中庭への入り口だけだから」

　そうだ。中庭……。わたしは、中庭に近づくのが嫌だったのだ。なぜ、中庭をこれほど忌み嫌うのかは、自分でもよくわからなかったが。

「それより、外へ出ない?　天気がいいから、気持ちいいわ」

「そう?　わかった」

　わたしたちは、廊下を右に曲がり、校庭に出た。たしかに天気はよかったのだが、冬の日差しは鈍く、空気は肌寒い。良も、肩をすくめて腕をさすっていた。わたしのことを、よほどの酔狂か、寒さ知らずの女だと思ったに違いない。

「当番委員のことなんだけど、僕は、早季を指名するからね」

　良は、単刀直入に言った。

「ありがとう」

　どう答えていいかわからず、わたしは、無難にお礼を言う。

「それだけ?」

　良は、がっかりしたようだった。

「それだけって言うと?」

「早季の方は、どうなの?　僕を指名してくれるのかどうか、聞きたいんだけど」

　良は、あくまでも正攻法で押してくる。

「わたしは……」

　この冬、全人学級の生徒は、全員、二人一組の当番委員に振り分けられることになっていた。原則的には男女のペアだが、生徒全員の数が奇数だったり、男女いずれかが多い場合に限っては、変則的に三人一組になったり、同性のペアができることもあった。

　当番委員は、建前の上では、日直や種々の行事の準備作業を行う役割にすぎなかったが、何しろ、男女お互いの指名が一致したペアから、順に成立していくのである。生徒たちの意識では、これは愛を告白するための公式行事に他ならなかった。

　わたしたちが、当時、学校に恋愛まで管理されていたのは、まぎれもない事実だろう。それは『当番』という言葉にも表れていたような気がする。順繰りに仕事を担うという、普通の言葉ではあるが、漢和辞典を調べてみると、『番』には『つがい』という意味があるのだ。倫理委員会や教育委員会の、漢字に対する強迫観念じみたこだわりを考えると、あながち、うがちすぎでもないかもしれない。

「ごめんなさい。まだ、決めてないの」

　相手がストレートに来るので、わたしも、正直に答える。

「決めてない？　ほかに、意中の人がいるの？」

　良は、心配そうな声になる。

「うーん。特に、いないけど……」

　なぜか、覚の顔が浮かんだが、すぐに打ち消す。気のおけない友達ではあっても、恋愛対象とは思えない。

「良は、どうして、わたしなの？」

「そんなの、決まってるじゃないか」

　良は、自信たっぷりに言う。

「今まで、ずっと、早季を見てきて、君しかいないって思ったからさ」

「ずっとって？　いつから、そう思うようになったの？」

「いつからだろう？　そういうのって、はっきり、いつからって決められないだろう？　でも、強いて言えば……そうだなあ」

　良は、急に、あやふやな表情になった。

「わからないけど、やっぱり、夏季キャンプに一緒に行ってからかな」

　わたしの頭の中には、二年前の満天の星空が蘇った。

「夏季キャンプの中で、何が一番思い出に残ってる？」

「それは……全部だよ。一緒に、カヌーを漕いだし。ほら、君が景色に見とれて川に落ちそうになって、僕がとっさに手を摑んで止めたことがあったじゃないか？　あのときは、本当にひやりとしたよ」

　わたしは、眉をひそめた。そんなことが、あっただろうか。それに、夏季キャンプでは、命がけの冒険をしたが、その間、わたしたちは、ほとんど離ればなれになっていた。二人の思い出と言ったら、最初の晩か、それとも、再会したときのことを思い出すのが普通ではないか。

「ナイトカヌーのことは？」

「ナイトカヌー？」

　どうも、ぴんと来ていないようだ。

「そうだな。楽しかったよ」

　楽しかった……。あの晩の大切な思い出を、そんなに薄っぺらい一言で片付けて欲しくなかった。

　わたしたちが教室に戻るとき、覚とすれ違った。覚は、複雑な目で、こちらを見ている。彼の視線の先にいるのは、わたしではなかった。それも不思議な話ではない。一時期だが、覚は、良と恋愛関係にあったのだから。

　だが、覚の目に浮かんでいるものを見たとき、わたしは、ぞくりとした。そこにあったのは、嫉妬や愛のからんだ感情ではなかった。純粋な不可解さとでも形容すべきだろうか。人が、まったく理解できない存在を見るときの目だったのだ。

その晩、わたしが見た夢は、混沌として、とりとめのないものが多かった。その大半は、目覚めた時点で、すでに思い出せなかったが、最後の場面だけは、強烈に心に焼き付いていた。

　わたしは、薄暗く、がらんとした場所に佇んでいた。手には花束を持っている。そこが、学校の中庭であることに気がつく。なぜか、見渡すかぎり、無数の墓標が立てられていた。わたしは、一生懸命に目を凝らすのだが、薄暗い闇に阻まれて、どうしても、刻まれている文字を読み解くことができない。

　わたしは、一番手前にある墓標に、花束を捧げた。まだ真新しいのに、すでに石が風化して、大地の中に溶け去ろうとしている。文字も、とうてい読み取れないくらい崩れてしまっていた。

　その様子を見ていると、胸にぽっかりと穴が開いたような寂しさが迫ってきた。

「僕のことは、もう忘れてしまったの？」

　誰かが、わたしに話しかけてくる。男の子の声だ。ひどく懐かしい声だったが、誰なのかはわからない。

「ごめんなさい。どうしても、思い出せないの」

「そうか……。それなら、しかたがないね」

　わたしは、声のした方へと振り向いたが、誰の姿も見えなかった。

「どこにいるの？　顔を見せて」

「僕には、顔がないんだ」

　静かにそう告げられて、わたしは、限りない悲しみを覚えた。そうか……彼には、もう、顔がないんだ。

「でも、僕の顔なら、君は、よく知ってるはずだよ」

「わからない。思い出せないの」

「それは、君のせいじゃない」

　声は、優しく言う。

「誰かが、僕を葬った後で、墓標の文字を削り取っ

たからなんだよ」

「誰が？　どうして、そんなことをするの？」

「あっちを見てごらん。みんな、そうなんだ」

　そこには、たくさんのカードを積み重ねたような、奇妙な形の墓標があった。きわめて不安定な形で、すでに大部分が崩壊しているため、こちらも名前の部分は見えない。

「それから、その後ろも」

　さらに奥には、ひっそりと目立たない墓石があった。ここには、最初から名前はない。その代わりに嵌め込まれていたのは、丸い円盤のような物体だった。近づいてよく見ると、それは鏡だった。今にもそこに、自分の顔が映し出されるのではないか。わたしは、足が竦むような恐怖を感じていた。

「だいじょうぶだよ」

　背後から、顔のない少年が言う。

「怖くなんかないから。それは、君のお墓じゃないんだよ」

「じゃあ、誰の？」

「いいから、よく見てごらん。そうすればわかるから」

　わたしは、近づいて、鏡を覗き込んだ。

　光が、わたしの目を照らす。

　眩しさに、思わず手を挙げて顔を覆う。それから、わたしは、ゆっくりと瞼を開いた。

　窓にあるカーテンの隙間から、朝の光が射し込んできていた。

　小さく伸びをして、立ち上がる。カーテンを開き、窓の外を眺めた。東から低い角度で朝日がぶつかり、窓ガラスを黄色く染めていた。フクラスズメが三羽、少し離れたところにある木の枝から枝へと、活発に飛び回っている。

　いつもと変わることのない、朝の景色だった。わたしは、目を擦った。自分が、夢の中で泣いていたのがわかった。

両親に気づかれないように、洗面所に行って、顔を洗う。

柱時計を見ると、まだ、七時前だった。

ずっと、今見たばかりの夢のことを考えていた。あの声の持ち主は、いったい、誰だったのだろう。あの声を聞くと、どうして、あんなにも懐かしく、悲しい気分になるのか。

それから、ふいに、気がついた。墓標に嵌め込まれていたあの鏡だ。あれは、たしかに見たことがある。夢の象徴などではなく、実在する鏡なのだ。

急に、胸がどきどきし始めた。見たのは、ずっと幼い頃だ。場所は、どこだっただろう。その時分に、そんなに遠出したはずがない。家の近所……。いや、家の中か。大きな箱の中に、たくさんのがらくたが詰まっていた。それが、まるで宝物のように思えて、日がな一日眺めていても、飽きなかった。

そうだ。蔵の中だ。

わたしの家のすぐ隣には、大きな蔵が建っていた。上半分は白壁で下半分は海鼠壁（ナマコ）になっており、中は驚くほど広かった。昔はよく、こっそり中に入って遊んだものである。

わたしは、寝間着の上に綿入れの半纏（はんてん）を着込むと、そっと階段を下りて、玄関から外へ出た。冬の朝の冷たく乾燥した空気は、洗ったばかりの顔には、ぴりぴりするほど刺激的だったが、肺胞いっぱいに吸い込むと、気持ちまで洗い清められるような感じがする。

蔵の位置は覚えていたので、大きな扉は、難なく開けることができた。

扉を閉じても、虫籠窓（むしこまど）から差し込んでくる明かりで、なんとか見通しは利いた。手前は八畳ほどの吹き抜けの部屋になっていて、その奥には、ぎっしりと棚が設えられた保管庫の上に、二階へ続く階段があった。

わたしは、おぼろげな記憶を頼りに、二階に上がった。そこにも、壁一面に棚があり、長持ちが積み

重ねてあった。

おそらくは、一個が百キロ以上ある長持ちを、呪力で下ろし、順番に蓋を開けていく。

五番目の長持ちの中に、それはあった。

わたしは、直径が三十センチほどの丸い鏡を取り上げた。ガラスの裏側に銀を塗布したふつうの鏡とは違い、ずっしりと重く、指先の温度を急速に奪っていく。どうやら、青銅鏡らしい。夢に現れた鏡は、あきらかに、これだった。

それだけではない。徐々に、記憶が蘇ってきた。たしかに、以前、この鏡を見ている。それも、たぶん、一度ではないはずだ。青銅鏡の鏡面部分を、仔細に調べてみる。長い間放置されていた青銅鏡であれば、表面に錆が発生しているはずだし、ひどい場合は緑青（ろくしょう）を吹いているだろう。だが、この鏡は、うっすらと曇っているだけだった。

わたしが、最後にこの鏡を見たのは、せいぜいここ五年以内のことだろう。きっとそのとき、鏡面を磨いているに違いない。

長持ちを、元あったとおりに棚に収めると、わたしは、鏡だけを持って蔵を出た。

両親にだけは、絶対に見られたくなかったので、家の裏手に回ってハクレンⅣ号に乗り、水路を進む。早朝にもかかわらず、もう数隻の船とすれ違った。水面を渡ってくる風は、冷たい。できるだけ目立たないように気をつけながら、交通量の少ない水路を選び、誰もいない船着き場に出た。

青銅鏡と一緒に入っていた布で、そっと鏡面を擦（こす）って、曇りを取り去るように努める。やってみると、手作業では思ったより大変なことがわかった。そこで今度は、手の動きに呪力を加えてみる。表面の汚れが落ちた様子をイメージしてやると、みるみる青銅鏡は、ピンクに近い金色の光沢を取り戻した。

それが魔鏡であることは、見つけたときから、見当がついていた。

魔鏡というのは、太古から存在する技法によって作られた鏡の一種である。肉眼で鏡面を見ても、何の模様も見えないが、太陽光を当てたときにだけ、反射像の中に絵や文字が浮かび上がるのだ。鏡面にあるミクロン単位の凹凸によって、平行な光が散乱する現象を利用したものだが、蠟燭や篝火、燐光灯などではだめで、太陽光のときに限り、光の輪の中に絵が浮かぶというのがミソだった。

古代には、青銅鏡を薄く研磨し、裏側から凹凸を付けた図形を押しつけながら、さらに磨き上げることによって、鏡面にその模様を転写していたらしいが、全人学級の初級課程では、微妙なタッチを体得するための、呪力の教材として使用されていた。わたし自身、授業で一回だけ作った記憶がある。『早季』という文字をアラベスク文様で囲んだのだが、我ながら、なかなか見事な出来だったと思う。

わたしは、魔鏡で太陽光を捉え、船着き場の奥にある建物の壁に反射像を映し出した。

円形の光の中央に浮かんだのは、文字というには拙すぎる、いびつな図形である。

しかし、それでも、はっきり『吉美』と読み取ることはできた。

教室に入ると、良は、いつものように友達に囲まれて談笑していた。そのほとんどは、二班の子たちである。

「やあ。今日は、よろしく」

わたしを見て、自信満々の笑みを浮かべる。

「ちょっと、話があるんだけど」

「いいよ。どこかへ行く？」

「どこでも。すぐにすむ話だから」

わたしは、先に立って教室を出た。良は、見送る仲間たちの視線を意識しているように、悠揚迫らざる態度で続く。わたしは、中庭へ向かう廊下の途中で立ち止まった。

「あなたに、いくつか訊きたいことがあるの」

「いいよ。何でも訊いてみて」
　良は、あいかわらず、余裕たっぷりだった。

「二人で、ナイトカヌーをしたときのことなんだけど」

「何だ、またその話か」
　良は、苦笑したが、どこか目が泳いでいた。

「あなたは、わたしに、ナイトカヌーには鉄則があるって教えてくれたわ。それが何だったか、覚えてる？」

『しばらく、焚き火の方を見ちゃだめだよ』
**　顔のない少年の言葉が、わたしの脳裏に蘇った。**

『どうして？』

『ナイトカヌーの鉄則は、乗り込む前に、しっかり目を暗順応させておくことなんだ。そうでないと、しばらくは何も見えないからね』

「そんな前のこと、よく覚えてないな……。何だろう。岩にぶつからないよう気をつけることだったかな？」

「いいわ。じゃあ、もっと最近の話よ。どうして、覚と別れたの？」
　良は、完全に固まってしまった。

「そんなことは……もう、どうでもいいじゃないか」

「あんなに、仲がよかったのに。わたしなんか、嫉妬するほどだったわ」

「そうだったかな」
　良は、むしろ不快そうな口振りで言った。

「じゃあ、最後の質問。また、夏季キャンプのことに戻るけど」

「いいよ。もう、何でも」
　良は、投げやりに答えた。

「離塵師のこと。どうして死んだか、覚えてる？」

「リジンシって何？　……死んだ？　それ、何の話？」

「もういいわ」

わたしは、当惑した様子の良を遮った。

「やっぱり、あなたじゃなかったのね」

「どういうこと?」

「わたし、当番委員の紙に、あなたの名前は書かないわ」

良は、しばらくの間、信じられないといった顔で、わたしを凝視していた。

「そんな……どうして?」

「本当に、ごめんなさい。でも、先に断っとくのが礼儀だと思うから」

わたしは、啞然としている良を置いて、教室に戻った。入り口のところに、覚が立っていた。

「早季は、あいつの名前を書くつもりなのか?」

仏頂面で訊いてくる。

「書くわけないじゃない」

「え? それ、どういうこと?」

わたしは、あらためて、覚をまじまじと見た。

「ねえ、覚こそ、どうして、良のことを好きになったの?」

「どうしてって……」

覚は、ひどく戸惑った顔になった。

「何でだろう。今になってみると、よくわからないな」

「そうか、やっぱりね。悪い子じゃないんだけど、ミスキャストだったんだ」

「え?」

「絶対、彼じゃなかったわ。わたしたちが、二人とも好きになった人は」

その言葉の意味が、覚の意識に浸透するまでには、しばらく時間が必要だった。やがて、覚の頬にかすかな赤味がさす。あいかわらず無言のままだったが、瞳には、いつのまにか強い光が戻ってきていた。

当番委員は、第一回目の開票で、ほとんどの組み

合わせが決まってしまう。駄目元で、高嶺の花の名前を書き込む子もいるにはいるが、たいていの場合は、事前の談合によって合意が形成されているからだ。

　わたしと覚のペアが成立したとき、良は、こちらを見ようともしなかった。その直後に、良も、きっちり二班の女の子とペアを成立させたのは、さすがというべきかもしれない。

　クラス中の注目の的だったのは、真理亜の選択だったが、こちらは、あっさり守を選ぶことで決着した。真理亜に対する、これまでの守の献身ぶりを見れば、当然のご褒美だったかもしれない。

「どういうこと？　良じゃなかったって」

　わたしたちは、放課後、ひと気のない水路の脇に、四人で集まっていた。四人が二組のペアになったことのお祝いをしようと真理亜が言い出し、その打ち合わせのためだったが、そこで、わたしと覚は、真理亜たちにも真実を打ち明けることにしたのである。真理亜は、半信半疑と言うより、ほとんど、わたしの正気を疑っているような目だった。

「だから、違うのよ。わたしたちは、五人で夏季キャンプに行ったけど、そこには、良は入ってなかったんだって」

「そんなわけないわ。覚えてるもの。一番最初にカヤノスヅクリの巣を見つけたのだって、良だったじゃない」

　本当は、わたしだったのだが、そんな些末な部分で争っている場合ではない。

「あれは、良なんかじゃなかったのよ」

「じゃあ、誰？」

「わからない。どうしても、名前が出てこないの」

「どんな子？　顔は？」

「顔も思い出せない」

　僕には顔がないんだ、という夢の中で聞いた言葉を思い出す。

「あのねえ。そんな馬鹿な話、信じられるわけない

でしょう？　早季って、本当に、どうかしちゃったんじゃないの？」

真理亜は、苦笑しながら首を振る。親友の見下すような態度に、わたしは、むっとした。

「……でも、僕も、早季の言うことに、思い当たる部分があるんだ」

覚が、助け船を出してくれた。

「僕は……あいつと、付き合ってたっていう記憶があるんだけど、今思い返してみると、どう考えても、良じゃなかったと思うんだよ。だって、あいつ、好みじゃないんだ」

「そりゃあ、覚の好みは、可愛い美少年タイプだって誰でも知ってるけど……たとえば、怜みたいなね」

真理亜は、偉そうに腕組みをした。

「でも、まあ、魔が差したってことも、あるんじゃない？　押しの一手で来られて、つい、ほだされたとか」

「それも、違うんだよ。僕の方から、ずっと、しつこいくらいに言い寄ってたんだ」

言ってから、覚は、赤くなった。

「とにかく、僕らは、記憶を操作されてるのは、間違いないと思う。記憶を掘り起こしていくうちに、いくつか、辻褄の合わない点も出てきたし」

「へえ、どんな？」

「良の……紛らわしいから、別の名前で呼んだ方がいいな、とりあえず、X（エックス）にしようか。僕には、ちっちゃい頃に、何度かXの家に行った記憶があるんだ。でも、そこは、良の家とは違ってた。ほら、良の家って、見晴（みはらし）の郷（さと）にあるだろう？　丘の上で、かなり開けた場所だったよな。でも、Xの家は……」

「森の中だったわ！」

わたしは、思わず、叫んでいた。

「そう。ずっと北の方で、一軒だけぽつんと建ってる、すごく大きな家だったことだけは、かなり、はっきりと覚えてるんだ」

「そういえば……わたしも、何となくだけど、覚えてるわ」

真理亜が、眉根を寄せた。顰みに倣うという言葉の通り、美人は、どんな表情をしても見られるものだと思う。

「僕は、良も、Xも、家に行ったことはないけど」

今まで黙って聞いていた守が、口を挟んだ。

「でも、北の方で森の中っていうと、どこの郷なのかな？」

わたしも、そのことは考えていたのだが、不思議なことに、ぴったりと当てはまる郷がないのだ。

「ねえ、七つの郷の名前を、順番に言ってみて」

わたしは、覚に頼んだ。

「え？　何だよ、今さら？」

「いいから、言ってみてよ」

今までなら、わたしの言うことなど聞いてもらえなかったと思うが、当番委員のペアになった直後だけに、覚は、素直に指を折った。

「だから、櫟林の郷に、朽木の郷、白砂の郷、黄金の郷、水車の郷、見晴の郷、あと、茅輪の郷だろう？」

今度は、わたしが、眉をしかめる番だった。子供の頃から知っている郷の名前なのに、なぜ、こんなに強い違和感があるのか。

「森の中っていったら、櫟林の郷？　でも、北の方だっていうんなら……」

真理亜の表情は、さっきまでとは一変して、真剣なものになっていた。

「朽木の郷かしら。よく知らないけど、たぶん、そんなに大きな家は建ってないと思うんだけど」

「たしかに、あんまりイメージないな。あそこまで行くと、ほとんど、八丁標の外みたいな印象だし」

言いながら、覚の瞼が、ぴくりと動いた。

それを見て、わたしは、はっとした。この感じ……。ここしばらく、何かを思い出そうとしているとき、幾度となく、同じような感覚に襲われてい

た。そのとき、わたしの顔を観察している人がいれば、きっと、同じような瞼の痙攣に気づいていただろう。これは、何かの警告なのかもしれない。心に埋め込まれている暗示が、都合の悪い記憶が蘇るのを妨害しているのだろうか。

「行ってみようよ」

わたしが、そう言うと、みな、顔を見合わせた。

「どこへ？」

「朽木の郷よ。決まってるじゃない」

「当番委員のペアが決まった日なのよ？　他のみんなはお祝いしてるのに、何が悲しくて、そんな、さびれ果てたとこへ行かなきゃならないの？」

真理亜が、ぼやいた。

朽木の郷は、たしかに、賑わいという言葉とは対極にある場所だった。

船着き場の周辺には、たくさんの家が建ち並び、一応は目抜き通りのようなものもある。しかし、そこから一本奥に入ると、とたんに印象が暗くなる。住む人のいなくなった廃屋ばかりが立ち並び、寂（さび）れたというより、荒（すさ）びれたとでも言うべき状態になっているのだ。

「ここにいた人たちって、どこへ行ったんだろう？」

覚が、不審げに、閉め切られた雨戸に手を触れた。

「何か、天災か事故みたいなことがあって、他の郷に引っ越したんじゃなかったっけ？」

守が、言う。その記憶は、わたしとも一致していた。これほど狭い世界で起きた事件でありながら、あまりにも曖昧すぎる部分も含めて。

「とにかく、……Xの家があったのは、ずっと北のはずよ。行ってみましょう」

わたしは、みんなを促して歩き出した。あまり人目につかないよう、細い道を選んだのだが、途中、誰にも行き合わなかったのは、他の郷では考えられ

ないことだった。

小一時間歩くと、朽木の郷を襲った『天災』なるものの爪痕が、徐々にあきらかになってきた。

あちこちに大きな地割れができており、多くの木が薙ぎ倒されている。地層が、一メートル以上ずれている場所もあった。どう見ても、巨大な地震の跡としか思えなかったが、もちろん、そんな規模の地震があれば、神栖66町全体が、大きな被害を受けているはずである。

さらに、広い地域にわたって、まるでカーペットを一方向から押したような皺ができているのも異様だった。ミニチュアの褶曲山脈を思わせる皺の高さは、場所によっては、三メートルにも及んでいる。

「いったい、何が起きたら、地面が、こんなふうになるんだ？」

覚が、独り言のようにつぶやいた。

「誰か、すごい呪力を持ってる人が、地層をねじ曲げたんじゃない？」

真理亜が、応じる。

「何のために？」

「わたしに、わかるわけないじゃない」

さらに、少し歩いたところで、わたしたちは、突然、行く手を阻まれた。

「八丁標だ……」

アカマツの林が、将棋倒しになったように折り重なっている。その中で、一定の間隔で直立している木々に、注連縄が張られているのだ。倒木の一部を、わざわざ立て直したとしか思えなかった。

「朽木の郷って、こんなに狭いの？　もう、八丁標にぶつかるなんて」

わたしの疑問に、覚が、注連縄を調べる。

「いや、違うな。この縄は、まだ、作られて間もないんじゃ……」

覚は、急に言葉を切って、わたしの方を見る。

彼が感じていることは、以心伝心のように、わた

しの心に伝わってきた。こういうのを、既視感（デジャ・ヴ）というのだろうか。わたしたちは、これとほとんど同じ会話を、以前にも交わしたことがある。それは、確信に近い思いだった。

八丁標の手前に沿って迂回していくと、丘が潰れ森が薙ぎ払われたような場所に出て、急に視界が開けた。

「こんなとこに……全然、知らなかったわ」

真理亜が、呆気にとられたようにつぶやいたのも、無理はなかった。目の前に広がっていたのは、青々とした水を湛えた湖だった。まるで火口（カルデラ）湖のような、きれいな円形をしている。八丁標の向こう側なので、岸には近づけないが、差し渡しは、ゆうに二百メートルはあるだろう。

さらに、その彼方に目を転じてみると、こちらとは比較にならないくらい大きな湖が、広がっているようだ。対岸はまったく見えないので、もしかすると、北浦とつながっているのかもしれない。土が剝き出しになっているこちら側の湖とは違い、古代のダム湖のように、森がすっぽり水没しているようだ。あれが、朽木の郷という名前の由来なのだろうか。

「この先に、家なんてありそうもないね」

守が、早く帰りたいという態度を露骨に示す。

「やっぱり、気のせいだったんだよ。Xなんて、いないんだって」

「じゃあ、どうして……？」

真理亜の声には、混乱からか、力がなかった。

「わたしも、早季や覚の言ってること、ちょっとだけ感じてた。わたしが知ってたのは、もしかしたら、良じゃなくて、別の男の子だったんじゃないかって」

「錯覚だよ。ほら、僕らくらいの年代って、急激に大人になるから。背が伸びるだけじゃなくて、顔の感じとか性格まで、どんどん変わっていくじゃない？」

わたしは、覚と目を見合わせた。

　守の言葉は、わたしたちの生活実感とは、およそかけ離れていた。その頃のわたしたちにとっては、時間がたつのは蝸牛（カタツムリ）のようにのろくさく、何もかもが、琥珀の中に囚われた蠅さながらに、永遠の膠着状態に陥っている感すらあったのだ。

「ねえ。もう一人、いなかった……？」

　突然、真理亜がそう言い出したとき、わたしたちは、ぎくりとした。

「うちの班だけ最初から四人だったっていうのは、やっぱり、ありえないと思う。だから、良が来る前には、Xがいたはずよ。でも、それでも、一人少ないでしょう？　よく思い出せないんだけど、もう一人、いたんじゃない？」

　脳裏に、目立たない少女の姿が明滅した。それから、夢で見た、カードを幾枚も積み重ねたような形の墓標も。

「いたよ。僕は、覚えてる」

　覚が、頭痛がするように、こめかみを揉みながら言った。

「少なくとも、Xのときみたく、記憶が完全に抹消されてるってことはないみたいだな。だけど、どうしてなんだろう。クラスから途中でいなくなった子のことは、誰も、絶対に話題にしないだろう？」

「ねえ、そんな話は、やめようよ！」

　守が、叫ぶ。

「絶対、良くないって。そんなこと、詮索するのは。そんな話ばっかりしてたら……」

　急に怯えたような表情になって、言いよどむ。

「してたら、何？　わたしたちも、処分されてしまうっていうの？」

　わたしがそう言うと、場の空気は凍りついた。

「早季。たしか、そんな話、夏季キャンプでも、してなかった？」

　真理亜の顔は、蒼白になっていた。

「した。したと思う。具体的に何を話したのかは、

僕も、思い出せないけど。思い出そうとすると、頭の中で邪魔が入るんだ」

答えたのは、覚だった。

「でも、僕はそんなことを、早季に言ってたみたいだ。それから、みんなにも言ったよ。焚き火のそばで。そのとき、僕の意見に賛成してくれたのは、Xだった」

覚は、ひどい頭痛に耐えているように、両方の手で頭を押さえていた。

「やめろよ！　もう聞きたくない。そんな話、絶対にしたらだめなんだよ！　倫理規定違反だって！」

守が、大声で喚き始めた。いつもは引っ込み思案で物静かな守が、こんなにも自制心を失うところを見たのは、初めてだった。

「わかった。だいじょうぶよ」

真理亜が、守の首を抱き寄せて、子供をあやすように、とんとんと叩く。

「この話は、もう、やめましょう。……いいわね。二人とも」

真理亜にきつく睨まれて、わたしたちは、うなずくしかなかった。

魔鏡は、黒い板塀の上に鮮明な反射像を結んだ。

覚と真理亜は、しばらくの間、無言だった。守は、気分が悪そうだったので、先に家に帰していた。

「どう思う？」

わたしが催促すると、覚が、ようやく重い口を開いた。

「うん。……かなり下手くそに見えるけど、この文字のタッチは、初心者が呪力で作ったものだと思う」

「そうね。基本的に、わたしたちが授業で作ったのと、同じだわ」

真理亜も、同意する。

「じゃあ、これで、わたしが嘘を言ってたんじゃな

いって、納得してくれる？」

「最初から、嘘だなんて言ってないわ。早季にお姉さんがいたっていう推測も、当たってるんじゃないかと思う。だけど、その人が、学校に、その……処分されたっていうのは、ちょっと飛躍のしすぎなんじゃない？」

「もし、姉が、事故か病気で亡くなったんなら、隠す必要はないでしょう？」

真理亜は、わたしの視線を避けた。

「そうとも言えないかも。何か、辛すぎる思い出だったんなら、早季には言わないようにしてたかもしれないし」

「でも、この文字見てよ。覚が言ったように、下手すぎると思わない？　姉は、きっと、きちんと呪力を使いこなせなかったんじゃないかと思うの」

「その可能性は否定できないけど、やっぱり、何もかも憶測でしかないよ」

覚は、わたしから魔鏡を受け取ると、板壁に映った反射像の角度と大きさを微妙に変えて、観察した。

「これだって、よく見ると、下手っていうのとは、ちょっと違うんじゃないかな。ひとつひとつの線は、きれいに凹ませてあるんだ。ただ、それが歪んだり二重になったりしてるところがあるだけで……」

このときのわたしには、覚が何を言おうとしていたのか、よく理解できていなかった。ずっと後になって、そうした症状が一種の視覚障碍に起因していることがわかって、覚の慧眼に驚いたものである。姉を含めて、多くの子供の呪力に欠陥があると判定されたのは、この視覚障碍によるものだった疑いが濃厚なのだが、ほとんどの記録が失われてしまった今となっては、真相は藪の中である。

この視覚障碍は、古代には、近視や乱視などと呼ばれていたらしい。対症療法として、サングラスのような眼鏡に度の入ったレンズを嵌め込むことで、

日常生活には支障のないレベルにまで障碍を緩和できたとされている。

「とにかく、わたしには、姉がいたのよ」

　わたしは、覚から魔鏡を取り返し、両手で高く掲げた。

「わかる？　これが、その証拠なの」

「おい、やめろって。誰かに見られたら、不審に思われる」

　覚が、小声で注意する。

「早季。あなたの気持ちは、よくわかるわ」

　真理亜が、わたしの肩に手をかけて、耳元でささやく。

「でも、頼むから、これ以上、騒ぎ立てたりしないで」

「騒ぎ立てるって？　わたしは、ただ、真実を知りたいだけなのよ」

　親友の意外な言葉に、わたしは、憤慨した。

「姉のことだけじゃない。うちの班にいた女の子だって。それから、何よりも……」

　X。顔のない少年。誰よりも愛していた。それが今は、脳裏に、その顔を思い浮かべることもできない。

「かけがえのない、わたしたちの友達のことを」

「わかってる。わたしだって、辛いわ。思い出はたくさんあるのに、肝心な部分だけ切り刻まれてるんだもの。何とかしたいっていう気持ちは、早季と一緒よ。だけど、わたしは、今、生きてる友達の方が心配なの」

「わたしのことだったら、心配いらないわ」

「早季のことは、心配してない。あなたは、強いもの」

　真理亜は、突き放すように言う。

「強い？　わたしが？」

「ええ。あなたは、Xのことでは、誰よりも深く傷ついているわ。わたしには、見てて、よくわかるの。でも、早季は、それに耐えている。ふつうだっ

たら、耐えられないほどの悲しみだと思うのに……」

「ひどい。わたしを、いったい、何だと思ってるの？」

わたしは、肩にかけられた真理亜の手を振り払った。

「誤解しないで。あなたが、冷たい人間だって言ってるんじゃないのよ。それどころか、早季は、人一倍感じやすいわ。だけど、あなたは、その悲しみや苦しみを背負っていける人なのよ」

真理亜の目に大粒の涙が浮かんでるのを見て、わたしの怒りは、急速に引いていった。

「わたしたちは、みんな、あなたほどは強くない。わたしなんか、いつも偉そうにしてるけどね、いざとなると、すぐに逃げ出したくなっちゃう。……だけど、わたしや覚より、もっと弱い人もいるのよ」

「もしかして、守のこと言ってるの？」

覚が、訊ねた。

「ええ。守は、すごく優しくて繊細なの。心の底から信じていた人に裏切られたりしたら、もう立ち直れないわ。人だけじゃない。信じていた世界にも……」

真理亜は、ゆっくりと、わたしを抱擁する。

「世の中には、知らない方がいいことって、たぶん、いっぱいあるんだと思う。真実が、一番、残酷なことだってあるでしょう？ それに、耐えられる人ばっかりじゃないのよ。これ以上、恐ろしい真実を突きつけられたりしたら、守は、きっと壊れちゃうわ」

しばらくの間、三人とも、無言だった。わたしは、ふっと溜め息をつく。

「わかった」

「本当？」

「約束する。守には、もう、こんな話は聞かせないようにするから」

わたしは、真理亜を、強く抱きしめ返した。

「だけど、わたしは、本当のことがわかるまで、絶対あきらめない。だって、そうじゃないと……あんまり、可哀想すぎる」

顔のない少年。このまま忘れ去られてしまうようなことは、絶対に、あってはならない。それは、彼が存在しなかったことと同じになってしまうからだ。何としても、もう一度、彼の記憶を取り戻さなければ。

わたしたちは、三人で、抱きしめ合い、キスし合った。互いに慰め合い、力づけ合い、けっして孤独じゃないことを再確認するために。

それから、連れだって、ぞろぞろと船着き場に戻った。そこは、わたしの家がある水車の郷の外れだった。ふだん、あまり、ひと気がないことと、水路に沿って黒い板塀が続いていることで、二人に魔鏡を見せる場所に選んだのだ。

それぞれの船のもやい綱を解こうとしたとき、後ろから、声をかけられた。

「あなたたち、ちょっと、いいかしら？」

振り返ると、中年の男女が立っていた。神栖66町では、一度も見たことのない人というのは稀だが、二人とも、あまり馴染みがない顔だった。声をかけてきた女性は、小柄でぽっちゃりしており、いかにも無害そうな雰囲気を漂わせていた。続いて質問した男性の方も、小太りで、人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「渡辺早季さんは、あなたですね？　それから、秋月真理亜さんと、朝比奈覚くん？」

わたしたちは、当惑しながらも、はいと答えるしかなかった。

「いや、そんなに緊張しないでもいいんですよ。ただ、ちょっと、お話を聞かせてもらいたいだけですから」

わたしたちは、処分されるのだろうか。三人で、交互に顔を見合わせたが、どうしたらいいのかは、見当もつかない。

「あの……教育委員会の方ですか？」

　勇を鼓したように、覚が、訊ねた。

「いいえ。わたしたちは、あなたのお祖母さまの下で働いてる者です」

　小柄な女性が、覚に微笑みかける。

「え？　そうなんですか？」

　覚は、緊張を解いたようだった。どういうことだろう。わたしは、覚の祖母という人について、話を聞いたことは一度もなかった。女性は、わたしと真理亜の不審を読み取ったらしく、にこやかな表情で説明する。

「朝比奈覚くんのお祖母さまは、朝比奈富子さまです。倫理委員会の議長をなさってるんですよ」

2

　わたしたちは、清浄寺へ連れて行かれたときのような、窓のない屋形船に乗せられた。どうやら、目的地を秘密にするつもりはないらしく、無意味な方向転換を繰り返すような目くらましの動きはなかったので、ふつうに水路を進んでいくうち、ほぼ、どのあたりにいるのかの見当はついた。

　下船したのも、ふつうに使われている船着き場である。わたしたちは、もしかすると、八丁標の外まで運ばれるのではないかと思っていたので、やや拍子抜けした。

　父の勤める町役場と、母の仕事場である図書館を横目に見ながら、町で一番広い通りを横断し、細い路地に入る。

　倫理委員会は、茅輪の郷の中心部を少し外れた場所にあった。外から見ると、ふつうの町屋にしか見

えなかったが、表門をくぐり中に入ると、板張りの廊下が奥に向かって鰻の寝床のように延びており、それが相当な大きさの建物であることがわかった。

ようやく辿り着いたのは、静かな奥座敷のような感じの部屋だった。白檀のような香が焚きしめられており、床の間には、寒牡丹の掛け軸が飾ってある。

大きな漆塗りの座卓には、障子窓の明かりが映し出されており、下座側には、桔梗色の座布団が三つ並んでいた。わたしたちは、かしこまって正座する。

「しばらく、ここで待っていてくださいね」

わたしたちを、ここまで案内（ないしは連行）してきた女性は、そう言って、襖を閉めてしまう。

「ねえ。これ、どういうこと？」

三人だけになると、わたしと真理亜は、両側から覚を詰問した。

「覚のお祖母さんが、倫理委員会の議長だなんて、一度も聞いたことないわよ？」

「まさか、わたしたちのこと、逐一報告してたわけじゃないでしょうね？」

「ちょっと、待ってくれ」

覚は、たじたじになった。

「僕も、知らなかったんだ」

「知らなかったって、何を？」

「だから、お祖母さん……というか、朝比奈富子さんが、倫理委員会の議長をしてたってことだよ」

「そんな、嘘よ」

「ありえないでしょう？　知らなかった？　孫なのに？」

「だから、話を聞いてくれよ」

左右から責め立てられた覚は、辟易したように後退し、座布団からずり落ちた。

「だいたい、倫理委員会の議長が誰かなんて、君たちだって、知らなかっただろう？」

「それは、そうだけど」

「他の役職と違って、倫理委員は、全員、非公開なんだよ。委員本人も、自分がそうだなんて言わないし」

「それでも、何となく、わかるもんなんじゃないの？」

真理亜は、まだ、疑いの目で見ていた。

「何となく、全然、わからなかったね」

覚は、開き直ったように、胡座をかく。

「だって、覚の、実のお祖母さんなんでしょう？」

真理亜は、しつこい。

「いや、それが、僕にはよく……」

「失礼します」

急に、襖の外から声をかけられて、覚は、あわてて座布団の上に戻った。わたしたちも、正面を向いて威儀を正す。

「ごめんなさいね。お待たせして」

襖を開けて、先ほどの女性が入ってきた。手には茶碗の載った盆を掲げている。わたしたち三人の前に、熱いお茶と、お茶請けの干菓子を置く。

「一人ずつ、お話を聞きたいので、順番に来てくれるかしら？」

嫌だと言ったらどうなるだろうと思ったが、もちろん、そんな選択肢はない。

「じゃあ、最初は、渡辺早季さんから」

喉が渇いていたので、無性にお茶を飲みたかったのだが、わたしは、しかたなく、立ち上がった。女性の後について、長い廊下を進んでいく。

「あなたたちからお話を聞くのは、新見さん、さっき一緒にいた男の人だけど、あの人の役目だったの。そうか。まだ自己紹介もしてなかったわね。わたしは、木元といいます。よろしくね」

「こんにちは」

わたしは、ぺこりと会釈をした。

「……それで、議長に報告したら、あなただけは、直にお話を聞きたいということなのね。だから、今から、議長の執務室へ行きます」

「え。覚の……朝比奈富子さんですか？」

「ええ。とっても気さくで、優しい方ですからね。緊張しなくていいわよ」

そう言われても、無理な相談だった。わたしの心臓は、さっきまでも平静とは言い難い状態だったが、さらに、ばくばくし始めた。

「失礼します」

木元さんは、廊下に片膝をつき、板戸に手をかけた。わたしも、あわてて、その後ろに控える。

「どうぞ」

返ってきたのは、涼やかな女の人の声だった。

板戸が開けられ、わたしたちは、中に入った。そこは、さっき通された座敷より一回り広い、書院風の部屋だった。左手には立派な床の間があり、その奥には付書院（つけしょいん）、逆側には違い棚も設えられている。

「どうぞ。そこに、お通ししてちょうだい」

書き物机に向かっていた、灰色の髪の女性が、顔を上げずに命じる。

「かしこまりました」

部屋の中央には、先ほどの部屋と同寸の座卓が置かれていた。わたしは、その手前に、座布団をよけて座る。

「それでは、失礼します」

木元さんは、さっさと退出してしまう。後に、一人取り残されたわたしは、猛獣の檻に置き去りにされた人間のように、手足が冷たく、喉がからからになっていた。

「渡辺早季さんね？　瑞穂ちゃんのお嬢さんの」

灰色の髪の女性が、顔を上げて訊ねる。鼻の脇から口元まで伸びる法令の線を除けば、皺もほとんどなく、意外なまでに若々しい風貌だった。

「はい」

「そんなに、かしこまらなくていいのよ。朝比奈富子です。うちの覚が、いつも、仲良くしていただいてるそうね」

富子さんは、すっと立ち上がって、わたしの左手

に来ると、優雅な挙措で床の間を背にして座った。髪の色に合った銀鼠色の鮫小紋を、惚れ惚れするくらい、きれいに着こなしている。

「覚とは……覚さんとは、ずっと、幼馴染みで」

「そう」

　富子さんは、微笑んだ。六十代の半ばくらいだろうか。目が大きく、整った顔立ちで、若い頃は、さぞかし美人の誉れ高かったことだろう。

「想像してたとおりね。すごく、いい目をしてるわ。光があるの」

　わたしは、目を褒められることが多い。たぶん、他に褒めるところがないからだろう。目に光があるというのも、よく言われることだが、もし目に光が全然なかったら、その人物は、間違いなく死んでいる。

「ありがとうございます」

「私はね、どうしても、あなたと一度、お話がしてみたかったの」

　単なる社交辞令とも思えず、わたしは、戸惑った。

「どうしてですか？」

「それはね、あなたに、いずれ、私の跡を継いで貰いたいからよ」

　わたしは、ぽかんと口を開けた。とっさに、どう返答していいのかわからない。

「驚いた？　でも、けっして、思いつきや冗談で言ってるんじゃないのよ」

「そんな……わたしなんかに、つとまるはずありません」

「ほほほほ。瑞穂ちゃんと同じこと言うのね。血は争えないものだわ」

「母を、よくご存じなんですか？」

　わたしは、身を乗り出して訊ねていた。最初は、緊張の極みにあったはずだが、朝比奈富子という人の持つ独特の雰囲気が、心の障壁を取り払ってしまったようだ。

「ええ。よく知ってるわよ。瑞穂ちゃんが、生まれたときからね」

　富子さんは、わたしの目を見つめながら、心の底に染み通るような声で言う。

「瑞穂ちゃんには、人の上に立つ素晴らしい資質があるわ。今も、図書館司書としては、申し分なくやっている。でも、私の職責には、さらに求められるものがあるの。その点、あなた以上の適任者はいないのよ」

「わたしなんて……どうしてですか？　まだ、全人学級の生徒で、成績だって、それほどいいわけじゃないですし」

「成績？　呪力のことを言ってるの？　あなたは、別に、肆星（しせい）みたいになりたいわけじゃないんでしょう？」

「それはまあ……なりたくても、なれませんし」

「学校で験（ため）されるのは、呪力の素質だけじゃないのよ。もう一つ、人格指数というものがあるの。これは、生徒本人には、けっして知らされることはないんですけどね」

「人格指数？」

　富子さんは、年齢のわりには白い歯を見せて、艶（あで）やかに微笑んだ。

「いつの世も、指導者たる者に求められてきたのは、何か特別な能力なんかじゃなくて、この人格指数なのよ」

　いっぺんに、目の前が明るくなったような気がした。わたしは、それまで、さまざまな面で劣等感の塊だったからだ。

「それは、たとえば、頭の良さとか、感受性とか、統率力みたいなことなんですか？」

　勢い込んで訊ねたが、富子さんは、優雅なしぐさで首を振る。

「いいえ。頭の良さは、まったく関係ありません。感受性も、もちろん違うわ。それに、統率力のような人間関係の技倆は、後から、いろいろな経験を経

ることによって身につければいいものなんですよ」

「じゃあ……？」

「人格指数っていうのは、どれだけ、その人の人格が安定しているかっていうことを示す数値なの。どんなに想定外の出来事があって、心の危機を迎えても、自分を見失ったり、心が壊れてしまったりせず、一貫した自分を保てるか。それこそが、指導者にとっては、一番大事なことなのよ」

何だか、あまり嬉しくなかった。ここへ来る前、真理亜に、強い人間だと言われたことを思い出す。それは、単に、わたしが鈍感だということではないのか。

「そのスコアが、わたしは、高かったんですか？」

「ええ。素晴らしい数値だったわ。全人学級が、始まって以来かもしれない」

急に、富子さんの目が鋭く光った。

「でも、それだけじゃないわ。あなたの凄いのはね、すべてを知ってからも、指数上は、ほとんどダメージが残らなかったということなの」

ぎょっとして、顔から血の気が引くような気がした。

「すべてって、何のことですか……？」

「あなたは、ミノシロモドキから、人類の血塗られた歴史について学び、私たちの社会が、どんなに薄氷を踏んで、今の平和と安定を手に入れたかを知った。あなたたちが帰還してから、徹底的な心理テストを行い、経過観察をしたの。あなたの人格指数は、激動の後、見事に短時間で恢復したのよ。他の四人は、かなりの長期間にわたって、がたがたの状態だったわ」

それでは、やはり、すべてを知られた上で、モルモットのように観察されていたのか。ある程度予想されたことだとはいえ、脳天を一撃されたような気がした。

「それ……もしかして、最初から全部、仕組まれてたことなんですか？」

「まさか」

富子さんは、一瞬で、元の柔和な表情に戻った。

「いくら何でも、そんな危険な賭けはしませんよ。あなたたちが、多少の規則違反を犯すのは、最初からわかってたことです。でも、まさか本当にミノシロモドキ……先史時代の図書館端末を捕まえるなんて、誰にも予想できなかったわね」

本当だろうか。彼女の言葉を、百パーセント信じる気にはなれなかった。

「でも、そんな、テストの結果だけで……」

「いいえ。町の人全員の命運を担っている最高責任者にはね、清濁併せ呑む度量、真実を知っても動じない胆力が必要なのよ。あなたには、それがあるわ」

清濁併せ呑むというのは、便利な言葉ではある。だが、きれいなものなら誰だって呑むことだろう。要は、汚いものも平気で嚥下できるということではないのか。

「わたしたちは、規則を破り、知ってはならない知識を得てしまいました。それなのに、どうして、処分されなかったんですか？」

つい、突っかかるような物言いをしてしまったが、富子さんは、気を悪くした様子もなかった。

「あなたの言いたいことは、わかるわ。弁解するつもりはないけど、あなたたちの処分を決めているのは、私たちじゃないの。教育委員会なのよ」

富子さんは、諭すように言う。

「議長は、宏美ちゃんね。あなたも知ってるわね？小さい頃から、とっても心配性の子だったわ。最近は、それが、ちょっと行き過ぎてるような気がしないでもないけど」

宏美ちゃん……鳥飼宏美さんが教育委員だということは聞いていたが、議長であるとは知らなかった。母の友人であり、何度か家に遊びに来て、夕食をともにした記憶がある。小柄で痩せぎす、聞き取れないほど声が小さい、内向的な感じの女性だっ

た。あの人が、生徒全員の生殺与奪の権を握って、しばしば冷酷非情な決定をも下してきたというのか。わたしには、とても信じられなかった。

「倫理委員会は、この町の最高意思決定機関だけど、教育委員会が独自に決めたことには、基本的に口を挟まないできたの。でも、あなたたちのことは、例外。私からお願いして、処分を行わないよう求めてきたのよ」

「それは、覚がいたからですか？」

「いいえ。こんな重要な決定に、私情を挟むことはありません。すべては、あなたがいたからなのよ。あなたは、この町の将来にとって、必要な人だから」

　やはり、わたしたちは、もう少しで抹殺されるところだったのだ。そう思っただけで、気分が悪くなった。

　だが、本当は、いったいなぜ、処分を免れたのだろう。にわかには信じがたいが、富子さんが言うように、わたしが貴重な人材だからなのか。今まで、こんなに持ち上げられたことはなかったので、わけがわからなかった。もしかすると、わたしが、図書館司書の娘なので、簡単には処分できなかったのかとも疑いたくなる。……だが、もしそうなら、わたしの姉のときも、条件は同じだったはずだ。

「だけど、どうか、宏美ちゃんたちを悪く思わないでね。あの人たちは、一種の恐怖症に突き動かされてるだけなのよ」

「恐怖症って……？」

　他人の生死まで差配できるほどの権力者たちが、精神に異常を来しているというのか。

「ううん。少し、言葉が悪かったかもしれないわね。私自身、まったく同じ恐怖を持っているもの」

「それって、何に対する恐怖なんですか？」

　富子さんは、意外な顔をして、わたしを見た。

「まあ、決まってるじゃないの。私たちにとって、本当に恐ろしい存在は、この世で二つしかないでし

よう？　悪鬼（あっき）と、そして業魔（ごうま）よ」

　わたしは、絶句した。幼い頃より繰り返し聞かされた、二つのおとぎ話を思い出す。

「でも、宏美ちゃんたちは、本物の悪鬼や業魔を見たことはないわ。そこが、私とは違うところね。だから、私は、あの人たちのは単なる恐怖症だって、いつも言ってるのよ」

「じゃあ、実際に……？」

「ええ。私は、この目で見たわ。それも、ごく間近で。その話を聞きたい？」

「はい」

　富子さんは、しばし瞑目してから、静かな声で話し始めた。

　悪鬼は、これまでに、全世界で、三十近い症例が記録されているの。そのうち、たった二例を除いて、すべて男の子だったのよ。どう足掻いても攻撃性の呪縛から脱しきれない、男性性というものの厄介さを、よく示してると思うわ。

　その生徒も、やはり、男の子だった。残念ながら、本名は思い出せないの。遠い昔の話だけど、事件そのものについては詳細に覚えているのに、どうして名前だけが思い出せないのか、不思議だわ。もしかすると、忘れたい理由でもあったのかもしれないわね。

　事件の詳細を記したファイルは、図書館にも一部しかないけど、そこにも、YKというイニシャルしか残ってないの。どちらが名前で、どちらが名字なのかも不明なのよ。その間の経緯は、よくわからないんだけど、一説では、倫理規定を施行する前の経過措置として、太古の日本の法律を暫定的に復活させた直後だったため、少年法六十一条の規定というのが適用されたためだとか……。馬鹿馬鹿しい話だけど、まあ、こんなのは、どうでもいいことね。

　とりあえず、その子のことは、Kと呼ぶことにしましょう。

Kは、当時、指導学級の一年生だったわ。指導学級というのは、今の全人学級の前身。年齢は、十三歳になったばかりだったと思う。……そうか。あの子は、今のあなたより、まだ一歳若かったことになるわね。

当初、Kは、まったく目立たない普通の生徒だったらしいわ。最初に異常が見つかったのは、新入生に対するロールシャッハ・テストだった。これは、今は行われてないけど、二枚に折りたたんだ紙の間に落としたインクの染みを見て、連想した内容から、性格特性などを調べる心理テストなの。

濃淡に対する反応などから、Kは、日頃から、非常に大きなストレスを感じていたことがわかったわ。でも、それが何によるものなのかは、はっきりしなかったのね。一方で、インクの染みから連想した内容には、どこか異様で残虐なものが多かったわ。おそらく、無意識の中では、破壊と殺戮に対する欲求が渦巻いていたのね。でも、このときはなぜか、彼の異常はさほど重要視されず、テストの結果も、事件の後で再調査がなされて、初めて注目されたということなの。

指導学級において、呪力の使い方を学び、習熟するにつれて、Kの異常性は、しだいにあきらかになっていった。

呪力の才能や成績は、常に平均点ぎりぎりか、それ以下だったの。でも、Kは、普通の生徒が戸惑ってしまうような状況で、かえって生き生きし出すということがあったみたい。具体的なエピソードは残ってないけど、さまざまな競技で、周りの人たちに危害を及ぼす可能性がある場合でも、呪力を使うのに、まったく躊躇がなかったというのよ。

担任だった教師は、早くから彼の異常性に気づき、当時の教育委員会に対して、何らかの予防策を採るべきだと、繰り返し具申してるの。でも、実際には、有効な方策は何一つ採られることはなかった。これについては、いくつかの理由や反省点が挙

げられているわ。

第一に、その前の悪鬼の出現から八十年以上が経過していたこと。記憶は徐々に風化し、危機感が失われていたのね。第二に、Kの母親が、当時、うるさ型で知られる町議会議員だったこと。当時、すべてを決定していたのは町議会だったから、学校側も、思い切った手段が取りにくかったみたい。第三は、学校を含めた官僚機構で、事なかれ主義が横行していたこと。歴史上、そうじゃなかった時があったのかは、はなはだ疑問だけどね。

そして第四に、この時点では、取るべき有効な方策が、ほとんどなかったのよ。

結局、Kは、定期的なカウンセリングを受ける以外は、何の処分も受けず、引き続き、温かく見守られていたわけ。

そして、入学後、七ヵ月ほどたったある日、とうとう事件は起こったのよ。

富子さんは、天井を見上げ、深く溜め息をついた。それから、立ち上がると、書き物机の脇の小さな水屋簞笥から、急須と二人分の湯飲みを出してくる。座卓の上に置かれていたポットから熱いお湯を注ぎ、お茶を入れてくれた。

わたしは、いい薫りのする煎茶で喉を潤して、話の続きを待った。

実をいうとね、事件について残っている記録は、非常に乏しいの。特に、最初の部分は、まったくわかっていないわ。発端が何だったのか。どういう経緯で被害が拡大していったのか。すべては、憶測の域を出ないんだけど、それは、事実起こったのよ。結果、千人を超える尊い人命が失われたことも、厳然たる事実だわ。

最初の犠牲者が、担任の教師であったことは、まず間違いないでしょうね。見つかった遺体は、あまりに損傷が激しかったために、本人かどうかという

確認も難しかったみたい。それから、同じ学級の二十二人の生徒たち、次いで、二年生、三年生、あわせて五十人ほどの生徒たちも、相次いで、痛ましい姿で発見された……。

Kが正真正銘の悪鬼であったことも、たしかよ。彼は、完全な先祖返りであり、人間に対する攻撃抑制を持たない化け物だった。しかも、生まれつき愧死機構に欠陥があったらしく、まったく機能していなかったの。この二つの恐ろしい変異を併せ持った子供が生まれてくる確率は、三百万人に一人と言われていたから、単純計算では、神栖66町に出現することなど、まずないはずだった。でも、確率は、しょせん、確率でしかないということね。

Kの異常性については、少なくとも、家族はよくわかっていたはずよ。特に、Kの母親は、彼がまだ赤ん坊だったときから、気がついていたらしいわ。それで、彼が幼い頃から、さまざまな心理療法や矯正措置を受けさせたの。中には、洗脳に近いものもあったみたい。そして、その甲斐あってか、子供時代の長きにわたって、Kの攻撃性は抑制されていた。

でも、それが本当に良かったのかどうかは、疑問が残るわね。ロールシャッハ・テストに表れていた、Kの強いストレスは、どうも、無理やり攻撃性を抑えつけられていたためだったという、疑いが濃厚だから。

そして、運命の日、何かのきっかけで、彼の偽りの抑制は弾け飛んだの。

というより、むしろ、人間の仮面がぱっくりと割れて、内から悪鬼が出てきたっていう方が、実態に近いかもしれないわね。

ほかの悪鬼の例すべてから類推すると、どうやら、最初の一人が分水嶺らしいわ。実際、ここで思いとどまっているケースも、何件かあるの。攻撃抑制も、愧死機構もなくとも、人間は、理性によって殺人を回避することが可能なのよ。

でも、最初の一人を殺してしまうと、一度スイッチの入ってしまった殺戮は、際限なく続くことになる。終焉は、悪鬼が死ぬことによってしか訪れない。この場合も、例外じゃなかったわ。

Kは、最初に、呪力で、担任教師の両手両足を四方向に捻じ切ると、熟した果物を握り潰すように頭部を粉砕した。それから、怯えきっている生徒たちを、次々に持ち上げては、教室の壁に叩きつけたらしいの。完全に扁平になって、貼りついてしまうくらいの勢いでね。

現場は、まさに、地獄絵図だったそうよ。後に、検視や後始末に当たった人間の九割が、心的外傷後ストレス症候群（PTSD）と診断され、結局は、仕事を辞めざるを得なくなったくらいにね……。

今や完全な悪鬼と化したKは、教室を出ると、次なる獲物を求めて学校中を徘徊した。そして、悲鳴を上げて逃げまどう子供たちを、まるで何かのゲームのように殺戮し続けたのよ。残された遺体の位置からすると、恐怖によって子供たちの流れを操り、パニックによって、転落死したり圧死したりするように仕向けたり、家畜の群れのように一ヵ所に集めておいて、一気に皆殺しを図ったふしもあるわ。

その間、誰一人として、悪鬼に対して有効な反撃を加えることはできなかった。呪力においては、Kより優れた生徒はいくらでもいたけど、全員、強固な攻撃抑制と愧死機構によって、腕を縛られていた……つまり、対人攻撃は不可能だったからよ。

だけど、Kの側から見ると、自分の中に攻撃抑制が存在しないだけに、いつ、相手から反撃を受けるのかという恐怖に駆られて、周囲にいる人間を皆殺しにするまで先制攻撃をかけ続けたのかもしれない。

違う説では、Kは、脳内で分泌される快楽物質のために、血に酩酊した状態になって、連鎖的な大量殺人を止められなくなっていたということだったわ。悪鬼の正式名称であるラーマン・クロギウス症

候群を、別名『鶏小屋の狐（フォックス・イン・ザ・ヘンハウス）』症候群と呼ぶゆえんね。

ちなみに、ラーマンとクロギウスというのも、研究者の名前じゃないの。ラーマンは、インドのムンバイにおいて、クロギウスはフィンランドのヘルシンキで、それぞれ数万人を虐殺したとされる少年の名前。史上最悪の悪鬼二人の名前を冠した、世にも忌まわしい病名なのよ。

世界記録を持つラーマンやクロギウスと比べると、Kによる犠牲者の数は、数十分の一にとどまったわ。だけど、私は、凶悪さという点では、何ら、変わらなかったと思うの。古代文明末期の大都市と比べると、神栖66町は、はるかに人口密度が低かったことが、図らずも幸いした……千人が死ぬことを、幸いと表現していいならね。

そして、もう一つ、身を挺して、というより、自ら犠牲となって、Kを止めた人がいた。その人の崇高な行為のおかげなのよ。

富子さんは、一息入れて、冷めたお茶をゆっくりと啜った。たった今聞いた話に圧倒されて、わたしは、正座のまま固まり、呼吸をすることさえ忘れていた。

これ以上、恐ろしく陰惨な話を聞くのは苦痛だった。とはいえ、結末を知りたいという気持ちもまた、同様に強かった。

ふと、なぜ、自分に、こんな話を聞かせるのだろうという疑問が湧く。後継者にしたいと言っていたのは、本当なのかもしれない。もしかすると、これは、そのためのテストの一つなのか。

Kは、生きとし生けるものが死に絶えて、静寂に包まれた学校から出た。そして、ごく自然な様子で、通りを歩いていったの。このときにKを目撃した人が、一人だけ奇跡的に生き残ったんだけど、本当に、何の異常も感じなかったみたい。ただ、小柄

な男の子が、普通に道を歩いている。それだけの、平凡な日常の光景にしか見えなかったの。

　でも、その直後に起こったことは、およそこの世のものとも思えなかったそうよ。

　Kが行く道を、たまたま、向こうからやって来た人たちがいたの。妙法農場に勤める、農業技術者の一団だったんだけど、Kとの距離が、四、五十メートルになったとき、いきなり、先頭にいた男性の上半身が、血煙を上げて、粉々に炸裂したの。

　温かく湿った霧で周囲が薄暗くなる中、一団の人たちは、何が起きたのかわからずに、その場に立ち竦んだ。その中で、Kだけは、歩調も変えることなく彼らに向かって歩いていき、残りの人たちを、一人ずつ、無惨な肉塊に変えていったのね。

　やがて、Kの姿は、通りを曲がって見えなくなった。最初に異変に気がついたときに、とっさに物陰に隠れた目撃者は二人いたんだけど、そのうちの一人が、助けを求めに行くため、飛び出したの。もう一人は、腰が抜けて動けなかったらしいわ。

　すると、歩き去ったはずのKが、急に現れたのよ。おそらく、誰かが隠れている気配を察知して、おびき出そうとしたんでしょうね。そして、まんまと飛び出した目撃者の首を、果物をもぐように、あっさりと、もぎ取ったのよ。

　Kが、再び通りの角を曲がっていった後も、一人残された目撃者は、精神的なショックから、身動きさえできなくなってしまったみたい。翌日になってから、ようやく発見され、救助されたんだけど、長い時間をかけて目撃した内容を語ってからは、終生、廃人に近い状態だったそうよ。

　私は、この事件については、数え切れないくらい何度も頭の中で反芻し、考えてきた。だから、はっきりと言えると思うの。Kは、やはり、文字通りの悪鬼であり、悪魔だった。

　さっきも言ったけど、Kの呪力そのものは、並みより少し下のレベルでしかなかったわ。残された成

績表を見ても、『想像力と創造性に欠けており、稚拙』という評価でしかない。だけど、その呪力を用いて、未曾有の大量殺人を完遂した手際は、まさに天才的だったと思う。

　こんな言い方をするなんて、不謹慎かしら？　でも、Kの巡らした奸計は、悪魔顔負けの巧妙さだったし、Kが、最初から町の全滅を企図していたのは、あきらかなのよ。

　Kは、まず、建物を破壊して、すべての水路を塞ぎ、さらに火災を発生させることで、避難路を一方向だけに限定したの。そして、我慢していた邪悪な欲望を全開にして、胸がむかつくような、血みどろの殺戮を始めた。

　恐怖のあまり、闇雲な逃走を始めた人たちは、すでに、Kの掌の上にあったと言ってもいいわ。

　このとき、全員が瓦礫を乗り越え、燃えている家の間を突っ切って、蜘蛛の子を散らすように四方八方へ逃げれば、かなりの数の人は助かったはず。でも、誰一人、そうはしなかった。パニックに駆られ、群集心理で、全員が同じ方向へ逃げたの。唯一開いていた、広い道を通って。

　その先にあったのは、木々の密生した森だった。みな、森の中に逃げ込んだら、安全なような錯覚をしていたんでしょう。でも、呪力を持つ悪鬼に追われた場合に限り、それは、命取りでしかないのよ。

　全員が森に逃げ込んだのを確認してから、Kは、森に火を放ったの。誰もまだそこまで行っていないと思われる場所から、遠巻きに炎の壁を作って、全員を内側に閉じこめた。それから、徐々に、その輪を小さく絞っていったのよ。Kが悪魔そのものだと思うのは、そのまま全員を焼き殺すのではなく、手前の一ヵ所を開けていたことね。

　炎と煙に追われて逃げ戻ってきた人たちは、わかっていながら、みすみす、虎口に飛び込むしかなかったの。

「どう？　まだ、聞きたい？」

わたしは、しばらくためらってから、うなずく。

「聞いているだけで、気分が悪くなってくるでしょう？　あなたを見てると、わかるわ。それなのに、なぜ？」

「……いったい、どうやって、Kを止めることができたのか。それを知りたいんです」

「いいわ」

富子さんは、微笑んだ。

Kは、森に逃げ込んだ人を、最後の一人まで殺し尽くすと、再び町中へ戻ってきたの。そして、丸一日かけて町の中をぐるぐると歩き回りながら、生存者を虱潰しに殲滅することに夢中になっていたわ。季節は、ちょうど秋から冬へと変わる頃だった。殺戮に酔っていたKは、充分に厚着をするのを忘れていたみたい。真夜中頃になり、悪性の風邪を引き込んだことに気づいたの。

Kが向かった先は、半壊状態になった町の病院だった。まさか医者がいるとは、思っていなかったはずよ。たぶん、薬を捜そうというつもりだったんでしょう。でも、そこには、まだ一人の医師が残っていたの。何とか、まだ息のある瀕死の怪我人を救おうと、必死になっていたのよ。この土田という名前の先生が、町を救ったの。そして、私は、すぐ横で、その一部始終を見ていたわ。

驚いた？　私は、当時、そこで看護婦をしていたの。そのとき、病院に残っていたのは、意識不明の怪我人と重病人を除けば、土田先生と私だけだった。そこへ入ってきたのが、Kだったの。

一目見て、悪鬼であることはわかったわ。目が、とにかく常人とは違っていた。虹彩が上がってるんだけど、いわゆる三白眼どころじゃない、眼球上転に近い状態で、ほとんど白目を剥いているようだったわ。それで見えているのかと思うくらい。しかも、まったくと言っていいほど瞬きをしないの。

髪は油のようなもので固まり、顔はまだら模様になっていた。それが人の血によるものだと気がついてからは、脚の震えが止まらなかったわ。

Kは、私の前を素通りし、黙って診療室に入っていった。弁解も、取り引きも、脅迫もしようとはせずに、Kはただ、風邪を引いたから治療をしてくれと言ったの。土田先生の顔は見えなかったけど、椅子に座りなさいと言う声は聞こえたわ。

私は、呼ばれなかったけど、診療室に入った。先生を一人にはできないと思ったから。土田先生は、私の顔を見たけど、何も言わなかった。そして、Kに口を開けさせて、喉を診たの。喉は、見事なくらい真っ赤だった。Kは、かなり辛そうだったわ。熱もあって、悪寒があるらしく震えが止まらない。

あれが本当に風邪だったのかどうかは、何とも言えないわ。Kは、夥しい数の人を殺害する過程で、霧状になった血液を大量に吸い込んでいたはずだから、ある種のアレルギー反応を起こしていたのかもしれない。だとすれば、犠牲者たちは、幾分かでも復讐を果たしたことになるわね。

土田先生は、Kの喉にヨード・グリセリンを塗ったわ。そして、私に、奥の調剤室から抗生物質を持ってくるよう命じた。私は、貴重な薬を悪鬼のために使うのは嫌だったけど、言われたとおり、ペニシリンを取りに行ったの。ふだんストックしてあった分は、怪我人の手当でほとんど使い果たしていたので、期限切れで廃棄する予定だったものを捜すのに、時間がかかったの。

だから、その間に起きたことは、私は見ていない。でも、残された証拠から、真相は、あきらかだったわ。

土田先生は、救急用の薬剤保管棚から塩化カリウムの錠剤を取り出し、致死量の数倍を蒸留水に溶いた。そして、風邪の薬だと偽って、Kに静脈注射したのよ。

突然、叫び声が聞こえてきて、私は、ようやく手

にした抗生物質の箱を取り落とした。そして、すぐに診療室へ駆け込もうとした。

次の瞬間、何かが激しく爆発する音がして、戸口から、診療室の中が、深紅に染まったのが見えたわ。Kが、土田先生の頭を吹き飛ばしたの。

それからは、延々と恐ろしい叫び声が続いた。Kは、断末魔の苦しみにあったんだけど、なかなか死ねないでいたの。まるで、人間の身体に悪魔が憑依したとしか思えないような、邪悪で、おぞましい声よ。やがて、それは、だんだんと弱々しくなり、子供の啜り泣きに変わった。そして、とうとう、聞こえなくなった……。

富子さんは、話を終えると、手に持った湯飲みを、じっと見つめた。

訊きたいことは山のようにあったはずなのに、わたしは、一言として発することができなかった。

「……町が、悪鬼の残した無惨な爪痕から立ち直るまでには、悲しみを癒す長い時間と、辛抱強い取り組みが必要だった。最初に、私たちがやったことは、生き残った人の間から、Kの血統を完全に取り除くことだったの」

「血統を取り除く……？」

わたしは、オウムのように繰り返した。

「Kには、攻撃抑制の欠如と、愧死機構が無効という、二つの重大な遺伝的欠陥があった。Kと近い血縁関係にある人々は、同じ欠陥を持った遺伝子を宿している可能性が高いの。だから、Kの血統は、五代まで遡って、あらゆる分枝で絶やされなければならなかった。誤解しないでほしいんだけど、これは、復讐じゃないの。ただ、二度と再び悪鬼の出現を許してはならないという、固い決意の現れだったのよ」

「でも、どうやって、その人たちを……？」

膝の上に置いた自分の手が、小刻みに震えているのが、目に映る。

「そうね。ここまで話したんだから、今さら、隠す必要もないでしょうね。そのときは、バケネズミを使ったの。最も人間に忠実なコロニーから、精強な兵士を選んで、四十匹ほどの部隊を編成したのよ。そして、暗殺用の装備を与えて、悪い血統を受け継ぐ人間を、一晩のうちに急襲したの。もちろん、相手に気づかれたら、バケネズミなどひとたまりもないから、作戦は慎重の上にも慎重を期して行われたわ。それでも、バケネズミの半数は失われたんだけど、どっちみち、残った個体も処分する必要があったから、まあ、完璧な成功と言っていいでしょうね」

　富子さんは、まるで町内の清掃活動について話しているように、淡々と説明した。

「だけど、それだけじゃ、充分じゃない。Kの血統を絶やしても、悪鬼が現れないという保証はないから。それで、私たちは、学校と教育制度について、全面的な見直しをしたの。指導学級を廃止して、新たに、生徒のすべてを効率的に把握できる全人学級を創設した。教育委員会の権限を大幅に拡充し、倫理委員会以外からの一切の圧力を受けないよう改組した。さらに、倫理規定の一部を改草して、基本的人権の開始期間を後にずらしたのよ」

「どういうことですか?」

　富子さんは、急須に新しいお湯を入れ、二つの湯飲みにお茶を注いだ。

「旧倫理規定では、人権が発生するのは、受胎後二十二週目からだった。これは、中絶が可能な期間に関連した規定だったんだけど、新しい倫理規定では、これを生後十七歳まで後倒しにしたの。したがって、十七歳までは、教育委員会の職権において、処分が可能になったのよ」

　自分が、法的には未成熟な胎児と同じで、まだ人間と認められていないと知ったときの衝撃は、とても、ここでは言い尽くすことができない。そんなことは、和貴園でも、全人学級でも、一度も教わらな

かった。そもそも、人権は何歳から発生するのかとか、自分にはすでに人権があるのかなどという疑問を抱くだろうか。

「そして、処分方法も、ずっと洗練されたやり方に変更されたわ。いくら、バケネズミが人間に忠実だとは言っても、あれほど高い智能を持った生き物に殺人を許すのは、将来に禍根を残すことになる。だから、普通の家猫を、呪力によって品種改良し、不浄猫を作り出したの」

不浄猫……。その言葉は、心の中の封印された部分に強い感情を引き起こした。恐怖。そして、悲しみを。

「その後は、徹底した取り組みによって、危険な因子はすべて事前に取り除いたために、悪鬼は、一度も現れていない。だけど、もう一つの恐ろしい事件が起きたの。こちらは、まだ記憶も新しい、今からほんの二十年ほど前の出来事なのよ」

富子さんは、お茶を一口飲んで、再び話し始めた。

呪力が漏出する危険性については、古代文明の末期から指摘されていたらしいわ。でも、悪い漏出（バッド・スピル）という現象は、長い間見過ごされ、過小評価されてきた。せいぜい、精密機械に頻繁な故障が起きたり、周囲の物に歪みが出るくらいで、人畜に危害が及ぶ危険性はないとされていたの。事実、これまでにあったほとんどのケースでは、そうだった。

ところが、この生徒、湫川（くてがわ）泉美という少女の場合には、それが当てはまらなかったの。彼女の呪力は、まるで放射能のように、周囲にある物すべてを汚染した。泉美は、当時、黄金（こがね）の郷の外れにあった農場の一人娘だったんだけど、そこでは、泉美が思春期になって祝霊を迎えて以降、異常な高率で、家畜に畸形が発生したわ。作物も、多くが立ち枯れて、当初は、新種のウイルスによる病気ではないかと疑われていたの。

全人学級においても、泉美の周囲十メートル以内に置かれた物は、ことごとく、異様な変形を起こした。机や椅子は、短期間のうちに使用不能になってしまったし、末期には、周囲の壁や床に、たくさんの気泡や、目玉のような模様、閻魔の髭（ウィスカ）と呼ばれる黴のような突起などが一面に生えて、悪夢のような光景だったわ。

倫理委員会と教育委員会は、専門家による特別調査班を立ち上げたわ。その結果、彼女の呪力の悪い漏出（バッド・スピル）が、人間の遺伝子にまで損傷を与えることが判明し、大騒ぎになったの。とりあえず、全人学級への登校を中止させ、自宅で教科を履修させることにしたんだけど、その頃には、悪い漏出（バッド・スピル）の及ぶ範囲が、とんでもなく拡大してしまってた。当時、六キロ離れたところに、時計塔が建っていたんだけど、突然、内部の歯車がねじ曲がって、時計の針が動かなくなってしまったくらいにね。

私たちは、会議を重ねた。その結果、淋川泉美は、橋本・アッペルバウム症候群の患者であると正式に認定され、業魔として処分を行わなくてはならないという結論に達したわ。私は、倫理委員会の責任者として、彼女に対して、直接そのことを伝えたかった。でも、すでに、近寄ることが危険な状態になっていたので、遠隔操作した茶運び人形を介して、手紙をやり取りしたの。

そのときのことを思い出すと、今でも、心が痛むわ。彼女は、本当に素直で心の優しい、いい子だった。今までの例からしても、そういう子の方が、むしろ業魔になる確率が高いのよ。

泉美は、自分のせいで多くの人の命が危険に晒されていると知ると、自ら進んで、いかなる処分にも協力することを申し出たわ。

淋川農場は、いわば爆心地だったために、あらゆる生き物が死に絶えてしまっていた。両親と農場の従業員は、泉美だけを残して一時避難するという形になっていたんだけど、実際には、全身の筋肉組織

が急速に繊維化する奇病を発症して、すでに亡くなっていたの。その事実は、彼女には伏せられていたけどね。

　私が、最後に遠くから垣間見たとき、農場の建物は、アメーバのような不定形に変わっていて、今にも流れ出し、周辺のものすべてを呑み込もうとしているように見えたわ。

　その一番遠い端にある、半ば溶けかかったような小屋のテーブルの上に、遠隔操作で、五錠の錠剤が置かれたの。悪い漏出（バッド・スピル）を抑制するための、精神安定剤という説明だったわ。うち、一錠にだけ、致死性の毒が入っていた。泉美は、毎日一錠ずつ、それを服用するよう指示されたの。

　泉美は、その日のうちに、五錠全部を呑んだ。聡明な彼女は、確実に、薬の中身に気がついていたと思う。だとすれば、悪い漏出（バッド・スピル）によって薬が変質して、効き目が失われることを怖れたのかもしれない……。

　涙が、頰を伝った。

　なぜなのか、自分でもよくわからなかった。一度も会ったこともない泉美という少女に、心の底から同情したのは事実である。だが、それだけではない。

　わたしは、まるで嵐の中の小舟のように、激しく心を揺さぶられていた。後から後から、とめどもなく涙が流れ落ちる。

「あなたの、辛い気持ちは、よくわかるわ」

　富子さんが、言う。

「いいのよ。好きなだけ、泣きなさい」

「どうして……？　どうして、こんなに悲しいんですか？」

　わたしの問いに、富子さんは、静かに首を振った。

「それは、まだ今は言えない。でも、人は、大きな悲しみに直面したとき、それを消化し受け入れるた

めの、喪の作業というものが必要なのよ。あなたには、こうやって涙を流す必要があった」

「それは、わたしたちの記憶から消された出来事と、関係があるんですか？」

「ええ。そうよ」

顔のない少年の姿が、脳裏に浮かんだ。

「わたしの記憶を、返してください」

「それは、できないわ」

富子さんは、悲しげに微笑んだ。

「あなたたちの記憶だけでなく、秋月真理亜さんの日記に至るまで、あらゆる記録から、あの子に関する情報を抹消することを決めたのは、あれが、あまりにも生々しく衝撃的な事件だったからよ。事件の記憶自体が精神的外傷（トラウマ）となって、子供たちばかりか、町の人の精神を不安定化し、さらなる悲劇の呼び水になる恐れさえあった。まるで、ドミノ倒しのようにね……」

富子さんの、何があっても動じない顔に、暗いさざ波が走ったような気がした。

「あなたなら、それにも耐えられるかもしれない。でも、あなたの記憶の封印を解けば、友達に秘密にしておくことは、できないでしょう？　結局は、みんなが知ることになる」

「……でも」

「私が、あなたにした話の意味を、よく考えてみて。鎖は常に、一番弱い環から破断するのよ。私たちは、常に、最も弱い者に対して、気を配らなくてはならないの」

「最も弱い者に……ですか？」

富子さんは、いたわるように、わたしの髪を撫でた。

「さっき、あなたに、私の跡を継いで貰いたいって言ったのは、けっして冗談じゃないの。そのときが来れば、あなたは、失った記憶を取り戻すことも許される」

「わたし、富子さんの代わりなんて、絶対、できま

せん」

人格指数がどうあったにせよ、自分の精神がそんなに強制ではないことは、自分が一番よく知っていた。

「あなたがそう言いたくなる気持ちは、よくわかるわ。私も、この仕事を引き受ける前は、そう思っていた。でも、いつか、必ず、やらざるを得ないときが来る。それが、あなたにしかできない仕事だからよ。いい？　そのときに思い出して。二度と再び、悪鬼や業魔を出さないためには、いったい何をしなければならないのか」

富子さんの言葉は、わたしの胸に重たく響いた。

3

守が、突然家出したのは、まだ寒さが厳しい二月の中旬だった。

守のお父さんが、朝、登窯（のぼりがま）に火を入れた後で起こしに行ったときには、別段、変わった様子はなかったらしい。だが、いつまでたっても朝食の席に出て来ないので、もう一度見に行くと、寝所は空で、どこにも姿が見えなかったのだという。

机の上には、『捜さないでください』という短い書き置きが残されていた由。有史以来、おそらく最も多く残されてきた家出人のメッセージであり、かつ最も無意味なたわごとだろう。

「どうしよう？」

真理亜が、白い息を吐き、泣きそうな声で言った。耳あての付いた帽子は霜か雪で真っ白になり、睫毛（まつげ）まで凍りついているのが、何とも痛々しい。

真理亜と守の家は町の東と西に分かれていたが、毎朝、登校前に落ち合っていたのは、わたしも知っていた。それが、今日にかぎって、いつまでたっても現れないため、待ちくたびれて家に行ってみたらしい。おろおろするばかりの守のお父さんから事情を聞いた真理亜は、このことは絶対に他言しないよう頼んでから、真っ先に、わたしに相談に来たのだった。

「決まってるじゃない。捜すしかないわ」

わたしは、今しもハクレンⅣ号のもやい綱を解こうとしていたところだった。真理亜が来るのがもう少し遅ければ、行き違いになっていたことだろう。

「覚も入れて、三人で、守の跡を追いましょう」

「でも、一班の四人が全員、学校を休んだら、変に思われるんじゃない？」

名目上は、良も一班ということになっていたが、今では、ほとんど二班の連中と一緒に行動している。真理亜の言うとおり、一班の集団欠席は、単なる不審を越えて、ただちに詮議の対象になるに違いない。

「わかった。いったん登校しよう。今日の三限目と四限目は、自由研究じゃない？　そのとき、こっそり学校を出ればいいわ」

この日は土曜日だったので、全人学級の授業は午前中だけしかなかった。

「だけど、ホームルームまでに戻ってくるなんて、絶対、無理よ」

「言い訳は、後から考えればいいわ。さいわい、うちには天才的な嘘つきもいることだし。とにかく、今は、一刻も早く守を見つけないと」

この冬は、最初のうちは暖冬かと思われたのだが、一月も終わりになって、大陸から強烈な寒波が襲来し、記録的な寒さになっていた。前夜には大量の積雪があったばかりで、町は、一面の銀世界と化している。守が、どっちの方角へ行ったのかはわからないが、雪原でのトレッキングに備えて、わたし

は、愛用の長板をハクレンⅣ号に積み込んだ。

全人学級に着いたのは、遅刻寸前の時間だったが、太陽王に目を付けられることもなく、教室に滑り込むことができた。真理亜が、守が風邪で欠席する旨を告げたが、特に怪しまれた様子はなかった。

一限目は、『人間社会と倫理』と題された、ひどく退屈な授業だった。わたしたちは、じりじりする気持ちを押し隠しながら、ひたすら時間が経過するのを待った。授業の終わりを告げるチャイムが鳴るやいなや、わたしと真理亜は、覚をつかまえて事情を説明した。

二限目は、わたしにとっては、ふだんから苦手で頭が痛くなる数学である。この時間、いらいらしている生徒は、少なくとも、三人に増加していたはずだ。

そして、待ちに待った三限目は、班ごとの自由研究で、必要ならば、校外へ出ることも許されている。三人で連れ立って教室を出かけたところで、第一の障害物が現れた。

「おーい。君たち、どこ行くんだよ？」

良は、わたしと視線を合わせないようにしながら、覚に向かって言う。

「自由研究じゃないか」

覚は、肩をすくめる。

「だから、それで、どこ行くんだって訊いてるんだよ？　僕だって、君たちと同じ一班なんだから」

「あなたは、いつも、二班の子たちと一緒にいるじゃない？」

真理亜が、苛立って言う。

「でも、一応、一班っていうことになってるんだよ。それに、昔は、君たちのグループにいたじゃないか。どうしてこんなふうになっちゃったのかは、よくわからないけど……」

良は、自分が陥っている不条理な状況について、思いを巡らしているようだった。

「わかった、わかった。悪かったよ、まだ、説明し

てなかったんだ？」

覚が、宥（なだ）めるように良の肩を叩いた。その様子には親密さのかけらもなく、この二人が恋人同士だったなどということは、どう考えてもありそうもない。

「前に、自由研究の課題について話し合ったんだけど、そのときは、良はいなかったよな。みんなでアイデアを出し合った結果、雪の結晶のパターンを調べることに決まったんだ」

「雪の結晶？　何だよ、それ？　いくら何でも、子供っぽすぎるだろう？　僕は、たしか、友愛園の冬休みの課題でやったぜ」

良は、一応、わたしたちの幼馴染ではあったが、わたしや覚が通った和貴園ではなく、守と同じ友愛園の出身だった。

「だから、それが、呪力の作用によって、どう変化するかを調べるんだよ。もう、分担を決めてるから。良は、校舎の裏側に積もってる雪を調べてくれ」

「調べるって、いったい、何をどうするんだよ？」

「まず、雪の結晶を虫眼鏡で拡大して、パターンをスケッチするんだ。最低でも百くらいのパターンは、必要だな。それから、そのパターンを、大まかな形で分類する。最後に、いくつかのパターンを選んで、一定の場所に積もった雪に、呪力で転写できるかどうかを実験してみるんだ」

「でも、すでに出来上がっている結晶の、形が変わるかな？」

良は、疑わしげに言う。

「そう、そこだよ！　実は、そこが、この自由研究の最大の眼目なんだ」

覚は、立て板に水で返す。

「いいかい？　固体っていうのは、大半が何らかの結晶だろう？　だから、水の結晶を、溶かすことなく呪力で変形させられるなら、ほとんどの固体の物性が、今よりずっと自由自在に変更できるかもしれ

ないんだ」

「ふーん……」

良は、感心したように唸る。覚の、まことしやかなホラ話には全然免疫がないらしく、ひとたまりもないようだ。やはり、彼が、わたしたちと行動をともにしていたとは、考えられない。

「そうか。僕の担当は、校舎の裏の方だよな？」

「ああ、頼む。僕らは、表を手分けして調べてるから。あ、そうだ。いったん調べ始めたら、絶対に、途中で中断するなよ。その場合は、一からやり直しになるからな」

「わかった」

良は、爽やかに答えて、校舎の裏へと向かった。

「悪魔」

わたしは、覚に、心からの賛辞を送る。

「何だよ、この場合、しかたがないだろう？」

わたしたちは、堂々と学校の正門から出て、船着き場に向かった。毛糸の帽子から覗く耳たぶがぴりぴりするくらい空気が冷たく、まだ、小雪がちらついている。

とりあえず、覚は、いったん家に帰って、必要な装備を取ってこなければならなかった。わたしと真理亜は、ハクレンⅣ号に乗って守の家に向かう。水温と比べて外気温が低いために、水路の上には、温泉のように湯気がもうもうと立ちこめていた。ところどころ氷が張っていて、呪力で割るのが追いつかないところは、船首でがりがりと砕きながら進む。まだ町中だというのに、さながら、北極海を進む古代の砕氷船のようだった。

「守が家出した理由って、何か心当たりあるの？」

わたしの質問に、真理亜は、考え込んだ。

「わからない……。でも、このところ、ちょっと、塞ぎ込んでたかも」

たしかに、そう言われれば、そんな気もするのだが。

「どうして？　何かあったの？」

「うーん。そんな、たいしたことじゃないんだけど。気づいてたのは、わたしだけみたいだし」
「言ってみて」
「呪力の課題が、うまくできなかったことがあって。そんな難しい技じゃなかったから、守の実力なら楽勝のはずだったんだけどね。だいたいが、悲観的な方にばっかり考えるタイプだから、一度失敗するんじゃないかって思うと、もうだめなのよ」
「それだけ？」
　そんなことくらいで、家出までするだろうか。
「ううん。それで、太陽王に指導されたことを、気にしてて。……それで、ネコダマシが来るんじゃないかなんて冗談めかして言ってたけど、顔色が、もう真っ青で、本人が全然、冗談と思ってないのが丸わかりなの」
　だとすれば、責任の一半は、わたしにもあるのではないか。もしかすると、クラスから消えた子たちのことを話したのが、まずかったのかもしれない。
真理亜や富子さんの評が正しかったとすれば、守は、わたしよりずっと弱いのだ。
　ふと、背筋が寒くなるような感覚に襲われた。
「鎖は、常に、一番弱い環から破断する……」
「何？」
　真理亜が、怪訝そうに訊き返す。ううん何でもないと答えながら、わたしは、混乱した頭の中をまとめようとした。たった今、何かぞっとするような考えが頭に浮かんだと思ったのだが、どうしても、その正体を摑むことはできなかった。
　守の家がある櫟林の郷は、町の最も西に位置していた。この季節に、冷たい川風を真正面から受けるのは、かなり辛い。到着したときには、すっかり顔の感覚がなくなっていた。
　ハクレンⅣ号を舫柱（もやいばしら）に繋ぐと、わたしは、持ってきたリュックを背負い、長板かんじきを履いた。クロスカントリーに適したテレマークスキーに、日本古来の輪かんじきや、雪靴（スノーシュー）などの長所を組み合

わせたものである。

　板の裏側は、無数の細かい逆棘が出るよう加工してあり、前進する際はスムーズだが、後退にはブレーキがかかる。このため、平地では、普通に歩行したり、スケーティングの要領で進むこともできる。呪力で推進するときには、両足を肩幅に開き、しっかりと腰を落とす。上り坂も問題ないし、平地なら、好きなだけ速度を出せる。問題は下り坂の方で、呪力で制動をかけ続けるのは精神的に疲れるため、むしろ、スキーの技術で滑降する方が楽だった。

　真理亜は、ふつうの靴を履いたままで、妖精のように浮遊している。

　わたしたちは、守の家に着くと、周囲に残っている足跡を見て回った。誰かが失踪して、その跡を追わなければならないときに限り、大雪にも役立つことはあるらしい。

「ねえ、もしかしたら、これじゃない？」

　わたしが見つけたのは、足跡ではなく、二条になった橇の跡だった。それも、幅の狭さからすると、子供用のものらしい。

「守は、長板に乗るのは、あんまり得意じゃなかった。というより、ほとんど使えなかったわ」

「友愛園時代に使っていた橇を、引っ張り出してきたのね。それに、この跡の深さを見て。かなり重い荷物を積んでるらしいわ」

　子供用の橇に積めるだけの荷物を積み込み、出奔するというのは、格好のいいやり方ではないが、いかにも守らしいとは言える。

　しばらく待っていると、覚の舟が、猛スピードで水路をやって来るのが見えた。

「お待たせ。どっち行ったか、わかった？」

　舟から降り立った覚は、すでに、雪原をトレッキングするための装備に身を固めていた。彼の長板かんじきは、わたしのより長くて幅が広く、それだけ脚力が要求されるのだが、流れのない水面では水蜘

蛛の代わりにもなる優れものである。

　わたしたち三人は、橇の跡を辿っていった。守は三時間以上先行しているが、子供用の橇に荷物を満載していたのでは、安定が悪いために、あまり速度を出すことはできない。もし、途中で、どちらに行こうか迷ったりしていたなら、二時間くらいで追いつけるかもしれないと期待していた。

　橇の跡は、守の家の裏手から、しばらく通りに沿って続いていたが、途中で、右にそれて、小さな丘を登っていた。

「どうやら、人目に付かない方へ行こうとしてたらしいね」

　覚が言った。

「呪力で橇の跡を消そうともしなかったのは、いかにも守らしいけど」

　頭上から、真理亜が答える。

「でも、なんで、舟を使わなかったのかな？」

　わたしは、当初から抱いていた疑問を口にした。慣れない橇など使うより、舟の方が、何倍もスピードが出るし、重い荷物も運搬できるからだ。

「誰かに見られるのが、嫌だったんじゃないかな？」

　やはり、それが最大の理由だったのだろうと、わたしは考えた。だが、それ以外の意味もあったのかもしれない。水路や川を行くのは、逃走も容易な分、追いかける側にとっても好都合である。守は、もしかしたら、八丁標を越えて、山奥の方へ行こうとしているのではないだろうか。

　一時やんでいた小雪が、また、ちらつき始めた。わたしたちは、追跡の速度を上げることにした。わたしと覚が、橇の跡を両側から挟んで、雪の上を滑走し、真理亜は、一度に四、五十メートルずつ、緩やかなジャンプを繰り返しながら、後ろについてくる。ずっと浮揚し続けるよりは、その方が楽なのだ。

「ちょっと待って！」

後ろから真理亜が叫んだので、わたしたちは、滑走を停めた。

「どうしたの？」

ゆっくりと戻りながら、訊く。真理亜は、橇の跡から横に四、五メートル離れた場所で、しゃがんで雪面を見ていた。

「これ、見て。どう思う？」

真理亜が指さしたのは、雪の上に残された足跡だった。縦長だが、人や熊、猿が残したものにしては細すぎる。強いて言えばウサギの足跡に似ているが、それには大きすぎるし、両足をそろえて跳ねるのではなく、人間のように交互に歩を運んでいるようだ。

「たぶん、バケネズミだ……」

わたしの肩越しに覗き込んだ覚が、息を切らしながら言う。

「バケネズミ？　こんなところで、何してるの？」

「僕に、わかるわけないだろう？　狩りでもしてるんじゃないのか？」

「狩り？」

わたしは、その足跡に、不吉な胸騒ぎのようなものを感じていた。

「もし、そうだったら、まずいことになるかも」

「どうして？」

「この足跡、よく見て。橇の残した跡と、ずっと平行に進んでるじゃない？」

どう見ても、それは、守の跡を追ってるとしか思えなかった。

雪に印された二筋の跡は、わたしたちを、しだいに人里離れた場所へと導いていった。新雪の上では、かなり苦労して進んだ形跡が窺える。やがて、急斜面の下にさしかかると、吹き溜まりよりはましとばかりに、斜行して登っていったようだった。

「あいつ、子供用の橇で、よくこんな無茶な上り方するよな」

覚が、呆れたように言った。

「守って、ああ見えて、案外、怖さを知らないやつなのかもな」

あるいは、もっと恐ろしいものに追い立てられていたため、後先考えられない状態になっていたのかもしれないが。

わたしたちも、橇の跡を追って斜面を登ったが、粉雪が吹き払われて剝き出しになったアイスバーンに、長板が横滑りして、何度も転倒しそうになった。呪力の助けがなければ、とっくに斜面を真っ逆さまに転がり落ちていたことだろう。

斜面は、大きくカーブしながら延々と続いていた。その間に、崖下の谷もどんどん深くなっていく。守の橇も、さっさと登り切ってしまえばよかったのにと思うのだが、途中、斜めに生えている木々に阻まれたようだった。さらに進むと、斜面の上の方が、ごつごつとした岩が露出しているガレ場に変わっていた。もはや、行けるところまで行くか、引き返すかの選択しかないが、重い橇に乗っている場合は、たとえ呪力を使っても、斜面で方向転換するのはかなり難しい。守は、いつのまにやら、抜き差しならない状況に陥ってしまったらしい。それで、しかたなく、無謀な前進を続けたのだろう。

「ねえ、橇の跡が見えなくなっちゃった。どこにあるかわかる？」

わたしは、斜面の途中で立ち止まって呼びかけたが、覚も、首を振る。

「わからないな。相当な重みがある橇の跡だったから、ここまで、アイスバーンの上でも残ってたけど……」

「わたし、上を見てくるね」

急斜面をバッタのように飛び跳ねていた真理亜が、気球のように上昇していった。

「この辺までは、まだ、跡がうっすら付いてるわ」

わたしは、谷底へ滑り落ちないように、呪力で身体を支えながら、ざらついた氷の上に付いた傷痕を

辿っていった。

指先が、異質な感触の物体に触れる。岩だ。ほとんど斜面から出っ張っていないので、ちょっと目にはわからないが、アイスバーンではなく、平らで硬い岩石が露出している。畳三畳分くらいの面積はあるだろうか。

うっすらと積もっている粉雪を呪力で吹き飛ばすと、岩盤のほぼ中央あたりに、金属で引っ掻いたような線が走っているのを見つけた。

「覚！　これ、見て！」

覚は、斜面で器用にターンすると、そばへ来て、ぴたりと止まった。

「ほら、もしかしたら、ここで、守の橇が……！」

そのとき、斜面の上から、真理亜も降りてきた。

「上には、何の跡もなかったわ。それに、ここを上るのは、たぶん、無理だと思う」

「真理亜！　たいへんなの！」

わたしが説明すると、すでに寒さで白くなっていた真理亜の顔から、すっかり血の気が引いたようだった。

「じゃあ、守は、ここで滑って……下へ？」

わたしたちは、崖の下を覗いた。いつの間にこんなに上ったのか、谷底までは百メートルはある。ここから落ちたとすれば、よほどうまく呪力を使って身を守らない限り、まず命はないだろう。

「とにかく、ちょっと降りてみよう。かりに、ここから滑り落ちたとしても、一番下まで行ったとは、限らないし」

覚がそう言い、わたしたちは、ゆっくりと三十度以上ある斜面を下っていった。

三、四十メートルほど下ったところで、長板かんじきに伝わる斜面の感触が一変した。

「吹き溜まりだ！」

斜面の途中に、深く抉れた部分があり、そこが柔らかい雪で埋もれているのだ。

「まだ、望みはあるぞ。ここがクッションになっ

て、橇が止まったかも」

「でも、ここから先に続いている橇の跡は、どこにもないわ」

真理亜が、我慢しきれなくなったらしく、呪力を使って、がむしゃらに雪を取りのけようとする。

「危ないわ。真理亜は、呪力で浮揚してるんだから、わたしにまかせて！」

わたしは、彼女を制すると、突風を起こして、吹き溜まりの雪を一気に吹き飛ばそうとした。舞い上がった雪煙に、覚がたじたじとなって退避する。

真理亜には偉そうなことを言ったが、わたし自身、呪力を使わずに急斜面に立つのは、無謀に近い試みだった。ほとんど数秒ごとに、呪力を、風を起こすことから自分の身体を支える方へと振り向けなければならない。

あっという真理亜の叫び声が聞こえて、わたしは、風を停めた。

「そこ！　埋まってる！」

真理亜が、悲痛な声で叫ぶ。彼女の指さす先、雪の間から突き出しているのは、鉄製の橇の脚のようだった。

「掘り出そう！　僕がやるから、君たちは手を出すな」

覚がイメージしたのは、巨大なスコップらしかった。大量の雪が掬い取られては、崖下に投げ捨てられる。橇の姿があらかた出てくると、今度は、人の手で掘るような、繊細ですばやい動きに変わる。邪魔な雪を取りのけてから、逆さまになった橇をひっくり返す。橇に積んであったとおぼしき荷物が、あたりに散乱していたが、守の姿はどこにも見えなかった。

「どこ？　守は、どこにいるの？」

真理亜は、ほとんど半狂乱になっていた。

「ここにいないんなら、下へ落ちたの？　だったら、早く助けなきゃ！」

彼女にどう答えていいかわからず、わたしは、う

つむいた。もし、守に呪力を使う暇があったなら、ここで身体を停めたはずだ。ここからさらに落ちたとすれば、途中で完全に意識を失っていたに違いない。だとすれば、もはや生存は絶望的ではないか。

「いや、ちょっと待てよ……！」

覚は、一人だけ、冷静さを失っていなかった。

「おかしいと思わないか？　どうして、この橇は、こんなに完全に埋まってたんだ？」

彼の口調に何かを感じて、わたしの中に、かすかな希望が生まれる。

「それは、雪が降ったからでしょう？」

わたしが答えると、覚は、ゆっくりと首を振った。

「降ってないよ。守が通った後で、そんなに大量の雪が降ったなら、橇の跡なんか埋まっちゃって、とても、ここまで追って来られなかったはずだ」

「じゃあ、ここの吹き溜まりに橇が落ちた衝撃で、雪の中に潜り込んだんじゃない？」

「だとしても、そのとき舞い上がった雪で、ここまですっぽりと隠れるとは思えない」

「あなたたち、何を言ってるの？　守がいないのよ？　それでも、友達？　そんなこと、どうだっていいじゃない！」

「いや、そうじゃないんだ。……ひょっとしたら、守は、無事かもしれない」

覚の言葉に、わたしたちは、息を呑んだ。

「それ、本当？」「どういうことよ？」と、異口同音に訊く。

「ここに橇が埋まってた理由を考えたんだけど、一つしか思いつかないんだよ」

覚は、考え深げに言う。

「橇が誰かに発見されないように、わざと埋めてあったんだ」

「守が埋めたの？」

真理亜の声が、ぱっと明るくなった。

「あるいは、守を追ってきたバケネズミが……だけ

ど」

橇が埋まっていた地点から、守ないしバケネズミが徒歩で移動したとしたら、どちらへ行ったのか。現実的にありそうなルートを探ってみることにした。

しばらくは斜面を平行に進んでから、やや傾斜が緩くなっているところを上って、また少し進み、密生した藪の間を擦り抜けるように上がる。すると、そこから斜面の上まで、細い道が走っているのを発見した。

「獣道（けものみち）みたいだな」

しかも、その道の上には、バケネズミの足跡と、何か重いものを引きずったような跡がくっきりと残っているではないか。

「まさか、守を……」

最悪の想像をしたらしく、真理亜が、消え入りそうな声でつぶやく。

「いや。たぶん、違う。守は、きっと気を失ってたんじゃないかな。バケネズミが、守を救助するために連れ帰ったんだと思うよ」

覚が、振り返って答えた。

「どうして、そんなことがわかるの？」

わたしが訊くと、覚は、道の真ん中を指した。

「ほら、ここ。木の根っこが出てるだろう？　引きずった跡は、わざわざ根っこを避けて通ってる。もし、バケネズミが運んでたのが死体だったら、根っこにぶつかることなんか、いちいち気にしないはずじゃないか？」

単に荷物を円滑に運ぼうとしていただけかもしれず、さほど説得力のある理由とも思えなかったが、それでも、わたしたちは、かなり勇気づけられたと思う。

獣道を通って斜面を登り切ると、雪の上に続いていた跡は、忽然と消えていた。だが、まわりの地面を注意深く観察すると、丁寧に雪を均（なら）した痕跡が見

て取れた。

　そこから二十メートルほど先へ行くと、バケネズミの足跡と、何かを引きずった跡が、復活しているのに気がついた。ゴールはもう間近だという予感に、緊張する。

　雪の跡は、疎らな林の中を縫って、百メートルほど続いていた。

「おい。あれ……！」

　覚が、前方を指さした。ちょうど藪の陰にはなっているが、二本の太い松の木の間に、雪の壁が盛り上がっているのが見える。

　そっと近づいてみると、それは、高さ二メートルほどのドーム状の物体だった。

「かまくらだわ！」

　真理亜が、押し殺した声で叫ぶ。たしかに、それは、わたしたちが子供の頃に作った、かまくらにそっくりだった。表面には圧雪の跡も見えるし、特大の雪饅頭を作ってから、中を掘り抜くという作り方も、たぶん同じだろう。両側を松の木に支えられているので、普通のものより、ずっと耐久力がありそうだ。

「どうする？」

　覚が、緊張した面持ちで言う。

「真っ正面から行きましょう」

　ここで、議論をしている暇はない。わたしは、意を決して、かまくらに近づいていった。覚と真理亜は、以心伝心で、左右に散開する。まさか、バケネズミが、呪力を持った人間に攻撃を仕掛けてくることはないだろうと思ったが、こうして、三人が固まらず、互いにバックアップする位置にいれば、よけいに攻撃を受けにくいはずだった。

「誰か、いるの？」

　わたしは、かまくらの前に立って、声をかけた。返事はない。ぐるっとまわりを回ってみると、反対側に、茶室の躙り口くらいの大きさの穴があり、枯れ枝を紐で綴り合わせた、葦簀のようなもので塞い

であった。
そっと、枯れ枝を取りのけて、中を覗き込んだ。

「覚！　真理亜！　ここにいたわ！」

わたしの叫び声で、二人とも飛んできて、一緒に穴を覗いた。

中は、かなり広い空洞になっている。その中央で、毛布に包まれて横たわっているのは、守だった。顔はほとんど隠れているが、爆発したような癖毛は、見誤りようもない。かすかに胸が上下しているので、生きているのも確かだった。眠っているらしい。

「よかった……」

真理亜は、安堵のあまり、両手で顔を覆って泣き出した。すると、守が、うっすらと目を開けた。

「やあ。みんな、来てくれたんだ」

「来てくれたじゃないって。あんまり、心配させんなよな」

きつい言葉とは裏腹に、覚も、笑みを浮かべていた。

「いったい、どうしたの？　斜面で橇が滑落した跡は見たんだけど」

わたしが訊ねると、守は、懸命に記憶をたぐろうとしているらしく、眉間に皺を寄せた。

「そうか。やっぱり、滑ったんだな。その辺のことは、覚えてないんだ。思い出せるのは、頭を打ったみたいで、朦朧としてたってことかな。脚も痛めて、歩くこともできなかったんだけど、スクォンクが、僕を見つけて、雪の中から掘り出して、ここまで連れてきてくれたんだよ」

「誰？」

真理亜が、泣き笑いしながら、訊ねる。

「スクォンク。本当の発音は、もっと難しいけど。……そうだ。君たちも、ずっと前に、スクォンクに会ってるんだよ」

「会ってるって、いつ？」

そのとき、背後で、がさがさと藪が動く音が聞こ

えた。

　はっとして振り返ると、まるで金縛りにあったように棒立ちになっているバケネズミの姿が見えた。わたしたちを見て、よほど驚いたらしい。

　覚が、呪力でバケネズミを摘み上げると、持っていた荷物を落とし、怯えきった様子で、キイキイと鳴く。ころころに着ぶくれした上に、保温性の高い紙子（かみこ）のようなものを着込んでいるらしく、カサカサという音が聞こえる。一番上に着ていた汚物色のマントが、ひらひらとはためく様子が、古い記憶を呼び覚ました。

「もしかして、この子、あのときの……」

「早季、知ってるの?」

　真理亜が、驚いたように言う。

「うん。あのとき、みんなも、いたじゃない。ほら、全人学級に入学して間もない頃に、水路に落ちたバケネズミを、助けてやったことがあったでしょう?」

　徐々に、記憶がよみがえってくる。たしか、額に、木蠹蛾（ボクトウガ）コロニーの略である『木』という文字が刺青されていたはずだ……。覚と真理亜も、すぐに思い出したようだ。

「スクォンクを下ろしてやって。僕の命の恩人なんだよ」

　守の言葉で、覚が、バケネズミをわたしたちの目の前に、ふわりと着地させた。

「キキキキキ……。神様。あイがとうございます」

　スクォンクというバケネズミは、わたしたちに向かって平身低頭した。

「ううん。こちらこそ、ありがとう。守を助けてくれて」

「とんでもございません。カカカカカ……カ・ヴィl……神様がお困りになっておられたのですから、pssssh……当然のことです」

　スクォンクの日本語は、かつて聞いたスクィーラや奇狼丸に比べると相当に聞き苦しく、ときどき息

が漏れたり、唸り声のような喉頭音が混じったりしたが、水路から救い上げたときからすれば、長足の進歩を遂げているようだった。

「助けてもらったのは、ありがたかったけど、スクォンク。君は、なぜ、守の跡をつけてたんだ？」

覚の口調は、詰問に近かった。

「はい。私は、偶然そこに通り、雪の上の筋を見ました。そして、ｇｒｒｒｒ……どのコロニーのバケネズミが付けたか考えて、ｓｓｓｈ……調べ行きました」

　スクォンクは、皺だらけの豚のような鼻面を突き出して、たどたどしく喋った。黄色い門歯の下の締まりのない口元からは、真っ白な息とともに涎（よだれ）が滴り落ちる。

「ふうん。でも、そもそも、あなたは、こんなところで何をしてたの？」

　わたしの質問に、スクォンクより早く反応したのは、真理亜だった。

「いいじゃない。そんなこと。この子は、守を助けてくれたのよ。それなのに、どうして、あなたたち二人は、文句を付けるようなことばっかり言うの？」

「別に、そういうわけじゃないけど」

　わたしは、当惑して口をつぐんだ。

　このとき、もう少しスクォンクを追及していれば、その後起きたことに、多少なりとも変化があっただろうか。バケネズミが、覚も真っ青なくらい嘘と言い訳に長けていることを考えると、どのみち、たいした違いはなかったかもしれないが。

　それでも、なぜ、スクォンクが八丁標の内側にいたのかぐらいは、訊いてもよかったと思う。当時、わたしたちが八丁標の外へ出ることは厳しく戒められていたにもかかわらず、バケネズミは出入りが自由だったことを聞けば、もっと強い危機感を持つようになっていたかもしれない。

　後に知ったバケネズミの出入りお構いなしの理由

とは、驚くべきことに、バケネズミは、文明化されたものも含めて野生動物だからというものだった。

「それより、守。説明してよ」

真理亜は、一転して厳しい口調で、守に迫った。

「うん……ごめん」

「ごめんじゃわからない。どうして、一人で、こんなことしたの？」

守は、寝床の上に身体を起こし、母親に怒られた子供のようにべそをかいた。

「だって……しょうがないじゃないか。僕は、死にたくなかったんだ！」

「どういうこと？」

真理亜は、眉をひそめる。

「僕は、みんなとは違うんだよ。呪力だって人並み以下だし、ほかに取り柄があるわけでもないし、すっかり落ちこぼれになりかけてたんだ」

「そんなことないわよ」

わたしは口を挟んだが、まったく無視された。

「太陽王も、僕を見る目が冷たいんだ。僕は、もう、処分されるリストに入ってたんだよ。Xとか、昔うちの班にいた女の子や、早季のお姉さんみたいに」

真理亜は、非難するように、わたしの顔を見た。

「わたし、何も言ってないわよ」

あわてて、疑惑を打ち消す。

「知ってるんだよ。みんなで、こそこそ話し合ってたのを。早季のお姉さんが残した鏡のこと、僕にだけ、聞かせないようにしてただろう？」

「盗み聞きしたの？」

わたしは、訊き返したが、これも全員に無視された。

「……ねえ、処分だとか、リストだとか、考えすぎよ。絶対、そんなことないって」

真理亜が、一転して、子供をあやすような口調になる。

「ネコダマシが来たんだよ」

守の一言で、水を打ったように静かになる。

「え？　どういうこと？　だって……」

真理亜が言いかけたが、守の表情を見て、続く言葉を呑み込んでしまう。

「少なくとも、二回は見たんだ。最初は、四日前の晩だよ。暗くなってから家に帰ってきたとき、何かに尾けられてるような感じがしたんだ。それで、篝火（かがりび）の燃えている通りの角を曲がって、しばらく行ってから、ぱっと振り返ったんだよ」

「いたのか？」

覚が、声をひそめて訊く。

「ネコダマシの姿は、見えなかった。でも、僕が曲がったばかりの角のところに、何かが隠れてるのがわかったんだ。……篝火に照らされた影が、道の方まではみ出してたから。形ははっきりしなかったけど、物凄く大きな影だった」

全員が、固唾を呑んで、守の言葉に聞き入っていた。

「僕は、怖さで完全にパニックになって、篝火をスパークさせた。薪は真っ白な火の玉になって、あっというまに全部燃え尽きた。でも、その前に、影はどこかに消えていたんだ。僕は、真っ暗になった道を必死に走って家に帰った」

「……でも、やっぱり、気のせいだったんじゃないかな。幽霊の正体見たり枯れ尾花っていう言葉もあるじゃない」

真理亜が、雰囲気を少しでも和らげようと、取りなすような笑顔で言う。

「そうそう。もし、不浄……ネコダマシが本当に来たんだったら、絶対、もっと早く襲いかかって来たはずよ」

わたしも、口を合わせる。

「いや。それはどうかな」

覚が、わたしたちの努力を、見事なまでに台無しにした。

「ネコダマシの話って、いくつもあるけど、気持ち

悪いくらい共通してる部分があるんだ。獲物を襲う前に、一回、予行演習みたく、後を尾ける習性があるみたいなんだよ」

　守は、深くうなずいた。

「うん。僕も、あのときはたぶん、襲う気はなかったんだと思う。……だけど、昨日は、そうじゃなかった」

「昨日？　まさか……」

　真理亜には、何か思い当たることがあったようだ。

「昨日の放課後だよ。僕は、補習で、一人だけ居残りだった。終わってから帰ろうとしたときに、太陽王に、用を頼まれたんだ。備品保管庫に、余ったプリントを持って行って、しまってくれって……」

「備品保管庫って、あの、中庭に行く途中にある？」

　わたしが感じた寒気は、たぶん、気温のせいではなかったと思う。

「うん。それで、僕は、言われたとおり、プリントを持ってったんだ。たいした枚数じゃないし、わざわざ、僕に頼む理由がわからなかった。戸棚を開けて、中にしまってから、帰ろうとしたとき、後ろに気配を感じたんだ」

　守の目に、じわりと涙が滲んだ。

「後ろの廊下は、窓がないから真っ暗だった。僕は、早足で歩いた。絶対、振り返っちゃいけないっていう気がしてた。なぜかはわからないけど、一度振り返ったら、それで終わりだって。そして、後ろに耳を澄ませてたら、聞こえたんだよ。凄く柔らかい歩き方で、足音は全然しないんだけど、人間よりずっと体重があるせいで、廊下の床板がぎしぎしと軋む音が」

　守は、しゃくり上げるような呼吸になった。

「僕が止まると、後ろの音も止まった。怖さで動けないでいると、動物の息づかいみたいなのも聞こえてきた。それから、獣臭い臭いも。もう、だめだと

思った。僕は、このまま、ここでネコダマシに喰い殺されるんだって。そうしたら、ほとんど無意識に呪力が迸（ほとばし）ったんだと思う。まわりの空気が、竜巻みたいに唸りを上げ始めたんだ。そして、後ろから、恐ろしい唸り声が聞こえた。僕は振り返って……見たんだ」

「どんなやつだった？」

覚が、身を乗り出して訊ねた。

「闇の中に溶け込む前の一瞬、白っぽい後ろ姿が見えただけだけど。信じられないくらい大きな、猫みたいな生き物だった。廊下には、血の痕が点々と残ってた。たぶん、竜巻がカマイタチみたいになって、怪我を負ったんだと思う」

わたしたちは、沈黙した。

「昨日、わたしは、守の補習が終わるまで待ってるつもりだったのよ。でも、長くかかるから帰りなさいって、太陽王に言われたわ」

真理亜の目は、怒りに燃えていた。

「最初から、守を一人にして、殺すつもりだったのね……！」

「でも、ちょっと待てよ。どうして、守を処分しなきゃならないんだ？　守は、呪力も、優れてはいないけど人並みだし、性格だって、全然問題ないだろう？　いつも穏やかで、こんなに協調性も高いのに……」

「そんなこと、知らないわよ！　守は、現にネコダマシを見てるのよ？　それも、二回も。これ以上、何を疑うことがあるの？」

覚と真理亜の論争を聞きながら、わたしは、肌に粟を生ずる気分を味わっていた。

富子さんから聞いた話を基にすれば、守が処分対象になっても、何の不思議もなかったからだ。守は、背後から不浄猫が迫ってきたとき、恐怖のあまりとはいえ、相手が見えない状況下で危険な呪力を揮（ふる）っている。これは、下手をすれば、対人攻撃にもなりかねない暴挙だった。しかも、それを無意識に

やったと告白していることは、さらに問題かもしれない。意識レベルでは、呪力の制御が完全にはできていないということになり、近い将来、業魔となる危険性さえ……。

　わたしは、自分が、いつのまにか教育委員会側の視点に立って考えていたことに気づき、愕然とした。

「ネコダマシを見たとき、思い出したことがあるんだ」

　守が、静かに言う。

「僕は、あいつを、前にも見たことがあるんだよ」

「どういうことだよ？」

覚は、呆気にとられたようだった。

「どうしても、はっきりとは思い出せないんだ。たぶん、消された記憶の一部だったんだと思う。……でも、僕は、たしかに、中庭に入って、物置みたいな小屋の陰に隠れてた。すると、扉が開けられて、中からあいつが、ネコダマシが出てきたんだ」

　真理亜が、あっと叫んだ。

「それ、わたしも覚えてる！　わたしも……そこにいた」

　そして、沈黙が訪れた。重苦しい空気が漂う。守を見つけて、連れ帰りさえすればいいという甘いもくろみは、粉々に打ち砕かれてしまった。わたしたちは、これから、どうすればいいのだろう。四人とも、すっかり途方に暮れていた。

　守の脚は骨折している疑いもあり、いずれにしても、すぐに連れて帰るのは無理だった。それで、とりあえず覚だけが、とんぼ返りすることになった。言うまでもなく、太陽王に、わたしと真理亜が風邪を引いたため早退したと話す、言い訳要員としてである。

　残されたわたしたちは、守のいる隣に、もう一つのかまくらを作った。わたしは、万一に備えて寝袋をリュックに入れてきていたが、真理亜の方は、何

の用意もなかったので、二人で守の橇を掘り出しに行く。

　さいわいなことに、守は、当座、充分すぎるほどの食料と、日用品を積み込んでいた。わたしたちは、それらを橇に積み直して戻り、焚き火をした。雪を溶かしてお湯を沸かし、三人で夕食を取る。スクォンクにも、少し、乾し肉を分けてやった。

「明日は、晴れそうね」

わたしは、食後のお茶を飲みながら、言った。

「そうね」

真理亜は、なぜか素っ気ない。

「天候さえよければ、守を橇に乗せて、移動できるかも」

「どこへ移動するの？」

「それは……」

わたしは、言葉に詰まった。

「僕は、帰らないよ」

守が、首を上げて宣言した。

「でも」

「帰ったら、僕は、殺される」

「そうよ！　もう少しで、守は、本当に殺されるところだったんだから」

真理亜も、同調する。

「でも、現実的に考えてみて？　やっぱり、帰るしかないでしょう？」

わたしは、二人を説得しようとした。

「わたし、倫理委員会の議長の、朝比奈富子さんと話したの。話せば……きっと、わかってくれるわ」

　そう言いつつも、実は、まったく確信がなかった。富子さんも、また、守は町にとって危険だという判断を下すかもしれないし、そうでなかったとしても、教育委員会の職権を侵してまで守を庇（かば）ってくれるかどうかは、はなはだ疑問だった。

「だめよ。もう、町の人なんか、誰も信用できない」

真理亜は、にべもなかった。

「早季が言うように、倫理委員会は、生徒の処分に対して、直接は関わっていなかったのかもしれない。でも、黙認はしてたのよ。そうでなければ、みんな、いなくなることはなかったわ。早季のお姉さんも、うちの班にいた女の子も、それに、Xも」

　顔のない少年の姿が、脳裏に浮かんだ。彼なら、今の状況に対して、どうアドバイスしてくれるだろうか。

「でも、だったら、どうするの？　町に帰らないで」

　わたしの反問に答えたのは、守だった。

「自活するんだ」

「ええ？　だって、キャンプに行くのとは、わけが違うのよ？　その後何十年も、一人で生きていかなければならないんだし……」

「そのことは、嫌というほど考えたんだ。でも、呪力があれば、何とかなるよ」

「そんな、何とかなって……」

「わたしも、何とかなると思う」

　またもや、真理亜が守を後押しする。

「呪力を磨けば、たいていのことは、一人でできるわ。それに、守は、一人にはならない。わたしが、一緒にいるから」

「ちょっと、勘弁してよ。真理亜まで、何言ってるの？」

　頭が、くらくらしてきた。

「だって、守を一人にはできないわ。わたしたちは、当番委員だし」

　だが、意外にも、これには当の守が異を唱えた。

「だめだよ。真理亜は、町に帰らないと。お父さんやお母さんも、心配してるよ」

「どうして？　わたしが一緒じゃ、嫌なの？」

「嫌なわけないだろう？　すごく嬉しいし、心強いよ。でも、町を離れて自活するのは、やっぱり、いろいろ辛いことが多いと思うんだよ。僕は、町では生きることを許されないから、しかたがないけど、

真理亜は、そうじゃないんだし……」

「そんな心配は、しなくていいの」

　真理亜は、優しい笑みを浮かべた。

「だから、わたしに一言も相談しないで、一人で家出したのね。本当に、守みたいに優しい男の子は、どこにもいないと思うわ。でも、これからは、ずっと二人よ。いいわね？　約束よ」

　守は、無言だったが、目の縁には、大粒の涙が盛り上がっていた。

　わたしは、深い溜め息をついた。もはや、どんな説得も、功を奏しそうにはなかったからだった。

　その晩、わたしは、かまくらの中で、真理亜と愛を交わした。

「もう、会えないの？」

　わたしは、彼女の胸に顔を埋めて、甘えるように訊いた。

「そんなこと、ないわ。きっと、また会えるから」

　真理亜は、わたしの髪を撫でながら答える。

「わたしは、早季のこと、心から愛してる。でも、今は、守の方が心配なの。わたししか、彼を守ってあげられる人間はいないから」

「それは、わかるけど。でも……」

「何？」

「羨ましい」

「馬鹿ねえ」

　真理亜は、噴き出した。

「わたしたちは、これから、二人っきりで、厳しい自然と闘って、生き抜かなくちゃならないのよ。どう考えても、羨ましいのは、早季の方だって」

「そうね。ごめんなさい」

　わたしは、素直に謝った。

「いいわ。許してあげる」

　真理亜は、わたしの頤（おとがい）を指で持ち上げると、すばやく唇を奪う。

　それから、わたしたちは、別れを惜しんで、長く

熱い、貪るようなキスをした。

そして、それが、わたしが真理亜と交わした最後の口づけになった。

4

翌朝、小雪のちらつく中、わたしは一人で町に戻った。

推進力はほとんど呪力に頼ったのだが、長板かんじきを履いて長い距離を走破したため、足腰の疲労はピークに達している。真理亜と守の行く末を思うだけでなく、将来に対する漠然とした不安がつのって、心は重くふたがれていた。

ようやく櫟林の郷に入って、船着き場までやって来たが、周囲には、まったく人の姿がなかった。日曜日とはいえ、いつもなら誰かしらの姿は目にするはずだが、このときは、そこまで気を回すゆとりがなく、むしろ、人目に付かない方が好都合というくらいにしか考えていなかった。

もやい綱を解いて、ハクレンⅣ号に乗り込み、家へと向かう。ここまで、ずっと呪力を使いっぱなし

だったので、集中力が散漫になり目がしょぼしょぼしていた。途中、何度も舟が蛇行したり、岸にぶつかりそうになった。

　櫟林の郷から、水車の郷へ戻る間、一艘の舟にも行き合わなかった。

　さすがに、おかしいと感じ始めていた。

　真っ白な雪景色である両岸にも、人影はおろか動くものすら見当たらないのだ。まるで、神栖66町全体が、遺棄された廃村になってしまったようだった。

　綿埃のように舞い降りる雪は、しだいに大きくなり、湿ったぼたん雪に変わっていた。払っても、払っても、ハクレンⅣ号の縁にも降り積もっていく。

　懐かしい我が家の姿が見えてきたとき、わたしは、はっとした。船着き場に佇んでいる、両親の姿が見えたのだ。二人は、傘もささず、じっと肩を寄せ合い、降りかかる雪が髪や肩にくっつくにまかせている。

「ごめんなさい」

　ハクレンⅣ号を横付けにして、わたしは、二人に声をかけた。

「遅くなっちゃって……昨日は、どうしても、帰れなかったの」

　二人は、無言のまま微笑んだ。ややあってから、母が言う。

「おなかは、すいてない？」

　わたしは、首を振った。

「疲れてると思うけど、教育委員会から、呼び出しがかかってる。今から、わたしたちと一緒に来なさい」

　父が、沈んだ声音で言う。

「その前に、ちょっとだけ、早季を休ませてやれない？」

　母が、懇願するような目を、父に向けた。

「いや……そうもいかない。緊急と言われているし、変に時間をあけるのはまずいよ」

「わたしだったら、だいじょうぶよ。そんなに疲れてないから」

わたしは、努めて元気な声を出した。

「そうか。じゃあ、お父さんの舟に乗ろう。早季は、着くまで休んでればいい」

わたしたちは、父が公務以外に使っていた、ハクレンⅣ号より二回りくらい大きな舟に乗り込んだ。母は、わたしの肩を抱き、毛布を掛けてくれる。わたしは、目を閉じたが、胸がどきどきして、とても眠ることはできなかった。

茅輪の郷の船着き場には、迎えの人が立っていた。二年前、夏季キャンプから帰還したときに会った中年の女性だったが、わたしとは目を合わせようとしなかった。

わたしは、両親に連れられて舟を下り、大通りの雪道を踏みしめて歩いた。

教育委員会が入っているのは、母の職場である図書館から、一軒おいて隣の建物だった。周囲には竹矢来と高い塀が巡らされ、外からは、中の様子を窺い知ることができないようになっていた。

正門の横にある通用口の門扉をくぐると、まだ雪は降っているのに、中は呪力ですっかり雪が取り除かれ、乾いていた。飛び石を踏んで、玄関に辿り着くまで、たっぷり三十メートルはある。

建物に入ると、細い廊下が延々と続いていた。外から見るとあまり似ていなかったが、内部の造りは、前に見た倫理委員会を思わせた。

「ここから先は、お嬢さんにだけ、いらしていただきたいとのことです」

中年女性は、途中で、わたしの両親に告げる。

「親として、町長として、一言、弁明をさせていただきたい。ここに、嘆願書も持参しております」

「ご両親の同席は、適当ではありませんので」

父は、肉親の情を前面に出して食い下がったが、相手は、歯牙にもかけない様子だった。

「私は、この町の図書の管理を任された者として、

責任を痛感しております。今回の件について、陳述したいことがありますので、特別のご配慮をいただけないでしょうか？」

「たいへん残念ですが、特例は認められません」

母は、図書館司書としての権威を活用しようとしたが、これも、頑として受け付けない。二人も、とうとう諦めたようだった。

「早季。わかるわね？　何でも、訊ねられたことを、ありのままに答えるのよ」

母が、わたしの両肩に手を置いて、真剣な目で言う。

「うん。だいじょうぶよ。……わかってるから」

わたしは、答えた。母の真意は、以心伝心で理解できた。言葉とは裏腹に、事実はよく取捨選択して答えよということだ。これから、ここで喋る不用意な一言が、命取りになるかもしれないのだから。

わたしが通されたのは、広々とした、黒光りのする板張りの洋室だった。明かり取りの窓は小さく、非常に高い位置にあるので、教科書に載っていたレンブラントの絵のように、部屋全体が暗く沈んで見える。中央には、大人数で正餐（せいさん）を取るような、大きなテーブルが横向きに置かれており、反対側には十人あまりの人々が陣取っている。真ん中にいるのは、教育委員会の議長、鳥飼宏美さんだった。左右に居流れているのも、きっと教育委員会のメンバーなのだろうと思った。

「渡辺早季さんね？　そこに、おかけなさい」

宏美さんではなく、左にいる太った大柄な女性が、口火を切った。わたしは、命じられるまま、ぽつんと一つ置かれた椅子に腰掛けた。

「私は、当教育委員会の副議長、小松崎晶代です。あなたに、いくつか確認したいことがあります。訊かれたことには、どんなことでも素直に答えてください。絶対に、隠し事をしたり、嘘をついたりしてはいけません。わかりましたか？」

口調は、学校の先生のように優しかったが、糸の

ように細い目は、瞬きもせず、じっとわたしを見つめている。有無を言わせない威厳と圧力を感じ、わたしは、短く「はい」と答えた。

「昨日の朝早く、あなたと同じ一班にいる伊東守君が、家出したという報告がありました。そのことは、間違いありませんか？」

「間違いありません」

わたしは、か細い声で応じる。

「あなたが、そのことを知ったのは、いつですか？」

隠し立てをしても無駄と悟って、わたしは、正直に答えることにした。

「登校する、ちょっと前です」

「どうやって、知ったのですか？」

「真理亜……秋月真理亜さんが、わたしに知らせてくれました」

「それで、あなたは、どうしましたか？」

「とりあえず、学校へ行き、それから、捜しに行くことにしました」

「なぜ、最初に、ご両親や先生に報告しなかったのですか？」

ここは、考えどころだった。わたしは、とっさに知恵を巡らせる。

「できれば、大事（おおごと）になってしまう前に、連れ戻したいと思ったんです」

「なるほど。しかし、それは、悪く言えば、隠蔽工作と同じですね。教育委員会の決定に対して、異を唱えていることにもなるんですよ？　その点について、あなたは……」

横にいる宏美さんが、何事か、晶代さんに耳打ちする。晶代さんは、小さく、「わかりました」と答えた。

「……質問を続けます。あなたは、自由研究の時間に、伊東守君を捜しに行きましたね。誰かと一緒でしたか？」

「秋月真理亜さん、それに、朝比奈覚君です」

「なるほど。三人で、伊東守君を捜しに行ったんですね。それで、伊東守君は、見つかったんですか？」

　わたしは、迷った。昨日、一足先に帰った覚は、すでに事情聴取を受けているはずだ。覚は、いったい、何と答えたのだろう。

「早季さん、どうしたんですか？　あなたには初めてのことかもしれませんが、これは、正式の査問会です。あなたは、真実を述べなければならないんですよ」

　晶代さんの声が厳しくなり、部屋の中に不穏な空気が漂う。すると、今まで黙っていた宏美さんが、口を開いた。

「朝比奈覚君は、あなたたちが、伊東守君を発見したと証言しています。乗っていた橇が転覆して、脚を痛めて動けなくなっていたと。それで、あなたと秋月真理亜さんが介抱のために残り、彼一人が、先に帰ったということでした」

覚は、バケネズミのことは伏せたらしい。

「議長……」

　晶代さんが、宏美さんに向かって、咎めるような視線を向ける。

「いいのよ。ここは、真実を知るために設けられた場であって、この子を罠にかけるのが目的じゃないんだから」

　宏美さんは、聞き取りにくいほど小さな声で言う。

「どうですか？　朝比奈覚君の言ったことは、すべて、事実ですか？」

「……はい」

　わたしは、宏美さんは、やはり、そんなに冷酷な人じゃなかったと思い、少しほっとしていた。

「それでは、その後、何があったのですか？　なぜ、あなただけが戻ったのでしょう？　私たちは、あなたと秋月真理亜さんが、伊東守君を連れて無事に帰還することを期待していたのですが」

再び、晶代さんが質問を引き取る。

わたしは、居並ぶ教育委員会の面々を見渡した。いったい、どう言い繕えばいいのか。一時しのぎの嘘は、事態を悪化させるだけだろう。事実に矛盾しない程度に、真実を話すしかない。

「わたしは、守に、一緒に帰るよう促しました。でも、どうしても、嫌だと言いました。それで、しかたがなくて、わたし一人で戻ったんです。守を一人にはできなかったので、真理亜だけが残りました」

「じゃあ、秋月真理亜さんは、引き続き、伊東守君の説得を続けているんですね？」

「ええ」

わたしは、答えるとき、目を逸らしてしまった。

「それで、あなた一人が帰ってきて、どうするつもりだったんですか？　ご両親や、先生、それに当教育委員会に対して、きちんと報告しようと思っていたんですか？」

「それは……わかりません」

「わからない？　あなたは、いったい……？」

晶代さんが気色ばんで身を乗り出したとき、宏美さんが、先にしゃべり出した。

「あなたが混乱したのは、無理もないことだと思います。こんな事態に出会えば、誰でも、どうしたらいいのかわからなくなるでしょう。……でも、もう、迷うことはないんですよ。あなたは、ただ、訊かれたことに対して正直に答えればいいんです。後のことは、私たちにお任せなさい。いいですね？」

「わかりました」

「では、伊東守君は、なぜ、帰るのが嫌だと言ったのですか？　あなたは当然、その理由を聞いていますね？」

「はい」

わたしは、つい、うなずいてしまった。

「伊東守君が帰りたくないという理由は、何ですか？」

わたしは、息を吸い込んだ。思ったより自分が落

ち着いていることが、意外でもあった。この質問に対しても、真っ赤な嘘の答えはよくないだろう。守の話を、極力ぼやかして、もちろん、不浄猫をはっきり見たとは言わないで、物語をでっち上げられれば……。

「どうしたんですか？　さっさと答えなさい！」

　わたしが怯えて逡巡していると取ったのか、晶代さんが、一喝する。

「今、神栖66町が、どういう状況にあるか、わかってますか？　外出禁止令が敷かれ、住民はみな、不安におののいています。それもこれも、たった一人の生徒の、自分勝手な行動が原因なんですよ！」

　たかだか一人の生徒が失踪したぐらいで、なぜそこまで大げさな反応をするのだろう。このときのわたしには、まったく理解できなかった。それよりも、ほかのすべての感情を圧倒してわたしの中で沸き上がったのは、強烈な怒りだった。

　守が自分勝手などとは、よくも言えたものである。守を精神的に追い詰めたばかりか、挙げ句の果てに殺そうとまでしたのは、教育委員会ではないか。

　わたしの様子が不審を買ったらしく、テーブルの向こう側で、ざわめきが起きた。

「どうしたんですか？　なぜ、押し黙ってるんです？　何とか言いなさい」

　晶代さんが、指先でテーブルを叩いて、詰問する。

「守が、逃げ出したのは、死にたくなかったからだと思います」

　とうとう、言ってしまった。もう、後戻りはできない。

「な、何を……おかしなことを言うのは、やめなさい」

「わたしは、ただ、質問に答えているだけです」

　自分は、こんなに強い人間だっただろうか。自分の激烈な反応に、自分で驚いていた。

「これは、わたしが、守から直接聞いた話です。それによると、守は最近、二度にわたって、ネコダマシ……不浄猫の接近を受けました。一度目は、ただ、後を尾けられただけだったようですが」

「やめなさい！　あなたは、今、とんでもないことを言ってるんですよ？」

「二度目は、一昨日の放課後でした。守は、担任の太陽……遠藤先生から、居残りを命じられ、しかも、中庭に近い場所へ、意図的に、一人で行くよう仕向けられました」

　わたしは、かまわず続ける。

「そこで、守は、もう少しで不浄猫に殺されるところでした。不浄猫の姿は、はっきりと目撃し、白っぽい毛色だったとまで言っています。ですから、守は……」

「もういい！　黙りなさい！　あなたは、この査問会と、教育委員会を侮辱しました！　あなたの言動は、倫理規定に照らして、重大な罪を構成します！」

　晶代さんは、部屋全体に響き渡るような声で、ヒステリックに叫んだ。

「私も、たいへん残念です。あなたのご両親は、とても立派な方々ですから、このような結果になったことを、さぞや悔いておられることでしょう」

　宏美さんが、溜め息混じりに言う。ぼそぼそとした聞き取りにくい声だったが、わたしは、初めて彼女に対して恐怖を感じていた。

「お二人は、別室で？　……そう。わかりました」

　宏美さんは、教育委員会のメンバーの間で、すばやく密談を交わすと、再び、わたしの方へ向き直った。

「それでは、部屋を退出してください。ただし、ご両親と一緒に帰ることはできません。あなたには、この建物に留まってもらいます……このような結果となり、本当に、残念なことと言うしかありませんが」

それは、実質的な死刑宣告に等しかった。

「わたしは、処分されるんですか？」

宏美さんを見据えて、反抗的に言う。

「なんて、おぞましい子なの。そんな言葉を、平気で口にするなんて」

宏美さんは、吐き捨てるようにつぶやくと、わたしから目をそむけ、立ち上がった。

そのとき、ドアに、軽いノックの音がした。

「誰ですか？　今、査問会の途中です。後になさい！」

晶代さんが、叱りつけるように言ったが、ノックの主は、まったく頓着することなく、ドアを開けた。

わたしを除く全員が、硬直した。わたしも、振り返り、はっとした。

「お邪魔だったかしら？　でも、どうしても、今、お話しする必要があったものだから」

着物の上に毛皮の肩掛けを羽織った朝比奈富子さんが、あわてて起立した教育委員会の面々に向かって、嫣然と微笑みかける。

「皆さんも、いろいろご苦労があったみたいだけど、早季ちゃんのことは、私に任せてもらえないかしら？」

「お言葉ですが、児童に対する査問は、教育委員会の専管事項です。たとえ富子様といえども、このような形で容喙なさるのは、いかがなものかと……」

宏美さんが、ひどく低い、消え入るような声で言った。

「そうね。ごめんなさい。私も、本意じゃないのよ。でも、早季ちゃんのことについては、私にも責任があるの」

「お待ちください、富子様。この件については、別室でお話しした方がよろしいかと存じますが」

晶代さんが、わたしにちらりと視線を向けながら言ったが、富子さんは、完全に無視して、宏美さんだけに視線を向けていた。

「……富子様に責任がおありというのは、どういうことでしょうか？」

宏美さんが、しかたなく訊ねる。

「私がね、早季ちゃんに、いろいろなことを教えたのよ。不浄猫のことも、その一つ」

「それは……いささか、異例なことと思いますが」

宏美さんの顔は、影になっていたが、顔色が変わったのがわかった。

「そうね。たしかに、異例かもしれない。でも、将来の町の指導者を養成するためには、必要なことだったわ」

「指導者？　この子がですか？」

晶代さんが、驚いたように言う。

「だからね、宏美ちゃん。早季ちゃんのことは、大目に見てあげて」

「そのような簡単な問題ではございません、富子様。今現在、男の子だけでなく、女の子まで行方不明になっているんです！」

宏美さんの声は、葛藤からか、震えていた。

「よくわかってるわ。たしかに、由々しき事態ね。でも、こうなったのには、あなたたち、教育委員会の責任も大きいんじゃないかしら？」

「私どもの責任……でしょうか？」

居並ぶ教育委員会のメンバーたちの間に、動揺が走った。

「そうよ。そもそも、伊東守君の処分を決めたのは、あまりに性急、拙速にすぎたんじゃないかと思うんだけど。それに、その処分さえ満足に果たせなかったからこそ、こうした事態を招いたのでしょう？」

「それは……」

宏美さんは、絶句した。あきらかに表情が歪んでいる。

「責任問題を云々していくと、ここにいる誰一人、免れることはできないのよ。私自身、もっと根本的な点で責めを負わなくてはならないかもしれない。

一班の子供たちに対する実験を指示したのは、私だったから。でも、今は、そんな後ろ向きな議論をしているときじゃないでしょう？　これからどうするかを、一番に考えなくちゃね。違うかしら？」

　町長はおろか、図書館司書をもしのぐ絶大な権力を掌握しているはずの教育委員たちは、先生に叱られた生徒のように、頭を垂れていた。

「仰るとおりです」

　宏美さんが、蚊の鳴くような声で言う。

「わかってもらえて、嬉しいわ。じゃあ、早季ちゃんは、私に預からせて。だいじょうぶ。心得違いをしている点は、よくよく言って聞かせるから」

　もはや、反対の声が上がる空気ではなかった。

「奥座敷の囲炉裏端を貸してもらえるかしら。ちょっと、そこでお話をしたいから」

「あ、あの、そちらは、今……」

　晶代さんが、あわてたように言う。

「あらあら。早季ちゃんを、あそこへ連れて行くつもりだったの？」

　富子さんは、にっこりと笑った。

「いいのよ。すべて、そのままにしておいて」

　そこは、およそ三十畳はある広大な板の間だった。中ほどに、大きな囲炉裏が切られており、赤々と火が燃えていた。天井から吊されている自在鉤からは、湯を満たした鉄鍋が下がっており、湯気を立てている。

「そんなに硬くならないでもいいのよ」

　富子さんは、柄杓でお湯を掬い、黄色っぽい萩焼の茶碗を温めた。茶筅を三度回してから、お湯を建水に捨てる。茶碗の内側を茶巾で拭い、利休棗の蓋を取って、茶杓で抹茶を二杯入れた。再び柄杓でお湯を注ぎ、茶筅で手早く攪拌する。

　わたしは、畏まって、富子さんが点ててくれた薄茶を飲んだ。

「作法なんか気にしないで。どうぞ、楽にしてちょ

うだい」

わたしは、うなずいたが、緊張は、いや増すばかりだった。

いくら見ないようにしようと思っても、囲炉裏の向こう側にのんびり寝そべっている、三匹の不浄猫の姿が目に入ってくる。それぞれ、三毛と茶虎、グレイと黒のキジ猫だった。三匹とも、気持ちよさそうに目を閉じ、ときおり、耳をぴくりと動かしたり、尻尾を持ち上げたりする。

一見すると平和そのものの光景だったが、三匹の猫が不釣り合いに大きいため、立派な囲炉裏が、まるでミニチュアのように映った。

「まあ。どうしても、猫たちのことが気になるみたいね。でも、平気よ。命令しない限り、絶対に、人は襲わないから」

「……でも、どうして、三匹もいるんですか？」

わたしは、最前から感じていた疑問を口にした。

「この子たちは、三匹一組で行動するよう訓練されてるの。二匹までの損失は覚悟の上の、三位一体だとか天地人とか呼ばれている攻撃方法でね」

「三匹が、同時に襲うっていうことですか？」

「ええ。ときには、催眠術がほとんど効かない相手がいるのよ。そんな人間でも、三匹が三方向から同時に襲ってくると、よほどの達人でもない限り、防御は難しいわ」

富子さんは、にこにこしながら言う。

「でも、教育委員会は、わたしを処分する予定だったんですよね？　それなら、一匹でも充分だったのに」

平然とそんなことを口にしているのが、我ながら不思議だった。

「あなたは、一度、あるいは二度かもしれないけど、不浄猫の攻撃を撃退しているのよ。そのときのことは、全然覚えてないでしょうけど」

「そんな……とても考えられません」

わたしは、毛氈の上で、身じろぎした。記憶の空

白部を意識させられたときは、いつも居心地の悪い思いに駆られる。

「一つ、お訊きしてもいいですか？」

わたしは、しばらく続いた沈黙を破った。

「どうぞ」

「富子さん……あの、富子様は」

「うふふ。富子さんでいいわ」

「富子さんは、さっき、一班の子供たちに対する実験を指示したって、おっしゃってましたよね？　あれは、どういう意味だったんですか？」

「まあ、よく覚えてるのね」

富子さんは、楽焼きの茶碗を、掌の中でゆっくりと回した。赤土に白い釉薬（うわぐすり）がかかっており、美しい肌色のように映る。

「あなたたちも、自覚はあったんじゃない？　一班は、なぜか変わり者揃いだって」

「それは……まあ」

「あなたたちは、本当に特別だったのよ。ふつうの生徒は、幼い頃から何度も反復される催眠暗示によって、思考内容までがんじがらめにされているの。悪いことや、不都合なことは、考えることさえできないように。でも、あなたたちに限っては、思考の自由を奪うような措置は、ほとんど施されなかったわ」

「なぜですか？　どうして、わたしたちだけが、そんな特別扱いに？」

「それはね、従順な子羊だけでは、町は守れないからよ。指導者には、清濁併せ呑む度量、ときには汚れ仕事も厭わない強い信念が必要だし、町自体が時代に合わせて変化していくためには、ある種の変わり者、トリックスターのような存在が求められることもある」

「わたしを一班に編入したのも、そのためだったんですか？」

「そうよ」

富子さんは、あっさりと認めた。

「じゃあ、覚は？　お孫さんだったから、特別扱いの班に？」

「孫ね……」

　富子さんは、不可解な笑みを浮かべた。

「覚に関して言えば、朝比奈という名字が、たまたま、五十音で先頭の方に来ただけよ。でも、一班には、最初から偶然、特別な素質を持った子供たちが集まっていたの。だから、そこにあなたを入れることで、ずっと管理がしやすくなるはずだったわ」

　富子さんは、すっと立ち上がると、囲炉裏の反対側に行った。茶虎の不浄猫のすぐ脇にしゃがみ込んで、耳の後ろを掻いてやる。猫は、いかにも気持ちよさそうに、ごろごろと喉を鳴らした。

「でも、結果としては、こんなに次々と、不測の事態が起きてしまった。残念だったのは、町で最も将来を嘱望されていた子を……」

　富子さんは、わたしの顔を見て、ふっと言葉を切った。

「今回のことでも、ふつうの子供だったら、町から離れて生活するなんてことは、考えることすらできないでしょうね。八丁標を越えると考えただけで、恐怖心から足が竦むはずだもの。でも、あの子たちは、違ったみたいね。町に戻って命を奪われるくらいならと、あえて自活の道を選んだんでしょう？」

　わたしは、絶句した。どうやら、すべて見抜かれているようだ。

「とても、理性的な判断だったと思うわ。それこそ、自由な思考の賜物だし、私だって、そうしたかもしれない。でも、そのことが今や、町の安全を根底から脅かしてるのよ」

「二人がいなくなったことが、町にとって、そんなに大きな問題なんでしょうか？」

　わたしも、疑問をぶつけてみた。

「真理亜も、守も、二度と町には戻らないと思います。ですから、何か悪影響を及ぼすということも、ありませんし……」

「あなたには、問題の本質が、まったく見えてないのよ」

富子さんは、むしろ悲しげに言う。

「どういうことですか？」

富子さんは、猫の耳の後ろを掻く手を止めた。

「今、日本列島の人口は、どのくらいか知ってる？」

唐突な質問に、わたしは面食らった。

「さあ……わかりません」

「昔なら、地理の時間に、最初に習う内容なんでしょうね。でも、今や、そんな基本的な事実さえ、機密事項として扱われるようになってしまった。……現在、日本には、九つの町があって、全部ひっくるめた人口は、およそ五万人から六万人と推計されるの」

「そんなにいるんですか？」

わたしは、かなり驚いていた。

「古代文明の基準だと、たったそれだけということになるのよ。千年前は、日本だけでも、一億を超える人口がいたそうだから」

いくら何でも、それは信じ難いと思った。翻車魚（マンボウ）の卵じゃあるまいし、億というのが、人間を数える単位になるなんて。第一、それでは、食糧を確保するのも難しいだろうし、快適な地域に人口が集中すれば、ほとんど立錐の余地もないだろう。

「知ってる？　古代文明には、核兵器というものが存在したの。放射性物質の核分裂や、重水素の核融合のメカニズムを使って、たった一つの爆弾で、都市一個を丸々壊滅させるほどの威力があったそうよ。」

「都市を壊滅させる……？」

わたしには、何のために、そんな馬鹿な武器が必要だったのかがわからない。かりに、征服し、富を得るためだったとしても、その対象である町を消滅させてしまったら、勝つことに何の意味があるだろうか。

「だから、古代人たちは、核兵器の管理には、神経を磨り減らしたの。どの国が何発保有しており、どの国が、新たに核兵器を持つようになったか。……だけど、もしかしたら、現在の状況は、その頃と同じか、もっとひどいものになっているのかもしれないわ」

「おっしゃる意味が、全然わからないんですけど。だって、そんな兵器は、今は、どこを捜したって見つからないんでしょう？」

「ええ、核兵器はね。でも、今の世界は、潜在的には、それよりはるかに恐ろしい存在で満ちているわ」

「何ですか？」

「人間よ」

富子さんは、茶虎猫の顎の下をくすぐった。ごろごろと喉を鳴らす音が、遠雷のように板の間に轟く。

「この前、あなたに話したことを、よく考えてみて。たった一人の悪鬼によって、容易に一つの町の住民が皆殺しにされてしまうのよ。しかも、一度しか爆発しない核爆弾と違い、体力が保ってしまえば、際限なく殺戮を続けることだってありうる。……業魔に至っては、一人の人間の精神の平衡が失われただけで、理論上は、地球が消滅してしまうことさえ、考えられるわ」

「……でも、それは、ごく特殊な場合だけですし、きちんと予防さえすれば」

「違う。そうじゃないのよ。あなたは、どういう形で呪力が暴走するか、その様態だけに気を取られている。問題の本質は、そこに無限のエネルギーを秘めた力があるという事実、そのものなの。私たちはまず、日本列島だけで五万発から六万発の核兵器をしのぐ脅威が存在するというところから、考えなくてはならないの。……そのうち二つが、行方不明になったとき、たかが二つと言って片付けられるかしら？」

三毛猫が起き上がると、ライオンより二回り大きな巨体を反らせ、剣歯虎のような牙を剝き出して欠伸をした。わたしには何の関心も示さず、板張りの床をぎしぎしと軋ませ、悠然とどこかへ歩き去っていく。

富子さんの言葉に衝撃を受けなかったと言ったら、嘘になる。わたしは、未だかつて、人間をそんなふうに見たことは一度もなかった。為政者は、常に最悪を予期し、備えなくてはならないとしたら、そういう見方も必要になるのかもしれない。しかし、このときのわたしには、単に、恐怖に取り憑かれた老婆の妄想のようにしか聞こえなかった。

「二人を連れ戻しなさい」

富子さんが、言う。

「彼らの命を救いたければ、そうするしかないわ。町に帰って来さえすれば、二人の命は、私が保証します。でも、このまま逃亡を続けるとしたら、二人が長生きすることはありえないのよ」

「なぜですか？」

「教育委員会は、二人の処分に全力を挙げるでしょう。周辺にあるバケネズミのコロニーは、すべて、二人を抹殺せよという指令を受け取ることになるの。それだけじゃないわ。二人が接近する可能性のある町、たとえば東北の白石71町、北陸の胎内84町、中部の小海95町などには、二人に対する警戒を促して、処分を依頼する文書が送られるのよ。どの町も、危険分子を排除する独自の方法を持っているはずだから、当然、自衛のためにそれらを行使することになるでしょう」

「そんな……ひどい！」

「だから、そうなる前に、二人を連れ戻すのよ。三日間あげるわ。三日は、教育委員会が何もしないように、抑えておける。その間に、二人を見つけて、首に縄を付けてでも連れて帰ってくるの。だいじょうぶ。あなたならできるわ」

わたしは、背筋をしゃんと伸ばして、深呼吸し

た。選択の余地はない。すでに、心は決まっていた。

「わかりました。これから、すぐに出発します」

「頑張って」

わたしは、立ち上がると、一礼して板張りの部屋を出ようとした。そのとき、目の隅に、グレイと黒のキジ猫の姿が映った。目を細め、かすかに尻尾を左右に振っている。まるでわたしを見送っているようだったが、家の近所にいた猫が、雀を見つけたときの様子にも少し似ていた。

「富子さんが来てくれなければ、今ごろ、わたしは、この猫たちの獲物になっていたんですね」

戸口で振り返り、心からの感謝を込めて、富子さんに言う。

「どうかしら」

富子さんは、微笑んだ。ふと、新たな疑問が生まれた。

「でも、富子さんは、どうして、これほど……強い影響力をお持ちなんですか？」

富子さんは、しばらくの間、答えなかった。失礼な質問をしたことを後悔し始めたとき、すっと立ち上がって、わたしのそばに来る。

「船着き場まで送るわ。ご両親には、後で、あなたが出発したことを伝えておくから」

「すみません」

わたしたちは、仲のよい祖母と娘のように連れだって、教育委員会の本部を出た。雪は、少し小降りになってはいたが、依然として天から舞い落ちてくる。白い息を吐きながら、わたしは、あらためて伏魔殿のような建物を振り返った。ここから無事に出られたのは、奇跡としか言いようがないと思った。

「さっきの、あなたの質問だけど……」

富子さんは、手をかざして、風に舞う雪を受ける。意外なほど若々しい手で、手首にも染みはおろか、血管も浮いていない。雪は、掌の上で、あっという間に溶け去った。

「この機会に、あなたには、話しておいた方がいいと思うの」

わたしは、固唾を呑んで、次の言葉を待ち受けた。

「たしかに、私は今、この町で大きな権力を手中にしてるわ。その気になれば、独裁者にでも、絶対君主にでも、なれるかもしれない。そんなもの、なりたいと思ったこともないけどね」

富子さんが、はったりを言っているようには思えなかった。誰もが怖れる教育委員会が、事実、富子さんの前では、まるっきり子供扱いだったのだから。

「権力の源泉って、何だかわかる？　あなたたちは、人類の歴史について、ほとんど教えられていないから、難しい質問かもしれないけど。古代の権力者たちは、直截的な暴力による恐怖や、財力、宗教による精神支配などの方法で、巧みに権力を手に入れてきたの。私には、その、いずれもなかった。唯一恵まれていたのが……時間なのよ」

「時間ですか？」

わたしには、まったく、ぴんと来ていなかった。

「そう。私は、平凡で何の取り柄もない人間だけど、時間だけは、たっぷりあったわ」

わたしたちは、船着き場に着いた。富子さんが、わたしのために、舟を用意してくれていた。いったい、いつの間に指示したのだろうと、わたしは、訝った。舟は、楔形をした快速艇で、中には、長板かんじきや、数日間、雪山で野営ができるような装備が準備されている。

「早季ちゃんは、私が何歳に見える？」

難しい質問だった。実際よりあまり上に言うと失礼にあたるだろうとの遠慮もあったが、まったく見当がつかないというのが、正直なところだったのだ。

「六十……七歳くらいですか？」

「惜しいわね。今、かなりびっくりしたわ。……下

二桁は合ってたから」

　富子さんは、白い歯を見せた。

「私の本当の歳はね、二百六十七歳よ」

「まさか」

　冗談かと思い、わたしは笑ったが、富子さんは、真面目な顔を崩さなかった。

「私が病院の看護婦をしていて、悪鬼に遭遇したのは、今から二百四十五年前のことなの。ついでに言うと、倫理委員会の議長に就任したのは、今から百七十年前だったわ」

　自分の耳を疑うというのは、このことだろう。

「で、でも……どうして、そんなに？」

　後の言葉が、出てこなかった。

「どうして、そんなに長生きなのかって？　それとも、どうしてそんなに若いのかって、思ってくれたのかしら？　あらあら。そんな、化け物を見るような目で見ないで」

　わたしは、そっと、かぶりを振った。

「私はね、昔から、呪力では平凡な成績だったの。今の全人学級なら、たぶん、二年生の課程で躓いてたでしょうね。でも、唯一、私にしかできない技ができた。これは、肆星も含めて私以外は誰一人修得していない奥義なの。……それはね、自分の細胞のテロメアを修復できるっていうこと。テロメアは、知ってる？」

「いいえ」

「そうか。今は、こういう知識も、制限されてるのね。テロメアっていうのは、細胞内のDNAの末端部分のことなの。人間の細胞が分裂するときは、なぜか末端まで複製が利かないので、テロメアは、少しずつ短くなっていくのよ。テロメアが磨り減ってしまうと、細胞は、それ以上分裂できなくなって、死を待つしかない。だから、テロメアの長さは、私たちの余命を示す蝋燭のようなものなの」

　わたしたちが学んだ生物学の知識は、限られたものだったため、わたしには、富子さんの言っている

ことが、充分理解できたわけではなかったが、そのイメージは、鮮明に脳裏に描くことができた。細胞核の中で分裂して、複製される二重螺旋。年齢とともに、その終端は短くなっていく。もし、それを元通りの長さにリセットすることができれば、永遠の寿命を得ることも夢ではないのだろう。

「……だからね、覚は、私の直系の子孫ではあっても、本当の孫じゃないのよ」

　富子さんは、むしろ楽しげに言う。

「今から二百十一年前、私に初孫が誕生したときのことを覚えているわ。孫というのは、子供よりもっと可愛いって言われてたけど、本当にそうだった。もう、天使としか思えなかったものよ。でも、それが曾孫、玄孫となると、だんだん私との近縁度は薄れていく。覚は、私の九代目の子孫だけど、私の遺伝子は五百十二分の一しか受け継いでいないわ。可愛くないわけではないけど、もう、肉親という感情は、ほとんどないわね」

　だから、覚は、富子さんが祖母だと言われても、実感が湧かなかったのかもしれない。それに、覚には、本当の祖母が二人いたはずだから、おそらく、そちらの記憶との齟齬もあったことだろう。

「すべては、あなたが帰ってからの話になるけど」

　わたしの舟が出発する直前に、富子さんは、まるで餞のように言った。

「全人学級では、あなたに、新しい課題を与えてもらうことになると思うわ。今までのは、かなり退屈だったでしょう？」

「そんなことは……。壺をなおす技術だって、たまには、役に立ちますし」

「そうね。でも、これは内緒の話だけど、テロメアを修復するためのイメージは、割れた壺を元通りにするのと、ちょっとだけ似てるのよ」

　当時のわたしのナイーブさは、思い出すだけでも、冷や汗が出そうな気分に襲われる。そのことを

知っている人間にとっては、どんな目標に対してでも、強い動機付けを行い、その気にさせることなど、赤子の手を捻るようなものだっただろう。（最近、古代の本の中でこの言葉を見つけたが、喩えとしてもひどすぎるように思う。昔の人間は、本当に、そんなことをしていたのだろうか）

ともあれ、楔形の快速艇を駆りながら、わたしは、意気軒昂だった。必ずや、真理亜と守を見つけ出し、連れ帰るという強い意思が、小柄な十四歳の全身を満たしていた。

もちろん、大切な友の命を救うためというのが第一義だったが、選ばれし人間の恍惚とでもいうべき感情が、わたしを後押ししていたことは否めない。今思えば、わたしは、現在の巣を支配する女王蜂から後継者として指名された、次代の女王蜂のようなつもりでいたのかもしれない。

当初は、昂揚した気分のまま、真理亜たちのいるところへ急ごうと思っていたのだが、身を切るような冷たい風に真正面から吹かれるうちに、少し頭が冷えたようだった。

一人で行動するのは、危険すぎることに気がついたのである。守がいい例ではないか。バケネズミのスクォンクに救助されなければ、そのまま死んでいてもおかしくなかった。

わたしは、舟を停めた。

わたしには、相棒が必要なのだ。何とかして、覚を見つけなくてはならないが、彼は今、どこにいるのだろう。一足先に帰った後、教育委員会の査問を受けたことはわかっている。富子さんがいるのだから、無事であることは間違いないだろうが。

騎虎の勢いで飛び出してしまったことを、後悔していた。二人で行く許可を富子さんに取ればよかった。いったん引き返すべきかと迷う。だが、何かが、わたしに、それを躊躇わせていた。

しんしんと降る雪が、暗い色をした水面に、次々と吸い込まれ、溶けていく。その色は、何かに似て

いた。

　わたしを見たときの、富子さんの双眸だ。瞳の中には、吸い込まれそうな、途方もない深淵があった。まるで、時間そのものを覗き込んでいるような……。

　迷ったあげく、船首を巡らせようとしかけたとき、後ろから一艘の舟が来るのが見えた。雪のため、視界は紗がかかったようだったが、波の上を滑走する黒っぽいシルエットは、はっきりとわかる。たぶん、わたしが乗っているのと同じような快速艇だ。

「おーい！」

　向こうでも、こちらの姿を視認したらしく、舟に乗った人影が、叫びながら大きく手を振った。覚の声だった。

「ここよ！」

　わたしも、思いっきり手を振り返す。

「早季！　よかった。ここで追いつけて」

　覚が、息を切らして言う。

「これだけ雪が降ってるのに、雪原で、今度は、早季の跡を追いかける羽目になるのかと思ってた」

「どうしたの？　教育委員会で、査問を受けたんでしょう？」

「うん。昨日の晩、一度、ちくちくやられたんだ。ほら、あの鳥飼宏美っていう嫌な女に。それなのに、今日もまた出頭しろって言われたから、今度こそ処分されるのかって、半分くらいは覚悟したよ」

「お祖母さまがいるから、だいじょうぶよ」

　覚は、まだ、富子さんが自分の何に当たるのかは、知らないだろうなと思った。

「うーん……。やっぱり、富子さんが、庇（かば）ってくれたんだろうな。それで、今朝はずっと狭い部屋の中で待たされてたんだけど、ようやく呼び出しがあったかと思ったら、すぐに早季を追いかけろっていうだろう？　全然状況がわからなくて、びっくりしたよ」

「今は、状況は、わかってる?」

「ああ。真理亜と守を連れ帰らなきゃってことはね」

それだけわかってれば、充分だった。

前回と違って、守のかまくらの場所はわかっていたので、できるだけ水路を通って近道をすることができた。まず、櫟林の郷を横断して終点まで行くと、そこから二百メートルほどの間は舟を橇のように滑らせて、雪の上を行く。ときどき岩に当たる音がしたので、船底はさぞ傷だらけになったことだろうが、この際、かまっていられなかった。

利根川に辿り着いたときには、水を求めて山道を這い進んできた鰻のように、安堵した。そこからは、逆方向に二キロほど遡航して、再び上陸する。

舟が流されないよう、完全に岸に上げてしまう。今まで気づかなかったが、側面には、『神の眼』を象った町章と、赤い番号、所属を示す梵字が描かれていた。大日如来を意味する𑖪𑖽（バン）という文字は、めったに使われることがなく、わたしも見るのは初めてだった。おそらくは、倫理委員会が保有している舟であり、こんなに乱暴に扱った人間は、これまでにいなかったに違いない。

わたしたちは、長板かんじきを履いて、リュックサックを背負った。

「さあ、行こう」

時間はまだ昼過ぎのはずだったが、空はどんよりと曇り、日没が近いような感じだった。依然として、雪は降り続いており、空気は、頰に刃物を当てられているように冷たい。

わたしたちは、雪を蹴り、見えない綱に引っ張られながら、緩やかな斜面をまっすぐに上っていった。

5

告白すると、わたしは、方向音痴に近い。

以前、バケネズミの巣穴の中で、覚と二人、さまよったときのくだりに、道順を覚えるのが得意ではないと書いたような記憶がある。実際には、そんな生やさしいものではなく、迷わず正しい方向に行けるのは、通い慣れた郷の道か、標識のある水路くらいなものだろう。

「……うーん。こっちでいいんだよな？」

覚は、わたしとは対照的に、渡り鳥のような方向感覚を持っていたが、この前とは違う道筋を辿っているだけに、ときどき立ち止まっては考え込んでいた。

「いいんじゃない。たぶん」

わたしは、そのたびに、いい加減な相槌を打っていた。考える材料が何もないのだから、しかたがないと思うのだが、それが、どうも、覚には腹立たしかったようだ。

「早季……。本当は、何も考えてないだろう？」

「そんなことないわよ」

「適当な返事だったら、しないでくれるかな？」

「ちゃんと考えてるって」

覚は、呆れたように頭を振ると、ぶつぶつ言いながら長板かんじきを走らせ、斜面を登っていく。わたしは、ちゃっかり彼の残したシュプールに入って、後に続いた。

わたしは、事態を楽観していたと思う。真理亜たちのいるかまくらにさえ辿り着ければ、使命は完了に近いという錯覚に陥っていたし、覚と合流できたことで、それも半ば果たせたような気になっていたのだ。

「あれ？　ここは、通ったんじゃないか？」

起伏のある雪原と竹林を抜け、大きな丘を乗り越えると、何となく見覚えのある景色が広がってい

た。

「違うかな？　あのときは、たしか、このあたりに橇の跡が残ってたんだけど」

　覚は、粉砂糖のような雪に覆われた斜面を見て、残念そうだった。丸一日で、かなりの積雪があったため、ほとんどの痕跡は、消えてしまっていただろう。

「あ、でも、やっぱりここ。間違いない！」

　わたしは、かなりの確信を持って言ったのだが、覚の反応は鈍かった。

「どうして、そう言える？」

「だって、覚えてるもの」

「嘘だろう？　早季は、ここまでの道順も、まったくわかってなかったじゃないか？」

「まあ、それはね……道順はね」

　あんまり認めたくはなかったが、本当に自信があることを納得させるためには、しかたがない。

「でも、この場所は、よく覚えてる。だって、ほら、この木」

　わたしは、傍らに生えていた七竈（ナナカマド）の木を指した。

「このあたりじゃ、あんまり見かけない木でしょう？　だから、よく覚えてたのよ」

「本当に？」

　覚は、疑わしそうに言う。

「それに、向こうにある岩もそう。全体の形が、何だか、大蛇がとぐろを巻いてるみたいじゃない？　だから、ちらっと見ただけだけど、記憶に残ってるわ」

「蛇っていうより、犬の糞にそっくりだけど」

　覚は、憎まれ口を叩いたが、わたしの記憶力については、若干、見直したようだった。

「でも、やっぱり、ここがそうだよな？　だったら、もうすぐだ」

　わたしたちは、斜面に沿って、滑走を開始した。橇の跡はなくても、徐々に記憶がよみがえってくる。ようやく正しい軌道に乗ったという昂揚感から

か、自然に速度が上がり、長板かんじきがぶるぶると震えるほどだった。

やがて、斜面は、どんどん急角度になった。知らないうちに、かなり標高が上っていたらしく、左手には、千尋の谷が口を開けている。その間も、雪は降り続いており、視界は悪くなる一方だった。こうなると、さすがに、速度を落とさざるを得ない。

「早季。あの、平らな岩みたいの、どのへんだった？　守の橇が滑ったとこ」

覚が、訊ねてくる。

「全然わからない。皆目見当もつかない」

わたしは、正直に答えた。もともと、斜面の途中には、わたしの興味を惹くようなものはなかったし、雪が降ったので、全体の印象が変化している。急斜面のアイスバーンには粉雪は積もらなかったが、それが湿った牡丹雪に変わったため、貼りつくように着雪したのだろう。

ついに、わたしたちは、長板かんじきを停めた。

「これじゃあ、危ないな。どこで、あの岩に足元をすくわれるか、わからないし」

覚が、かじかんだ手の指を擦り合わせながら言った。

「ゆっくり行くしか、ないんじゃない？」

「それじゃあ、時間がかかりすぎるよ。それに、いくらゆっくり行ったって、滑るときは滑るし」

わたしたちは、顔を見合わせた。ひそかに相手が名案を出すことを期待していたのだが、もちろん、物事は、そう都合よくは行かない。間が悪いことに、降雪はさらに密度を増し、風も強くなってきた。遮るものがない斜面に突っ立っているわたしたちは、急に、寒さが応えるようになってきた。さっきまでは、呪力で長板かんじきを走らせているとはいっても、全身の筋肉を使って姿勢を保っていたので、それなりに身体は発熱していたのだ。しかも、ここへ来て、朝から何も口にしていないことが、仇になり始めていた。血糖が減少しているのか、身体

に力が入らず、頭がふらふらする。

「そうだ。要は、あの岩さえ踏まなければいいんでしょう？　気づかずに通り過ぎちゃっても、上に行く道ならわかるわ」

密生した藪と、その上にある獣道のようなルートは、記憶にしっかり焼き付いている。

「踏まなきゃいいって言っても、具体的に、どうするんだよ？」

「呪力で、道を造ればいいじゃない？」

「そうか……うん。そうしよう」

わたしたちは、やはり、疲労と焦りから判断力が低下していたのだろう。子供用の橇で斜面を上がった守にも匹敵するほどの無謀な挙に出てしまった。二人で巨大なスコップをイメージすると、目の前から一直線に積雪を削いでいき、道を造ったのだ。雪の中に穿たれた道は、単なるアイスバーンより安全で快適そうに見えた。

「よし、行こう」

わたしたちは、一列になって、細い道を滑っていった。除雪した距離は、四、五十メートルほどだったので、終点まで行くと、もう一度、同じことを繰り返さなくてはならない。

そのときだった。ぎしぎしと軋むような嫌な音が聞こえてきたのは。

「しまった。雪崩だ……！」

わたしたちは、その場に立ち竦んだ。考えてみれば、急斜面に降り積もっていた雪に、真横に切れ目を入れてしまったのである。雪崩が起きない方が不思議だった。

「屋根よ！」

「左右に流すんだ！」

互いにそう叫び交わすのが、精一杯だった。斜面の上から、凄まじい勢いで雪の奔流が押し寄せてくる。雪崩は、わたしたちを押し流そうとするように一気に落下してきたが、頭上二、三メートルと数十センチの二ヵ所で、見えない楔に引き裂かれて左右

に分かれ、きらきらと輝くシャワーとなって谷底に降り注いだ。

その間、おそらく、一分にも満たなかったに違いない。だが、わたしたちにとっては、永遠に続くように感じられた。

気がつくと、雪崩は終わっていた。降り積もった雪が流れ落ちたときにアイスバーンの一部も崩落したらしく、さらさらとした砂のような流れが、幾筋か、断続的に続いているだけである。

「だいじょうぶか、早季？」

「うん。覚は？」

「何ともないよ」

わたしたちがとっさに想像したのは、尖った切妻（きりづま）屋根だった。膨大な重量のある雪崩は、まっすぐ受け止めるより、左右に受け流した方が賢明だと判断したからだ。さいわいにも、わたしたちが作ったイメージは互いにバッティングすることもなく、二人とも無傷だったが、しばらくは身体の震えが止まらなかった。

「雨降って地固まる……っていうのとは違うかな。見てみろよ」

覚が、斜面の上方を指さす。降り積もっていた雪が一掃されたおかげで、昨日見たのと同じような、固くざらざらしたアイスバーンだけが残されていた。ようやく、最初にわざと雪崩を起こして斜面の不安定な雪を一掃し、安全な状況になってから進めばよかったと気づいたが、後の祭りである。

そこから少し行くと、守の橇が滑った平らな岩は、すぐに見つかった。さらに斜面を抜けて登るルートも。密生した藪の間を擦り抜け、獣道のような細い小径を上る。

「もう少しだ」

雪の上の跡は消えていたが、覚は、確信を持って進んでいく。もうすぐ真理亜に会えるかと思うと、わたしも、ごく自然に長板かんじきの速度が速くなった。

「あれ？」

　ふいに、覚が立ち止まった。真後ろを走っていたわたしは、危うく衝突しそうになる。

「急に、止まらないでよ！」

「かまくらが、見当たらないんだ」

「嘘。そんなこと……」

　わたしは、疎らな林の中を見回した。たしかに、こんな場所だったとは思うが、確信は持てない。かまくらがあったのは、もう少し先だったのかも……。

　そのとき、わたしの目が、三十メートルほど先にある二本の松の木を捉えた。

「あれよ！　あの木だったわ」

　わたしたちは、松の木のまわりを仔細に調べた。かまくらは跡形も残ってなかったが、少し不自然なことに気がつく。松の木のかなり高い位置に、小さな雪の固まりが、何個か付着していたのだ。

「かまくらを壊してから、目立たないように、雪を均したんだ」

　覚が、考え込むときの癖で、顎を撫でながら言う。

「バケネズミの芸当としては、できすぎてる。かまくらに使われてた雪って、かなりの量だろう？　あれを全部、粉雪状にして広範囲に撒いたとしか思えないもんな。おそらく、真理亜か守が、呪力を使ってやったんじゃないか」

　それを聞いて、少しだけほっとした。二人は、少なくとも、ここを引き払ったときには、まだ無事だったということになる。

「でも、どっちに行ったのかしら？」

　わたしたちは、周囲の雪の上を見回した。足跡や橇の跡のようなものは、何一つ見当たらない。

「わからないな。跡を追われないよう、細心の注意を払ってたみたいだ」

「いちいち、足跡を消しながら行ったの？」

「バケネズミは、たぶん、そうだ。真理亜は、守を

抱えて、遠くまで跳躍したのかもしれないけど」

わたしは、言葉を失っていた。ここまで来さえすれば、何もかもうまくいくはずだった。それが、いかに甘い見通しだったか、今になって痛切に思い知らされていた。

「……もしかして、二人とも、町に帰ったっていうことはないかな？」

かすかな望みを込めて訊ねたが、覚に一蹴されてしまう。

「町へ帰るんなら、足跡を消す必要はないよ」

どうすればいいのだろう。落胆のあまり、涙が溢れそうになったが、覚がいたおかげで、きわどいところで踏みとどまった。

「二人を、見つけなきゃ」

そう言いながらも、肝心の手だてが何もないことは、嫌というほどよくわかっていた。

「そうだな。……だけど、その前に、ちょっと休憩しよう。火を起こして昼飯を食うんだ。空腹でふらふらの状態じゃ、何もできないからね」

覚は、倒木の上の雪を飛ばして腰掛けると、背負ってきたリュックサックを開ける。

少しだけ救われた思いで、わたしも、隣に腰を下ろした。

今来たばかりの道を逆戻りし、舟に着いたときには、徒労感でいっぱいだった。しかし、弱音を吐いてはいられない。残された時間は、あまりないのだ。

空はどんより曇り、分厚い雲によって隔てられた太陽は、西の空に移ろうとしていた。たぶん、午後三時過ぎだろう。雪は小止みになっていたが、ちらほらと風花が舞っている。

わたしたちは、二艘の快速艇を飛ばして、利根川の青鈍色の流れを遡っていった。

二年前と比べると、呪力で舟を操る技倆も格段に進歩していたし、舟自体が速度を出すことを前提に

設計されていたため、快調に進む。途中、どこかで八丁標（はっちょうじめ）を越えたはずだが、さすがに利根川の上にまでは注連縄（しめなわ）は張られていないので、よくわからない。

上陸地点は、はっきり決まっているわけではなかった。覚の勘頼みであり、悪くいえば、まったく適当である。だが、舟の中には地図までは用意されておらず、取りに帰る時間もない以上、とにかく行ってみるしかなかったのだ。

覚が舟を減速させて、わたしに向かって叫んだ。

「早季！　もう、充分来たと思う！」

「上がる？」

覚は、前方を指さした。広い岸辺があり、そこからずっと、北に向かって雪原が続いているようだ。ここなら、出発点としては悪くないだろう。

わたしたちは、快速艇を岸に着けて、雪の上に降り立った。ここまで、ずっと呪力を使いっぱなしで来たため、頭の芯に熱が籠もり、ぼおっとした感じだった。小休止したいが、そんな暇はない。二艘の快速艇を岸に上げると、長板かんじきを装着し、すぐに走り始めた。雪原の先は丘陵で、上ってからは、しばらく尾根づたいに進む。そこからは、なだらかな下り坂が続いていたので、しばし呪力を休め、重力にまかせて滑降した。下り坂が平地に変わっても、身体の筋力だけを使って、すり足で前進する。

その間に、頭の中に籠もっていた熱は、少し冷ますことができたが、今度は、慣れない運動で息が上がってしまう。無理やり冷たい空気を吸い込んだ肺は、ぜいぜいと悲鳴を上げていた。

「ちょっと、待って……」

わたしは、とうとう音を上げて、立ち止まった。少し前を走っていた覚が、ゆっくりとターンして、引き返してくる。

「だいじょうぶ？」

「うん。ちょっとだけ、休ませて」

わたしは、ふかふかの雪の上に横向けに倒れ込んで、息が正常に戻るのを待つ。微風が、火照った顔から熱を奪っていくのが心地よかった。上昇していた体温が落ち着いてくると、全身にかいていた汗が、冷たく不快に感じられる。呪力で服の温度を上げると、身体から、ゆらゆらと湯気が立ち上った。

「水分を補給した方がいい」

覚は、自分の水筒から蓋に温かいお茶を注ぎ、わたしに渡してくれた。

「ありがとう」

お茶で喉を潤しながら、わたしは、覚を見上げた。彼が、こんなにも優しく、頼もしく見えたのは、初めてのことだった。

「何、じろじろ見てんだよ?」

「優しいなって思って」

覚は、照れたように、そっぽを向く。

「……ねえ、真理亜たち、見つかるかな?」

「見つけるんだ」

覚は、振り向いて、明快に言い切る。

「それしか、二人を助ける方法はないだろう?」

「そうだけど」

「そのために、僕らは、わざわざこんなところまで……どうした?」

わたしは、お茶の入った蓋を口元に持っていったところで、固まっていた。

「振り返らないで。覚の後ろ……百メートルくらい向こうの丘の上に、いる」

「何が?」

「たぶん、バケネズミ」

見えたのは、黒っぽい影だけだったので、確信は持てない。しかし、熊や猿でないことは、たしかである。人にしては小さすぎるし、こんなところで誰かに出くわすとも思えなかった。

覚は、得意技を使った。彼の目の前の空間に、三十センチ四方くらいの鏡を現出させる。遠くの丘の上が映るように、慎重に鏡の向きを変えた。

「いた」

　平板な、何気ない声で言う。

「捕まえられる？」

「いくら何でも、この距離じゃ無理だよ。もうちょっと、接近しないと」

　そのとき、折悪しく、分厚い雲の間から、太陽の光が射し込んできた。鏡が光を反射したらしく、黒い影は、たちまち姿を消す。

「気づかれた」

　覚は、舌打ちした。

「追いかけなきゃ」

　わたしは、雪の上に飛び起きた。短い休憩で、体力は一時的に回復していた。

　今までのように、のんびりクロスカントリーをやっていては、バケネズミに追いつくのは、とうてい無理だ。わたしたちは、呪力で、一気に長板かんじきを加速した。

　あっという間に雪原を踏破すると、急角度で丘を登っていく。

「どこのコロニーだろう？」

「さあ。でも、まさか、スクォンクじゃないだろうな」

　たしかに、バケネズミが、わたしたちのように短時間で、これだけの距離を移動できるとは思えない。

　丘の上に達したときには、当然ながら、バケネズミの姿は見えなかった。わたしたちは、血眼になって足跡を捜す。

「あった！」

　丘の反対の端に、小さな二足歩行の足跡が続いている。

「こっちよ」

　わたしは、すばやく長板かんじきを滑らせると、足跡のそばへ行こうとした。そのとき、覚が「待て！」と叫んだ。

「え？」と言って振り返った瞬間だった。足元から

亀裂が走り、体重を支えていた抵抗があっさり消失する。
　ふわりと身体が浮き、雪の中を抜けて、落ちていく感覚。
　覚の遠い叫び声。
　そして、そのまま意識が暗転した。

　わたしは、目を開けた。
　複雑に竹を組んだ天井が見える。行灯の明かりだろうか。天井に映った影が揺れていた。どこかの小屋の中にいて、薄い布団の上に寝かされているようだ。すぐそばには、小さな囲炉裏が切ってあり、かんかんに熾（おこ）った炭の上で、鉄瓶が湯気を吹き上げていた。
「早季」
　覚の声がした。そちらに、首を巡らせる。
「わたし、どうしたの？」
　覚は、ほっとしたような笑みを浮かべて、わたしを見た。
「雪庇（せっぴ）を踏み抜いたんだ」
「せっぴ？」
「丘なんかの風下側にできる、雪の庇（ひさし）のことだよ。上から見ると、丘が続いてるように見えるけど、実際はただ雪が張り出してるだけだから、うっかり踏んだら最後、そのまま下まで落っこちるんだ」
「わたし、下まで落ちたの？」
「いや。ぎりぎり間に合って、僕が止めた。だから、どこにも怪我はしてないはずだよ。なかなか目を覚まさないから、心配したけど」
　わたしは、ゆっくり両手両足を動かしてみた。たしかに、異状はないようだ。どうやら、恐怖のあまり気を失った後、それまでの疲労からか、ずっと眠り続けていたらしい。
「この小屋は？」
「どこだと思う？　驚くなよ。僕らが捜してた場所なんだ」

「まさか……嘘でしょう？　ここ、塩屋虻（シオヤアブ）コロニーなの？」

「その、まさかだよ。こんな小屋だけど、一応、貴賓室みたいなものらしい」

覚の説明によると、わたしたちが追っていたバケネズミは、塩屋虻コロニーの兵士だったようだ。わたしが落下したのを見て、コロニーに注進に走ったらしい。塩屋虻コロニーでは、すぐに救助隊を現場に送り、わたしをここまで連れてきたのだという。

「じゃあ、スクィーラにも会ったの？」

「ああ。今は、すっかり出世して、名前まで変わってるけどね」

そのとき、小屋の入り口の方から声が聞こえた。

「よかった！　お目覚めになられたようですね」

「スクィーラ！」

ひょろりとした姿形は、バケネズミとしてあまり特徴がないが、抑揚のはっきりした声は、まぎれもなく、塩屋虻コロニーの奏上役のものだった。二年前は、みすぼらしい鎧に身を固めていたが、今は、ゆったりとした月の輪熊の毛皮の寛衣（ローブ）をまとっている。

「お久しぶりでございます。神様」

「本当ね。スクィーラは、元気にしてたの？」

「はい。おかげさまで、息災でした。……最近は、神様へご奉仕させていただく機会も多くなりまして、有り難いことに、たいへん名誉ある名前まで賜りました」

自慢げに、少し胸を張る。

「どんな名前？」

「はい。野狐丸（やこまる）と申します。野（の）の狐（きつね）と書きます」

スクィーラ……野狐丸が出世したというのは、本当のようだった。武勇より知恵を売り物にするバケネズミにはふさわしいし、奇狼丸の名前にある狼と比較しても、遜色がない感じがする。

「我が塩屋虻コロニーも、二年前と比べると、めざましいばかりの復興進歩を遂げました。一時は、コ

ロニーの存続さえ危ぶまれましたが、今では、近隣の複数のコロニーとの合併によって、総員一万八千匹を数えるまでになりました。これもひとえに、ご神助の賜物であると……」

「コロニーの話も、また、ゆっくり聞きたいけど、今は非常事態なんだ」

覚が、長くなりそうな野狐丸の話を遮った。

「どうしても、君の力を借りたいことがあるんだよ」

「かしこまりました」

内容を聞きもせず、野狐丸は、優雅に一揖する。

「どうか、すべてを、この野狐丸におまかせください。大恩あるお二方のためとあらば、いつでも、この一命を投げ出す所存です」

少し調子がよすぎるような気もしたが、このときのわたしたちには、しごく心強い言葉に聞こえた。

「木蠹蛾（ボクトウガ）コロニーは、どこにあるの？」

わたしは、単刀直入に訊ねた。

「ここからは、四、五キロほど北西です。大雀蜂コロニーの傘下にも入らず、私どもとの合併にも消極的な……今では数少ない独立系のコロニーですね」

野狐丸の目が光ったような気がした。

「木蠹蛾が、どうかいたしましたか？」

わたしと覚は、目を見合わせた。野狐丸の協力を得なくてはいけない以上、こちらも、ある程度、情報を開示する必要があるだろう。

「僕らは、友達を捜してるんだ……」

覚が、なるべく差し障りのある部分は伏せて、かいつまんだ事情を説明した。

「わかりました！　まずは、そのスクォンクという個体を見つけるのが早道のようですね。明朝一番に、木蠹蛾コロニーへ向かいましょう」

「今すぐ行きたいんだけど……」

「お気持ちはお察ししますが、夜の雪道は、たいへん危険です。それに、木蠹蛾の方でも、襲撃かと勘違いする恐れがございます。あと四、五時間で夜が

明けますので、それからの方がよろしいかと存じますが」

　もう、そんな時間になっていたのかと驚く。覚の方を見ると、うなずいたので、出発は明朝まで延ばすことにした。

「それでは、簡単なお食事をご用意しました。なにぶん畜生の粗餐ゆえ、お口に合わないかとは思いますが、どうか、お召し上がりください」

　野狐丸が合図すると、一匹の小柄なバケネズミが、朱塗りのお膳を持って入ってきた。二年前、大雀蜂コロニーの夜営地で出された雑炊を思い出す。柔らかめに焚かれたご飯と、牛蒡や里芋など具だくさんの味噌汁、それに正体不明の干物と川魚の塩焼きである。干物だけは、革のように固い上に何の味もなく、食べられたものではなかったが、それ以外は、まずまずの味だった。

　わたしたちが食事をしている間も、野狐丸は、ずっとそばにいて、あれこれと質問してくる。世間話を装ってはいるが、少しでも情報を得ようという意図が見え見えで、かなりうんざりさせられた。食事が終わると、こちらから要望を出してやる。

「そう言えば、二年前も、ここへ来たのは夜だったわね」

「ええ、ええ。たいへん懐かしく思い出します。正確には、場所は、ここではございませんでしたが」

「あのとき、かなり夜遅かったけど、女王様にお目にかかったでしょう？　今日も一応、ご挨拶しておこうと思うんだけど」

　なぜか、野狐丸は、戸惑った様子を見せた。

「そうですか……承知いたしました。女王は休んでいるかもしれないので、とりあえず、見にやらせましょう。もしよろしければ、その間に、コロニーをご覧になりませんか？　あれから、ずいぶんと変わっておりますので」

　わたしたちは、小屋を出て、野狐丸の案内で塩屋虻コロニーの中を見て回ることになり、そして、と

ことん仰天させられた。

二年前は、バケネズミたちは、ほとんどが地下の穴蔵の中で生活しており、地上に露出した構造物といえば、蟻塚のような尖塔だけだった。だが、今や、彼らが集団生活を送る住居は、一つの町とでも形容できるものに変貌していたのだ。

最も多く目についたのは、巨大なキノコを思わせる丸い建造物だった。野狐丸の説明によると、木材や竹などを骨組みとして、粘土や家畜の糞を練ったものを塗って作るらしい。土壁には、出入り口や窓の役目をする丸い穴が、いくつも開けられており、中の灯が漏れていた。

「ただし、私どもは、もともと穴居性（けっきょせい）の動物ですので、建物はすべて、地下のトンネルで繋がっております。……こちら側の建物は、すべて、さまざまな物を造る工場です」

そこには、金属を精錬する、布を織る、染色する、和紙を漉くなどの工場が、所狭しと並んでおり、夜を徹して作業員たちが働いていた。中でも、セメント工場は圧巻だった。筑波山より遠くにある山から切り出してきた石灰岩を粉砕後、粘土を加えて高温で焼き、石膏を加えてから再度粉末にして、セメントを作っているという。さらに、できあがったセメントには、砂利や砂を混ぜ、モルタルやコンクリートに加工しているらしかった。

「そして、ここで生産されたコンクリートでできた建物の、第一号がこれです」

野狐丸が示したのは、コロニーの中心に位置する円形の建物だった。平屋だが差し渡しが三十メートルはある。人類の古代文明もかくやと思わせる偉容には、ただ目を瞠（みは）るしかなかった。

「この建物は、コロニーの評議場です」

野狐丸は、誇らしげに解説する。

「コロニーの成員一万八千匹を代表する六十匹の評議員が、この建物の中で議論を尽くし、さまざまな

意思決定を行うのです」

　二年前は、コロニーの中心は、女王の住む竜穴だったはずである。それが、どうして、これほど短時間に、ここまで過激で抜本的な変化が可能だったのだろうか。

「竜穴は、どこへ行ったの？」

　わたしの質問に、若干、野狐丸の声が曇った。

「ご覧のように、私どもは、地中の穴から地表に築いた建造物に、生活の中心を移しつつあります。それに伴い、竜穴なども改廃せざるを得ませんでした。また、コロニー同士の合併により、複数の女王を抱えることとなり、管理上、一つの建物に集約する必要もございましたので……」

「じゃあ、その建物へ行きましょう。明日のことも、頼んでおかないといけないし」

「さようでございますか。……ただ、コロニーの意思決定は、評議会が担っておりますし、明朝の件につきましては、評議会を代表しまして、この野狐丸が責任を持って」

「いいんだよ。僕らは、ただちょっと、女王様に挨拶したいだけだから」

　覚が、少し苛立ったように言うと、野狐丸は、あきらめたような表情を見せた。

「……かしこまりました。それでは、ご案内申し上げます」

　そのとき、女王の様子を見に行っていたという、召使いが戻ってきた。キイキイ鳴いて、野狐丸に何ごとかを報告する。野狐丸は、手を振って、召使いを退けた。

「それでは、こちらでございます」

　ランタンを持った野狐丸に先導されて来たのは、工場とは反対側に並ぶ土壁の建物群の、一番端だった。

「何、これ……？」

　わたしは、思わず眉を顰めた。女王の居住する建物としては、あまりにもみすぼらしいからだった。

サイズは比較的大きいものの、粗末な土壁に藁葺き屋根で、まるで家畜小屋ではないか。

分厚い扉を開けて中に入ると、むっとする異臭が鼻を衝いた。

二年前、竜穴に入ったとき、やはり、鼻が曲がりそうな獣臭が充満していたことを思い出した。だが、何かが違う。臭いそのものは、以前より、むしろ耐えやすくなっていたが、そこに消毒薬などの臭気が入り交じって、独特の嫌な感じを醸し出している。

たとえるなら、前に入った竜穴の悪臭は、恐怖をもたらすほど強烈な生命力を感じさせる臭気だったが、この建物に漂っているのは、病院に妙法農場の堆肥をぶちまけたような、不自然で病的な異臭だった。

建物は、細長い長方形で、真ん中を長辺方向に廊下が走っており、厩舎を思わせる構造だった。両脇には、太い木材でできた頑丈そうな囲いが並んでいるが、照明が暗いため、囲いの奥は闇に溶け込んでいて、何も見えない。

だが、そこには、数頭の巨大な生き物の気配があった。向こうも、わたしたちの臭いを感じたらしく、身じろぎするような音がしたが、それ以上の反応や、唸り声などは聞こえなかった。もぞもぞと藁の上を這いずる音に、じゃらんという鎖の響きが混じる。

わたしは、はっとして野狐丸を見たが、周囲が薄暗く、ランタンの光の陰になっているせいで、表情は読み取れない。

「ここにいるのが、私どもの女王です」

野狐丸は、一つの囲いの前で立ち止まって言う。

「女王様。お久しぶりです。以前にお目にかかった、早季です」

わたしは、静かに声をかけてみたが、何の応答もない。

「どうぞ。中にお入りください」

野狐丸は、囲いの扉を開けて、すたすたと入っていった。わたしたちも、おそるおそる、後に続く。

野狐丸は、囲いの奥にうずくまっていた女王に、ランタンの明かりをかざした。

巨大な芋虫のような姿が、闇に浮かび上がる。皺だらけの真っ白な身体。短い四肢。

そのとき、かすかな鞴（ふいご）のような音が聞こえてきた。安らかに寝息を立てている。

なんだと思い、わたしは、安心した。眠っていたのだ。真夜中すぎだから、当然のことではないか。

女王を起こさないように、そっと、その牛より大きな腹部に触れてみる。巨大な体軀を持つ生き物らしい、ゆったりとしたリズムで、上下に動いている。

「よく眠ってるわ」

今度は、歩きながら、女王の首筋から平べったい頭まで撫でた。前頭部に、指先が引っかかる、奇妙な継ぎ目のような部分を感じる。まだ、女王は目を覚まさない。

「早季。寝ぼけて、咬まれるかもしれないぞ」

覚が、心配そうに言う。

「だいじょうぶよ。起きそうになったら、わかるから」

そう言ったとき、手先が滑って、中指が女王の目を突いてしまった。はっとして、手を引っ込める。ぴくり、と女王の頭が動いた。だが、それきり、何の反応も示さない。

ふいに、恐ろしい疑惑が、わたしの中で頭をもたげた。たった今、わたしの指先が触れた目は……。

「ランタンを。ここを照らして！」

強い口調で、野狐丸に命じる。野狐丸は、一瞬ためらったが、のろのろと光の輪を移動させた。

女王は、目を見開いていた。最初から、眠ってなどいなかったのだ。だが、瞳孔が散大した目に、知性のひらめきは見られない。いや、乾燥して、視力さえ失われているのかもしれなかった。半開きにな

った口からは、不浄猫並みの大きさの犬歯が顕れ、藁床の上に涎を垂れ流している。

　わたしは、野狐丸からランタンを奪い取ると、明かりを女王の頭に近づけた。前頭部のやや右寄りに、大きなV字形の手術痕があった。太い糸で傷口を縫った跡が、畝のように盛り上がっている。

「おい。これ、どういうことなんだ?」

　怒気を含んだ、覚の声が響く。

「しかたがなかったのです」

　悄然とした、野狐丸の声が答えた。

「しかたがないって? あなたは、女王様に、いったい何をしたの?」

　わたしたちの声が、厩舎のような建物の中に反響し、巨大な獣たちが身動きする音と、鎖の音が大きくなった。

「お話しいたします。どうか、外へ参りましょう」

　わたしたちは、女王たちを収容している建物の外に出た。身に沁みるほど冷たい風が、身体にまとわりついた悪臭を吹き払ってくれるようで、むしろ心地よかった。

「私どもとて、女王に対して、あのように過酷な処置を執りたいとは思いませんでした。……女王は、私どもコロニー全員の母なのですから」

「だったら、どうして?」

　わたしは、野狐丸に詰め寄った。すると、どこからともなくバケネズミの衛兵が現れ、わらわらと駆け寄ってくる。野狐丸は、顎を振って兵士たちを下がらせた。

「以前、女王をご覧になったとき、お感じになりませんでしたか? 女王が精神の平衡を失いつつあったことを」

「ええ。何となくは」

「これまでは、どのコロニーでも、女王は絶対の存在でした。私どもの女王も、もともと圧政的な部分はございました。しかし、精神を病んでからは、ますます暴虐の度がひどくなったのです。気分の変動

が激しく、何の咎もない召使いに咬みつき、重傷を負わせたり殺してしまったりという事件が相次ぎました。あげくには、妄想的な猜疑心に駆られて、土蜘蛛との戦いで大打撃を受けたコロニーの復興に尽力していた重臣を、次々に処刑してしまったのです。このままでは、我が塩屋虻コロニーは、滅亡するしかないと思いました」

「だからといって……」

覚が言いかけたが、言葉が続かない。

「私ども、コロニーに属する者は、全員、コロニーと女王に対し絶対の忠誠を誓っております。しかし、私どもとて、使い捨てにされる道具ではありません。私どもは、神様を除けば、この惑星上で最も高い智能を持った存在であり、アリやハチのような社会性昆虫ではないのですから。そう信じる者たち、コロニーの将来を憂える心ある者どもが自然に集まり、協議の末、私が音頭を取って、『組合』を結成いたしました」

「組合？」

「はい。私どもの最低限の権利を守るためには、女王と交渉する必要があったからです。しかし、女王は、激怒いたしました。私どもの動きを反逆と捉えたのです。……そのため、いろいろ曲折はありましたが、やむなく、こういう結果に至りました」

「こういう結果って……君たちは、よってたかって、女王を植物状態にしちゃったんだろう？　殺した方が、まだましだったんじゃないのか？」

覚の非難に、野狐丸は、首を振った。

「いいえ。けっして、完全に頭脳を破壊することを意図したわけではないのです。前頭葉を切除するロボトミーという手術を行っただけですから。手術後、女王の攻撃性はなりをひそめ、打って変わって従順になりました。出産という女王にとっての仕事は、これまで通り行い、コロニーの拡大に積極的に貢献してきました。女王自身、病んだ精神の牢獄に繋がれていた時期と比べれば、ずっと幸せであった

と、私は信じております。……しかし、なにぶんにも、初めて行われた手術だったため、衛生面に若干の問題があったようでした。その後、脳炎を発症したため、あのように、精神活動は著しく低下してしまいました」

「ひどい……」

わたしは、つぶやいた。

「そう思われるのも、当然のことかもしれません。しかし、心外でもあります」

野狐丸は、訴えるような目で、わたしたちを見た。

「およそ知性を持った存在には、等しく権利が与えられるべきではないのでしょうか？　私は、それを神様の本から学びました。民主主義の大原則です」

わたしたちは、当惑して、目を見合わせた。まさか、ネズミの化け物からそんな言葉を聞こうとは思わなかった。

「でも、君たちのコロニーの女王は暴君だったかもしれないけど、ほかの女王はどうなんだ？　みんな、あんな家畜小屋に放り込む必要があったのか？」

「私どものコロニーの思想に賛同し、合流してきたコロニーは、すべて、多かれ少なかれ、同じような問題を抱えていました。コロニーの中で生殖能力を持つのは女王だけですから、女王なしにはコロニーは滅びてしまいます。しかし、だからといって、コロニーが女王の専有物だということにはならないはずです。女王には、出産という大切な仕事に専念してもらい、政治や軍事などの頭脳労働は、それぞれ、最も適性のある者が行うというのが、我が塩屋虻コロニーの基本方針なのです」

この当時、周辺のバケネズミのコロニーは、大雀蜂コロニーを頂点とするグループと、多数のコロニーを合併した塩屋虻コロニーという、二つの勢力に色分けされつつあった。大雀蜂コロニーは、単体でも三万を超える最大最強のコロニーであり、奇狼丸

将軍が実権を握りつつも、女王が支配者であるという伝統的な図式を守っていた。その傘下に入ったコロニーも、すべて、女王を絶対君主として戴く保守的な価値観を共有していたらしい。

一方で、塩屋虻コロニーは、血縁関係を無視したコロニー同士の合併という驚天動地の手法によって急速に勢力を拡張しており、旧勢力のコロニーからは異端視され、警戒され始めていたようだ。

「……そうか、わかった。まあ、君たちのことに口を挟む気はないから」

そう言うと、覚は、大きく伸びをした。

「ちょっと疲れたな。僕らは、夜明けまで休むことにするよ」

「かしこまりました。すぐに床を用意させます」

野狐丸の目は、かすかな緑色の燐光を放っていた。

わたしたちは、貴賓室だという小屋に戻った。野狐丸が去ると、覚は、囲炉裏の炭を赤熱させてから、両足を投げ出して座り、大きな溜め息をつく。

「気に入らないな。……どうも、気に入らない」

「どうしたの？」

「このコロニーも、スクィーラ……野狐丸も、何だか、胡散臭いんだよ。言ってることと腹の中は、全然違うっていう気がする。信用できない」

「でも、真理亜たちを見つけるには、野狐丸に協力してもらわないと、どうにもならないでしょう？」

「それはそうだけど」

覚の表情は、晴れなかった。

「あいつが、自分たちの女王にやったことを見ただろう？　自分を産んでくれた母親じゃないか？　どうして、あんなひどいことができるんだ」

「それは、わたしも、ショックだったわ」

わたしは、虚ろな女王の目を思い出して、身震いした。

「……でも、バケネズミは、いくらうまく言葉を話

したとしても、しょせんは獣なのよ。感情も、人間と似ているようでいて、肝心なところは違うはず。それに、野狐丸が言ってたことにも、一理はあると思うわ。彼らも、自分たちが生き延びるために、しかたなく、ああしたのよ」

「ずいぶん、あのバケネズミの肩を持つんだな」

「そうじゃないけど」

わたしは、床の上に座り直した。

「わたしたちって、動物に、勝手に人間の感情を投影するところがあるでしょう？　この生き物は温和な性格だとか、親は子のために命を投げ出すはずだとか。でも、現実とは、当たり前だけど、かなりギャップがあるわ。わたし、古代文明の動物行動学の本を読んだことがあるの」

母が図書館司書だったため、禁書扱いの本に触れる機会は、たぶん、ほかのどの子より多かっただろう。

「それで、ずいぶん、ショックを受けたわ。たとえば、カバ。和貴園で読んだ絵本には、カバは、仲間が死ぬと輪になって弔いをするって書いてあったでしょう？　でも、実際は、カバは雑食で、仲間の死骸のまわりに集まるのは、食べるためだったのよ」

「ああ。それは、知ってる」

「カンガルーなんか、ほんと最低だったわ。赤ちゃんは、お母さんの袋の中に入れられて大事に育てられてると思ってたのに」

「何だっけ？」

「捕食者から追い詰められると、カンガルーは、袋の中から赤ちゃんを引きずり出して、相手に投げつけるの。赤ちゃんが、むしゃむしゃ食べられてる間に、お母さんは、無事に逃げおおせるってわけ」

覚は、顔をしかめた。

「ちょっと、ミノシロみたいではあるけどな。でも、自分の身体をちぎって与える方が、まだましか」

「だから、バケネズミにも、人間の倫理を当てはめ

て考えるのは、間違いよ」

覚は、首の後ろで両手を組んだ。

「うーん。僕が感じてる嫌な感じっていうのは、それだけじゃないんだよ。何ていうか、あいつらって、むしろ、人間に似すぎてるって気がするんだ」

「たしかに、あんな動物って、ほかにはいないけど」

覚は、小屋の入り口までいざって行き、誰もいないことを確かめた。

「あいつら、ひょっとしたら、人間に取って代わろうとしてるんじゃないかって気がする。コンクリートの建物なんか、神栖66町にもないぞ。あの工場を見ると、人間がいったん捨てた物質文明を、自分のものにしようとしてるとしか思えないよ」

わたしは、しばらく頭の中でわだかまっていた疑問を、覚にぶつけてみた。

「それにしても、野狐丸は、どこからあんな知識を得てるのかしら？　本だって、言ってるけど」

「そんなに都合よく、知りたいことが書かれた本を発掘できるわけないだろう？」

「だったら、何から？」

「これは単なる想像だけど、野狐丸は、ミノシロモドキを一匹、捕獲したのかもしれない。ミノシロモドキの放つ七色の光は、人間を催眠術にかけることはできても、バケネズミに対しては無効なのかもしれないし」

覚と話しているうちに、わたしも、だんだん怖くなってきた。バケネズミという存在について、昔から抱いていた不吉な予感が、急に現実味を帯びてきたようだった。

「……まさか、バケネズミが、人間に反旗を翻すなんてことはないでしょう？」

「それは、ありえないだろう？　だって、たとえば僕ら二人でも、このコロニーくらいは、簡単に全滅させられるんだぜ」

たしかに、いくらバケネズミが物質文明を発展さ

せたとしても、呪力を持つ人間に対抗できるとは思えなかった。そもそも、高度に発達した文明を崩壊に導いたのは、呪力なのだから。だが、そう思っても、なお、不安は去らなかった。

「ねえ。野狐丸が、女王様にしたみたいな手術。もし、あれを人間にしたら、どうなると思う？」

覚は、眉を顰めた。

「やっぱり、同じように、廃人になるだろうな。……早季が考えてることは、わかるよ。手術がうまくいって、感染症にもかからなかったら、たしかに、バケネズミの言いなりになる人間が出来上がるかもしれないけど」

寒気がした。

「そんな……もしかしたら、たいへんなことになるんじゃない？」

「いや。だいじょうぶだって」

覚は、にやりと笑った。

「あいつが女王から切除したと言ってた前頭葉は、意思や創造性を司ってるんだ。つまり、呪力を司ってるのも前頭葉なんだよ。意思と創造性を奪われた人間には、絶対に、呪力は発動できない。だから、心配しなくてもいいよ」

わたしたちは、そこで話を打ち切り、翌朝に備えて短時間でも睡眠を取ることにした。わたしは、たっぷりと眠っているが、覚はそうでもないからだ。

バケネズミの敷いた床に横になって、うつらうつらしながら、悪夢のようなイメージが、次々に心をよぎった。覚と同様、わたし自身も、塩屋虻コロニーに来てから、ひどく嫌なものを感じていたのだ。

だが、その正体がわかる前に、意識は、ゆっくりと闇の奥へと沈んでいった。

6

目が覚めると、うっすらと明るくなっていた。

わたしたちのいた小屋は、木材の柱に編んだ竹で骨組みを作り、外側に獣の皮のような丈夫な布をかぶせてあった。その意味では、小屋というより遊牧民の包（パオ）かテントに近く、外が明るくなると、光が布をうっすらと透過してくるのだ。

覚は、わたしより一足早く目覚め、身支度を調えているところだった。

「おはよう」

わたしが声をかけると、覚は、素っ気なくうなずく。

「すぐに出られる？　あいつらは、もう準備ができてるみたいだ。何だか、暗いうちからごそごそやってたから」

たしかに、小屋の外からは、大勢のバケネズミが行き来して、忙しく働く音が聞こえてくる。

「わかった」

わたしも、大急ぎで飛び起きて、出発の準備にかかった。とはいっても、防寒着を着て、編み上げ靴の紐を締め、リュックの中身を点検するくらいなので、二分もかからない。

小屋を出ると、空は、昨日までとは一変して晴れ渡っていた。はるか太平洋の東から、朝日が昇ろうとしている。

視線を地上に戻したとき、一匹のバケネズミが、松の木の枝に干した物体を取り込んでいるのが見えた。白っぽい色をしており、干物のようだったが、長さが一メートル以上もあり、魚にしては大きすぎる。よく見ると、それは、乾燥したミノシロだった。

わたしたちは、思わず、目を見合わせた。

「信じられない。ミノシロを食べるなんて」

神栖66町では聖なる生き物として大切にされてい

るミノシロを、食糧にしていることに、わたしは、言い様のない不快感を覚えていた。

「……この時期、ミノシロは冬眠しているはずだもんな。わざわざ穴から掘り起こして、干して保存食にしてるのかな」

覚も、千振（センブリ）を舐めた猫のような表情になっていた。昨晩食べた正体不明の干物も、ミノシロだったかもしれないと気がついたが、あえて覚には言わないでおく。

そのとき、向こうから、野狐丸がやって来るのが見えた。

「おはようございます。神様。すぐにでも出発できますが、朝食をお召し上がりになりますか？」

またミノシロの干物が出てきそうで、食指が動かない。

「あなたたちは、どうするの？」

「急ぎのときは、歩きながら携行食を取ります。兵糧ですので、けっして美味しいものではありませんが」

「わたしたちも、それでいいわ」

「かしこまりました」

野狐丸は、寒がりのバケネズミらしく、フード付きの毛皮の上下を着込んだ上に、金属の鋲（びょう）を打った皮革の鎧を着けていた。二年前に会ったときには、まだ文官臭さが抜けていなかったが、今や、すっかり将軍の出で立ちである。首から提げている短い笛を吹くと、総勢二百匹ほどのバケネズミが現れて、隊列を組む。

「おいおい。こんなに大勢で行く必要があるのか？」

覚が、眉をひそめる。

「道中、危険があるかもしれませんし、私どもは、何があっても、神様をお守りせねばならない立場でございますから」

野狐丸は、恭しく答える。

わたしたちは、野狐丸と一緒に長い隊列のちょう

ど真ん中あたりに入った。先頭と同様、殿（しんがり）も危険だからということらしい。わたしたちの前後左右には、護衛として大きな盾を持った屈強な兵士が配される。

塩屋虻（シオヤアブ）コロニーの周囲は、すっかり除雪されており、ざくざくと霜柱を踏んで歩いた。雪原に入ると、わたしたちは、長板かんじきを履いて進んだ。兵士たちも、より素朴だが、スキーのような形の靴を履き、短い肢で懸命に滑っていた。とはいえ、呪力で進むのとは速度が違いすぎるため、覚は、少し苛立ったようだった。

「もっと速く進めないのか？　場所さえ教えてくれれば、僕らだけ先に行ってるけど」

「申し訳ありません。私どもは、神様のように軽快に進むことはできません。ですが、木蠹蛾（ボクトウガ）コロニーは、それほど遠くありませんので、どうかご辛抱ください。お二方だけで万一のことがあると、取り返しがつきませんし」

しかたなく、バケネズミの行軍のペースに合わせる。のろのろと雪原を滑っている間に、バケネズミの携行食というものを渡された。外観は小さな丸薬か団子のようなものである。口に入れて噛むと、ほんのりと甘い。米粉に、蜂蜜や梅干し、木の実などを加えて練り合わせたものらしかった。たしかに、美味には程遠かったが、少なくともミノシロは入っていないようだし、まずくて食べられないというほどのものでもない。

雪原を過ぎ、いくつも丘を越える間に、ふと、なぜ、このあたりの地形には、こんなにも丘が多いのだろうと考える。しかも、今は雪に埋もれてわからないが、丘ごとに、まったく土質が違うのだ。場所によっては、生えている植物まで異なっている。

奇怪な想像が、脳裏をよぎった。

それは、呪力を持った人間同士による、相手を皆殺しにしようとする戦いの図だった。はるか彼方から、巨大な岩石や、一つの丘が、ゆるやかな放物線

を描いて飛来してくる。着弾の際の衝撃はとてつもないものであり、その破壊力は、古代文明の核兵器など遥かに凌ぐだろう。今から六千五百万年前に恐竜が絶滅したのさえ、直径わずか十キロの隕石の衝突によるものだったと考えられているのだから。

そんな馬鹿な、と思う。常識で考えて、そんなことはありえない。たしかに、理論上、呪力がもたらす力には制限がないと言われている。しかし、現実に呪力を発動するときは、さまざまな制約が存在する。呪力によって影響を与えようとする対象は、一度、脳の中で完璧に再構成しなければならないため、その大きさや複雑さには、自ずから限界がある。地球が真っ二つになることをある程度リアルに想像したら、即、そうなるというわけではないのだ。

しかし……。わたしは、山脈のように重なる丘を見渡した。わたしたちのような初心者でも、地滑りを起こしたり、かなりの大きさの岩を飛ばしたりすることはできる。それが、鏑木肆星氏のような達人であれば、丘を動かすことも、不可能ではないのかもしれない。

「もうすぐです」

野狐丸が、わたしたちの方を向いて言った。

「そこの角を曲がると見えてきますが、木蠹蛾コロニーは、丘の中腹に難攻不落の要塞を築いているのです」

わたしたちの目の前に現れたのは、丘と言うより、巨大な一枚岩だった。高さは百五十メートルほど。差し渡しは三百メートルはあるだろうか。周囲は、ほぼ九十度の絶壁で、雪も積もっていない。手がかりになりそうな凹凸もほとんどなく、岩登りには、かなりの困難が予想される。

「中腹って……ほとんど、壁じゃないか？　どこに、そんな要塞なんかあるんだよ？」

覚が、目をすがめて、巨大な岩を見た。

「あそこです。ご覧になれますでしょうか？　岩が

張り出して松の木が生えておりますが、あの陰に洞窟が開いております」

野狐丸が指したところを見ても、穴は見えなかった。それどころか、動くもの一つなく、あたりは静まりかえっている。

「木蠹蛾コロニーは、長い年月をかけて、あの岩の中に縦横無尽に通路を掘って、いわば、岩全体を要塞に変えてしまったのです」

「でも、どこから入るの？」

わたしには、見当もつかなかった。

「岩から地中まで伸びた隧道（トンネル）もあると言われているのですが、出入り口は巧妙に隠されており、わかりません。ふだんは、岩の中腹にある穴から、地面まで縄ばしごを垂らして、出入りしております。今は見当たりませんが、我々の接近を知り、引き上げたのでしょう。彼らは、他のコロニーとは一切の交渉を絶っており、巣以外の何者かが接近すると、ひたすら息を殺してやり過ごすのが常なのです。……しかし、今回はそうはいかないことを、彼らに知らしめなくてはなりません」

野狐丸は、隊の後部にいた兵士を呼び寄せた。土蜘蛛のミュータントほどではないが、水仙の球根を思わせるくらい胸郭がよく発達しており、メガホンのような形の大きな筒を持っている。

兵士は、野狐丸の耳打ちを受け、木蠹蛾コロニーの要塞に向かって大声でメッセージを発した。近くで聞いていると鼓膜がおかしくなりそうだったので、わたしと覚は、両手で耳を覆う。野狐丸や、他のバケネズミの兵士たちが平然としているのが、何とも信じられない。

雪原にこだまし、処々で雪崩を起こしかねないほどの大音声で、繰り返し呼びかけても、木蠹蛾コロニーからは、何の返答もなかった。

「どうやら、こちらの本気を見せてやらねばならないようです」

野狐丸が号令をかけると、弓に矢をつけた射手

が、横一列に並んで進み出た。

「ちょっと待てよ。僕らは別に、戦いに来たわけじゃないんだぞ！」

覚が、抗議する。

「おっしゃるとおりです。ですが、ご覧の通り、相手は、こちらの呼びかけを完全に無視しております。惰眠を貪る傲慢な貝の蓋をこじ開けるには、多少の荒っぽい手段もやむを得ません」

野狐丸は、鋭い声で命令を下す。

たちまち、数十本の矢が岩の中腹にある松の木に向かって美しい軌跡を描いた。大半は、岩に当たって跳ね返されたが、うち何本かは木に突き刺さり、一本は、あろうことか岩に突き立った。

依然、反応はない。野狐丸の下知（げち）に従い、ずらりと並んだ射手は、今度は、先端に布を巻き付けた矢を弓につがえて、燧石で火を点けた。布には油を染み込ませてあるらしく、勢いよく燃え上がった。

今度は、数十本の火矢が、空間を切り裂く。

松の木に突き刺さった火矢は、しばらくの間燃え続け、木からも黒い煙が上がり始めた。すると、たまりかねたように、動きがあった。雪煙のようなものが見える。消火しようと、木の裏側から懸命に雪をかけているようだ。

「これで、彼らも、わかったかもしれません。もう一度、呼びかけてみましょう」

野狐丸は、軽く右手を挙げた。先ほどのメガホンを持った兵士が進み出て、再度、耳をつんざくような声で絶叫を始める。バケネズミの言葉なので、何を言っているのかわからないのだが、妙に高圧的、攻撃的な感じだった。本当に、これは、単なる呼びかけなのだろうか。

ようやく返ってきた答えは、こちらが射た数に十倍する矢だった。

松の木の周辺ばかりに目が行っていたが、岩肌には、いつでも一斉掃射が可能なように、無数の矢狭間（やはざま）が開けられていたらしい。

敵の矢は、上から下へ向けて放たれるだけに、軌道が直線的で、はるかに速かった。無防備に横一列に並んでいたこちらの射手や、メガホンを持った兵士は、なすすべもなく針山となって息絶える運命かと思われた。

次の瞬間、蜂の大群のように襲来した矢は、目に見えない楔（くさび）にぶつかったかのように、きれいに左右に分かれ、あらぬ方へと飛び去ってしまう。

雪崩に呑み込まれそうになったときと同様に、わたしと覚が、分担して矢の向きを変えたのである。とっさの共同作業としては、なかなかのものだったと思う。付き合いが長いだけに、わたしたちの間の意思疎通は、以心伝心の域に達しつつあるようだった。

続いて起きた沈黙が、木蠹蛾コロニーの困惑を物語っているようだった。一陣の強風によって矢が一方向に逸れることは、あるかもしれない。だが、目標を前にして矢が左右に分かれるというのは、自然現象では、絶対にありえないからだ。

「まことに、ありがとうございました！　神様には、我が兵士の命を救っていただき、衷心（ちゅうしん）より感謝に堪えません」

野狐丸が、深々と頭を下げる。

「それにしても、木蠹蛾コロニーは、神をも畏れぬ不逞の輩です。交渉に応じるように、もう一度だけ勧告を行いますが、その結果次第では、強硬手段が必要になってくるかもしれません」

わたしたちの答えを待たず、野狐丸は、再び、メガホンを持った兵士を前面に立たせた。あいかわらず内容は不明ながら、これまで以上に口調は威圧的で居丈高だった。単なる、休戦と交渉を呼びかけるだけのものとは、とうてい思えない。おそらく、最後通牒に等しい猛々しい言葉を使っていたに違いない。

木蠹蛾コロニーは、思わぬ事態で、対応に苦慮していたことだろう。だが、想像するに、激しい言葉

の挑発によって、一人の兵士の自制心が切れてしまったようだ。一本の矢が、唸りを上げて、メガホンを持った兵士に向かって飛んできたのだ。

今度は、わたしと覚の連携は、水際だったものとはいかなかった。一本の矢が、わたしたち二人の呪力によって同時に捉えられた。空間が歪（ひず）んだせいなのか、光が陽炎のようにねじ曲げられ、奇怪な虹のような模様が顕れる。これは、複数の人間の呪力が交差したときに起きる現象で、予想不可能な結果をもたらす可能性がある。わたしたちは、あわてて呪力を止めたが、二人の呪力の焦点にあった矢は、眩い光とともに空中で消滅した。

たかが一本の矢に対する防御としては、大げさすぎたが、木蠹蛾コロニーからすると、わたしたちが、激怒のあまり、そうした示威行為に及んだと映ったはずである。

「神様！　木蠹蛾は、こちらに神様がいらっしゃると知りながら、矢を射かけました。これは、断じて許すべからざる瀆神（とくしん）行為です！　どうか、神罰をお下しになられますよう、お願いいたします」

「……でも、矢は一本だけだったし、間違えて発射しちゃったんじゃない？」

わたしは、野狐丸の言いなりに木蠹蛾コロニーを攻撃するのは、気が進まなかった。

「たとえ一本でも充分です！　神に弓を引く行為は、本来、コロニーを消滅させられてもしかたがない重罪なのです。……それに、このままでは、埒があきません。木蠹蛾どもが、こちらの事情聴取に応じない限り、友神様の行方を捜す術はございませんので」

「わかった。しかたがない」

覚が、先に決断した。

「あんまり、ひどいことはしないで」

わたしは、覚に注文を付ける。よく考えれば、そもそもの始まりは、木蠹蛾コロニーのスクォンクが守を救助してくれたことだった。その返礼が、回復

困難な損害を与えることでは、あんまりではないか。

「わかってる」

覚は、岩の要塞に向き直ると、口の中で真言（マントラ）を唱えた。

洞窟の入り口を隠していた松の木が、薪が爆（は）ぜるような音を立てて根本から折れると、だらりと垂れ下がった。

木の後ろに隠れていた木蠹蛾コロニーの兵士たちは、驚愕して立ち竦（すく）む。

続いて、見えない巨大な拳で打たれたように、大音響とともに岩肌に亀裂が入り、欠片が飛び散った。一撃。……また一撃。矢狭間らしき部分が壊れ、大穴が開いてしまう。

「もういいわ！　やめて！」

わたしは、覚を止めた。

しばらく様子を見守っていると、向こうから、甲高い叫び声が聞こえてきた。同じバケネズミの鳴き声でも、どことなくだが、憐れみを乞うような調子だった。

これに対し、メガホンの兵士は、あくまでも強い調子で応酬する。すると、折れた松の木の後ろの洞窟から、数匹のバケネズミが姿を見せた。大半は、魚のような鱗付きの鎧に身を固めていたが、コロニーの高官とおぼしき中央の一匹は、マントを引きずっている。あとで知ったことだが、それが、木蠹蛾コロニーを牛耳る摂政で、クィーチーという名の個体だった。別のバケネズミが、地上まで届く長い縄ばしごを垂らす。

ふと横を見ると、野狐丸は、黙り込み、奇妙な表情を浮かべていた。まるで怒っているような顔つきながら、その目には、抑えようのない喜色が溢れていたのだ。

野狐丸とクィーチーの対面について逐一書き連ねても、意味がないだろう。野狐丸は、勝ち誇った征

服者としてクィーチーに対面した。会話の内容はわからないが、おそらくは、さまざまな要求を一方的に押しつけたに違いない。哀れなクィーチーは、どんな理不尽なことを言われても、呑むしかなかったはずだ。

業を煮やした覚が介入して、ようやく、真理亜と守の行方についての尋問が行われる。クィーチーの命令で、わたしたちの前に、スクォンクが連れてこられた。

スクォンクは、すっかり縮み上がっていたが、わたしたちの顔を見て、少しだけ生気を取り戻したようだった。

「スクォンク。わたしたちを、覚えてる？」

「キキキキ……。はい。神様」

「真理亜と守は、どこへ行ったんだ？」

覚の単刀直入な問いかけには、首をかしげる。

「わかイません。神様」

「わからない？　君は、真理亜たちと一緒だっただろう？」

「はい。でも、あちらの神様たちは、遠くへ行きました」

わたしは、目を閉じて、押し寄せてくる絶望に抗おうとした。

「遠くって、どこ？」

「わかイません」

「せめて、どっちの方角かくらいは、わかるでしょう？」

「わかイません。カ・ヴィーさま。でも、お手グァミー……預かイました」

スクォンクは、貫頭衣のような粗末な服の内側から封筒を取り出し、わたしに向かって捧げるようにする。わたしは、受け取った封筒をすぐに開封した。中には、スクォンクの言ったとおり、真理亜からわたしに宛てた手紙が入っていた。

愛する早季へ。

あなたが、この手紙を読むころには、わたしと守は、どこかずっと遠い場所にいるはずです。

親友であり、恋人でもあったあなたに、まさか、こんな形で、別れの手紙を書かなければならないとは、思ってもみませんでした。本当に、本当に、ごめんなさい。

そして、どうか、わたしたちを捜さないでください。

書いてて、なんだか、本当に妙な、切ない気分です。守の置き手紙で同じ文句を見たときには、わたしたちは、あんなに腹を立てていたのにね。でも、芸がありませんが、わたしも、同じことを書くしかないようです。

あなたが、わたしたちのことを心配してくれることは、とても嬉しいし、よくわかります。逆の立場だったら、わたしも、あなたのように心配することでしょう。ですが、こうするしかないのです。

わたしたちは、もはや、神栖66町で生きることはできません。町が、わたしたちが生きることを許さないのです。わたしだけなら、まだ、しばらく、だいじょうぶかもしれません。でも、守は、すでに、失格の烙印を押されてしまいました。一度、その烙印を押されると、もう、二度と、元には戻れないのです。こんなの、人間じゃなくて、不良品を選別するのと、同じやり方だと思わない？　焼き物の窯を開けたとき、いびつだったり、ヒビが入ってたりした陶器は、打ち壊される運命にあります。わたしたちは、このまま、打ち壊されるのを待つくらいなら、先に何が待っていようと、逃げ出した方がましだという結論に達しました。

本当なら、あなたと一緒に行きたかった。これは、わたしの偽らざる気持ちです。でも、早季は、わたしたちとは違う。前にも言いましたが、あなたは、とても強い人です。けっして、肉体的にという

意味じゃないし、気が強いとか、意志が強いとかいうんでもない。むしろ、涙もろいし、すぐにめげてしまう。わたしは、そんなあなたも好きでした。でも、あなたは、どんな困難に出会って、たとえ、心の底からうちひしがれたとしても、絶対に再起できる。ぽっきりと折れてしまって、そのままという人じゃないんです。

あなたなら、きっと、町で生きていけるし、町から必要とされるだろうと思います。

守は、そうじゃない。そして、わたしが守を見放せば、彼は、もう生きてはいけません。どうか、わかってください。

町を離れてみて、はっきりとわかったことがあります。

わたしたちの町は、異常です。

そうは、思いませんか？　町の安定と秩序を維持するために、子供たちを殺し続ける町が、人間の社会としてまともでしょうか？　ミノシロモドキの話では、今の状態にいたるまでに、血みどろな歴史があったということでした。でも、今の町は、過去のどんな暗黒時代と比べても、自慢できるような代物じゃないと思います。今、町で起きたことを思い出してみると、その異常性が、どこから来るのかも、だんだん見えてきました。

それは、大人たちが、心の底から、子供たちを怖れているという事実です。

もしかしたら、いつの時代も、そういうことはあったかもしれません。自分たちが創り上げたものを、あとの世代によって否定されるのは、不愉快なことに決まってますし、相手が血を分けた子供であれば、なおさら辛いこともあったでしょう。

でも、神栖66町の大人たちが、自分たちの子供に向ける視線は、そうした感情とも違う、ちょっと異様なものです。たとえて言えば、ずらりと並んだ卵が孵化するのを待ちながら、中から出てくるのが天

使なのか、それとも、百万に一つの割合で生まれてくる悪魔なのかを、額に脂汗を浮かべながら、じっと見守っているような。

　わたしたちは、何となく嫌な予感がするというだけの理由で、割られ、捨てられてしまう、何百何千もの卵の一個になることだけは、願い下げです。

　生まれ育った家を離れて、両親とも別れなければならないと決意したとき、本当に悲しく寂しい思いでいっぱいでした。でも、向こうは、本当はどういう気持ちだったのかを考えると、よくわからなくなってきます。もし、わたしが、町から処分されると決まったら、両親は、さんざん泣いて、そして、最後には、忘れることでしょう。あなたのご両親も、最終的には、あなたのお姉さんのことを諦めたように。

　わたしたちの間の絆は、きっと、そうじゃないと信じています。もし、わたしが処分されることになったら、あなたなら、絶対、わたしを見捨てないでしょう？　あなたに危難が迫ったときには、わたしや覚は、どんなことをしたって、救おうとするはずです。

　わたしたちには、もう一人、友がいました。今は、名前を思い出すことも許されない友が。彼、Ｘも、そんなときは、きっと、わたしたちを助けてくれたんじゃないでしょうか？

　だから、わたしは、今、守を助けなくてはなりません。

　でも、あなたや覚に会えなくなることが、何より辛いのです。

　わたしたちには、さいわい、呪力という万能の道具があり、自然の中に放り出されても、何とか生きていくことができるはずです。曲がりなりにも、呪力を使いこなせるようになったという点だけは、わたしは、町と全人学級に対して、深く感謝しています。

わたしと守は、これから、二人で助け合って、新しい生活を築いていきます。

そこで、あなたに、お願いがあります。もし、町から、わたしたちの消息を聞かれたなら、わたしたちは死んだと報告してほしいのです。わたしたちは、絶対に町の目が届かないくらい、ずっと遠くへ行くつもりですが、それでも、町がわたしたちのことを忘れてくれたら、今より多少は、安心して眠れるような気がするのです。

いつか、また、早季たちに会える日が来ることを、心の底から願っています。

愛を込めて。あなたの真理亜。

読み終えた瞬間、あとからあとから、涙が溢れ出してくる。

封筒の中には、もう一枚、守が描いたと思われる絵が入っていた。それは、真理亜とわたしが微笑んでいる姿を想像でスケッチしたものだった。

わたしから手紙を受け取った覚は、無言のまま目を通し、わたしの肩を抱いてくれた。わたしは、かろうじて嗚咽することだけはこらえたものの、どうしても涙を止めることはできなかった。二度と真理亜には会えないという予感は、なぜか確信へと変わっていた。

かまくらがなくなっていたのを見たとき、わたしたちが塩屋虻コロニーを目指すことにしたのは、唯一の手がかりであるスクォンクを発見するには、同じバケネズミの力を借りるのが早道だと思ったからだった。スクィーラ改め野狐丸のことは、けっして心から信じていたわけではないのだが、危急の際なので、利用できるものは何でも利用しようという気持ちだったのだ。

だが、結果的に、まんまと利用されたのは、わたしたちの方だった。狡猾きわまりないバケネズミに

とって、焦りで周りが見えなくなっている人間の子供たちを操ることなど、児戯に等しかっただろう。

名は体を表すと言うが、塩屋虻コロニーの名の元であるシオヤアブは、別名、塩屋虫引（シオヤムシヒキ）といい、他のアブやハチ、コガネムシなどを襲って体液を吸う、猛悪な捕食者として知られている。塩屋という名は、雄の尻に白い毛の房があることに由来するが、同様の特徴を持つ近縁のアブに、塩屋大鳥引（シオヤオオトリヒキ）がいる。こちらは、古代の生物図鑑に一切記述がないので、おそらく、ここ千年のうちに誕生した種類と考えられている。現在でも八丁標の周辺でしか見られない、非常に珍しい種類なのだが、シオヤムシヒキと比べるとはるかに巨大で、体長は十三～十八センチにも達する。トンボそっくりの細長い身体には、効率よく酸素を取り入れるために高度に発達した気門が並んでおり、それが無数の目のように見えるため、わたしたちが子供のころは、百目トンボという俗称で呼んでいた。

シオヤオオトリヒキは、ふだんは木の幹の裏などに潜んで、スズメやツグミ、メジロ、シジュウカラ、モズ、ムクドリなどの小鳥が通ると、背後から襲撃する。鋭い剣のような口吻を延髄に突き刺して殺し、風船のように膨らんで飛べなくなるまで吸血するのだが、カラスまで襲った例があるという。

塩屋虻コロニーの持つ、一種下克上的な、秩序の破壊者としての性格を象徴するのは、昆虫でありながら、ふつうは食物連鎖の上位にいる鳥を餌にする、シオヤオオトリヒキの方かもしれない。

何とか木蠹蛾コロニーまで辿り着いたものの、真理亜たちの行方についての手がかりは、ぷっつりと途絶えてしまった。

野狐丸は、全力で捜索をすると約束したが、どこまであてにできるかはわからないし、この急場には間に合わない。富子さんとの約束で、明日中には町に帰らなくてはならないことを考えると、真理亜た

ちを発見して連れ帰るのは、もはや絶望的だった。

覚とわたしは、話し合った結果、次善の策を講じることにした。

「かしこまりました！　どうか、この野狐丸におまかせください」

真理亜が、手紙で書いていたとおり、町へは、彼女たちが死んだと報告するしかない。口裏を合わせるよう頼むと、野狐丸は、二つ返事で承諾した。てっきり、倫理委員会への裏切り行為には難色を示すかと思ったのだが、気味が悪いほどの快諾ぶりだった。

「お二方とも、雪崩に巻き込まれて、谷底に転落したということにすれば、よろしいかと思います。どこまで流されたかわかりませんので、ご遺体の捜索は困難でしょう」

たしかに、もっともらしい話としては、それくらいしかないだろう。呪力を持つ人間が、二人そろって転落するというのは、不自然に思われるかもしれないが、橇が滑ったときに、守を助けようとして真理亜も落ちたというのは、あるいは、あり得る話だと受け取られるかもしれない。

「工作には多少の時間がかかりますが、うまくいけば、お骨も用意できるかもしれません。それを届ければ、たぶん、ご納得いただけるかと」

わたしたちは、ぎょっとした。

「どういうことだ？　骨って？　どこから持ってくるつもりなんだ？」

覚が、厳しい口調で追及すると、野狐丸は、失言に気づいたらしく、青くなった。

「……いえ、そんな、とんでもございません！　誤解です！　もちろん、神様のお骨を調達など、できようはずもないではありませんか？　こんなことを申し上げるのは、たいへん不敬と存じますが、私どもの骨でも、部位によっては、神様のものと見分けが付かないことがございます。とりわけ長身の者であれば、若神様とは、大きさもさほど変わりませ

ん。ですので、その骨を、念入りに石で擦りまして……」

「もう、いい！　わかった。あなたにまかせるわ」

わたしは、野狐丸を黙らせた。聞いていると、まるで本当に、真理亜たちの遺体が辱められているような気がしたのだ。

「かしこまりました。どうか、すべては、私、野狐丸めにおまかせください」

わたしの気持ちが通じたのか否かはわからないが、野狐丸は、恭しく一揖する。

川を遡り、二日がかりでここまでやって来たのも、結局のところ無駄足でしかなかった。しかし、溜め息をついてはいられない。わたしたちは、塩屋虻コロニーでもう一泊してはという、野狐丸の誘いを断り、もう一度、出発点に立ち返ることにした。あの、かまくらのあった場所である。スクォンクの供述によれば、真理亜たちと別れたのも、そこだったらしいからだ。

わたしたちは、長板かんじきを履いて、快速艇を置いてきた地点を目指した。

太陽の位置を見ると、時刻は、いつのまにか正午を過ぎていた。だが、まったく空腹は感じなかった。熱い思いに突き動かされていたから、ではない。背筋のあたりに、ずっと焦燥感が燻っているものの、気持ちは、周囲に広がる雪原同様に冷え切っていた。

真理亜たちが、どこへ行ったのか、見つける手だてはないだろう。かりに、手がかりが見つかり、どちらの方角へ行ったのかわかったとしても、空を飛べる彼女に追いつくのは、とうてい不可能だ。

わたしは、圧倒的にリードされて勝ち目のない試合で、終了の笛を聞くまでは負けを認めまいと決め、ひたすら全力を尽くそうと虚しい努力をしている選手のようなものだった。

いったい、何のために、誰のために、まだ希望があるかのように装っているのだろう。最後まで親友

を見捨てない自分という、美しい自己イメージを守るためだろうか。それとも、単に覚の手前なのか。

わたしは、少し前にいる覚を見た。一心不乱に滑っているが、その心中まで窺うことはできない。わたしと同様に、必死に絶望から目をそむけているのか、それとも、何か別のことを考えているのだろうか。

二人で併走しているという事実を認識したときに、わたしは、自分が本当に怖れていたものの正体に気がついた。

わたしの世界は、両親を除けば、全人学級しかない。そして、その中で、本当に仲間と言えるのは、一班のみんなだけなのだ。それなのに、その仲間たちは、次々と消えていき、残されたのは、わたしと覚の二人っきりである。

嫌だ。わたしは、狂おしいばかりに思った。もう、これ以上、友達を失うのは嫌だ。

これ以上、大切な人、愛する人を失うのは。

前を滑っている覚の姿が、別の少年のものと二重写しになる。

はっとなって、思わず手を伸ばそうとした。ほんの一瞬、記憶の墓場に封印されていた懐かしい姿が、まざまざと眼前によみがえったのだ。だが、しょせんは幻影でしかなく、儚く消え去ってしまう。

わたしは、否応なしに、冷酷な現実と向かい合っていた。この世界で、わたしたちは、たった二人っきりなのだ。

真理亜も、今、同じ孤独の中にいるのだろうか。いや、わたしどころではないはずだ。彼女は、文字通り、すべてを捨てて逃避行をしているのだから。

昨日とはうって変わったような晴天で、陽光が雪に反射して眩しいほどだった。だが、その明るい景色は、わたしには、昨日にもまして陰鬱なものにしか感じられない。

さいわいというべきなのか、覚の抜群の方向感覚のお陰で、快速艇はすぐに見つかった。わたしが長

板かんじきを脱いでいる間に、覚は、呪力で舟を持ち上げて川に浮かべる。

「僕が操船するから、早季は、少し休んでろよ」

舟に乗り込むと、覚が、わたしの顔を見て言う。

「どうして？　覚だって、疲れてるでしょう？」

わたしの言葉は、彼に対する思いやりではなく、ただの虚勢に過ぎなかった。

「いいから」

覚は、そう言って、わたしの背を押した。それ以上、意地を張る気力もなく、わたしは、ありがとうとつぶやいて、崩れ落ちるように、その場にうずくまった。

わたしは、まどろみの中へ落ちていく。まるで、舟底がぐずぐずに溶け去り、集まってきた河童たちの手で、ゆっくりと川底に引き込まれていくような感覚だった。

夢を見る。最初のうちは、精神が疲労したときに見る脈絡のない悪夢ばかりだったが、意識の抑圧が外れたことで、心の深層に潜んでいた奇怪な魑魅魍魎の類が、次から次へと浮かび上がってくる。

昆虫そっくりな長い触角を動かしながら、地べたを這いずり回っている盲目の鬼たち。蛾の羽から鱗粉を撒き散らして頭上を乱舞する、単眼の天狗の群れ。

鎖に繋がれた地獄の亡者たちが、ぞろぞろと行進していく。彼らの下腹部には、大きな牛袋が取り憑いて、精神まで支配しているため、逃れたくとも、丸く目を見開きながら、ひたすら牛のように鳴くことしかできない。

ピンクがかった半透明のミノシロは、エロチックに身をくねらせていた。触手はすべて、そそり立つ男根に変化し、根本にあるたくさんの女性器は、イソギンチャクのように口を開け閉めしている。

そのすぐ向こう側を、足音も立てずに通り過ぎるのは、死神の化身である、巨大な猫の影だ。醜い鼻面を上げ、しきりに空気を嗅いでいるバケ

ネズミの顔は、のっぺらぼうだった。その代わりなのか、全身の皺の間に無数の目を持っており、油断なく周囲を窺いながら、鋭い剣のような口先を出し入れしている。

しかし、何よりも恐ろしかったのは、小さな子供の姿をして、血飛沫で顔がだんだらに染まり、殺戮の恍惚に白目を剥いている悪鬼だった。

異形の怪物たちが、犇めき合い蠢いている。その一番奥に、彼がいた。

半ば闇に溶け込んだように、ひっそりと佇んでいる少年。足から胸元、首のあたりまでは見えるのだが、顔は暗い部分に入っていて、よくわからない。

顔のない少年。わたしは、彼に呼びかけようとしたが、もどかしいことに、どうしても名前が出てこない。

彼は、わたしを認めているようではあるが、無言だった。前は、姿は見えなかったが、声は聞くことができた。しかし、今は、一言も口をきこうとはしない。

それでも、顔のない少年から発散されるメッセージは、はっきり伝わってきた。それは、深刻な憂慮だった。

「どうすれば、真理亜を見つけられるの？」

顔のない少年は、かすかに首を振ったようだった。

「わからない。どうすればいいの？」

重ねて問いかけたが、返事はない。

「教えて。お願い。わたしは、いったい、何をすればいいの？」

顔のない少年は、口元に、人差し指を持っていった。

彼は、一言も発することはなかったし、影になっている唇を読むこともできなかったが、なぜか、何と言ったのかがわかった。

当惑して、わたしは、その場に立ちつくした。なぜ、そんなことを言うのかが、わからなかったから

だ。だが、それに続いて彼が伝えた言葉に、わたしは、雷に打たれたようなショックを受けた。

嘘。嘘よ。何言ってるの。そんな、ひどい……。

わたしは、抗議しようとしたが、まとまった言葉が出てこない。

「早季。早季！」

わたしを呼ぶ声がする。

意識が、急速に覚醒した。

「早季。悪い夢でも見てたのか？」

瞼を開けると、心配そうにわたしを覗き込む、覚の顔があった。

「……うん。ちょっと」

短い間に、ひどく汗をかいていた。わたしは、何とか笑顔を作ろうとしたが、たぶん、不自然に唇を歪めただけにしか見えなかっただろう。

「着いたよ。ここからは、また、長板かんじきで行くしかないけど」

覚は、思慮深げな表情を見せた。

「早季は、ここで待ってる？　僕一人でも、だいじょうぶだと思う」

わたしは、きっぱりと首を振った。

「わたしも、行く」

「……そうか。わかった」

わたしの顔を見て、それ以上説得しても無駄だと悟ったのだろう。覚は、あっさりと、提案を引っ込めた。

かまくらのあった場所までは、まだ、わたしたちが往復した跡がはっきりと残っていた。昨日、ちょうど同じころ、同じ場所から出発したことを思い出す。わたしたちは、丸一日かけて、出発点に舞い戻ってくることしかできなかった。

いや、それより悪い。昨日は、前途に困難が待ち受けていることを覚悟はしていたが、必ず真理亜を見つけ出せると信じて疑わなかった。だが、今や、すべての手がかりは絶たれてしまったのだ。

それでも、わたしたちは、万に一つの僥倖だけを

頼みに、再び長板かんじきを滑らせて、緩斜面を登っていった。

再度の探索は、何の成果も与えてくれなかった。

真理亜と守は、どうやら、埋まっていた橇を掘り出して、持っていったらしい。だが、半径数十メートルを虱潰しに調べても、橇の跡らしきものは発見できなかった。真理亜は、町から追っ手がかかることを予想して、ある程度の距離は、橇を浮かしたまま運んだか、あとから、雪の上に残った跡を丁寧に消し去ったのだろう。

西の山の向こうに日が落ちるのを見たとき、静かな絶望と諦めが、ひたひたとわたしの胸に満ちていく。

「早季」

覚が、背後から、わたしの肩を抱く。

「泣かないで。……僕らは、やれるだけのことは、やったんだから」

それで初めて、わたしは、自分が涙を流していることに気がついた。頬を伝って落ちる温かい感触にも気づかないなんて、本当に、どうかしている。

「それに、期限は、まだ明日いっぱいある。夜が明けたら、北西に向かって行ってみよう。もしかしたら、真理亜たちの残した跡が見つかるかもしれない」

それが、単なる気休めにすぎないことくらいは、わかっていた。セレンデップの幸運な王子様たちならいざ知らず、そんなやり方で捜索が成功するはずがない。

それでも、覚の言葉は、わたしには慰めになった。

わたしたちは、雪の野原で一夜を過ごす準備をした。簡易型のテントは、舟の中に置いてきたので、守を助けたスクォンクに倣って、かまくらを作ることにした。

周囲から大量の雪を掻き集め、ドーム形に盛り上

げる。雪を固く圧縮してから、内側を掘り抜くのだ。呪力の助けがあるのだから、スクォンクよりはずっと上手にできてしかるべきだったが、いざやってみると、意外に難しかった。雪を押し固めるには、どうやら、呪力よりスコップを使う方が向いているらしいとわかる。だが、難航した一番の理由は、わたしが、途中、幾度となく放心状態に陥っていたからだろう。

シェルターを確保してから、夕食を取った。食欲はなかったが、昼も抜いているので、無理やりにでも胃袋に詰め込んでおく必要があった。

覚が、石をきれいに刳（く）り抜いて鍋を作った。雪を入れて焚き火にかけ、味噌味の付いた乾飯を戻して雑炊を作る。

わたしたちは、黙々と、雑炊を口に運んだ。

覚が、わたしを気遣って、ときどき話しかけてくれたが、どうしても会話が続かない。わたしの気持ちを察してか、途中からは、覚が一人で話し続けた。

「……だから、その本に書かれていることに、どこまで信憑性があるのか、今度ミノシロモドキを捕まえたら、絶対に、確認してみたいんだ」

けっして、彼の言葉を、上の空で聞き流していたつもりはないが、耳に入ってきたのは、断片的な内容だけだった。

「……これほど大きなパワーを持つ呪力が、脳内でブドウ糖を代謝した、わずかばかりのエネルギーでまかなわれているはずがないのは、あきらかだろう？　だったら、その力はどこから来るのかということになるけど、著者は、二つの仮説を紹介してるんだ。一つは、太陽系の中で発動される呪力は、すべて、太陽に由来するという考え方なんだ。どういう経路で力が引き出されるのかは、僕にはよくわからなかったんだけど、この説によれば、太陽系から離れた場合は、呪力は使えなくなるか、少なくとも、発動の様態が一変するというんだ。面白いだろ

う？　もっとも、実際に検証するのは不可能だから、ただ単に好きなことを言ってるだけのような気もするけど」

「……だから、念動力、つまり呪力を使うたびに、エネルギーを奪われ、エントロピーの捨て場にもなる太陽は、それだけ早く老いていくってことになるんだよ。太陽の余命は、およそ五十億年らしいんだけど、僕らが頻繁に呪力を使えば、もっと早く終焉が来てしまうのかもしれない」

「……もう一つの説は、さらに理解しにくかったな。量子論では、観察すること自体が、対象に影響を及ぼし変化させるとされていて、それが、電子のような微視的な世界から、僕らの世界にまで敷衍されるっていうんだ。ほら、ミノシロモドキが言ってただろう？　最初に呪力の存在を実験で証明した、何とかっていう学者の説」

「……つまるところ、時間や空間、物質は、すべて、情報に還元される。呪力は、宇宙を形作っている情報を書き換える、究極の力だっていうことなんだ。これを、そのまま解釈すれば、呪力を究めれば、地球はおろか、宇宙の姿を変えてしまうことさえ可能だということになる。これは、壮大な円環をなすビジョンなんだよ。宇宙は元素を創造し、元素は化学物質を造り、有機物が生物を生んだ。生物は人類に進化することで複雑な脳を発展させ、ついには、脳の作り出した幻影が、宇宙そのものを変貌させていく……」

「……興味深かったのは、呪力が発現するまでの心的なメカニズムが、未開社会における呪術的な思考方法と、奇妙なくらい一致することなんだ。フレイザーっていう文化人類学者の分類では、呪術には、感染呪術と類感呪術の二種類があって、特に、後者の……」

「ねえ、覚」

わたしは、彼の言葉を、途中で遮った。

「うん。何？」

「わたしたち、真理亜や守のことも、忘れちゃうのかな？」

覚の表情が、強張った。

「たとえ死んだって、忘れないよ」

「でも、もし、教育委員会が、また、わたしたちの記憶を……」

「もう、二度と、そんなことはさせない」

覚は、きっぱりと言った。

「あいつらが、いつまでも、僕らの意識や、記憶まで管理できると思ってるなら、大きな間違いだ。もし、僕らの意思に反して強行しようとするなら、町を出るだけのことだよ」

「僕らって？」

「早季も、僕と一緒に来てくれるだろう？」

覚は、少しだけ心配そうな顔になる。わたしは、微笑した。

「全然、逆だからね。それ」

「逆？」

「わたしが、町を出るの。それに、覚がくっついてくるのよ」

覚は、しばらくの間、開いた口が塞がらないという顔をしていたが、やがて、諦めたような笑顔になる。

「わかったよ。それでいい」

「ねえ、もし、わたしたちも町を出ることになったら、今度こそ真理亜たちを捜し出して、合流しよう？」

「ああ。もちろん。二人より四人の方が、心強いもんな」

「そうよ！　そのときこそ、真理亜たちを捜し出して……」

わたしは、絶句した。まるで喉に何かが詰まっているように、声を出すことができない。口を開いたまま、身を震わせるうちに、どっと涙が溢れ出てきた。

ようやく声が出るようになって、わたしは、号泣

する。

　覚は、嗚咽するわたしのそばに来て、ずっと抱きしめていてくれた。

　その晩、かまくらの中で、わたしたちは結ばれた。

　生まれて初めて男性の侵入を受けたとき、予想外の痛みがあった。真理亜との間では、豊富な性体験はあったが、男女の間の性行為はまったく意味合いが違うことを、文字通り、痛感させられたのだ。

「だいじょうぶ？　痛い？」

　途中で動きを止めて、覚が、訊く。

「う……ん。ちょっとだけ、待って。すぐ慣れるから」

　わたしは、歯を食いしばって答えた。

　男と女は、どうしてこう不公平にできているのだろう。わたしは、心の中で文句を言う。女性は、四十週にも及ぶ妊娠期間中、ひたすら不便を堪え忍んだ上に、男性にはとうてい我慢できないほどの痛みに耐えて、出産しなければならない。それなのに、なぜ、性行為にまで苦痛が付きまとうのか。

「無理しなくてもいいんだよ」

「平気。……覚は、痛くないの？」

「全然」

　それから、ふと気がついた。覚は、わたしがひどく痛がってることは百も承知なのに、いっこうに興奮は収まっていない。わたしの苦痛に同情するどころか、まるで、そのことに快感を覚えているようではないか。なんて、ひどい奴だろう。

　だが、しばらくすると、痛みは徐々に和らいでいった。かつてないほど、潤っているのを感じる。一方的に征服される立場に、歓びを感じているのは、わたしの方だった。

　わたしが、思わず声を漏らすと、覚は、「気持ちいい？」と訊く。

「馬鹿」

訊かずもがなの質問である。わたしは、答えの代わりに、彼の背中を引っ掻いた。

これでもう、処女ではなくなってしまったのだから、次回の身体検査をどう乗り切るか、考えておかなければならない。つくづく、こちらにばかり、問題が降りかかってくるようになっている。

覚の動きが、激しくなってきた。快感の渦に呑み込まれそうになりながらも、ちょっと待ってと、わたしは慌てる。妊娠してしまっては、本当に、困ったことになるからだ。

だが、わたしが制止する前に、覚は、ぴたりと動きを止めた。

一瞬、避妊のことを考えてくれたのかと思ったが、そうではなかった。

覚は、泣きそうなくらい愛おしげな目で、わたしを見下ろしている。

わたしは、ほとんど直感で悟った。彼のこの表情は、わたしに向けられたものではない。なぜかはわからない。だが、覚がわたしの中に見ていたのは、彼が愛してやまなかった、一人の男の子の面影なのだ。

同時にそれは、わたしが、心の底から恋い焦がれていた少年のものでもあった。

覚は、再び、動きを加速した。

わたしもまた、さっきまでとは比較にならない速度で上り詰めていく。わたしを逞しく貫いているのも、もはや、覚ではなく、別の少年のイメージに変わっていた。

わたしたちは、お互いを媒介にし、すでにこの世にはいない男の子と愛を交わしていた。それは、とんでもなく異常な行為だったかもしれないし、お互いに対する裏切りと言えるかもしれない。でも、わたしたちは、二人とも、そのことを承知し、そして望んでいたと思う。

わたしが、絶頂を迎えた直後、覚は、転がるようにわたしから離れ、かまくらの雪壁に精を放った。

それからしばらくの間、わたしたちは、荒い息をつきながら、横たわっていた。

わたしは、快感の余韻に浸りながらも、頭の中では、顔のない少年が夢で言った言葉が、ぐるぐると回っていた。

彼は、なぜ、あんなメッセージを伝えてきたのだろうか。

彼は、わたしに、真理亜の逃走を手助けしてはいけないと言ったのだ。

そして、彼女は、死ななくてはならないとも。

V

劫火

1

　わたしは、大根や牛蒡、人参などの根菜類を水洗いして、食べやすい大きさに切った。まとめてボウルに入れると、飼育室の中に設えられたハダカデバネズミの巣箱へ持って行く。本来は、地中に掘った穴の中で暮らしている生き物だが、今は、複雑に組み合わせた太いガラス管の中を、活発に行き来していた。

　餌場の蓋を開けて、ボウルの中身を空けてやる。ばらばらと落ちた餌の音を聞きつけて、ハダカデバネズミたちが、ガラス管を通って集まってきた。地中生活に適応しているため、視力は弱いが、音と震動にはきわめて敏感なのだ。

　どの個体も、身体にほとんど毛がないため、皺だらけのハムかソーセージに短い手足が付いているように見える。働き鼠（ワーカー）たちには、生まれた順に『公一（こういち）』～『公三十一（こうさんじゅういち）』という名前が付けられており、容易に見分けがつくように、皮下まで浸透する塗料で、胴体に数字を書き込んであった。ちなみに、『公』というのは、役所で飼われているという意味に加えて、『ハム』というもじりでもある。

　ワーカーたちが餌を食べ始めたとき、一回り身体が大きなハダカデバネズミが現れた。ガラス管の途中で、一匹のワーカー、公八と鉢合わせしたが、いささかも頓着せずに突き進んでくる。公八は、必死に後ずさりするが、間に合わず、結局、大柄な個体に踏みつけられ、乗り越えられるのを我慢するしかなかった。

　大柄な個体は、この巣の女王である沙裸美（さらみ）だった。こちらは、ワーカーたちと比べると体色がより

赤黒く、暗褐色や白の斑が入っていて、サラミ・ソーセージを思わせるのが、名前の由来である。

沙裸美の後には、『♂1』～『♂3』のマークが付いた三匹の個体が付き従っていた。巣では数少ない生殖能力を持つ雄であり、餌集めや巣の防衛などの労働には一切従事せず、沙裸美と交尾して子孫を残すのが唯一の役割だったが、これも、元はといえば、沙裸美の産んだ息子たちなのだ。

沙裸美が餌場に現れると、ワーカーたちは、あわてて場所を譲った。女王の沙裸美と、その愛人である息子たちが、まず最初に餌を独占するのである。

外見、習性ともに、これくらいげんなりさせられることの多い生き物も珍しいだろう。それでも、飼育を担当するうち、多少の情は移るようになっていたが、しばしば、子孫であるバケネズミの最も厭らしい部分を見せつけられた気分になり、辟易したものだった。

そのたびに、疑問に思わざるを得ない。数百年前の人々は、いったい何を考えて、これほど醜悪な生き物に、わざわざ品種改良を施し、人間に近い智能を持った存在にまで引き上げてやったのだろうか。

もちろん、絶対的な権力を持つ女王に働き鼠（ワーカー）たちが従う、蜜蜂のごとき真社会性を持った哺乳類は、ほかにはいない。だが、単に、人類の下僕として仕えさせるためだけならば、もっとまともな動物は、いくらでもいたように思う。同じように穴居性で集団生活を送る哺乳類が良いというのなら、たとえば、ミーアキャットだったら、ずっと見映えも良くて、親しまれたのではないだろうか。

ともあれ、ハダカデバネズミの飼育は、否応なしに、わたしの担当となってしまったが、何も、これが本業というわけではない。わたしに与えられた本来の職務は、茅輪の郷にある町立保健所の異類管理課（いるいかんりか）という部署で、バケネズミの実態調査と管理を行うことだった。

二三七年の七月。わたしは、二十六歳になってい

た。六年前に、全人学級を卒業して、就職先に選んだのが町の保健所だった。呪力において優秀な成績を残した同級生たちは、栄えある抽籤会議において、各種の工房から指名を受けて、三顧の礼で迎えられていった。その一方で、わたしのように呪力は平凡だが、学業はそこそこ優秀だったという生徒は、町の管理部門に就職するのが、一般的ならわしだった。

正直に言うと、卒業と同時に、倫理委員会から声がかかり、将来の町の指導者候補として輝かしい第一歩を印すことを、一度も夢想しなかったわけではない。だが、富子さんは、なぜか、まったく知らん顔だったし、わたしの方も、最初から町の中枢に足を踏み入れる資格があると思うほど、自分自身を過大評価してはいなかった。

だが、それまでの様々ないきさつから、教育委員会及び学校関係には、ひそかな不信感（というより、嫌悪に近い感情）を抱いていたし、職場環境としてはほとんど申し分のない図書館も、早く母の庇護下から脱したいという思いがあって、ほとんど考慮しなかった。しかも、そのとき、父はまだ町長を務めていたため（異例ともいえる長い在任期間だった）、役場が直轄する部門も避けたいとなると、結局のところは、保健所くらいしか候補が残らなかったのだ。

とはいえ、誤解しないでもらいたいのだが、けっして、単なる消去法で就職先を選んだわけではない。

はっきりとした理由はわからないが、わたしは、バケネズミに関して不吉な予感を抱くようになっていた。バケネズミは、将来必ず、何らかの禍（わざわい）を引き起こす。それは、いつしか、強迫観念に近いものになっていた。さらに、大多数の人間は、バケネズミのことを、猿より多少ましな智能を持つが悪臭を放つ不気味な生き物としか見ていなかったことも、わたしがひそかに危機感をつのらせる一因となっ

た。

　そんなわけで、保健所に入所してすぐ異類管理課を志望したときには、周囲から呆れたような視線と失笑とが投げかけられたものである。どうやら、よほど暇な職場が好きだと思われたのだろう。

「早季ちゃーん。お客さんだよ」

　伝声管から聞こえてきたのは、妙に間延びした、綿引課長の声だった。

「はい。すぐ行きます」

　わたしは、餌の残り屑を手早く片付けて、手を洗うと、飼育室を出た。誰かが訪ねてくることなど、めったにない部署である。お客さんと言われても、見当もつかなかった。

　異類管理課の部屋の扉を開けると、綿引課長の人の良さそうな笑顔が、わたしを迎えた。四十年前に全人学級を卒業して以来、保健所勤務一筋だった人で、定年前の最後の役職が、課員がわたし一人だけという異類管理課の課長である。真面目で穏やかな人柄は、上司としては申し分ないのだが、ご本人が、異類管理課をただの閑職としか思っていないのは、いかがなものだろうか。

「早季ちゃんは、朝比奈君とは、同級生だったんだって?」

　綿引課長の視線の先にいたのは、覚だった。

「……ええ、そうです」

　わたしは、戸惑いながら、答えた。

「そうかー。まあ、ちょっと早いけど、二人でお昼休憩にでも行ってきたら?　今日は、そんなに仕事もないしね」

「いえ、そんな」

　わたしは、固辞しようとした。

「あの……綿引課長。今日伺ったのは、職務上のことですので」

　覚も、当惑したように言う。職務上とは、いったい何だろう。

「わかった、わかった。じゃあ、僕が、一足先に休

憩に行ってきてもいいかな？　ここで、二人で話せばいいよ」

綿引課長は、訳知り顔で、さっさと出て行ってしまう。上司に向かって、まだ休憩には早いですと言うわけにも行かず、わたしたちは、ぽつんと部屋に取り残された。

「何だか、参ったね。課長さん、勝手に気を回して」

覚が、気まずさを取り繕うように言う。何だったか思い出せないが、つまらないことで喧嘩して、わたしたちは、一月以上も口をきいていなかった。

「それで、今日は、何のご用ですか？」

わたしは、よそよそしく訊ねる。別に、冷戦状態が継続していることを宣言したかったわけではなく、純粋に、職務上の理由というのが気になったのだ。

「ああ……うん。バケネズミのことで、ちょっと訊きたいことがあったんだ」

覚は、爽やかなバリトンで答えた。子供の頃は、ころころした仔犬のような印象だった彼も、思春期以降、見違えるように成長し、見上げるような長身白皙の青年になっていた。わたしも、女性としては平均より高い方だったが、覚と話す際は、見上げることにすっかり慣れていた。

「今、戦争をしてるバケネズミのコロニーって、どこかあるのかな？」

覚の質問が、あまりにも意外だったので、わたしは、他人行儀に話そうと思っていたのを忘れてしまった。

「戦争？　……うん。どこもないはずだけど」

「それ、たしか？　どこか、弱小コロニーでも、小競り合いをしてるってことない？」

わたしは、机の引き出しから、数枚の書類を取り出した。覚を促して、応接用のテーブルに向かい合って座る。

「ほら、これ見て。バケネズミは、戦争をする前

に、これを提出することが義務づけられているの。怠った場合、最悪、コロニーが消滅させられることもあるから、出し忘れたり、ましてや故意に申請しないなんて、まず考えられないわ」

　覚は、わたしが手渡した用紙を、物珍しそうに見た。

「『異類A号書式①：コロニー間の戦争行為等許可申請書』……？　やつらって、相手に奇襲をかけようと思ってるときでも、前もって、こんなものを書かされるの？」

「別に、それで相手側に情報が漏れるわけじゃないもの」

「後は、『異類A号書式②：コロニー間統廃合届』と『異類B号書式①：幼獣等管理移転申請書』か。なるほどな。だから、どこのコロニーでも、日本語が堪能な奏上役が必要になるわけか」

　覚は、ようやく腑に落ちたというようにうなずいた。

「ええ。どの書式も、バケネズミの奏上役と、女王や摂政などの最高管理責任者の鼻紋を押すことになってるの。……ねえ、馬鹿馬鹿しいって思ってる？」

「え？」

「こんな仕事、くだらないと思うでしょう？　お役所仕事って、結局、形式ばかりなのよ。あなたがしてるような、本当の意味で町の発展に役立つ仕事じゃないもの」

「いや、そんなことはないよ」

　図星だったらしく、覚は、口ごもった。

　覚は、呪力、学業ともに、全人学級で上位三人に入っていたため、さまざまな工房から勧誘があった。その運命は、抽籤会議に委ねられるかと思われたのだが、公的機関に限って逆指名できるという制度を利用し、妙法農場に職を得たのだった。わたしの場合と同じく、彼の選択も、多くの人から意外なものと受け止められたが、生物工学では並ぶ者なし

と評されている建部優の研究室で、品種改良と遺伝子の研究にいそしんでいるのを見ると、まずは妥当な判断だったと言わざるを得ないだろう。

覚は、もともと光の操作に長けていたこともあって、この頃は、呪力を補助的に用いる新しい顕微鏡の製作に携わっていたはずだ。

「ただ……何というか、文言が特殊だよな。早季の課で扱ってるのは、要は、バケネズミ関係だろう？　だったら、漢字で『化鼠』と書けばいいのに、なんで、わざわざ『異類』なんて言い換えるのかな」

「だって、『化鼠管理課』じゃ、あんまりだもの」

そう言いながら、自分自身、以前から疑問に思っていたことを思い出した。『化鼠』は、まるで忌み言葉であるように、役所では一切使われない。どんな場合も、必ず『異類』と言い換えられるのだ。それは、会話のほんの端々に使うだけでも訂正を受けるくらいの、徹底ぶりだった。

「……それより、どういうこと？　バケネズミが戦争してないかなんて？」

わたしは、本題に戻る。

「うん。早季も知ってると思うけど、うちの研究室では、バケネズミによく試料の収集を依頼してるんだ。やつらは、森の中や沼の底からでも、必要なものを見つけてきてくれるからね」

「たしか、妙法農場では、鼈甲蜂コロニーとか、筬虫コロニーを、使ってるのよね」

「ああ。この間から、鼈甲蜂コロニーに、櫟林の郷の奥で粘菌の採集をやらせてたんだ。ところが、昨日の朝、待ち伏せされて攻撃を受けたらしい」

「攻撃？」

「相手がどこのコロニーなのかは不明だけど、いきなり、矢を掃射してきたらしいんだ。鼈甲蜂コロニーの方は、応戦準備はできてなかったんで、逃げるしかなかったんだけど、何匹かは死んだらしいんだよ」

「……狩りをしてて、間違えたんじゃない？」

「いや。鼈甲蜂コロニーの連中は、見通しのいい場所を歩いてたらしいから、見誤るわけがない。相手は、物陰に潜んで、狙い撃ちしてきたんだ。あきらかに故意だよ」

わたしは、考え込んだ。バケネズミは、根っから戦争好きの種族だが、現在、それほど緊張が高まっている場所はないし、実力行使に出そうなコロニーも思い当たらなかった。

「見通しのいいところを歩いてたっていうことは、相手は、鼈甲蜂コロニーであることも、認識してたのかしら？」

「そこまでは、わからないけど。どうして？」

覚は、憤っているように、鼻孔を膨らませていた。

「まず、襲われたのが、ただの弱小コロニーじゃなく、鼈甲蜂だったっていうところが、引っかかるのよ。かなりの戦闘力があるコロニーだし、それ以上に、大雀蜂直系だもの。大雀蜂コロニーに宣戦布告してるのと同じことになるわ」

「人間の逆鱗に触れるのも怖れず、最強コロニーにも平気で牙を剝くのか……。やっぱり、外来種じゃないのかな？」

わたしたちは、土蜘蛛のことを思い出していた。たしかに、無謀きわまりない行動は、地域のルールには無知な外来種のようではあるが。

「でも、ここしばらく、外来種は、現れてないわ。外来種の斥候（せっこう）が現れただけで、必ず、どこかのコロニーが気づくはずだし、すぐに、わたしたちのところに報告が上がってくるはずよ」

覚は、立ち上がって、窓際に行った。腕組みをしながら、外を見る。

「ここへ来れば、すぐにわかると思ったんだけどな。謎は、深まるばかりか」

「ねえ、それより、鼈甲蜂は、あなたのところに被害を訴えてきたの？」

わたしは、奇妙なことに気づいて、眉をしかめ

た。

「いや。うちの農場の人間が、たまたま、森の中で攻撃を受けた鼈甲蜂コロニーの連中に行き合ったんだ。攻撃を受けた連中が保護を求めてきたんで、すぐに付近を捜索したんだけど、そのときはもう、敵の姿は見えなかったらしい」

「ふーん」

どうも、納得できない。通常、他のコロニーから攻撃を受けたら、まずは、いの一番に、異類管理課にその事実を報告し、報復の許可を得ようとするはずだ。鼈甲蜂コロニーは、なぜ、今に至るまで音無しの構えなのだろうか。

「とにかく、こんな事態を放っておいたら大問題だろう？　試料収集にも差し支えるし、何より、人間が舐められるよ」

「そうね。わかった。大至急、調べてみるわ」

「攻撃したコロニーが特定できたら、どうする？」

「少なくとも、何らかの懲罰は必要になると思う。大雀蜂コロニーに代理処罰を命じるか、どこかの課が出張ってくるかもしれないわね」

保健所の中で、日頃、異類管理課と連携して仕事をすることが多いのは、環境衛生課と、有害鳥獣対策課だった。中でも、後者が本格出動したときには、対象となったコロニーは完全に消滅させられることになる。

「それにしても……」

覚は、笑いを堪えるような表情になった。

「何？」

「いや。何だか、早季が一人で仕切ってるから、まるで、異類管理課の課長さんみたいだなと思って」

わたしたちは、顔を見合わせて微笑した。わだかまりは、いつのまにか、すっかり解けていた。

このときのわたしの中には、どこかの馬鹿なコロニーが暴発的な行動を取ったお陰で、覚と仲直りするきっかけができたと、喜ぶ気持ちさえあったのだ。

町で、最もバケネズミに警戒心を持っていたわたしですら、これが、どんなに恐ろしい事件の幕開けなのか、想像だにしていなかった。

保健所の月例会議は、各課から毎月変わりばえのしない報告がだらだらと続くだけの、退屈きわまりない行事と決まっていた。だから、二三七年七月の会議に出席した保健所の職員たちは、全員、仰天したことだろう。

まず、保健所の責任者である金子弘所長の隣には、三人の町の重鎮が、オブザーバーとして鎮座ましましていた。職能会議代表の日野光風氏。安全保障会議顧問の鏑木肆星氏。それに、倫理委員会議長の朝比奈富子さんである。前二者は、それぞれ最高と最強の呪力を持つと評されている町の二枚看板であり、言葉の真の意味での実力者だった。富子さんについては、いまさら説明の必要はないだろう。

この三人が顔を揃えることなど、めったになく、ましてや、保健所の月例会議に興味を持つとは、常識では考えられない。もしや新種の疫病でも発生しつつあるのかと、多くの人間が思ったはずだ。

「今回は、優先議題がありますので、各課の定例報告は、すべて省略します」

金子所長の、いつもより緊張気味の第一声が、これだった。

「一週間前に、妙法農場の依頼で試料を採集していた鼈甲蜂コロニーのバケネズミ六匹が、正体不明の相手から攻撃を受けるという事件がありました。うち二匹は、毒矢を受けて、絶命しております」

会議室の中が、ざわついた。重大事件だからではない。たかが、バケネズミが殺されたくらいで、なぜ優先議題に取り上げるのかという、怪訝なざわめきだった。

「現時点で、異類……バケネズミの『戦争行為等許可申請書』で、承認が下りているか、あるいは提出中で未決裁のものはありません。したがって、これ

は、あきらかな違法行為であり、懲罰の対象となります。今、別室に、異類の代表二匹を出頭させておりますので、それぞれから証言を録取した上で、処罰の内容を決めるのが適当と考えますが、その前に、予備知識として、現在の異類界の勢力図について、異類管理課の方より説明をいたします。じゃあ、渡辺早季さん。お願いします」

「はい」

わたしは、少し固くなって立ち上がった。会議室中程の壁に掛かった白板の前に行き、振り返って一礼した。本来、こういう報告は綿引課長の職務だが、今では、バケネズミについて誰より詳しいのはわたしということで、白羽の矢が立ったのだった。

「関東近郊にある異類コロニーは、ここ十年ほどの流れから、二つのグループによって集約化が進み、現在は、ほぼ均衡状態に達しています」

わたしは、呪力に感応して線が引けるようになっている白板に、ごく簡単な表を書いた。呪力で書いても、手書き同様の金釘流にしかならないのが、残念なところである。

「第一のグループは、大雀蜂（オオスズメバチ）系です。大雀蜂コロニー本体の兵力は、約十万匹。傘下の有力コロニーは、足長蜂（アシナガバチ）、鼈甲蜂（ベッコウバチ）、黒山蟻（クロヤマアリ）、筬虫（オサムシ）、斑猫（ハンミョウ）、埋葬虫（シデムシ）、大蟷螂（オオカマキリ）、鬼蜻蜓（オニヤンマ）、大鍬形（オオクワガタ）、源五郎（ゲンゴロウ）、蟋蟀（コオロギ）、首切（クビキリ）螽蟖（ギス）、竈馬（カマドウマ）の十三で、これらを合算した総兵力は、五十万匹に達します。どれも、きわめて人間に忠実なコロニーですし、人間に不向きな仕事に関しては、貴重な労働力の担い手でもあります」

「私たちはオブザーバーですが、質問してもかまいませんか？」

手を挙げたのは、鏑木肆星氏だった。最近、少し額が後退してきたようだが、真っ黒なサングラスをかけた風貌は、あいかわらず迫力充分だった。

「どうぞ」

金子所長が、すばやく答える。

「バケネズミ……異類ですか……これらのコロニー

は、どういう繋がりによって結びついているんですか？　グループは、常に一枚岩と考えてもいいんでしょうか？」

「大雀蜂系の場合は、いわば、封建領主間の主従関係のようなものと思っていただければ、よいと思います。それぞれのコロニーは、絶対的な存在として女王を戴く独立国家のような存在で、大雀蜂コロニーを頂点とする盟約によって、一つのコロニーに対する攻撃は、グループ全体に対する攻撃と見なします。生殖能力のある雄を交換しているほか、女王が老いて代替わりする際には、グループの別のコロニーから新女王を迎え入れるなどして、血縁による結びつきを強めており、裏切りは、まず考えられません」

鏑木肆星氏は、うなずいた。

「もう一つのグループは、塩屋虻（シオヤアブ）系です。塩屋虻コロニーの兵力は、推定で五万五千匹。これに、盲虻（メクラアブ）、螟蛾（メイガ）、火取蛾（ヒトリガ）、夜盗蛾（ヨトウガ）、青頭蜈蚣（アオズムカデ）、女郎蜘蛛（ジョロウグモ）、宿蠅（ヤドリバエ）、浮塵子（ウンカ）の八コロニーが加わり、総兵力は二十五万匹〜三十万匹程度と思われます。こちらも、人間に対しては常に恭順の姿勢を見せており、かねてから、大雀蜂系が独占している人間の与える仕事の一部を分担したいと申し入れております。……先ほどのご質問に対する答えの続きですが、塩屋虻系ではコロニー間の融合が比較にならないほど進んでおり、それぞれのコロニーの名称は、もはや、城砦の名、あるいは軍事行動の単位となる師団名として残存しているにすぎません」

「どういうことですか？」と、鏑木肆星氏。

「まず、塩屋虻系のコロニーは、すべて、革命によって女王による支配を覆しております。各コロニーの意思決定は、選挙によって選ばれた代議員たちが行うのです。さらに、それぞれのコロニーの代表が集まって、グループ全体の意思決定を行います。女王の職務は、完全に、生殖だけに限定されているのです」

ざわめきが起きた。バケネズミの社会における、いわば地殻変動とでも言うべき動きについて、一般の人たちは、ほとんど知らないままなのだ。これらのコロニーにおいて、女王が家畜同然の扱いを受けていることには、あえて触れなかった。

「この二グループによる集約化が進んだ結果、いずれにも与しない独立系のコロニーは、ほとんど残っていません。有力なものでは、大陸から帰化した馬陸（ヤスデ）コロニーくらいでしょうか」

「なるほど。……すると、大雀蜂系の鼈甲蜂コロニーに攻撃を加えたのは、塩屋虻系コロニーか、その馬陸コロニーである可能性が高いということですか？」

鏑木肆星氏が、たたみかけるように訊ねる。わたしは、そこまで自分が答えていいものかどうか判断に迷って、金子所長の方を見た。

「……現場に残されていた遺留物を慎重に鑑定した結果、鼈甲蜂コロニーを襲撃したのは、木蠹蛾（ボクトウガ）コロニーの兵士であったことが判明いたしました」

「木蠹蛾コロニー？」

鏑木肆星氏は、不審げな声になる。

「そこの表には、そういう名前はありませんね。独立系コロニーとしても名前が挙がっていませんでしたが、どういうことでしょうか？」

再び、わたしが質問を引き取る。

「木蠹蛾コロニーは、十数年前から中立を宣言しており、自ら独立系のコロニーであると主張しております。そのため、一応、リストから除外してあるのですが、わたしたちは、現状では、きわめて塩屋虻系に近いと認識しております。そうした事情から、一応、別枠としました」

まさか、十二年前に両者を結びつけるきっかけを作ったのが、他ならぬわたしであるとは、口が裂けても言えなかったが。

「なるほど。そういう話ですか！」

日野光風氏が、でっぷりした頬に笑みを浮かべ、

周囲を見渡しながらキンキン声で言う。血色のいい禿頭が、照明に照り映えていた。

「つまり、この問題は、場合によっては、一コロニーの消滅では終わらんということだ。もし、塩屋虻系全体が関与していたとすれば、これは人間に対する反逆と言ってもいい。ここいら辺におるバケネズミの半数を、駆除することになるやもしれんな！」

「いや……そこまでは、まだ、何も決まっておりませんので」

金子所長が、あわてて否定しようとしたが、会議室は、日野光風氏の発言に動かされて、雰囲気が一変していた。最終的に、最大三十万匹にも及ぶバケネズミを抹殺しなければならないとなれば、とんでもない大事（おおごと）である。三人の超重量級のオブザーバーが、わざわざ出張ってきた理由もうなずける。

「それでは、待機させている異類の代表を、ここへ呼びたいと思います。大雀蜂コロニーの主席司令官である奇狼丸と、塩屋虻コロニーの代表、野狐丸の二匹です。いかがいたしましょうか？　最初は、奇狼丸の方から証言を採ろうかと思いますが」

金子所長に異議を唱えたのは、それまで黙って話を聞いていた、富子さんだった。

「私たちはオブザーバーですので、指図をするつもりはありませんけど、両方いっぺんに入れてみたらどうかと思うの。もし話が食い違うようなら、直接対決させた方が、白黒が付けやすいんじゃないかしら？」

「なるほど、おっしゃるとおりと思います。それでは、そのように」

金子所長は、深くうなずいた。それを受けて、綿引課長が、これぞ自分の仕事とばかりすばやく立ち上がって出て行き、会議室に、二匹のバケネズミを連れてきた。

白い寛衣（ローブ）に身を包んだ奇狼丸は、人間並みの長身を、やや前傾させて、ゆったりとした足取りで入ってきた。十二年前と比べると、さらに風格を加えて

いたが、反面、すでに老境に入っていることも窺われる。どうやら、バケネズミの老化は、先祖であるハダカデバネズミほどではないにせよ、人間よりは早いらしい。

奇狼丸の後には、こちらも白装束の野狐丸が続いた。体格はずっと小さいが、今が男盛りの年代らしく、以前よりずっと堂々として精気に満ちている。二匹は、会議室の下手に並び立ってからも、互いに距離を開け、視線すら合わせなかった。

「それでは、まず、大雀蜂コロニーの奇狼丸に訊く」

金子所長が、厳かな声で口火を切った。

「鼈甲蜂コロニーは、大雀蜂の傘下にあるコロニーだね？」

「さようでございます」

奇狼丸は、少し嗄れているが、しっかりした声で答えた。

「今から一週間前の朝、鼈甲蜂コロニーの兵士六匹が、何者かに襲撃されて、うち二匹が死ぬという事件が起きた。そのことは知ってるね？」

「はい」

「それをやった相手の目星は、付いているのか？」

「生き残った兵士から事情聴取した結果、直接手を下したのは、木蠹蛾コロニーの兵士であったことがわかりました」

「直接手を下した？　つまり、指令を下したものは、別にいたということか？」

「はい」

奇狼丸は、大きな目で、じろりと野狐丸を見やった。

「木蠹蛾コロニーは、塩屋虻と一体です。したがって、塩屋虻コロニーの命を受けたものと思われます」

野狐丸が、何か言いたそうに身じろぎしたが、会議室に居並ぶ人間たちを見ると、顔を伏せた。

「では、今度は、塩屋虻コロニーの野狐丸に訊こ

う。おまえは、木蠹蛾コロニーに命じて、鼈甲蜂コロニーの兵士を襲わせたのか？」

「とんでもございません！」

野狐丸は、両手を胸の前で組み合わせて、叫んだ。

「天地神明に誓いまして、私どもでは、そのような指令は出しておりません」

「しかし、木蠹蛾コロニーは、おまえのコロニーの傘下にある、というより、その一部ではないのか？」

「たしかに、私どもは、かねてより木蠹蛾コロニーに接近し、私どもとの合流を働きかけて参りました。しかし、いまだに、実現しておりません。その理由は、二つございます。一つは、木蠹蛾コロニーは、旧弊な思考に囚われた者が多いため、女王を戴く体制から、どうしても訣別できないという点でございます。もう一つ、木蠹蛾は長い間、大雀蜂系の各コロニーから、虎視眈々と狙われているという事情もございます。私どもと合流すれば、ただちに攻撃すると恫喝されていたため、どうにも身動きが取れなかったようなのです」

「奇狼丸。今の野狐丸の話は、真実なのか？」

「嘘を嘘で塗り固めた、詭弁、戯言です」

奇狼丸の口は、笑っているように、両耳まで広がった。

「まったくもって、笑止千万。どうか、この二枚舌の語る言葉に、惑わされませぬよう、お願いいたします。第一の点で言えば、木蠹蛾コロニーの女王は、すでに幽閉状態にあると聞き及びます。第二の点も然り。私どもが、木蠹蛾コロニーを脅したなどという事実は、一切ございません」

「野狐丸」

金子所長は、再び、矛先を転じた。

「いやはや、驚きました。木蠹蛾コロニーの女王が幽閉状態にある？　いったいどこから、そのような出鱈目を吹き込まれましたのやら。女王は、今もご

健在で、コロニーに君臨なさっております。政務に関しては、有能な摂政であるクィーチーにお任せになっているようではありますが」

「神の御前で、よくも、それだけ、しゃあしゃあと嘘が出てくるものだ。おまえの、その汚れた口を引き裂いてやろうか？」

　奇狼丸が、迫力のある声で威嚇する。

「奇狼丸。許されたとき以外は、発言してはならん」

　金子所長にたしなめられ、奇狼丸は、深々と頭を下げた。

「野狐丸といったかしら？　ちょっと、訊きたいのだけど」

　富子さんが、身を乗り出した。

「おまえは、木蠹蛾コロニーの女王が健在で、しかし、政務は摂政が代行していると言いましたね。それは、本当に確かな情報なの？」

「はは。間違いございません」

　野狐丸は、得意げに答えたが、富子さんが何者かは知っているのだろう、ほとんど平伏せんばかりだった。

「ふーん。でも、そこまで内情をよく知っているなら、少なくとも、おまえのコロニーの方が、奇狼丸のコロニーより木蠹蛾と密接な関係にあるのは、事実じゃないの？」

「は……あの……それは、その、先ほど申し上げましたとおり、関係を構築する努力は、ずっと続けて参りましたので……自然と、内部事情にも詳しく」

　語るに落ちたことに気づき、野狐丸は、脂汗を流し始めていた。

「た、ただ、親しいと言いましても、神の御意思に背いて鼈甲蜂コロニーを攻撃するよう命じるなど、沙汰の限り。そのようなことをすれば、ただちに神罰が下るのは明々白々ではございませんか？　どうして、私どもが、そのような自殺行為に走るでしょうか？」

「では、木蠹蛾コロニーが、単独でやったと言うの？　おまえの言い方だと、それもまた、おかしな話になると思うけど」

「はい。そのことにつきましては、私なりに考えていることがございます。ここで申し述べさせていただいても、よろしゅうございますでしょうか？」

絶体絶命の窮地から、野狐丸は、すばやく態勢を立て直す。

「いいわ。言ってみなさい」

「私どもが命じたにせよ、木蠹蛾の中の跳ね上がりがやったにせよ、神のお許しもなく、他のコロニーを攻撃するというのは、狂気に駆られたという以外、まったく説明が付きません。しかしです。これが、もし鼈甲蜂コロニーによる自作自演だったとすれば、いかがでございましょうか？」

奇狼丸は、かっと眦（まなじり）を裂き、緑色の炎が噴き出しそうな目で野狐丸を睨みつけるが、野狐丸の方はどこ吹く風だった。

「木蠹蛾コロニーの使っている矢や弓、甲冑などは、その気になれば、いくらでも入手が可能です。その上で、二手に分かれて一芝居打ち、被害者を装ったのではないでしょうか。私どもと大雀蜂のグループとは、勢力が拮抗しておりますので、真正面からぶつかれば、双方が多大の損害を蒙ることでしょう。口にするのも畏れ多いことですが、大雀蜂どもは、神様を謀（たばか）ることで、あわよくば、自分たちは無傷のまま、私どもを滅ぼそうとしたのではないかと……」

奇狼丸の固く握りしめた両手が、ぶるぶると震えているのが見えた。今にも、野狐丸に襲いかかって、喰い殺しそうな形相になっている。だが、燃えさかる怒りを、何とか鉄の自制心で抑え込んだようだった。

「しかし、鼈甲蜂コロニーでは、二匹が死亡しているではないか？」

金子所長が、口を挟む。

「おそらく、彼らにとって、数匹の犠牲など、ものの数ではないのでしょう。この点が、私どものコロニーとは根本的に違うところでございます。私どもは、民主主義を基本理念とするコロニーであり、一匹一匹が平等な権利を持つ、この宇宙にかけがえのない存在と考えておりますが、女王のみを絶対とする古い体制では、兵士など、しょせんは作戦の駒、消耗品でしかないのです！」

野狐丸というバケネズミは、間違いなく、口から先に生まれてきたのだろう。すべての攻撃を巧みに受け流すばかりか、ただちに相手に投げ返す手並みは見事と言うしかない。その場にいた誰もが、程度の差こそあれ不信感を抱いていたろうが、こうも堂々と論陣を張られると、なかなか綻びを見つけることができなかった。

「この者……野狐丸の言うことは、真実の可能性はあるのかしら？　あなたは、さきほど、犯行を行ったのは、木蠹蛾コロニーの兵士だったと断言したようだけど」

富子さんが、金子所長に向かって訊ねる。

「はい。……それは、常識では、ちょっと考えにくいことですが、絶対にないかと言われると、そうとも申し上げられません。さすがに、全部謀略であったという可能性までは、検討しておりませんでしたので」

金子所長は、しどろもどろになった。

結局、この日は、結論が出ないまま散会となった。破滅の足音は、すぐそばまで迫ってきていたが、先んじて危険の芽を摘む、貴重な、そして最後の機会は失われてしまった。

野山を埋め尽くす十万の軍勢は、まさに壮観の一言だった。昆虫のスズメバチを模した黄色と黒の甲冑は、ぎらぎらと陽光を反射し、向かうものを圧倒する。何千もの旗指物は、軍勢が一個の巨大生物と化したかのように、同じリズムで打ち振られ、虎の

咆哮のような鬨の声は、低周波で草木をびりびりと震わせる。

「一時間のうちに、敵を殲滅してご覧に入れます」

鎧兜に身を固めた奇狼丸は、うそぶいた。その自信も、この偉容を見ると、むべなるかなという気がする。

「きゃつらの戦略は、緒戦でほぼわかりました。まともに戦っては勝ち目が薄いと知って、数が少ないところでは、できるだけ軍勢を分散してゲリラ戦に持ち込み、数的な優位を築いたところでのみ決戦しようというのでしょう。だが、そんな浅墓な思惑で勝てるほど、戦は甘いものではない。ひとつ、教訓を骨身に刻んでやるとしましょう」

「ご武運を、お祈りします」

書類挟みを持って立っている自分が、何とも、場違いな気分がしてくる。

「ただし、わたしたちは、あくまでも中立の立場ですから、ここまで敵が攻め入ってきた場合は、すみやかに撤退します。もちろん、加勢はできませんので」

「承知しております」

奇狼丸は、狼のような口を開けて笑った。

「ですが、そのようなご心配は、無用です。ここまでは、敵の矢一本到達しませんから」

「わかりました。ええと、こちらは大雀蜂コロニーの本隊が十万。対する相手はというと、盲虻、螟蛾、火取蛾、夜盗蛾、女郎蜘蛛、浮塵子コロニーの連合軍で、推定十四万匹ですね。……あれ？　どうして、塩屋虻コロニーの本隊はいないんでしょう？」

わたしは、報告書の書式を埋めながら、訊ねた。

「それは、あの口の達者な臆病者にお訊きになった方が、よろしいかと思います。まあ、察するに、数が多くとも、我が手勢といきなり相まみえる勇気がないのでしょう。もしかしたら、盲虻以下は捨て駒にして、少しでも、我が方を消耗させておきたいと

いうのかもしれません。民主主義だの何だのと、たいそうな御託を並べてみても、兵士を平然と死地に追いやるのは、塩屋虻の常套手段ですからな」

奇狼丸は、吐き捨てるように言った。

「なるほど。それでは、存分に戦ってください」

「心得ました」

奇狼丸は、大きく軍配を返す。大雀蜂コロニーの軍勢が、ゆっくりと進軍を開始した。敵の連合軍も、それに呼応するように姿を現し、大軍勢を誇示する。数では、あきらかに向こうが上回っているようだ。

「渡辺さん。もう少し、下がった方がいいですよ」

わたしを守るために同行してくれた、鳥獣保護官の乾さんが、注意した。

「そのあたりだと、流れ弾が飛んでくる可能性もある」

「流れ弾って、何ですか？」

「最近のバケネズミの戦では、弓矢だけじゃなく、火縄銃も使用されるんです。速すぎて目視できないものは、呪力でも止めきれませんから」

わたしは、あわてて安全地帯まで引っ込んだ。それを待っていたかのように、戦場では、激しい雄叫びが上がる。ついに、両軍が戦端を開いたのだ。

矢が飛び交い、続いて、乾いた発射音が連続して轟き、硝煙が上がった。

わたしたちがいた丘の上からは、戦場を一望に見渡せた。ほぼ横一列の陣形になって、弓や火縄銃を構えている敵の連合軍に対し、大雀蜂軍は、个の形をした鋒矢の陣で襲いかかる。敵方はおそらく、一斉射撃によって大雀蜂軍の足を止めてから、一気に逆襲するという目論見だっただろうが、計算違いにあわてふためく羽目になった。大雀蜂の兵士たちは、銃弾が雨霰と飛んできても、まったく足を止めなかったからだ。

よく見ると、先頭の兵士たちは、数匹がかりで奇妙な形の盾を持って前進している。

「あれは、弾除けですね」

乾さんが、教えてくれた。わたしより小柄で痩せぎすの中年男性だが、何日も不眠不休で野山を歩き回れる体力と、鳥獣保護官としての豊富な経験は、保健所の中で最も頼りになった。

「火縄銃の弾は、たいていの鎧なら貫通する威力がありますが、あの盾を見てください。中央が出っ張って、角度が付けてあるでしょう？　あれで、弾丸をうまく左右に弾いて、逸らすことができるんです」

乾さんは、続いて、弾除けの構造についても解説してくれた。三列の青竹をへの字形に並べて作った盾だが、竹の表面には強靭な麻布を何重にも巻いて膠で固め、上から分厚く鑞を塗り、さらに、要所に鉄パイプを配置したことによって、防弾性能が格段に上がったらしい。

「古代文明の戦国時代に考案された『竹束』というのは、文字通りただの竹の束ですが、そこに、麻布や鑞、鉄パイプを加えることで強度を高め、弾除けに適した盾の形に仕上げたのは、バケネズミどもの創意のようですな」

「信じられない。……頭がいいとは思ってましたけど」

「やつらが、戦国時代の装備のことまで知っていたかどうかわかりませんが、さすがに、すべてを自力で考え出したとは考えにくいですね。どこからか、何らかの知識を得てるとしか、思えないんですよ」

わたしの頭には、すぐにミノシロモドキのことが浮かんだ。十二年前、塩屋虻コロニーに行ったとき、覚は、彼らがミノシロモドキを捕獲したのではないかと疑っていた。当然、大雀蜂コロニーでも、同じことをした可能性はあるだろう。だが、ミノシロモドキの存在自体がタブーなので、そのことを乾さんに話すのは躊躇せざるを得なかった。

その間に、戦況は、はっきり大雀蜂軍優位に推移し始めた。満を持していた大雀蜂側の射手が、いっ

せいに火縄銃を撃ち始めたのだ。それも、射撃と射撃の間隔が、あきらかに短いため、一丁の銃が、ゆうに三丁分くらいの働きをしている。

「あれも、そうです。火縄銃は、一度撃ってからが面倒なんです。中を掃除し、火薬を入れ、弾を入れ、棒で薬室に押し込んで、やっと次の射撃準備に入れる。やつらは、それをほとんど省略してしまった。太古に、日本で初めて早合（はやごう）という原始的なカートリッジが考案されてますが、それも、簡略化されただけで、ほとんど同じ手順が必要になります。ところが、やつらのやり方は抜本的に改良されている」

　見ていると、射手は、発射してすぐ、新しい薬包を銃口から入れ、一度棒で衝くだけで、すぐに次の射撃を行っている。

「詳しい構造はわかりませんが、火薬と弾を油紙に包んだものを入れ、ほとんどそのまま次弾を発射できるんです。……たまに、やつらの知恵が怖くなることがありますよ」

　火力で完全に上回っている大雀蜂軍は、遠間からの戦いを選ぶこともできたはずだが、そのまま敵陣になだれ込んで、激しい白兵戦（はくへいせん）を展開した。

「乾さんは、バケネズミについて、何でもご存じなんですね。わたしも、ずいぶん、勉強したつもりだったんですが」

「いやいや……。全般的な知識は、やっぱり、渡辺さんには敵いませんよ。ただ、私は、仕事柄、コロニーの内部まで見学する機会がずいぶんありましたんでね」

　乾さんは、日に焼けた頰をほころばせた。

「やつらが、私たち鳥獣保護官を陰で何と言っとるか、ご存じですか？　普通の人間は、神様なのに、私たちは、死神ですよ。まあ、それも、しょうがないですがね」

　鳥獣保護官とは、名称と実態が裏腹な職務の代表だろう。多くは有害鳥獣対策課に属し、人間に反抗

姿勢を見せたバケネズミを駆除するのが、その主な職務だからだ。

「……とにかく、いろんなコロニーを見てきましたが、やっぱり大雀蜂の部隊は最強だと思いますよ。特に、こんなふうに、肉弾相打つ戦いになると、他のコロニーの兵士では、敵うはずがない」

「なぜ、彼らは、そんなに強いんですか？」

乾さんは、にやりとする。

「秘密がバレると困ると言われたんで、これは上にも報告していないんですが、渡辺さんにだけはお教えしておきましょう。大雀蜂コロニーの兵士たちは、合戦の前には、全員、ある種の薬物を与えられてるんです」

「薬物？　麻薬のようなものですか？」

「ええ。コロニーで栽培している大麻に、女王の尿から抽出された抗精神物質を混ぜてるようです。その配合が秘伝らしいんですが、投与されると、頭脳は明晰になり、使命感が高まる反面、攻撃性は極限まで昂進し、いっさいの恐怖を感じなくなる。その結果として、無敵の兵士が出来上がるというわけですな」

背筋に、ぞっと寒気が走った。戦場を走り回っている大雀蜂軍の兵士たちは、たしかに、一瞬の気後れもなく敵に襲いかかっていた。その姿は、十二年前の記憶とオーバーラップした。三倍も大きな土蜘蛛のミュータント兵たちに平気で食らいついていく、勇猛果敢というには少々度が過ぎた狂戦士たちの姿に。

戦いは、一時間あまりで終結した。数で上回っていたはずの敵の連合軍は、粉砕され、半数は散り散りに敗走し、残りは野原に無惨な屍をさらしていた。

「私としたことが、お約束を違えてしまい、恥じ入るばかりです」

自ら前線に赴いて指揮を執っていた、奇狼丸が現れた。

「まったく信じ難いことですが、これしきの敵を捻り潰すのに、一時間以上もかかってしまいました」
奇狼丸は、大きな口を開けて満面の笑みを浮かべたが、その目は、狼のように不気味な緑色の燐光を放っていた。

保健所に帰って、合戦の顛末を記した報告書をしたためていると、あたふたした様子で、綿引課長が戻ってきた。

「お疲れ様です」

「あ、早季ちゃん。どうだった？」

「……大雀蜂軍の圧勝でした。塩屋虻コロニー側は、回復困難なくらいの大打撃を受けたと思います」

「そうか。まあ、奇狼丸が指揮する本隊なら、当然かな」

野原を埋め尽くす死骸の山のことを思い出すと、胸が痛くなってくる。齧歯類とはいえ、高度な知性を持った生き物の大量虐殺に立ち会ってきたのだ。

だが、感傷に浸ってはいられない。あのまま、死骸が腐敗するにまかせると、感染症の発生も懸念される。ここからは、本来なら環境衛生課の仕事だが、バケネズミたちを一時休戦させてでも、死骸を埋めさせるか、すべて呪力で炭化処理を施す必要があるかもしれない。

「課長の方は、いかがだったんですか？」

「うん。ちょっと、予想外の結果でね」

綿引課長の表情は、冴えなかった。

「というと、木蠹蛾の方が勝ったんですか？」

「うーん。と言っていいのかな。……寝返ったんだよ。鼈甲蜂コロニーが」

「ええ？」

わたしは、絶句した。とても信じられない。バケネズミのコロニーの間に働く力学は、完全に理解していたつもりだった。この状況下で、鼈甲蜂コロニーが奇狼丸を裏切って、野狐丸の方に付くというの

は、天地がひっくり返ってもありえないはずだった。

　そもそも、この戦自体が、鼈甲蜂コロニーの兵士が、木蠹蛾コロニーから攻撃を受けたために始まったものではないか。その当事者が、加勢に駆けつけてくれた味方を裏切り、敵の陣営に入るというのは……。

　そこで、唐突に思い出した。鼈甲蜂コロニーは、攻撃を受けた直後、偶然通りかかった妙法農場の職員に被害を訴えたものの、異類管理課には、とうとう被害届を出さずじまいだった。

　いったい、なぜだろう。バケネズミは本来、きわめて復讐心の強い生き物で、争いを避けるために泣き寝入りすることは、まず考えられない。それも、相手が圧倒的に強力で、勝ち目がないと思えば、コロニーを存続させるために涙を呑むこともあるかもしれないが、現状では、大雀蜂グループをバックにした鼈甲蜂の方が、むしろ優勢と見られていたのに。

「……じゃあ、実際の戦闘は、どうなったんですか?」

「うん。いきなり、鼈甲蜂軍が戦線を離脱して、木蠹蛾軍の方に合流してしまったんで、鼈甲蜂軍の応援に来ていた筬虫と斑猫、黒山蟻の各軍は、茫然自失といった有様だった。そのせいで、ほとんど何の攻防もなく、木蠹蛾軍の勝利が決まったんだよ」

「驚きました」

「複雑怪奇だよな」

「だとすると、これで一勝一敗ですから、戦争の帰趨は、振り出しに戻ったと見ていいんでしょうか?」

「それは、どうかな? こちらは、今も言ったように、ほとんど戦闘をしていないんだ。もちろん、鼈甲蜂軍が、そっくり敵方に移籍したわけだから、その差し引きは大きいが、やはり、実戦で大勝している大雀蜂グループの優位は動かないんじゃないか

な」

　綿引課長の希望的観測は（というのも、人間に忠実だとわかっている大雀蜂グループが勝利した方が、戦後処理がはるかに簡単になるからだが）、わずか四日後に、粉々に打ち砕かれることになった。

　その一報をもたらしたのは、意外にも、覚だった。

「早季！　聞いてるか？」

　いきなり、血相を変えて飛び込んできた覚に、わたしは、面食らった。

「聞いてるって、何を？」

「戦争だよ！　大雀蜂と塩屋虻の、本隊同士が決戦しただろう？」

「それは、まだ聞いてないわ。事前に届けを出すって言っても、個々の戦闘は、偶発的に接触して起こることもあるし……あらかじめ日時がわかってる合戦の場合には、なるたけ立ち会って、報告書を出すことになってるけど」

「じゃあ、結果は、まだ知らないのか？」

「うん……覚は、知ってるの？」

「たまたま、戦場の近くを通ったんだ。どうしても必要な試料があったんだけど、収集にバケネズミを使えなくなったんで、自分で探しに行ったんだ」

「危ないわ。戦争地帯は、立ち入りを禁止されてるはずよ」

　わたしは、眉をひそめた。

「うん。でも、急ぎの実験だったんでね。……それで、僕が見たのは、戦闘が終わって、たぶん丸一日はたってたと思うんだけど、重傷を負って生き残った兵士が隠れてたんで、応急手当をしてやって、何があったのか訊いたんだ」

　厳密に言えば、傷の手当もバケネズミの戦争への干渉になるので、禁じられている。だが、それより、早く結果を聞きたかった。

「それで、どうだったの？　大雀蜂の方が、勝ったんでしょう？」

覚は、首を振った。

「いや。その逆だよ。大雀蜂軍は、全滅したらしいんだ」

「そんな……まさか」

わたしは、息を呑んだ。

「兵士の日本語が拙かったんで、何が起きたのかはよくわからなかったけど、ほぼ全軍が壊滅状態……皆殺しにされたらしい。奇狼丸だけは、からくも逃亡したらしいんだけど、今は行方不明だ」

2

安全保障会議は、冒頭から、重苦しい雰囲気に包まれていた。

「今の朝比奈覚君の証言に関して、どなたか、質問のある方はおられますか？」

議長の鏑木肆星氏が、低い声で言う。しばらく、沈黙が続いた。

今回は、町の主だった幹部は、全員顔を揃えていた。倫理委員会議長の朝比奈富子さん。教育委員会議長の鳥飼宏美さん。職能会議代表の日野光風氏。図書館司書の母、渡辺瑞穂。町長である父、杉浦敬。それに、金子弘所長以下の保健所のスタッフたち。すでに百歳を越えている無瞋上人の顔はなかったが、清浄寺を代表して二人の僧侶も出席している。

口火を切ったのは、父だった。

「朝比奈君。大雀蜂コロニーの兵士がどうやって殺されたのか、君の意見を聞かせてもらいたいんですが」

　覚は、唇を舐めた。

「それが、見当がつかないというのが、正直なところです。戦場には、大雀蜂コロニーの兵士の死体だけが転がっており、一方的な殺戮が行われたという印象でした」

「絶命した兵士の死因は、主に、何だったと思いますか？」

「それも、何とも言えません。多くの死骸には矢が突き刺さっていましたが、おそらくは死後に行われたと思われる損壊行為が甚だしく、大半は、ほとんど原形をとどめていませんでしたので」

「損壊行為というと、具体的には？」

「ばらばらに切り刻まれたり、射撃の的にされたらしく、穴だらけになったものが、多数見られました」

「君が事情を聴取した、大雀蜂の兵士は、何と言ってたんですか？」

「ほとんど、片言しか喋れなかったので、だいたい、こんな具合でした。オオスズメバチ、コロサレタ。ミナゴロシ。キロウマルダケ、ニゲタ……。何があったのか訊ねたんですが、恐怖で過呼吸を起こし、バケネズミ語で絶叫するばかりで」

「通訳させることはできませんか？」

「いいえ。しばらくは息があったんですが、傷が重く、結局は、死亡しました」

　再び、沈黙が訪れた。

「議長」

　富子さんが、目を上げて訊ねる。

「実地検分の結果は、どうだったのかしら？」

　全員の視線が、鏑木肆星氏に集まる。

「はい。朝比奈君の話を聞いて、昨日、現場へ行って参りましたが、残念ながら、すでに、証拠の隠滅が行われた後でした」

「証拠の隠滅？　どういうこと？」

「現場一帯に油性の液体が撒かれ、燃やされていたのです。燃えるものは、すべて完全に炭化した状態になっていました」

　どよめきが起きた。

「わざわざそんなことをしたということは、何か後ろ暗いことがあるからかしら……？」

　鳥飼宏美さんが、小さな声でつぶやいた。

「うふふふふふ」

　日野光風氏が、意味不明の、耳障りな笑い声を漏らす。

「それでは、何があったのかは、見当もつかないの？」

「私なりの意見はありますが、確証があるわけではありませんので、最後に申し上げたいと思います」

　鏑木肆星氏は、いつになく慎重な物言いをした。

「死骸を燃やしたというのは、とても衛生上の配慮からとは思えません。まちがいなく、虐殺の手段を隠したかったんじゃないかと思います」

　今度は、母が発言した。

「虐殺の手段というと、何か思い当たることがあるのかしら？」

　富子さんは、娘に対するような慈愛の籠もった視線を、母に向けた。

「それは……わかりません。ただ、バケネズミの最近の急速な進歩と軍備拡張は、彼らが何らかの情報源を得ている可能性を示しています」

「それは、ミノシロモドキのこと？」

「はい。旧国会図書館の移動式端末は、まだ、数機が生き残っている可能性があります。バケネズミたちは、それらを捕獲して、知識を得ているのかもしれません」

「だとすると、これまでの図書館政策にも、問題があったということになりませんか？　ミノシロモドキの存在を徒（いたずら）にタブー視し、近寄らせないようにするだけで、後顧の憂いを断つべく一掃する努力を

怠ってきたのでは？」

　鏑木肆星氏は、辛辣な口調で言った。母に対する厳しい指摘は、聞いているだけでも、身が竦むような思いがする。

「ミノシロモドキを絶滅させることは、人類の知的遺産を完全に抹消してしまうことにもつながりかねません。それに、これは、倫理委員会の承認を経て決定されたことです」

　母は、毅然と真っ向から反論する。富子さんも、擁護に回ってくれた。

「そのことは、たしかに、倫理委員会でも審議済みです。結論は、偶然捕獲されたものは、原則として破壊するが、あえて絶滅させることはしないということです。それに、ここは、図書館政策の是非を論じ合う場でもありません。……瑞穂ちゃん。バケネズミが、ミノシロモドキから何らかの情報を入手したとして、その中には、大雀蜂の兵士たちを皆殺しにできるような手段が含まれていた可能性があるのかしら？」

　母は、一瞬、考え込んだ。

「……それらは、第四分類の知識です。それも、第三種の『殃』に属する事項ですから、いかにこの場であっても、口にすることはできません」

「安全保障会議は、他のすべての規定に優先するはずだ。話してもらわなければ、一歩も先に進まない」

　鏑木肆星氏が、苛立たしげに言った。

「何も、書籍を公開しろと言うんじゃないの。ただ、あなたの覚えている範囲で、教えてほしいの。今は、緊急の場合なのよ。……大雀蜂軍の兵士たちを、いとも簡単に全滅させられるような手段が、存在するのかしら？」

　さすがの母も、富子さんにそう言われると、それ以上抗うことはできなかった。

「古代文明には、数種類の大量破壊兵器が存在しました。それらを使用することによって、バケネズミ

の軍団を瞬時に壊滅することは可能です。ただ、今回、そのどれかが使用されたとは思えません」

「それは、どうして？」

「第一に、どれも、知識を得たからといって、一朝一夕に作れるようなものではないからです。きわめて高度な科学技術と生産設備が必要になりますが、バケネズミは、とうていそんな段階には達していません。第二に、もし大量破壊兵器を使用すれば、必ず特徴的な痕跡が残ります」

「具体的に、言ってみて」

母は、ためらったが、しかたなく続けた。

「最も破壊力が大きいのは、核兵器ですが、これは、問題になりません。製造も、原料の調達も不可能ですし、使用すれば、前回の業魔の一件に匹敵するような……」

母は、わたしの存在を思い出したらしく、ちらりとこちらに視線を向けた。

「いずれにせよ、巨大な爆発も残留放射能もなかったようですから、核兵器という可能性は完全に否定されます。その次に広範囲の敵を殺せるのは、毒ガスです。ですが、これもバケネズミが製造するのは、ほぼ不可能です」

「……でも、以前、土蜘蛛は、毒ガスを使って攻撃を仕掛けてきました」

わたしは、思わず、疑問を口に出してしまっていた。

「私が言っている毒ガスというのは、硫黄やプラスチックを燃やしたようなレベルのものではありません。神経ガスや窒息性ガス、糜爛性ガスなど、容易に一つの町を全滅させる、恐ろしい兵器のことなんです」

母は、わたしをたしなめるように言う。わたしは、もちろん、安全保障会議のメンバーではなく、バケネズミに関する質問があった場合に備えて出席させられていたにすぎない。だが、さいわい、誰も、わたしの不規則発言を咎めようとはしなかっ

た。

「同様に、致死性のウイルスなどを使った生物兵器も、製造はきわめて困難な上に、前の二種類ほどの即効性がないので、問題になりません。それ以外となると、地震発生装置やレーザー兵器などが、広範囲な被害を引き起こし得ますが、いずれも、現在では、人間にすら製造は不可能で、現場の状況とも一致しません」

「それでは、過去に存在したどんな兵器も、今回の事件には関わりがないと断定していいのかしら？　あなたは、何か、思い当たることがあったんじゃないの？」

富子さんは、まるで母の心を読んでいるように、やんわりと問い詰めていく。

「……現場の痕跡と矛盾しないものがあるとすれば、スーパークラスター爆弾くらいではないでしょうか」

母は、溜め息とともに言葉を絞り出す。

「それは、どういうものなの？」

「通常は航空機から投下されるのですが、親爆弾が破裂すると、内蔵する数百の子爆弾が広範囲に飛び散り、さらに、子爆弾が炸裂して、周辺に数万の孫爆弾を撒き散らします。孫爆弾の中には、爆薬以外に、微小な金属球や回転して飛ぶプロペラ型の金属片が詰まっており、爆発すると、孫爆弾から半径数十メートルに存在する柔らかい標的は、すべて、穴だらけになります。これでしたら、現場に巨大なクレーターはできませんし、数万匹のバケネズミの死骸がずたずたになっていたというのも、うなずけます」

古代人の人間性を疑いたくなるのは、何もこれが初めてのことではなかったが、聞いているだけで、吐き気がした。想像力の欠如と言ってしまえば簡単だが、いったいどういう気持ちで、そういう兵器の設計ができるのだろう。その爆弾の持つ冷酷非情さに比べれば、風船犬など可愛いものではないか。

「しかし、それこそ、バケネズミに作れるような代物じゃないでしょう？」

鏑木肆星氏の質問は、たぶん、全員の疑問を代弁していた。

「新たに製造するのは、もちろん、彼らの技術水準では不可能です」

母は、もはや、話すのも苦痛という表情だった。

「ただ……スーパークラスター爆弾ないし、別のいくつかの大量破壊兵器は、現存しているかもしれないんです」

「まさか」

ほとんどの人間が、息を呑んだ。

「もちろん、千年もの時を経た現在でも使用できる可能性は、きわめて低いと思います。……しかし、もし、バケネズミが、ミノシロモドキから情報を得ていれば、それらを発掘、回収していることは、充分考えられます」

「そんな話は、この私でさえ、初耳だわ」

富子さんが、眉間に皺を刻んで言う。

「この件に関しては、代々、図書館司書だけに引き継がれてきたんです」

「それで、その大量破壊兵器は、今どこにあるの？」

「それだけは、この場では、お答えできません」

母は、きっぱりと答える。

「ただ、それほど遠い場所ではないとだけ申し上げておきます」

ざわめきが起きた。もし、バケネズミが、本当に、そんなものを入手しているのなら、そして、それが、万が一、今も使用可能なら、町にとって深刻な脅威となる。

「殺せ殺せ殺せ。うひひひひひひ。悪ーいネズミは、殺すしかなーい」

日野光風氏が、なぜか上機嫌に禿頭を撫でながら、歌うように言った。

「ご高説は拝聴しました。今度は、直接、現場を見

た私の印象を申し上げたい。あれは、爆弾などによるものとは、とうてい思えません」

　鏑木肆星氏の一言で、再び、周囲は静まりかえる。

「肆星。あんまり、もったいを付けないで。あなたは、何があったと思ってるの？」

　富子さんが、身を乗り出した。

「不遜のそしりを受けても、あえて申し上げましょう。たとえ証拠の隠滅が図られても、私だからわかる。大雀蜂軍を全滅させたのは、間違いなく、呪力を持った人間です」

　呆気にとられたような沈黙が、訪れた。

「なぜ……そう思うの？」

「現場にあったものは、すべて炭化していましたが、中には、原形をとどめているものもありました。私が注目したのは、矢です」

「矢が、いったいどうしたというの？」

「大雀蜂軍が使っている矢と塩屋虻軍のものでは、鏃と矢羽根の形状に違いがあります。あきらかに大雀蜂軍が放ったと思われる矢が、何本も戦場に残されていました。いずれも、まったく損傷が見られませんでした」

「それは、どういうこと？」

「矢が、何かに当たって跳ね返されたり、目標を逸れて地面に突き立ったりした場合は、必ずどこかに損傷を受けるものです。完全に無傷なのは、呪力によって空中で止められた矢くらいなものです」

　他ならぬ鏑木肆星氏の発言だけに、信憑性があった。

「あ。そういえば……すみません」

　覚が、叫びかけて、あわてて口をつぐむ。

「かまわないわ。言ってみて」

　富子さんは、遠い子孫ではなく、本当の孫を見るような目で言う。

「はい。僕が現場を見たとき、一つ、おかしいなと思ったことがあるんです。大雀蜂軍の兵士の死骸

は、どれも、何一つ武器を持っていなかったんです。もちろん、勝者が奪っていったのかもしれませんが、折れたりして使えなくなった武器は、そのまま放置されるのが普通だと思います。……もし、彼らが、呪力によって武器をすべて奪い去られてしまったのだとしたら、あの不可解な状況にも説明がつきます」

「し、しかし、この町には、塩屋虻コロニーに荷担して、大雀蜂軍を皆殺しにするような人間は、誰もいないでしょう？　もちろん、鳥獣保護官や、その他の保健所の職員では、絶対にありませんし」

　金子所長が、あわて気味に口を挟む。

「ええ。むろん、町の人間ではないでしょう。考えられるのは……そうですね。たとえば、他の町からの干渉という可能性はないでしょうか？」

　鏑木肆星氏がそう言うと、またもや騒然となりかけたが、富子さんは、きっぱりと首を横に振った。

「それは、絶対にありえないわ。神栖66町から見て、比較的近距離にあるのは、東北の白石71町、北陸の胎内84町、中部の小海95町くらいかしら。でも、どの町だって、そんな馬鹿な真似をするはずがないのよ」

「富子様は、長年、他の町とも連絡を取り合って、注意深く監視してこられました」

　鳥飼宏美さんが、か細い声で口を挟む。

「たしかに、私は、他の町の様子を観察してきたわ。ずっと昔からね。それは、どの町も同じなの。日頃は交流のない他の町で、いったい何が起きているのか。どの町も、何よりそれを怖れ、知りたいと思ってる。そのために、全国にある九つの町による懇談会が作られ、悪鬼や業魔の出現や、その他、安全保障上重大と思われる情報を交換してきたの。だから、私が保証します。どの町でも、今は平穏に暮らすことしか考えていないわ」

「なるほど。たしかに、無意味に緊張を作り出しても、彼らには、何の得るところもないでしょうな」

鏑木肆星氏は、あっさり自説を引っ込めた。

「だとすると、可能性は、絞られてくる。現在、町に住む人間でも、他の町の人間でもないとすれば、過去に町から出て行った人間はどうでしょうか？」

どきりと、心臓が飛び跳ねた。あきらかに、真理亜たちのことを言っている。

「その可能性はないのよ」

富子さんは、沈んだ声で言った。

「あの子たちは、とうに亡くなっているから」

嘘だ、と思う。富子さんは、真理亜たちを庇（かば）っているんだ。そうでなければ……。

「遺骨を回収したという話は、私も聞きました。あれは、失踪してから、二、三年たった頃だと思いますが」

「そうよ。あなたも、よく知ってるはずでしょう？」

遺骨……。信じられない言葉を聞いて、頭が混乱した。

「ですが、今となっては、それが疑わしくなってくる。なぜなら、遺骨を発見したと称して届け出たのは、今回の事件を引き起こした元凶と思われる、野狐丸だからです」

はっとした。とたんに、生気がよみがえったような気分になる。十二年前に野狐丸が言ったことを思い出したからだ。

『工作には多少の時間がかかりますが、うまくいけば、お骨も用意できるかもしれません。それを届ければ、たぶん、ご納得いただけるかと』

『私どもの骨でも、部位によっては、神様のものと見分けが付かないことがございます。とりわけ長身の者であれば、若神様とは、大きさもさほど変わりません。ですので、その骨を、念入りに石で擦りまして……』

そうだ。そうに違いない。野狐丸が、偽の骨を届けたんだ。あれだけの策士なのだから、そのくらいのことは、朝飯前だろう。バケネズミの骨を、たぶ

ん、巧みに加工して……。

「あの骨は、間違いなく、本物だったわ」

わたしは、自分の耳がおかしくなったのかと思った。富子さんは、いったい何と言ったのだろう。

「遺骨は、慎重の上にも慎重を期して鑑定させたのよ。間違いなく、人間の骨であること。年齢と性別に矛盾はないか。結局、決め手になったのは、和貴園に保管されていた二人の歯形だったわ。でも、さらに万全を期すため、妙法農場の技術者に依頼して、DNA鑑定までしてもらったの」

そんなはずはない。嘘だ。ありえない。真理亜が死ぬなんて、そんな馬鹿なこと。絶対あるはずがない。背筋に、じっとりと厭な汗が滲み、視界が暗くなってくる。

「秋月真理亜と伊東守の二人は、すでに、百パーセント死亡したことが確認されています。したがって、今回の件には無関係です」

富子さんの声は、まるで閻魔大王の宣告のように無慈悲に響いた。

その後、わたしは、いったい、どうしていたのだろうか。記憶は、かなりあやふやで、断片的な映像と言葉しか、思い出せない。

会議は紛糾し、容易に結論が出なかった。甲論乙駁があったのは、塩屋虻側に荷担して呪力を行使した犯人捜しを、どこまでやるかについてであって、バケネズミについては、最初から結論は決まっていたようだ。

その中で、何度も気遣わしげにわたしの方を見る、覚の視線を憶えている。

一方、鳥飼宏美さんから、一週間後に迫っている夏祭りを延期すべきではないかという動議が出されたが、また彼女の神経症的な心配性が始まったと冷笑を浴びるだけで、ほとんど一顧だにされなかった。

結局、当面は事態の推移を見守るということで、犯人捜しについての結論は持ち越しとなった。塩屋

虻コロニー及びそれに同盟するコロニーのバケネズミについては、未だ罪状はよくわからなかったが、すべてを駆除・抹殺することに、一切異論は出なかった。

乾さんを筆頭とする、五人の鳥獣保護官が紹介され、盛大な拍手を受ける。いずれも、バケネズミの駆除に関してはベテランであり、弓矢や小火器による反撃を完璧に封じ込めながら、数千匹から数万匹のバケネズミを、短時間に、きわめて効率的に駆除する技術を修得しているのだという。人間の一方的な都合で抹殺されるバケネズミの側から見れば、まさに死神と呼ぶにふさわしい存在だった。

安全保障会議の散会後、わたしは、気分が悪くなり、両親と覚に抱えられようにして、退出した。涙が溢れ、譫言のように真理亜の名前を呼び続けていた。だが、混乱した頭の片隅に、奇妙に冷静な部分があって、繰り返し問いを投げかけてくる。

この十二年、わたしは、いったい何を考えていたのだろう。本気で、真理亜たちが生きていると信じていたのか。それとも、信じるふりをして、自分を偽っていただけなのか。

もしかすると、わたしは、ずっと以前から、心の中で真理亜たちの死を受け入れる準備を、着々とすませていたのかもしれない。

わたしは、顔のない少年のときに味わった喪失感には、もう耐えられないと思っていた。だから、まるで蜥蜴が尾を自切するように、自分で自分の心の一部を切り離し、そして、それが静かに死んで行くのに、ただまかせていたのではないだろうか。

神栖66町では、毎年、数多くの祭りが取り行われていた。春には追儺と御田植祭、鎮花祭。夏になると、夏祭り、火祭り、精霊会。秋は、八朔祭と新嘗祭。そして冬には、雪祭、新年祭、左義長……。

その中で、最も宗教色や儀式性が薄く、誰もが楽

しみにしていた行事といえば、夏祭り、またの名を化物祭（ばけものまつり）だった。名前はおどろおどろしいが、特に、化け物の扮装をしたり、人を怖がらせる奇抜な趣向を凝らすわけではない。祭りの実行委員たちが化け物役になり、編み笠と頰被り、お面などで顔を隠し、道行く人に対して御神酒（おみき）をふるまうだけなのだが、それが、不思議なくらい非日常的な雰囲気を醸し出すのは、夏祭りが必ず新月の晩に行われるからだろう。その晩は、町の灯はすべて消される。光は、沿道に並んだ篝火（かがりび）や竿灯（かんとう）、ときおり空を彩る花火だけだった。ぬばたまの闇に包囲され、わたしたちの町は、束の間、ハレの宵を演出する舞台に変わるのだ。

だがそれは、見方によっては、わたしたちの町の孤立を、いっそう際立たせているようでもあった。

広大な日本列島に点在する、わずか九つの町の一つ。日本人としてのアイデンティティに必死でしがみつきながら、実際には数千年の歴史から完全に断絶してしまい、時の孤島となったわが神栖66町の……。

町の年中行事は、どれも百年以上は続いている。しかし、それらはすべて、古代文明が崩壊した後、映像記録や文献などを元に再現されたものだった。化物祭も、もともとは、別の地方に伝わる行事だったようだが、注意深く選定された様々な祭りの要素を加えて、わたしたちの町の祭りとして復活させられたものである。

ときどき、疑問に思う。たとえ、元は借り物や偽物であっても、百年も続ければ、それは、由緒正しき伝統へと変わるのだろうか。

舟が着いたとき、ちょうど正面に篝火があったので、暗闇に順応していた目は眩しさを感じた。駒下駄を履いた足下が、妙におぼつかない。

覚に手を支えてもらい、わたしは、何とか、船着き場に降り立つことができた。

「だいじょうぶ？」

「うん」

　ふと、十数年前の夏祭りの情景が、よみがえる。わたしは、真理亜と一緒に浴衣を新調してもらって、ひどくはしゃいでいた。

『わたしたちの浴衣、おそろいだねー』

『うん。おそろいだね！』

　そのときの浴衣の柄は、今でも憶えている。わたしの方が、水色の地に白の水玉と赤い金魚をあしらった図で、真理亜のは、白地に水色の水玉と赤い金魚だった。

　真理亜は、ぽっくりを履いた足で、器用にくるりと回転して見せる。その仕草が、何ともいえず愛らしかったので、わたしは、ただ、うっとりと見とれていた。

『さあ、お祭りに行こう！』

『でも、気をつけないと、化け物に捕まっちゃうよ』

『だいじょうぶだよ。捕まりそうになったら、おまじないをすればいいんだよ』

『おまじない？』

『うん。こないだ、お母さんたちが、言ってた。まんとらって言うんだよ。早季にだけ、教えてあげる』

　まだ呪力のないわたしたちにとって、世界は、驚異と脅威に満ちていた。だが、それは、幼いうちだけのことで、大きくなって呪力を手に入れさえすれば、怖いものなど何一つなくなるはずだと、固く信じていた。

　先を行く真理亜の後ろ姿が小さくなり、わたしは、ふいに心細くなって、彼女の名前を呼びながら懸命に手を伸ばそうとした……。

「季。……早季？」

　覚の呼ぶ声で、わたしは、ようやく我に返る。

「どうしたの？」

「何でもない。ちょっと、ぼおっとしてただけ」

「そう。……向こうへ、いってみよう。何か、催し物をやってるよ」

わたしは、覚に手を引かれ、からころと駒下駄の音を立てて歩き始めた。

運河沿いの広い道は、篝火の黄色っぽい光で照らされているが、左右には、漆黒の闇が広がっている。まるで、この世から死者の国の上に延びた、一本の橋のような光景だった。光の領域を歩んでいる限りは安全だが、万が一道を外れて闇の中に踏み込んでしまうと、もう二度と戻ってこれないのではないか……。

物心ついて以来、毎年欠かさず夏祭りに来ているが、こんな奇妙な感覚に囚われたのは、ごく幼いとき以来だったと思う。

道の前後には、三々五々、祭りの会場へ向かう人たちが歩いている。みな、浴衣を着て下駄履きで、手には団扇を持っている。四方山話に興じて笑いさざめく声は、いつもなら楽しげに響くはずなのに、このときのわたしには、風の音と同じような雑音にしか聞こえなかった。

前方に、化け物たちが現れた。二人は、編み笠に頰被りという姿だが、一人は、天狗の面を被っているため、まったく顔がわからない。

化け物たちは、無言で、通行人に御神酒をふるまっている。わたしたちも、紙コップにつがれた御神酒を一口ずつ飲んだ。少し甘口の清酒だった。それだけで、少し酔いが回ったような気がする。

「ほら、竿灯が来たよ」

覚が指さす先には、提灯が鈴なりになった巨大な竿が見えた。古代文明のお祭りでは、これを一人の人間が支えていたらしいが、現在では一つが一トン近くにもなるので、とうてい不可能だろう。夏祭りには、七つの郷から一つずつ竿灯が出ることになっていたが、十二年前の天災の影響で、朽木の郷は数

年間参加できず、その間は茅輪の郷から二つの竿灯が出ていた。この年は、久しぶりに朽木の郷も加わったため、全部で八つの竿灯が出ることになった。

宙に浮いた大きな竿灯が、しずしずと道をやってきた。目の前を横切ったのは、わたしが生まれた水車の郷の竿灯だった。提灯には、様々な種類の水車が図案化されて描かれている。上掛け、逆車、下掛け、胸掛け……。

竿灯の向こう側を、数人の化け物が走り過ぎた。みな、ひどく背が低い。子供のようだ。全員、編み笠をかぶり、頬被りではなく狐や猿のお面を着けている。

「見て。ほら、子供の化け物たち」

わたしが指さしたときには、すでに走り去った後だったため、覚には見えなかったようだ。

「子供？　変だな。子供に化け物役なんて、させたかな？」

「でも、今、走ってったわ。そこ」

大砲のような音が轟いて、この晩、初めての花火が上がった。暗い夜空に、大輪の花が咲いたようだった。続いて、二発、三発目も。色とりどりの、菊や牡丹の形をしたもの。金色に輝く見事な枝垂れ花火には、歓声が上がった。呪力は一切用いずに、火薬と仕掛けだけで様々な意匠を作り出しているのだ。

「……きれい」

わたしは、つぶやいた。

「本当だね」

覚は、わたしの肩に、そっと手を回した。

花火を合図に、祭り囃子が響き始めた。独特な節回しの笛に、太鼓、鉦の音が渾然一体となって、異空間としての夏祭りの雰囲気を盛り上げる。

わたしは、ここで、何をしているのだろう。

再び歩き出しながら、わたしは、自問した。

真理亜たちの死を知ってから、まだ一週間にしかならない。その間、歯を食いしばって仕事こそ一日

も休まなかったものの、祭りを見物するような心境には程遠かった。

しかし、夏祭りには、町のほぼ全員が参加する。病院と託児所を除けば、屋内に閉じこもっている人間はまずいない。その間、たった一人で過ごすのは、とても耐えられないと思ったのだ。

気晴らしに祭りに行こうという、覚の誘いに応じたのには、もう一つの理由があった。神栖66町の年中行事は、季節ごとにテーマのようなものがある。たとえば、春の追儺、御田植祭、鎮花祭は、五穀豊穣を願うのに加え、疫病や悪霊など穢れを祓う意味合いが強い。そして、夏に行われる、夏祭り、火祭り、精霊会は、いずれも、先祖に感謝し、冥福を祈る祭りである。いわば、一年のうちで、生者と死者の距離が最も近づく晩なのだ。

もし、真理亜が、わたしに会いたければ、きっと、祭りのどこかで姿を見せてくれるのではないか。そんな無意識の思いが、わたしを突き動かしていたのかもしれない。

祭りの会場へやって来ると、櫓と紅白の幔幕が張られた舞台が設営されていた。まだ、祭りの本番までには間があるが、すでに、化け物たちがふるまう酒で一杯機嫌になった人たちが、金魚すくいや射的の出店を冷やかしていた。どれも、呪力を使えば難なくできてしまうが、祭りの夜には、竿灯を操る役などを除く単なる見物人は、呪力を封印するのが慣わしになっていた。

「ちょっと待ってて。綿飴でも買ってくるよ」

覚が、露店の方へ行ったので、わたしは、手持ちぶさたになった。何気なく前方を見たとき、浴衣を着た小さな女の子の後ろ姿が見えた。

真理亜……。そんなはずはない。わたしは、目を瞬いた。だが、背中まで長く伸ばして銀の髪留めで束ねた赤い髪は、幼い頃の真理亜にそっくりだった。白地に水玉と赤い金魚の浴衣の柄も、彼女が昔着ていたものである。

わたしは、ゆっくりと、少女の方に近づいた。だが、あと四、五メートルという距離で、少女はふいに駆け出した。

「待って！」

わたしは、叫んで、後を追った。

少女は、祭りの会場を出て、運河沿いの暗い道を走っていく。

「真理亜！」

わたしは、懸命に追い縋ろうとしたが、焦ったせいか、履き慣れない駒下駄の上で足が滑り、あやうく顚倒しそうになる。とっさに呪力で身体を支えたが、再び前を見たとき、すでに少女の姿はなかった。

「早季！　どうしたんだ？」

後ろから、息せき切って走ってくる、覚の声が聞こえた。

「ごめんなさい。何でもないの」

わたしは、振り返って、謝った。

「何でもない？　でも、どうして、急に駆け出したの？」

「それは……」

真理亜の幻影を追っていたとは言えずに、わたしは口ごもった。思ったより長い距離を走ってきたらしく、周囲には、祭り見物の人影もまばらである。

「今、『真理亜』って、叫んでなかった？」

「聞こえたの？」

「ああ。幻影でも見たのか？」

わたしは、黙って、真っ暗な空を見上げた。月がないだけではなく、曇っているのか、星明かりすら見えない。

「……わからない。ただ、よく似た子だったのかもしれないし」

それにしては、あの後ろ姿は、幼い頃の真理亜に酷似していた。しかし、彼女がわたしに会いたかったのであれば、どうして、逃げたのだろう。まるで、わたしを、この場所まで連れてきたかったよう

ではないか。

　耳元を、かすかな羽音がかすめた。わたしは、反射的に、身体を遠ざける。

「蚊だ」

　覚が、不快そうに唸る。篝火の明かりで、緩やかに飛ぶ蚊の姿を認めた瞬間、それは、ぱちんという音とともに弾け散った。

「どうして、こんなところに、蚊がいるのかしら？」

　ふだん、八丁標（はっちょうじめ）の中には、蚊も蠅もいない。特に人血を吸う蚊に関しては、不快に思う人が多いため、羽音がした瞬間に、呪力で消し去られてしまうからだ。

「誰か、野山へ出かけてた人が、連れて来ちゃったのかもしれないな」

「夏祭りの夜に？」

　こんな晩に、八丁標の外に出ている酔狂な人間がいるだろうかと思う。

「うん。もしかしたら、乾さんたちが、戻ってきたのかもしれないし」

　一週間前に、塩屋虻コロニーの抹殺に向かった鳥獣保護官たちは、三日間で二十万匹を駆除するという威勢のいい目標にもかかわらず、ほとんど何の成果も上げられないでいた。どうやら、第六感で『死神』がやって来るのを察知したらしく、野狐丸以下の大軍勢が、いっせいに、どこかに雲隠れしてしまったためである。

「そうなのかな……」

　一週間野宿を続けて、携行食糧と野山の食べ物で凌ぐというのは、夏季キャンプの経験からしても、かなり辛いことだろう。だとすると、いったん町に帰って、英気を養うことにしたのかもしれない。任務を半ばにして帰投するというのは、乾さんたちには似つかわしくない行動のような気もしたが。

「さあ、戻ろうか。もうすぐ、花火絵コンテストが始まるよ」

花火絵というのは、打ち上げ花火を呪力でアレンジすることで、夜空に美しい光の絵を描く競技だった。毎年、町で最高の呪力を持つ人々が挑戦し、見物人から喝采を浴びる、夏祭りのハイライトだった。

「うん……」

今考えても、このとき、なぜ後ろを向いたのかは、謎である。だが、わたしは、まるで何者かに操られたかのように背後を振り返り、そして、背筋に冷水を浴びせられたような衝撃を受けて立ち竦んだのだった。

「早季。どうしたの?」

覚も、わたしの様子を見て、不審を感じたらしい。

「あそこに……!」

わたしは、震える指先で、運河の方を指し示した。

「あそこに、何? 何も見えないけど」

たしかに、それが見えたのは、ほんの一瞬だった。だが、わたしの目は、その一瞬を、はっきりと捉えていた。

「立ってたのよ。真理亜と、守、それに、顔のない少年が……」

運河の暗い水の上に、三人は、佇んでいた。遠い世界から、じっとこちらを見守っているように。それは、幽明境を異にするという言葉をそのまま絵にしたような光景だった。

「早季」

覚は、わたしを抱きしめた。

「……僕だって、同じ思いなんだよ。たとえ幽霊だって、真理亜たちに会えるものなら、会いたいさ。でも」

「本当に、気のせいなんかじゃないの。信じて」

「ああ。君には、見えたんだと思う。でも、早季は、祭りに来る前から、真理亜たちに会えるんじゃないかと思ってただろう? 隠さなくてもいい。僕

にはわかってた」

「どうして？」

「君の着てる浴衣だよ。ほとんど無地の紺一色。僕の方が、派手なくらいだ」

　別に合わせたわけではないが、覚の浴衣も、薄い縞の入った紺色だった。

「君を迎えに行って、それを見たとき、まるで喪に服してるみたいだって思ったんだよ」

　図星を指されて、わたしは、黙り込んだ。

「いいんだよ。早季は、真理亜たちに会いたかったんだろう？　そのことは、当然だよ。その強すぎる思いが、水の上に投影されて、映像を作り出したんだよ」

「……うん」

　そう考えるしかないのだろう。だが、わたしの中には、釈然としない思いが残っていた。たしかに、水の上の三人の幻影は、わたしの無意識が造り出したものだったかもしれない。だが、それなら、祭りの広場からここまで駆けてきたあの少女は、何だったのだろう。

　わたしたちは、しばらくの間、その場で抱き合ったまま、身じろぎもしなかった。覚も、わたしが落ち着くまで待とうと思ったのだろう。

　どのくらいの時間が経過したのか、わからない。わたしは、うっすらと目を開けた。

　覚の肩越しに、祭りの広場の方向が見える。あいかわらず、篝火は焚かれているものの、人通りはまばらだった。すでに、みんな、広場に集まって、花火絵を見物する準備を整えているのだろう。

　いや、でも、化け物たちが、まだ酒をふるまっている。お面を被った小さな化け物たち。きっと、子供が扮しているのだろう。

　酒を一口飲んだ男性が、突然路上に倒れるまで、わたしは、まったく何の危機感も感じてはいなかった。

「覚！」

わたしが悲鳴を上げると、化け物たちは、どこかへ逃げ去ってしまった。

「早季？　どうしたんだ？」

覚は、てっきり、また、わたしの精神が不安定になったと思ったのだろう。わたしを、ますます強く抱きしめようとした。

「違う！　離して！　人が、人が、倒れたの！　そっち！」

わたしの言葉に、ようやく後ろを振り返り、覚は、息を呑んだ。

「どうしたんだ？」

「さっき、子供の化け物がふるまったお酒を呑んで……」

わたしたちは、倒れている男性のそばに駆け寄った。さっきまで、泡を吹いて苦しんでいたが、すでに動きを止めていた。

「死んでる。……病気なんかじゃない。毒を呑まされたんだ」

覚は、男性の息を嗅いで言った。

「毒？　そんな、誰が、いったい……？」

「子供の化け物って、言ったよな？」

「うん」

覚の浮かべている表情から、わたしへも恐怖が伝染してくるようだった。

「こんなことをする人間は、絶対にいない。そいつらは、バケネズミだ」

「バケネズミ？　そんな、ありえないわ。人間に対して公然と反逆するなんて。みすみす全滅させられるのが、目に見えてるのに！」

「どうせ、皆殺しになると覚悟して、イチかバチかの勝負をしかけてきたんだろう」

「じゃあ、塩屋虻が……？」

野狐丸の顔が、脳裏に浮かんだ。絶えず油断なく空気の臭いを嗅いでいる鼻。そして、策士然と光っている丸い小さな眼が。

「行こう！　みんなに警告しないと」

わたしたちが走り出そうとしたとき、夜空に花火が打ち上がった。一発。二発。三発。たくさんの菊や牡丹の花が、ぐにゃりと流れて渦巻きとなり、水車のように回転しながら、次々に、目眩がするような複雑なパターンを作り出していく。

大きな歓声が聞こえてくる。花火絵コンテストが始まったのだ。これでは、いくら叫んでも、聞こえないだろう。

真理亜のように空を飛べたらと、これほど願ったことはなかった。だが、もしこのとき、空中浮揚などできたら、わたしたちの命は、そこで尽きていたに違いない。

突然、大地を揺らすほどの轟音が響いた。空へと抜ける、打ち上げ花火の音ではない。周囲にあるものすべてを破壊するような、激しい爆発音だった。

大勢の人の悲鳴が上がった。

覚が、わたしの肩を摑んで、引き戻す。

「逃げるんだ！」

「でも……伝えないと！」

「もう、遅い。一斉攻撃が始まったんだ。今さら僕らが行っても、何もできない」

覚の冷静すぎる判断に反発しながらも、わたしは、後ずさった。

「広場には、みんなが……」

「だいじょうぶだ。あそこには、呪力の達人たちが揃ってる。バケネズミなんかに、やられるはずがないよ」

その言葉に、わたしは、安堵を覚えた。何と言っても、呪力を持った人間が、あれだけいるのだから、原始的な武器に頼った攻撃など、簡単に撃退してくれるに違いない。

それでも、後ろ髪引かれるような思いで、広場から反対方向へと百メートルほど逃げたとき、頭上にただならぬ気配を感じた。見上げると、夜空を切り裂いて、無数の矢が飛んでいる。だが、どんなに目を凝らしても、うっすらとしたシルエットしか見え

なかった。すべての矢を真っ黒に塗ってあるらしい。

　続いて、何百挺という火縄銃の発射音。怒号と悲鳴が交錯し、しだいに後者が圧倒的になっていく。わたしは、思わずしゃがみ込んで、耳を塞いだ。町の人たちがバケネズミに殺されている……。何もかも、とても現実に起きている出来事とは思えなかった。

「立つんだ！　逃げよう！」

　覚が、わたしの腕を引っ張って、無理やり立ち上がらせる。

　そのとき、逃げようとする道の向こうから、かすかな音が聞こえてきた。金属が触れ合うような、かちゃかちゃという音。大勢が足音を忍ばせながら、接近してくる。

　バケネズミだ……。わたしは、息を呑んで硬直した。覚が、口の前に人差し指を立てて、手振りで、わたしに伏せるよう指示する。来た。思った以上に多い。二、三百匹はいるだろう。道幅一杯に散開して、身体を低くしながら、慎重に進んでくる。

　わたしたちが、バケネズミから先に見つけられずにすんだのは、二つの幸運が作用したからだった。一つは、こちらが風下だったこと。そうでなければ、犬並みの鋭敏な嗅覚を持つバケネズミは、たちまち、わたしたちの存在を感知していたことだろう。もう一つの幸運は、わたしたちが二人とも闇に溶け込む紺色の浴衣を着ていたことだった。このため、視界に入っても、ほんの一瞬、人間がいることがわからなかったのだ。

　そのわずかな遅れが、彼らには、命取りになった。

　バケネズミの部隊の、ちょうど中央付近にいた兵士が、突然、目も眩むような炎とともに燃え上がった。

　断末魔の悲鳴を上げながら苦しみもがくバケネズ

ミの周囲で、呆然として動きを止めた兵士たちの姿が、赤々と照らし出された。

「くたばれ！」

　覚が、吐き捨てる。

　バケネズミたちの頭部が、一本の導火線につながった爆竹のように、次々と吹き飛んでいった。二百匹以上の兵士たちが、熟して弾けた柘榴（ざくろ）のような姿になるまで、ものの十秒とかからない。圧倒的な恐怖によって金縛りにあったらしく、反撃はおろか、逃走を試みようとしたバケネズミすら、皆無だった。

「こいつら……！」

　覚は、さらに、死肉と化したバケネズミたちを、執拗に叩き潰していく。まだ熱い血飛沫が上がり、骨が砕ける音がした。

「もう、やめて」

　わたしは、立ち上がって、覚を制した。

「この、下等な蛆虫が……よくも、人間を殺したな！」

　覚の耳には、わたしの声も届かないようだった。

　以前にも、覚がこんなふうになったことがあるのを思い出す。土蜘蛛の襲撃を受けたときのことだ。地下のトンネルを延々とさまよってから、封印されていた呪力を取り戻し、ようやく地上に出て反撃を開始した……。あのときの覚は、まだ十二歳の少年だったが、まるで悪鬼のような形相を垣間見て、うっすらと背筋が寒くなったことを憶えている。

　今、覚の顔は、陰になっていてよく見えなかったが、おそらく、あのときと同じような表情を浮かべているに違いないと思った。制御不能となった怒りと、血に対する酩酊が、奇怪に混淆（こんこう）したような……。

「もう、死んでるわ。いつまでも、こんなところにいたら、危険よ！」

　覚も、ようやく、頭が冷えたようだった。

「そうだな。とにかく、逃げよう」

二、三歩歩きかけて、覚は、立ち止まる。

「どうしたの？」

「今殺したのは、広場を襲ったやつらとは別の部隊だろう。広場から逃げてくる人間を、こちらから挟撃するつもりだったんだ。でも、あの数だと単なる先遣隊で、後詰めがいる可能性が高い。だから、こっちの方へ逃げると、おそらくまた、バケネズミに遭遇する。危険だけど、広場の方へ引き返そう」

「でも……」

「だいじょうぶだよ。奇襲を喰らって犠牲者は出たかもしれないけど、そのまま、人間がやられてしまうはずがない。たぶん、もう形勢は逆転してるはずだ」

覚の予想は、正鵠を射ていた。

バケネズミの採った作戦は、電撃的な夜襲による、多分に心理的な効果を当て込んだものだった。

まず、化け物の格好で祭りに紛れ込んだ部隊が、最初のうちは普通の酒を、攻撃直前に毒酒をふるまい、方々で死者を出すことによって、混乱を誘発する。

続いて、打ち上げ花火の発射と同時に、要所に仕掛けられた爆弾をいっせいに爆発させ、広範囲な恐怖を引き起こす。

群衆が避難しようとしたときに、遠間からいっせいに放たれた黒い矢で、さらに多くの犠牲者を出し、パニックによる事故を狙う。さらに、群衆を、密集しすぎて呪力の発動が困難な状況に追い込んでから、数百挺の銃の一斉射撃で、とどめを刺す。

おそらくは野狐丸の発案になる計画は、途中までは、完全に目論見通りの結果となった。それを食い止め、勝負をひっくり返したのは、神に最も近い能力を持つと言われる二人の人間だった。

当初、バケネズミの波状攻撃によって犠牲になったのは、二百人を超える人々だった。二千人を超える群衆は、あやうく恐慌状態に陥りかけたものの、一人の人間が空に描いた指示により、冷静さを取り

戻した。ちなみに、花火も使わずに空に光る文字を描くことは、その後、誰一人成功しておらず、どんな方法を使ったのかは未だにわからない。

　とまれ、二千人の群衆は指示通りに密集して、直径わずか十六メートルほどの円を作った。呪力の相互干渉を防ぐため、全員が、言われたとおり呪力を封印していた。そこまで一糸乱れぬ行動が可能だったのは、一人の人物、鏑木肆星氏に対する絶大なる信頼があったからだった。

　そして、その信頼にたがわず、直径十六メートルの円は、おとぎ話の魔法陣のように、あらゆる攻撃を撥ねのけた。真っ黒な矢も、火縄銃の弾丸も、見えない半円形のバリアに阻まれたように、あさっての方角へ逸れていく。

　広場に戻ってきたわたしたちは、速すぎて視認できないものを、いとも易々と防御する鏑木肆星氏の力に、ただ驚嘆するしかなかった。

　攻撃がすべて無効化されたバケネズミの軍勢は、打つ手を失って、立ち往生してしまう。その前に、巨体を揺すりながらゆっくりと歩み出たのは、日野光風氏だった。

「ひひひひひひ。さあ、大変。とうとう、やること、なくなっちゃった」

　手にした団扇で、禿頭をぴしゃぴしゃ叩きながら、奇妙な節を付けて歌うように言う。

「人を騙した悪いネズミは、どうしましょう？　舌を引き抜いて、裏返し。天日に干して干物にしましょ。人に逆らう悪いネズミは、きついお仕置きしましょうか？　一匹ずつ、骨を砕いて、引き延ばし。三段に重ねて、お餅にしましょ」

　群衆から、拍手が起きた。誰もが、限りなく残虐な方法による復讐を望んでいた。日野光風氏は、片手を挙げて拍手に応える。再び、バケネズミの方に向き直ると、その形相は一変していた。何より異様だったのは、肉に埋もれていた細い眼が、ピンポン球のように飛び出していたことだ。日野光風氏は、

恐ろしい声で吠え立てる。

「じゃあ、人を殺した悪ーいネズミは、どうしてくれよう？」

独演会は、まだ終わらなかった。今度は、日野光風氏は、バケネズミ語で喚き始めたのだ。おそらく、今と同じ内容を、わざわざ翻訳して聞かせているのだろう。布袋（ほてい）のような肥大漢が、頰を震わせながら超音波のように甲高い音を発している様は、こんな場合でなければ、滑稽の極みだったはずだ。

そのとき、覚が、はっとしたようにつぶやいた。

「風上……まさか！」

「どうしたの？」

「なぜ、さっきのやつらが風上から来たのか、不思議だったんだ。風下からなら、こちらの臭いがわかるのに。だとすると……危ない！」

覚は、日野光風氏に向かって、大声で叫んだ。

「毒ガスです！　気をつけて！　やつら、風上から毒ガスを使う気だ！」

日野光風氏は、きょとんとした目でこちらを見たが、やがて、にんまりとした顔になってうなずいた。

「そうかそうか。教えてくれて、ありがとね、坊や。そうかそうか。まんざら、馬鹿でもなかったか」

異臭が漂いだしたのは、まさに、その瞬間だった。土蜘蛛が使ったような硫黄ではなく、目が痛くなるような刺激臭を感じる。

これが、本当の狙いだったのか。あらためて、野狐丸の奸智（かんち）に鳥肌が立つ思いだった。おそらく、常に、二段構え、三段構えの計画を練っているのだろう。奇襲作戦が最後まで成功しないことなど、最初から、計算済みだったに違いない。

そして、自軍の部隊がいるところに毒ガスを流すという冷血戦術は、誰一人予想できないであろうことも。

3

わたしたちは、呼吸をするのも忘れて、成り行きを見守った。二人の超絶的な呪術者、日野光風氏と鏑木肆星氏は、毒ガスにどう対処するつもりなのだろうか。

だが、何事も起こらない。日野光風氏は、いつのまにか目玉も元に戻り、大声を出して疲れたという顔をして団扇を使っているだけだし、鏑木肆星氏にいたっては、我関せずと腕組みをしたまま、微動だにしなかった。

「風が……」

最初にそれに気づいたのは、覚だった。たしかに、さっきまで吹いていた風が、ぴたりと止まっている。何より、先ほど感じた刺激臭が、ほとんど消えてしまっているのだ。

いや、再び吹き始めた。そよ風くらいだが、たしかに感じる。しかし、その風向きは、さきほどまでとは正反対だった。

風は、微風から、次第に勢いを増し、強風に近いものになった。

「信じられない。……風向きを逆転させるなんて」

わたしは、感嘆してつぶやいた。二人のうち、どちらがやったにせよ、あり得べからざるものを見せつけられた思いだった。

「本当だよな。僕には、一生、できそうもない」

覚も、すっかり脱帽の体だった。覚自身、夏季キャンプで土蜘蛛の毒ガス攻撃を受けたときには、竜巻を起こすことで、コロニー上に滞留していた有毒ガスを一掃している。しかしそれは、現場が無風状態か、頻繁に風向きが変わる、局地的な微風しか吹いていなかったからこそ、できたことだった。

夜間は、山から平地へ山風が、平地から海へ陸風が吹く。風速はごく弱いものなのだが、大気が循環する巨大な流れに逆らって、正反対の向きに風を吹

かせるというのは、とてつもない力業であり、いったいどんなイメージを作ればそんなことが可能になるのか、見当もつかなかった。

　さっきまで風上にいたバケネズミの部隊は、依然として姿こそ見せないままだったが、大混乱に陥ったことを示す騒々しい音と悲鳴が聞こえてきた。それはそうだろう。突然、風向きが逆転して、放出した毒ガスが全部、自分たちの方へと逆流してきたのだから。

「うふふふふふ」

　日野光風氏が、気持ちの悪い笑い声を上げた。

「浅墓浅墓。いや浅墓にも程がある。こんな姑息な手を使って、神の中の神である我々を屠れると、まさか本気で思いましたか？」

　茹で蛸のように上気した禿頭を、団扇でぱたぱたとあおぐ。分厚い唇には淫蕩な笑みを浮かべ、今にも舌なめずりせんばかりだ。

「さーて、お楽しみお楽しみ。浅墓なネズミ君たちは、はてさて、いったいどうなるのでしょうか？　いひひひひひ。……どれ、少し、戦ごっこでもして遊んで進ぜよか」

　最初に奇襲攻撃をかけてきたバケネズミは、四、五千匹はいただろうか。すっかり気を呑まれて、日野光風氏の前で立ち往生していたが、突然、機械のように整然とした動きで、隊列が二つに分かれた。

　てっきり、突撃してくるためかと思ったが、どうも様子がおかしかった。新しい隊列を作ったバケネズミの兵士たちは、蠟人形と化したかのように微動だにしない。その一方で、元の隊列の兵士たちは、愕然とした様子で、人間ではなく新しい隊列の仲間に向かって、槍を構えている。

「鏑木ちゃん、どう？　一丁、握らないかい？」

　日野光風氏の、素っ頓狂な声が響いた。

「お好きな側を、取ってもいいよ」

　声をかけられた鏑木肆星氏は、腕組みしたまま首を振った。

「結構だ」

「うーん、それは残念。独り遊びじゃあ、いまいち盛り上がらんのだが、しかたがない。ほんじゃあ、始めようかい」

　日野光風氏は、大きく息を吸い込むと、両手を打ち鳴らしながら、広場に響き渡る陽気なかけ声をかける。

「あーいあいあいあいあいあい！」

　手拍子が起きた。再び目玉が飛び出る。日野光風氏は、破鐘のような声で絶叫した。

「あーら、えっさっさーー！」

　そのとたん、新しい隊列のバケネズミたちは、いっせいに、古い隊列に向かって襲いかかった。

「そんな馬鹿な。いったい、どうやってるんだ……？」

　覚が、呆然と言う。

　呪力によって対象となる生物の脳を操作するというのは、きわめて難度の高い技だった。怒りや恐怖といった強烈な感情を引き起こすだけでも、相当な技術が必要であり、まして複雑な行動を取らせるまでにコントロールするには、相手の脳レベルに合わせてイメージを再構成する非凡な想像力と、人並み外れた集中力が要求される。

　しかも、日野光風氏が操っているバケネズミは、全体の半数としても、二千匹以上いるのだ。それだけの数の高等生物の脳を同時に支配するとは、とうてい人間業とは思えない。神の領域に達しているという噂も、あながち誇張ではないかもしれないと思った。

　呪力で操られたバケネズミたちは、ゼンマイ仕掛けの玩具のように、凄まじい速度で槍や刀をふるいながら突っ込んでいく。相手方も必死に応戦するが、さっきまで仲間だった兵士が、突然悪霊に憑かれたようになって襲いかかってくるのである。その恐怖たるや、並大抵のものではないだろう。

　かつて、覚も、同じような戦術を採ったことを思

い出す。バケネズミの死体を操って、迷信深い土蜘蛛の兵士たちを恐慌に陥れるのに成功したのだ。技術的には、比較にならないものの、心理的な効果には、たぶん似通ったものがあるだろう。

「ずーいずいずっ殺ばし、脳味噌ずい。茶壺に追われてトッピンシャン。抜うけたーら、どんどこしょ。裸のネズミが、泡喰ってチュー。あソレ、チューチューチュー」

日野光風氏は、櫓（やぐら）から引き寄せた太鼓を叩いて、いい加減な替え歌を朗唱する。それに合わせて、大勢のバケネズミの刀が弧を描き、血飛沫が上がり、首が吹っ飛んだ。とても正視に耐えない凄惨さである。

「あ……」

バケネズミたちの殺し合いに、憑かれたように見入っていた覚が、声を出した。

「どうしたの？」

「操られてる方のバケネズミ。動きがまったく同じやつがいる……」

日野光風氏は、かなり離れた場所にいたにもかかわらず、耳ざとく覚の言葉を聞きつけ、こちらを向いて舌を出す。飛び出た目玉が不気味なことこの上ない。

「ありゃ。これはしまった、しくじった。狡（ズル）してたのが、バレちゃった？」

それで、ようやく、わたしも気がついた。操られているバケネズミたちをよく見ると、まったく同じ動きをしている個体が数多くいるのだ。中には、誰もいない空間に向かって、無意味に槍を突き出している兵士もいた。動きのパターンは、全部で十種類ほどしかないかもしれない。

「一匹一匹、違う振り付けで見せたいのは山々だけど、これだけいると、やっぱり面倒。ましてや、御神酒が入っちゃうとね……」

そうして無駄話をしている間も、操っているバケネズミの動きに、まったく支障はないようだった。

「うひひひ。相手は浮き足立ってるし、こっちは命も惜しまない。こんな横着な操作でも、けっこう勝負になっちゃうか。でも、こんな程度が、この光風の技の限界かと思われても癪の種。どれ、もうちょっとだけ、尻を叩いてあげましょう」

操られているバケネズミたちは、突然、動きが倍以上の速さになった。無理な動きで、肩や腕の関節を脱臼しながら、狂気の突撃を敢行する。

「いっひひひひひ……！」

広場に腥い血煙が立ちこめ、日野光風氏の甲高い哄笑がこだました。

わたしたちは、すっかり残虐な殺戮のショーに酔って、警戒心を解いてしまっていた。バケネズミに対する激しい怒りと憎しみに加えて、一転、恐怖から解放されたことによる昂揚感も、異常な心理状態の一因となっていたに違いない。

信じがたいことだが、もしかすると、野狐丸は、ここまで予測していたのかもしれない。そうでなければ、続いて起きたことは、あまりにもタイミングが良すぎた。

最初は二千匹以上いたバケネズミの兵士が、その三分の一以下になり、ようやく勝負が決するかと思われたころだった。突如として、轟音が響いた。

続け様に、十数発の乾いた発射音。さらに、足下を揺るがすような、激しい爆発音。

何が起きたのか、わたしは、にわかには把握できなかった。おそらく、その場にいた、ほとんどの人間がそうだっただろう。

だが、後から、生き残った人間の証言を集め、繋ぎ合わせてみると、真相らしきものの姿が浮かび上がってくる。

同胞が殺戮されるのを見ながら、今までじっと機会を窺っていた数匹のバケネズミが、いっせいに発砲したのだ。標的は二つ。日野光風氏と鏑木肆星氏だった。

わたしたちは、ただ漠然と、バケネズミの意図

は、一人でも多くの人間を殺すことだろうと考えていた。全滅させられるのは端から覚悟の上で、少しでも大きな爪痕を残したいという思い、窮鼠猫を噛む意地で戦いを起こしたのだろうと。だが、野狐丸は、最初から、勝つことしか考えていなかった。そして、そのために設定した戦略目標が、日野光風氏と鏑木肆星氏の命を奪うことだったのだ。

背後からの銃弾のうち、三発が日野光風氏に命中し、うち一発は、分厚い胸を貫通する。日野光風氏は、ゆっくりとその場に崩れ落ちた。

同時に、すばやく散開した四匹の射撃手が、同士討ちも厭わず、四方向から鏑木肆星氏に対して銃撃を浴びせた。硝煙で、鏑木肆星氏の姿は完全に覆い尽くされてしまう。その機を逃さじと、二匹のバケネズミが突進した。二匹とも大量の火薬と鉄菱を身にまとっており、至近距離に達したと思った瞬間、閃光とともに自爆する。

なぜ、バケネズミは、降って湧いたように、突如として間近に現れることができたのか。誰もが、同じ疑問を抱いたはずだ。答えは単純明快だった。彼らは、最初からすぐそばにいたのだ。鏑木肆星氏によって守られていた、直径わずか十六メートルの群衆の中に。

人々は、いきなり自分たちの間から飛び出し、火縄銃を構えたバケネズミの姿を見て、息を呑んだことだろう。どう見ても、人間にそっくりだったからだ。

だが、さすがに、仔細に見ると粗が目立ったらしい。人間のように造形された顔には、髪の毛も眉毛も睫毛もなく、漂白されたような皮膚は百歳の老人のように皺だらけだった。しかも、突出した唇からは、黄色い門歯の先端まで覗いている。

かつて土蜘蛛コロニーの女王は、胎内で発生の過程をコントロールして、風船犬や叢葉兵（そうようへい）のような畸形の怪物を産み出した。その伝で行けば、人間にそっくりな人擬き（ヒトモドキ）が造り出されたことにも、何の不思

議もないだろう。

ヒトモドキの擬態には、二つの効果があった。第一に、群衆の中に身を潜ませることができたこと。もちろん、平生であれば、奇異の目を向ける人もいただろうし、見破られていた可能性もある。だが、バケネズミの急襲によって、全員の注意が外に向けられていたため、誰一人として、異類が紛れ込んでいることに気づかなかった。

そして、もう一つの効果が、狙撃の際に発揮された。バケネズミの外観を持った射手であれば、誰かがとっさに呪力で排除していたはずだ。だが、夜目遠目には人と区別がつきにくいヒトモドキに対しては、攻撃抑制がはたらいて、即座には呪力の発動ができなかったのだ。それは、鏑木肆星氏も、例外ではなかった。ヒトモドキの銃撃と自爆攻撃により、さしもの達人も命運は尽きたかと思われた。

だが、爆発は、なぜか中途半端で終わった。硝煙が晴れたとき、そこには、依然として、鏑木肆星氏が立っていたのだ。

その左右には、二つの奇妙な球体があった。直径二、三メートルほどのシャボン玉のように透明な球で、中で、炎と煙がぐるぐると回っている。

鏑木肆星氏の呪力は、二つの爆発を完璧に封じ込めたのである。それは、覚が風船犬の爆発を抑えつけたときと似ていたが、今回、密封は完璧だった。

鏑木肆星氏は、倒れ伏している日野光風氏に視線をやった。表情も変わらず無言のままだったが、凄まじい怒りのオーラが燃えさかったようだった。

「私が片を付けます。皆さんは、どうか呪力を控えていてください」

平静な声が、かえって凄みを感じさせた。

鏑木肆星氏は、夜でも付けたままだったサングラスを外す。

声にならない、どよめきが起こった。鏑木肆星氏の素顔を知っている人間は、ほとんどいなかったからだ。

切れ長の非常に大きな目は、澄みきっていた。顔の造作も整っており、ハンサムと言ってもいいくらいだ。その異様な眼球を別にすればだが。

鏑木肆星氏には、片目に二つずつ、合わせて四つの虹彩があり、薄闇の中で、ぎらぎらと琥珀色に輝いていた。これは鏑木家に代々伝わる特異な遺伝的特徴で、一般人とは隔絶した呪力の証なのだという。

肆星というのも、実は『四星』という忌み名の一文字を置き換えたものだった。加えて、『肆』の字には、『殺す』という意味もある。

「外道」

低いつぶやきと同時に、爆発を封じ込めていた透明な球に穴が開く。呪力によって抑えつけられていたエネルギーが迸り、残っていた二匹のヒトモドキを襲った。

鉄菱を含む超高速の噴流に曝され、ヒトモドキの上半身は、おろし金で擂りおろされたように消えてなくなった。取り残された下半身が、ぱったりと倒れる。

鏑木肆星氏の恐ろしい目は、群衆の方に向けられた。誰もが硬直し、しわぶきの声一つ聞こえない。

ふいに、二千人の中から十数人が、宙に浮き上がったように見えた。だが、見えない手で吊り下げられ、じたばたと踠いている姿を見ると、その全部がヒトモドキだった。

「擬態などで、私の目をごまかせると思ったのか？」

十数匹のヒトモドキは、巨大なパチンコで打ち出されたように猛烈な勢いで射出され、暗い夜空の彼方へと、超音速の死出の旅についた。

「危ない！」

わたしは、思わず叫んだ。殺し合いの末に生き残ったバケネズミの兵士たちが、残った火器と弓矢を総動員して、鏑木肆星氏の背後から、最後の攻撃を仕掛けてきたのだ。

鏑木肆星氏は、振り返ることもしなかった。

ぐんぐん迫ってきた無数の矢玉は、鏑木肆星氏に近づくにつれて、空気の粘性が急激に増したように速度を落とし、ついには静止した。

鏑木肆星氏は、やおら、ゆっくりと頭を巡らすと、宙に突き刺さったままの矢や弾丸を透かして、バケネズミの方に四つの瞳を向ける。

網膜を灼き尽くしそうな光とともに、一瞬で、生き残っていた六百匹以上のバケネズミは蒸発した。激しい水蒸気が靄となって立ちこめる。一拍遅れて、凄まじい激しい熱風が、わたしたちの方へも押し寄せてきた。とっさに呪力で顔を守らなければ、ひどい火膨れができていただろう。

鏑木肆星氏は、ゆっくりと、倒れ伏したままの日野光風氏の元へ歩み寄った。背後で、ばらばらと音を立てて、矢と弾丸が落下する。

「光風。しっかりしろ」

鏑木肆星氏が抱き起こすと、日野光風氏は、うっすらと目を開け、ごぼりと血を吐いた。

「馬鹿な。か、下等な……ネズミごときに」

「すまん。背後を守っていた私が、油断しなければ」

日野光風氏には、もはや、どんな言葉も耳に入らないようだった。

「なぜ、神の申し子が、こん……脆い肉体……」

覚とわたしは、何か手伝えることはないかと思って走り寄る。しかし、鏑木肆星氏は、こちらを向いて、ゆっくりと首を振った。

「私の中の……芸術家……息絶えてしまう……何と、勿体ない」

日野光風氏は、譫言のようにつぶやき続けた。

「美の……残像を」

それが、最後の言葉だった。一瞬、宙に、うっすらと輝く映像が現れた。女性のようだ。わたしは、思わず息を呑んで見つめた。夕日を浴びて輝く草原に、全裸の、ほっそりした少女が立っていた。こち

らを向いて微笑んでいる。今までに、これほど美しいものは見たことがないと思った。

　いったい誰なんだろうと思ったとき、映像は、ゆっくりと輝度を失っていき、ついには闇に溶け去ってしまう。

　至高の呪力の持ち主と言われた日野光風氏は、あっけなく、その生涯を閉じたのだった。

　鏑木肆星氏は、瞑目し、立ち上がった。

「みなさん。落ち着いてください。当面の危機は去りました。安全保障会議のメンバーは、おられますか？」

　群衆の中に、動きがあった。まず、蹌踉（そうろう）として現れたのは、保健所の金子所長だった。顔色は夜目にも青ざめており、ショックに、ほとんど口もきけないようだった。続いて、両親の姿を発見したとき、わたしは、心の底から安堵した。絶対に生きているとは信じていたものの、無事が確認できたことで涙が込み上げてきた。思わず駆け寄って、しっかりと抱き合う。

　その後ろから、富子さんも、落ち着いた様子で出てきた。

「光風は？」

「亡くなりました」

　鏑木肆星氏が、答える。

「そう……。これに少しでも関わったバケネズミは、一匹残らず駆除しなさい。疑わしいものは、すべてクロとみなして」

「むろんです」

「まさか、こんなことが現実に起きるなんて、思ってもみなかった」

　富子さんは、厳しい声になる。

「それにしても、あの野狐丸というバケネズミ。何段構えもの計画を立てて襲撃をかけてきた智力は、けっして油断なりません。光風は、あれほどの力を持ちながら、相手を見くびったために、非業の死を遂げることになったのです。わかっていますね？」

「はい。ですが、心配はご無用です。私には、どんな攻撃も無効ですから」

「そうね。たしかに、あなたの視界は三百六十度で、死角も盲点もないし、遮蔽物だって見通せる。反応速度は通常の神経細胞の限界を遥かに超えているし、あなたを倒す方法は、私にだって思いつかないわ。……だけど、何だか、胸騒ぎがしてならないの」

その間に、両親を含む安全保障会議のメンバーは、事態の収拾に動き始めた。まず父が、町長として、てきぱきと指示を始める。

「怪我をしていて手当が必要な方は、こちらへ。お医者さんか看護婦さんは、いらっしゃいますか？」

一人の姿が見えないことに気づいて、私は、富子さんに訊ねた。

「あの。鳥飼宏美さんは？」

富子さんの顔がかすかに歪み、ゆっくりと首を振る。

「えっ」

「一番心配性で、一番慎重な子だった。それが、頭に銃弾を受けて即死だったわ。本当に残念でならない。今にして思えば、安全保障会議では、宏美ちゃんだけが、夏祭りは延期すべきだって言ってたのに」

富子さんは、低い、奇妙に平板な声で言った。

「あの悪鬼、Kと遭遇して以来、これほど強い憎しみを覚えたことはないわ。忌まわしいバケネズミ、野狐丸には、必ずこの報いを受けさせなくてはなりません。約束しましょう。未だかつて、どんな生物も味わったことのないほどの苦痛の中で、ゆっくり命を奪ってやることを」

富子さんは、ちらりと壮絶な笑みを見せると、倫理委員会のメンバーたちを呼び集めて、協議に入った。

その間、鏑木肆星氏は、怪我人を除く群衆に向かって呼びかけていた。

「みなさん。非常事態訓練を思い出してください。あのときに作った五人一組になって、大至急、安否の確認をしてください。五人が欠けた組は、他の組と一緒になって、絶対に五人未満にならないよう。……先にできた組から、町を巡回し、残っているバケネズミを虱潰しにしてください。人間に忠実なコロニーであろうが命乞いしようが、一切無視して、発見したら即座に抹殺するのです。確実にすばやく、心臓を破壊するか、首の骨を折ってください。常に五人で前後左右を確認し、絶対に死角を作らないように。上空と足下にも、注意を怠らないで」

覚が、わたしの腕を取った。

「行こう」

「え？」

「僕らは、今も、全人学級のときの班分けが生きてるだろう？　あのときは五人いたけど、今は二人しかいない。だから、どこか五人に満たない組と合流しよう」

「うん。でも……何を考えてるの？」

「まだ、わからない。でも、何だか、心配でたまらないんだよ」

覚は、それ以上は語らなかった。

わたしたちは、すぐに三人の組を見つけ、覚の提案通り合流した。三人は、冶金工房の職人たちだった。藤田さんという年配の男性がリーダーで、町の消防団にも参加しているらしい倉持さんという三十代前半の男性、それに、岡野さんという、わたしより二、三歳上の女性だった。職場で作られた五人組のうち、一人は入院していて祭りには来られず、もう一人は、バケネズミの毒矢を受けて亡くなったのだという。三人とも、深く悲しみ、かつ憤っていた。倉持さんは、バケネズミに対する復讐心を露わにしており、岡野さんは、今晩の襲撃で亡くなった友人を悼んで、ずっと泣いている。入院中の同僚が心配ということだったので、わたしたちは、病院へ向かうことにした。

「早季。気をつけてね」

出発すると告げると、母は、何度もわたしを抱きしめて、涙ながらに見送った。

「いいかい。呪力があっても、五人がばらばらになっては危険だ。絶対に、離れるんじゃない。いいね？」

父は、くどいくらいに念を押す。

「わかったわ。だいじょうぶ」

わたしは、強いて明るく答えたが、少し前から、胸中に言い様のない不安が兆しており、それは強くなるばかりだった。

神栖66町で唯一の、入院患者のためのベッドがある病院は、町の中心部から隔たった黄金（こがね）の郷（さと）に置かれていた。周囲は水田地帯で、緑の葉の間から、ようやく稲の穂が出てきたところである。

わたしたちは、一艘の小舟に乗って、まっ暗な水路を走っていた。みな、一刻も早く目的地に着きたいと思っていたが、安全を確認しつつ、ゆっくり進まなければならないのが、もどかしかった。まだ、夜が明けるまでには時間があり、バケネズミの待ち伏せを警戒しなくてはならないからだ。わたしたちの前には、誰も乗っていない囮（おとり）の小舟を走らせているが、向こうが引っかかってくれるかどうか保証の限りではない。

「ねえ、覚。何だか心配でたまらないって、どういうこと？　もう、話してくれてもいいでしょう？」

覚は、舟に乗っている他の人の耳を気にするように、小声で答える。

「うーん。何というか、納得のいかないことばかりなんだ」

「たとえば？」

「まず、野狐丸は、どうして勝ち目のない戦いに踏み切ったのかということ。あいつの性格は、君も知ってるだろう？　充分な勝算がない限り、絶対に、イチかバチかの賭けはやらないと思うんだけど」

「君たちは、野狐丸のことを、よく知ってるの？」

艫の方で周囲を警戒していた藤田さんが、立ち上がって、そばへやって来る。

「はい。あいつがまだスクィーラっていう名前だったときに、偶然、出会ってるんです」

覚は、夏季キャンプのことを簡単に説明した。

「なるほど。たしかに、狡猾きわまりないやつらしいな。しかし、この先、どう転んでも、バケネズミの側に勝算などありえないよ。おそらく、今夜の奇襲攻撃に、すべてを賭けていたんだろう」

「僕も、そうは思うんですが……」

覚は、妙に、奥歯に物が挟まったような感じだった。

「さっき、祭りの広場へ行く途中、別のバケネズミの一隊に襲われたんです。そいつらは、僕が始末したんですが」

「そう。それは、よくやったね」

「ええ。ただ、死んだバケネズミの刺青を見てわかったんですが、塩屋虻コロニーの兵士じゃありませんでした」

「え？　そうだったの？」

わたしは、愕然とした。バケネズミの管理を専門にしていながら、とっさに、そこまで観察眼が働かなかったのが、口惜しい。

「額に、『別』の文字がありました。あれは、鼈甲蜂コロニーを示す符牒です」

「鼈甲蜂？　それ、最初に、塩屋虻によって襲われたコロニーだよな？　それが、なぜか、塩屋虻側に寝返ったという」

舟を操りながら、わたしたちの話に聞き耳を立てていた倉持さんが、鋭い声で訊ねる。このあたりの経緯は、すでに多くの人の知るところとなっていた。

「はい。それで、思い出したんです。そもそも、鼈甲蜂コロニーが、どうして敵方に付いたのかが、疑問でした」

「ふうん。それで、君の推測は？」と、藤田さん。

「……鼈甲蜂コロニーは、塩屋虻側が必ず勝つと踏んだんだと思います。それで、自らの存続のために、あえて大雀蜂を裏切った」

「やっぱり、勝算があったという話か。しかし、やはり考えすぎだろう。……一応、話の筋は通ってはいるがね」

藤田さんは、うっすらと笑みを浮かべて首を振る。

「でも、もう一つ、気になることがあるんです。塩屋虻側は、現実に、大雀蜂軍を全滅させてるんですよ。奇狼丸は百戦錬磨の将軍ですし、麾下（きか）の兵士たちは、バケネズミとしては最強と言っていいと思います。それが、なぜ、いとも易々と打ち破られたのか。今晩の奇襲攻撃で使ったような手は、バケネズミ同士の戦いでは、あまり役に立たないと思うんですが」

藤田さんの顔から、笑みが消えた。

「つまり、まだ、奥の手があるということなの？」

わたしは、覚に質問した。

「うん。その正体は、まだ、わからないけど。君のお母さんが言ってた、古代の大量破壊兵器というやつかもしれないし」

後半は、声をひそめる。

「でも、鏑木肆星さんは、あのとき……」

大雀蜂軍を壊滅させたのは、呪力を持つ人間だと断言していたはずだ。

「うん」

覚は、目顔で、それ以上は言うなと告げていた。そんなことを他の三人に聞かせても、いたずらに動揺を誘うだけだからだ。

「……わかった。たしかに、やつらは、銃や弓矢よりずっと強力な武器を備えているかもしれない。各自、充分に注意して行動することにしよう」

藤田さんは、考え深げに言う。

「馬鹿馬鹿しい。どんな武器を持ってようと、呪力

に勝てるはずがない。こっちから先制攻撃をかけりゃ、問題ないでしょう？」

　倉持さんが、苛立たしげに口を挟んだ。

「やつらが、どっかに隠れたとしても、緊急事態なんだから、建物ごとぶっ潰しゃあいい。とにかく、根本を殺したバケネズミどもを皆殺しにしてやらないと、俺の気が済まないんですよ！」

「気持ちはわかるが、少し冷静になった方がいい。やつらは、周到な準備をして、ことに臨んでるんだ。下手をすると、足元をすくわれるぞ」

　藤田さんが、たしなめた。

「はいはい。わかってますって」

　倉持さんは、そっぽを向いて答える。心中の動揺を示すように、舟が若干蛇行した。

　それまで、ずっと黙って聞いていた岡野さんが、顔を上げた。

「わたしだって……わたしだって、あんな邪悪な生き物は、一匹残らず殺してやりたい。でも、今は、病院にいる大内さんのことが心配なんです」

「そうだな。だがまあ、無事だよ。病院には、五、六十人からの人間がいる。病人だって、ほとんどは呪力を使えるんだ。バケネズミなんかに、むざむざやられるはずがない」

　藤田さんは、励ますように言った。

「そうですよね……きっと」

　岡野さんは、自分に言い聞かせるようにつぶやく。

「だいじょうぶ。心配いりませんよ」

　わたしは、岡野さんの肩に手を回す。岡野さんは、かすかに震えていた。安心するように優しく叩いてあげた。大内さんというのは、岡野さんの恋人かもしれないと思う。昔、同じようにして真理亜を慰めていたことを思い出して、感傷的な気分になる。

　囮の舟を先にして、わたしたちは、船着き場に到着した。そこから病院の真正面までは、細い水路が

通っているが、両側は水田であり、バケネズミなら稲の間や泥の中に身を潜ませることも可能かもしれない。そこを通過するのは、いかにも危険なように見えた。

「あれ、見てください」

覚が、木造三階建ての病院を指さして囁いた。建物の明かりはすべて消えており、物音ひとつしないが、玄関の部分には深い闇が蟠（わだかま）っている。扉が開け放たれているのだろうか。だが、さらによく見ると、周囲の何枚かの板が捲（まく）れ上がっているのがわかった。

「何だ、あれ？　扉が壊れてるのか？」

「ええ。大きな穴が開いてるみたいですね」

「そんな……！」

岡野さんが、叫び出しそうになったので、藤田さんが、あわてて口を押さえる。

「……しっ。だいじょうぶだ。何かあったとしても、みんな、避難してるかもしれない。とにかく、病院の中を調べてみないと」

二艘の舟を、可能な限り静かに前進させる。わたしと覚、藤田さんは、水田の間を通り過ぎながら、左右に目を光らせた。いつ、バケネズミが襲ってきても、おかしくない状況だった。心臓は、他の人にも聞こえそうなくらい大きな音で打っている。掌は、たちまち汗でびっしょりになり、何度も浴衣で拭わなければならなかった。

二艘の舟は、病院の正面に着いた。やはり、玄関の扉のあった部分はそっくり消失していた。代わりに開いていたのは、直径二メートルほどの、きれいな円形の穴である。

「バケネズミの仕業だとしても、この穴、いったい、どうやって開けたのかね？　火薬の臭いもしないし」

藤田さんが、小鼻をひくつかせて、怪訝そうに言う。

「どうだっていいよ、そんなことは！　さっさと行

きましょう」

倉持さんが、小舟から立ち上がる。

「ちょっと待て。何があるか、わからんぞ」

藤田さんの制止を振り切って、倉持さんは、舟から降り立った。

わたしたちは、唖然として彼の後ろ姿を見つめていた。鏑木肆星氏とはわけが違うのだ。この状態で狙い撃ちされたら、ひとたまりもないだろう。

だが、周囲の闇は、あいかわらず、静まりかえったままだった。倉持さんは、大股に歩を進めて、玄関の穴を覗き込んだ。

「……誰もいないな。中は、そこら中に木っ端が散乱してる。超巨大な丸太かなんかで、扉をぶち破ったみたいだ」

倉持さんの声は、闇夜に、野放図に大きく響いた。

「早季。ちょっと変だと思わないか？」

覚が、緊張した声で、わたしに耳打ちする。

「どうしたの？」

「あまりにも、静かすぎるだろう？」

「それは、そうだけど……」

そう言いかけて、わたしは、はっとした。周囲から、虫の音一つ聞こえてこないのは、おかしい。いや、通常、この季節であれば、病院の周囲の水田から蛙の大合唱が響いているはずだ。

「……もしかして、このまわりに、バケネズミが隠れてるっていうの？」

「ああ。それも、かなりの数だと思う」

「どうしよう？」

覚は、藤田さんと岡野さんを、そっと手招きし、状況を説明した。

「……やつらは、僕らが全員舟から下りるのを、待ってるんです。無防備な姿をさらしたところで、一気に攻撃をかける腹でしょう」

「だ、だったら、こっちから先にやるか？」

「ええ。でも、今、戦端を開いたら、倉持さんは、

敵の標的になってしまいます」

「早く、呼び戻さなきゃ」

岡野さんが、震え声で囁く。

「いや、そうすると、こちらが待ち伏せに気づいたことを悟られてしまう。それならばと盲撃ちしてこられても、かえって厄介です。倉持さんも、無事にここまで戻るのは難しくなるでしょうし」

「じゃあ、どうするの？」

わたしは、訊ねた。

「倉持さんが、あの穴から病院に入るまで待とう。姿が隠れた瞬間に、やつらの機先を制して叩き潰すんだ」

倉持さんは、暗い穴の前に立って躊躇していた。建物の中は外以上に真っ暗だったが、だからといって、松明を掲げるのは、さすがに危険だと思ったのだろう。

「おーい。何やってんだよ？　来ないのか？」

振り向いて、苛立たしげに、こちらに声をかける。

「すぐ行きますよ。ちょっとだけ待ってください。今、まわりの様子を探ってるんです」

覚が、答えた。

「ちぇっ。何だよ。びびってんのか？」

倉持さんは、吐き捨てるように言うと、意を決したように穴をくぐって、姿を消す。

その瞬間だった。覚の合図で、わたしたちは、それぞれの持ち場に向けて、呪力を解き放つ。

水田のすべての稲が、天を焦がさんばかりの勢いで燃え上がった。

二、三秒間は、何事も起こらなかった。考えすぎだったのかと思い始めたとき、伏兵たちは、水田の水と泥を跳ね上げて、いっせいに姿を現した。その数は、数百を超えていただろう。稲穂の間に隠してあった武器を取り出すと、もはやこれまでとばかりに、ありったけの矢を放ち、火縄銃を撃ちかけてくる。

だが、待ち伏せが露見した段階で、すでに、バケネズミには分のない状況になっていた。赤々と燃え上がった稲穂は、わたしたちには、敵の所在を教えてくれるまたとない照明になっていた上に、闇に慣れた彼らの目を眩ませる役割も果たしたのだ。バケネズミたちの放った矢玉は、舟に命中したものさえ稀で、大半は目標から大きく逸れて、わたしたちの頭上を飛び越えていった。

一方、水田を発火・炎上させた後は、フリーハンドを得た四人の情け容赦のない攻撃が始まった。恐怖に駆り立てられ、怒りと復讐心に燃えた四人の作るイメージは、容赦なく、バケネズミたちの首を刎ね、頭蓋骨を粉砕し、脊髄をへし折り、心臓を押し潰していく。ときおり、呪力同士が干渉し合って虹のようなスパークを放つのさえ、ほとんど意に介さなかった。ただ、一匹も漏らしてなるものかという執拗な思いが、わたしたちを徹底的な殺戮に向かわせる。実りの秋を迎える前の水田は、稲の穂が爆ぜる音とバケネズミたちの断末魔の合唱が響く、阿鼻叫喚の巷と化していた。

「もういい！　やめて！　充分です！」

覚が、大声でわたしたちを制したときには、十分以上が経過していた。稲穂もほとんど燃え尽きて、敵からの反撃も完全に途絶えている。

「やったか……？」

藤田さんが、興奮冷めやらぬ様子で、身を乗り出した。

「ええ。敵は、たぶん、もう全滅しています」

覚が、答える。水田を覆っていた火が自然に鎮火すると、周囲は、再び闇に閉ざされる。焼け焦げた肉の悪臭が、あたりに立ちこめていた。

「わたし……こんな……」

そう言うなり、岡野さんは、船縁から身を乗り出して嘔吐し始めた。

「無理もないわ。岡野さん、気持ちを楽にして。いいのよ。誰だって、こんなことしたくないもの。た

とえ、相手がバケネズミだって」

わたしは、岡野さんの背中をさすってあげた。

「なーに、だいじょうぶ。平気だ、平気……」

藤田さんは、意味もなく繰り返してから、急に思い出したように、倉持さんに向かって呼びかけた。

「おおい！　倉持！　どうした？　無事なのか？」

だが、いつまで待っても、返答はなかった。

「どうしたんだろう？」

藤田さんは、当惑して覚に訊く。

「わかりません。流れ弾か何かに当たったんでなければ、いいんですけど」

「もう、バケネズミは、いないだろう？　見に行った方が、いいのかな？」

「そうですね。ただ、病院の中には、まだ、残党が潜んでるかもしれませんけど」

「うーん、そうかあ……じゃあ、どうすればいいのかな？」

出発するときはリーダー役だったのが、いつのまにか、すっかり、覚に頼り切るようになっている。たぶん、これでも、ご本人は、若者の意見を汲み上げている大人のポーズを取っているつもりなのだろう。

「僕が、行きます」

「そう？　頼めるかな」

「覚！　何言ってるの？」

わたしは、思わず叫んだ。

「だいじょうぶだよ。待ち伏せしてたやつらは全滅したし、今度は、背後から攻撃を受ける可能性はないから」

「でも……だからといって」

「僕を援護してくれ」

覚は、静かに舟から下りた。落ち着いた足取りで、病院の正面玄関へと向かう。慎重に穴の周囲を検分してから、こちらを振り返った。

「倉持さんは、どこにもいない。たぶん、もっと奥へ行ったんだと思う」

「そうか。君、少し見てきてくれるかな？」

藤田さんが、猫撫で声を出して、覚を追い立てようとする。わたしは、かっとなった。覚が死地に向かうのを、黙って見ているわけにはいかない。

「だめよ！　応援を呼びましょう！　一人で建物に入るなんて、危険すぎる」

「しかし、今は、どこもかしこも、みんな大変な状態だろう？　応援に来てもらうのは、難しいんじゃないかな」

藤田さんは、わたしをたしなめるような調子で言った。

「安全な場所にいて、無責任なことばっかり言わないでください！　だったら、あなたが自分で行ったら、どうなんですか？」

わたしが一歩も引かないと、藤田さんは、鼻白んだように沈黙する。

「覚！　だめよ。絶対に、それ以上行ったらだめ！」

覚は、迷っていたようだが、渋々、こちらに引き返してきた。

「でも、早季。このままじゃ、埒があかないよ」

「あなたが死んだら、埒があくわけ？」

わたしの剣幕は、たぶん、相当なものだったと思う。覚も、たじろいだようだった。

「いや。そんな……」

好奇心で後先を忘れてしまうところは、十二歳の頃からまったく進歩がない。

「……うーん、そうか。わかったわかった。そうだな。渡辺さんの言うことも、もっともかもしれない」

藤田さんが、宥めるように言う。

「病院の建物を破壊しよう。もう、それしかないよ。そうすれば、かりに、バケネズミが潜んでたとしても……」

「班長！　何、馬鹿なこと言ってるんですか？」

今度、声を荒げたのは、意外にも岡野さんだっ

た。

「中には、まだ、生存者がいるかもしれないんですよ？　大内さんも、倉持さんだって。それなのに、建物を壊すなんて……。みんなを犠牲にする気なんですか？」

「いや、私はだな、そんなつもりは微塵もなくて……ただ、その、少しずつ、建物を解体していければと思ったんだが」

藤田さんは、すっかり、たじたじという体だった。

「あ。あれ、見て！」

わたしは、三階の窓を見上げて、叫んだ。ぼんやりと光るものがあったのだ。

「何だろう？　光ってる」

覚も、ほぼ同時に、気がついたようだった。ぼんやりと発光して、ときおり点滅する。病院の前に到着したときには、こんな光はなかった。水田が炎上している間は、たぶん、光っていても見えなかっただろうが。

「誰かいるんだ……」

覚は、再び病院の方へ近づく。

「あれは、ホタルなんかじゃない。呪力で作った光だ」

人魂を作った経験はなかったが、光の専門家である覚の言葉だけに、それなりの説得力はあった。

「たぶん、誰かが助けを求めてるんだ。行かなきゃ」

「でも、罠かもしれないわ。だって、あんな光を作れるのなら、窓を開けて助けを呼べるはずじゃない？」

わたしの反論に、覚は、首を振った。

「そうとも言えないよ。重傷を負ってて、動けない状態かもしれないし。とにかく、僕は行く。誰だかわからないけど、見捨てるわけにはいかないだろう？」

今度は、覚の意思は固いようだった。これ以上、

止めても無駄だろう。

「わかったわ。じゃあ、わたしも行く」

「いや、早季は……」

「覚ひとりじゃ、後ろから襲われたら、対処できないでしょう？」

わたしは、舟を下りた。駒下駄を履いたままなので、変に足下が定まらない。

「わたしも、行きます」

岡野さんが、小さな、しかし決然とした声で言う。

「三人なら、もっと安全なはずです」

「うーん。あんまり大人数で行くのも、かえって危険かもしれないなあ……」

藤田さんが、わざとらしい大声で嘆息するように言うが、誰も応えなかった。

「わたしは、行きます。大内さんと倉持さんの無事をたしかめなきゃ」

岡野さんは、舟を下りて、わたしと覚に歩調を合わせた。

「わかった。だったら、私はここにいて、まわりを見張ってよう。全員が行くのは、いかにも危ういからね。何かあったら、大声で助けを呼ぶんだ」

臆しているがゆえの言い訳であることは、誰の耳にもあきらかだったが、戦術としては、あながち間違っていないのかもしれない。結局、藤田さん一人を舟に残し、わたしたちは、病院の中を探索することにした。

覚、わたし、岡野さんの順番で、丸い穴をくぐって一階に入る。倉持さんが言っていたとおり、床は細かい木の破片で埋め尽くされていた。

細長い木の棒を拾ったり、壁から折り取ったりして発火させ、それぞれに松明を作る。こちらの姿が丸見えになるのは危険だと思ったが、明かりがなければ、進むことさえ困難だった。

一階の入ったところには、広いロビーがあり、右手に受付のブースがあった。正面には二階に上がっ

て左右に分かれている玄関がある。本来なら、一階の部屋を全部調べてから上がるべきなのかもしれない。しかし、今は、一刻も早く三階に行く必要があった。もし、助けを求めている人が怪我をしているのなら、すぐに手当をしなければならない。

覚を先頭に、階段を上がる。呪力で患者を搬送できるために、あまり機能的な作りにはなっていない。わたしは主に左右を警戒し、岡野さんは、背後に気を配る役回りだった。駒下駄の下で木の階段がぎしぎしと音を立てるのが、ひどく神経に障った。

「倉持さん、どこへ行っちゃったんだろう?」

岡野さんが、沈黙に耐えかねたようにつぶやく。気休めになりそうな答えすら思いつかなかったので、わたしと覚は、黙っているしかなかった。

二階から三階に上がると、緊張感は、耐え難いほどに高まってきた。倉持さんが消えてしまったことを考えると、中に何もいないとは考えられないからだ。

先頭を進んでいた覚が、三階の廊下に上がる寸前で、立ち止まった。

「どうしたの?」

できるだけ小さな声で、囁く。

「さっきの光だ。廊下の右手の方。今、窓ガラスに映った」

覚も、囁き返す。

「早季。岡野さん。松明だけを、ゆっくりと前に進めてください」

わたしたちは、覚の言うとおりにした。宙に浮いた二本の松明が、階段の上をゆらゆらと前進し、三階に達する。廊下が明るく照らし出された。

「まだ、正体を現さないのか」

覚は、精神を集中し始めた。廊下の中程にある、わたしたちから見て真正面の空間に、ぼんやりと輝く領域が生まれた。鏡だ。覚は、鏡の角度をゆっくりと変えていく。

松明の光で、右手の廊下が、奥まで映し出され

た。誰もいない。いや、床に倒れている人間の姿が見える。ぴくりとも動かない。死んでいるようだ。

覚は、鏡を反転させて、今度は、左手の廊下を映し出す。

いた。ぎょっとしたように立ち竦んでいる、バケネズミの兵士が四匹。向こうからも、こちらの姿が見えたのだろう。一匹が、あわてて、吹き矢を発射した。細長い矢は、覚の作った鏡を突き抜けて、右手に飛んでいく。

「殺すんだ！」

覚の指示に、戸惑う。直接目視したもの以外に、呪力を及ぼした経験はなかったからだ。だが、四匹のうち、一匹のバケネズミが、宙に浮き上がった。覚が捕まえたのだろう。

遅ればせながら、わたしと岡野さんも、覚に倣う。鏡に映った映像だけを頼りにして、直接見ることのできないバケネズミに呪力を及ぼしたのだ。

覚の捕まえたバケネズミの首が、ぐるりと回った。続いて、岡野さんが、さっき吹き矢を使った兵士を捕捉し、頭を吹き飛ばす。

わたしも、ようやく、左右反転している映像に、自分のイメージを重ねることができた。もはや、人間以外の生き物に対する残虐さには、心が完全に鈍麻していた。見えない鎌で首を切り落とすと、大量の血液を噴き上げて、バケネズミは仰向けに倒れる。その間に、覚が、最後の一匹を片付けていた。

「どれか、残しておいた方が、よかったんじゃない？」

「いや、どうせ、言葉が通じないよ。日本語が話せるのは、一部の知識階級だけだから」

わたしたちは、ようやく三階に上がった。まだ、どこかに罠があるのではないかという疑心暗鬼で、ゆっくりと歩を進めたが、どうやら、もう、バケネズミはいないようだった。

岡野さんは、廊下に倒れている人に近づき、悲鳴を上げた。

「倉持さん……そんな、嘘よ！」

「見ない方がいい」

覚が、岡野さんを死体から引き離す。わたしは、すすり泣く岡野さんを抱きしめた。

「苦しんだ形跡はない。たぶん、即死だったんだ」

覚が、ぽつりと言う。おそらく、その通りだったろうと、わたしも思った。倉持さんが病院に入った瞬間、わたしたちは、水田の稲に火を点けた。何事かと思って、倉持さんは振り返ったはずだ。そのときに、背後から、吹き矢か何かで襲われたのだろう。さっきのバケネズミたちが、遺体をここまで引っ張り上げたのだ。あわよくば、わたしたちを油断させて殺すつもりだったに違いない。

「奥を、見てみよう」

覚は、廊下をさらに右に進んでいく。

「気をつけて！」

「だいじょうぶ。いくら何でも、もう、伏兵はいないよ。それより、下で見たあの光が、どこから来たのか……」

覚は、急に口をつぐんだ。

「どうしたの？」

「早季。来てくれ！」

覚は、廊下の右側にある病室の一つに飛び込む。わたしたちも、反射的に後を追った。

そこで目に飛び込んできたのは、予想だにしていなかった光景だった。

4

天井から、巨大な繭のような物体が三つ、ぶら下がっている。異様さに、ぎょっとしたが、よく見ると、シーツでぐるぐる巻きにされた上から、エジプトのミイラのように包帯で緊縛されているのだった。黒い髪の毛がはみ出しているので、人間らしいとわかる。しかも、胸郭の部分は、かすかに上下動していた。まだ、息があるのだ。

「下ろそう」

わたしたちは、連携して、ミイラのような物体を宙に浮かせながら、包帯を切断して、ゆっくりと床に下ろした。

シーツを開くと、中から、三人の人間が出てきた。一人は、わたしも診察してもらったことがある、野口さんというお医者さんだった。後の二人は、看護婦さんと清掃員らしき人で、それぞれ、関さん、樫村さんという名札が付いている。三人とも、目隠しをされ、後ろ手に縛られていた。すぐに手を縛っていた包帯を解き、目隠しも外したのだが、三人とも、目の焦点が合っておらず、小動物のように小刻みに震えていた。

「だいじょうぶですか?」

覚の問いかけに対しても、ほとんど無反応である。

「この方たち、怪我をしてるのかも。頭を打ってるとか」

岡野さんが、三人の身体を調べるが、かすり傷くらいしか見つからなかった。

「何か、薬でも投与されたのかな……?」

覚は、三人の目を順番に覗き込んで、首をかしげた。

わたしには、なぜか、この場の状況が、総毛立つほど恐ろしかった。病室にあったのが、無惨に切り刻まれた三人の死体だったとしても、おそらく、こ

れほど怯えることはなかったに違いない。ただ、何かが不条理で、ひどく間違っているという感じがしてならなかったのだ。

しかし、その理由は、自分でも、はっきりとはわからなかった。

「あのー。下で見たホタルみたいな光は、この方たちの誰かが作ったんですよね？」

岡野さんが、納得がいかない表情で言う。

「そうですね。そうとしか、考えられない」

「もし、そうだったら、呪力を使えたんだから、自分で縛めを切ることもできたはずじゃないですか？」

「いや……この人たちは、きわめて巧妙なやり方で、拘束されてたんです。目隠しをされていれば、対象が見えないので、呪力を使うのは難しいでしょう。しかも、宙吊りになっているという不安感と、落下の恐怖で、ますます包帯を切ったりはしにくいはずだ。それに、ついさっきまで、バケネズミの見張りが付いてましたからね」

「それで、あの光を？」

「たぶん、そうでしょう。周囲がまったく見えない状態では、あれが精一杯でしょうね。病院内部の様子は、記憶に焼き付いているはずですし、そこに、ホタルが飛び回るイメージを重ねたんだと思います。誰かが来て光に気づいてくれという、一縷の望みを込めて」

覚と岡野さんの会話を聞いている間に、わたしは、この部屋が置かれた状況の奇怪さが、ようやくわかってきたような気がした。

「覚。……この人たちは、どうして、捕虜になったんだと思う？」

「え？　それは、バケネズミにふいを衝かれたからだろう？　驚くようなことじゃないよ。野狐丸の計略では、すでに、大勢の人が殺されてるじゃないか」

「そりゃあ、生身の人間だもの。背後から撃たれた

ら助からないわ。だけど、何の抵抗もできずに生け捕りにされ、目隠しまでされるなんて。……普通じゃ、考えられない」

覚は、絶句した。

「……そんなことって、ありえないわ」

岡野さんが、ぞっとしたような声で言う。

「どんな状況でも、たとえ、誰かを人質に取られてたとしても、呪力を使えば、何とかできるはずなのに。それも、三人もいて……」

「しかし、絶対にそうとは言い切れないだろう？　意識を失う程度の打撃を与えるとか、麻酔を使うとか。まあ、実際に何があったのかは、わからないけど……」

覚は、腕組みをして考え込む。

「……あ。あっ。あっ」

野口医師が、突然我に返ったように、声を出した。

「気がつきましたか？　僕らは、救援に来ました。もう、だいじょうぶです。ここにいたバケネズミは、一匹残らず退治しましたから」

覚が、野口医師の前にしゃがんで、話しかける。

「に……逃げろ。早く」

野口医師は、咳き込むような早口で言う。

「どうしたんです？　何が、あったんですか？」

「す、すぐ、戻ってくるぞ……。今すぐ、逃げるんだ」

「戻ってくる？　何が？」

「大内さんは——入院してた患者です——無事なんですか？」

覚と岡野さんが、同時に野口医師に質問しかけたとき、ふいに、看護婦の関さんが大声で喚（わめ）き始めた。

何を言っているのかは、まったく聞き取れない。そこにあるのは、ただ剝き出しの恐怖だけである。これほど恐ろしいことばかりが起こった晩でも、その絶叫は、わたしたちの心胆を寒からしめた。わた

しは、物心ついてから一度として、人間がこんな声を出すのを聞いたことがない。

「関さん？　しっかりしてください。だいじょうぶですから！」

岡野さんが、懸命に怖さを押し殺して、関看護婦を落ち着かせようとするが、何の効果もないばかりか、かえって興奮させてしまったようだった。半ば廃屋と化した病院の中で、延々と恐ろしい叫び声が響き渡る。

すると、その声に触発されたのか、樫村さんが、むっくりと起き上がった。

声をかける暇もなかった。樫村さんは、わたしたちを一瞥しただけで背を向け、一目散に逃げ出していく。その足取りは、意外なほどしっかりしており、階段を二、三段とばしで駆け下りる音が聞こえた。

どうすればいいのか。わたしは、判断に迷って、覚の方を見た。

「とにかく、ここを出よう。この人たちも舟に乗せて、この場所を離れるんだ」

「今、逃げた人は？」

「それは、後で考えよう」

わたしたちは、医師と看護婦に手を差し伸べて、立ち上がらせる。

「早く、早く、逃げないと……」

野口医師は、正気に戻ったと思ったのも束の間で、譫言のようにつぶやき続けている。足下もおぼつかないようだ。関看護婦の方は、ようやく叫ぶのを止めたものの、今度は、瘧のように身体を震わせるばかりで、まったく言葉を発しなくなってしまった。

階段を下りている途中、外から、誰かの大きな声が聞こえた。

「何だろう？」

覚が、三階に駆け戻り、窓の外を透かし見た。わたしも、その横にぴったりと付く。

　ずっと向こうを全速力で走っている男の姿が見えた。星明かりの下では、はっきりとはわからないが、樫村さんのようだ。

「おおい！　どうしたんだ？　もう、逃げなくていいんだぞ！」

　叫んでいるのは、藤田さんだった。舟の舳先に立ち、しきりに呼びかけているのだが、樫村さんは、一顧だにしない。

　覚は、窓を半分開けて、藤田さんに呼びかけようとした。

「藤田さん！　あの人は……」

　すると、階段の途中から、野口医師が、声を振り絞って警告した。

「……だめだ！　大声を出したら、ここにいると気づかれる」

　さほど大きな声ではないが、その声音の必死さは、ただ事ではなかった。わたしたちは、反射的に窓から離れる。

「どういうことですか？　バケネズミは……」

「バケネズミなんかじゃない！　あいつが……あいつが、戻ってくるんだ！」

　再び、関看護婦が、狂ったように叫び始めた。ひどく神経に障る、まるで怪鳥のような声だった。

「黙らせろ。早く」

　野口医師に言われて、岡野さんが、関看護婦の口を塞いだ。野口医師の声には、そうせざるを得ない迫力がこもっていたのだ。関看護婦は、ひどく暴れたが、急に虚脱したかのようにおとなしくなる。

「あいつって、誰なんですか？　いったい、ここで、何があったんですか？」

　覚は、野口医師の両肩を摑んで、たたみかけた。

「あいつは……あいつが誰かなんて、わからない。ただ、殺された。病院の職員、患者、全員だ」

　岡野さんが、ショックに身体を硬直させる。

「生き残ったのは、我々三人だけだ。たぶん、人質にしようと……」

「どうして、抵抗しなかったんですか？」

「抵抗？　抵抗なんて、不可能だ。逃げようとした者は、皆、殺された」

どこからか、かちかちという小刻みな音が聞こえてきた。怪訝に思ったものの、すぐに、その音が野口医師の口元から発せられているのに気づいた。恐怖の記憶が蘇り、歯の根も合わない状態になっている。

「逃げろ。早く。さもないと……」

野口医師は、狂おしい目をして言う。

「覚。とにかく逃げよう！」

切迫した危機感に、わたしは、叫んだ。

「わかった」

わたしたちは全員、無言のまま、大急ぎで階段を下り、一階のロビーまで来る。ちょうど、そのときだった。

「助けてくれ！」

恐ろしい叫び声が聞こえた。玄関に開いた大きな穴から、樫村さんが、こちらに向かって走ってくるのが見えた。まだ、七、八十メートルほど離れていただろうか。

「おーい！　こっちだ！」

藤田さんが、大声で応じるのが聞こえる。

「遅かったか……表はだめだ。裏へ逃げるんだ」

野口医師が、きびすを返し、よろめく足で病院の奥へと向かう。

わたしたちは、どうするべきかわからず、その場に立ちつくした。

次の瞬間、こちらへ向かってくる樫村さんの全身が、眩（まばゆ）い炎に包まれた。

「そんな……そんなことが」

覚が、つぶやいた。我が目を疑うというのは、このことだろう。まるで、悪夢の中にいるようだった。どうしても、信じられない。こんなことができるのは……。

樫村さんは、炎の中で両手を振り回して、もがき

苦しんでいる。すると、一陣の突風が吹いて、大きく炎が揺れ、ほとんど吹き払われようとした。

藤田さんだ、と気がついた。藤田さんが、呪力で炎を消そうとしているのだ。

「手伝わなきゃ！」

わたしは、自分でも呪力を発動して、残りの炎を消し去ろうとした。

「よせ！」

覚が、わたしの肩を摑む。

「でも、早く助けないと！」

「逃げるんだ！」

覚は、強引にわたしの腕を摑み、病院の奥へと走り出す。引きずられながら、わたしは、表に目をやった。

炎は、さっきより大きくなっていた。樫村さんは、ばったりと倒れ、そのまま燃え続けている。

藤田さんの姿が見えた。舟から下りて、樫村さんの方へ行きかけ、急に方向転換して、こちらへ走ってくる。

その姿が、突然、引き戻された。

わたしは、息を呑んだ。やっぱり……でも、こんなことは、絶対、ありえない……。

藤田さんは、宙に浮いていた。自ら浮遊しているのではない。

呪力で、宙吊りにされているのだ。

わたしは、上げかけた悲鳴を呑み込んだ。

とうていあり得べからざるものを目にしたとき、人間は、行動の指針を見失って、妙にぼんやりとしてしまう。このときのわたしが、まさにそうだった。

そして、わたしからわずか四、五十メートルしか離れていない空中では、一人の人間が、生きながら、八つ裂きの憂き目に遭おうとしていた。

「見るな」

すんでのところで、覚が、わたしの頭をねじ曲げ、反対側を向かせる。

「ぎゃあああああああ……！」

背後で、凄まじい絶叫が起こった。とたんに、空気が濃密な湿り気を帯び、血の臭いが漂ってくる。覚は、無言のまま、わたしの肩を抱えて、病院の奥へと急いだ。

「早く。こっちだ」

野口医師が、小声で叫び、手招きする。最初に見たときにはわからなかったが、階段の裏側には、奥へと向かう細い廊下があった。あとで知ったことだが、それは遺体搬送用の通路だった。

「あれは、いったい、何なんだ？」

覚が、震える声で、野口医師を詰問する。

「わかってるだろう？　誰でも知ってるはずだ。あいつは……」

野口医師は、急に口をつぐみ、手真似で、わたしたち全員に、静かにするようサインを送った。

わたしは、はっとして耳を澄ませた。

聞こえる。足音だ。さほど体重はなく、歩幅も小さいようだ。ゆっくりと病院の玄関に近づいてくる。

足音は、玄関の穴をくぐり抜けて、中に入ってきた。そして、ぎしぎしと板を軋ませながら、階段を上っていく。

ふと、関看護婦の顔が目に入り、わたしは、愕然とした。恐怖に醜く歪み、今にも叫び出しそうな顔をしているではないか。ここで大声を上げられたら、すべては終わりだ。

だが、その前に、岡野さんが、すばやく行動に出た。関看護婦の頭を胸に抱き寄せて、あやすように背中をさすり始めたのだ。関看護婦は、一瞬だけ身を強張らせたが、徐々に緊張を解いていく。

その間に、足音は、途中の踊り場を過ぎ、二階へと向かう。

野口医師は、大きく前に手を巡らした。わたしたちは、足音をひそめて、病院の裏手へ向かった。野口医師は、裏口のドアのノブを握り、開けようとす

る。

開かない。後ろに続くわたしたちは、パニックに陥りそうになったが、ドアの上にある小さな閂を開けると、ドアは、かすかな軋みを立てて開いた。

まるで、腐臭漂う狭い棺桶の中から、広々とした地獄へと抜け出たような感じだった。

ドアを閉めると、野口医師は、あさっての方向へ、ふらふらと歩き出す。

「先生。そっちじゃありません」

覚が引き留めようとした手を、野口医師は、邪険に振り払った。

「付いてくるな。どっかへ行け」

「待ってください」

「よく聞け。ばらばらに逃げるしかないんだ。それでも、結局は、全員殺されるだろう。しかし、運がよければ、一人くらいは助かるかもしれない」

病院の建物の中から、異様な声が響いてきた。人が泣き喚くような、獣の雄叫びのような、奇妙な声だった。三階で、バケネズミの死骸を発見し、捕虜が消え失せたのに気づいたのだろう。一刻も早く、ここから逃げなければならない。

「ばらばらになったら、やられます。今は、全員が一つにならないと」

「一つに……？　何の意味がある？」

野口医師の口元で、せせら笑うように歯が光った。背後の病院では、三階から駆け下りてくる足音がする。もう、時間がない。

「さっき、二人殺されたのを見ただろう？　五人いようが、百人いようが、しょせんは、同じことだ」

「しかし……」

「悪鬼に対して、どう戦いようがあるんだ？　いいから、向こうへ行け！」

野口医師は、覚の胸を突き離す。

悪鬼……。その言葉を聞いただけで、血も凍るような恐怖が沸き上がってくる。

理性や常識では、そんなことは、とうていありえ

ないと思う。いったいなぜ、バケネズミの襲撃と軛[*]を一にして、悪鬼が出現したりするのか。

しかし、その証拠は、たった今、この目で見たばかりだった。呪力によって燃え上がったり、無惨に引き裂かれたりした人間の姿を。悪鬼の外に、そんなことができる者は存在しない。

「しかたがない。僕らは、逆方向に逃げよう」

闇の中を歩き去ろうとする野口医師を見ながら、覚は、動き出そうとした。

「待って」

わたしは、覚の袖を摑んで引き留める。

「どうしたんだ?」

「来るわ……！　建物を迂回して」

風に乗って、かすかな音が聞こえてきたのだ。もう一度、耳を澄ませる。間違いない。さっき建物に入ってきたときほど明瞭ではないが、砂地を踏みしめ、草を掻き分ける音だ。こちらへ近づいてくる。

覚は、無言で、わたしたちを呼び集めるような仕草をした。それから、さっき出てきたばかりのドアを、音がしないようにそっと開ける。

覚は、いつのまにか、足音を立てる下駄を脱いで手に持っていた。わたしと岡野さんも、それに倣う。それから、関看護婦を間に挟んで、静かに建物の中に入る。最後に、覚が滑り込んで、慎重にドアを閉めた。

間一髪だった。わたしたちが息を潜めていると、ドアのすぐ外側を通る足音が聞こえたのだ。距離にすれば、たぶん、二、三メートルしかなかっただろう。

同時に、奇妙な唸り声も、耳に届いた。低い呪詛のような、喉の奥でごろごろいう音。それに、蛇が威嚇するような、高いしゅうしゅうという歯擦音。

悪鬼だ……。今、薄いドア一枚を隔てた場所に、悪鬼がいる。

もし、このドアの存在に気づかれたら。

わたしは、懸命に祈った。

神さま。お願いします。どうか、見つかりませんように。

どうか、悪鬼が、ここから離れて行きますように。

どうか、このまま、何事もなく……そう唱えかけて、わたしは、はっとした。

まったく、音がしないのだ。悪鬼の足音も。不気味な唸り声も。

離れていくような音は、聞こえなかった。だとすれば、まだ、すぐそばにいるはずだ。にもかかわらず、音がしないとなれば、意図的に、鳴りを潜めているに違いない。

悪鬼は、今、聞き耳を立てている。そう思うと、唾を飲み込むことさえできなかった。永劫とも思われるような凍りついた時間の中で、わたしの目は、恐ろしいものを捕捉した。ドアのノブが、ゆっくりと回っていくのだ……。

もう、だめだ。恐怖のあまり、気が遠くなっていく。

だが、ドアは、ついに、引き開けられることはなかった。

「Ｇｒｒｒｒ……★*∀§▲ЖАД！」

悪鬼は、妙に甲高い、恐ろしい声を発した。次の瞬間、獲物を見つけた猟犬のように、駆け出していく音がした。しかし、助かったと思う間もなく、今度は、ぞっとするような悲鳴が響きわたる。

わたしは、両耳を塞いだ。それは、野口医師の声だった。

「くそ！　来るな！　この、悪鬼が！」

続いて、またもや、聞くのも耐えがたい叫び声。

悪鬼は、ひと思いにとどめを刺さず、野口医師を、なぶり殺しにしているらしい。

「早く！　こっちだ！」

覚は、早足で病院の中を横断して、玄関に戻った。穴の内側から慎重に外の様子を窺う。わたしたち三人も、すぐ後に続く。素足に尖った木片が突き

刺さり、足跡が血で汚れたが、異常な精神状態のせいか、ほとんど痛みは感じなかった。

「お前は……お前は、いったい、誰なんだ？」

建物の裏から、野口医師の断末魔の絶叫が響いてきた。わたしは、奥歯を嚙みしめて、頭を振った。もはや、できることはない。聞かない。考えない。今だけは。今は、生きてここを逃げることだけを考えなければ……。

「舟は、無事みたいだ。早く！」

覚は、穴から外に出て、手招きをした。わたしたちも急いだが、穴の寸前で、立ち止まらざるを得なかった。関看護婦が、恐怖に身体を震わせながら、両足を突っ張り、全身で抗っていたからだった。

「何してるの？　逃げなきゃ……ねえ、聞き分けて！」

わたしは、絶望感で一杯になった。

「早季。早く来い！　その人は、置いていく」

覚の冷徹な声が、響いた。

「でも……！」

「このままじゃ、間違いなく全員殺される。誰かが戻って、悪鬼の存在を告げなければ、町は全滅だ」

「お二人で、行ってください」

岡野さんが、静かに言った。

「わたしは、この人と、ここで隠れてます。後で、助けをよこしてください」

彼女の声音は、澄み切っていた。すでに、死を覚悟しているかのように。

「だめよ。そんな！」

「それしかないでしょう？　それに、舟で逃げる方が、危険かもしれない。ここにまだ、誰かが隠れてるなんて、あいつも思わないかもしれないし。……さあ、早く！」

「早季！　行くぞ」

覚が、わたしの腕を摑んで、無理やり穴から引っ張り出した。

「ごめんなさい……」

涙が溢れ出した。わたしは、岡野さんに謝ると、背を向けた。覚と一緒に、全速力で、舟までの距離を走り抜ける。

　ちらりと、黒焦げになった遺体が視界に入る。まだ、うっすらと煙が立ち上っている。さらに、その向こうには、ばらばらになった藤田さんの四肢が散乱していた。懸命に心を麻痺させようとしたが、身震いが止まらない。

　舟に乗り込むと、覚が、すばやく舫い綱を外す。わたしたちは、仰向けに寝そべって、船縁より姿勢を低くした。ゆっくりと回転しながら、舟が動き出す。

　暗い夜空をバックに、幽霊屋敷のような姿でそびえ立つ病院が、視界を一杯に埋め尽くした。今にも、どこからか悪鬼が現れそうで、恐怖で身体から力が抜けていく。

　舟は、覚の巧みなコントロールにより、細い水路を通って、病院から遠ざかっていった。周りが見えないのに、どうやって操船しているのだろう。覚を見ると、星明かりを頼りに、絶えず舟の上空に小さな鏡を作りだしては、必要な情報を得ているらしかった。

　やがて、舟は、ゆっくりと、大きなカーブを曲がった。

「……もう、だいじょうぶだ。ここまで来れば、病院からは見えない」

　覚が、囁いた。

「じゃあ、早く……全速力で逃げよう！」

　わたしは、小声で懇願したが、覚は首を振る。

「まだ、しばらくは、音を立てないように行こう。この近くには、悪鬼だけじゃなくて、バケネズミもいるかもしれない。ここだと、岸が近すぎて、銃で狙われたら逃げ切れない。もう少し行くと、広い運河に出る。そこから一気に飛ばそう」

　わたしたちは、おそるおそる、船縁から頭を出した。舟は、かすかな水音だけを立てて、暗い水路を

進んでいく。

「岡野さんたち……だいじょうぶかな？」

　覚は、答えなかった。たぶん、どんな気休めも説得力がないとわかっていたのだろう。

「あれは、本当に、悪鬼だったの？」

　覚は、かすかに首を捻った。

「そうとしか、考えようがないだろう」

「でも、そんな……どこから来たの？　わたしたちの町には、異常者なんか、一人もいなかったはずよ。教育委員会が、あれほど目を光らせていたんだし」

「わからないよ。今の時点では、まったく、何もわからない。ただ、はっきりしたこともある」

「何？」

「奇狼丸の率いる大雀蜂軍が、どうして全滅したのか。いくら勇猛でも、相手が悪鬼では、ひとたまりもなかっただろう」

「そうね……」

「それに、もう一つある。なぜ、野狐丸が、開戦に踏み切ったのか。バケネズミと悪鬼の関係は、まだわからないけど。もし、僕の想像が当たってるなら……」

　覚は、突然、絶句した。

「どうしたの？」

「静かに……。急な動きはしないで。平静な声で、話し続けるんだ」

「何言ってるの？」

「声の調子を変えるな」

「わかったわ。これでいい？　教えて。いったい、何があったの？」

　わたしは、努めてふつうの口調で訊ねた。

「百メートルくらい後ろを、舟が付いてくる」

「え？　……まさか」

　全身から、血の気が引いた。

「たぶん、行きに使った囮の舟だ。乗ってるのは、まず間違いなく、悪鬼だよ」

そっと視線を巡らせると、水面に反射した星明かりで、追尾してくる舟のシルエットが確認できた。

「どうしよう……？　向こうは、どうして、攻撃してこないの？　それに……」

「声のトーンを変えるな。こちらが気づいたことがわかれば、その瞬間、舟ごとやられる。……すぐに襲ってこない理由だけど、たぶん、僕らに、みんなのところまで道案内させるつもりなんじゃないかな」

まさに、最悪の状況だった。このまま町の人たちと合流すれば、死神を連れていくことになる。かといって、悪鬼を撒く方法も思いつかない。必死に打開策を考えようとしたが、恐ろしさに頭が麻痺したようになり、考えがまとまらなかった。

「運河に出れば……全速力を出せば、逃げきれるんじゃない？」

「いや、無理だ」

覚は、にべもなかった。

「運河は、ほとんどが直線だから、見通しがよすぎる。こちらが速度を上げたとたんに、向こうの呪力に捕まって、一巻の終わりだ」

だとすれば、相手の舟の進行を妨げるような試みも、すべて、だめということになる。こちらが少しでも敵対的な動きを見せれば、そのとたんに、向こうは攻撃に移るからだ。向こうの視界に入っている限りは、煮るなり焼くなり、悪鬼のやりたい放題なのだ。

「じゃあ……ちょっと待って。まさか、もう、だめっていうこと？」

「待ってくれ。今、考えてる。何でもいい。話し続けてくれ」

今となっては、覚の冷静さだけが頼りだった。わたしには、ただ、言われたとおりに、喋り続けるしかなかった。

「こんなことになるなんて。思ってもみなかった。今でも、今晩、起こったことが信じられないの。夏

祭りの晩だったのに。大勢の人が、亡くなったわ。さっきは、わたしの目の前で。誰も、助けられなかった。……それだけじゃない。わたしたちは、岡野さんたちを、見捨てて……ううん。見殺しにしたのよ。どうして、こんなことになったの？　いったい、何が悪かったというの？」

涙が頬を伝った。

「こんなところで、死にたくない。何もわからないままで、人生が終わりになるなんて、絶対に厭よ。それじゃあ、突然踏み潰されて死んでしまう虫と同じじゃない？　せめて、なぜ自分が死ななくちゃならないのか、その理由を知ってから死にたい。そうでないと、死んでも死にきれないわ」

覚は、何事かを、一心に考えている。

「真理亜が死んだなんて、わたしは、信じない。信じたくないの。わたしは、真理亜を愛していたから。……だけど、今晩、彼女は、わたしたちを救ってくれたわ。憶えてる？　わたしたちが広場に行こうとしていたとき、わたしは、幼い頃の彼女の姿を見たの。そして、後を追って行ったから、バケネズミの奇襲に遭わずにすんだのよ。もし、広場に行ってれば、銃で撃たれるか、矢を受けるかして、死んでたかもしれない。……あの、鳥飼宏美さんみたいに。わたしは、あの人が、大嫌いだった。だって、わたしたちを、まるで実験動物みたいに、簡単に殺そうとしたんだもの。それも、あの厭らしい不浄猫を使って。だけど、今ならわかるわ。あの人は、ただ、怯えていたんだって。今晩みたいな恐ろしい出来事が起こるのを防がなきゃいけないって、ただ、そう思ってたんだわ。……だからといって、真理亜たちにしたことを、許す気にはなれないけど。それだけじゃないわ。わたしたちの大切な仲間だった、顔のない少年に対してしたことも」

胸が詰まって、わたしは、言葉を切らずにはいられなかった。

「わたしは、彼が好きだった。心の底から、愛して

たわ。だから、彼の名前も思い出せないまま、死ぬのは厭なの。……あなたのことも、大好きよ。覚。でも、わたしは、まだ、彼について、気持ちの整理ができてないの。それができないうちは、一歩も前に進めない。だから……」

覚は、わたしを見た。

「僕も、同じ気持ちだよ。早季。いい大人になって、こんなことを言うのは恥ずかしいんだけど、記憶を奪われたせいで、僕もまだ、彼への気持ちに踏ん切りが付かないんだ」

「覚……」

「だから、ここでは死ねない。……悪鬼を斃す方法は思いつかなかったけど、騙して逃げることなら、たぶん、できると思う」

「どうするの？」

一筋の希望の光が射してきたようだった。覚は、その方法を説明する。

「……問題は、どうやって岸に上がるかということなんだ。広い運河に入ってしまうと、難しい。それまでに、いい場所を見つけなきゃならないんだ。水路の幅が狭くなっているところを」

わたしは、はっとした。

「……ううん、それより広い場所の方がいい！　悪鬼が、わたしたちが上陸したなんて、絶対疑いもしない場所の方が」

わたしが、思いつきを話すと、覚は、にやりと笑った。

「よし。それで行こう。人を浮かせるというのは、一度もやったことないけど、たぶん、だいじょうぶだ。運河に入ったら、すぐに仕掛けるよ」

「わかったわ」

わたしは、やるべきことを頭の中で反芻した。すべては、二つの課題を同時に行う覚の技術にかかっているとはいえ、わたしが失敗すれば、おじゃんである。機会は、一度しかないのだから。

舟は、じりじりするわたしの気持ちを乗せて、同

じ速度で進み続けた。変に加速すれば、疑いを招く。今は、ひたすら待つしかなかった。

やがて、前方の視界が開けてきた。狭い水路が広い運河と合流する場所が、すぐ間近に迫ってきたのだ。

そのとき、わたしは、気がついた。周りがよく見えるようになったのは、闇に目が慣れたせいばかりではない。おそらく、夜明けが近いのだ。

目眩ましを仕掛けるには、真っ暗な方が好都合だったろう。しかし、贅沢は言っていられない。

覚は、ちらちらと後ろを見ながら、距離を目測していた。悪鬼の舟は、百メートルほどの距離をおいて、ぴったり付いてきている。

そして、わたしたちの舟は、水路から直交する運河に入って、左方向に進む。川幅は、数十メートルもあり、利根川の本流を思い出させるほどだった。悪鬼の舟は、まだ運河の手前にいるが、視界を遮るものがないので、わたしたちの舟は視界に入っているはずだ。

慎重にタイミングを計っていた覚は、悪鬼の舟が運河に入った瞬間、背後の空間に鏡を張った。ほぼ川幅一杯の差し渡しがある、かつて作ったことがないほど大きな鏡を。

そのまま、二百メートルほど走り過ぎる。背後からは、悪鬼の舟が、ぴったり追尾してきている。しかし、悪鬼が現在目にしているのは、わたしたちの舟ではなく、自分の舟の鏡像なのだ。

「準備はいい？　飛ばすよ」

「はい……！」

次の瞬間、わたしの身体は、舟から浮き上がって、舷側から真横に放り出された。水面すれすれの高さを、隼（ハヤブサ）のような速度で滑翔（かっしょう）する。

わたしたちは、真理亜のような空中浮遊の技は習得していない。だが、呪力によって、お互いの身体を運ぶことなら可能なのだ。

みるみる、舟が遠くなる。そして、わたしの身体

は、空気のクッションに受け止められたようにふわりと減速し、運河の岸辺に投げ出された。

草の上に倒れてから、すばやく俯せの姿勢になり、舟の位置を確認する。覚の乗っている舟は、すでに、かなり前方に進んでいた。鏡を挟んで、背後からは、悪鬼の舟が迫ってきている。悪鬼は、自分の舟の鏡像に注意を集中していただろうから、宙に浮かんだ鏡に遮られて、わたしの姿は見えなかったはずだ。

今度は、わたしの番だった。遠くに見える覚の身体を、呪力で持ち上げる。鏡の陰から出ないよう気を配りながら、手前側の岸に向かって一気にたぐり寄せる。

覚は、膝を抱えた姿勢で、一回転しながら、かなりの速度で岸に近づいてくる。途中で速すぎることに気がつき、あわてて止めようとしたが、制動をかけるのが遅すぎたらしく、着地してから大きく跳ねて、ごろごろと草原の上を転がった。

同時に、二つの舟に挟まれた鏡が砕けて、数え切れないほど多くの微小な水滴に戻り、雲散霧消する。この暗さでは、悪鬼にも、今まで見ていた自分の舟の鏡像と、わたしたちの舟は、容易に区別できないはずだ。

やるべきことは、まだ、残っていた。わたしは、無人となった舟を、一気に加速する。舟底が徐々にせり上がり、水面の上を滑走している状態になった。自分が乗っている舟を動かすより、外から操る方が、はるかに簡単なのだ。悪鬼の舟は、追いつけず、どんどん引き離されていく。

そして、覚の予言は実証された。わたしたちが乗っていた舟が、突如、目も眩むような光に包まれて炎上したのだ。

わたしは、悪鬼の呪力とバッティングしないよう、舟を操っていた呪力を引っ込めた。燃えている舟は、推進力を失ってしばらく惰性で進み、向こう岸にぶつかって止まった。しばらく、そこで燃え続

けていたが、やがて、船首の方から浸水したらしく、ゆっくりと回りながら沈没していく。

　炎が消えると、再び、周囲は、青みがかった薄闇に閉ざされた。

　覚が、姿勢を低くしながら、こちらに走ってきた。最後は匍匐前進して、わたしの横に並ぶ。どうやら、腰をしたたかに打ったらしく、しきりにさすっている。わたしたちは、固く手を握り合った。

　悪鬼の乗った舟は、沈没した舟のそばに来てから、まだ未練があるかのように、周囲をたゆたっていた。何をしているのだろうか。わたしたちは、焦り、苛立ちながら見守った。悪鬼が留まっている限り、今いる場所から動くわけにはいかない。今度、見つかったら、どこにも逃げる場所はないのだ。

　やがて、悪鬼の乗った舟は、ゆっくり回頭した。わたしたちの、すぐ目の前を通過したときには、呼吸が止まり、うなじの毛が逆立つような感覚に襲われたが、元来た方向へと戻っていくのを見ると、助かったという思いで、全身から緊張が抜ける。

　とはいえ、喜んでばかりはいられない。悪鬼の舟が、再び運河から病院へ通じる水路に入るのを見ると、暗澹とした思いが込み上げてきた。

　岡野さんたちには、充分に逃げ延びる時間があったことを祈るしかなかった。もし今も、あの病院の中で、息をひそめているとしたら……。

「さあ、行こう」

覚が、立ち上がり、わたしに手を差し伸べた。

「舟がなくなったから、徒歩で帰らなきゃならない。急がないと」

「だったら、また、お互いに、投げ飛ばし合う？今度は、向こうの丘まで」

わたしは、泣いているのを悟られたくなくて、必死で軽口を叩いた。

「それは、勘弁してくれ。早季のお陰で、ひどい目に遭ったんだから」

覚は、苦笑した。周囲は、かなり明るくなってお

り、表情が、はっきりと見える。

東の空から、曙光が射し込んできた。丘と、彼方の水平線が薔薇色に染まる。

それは、ひどく不気味な、まるで血のように真っ赤な朝焼けだった。

一刻も早く、町の人たちと合流して、わたしたちが見たことを伝えなければならない。二人とも、その一念で気も狂わんばかりだったが、どこにバケネズミの罠があるかわからない状態では、少し前進するのにも慎重にならざるを得なかった。

しかも、わたしたちは、どちらも裸足だった。病院で怪我をしたところから、わたしの出血がひどくなったのを見て、覚が、浴衣を引き裂いて即席の布靴を作ってくれたのだが、ひと足ごとに痛みを感じているようでは、とうてい道のりは捗（はかど）らない。

様々な思いが去来した。思い出すだけで辛くなる出来事は、極力頭の中から追い払おうと努めた。ひたすら、現在の状況に意識を集中する。そういう意味では、足の痛みすら、昨晩来の恐ろしい経験を忘れる役には立ってくれたのかもしれない。

だが、やがて、意識は、目先の辛い現実からも逃避しようとし始める。

それからは、ずっと古代文明のことを考えていたと思う。

当時は、呪力が存在しなかったにもかかわらず、数多くの奇跡を実現していたらしい。もちろん、現在でなければできないことは数え切れないのだが、主に二つの点において、わたしたちの文明は、大きく後れを取っている。

その一つは、通信手段の欠如である。古代文明では、電波を利用する機械装置によって、きわめて迅速に、大量の情報をやり取りできたらしいのだ。現代では、短い距離であれば伝声管で話をすることもできるが、当然ながら、町の全域をカバーすることはできない。それ以外となると、鏑木肆星氏が空に

描いた文字などの例外を除けば、伝書鳩か狼煙（のろし）しかないという、古代人に笑われそうなローテクぶりである。ふだんなら、それで何の支障も起きないのだが、緊急時に、通信手段が何より必要になるということは、この時点まで、まったく認識されていなかったと思う。

第二は、移動手段が限られていることである。神栖66町は水郷の町であり、血管のように張り巡らされた運河と水路によって、人の往来も物資の運搬も効率的に行われるが、雪に覆われる冬季を除くと、陸路を進む手段には乏しい。実際、このときくらい、それが恨めしかったことはない。

もうすぐ、この弱点は野狐丸の巧妙な戦術によって衝かれ、わたしたちの町は予想外の脆（もろ）さを露呈することになるのだが、もちろん、このときはまだ、知るよしもない。

話を戻そう。傷だらけの足での行軍を余儀なくされていたわたしたちは、途中、野中の一軒家を発見して、束の間の休息を取ることができた。

わたしは、この家に辿り着くことができたのも、真理亜の導きだったような気がする。どちらに進もうか迷ったとき、必ず、耳元で囁き、背中を押してくれる守護天使のような存在を感じたと思うのだが、覚は、考えすぎだと言う。いずれにしても、わたしたちが、その家にぶつかったのは、奇跡に近い確率だったと思う。周辺五キロメートル圏内には、他の家は一軒もなかったのだから。

誰の家であれ、留守宅に侵入するというのは、わたしたちの通常の倫理観からすれば、とうていありえないことである。しかし、このときばかりは、緊急避難の原則が優先した。

わたしたちは、ここで、ぼろぼろになった浴衣を脱ぎ捨て、こざっぱりした服に着替えることができた。あいにく大人の男性と男の子向きの服しか置いてなかったので、わたしは、綿の短パンとカーキ色のTシャツを、覚は、ジーンズに、生成りのアロハ

シャツを選んだ。何より有り難かったのは、サイズの合う靴が見つかったことだった。

　さらに、台所には、パンを作るつもりだったらしく、練った小麦粉が寝かせてあった。鍋に入れて、あり合わせの野菜と味噌を加え、呪力で瞬間に加熱して、すいとんを作って食べた。

　家の裏手には、何に使っていたのか、荷車が置いてあった。木製の車輪が二個付いた、大きな台車にすぎないのだが、歩き疲れたわたしたちには、しごく快適な乗り物のように映った。

　略奪ついでのような気が咎めたが、持ち主には後で謝ることにして、荷車に乗り込む。車軸はかなり堅牢な作りで、呪力で走らせると、相当なスピードが出せることがわかった。だが、悪路から受ける衝撃がそのまま伝わってくる上に、車輪が二個しかないため前後に不安定で揺れがひどく、すぐに気持ちが悪くなる。

「わたし……だめ。もう、我慢できない」

　わたしは、荷車から降りて、懸命に吐き気と戦った。さっき食べたばかりのすいとんが、胃袋の中で、ぐるぐる回っているようだ。

「やっぱり、これは、人が乗るもんじゃないな」

　覚も、青い顔をしていた。昨晩から一睡もしていないだけに、余計に応えるのだ。

「しかたがない。水路を使おう。このままじゃ、いつ到着するかわからない」

「でも、舟がないわ」

「こいつを使おう。もし浮力が足りなかったら、呪力で補えばいい」

　わたしは、荷車を見た。たしかに、水面に浮いていれば、筏のように見えないこともないが。

「でも、もし、途中で、バケネズミに襲われたら？」

　水路を航行している間は、まわりから丸見えで、どこから狙われるかわからない。

「そのリスクはあるだろう。でも、そんなことを言

ってたら、手遅れになるかもしれない。……まあ、二人いるんだし、悪鬼にさえ出くわさなければ、何とかなるよ」

覚の楽観論は、慎重に考えたあげくのことなのか、それとも、単に疲れて、考えるのが面倒になっているだけなのかは、よくわからなかった。

水路を目指して、わたしたちの身長より高く生い茂った草原を抜けていく途中、遠くから、爆発音が響いた。

「何、今の？」

覚の表情が、厳しくなった。

「まだ、戦闘が続いてるんだ……」

さらに、二度、三度。爆発音は、さらに激しくなる。

「状況がわからないんだから、今は、余計な憶測をしてもしかたがない。とにかく、早く、みんなと合流しよう」

その後も、七、八回は、爆発音が轟いたと思う。一回ごとに、我が身を鞭打たれるような思いだった。たしかに、何が起きているのかは、まったくわからない。だが、少なくとも、人間がバケネズミを攻撃する際には、爆発物を使ったりはしないのだ。

ようやく、町の中心部へ向かう運河を発見して、覚が、そっと荷車を水面に下ろした。何とか浮くことは浮いたのだが、わたしたち二人を乗せると、荷台が水に洗われ、非常に不安な立ち上がりだった。少しでも重量を減らすために、木製の車輪の接地面に巻かれていた鉄の輪を引き剝がしてみたが、それでもまだ、少し大きな波が来ると、まともに被ってしまう。

それ以上、時間を無駄にするわけにはいかないので、わたしたちは、見切り発車した。当初、覚が推進に専念して、わたしは、荷車が沈まないよう気を配る役目だった。車輪を前に回転させれば、多少は浮力が増すかと期待したのだが、残念なことに、何の効果もなかった。そうこうしているうち、荷台が

大きく後ろに傾いて滑り落ちそうになったので、わたしたちは、前の縁に摑まった。そして、結局、その形が最も安定がいいことに気づいたのだった。荷台の前縁を少し上げて、呪力で後押ししてやれば、推進力の一部が揚力に変わるため、サーフボードのように左右に波を切って進むことができるのである。

その後、数キロの道のりは、かなり快調だった。全身びしょ濡れになるのは、夏なのでそれほど苦にならなかったが、荷台にしがみついているのは骨が折れたし、呪力を使いっぱなしなので、頭の芯が朦朧としてくる。その上、前が見えないため、何かに衝突するのではないかという心配で、気疲れすること甚だしかった。

それでも、絶えず敵の待ち伏せを警戒しながら、痛む足を引きずっていたことを思えば、はるかに楽な道行きだったと言えるだろう。

幹線運河から、支線に入る少し手前だった。荷車が水面下で何かにぶつかったような、鈍い衝撃を感じた。

「今の、何？」

覚は、荷車を止めた。斜めになっていた荷台が水平に変わり、水面ぎりぎりの高さで、波に揺れる。

「……右側の車輪だと思う。何かが、擦った」

「岩？」

「運河の真ん中に、そんなに大きな岩なんか、あるはずがないよ。このあたりの水深は、少なくとも四、五メートルはあるはずだ」

わたしたちは、荷台から、そっと顔を突き出して、水中を透かして見た。

最初は、あまりにも巨大だったために、それとはわからなかった。だが、透明度の高い水のおかげで、何かが水底にへばりつくようにしているのが、うっすらと見えた。

「これ……いったい何なの？」

覚も、答えに窮しているようだった。その物体

は、運河の底に溜まった土砂とそっくりな色をしているため見分けにくいが、長さは二、三十メートルはあり、両端がすぼまった紡錘形をしていた。簡単に言えば、超巨大な海鼠のような色と形状である。

「今、ぶつかったのも、これだったのかしら？」

「あの位置だと、ちょっと接触するとは思えないけど……」

覚は、水に顔をつけて、不審な物体をつらつらと眺めていた。わたしも、それに倣う。少し離れたところにあった岩が浮き上がって、ゆっくりと漂いだした。覚が、呪力で動かしているのだ。気をつけてという暇もなかった。岩は、生き物のようにふわふわと泳ぐと、巨大な物体の尾部（どちらが先頭かわからなかったが、便宜上、わたしたちの進行方向と同じ側を頭部と考えた）に、どすんとぶつかった。

反応は激烈なものだった。巨大な海鼠のような怪物は、大きく身体をうねらせて水底を蹴ると、信じられないような速度で泳ぎ始めたのだ。

わたしは、とっさに、呪力で尻尾を捕まえようとした。すると、触られたのを感知したらしく、こちらに頭部をねじ曲げて、墨汁のように真っ黒な液体を吐き出す。液体は驚くほど大量で、たちまち、周辺の水は真っ黒に染まり、視界はまったく利かなくなった。

「まずい。岸に上がろう！」

わたしたちは、水から顔を上げて、荷車を運河の左岸に寄せた。真っ黒な水の上では、どこから攻撃されるかわからない。荷台から岸に飛び移り、夏草の茂みに身を隠しながら、運河が見渡せるような、できるだけ高い位置を目指した。

あらためて見ると、黒い水は、運河の前後、百メートルくらいを汚染していた。

「まさか、毒じゃないよね？」

わたしが訊くと、覚は、黒い水で濡れた掌を眺めた。

「いや……それに、イカやタコの墨とも違うよう

だ」

　わたしも、黒い水で濡れた手首から肘の裏側を観察してみた。

「この黒いの、液体じゃないわ……」

　透明な水の部分と、黒い微小な粒が、はっきりと分かれて見えるのだ。

「どうやら、すごく細かい墨の粉みたいだな」

　覚は、運河の黒く染まった部分を見ながら、真言（マントラ）を唱えた。

　黒かった水が、しだいに澄んでいく。呪力によって、黒い墨の粒子が沈殿していくのだ。

　やがて、七分通り澄んできた水底に、さっきの怪物が潜んでいるのが見えた。怪物は、自分を隠している煙幕が消えていくのに気がついたようだった。再び、泳いで逃走しようとする。

　だが、今度は、わたしたちの方も、準備ができていた。軟体動物じみた巨大な身体を、がっちりと捕まえると、宙吊りにして、水から持ち上げる。大量の水が落下して、大きな水飛沫が上がった。

　怪物は、観念したらしく、暴れようとはしなかった。ただ、頭を巡らせて、自分を吊り上げている人間がどこにいるのか、探しているようだ。

　その顔を見て、わたしは、ぎょっとした。長須鯨（ナガスクジラ）のような長大な体軀にもかかわらず、頭の大きさは、人間とほとんど変わらない。丸く大きな目は、海豹（アザラシ）のように真っ黒だった。特筆すべきは、その吻部で、長さ二、三メートルはあるだろうか。ガビアルのような鰐の口や鳥の嘴を思わせるが、サイズを無視すれば、最もよく似ているのは蚊の口吻だった。

「こいつも、バケネズミの変異個体（ミュータント）だ」

　覚が言う。土蜘蛛が生んだ叢葉兵（そうようへい）や風船犬などを以前に見ていなければ、とても信じられなかっただろう。泥の中から現れた蛙そっくりの兵士もいたが、目の前にいる怪物は、より完全に、水棲に特化しているらしい。

「……そうか。こいつは、墨を吐いて、運河を真っ黒にするつもりなのね」

町の中を縦横無尽に流れる水路を支配するために、透明な水を真っ黒に変えようというのか。あらためて、野狐丸らの奸智に鳥肌が立つ思いだった。

「しかし、こいつの役目は、本当に、それだけなんだろうか？」

覚が、また、掌を眺めながら言う。

「だったら、タコやイカのような液体の墨を吐いた方が、いいんじゃないか？　どうして、こいつは、わざわざ、細かい墨の粉を……」

覚は、はっとしたようだった。

「違う。こいつの目的は、別にある……そうか、わかった！　さっきの爆発だ！」

「どういうこと？」

そのとき、怪物の目が、わたしたちを捉えた。真っ黒な目が、瞬きもせずに、こちらを見つめる。それまで気づかなかった細長い突起が、怪物の頭頂部で立ち上がった。まるで旗のような鰭がいくつも付いていて、風にそよいでいる。

「危ない！」

覚が、叫ぶ。その瞬間、怪物の細長い口吻がこちらに向けられて、真っ黒い霧のようなものを大量に噴出した。

5

黒い霧は、たちまち視界を覆い隠す。その瞬間が、生死の分かれ目だった。

細かい墨の粉を吸い込めば、肺胞を覆われ窒息死するのは、必至である。たとえ、呪力で壁を作って、それを防いだとしても、わたしたちは、浮遊する大量の粉塵に囲繞（いにょう）され、動きが取れなくなっていただろう。そして、その後に起こったことを見れば、風を起こして霧を吹き払うような暇（いとま）はなかった。

怪物を吊り上げていた呪力の手が消失し、五十トンはあろうかという巨軀が落下する。水袋のような身体は、固い地面に叩きつけられ、扁平になった。その衝撃は、間違いなく内臓に致命的な損傷を与えたに違いない。だが、怪物は、頭部を持ち上げ、依然として、真っ黒な粉塵を口吻から噴き出し続けた。そして、わずか数秒のうちに、体内に貯蔵していた膨大な量の粉塵をすべて吐き切ってしまう。

続いて起きたことは、想像の域を出ないが、おそらく、怪物の細い管状の口吻は、大量の空気と粉塵が通過する摩擦熱により、一気に数百度もの高温になったのだろう。そこから直接炎が伝わったか、あるいは、熱で破断した口吻が、気流に乗って黒い霧の中に飛び込み、火口（ほくち）の役目を果たしたのかもしれない。

いずれにせよ、炎は、瞬時に粉塵全体にまで広がって、爆発的な燃焼を引き起こした。いわゆる粉塵爆発である。塊の炭はゆっくりと燃えるが、微粒子になった場合は、周囲の酸素と結合しやすくなるため、急激に燃焼して爆発を起こすのだ。

爆発の範囲は、半径数百メートルに及んだ。もし、その中に取り残されていたとしたら、鏑木肆星氏でもないかぎり、生き残ることは不可能だっただろう。

黒い霧によって視界を覆われた瞬間、頭に浮かんだのは、我が身を守ることではなく、覚を救おうという強い意思だった。そして、それは覚も同じだったらしい。その直前に、悪鬼から逃れるため、お互いの身体を放り投げるという行動を取っていたのが、幸運な予行演習になったのかもしれない。

黒い霧で姿を見失った瞬間、わたしは、怪物を吊り下げていた起重機のイメージを放棄し、代わりに投石機を思い浮かべた。覚の身体を鉤（フック）に引っかけ、上空へ向かって思いっきり放り上げる。

その瞬間、強烈な加速度で脳が押しつけられる眩暈のような感覚を味わう。気がつくと、わたし自身が、大地を遥か足下に見ていた。

わたしが覚を放り上げるのとほとんど同時に、覚もまた、わたしを投げ上げていたのだ。反射的に呪力で耳を守っていたらしく、気圧差で鼓膜が破れずにすんだ。とっさに鼻から息を吐いて、耳抜きをする。自由落下に伴う無重力状態で、胃袋が持ち上げられるような気持ち悪さを感じた。下から吹き上げてくる強い風で、短パンとTシャツがちぎれそうにはためいている。

どのくらいの高度にいるのだろうか。神栖66町全体、さらに周囲の森や筑波山までを一望にできるほどだった。だが、覚の姿は、どこにも見当たらない。

地表は、広範囲にわたって真っ黒な粉塵の雲に覆われていた。まるで不気味な黒い茸（きのこ）が、ゆっくりと膨張し、増殖しているように見える。

このままでは、その真っ只中に再突入してしまう。手足を広げて姿勢を制御し、何とか身体を浮揚させようと努めるが、どうやって空を飛ぶイメージを作ればいいのかわからなかった。

次の瞬間、眼下の粉塵の雲が、眩（まばゆ）いばかりの光とともに大爆発を起こした。

下降を続けていた身体が、再び吹き上がる風の力で持ち上げられた。あっという間に、長い距離を運

び去られるのを感じる。

宙を飛びながら、不思議と恐ろしさは感じなかった。落下の衝撃は、ある程度、呪力で緩和できるという自信はあったが、こんな高さに上ったこと自体、生まれて初めてであるはずなのに。

遮るもののない陽光が、ぎらぎらと大気に乱反射している。抜けるように青い空には、白い綿のような雲がたなびいていた。

幻視が起こったのは、そのときだった。

明るい空が、まるで反転してネガになったように、暗い夜空へと変貌したのだ。

中天にかかった月は、クレーターの一個一個が見えるほど巨大で、皓々と輝いて大地を照らしていた。

ああ、これは……。

かつての自分の体験だという確信があった。

いったんは消去されてしまったはずの記憶。それが、別の記憶の細部にくっついていた細片を寄せ集めることで、再製されたような感じだった。

眼下に、月明かりに照らされた■のバンガローが見える。

見渡すかぎりの地面が、擂り鉢状にくぼんだ。バンガローがあった場所に向かって、周囲から、山津波のように土砂が押し寄せてくる。低周波のような地鳴りに、木々が根こそぎになり、へし折れる音が混じった。

世界の終末のような恐ろしい景色は、どんどん、前方へと遠ざかっていく。わたしは、自分の身体が、大きな放物線を描いて、後ろ向きに飛んでいることに気がついた。激しい風を受けて、着ていたジャンパーがぶるぶると震えている。バレッタが吹っ飛んで、髪が夜空にたなびいた。

このまま、どこかに叩きつけられて死ぬのも、悪くないかもしれない。

そんな思いに駆られ、わたしは、目を瞑った。

だが、すぐにまた、目を開けた。

■は、最後の力を使って、わたしを助けてくれた。

わたしは、生きなければならない。

わたしは、正面に向き直り、激しい風を顔に受けたが、もう、目は閉じなかった。涙が、後方へと吹き飛ばされていく。

幻視は、ほんの一瞬の出来事だった。周囲は、午前の陽光が燦々と降り注ぐ、元通りの明るい空間に戻っている。

わたしは、かつて顔のない少年に、命を救われたのだ。ようやく、そのことを、はっきり思い出した。たった今、覚が、わたしを救ってくれたように。

爆発の気流に乗って、長い距離を移動する間に、急速に高度が下がってくる。わたしは、どうやら、町の中心部へ向かって飛ばされているようだった。

眼下の景色が、しだいに、はっきりと見えるようになる。

それが、茅輪の郷の目抜き通り、町で最も賑わいを見せていた場所であることに気づき、ショックを受けた。ほとんどの建物が破壊され、無惨な廃墟としての姿をさらしていた。人の姿は、まったく見当たらない。

わたしは、ゆっくりと降下しているわけではなかった。重力の加速度に捉えられ、大地に叩きつけられようとしているのだ。呪力で地面を押して、速度を和らげる。

着水しようと思った。水路の中に落下した場合、速度を完全に殺し切れていなくても、大怪我は免れる。

だが、そのとき、視界の隅に入った水路は、すっかり水が干上がっていた。

水が、抜かれている……。

なぜだろうと、詮索している暇はなかった。急

遽、方針を転換し、翼のイメージを作る。滑空することで、もう少し先に進まなければならない。

軟着陸のできる場所は、限られている。黄色いものが目に入った。ヒマワリ畑のようだ。油を取るために、かなりの本数が密生して栽培されている。

わたしは、苦労して方向転換すると、ヒマワリ畑を目指して、舞い降りようと努めた。真理亜は、どうして、ああも易々と空中浮遊ができたのかと思う。

黄色い花が、目の前に迫ってくる。まずい。イメージ通りに、減速できていないのだ。とっさに、呪力の腕で地面を衝く。数本のヒマワリがちぎれて、宙に舞い上がった。

着陸の瞬間、思わず、目を閉じてしまう。折れたヒマワリの茎が、頰を掠めた。

わたしは、地面に叩きつけられた。ヒマワリのクッションにもかかわらず、胸を打って、うっと呼吸がつまる。そのまま、たくさんの花に抱かれて、気を失ってしまった。

気がつくと、わたしは、俯せになって倒れていた。ゆっくりと、手足を曲げ伸ばしして、状態を確認する。掌を擦り剝いていたが、骨折やひどい打ち身などはないようだ。

周りの音に聞き耳を立ててから、そっと立ち上がる。

うららかな夏の朝だった。小鳥でも鳴いていそうだ。周囲は深閑と静まりかえっており、何の音も聞こえなかったが。

覚は、どこに行ったのだろう。粉塵爆発の寸前に、彼を投げ上げた方向を思い出そうとしたが、記憶は曖昧だった。無事でいることは信じていたが、心配はつのるばかりだった。

呪力を使いすぎて、頭がふらふらする。意識がなかったのは、せいぜい五分か十分くらいの間だったらしく、ほとんど休息の効果はなかったようだ。

もし、今、バケネズミやあの怪物に出くわしたとしたら、身を守るのは難しいだろう。悪鬼の場合は、言わずもがなである。しかし、ここでぐずぐずして、時間を空費するわけにはいかない。一刻も早く、町の人たちと合流しなければ。

わたしは、周囲の気配に気を配りながら、歩き出した。

ヒマワリ畑を抜け、雑木林に入る。途中から、たくさんの木々が薙ぎ倒されているのが目についた。来る途中で聞いた爆発音のことを思い出す。おそらくは、あの怪物の同類が何頭も現れて、町の中心部で爆発を起こしたに違いない。ここまで影響が及ぶということは、爆風は、かなりの広範囲を襲ったのだろう。

しかし、あの爆発の規模からすれば、怪物も死んだのは明白である。つまり、ほとんど自爆に等しいのだ。かつて見た風船犬は、文字通り、命を賭して土蜘蛛の竜穴を守っていたが、粉塵を吐く怪物は、最初から敵、つまり人間と刺し違えるために誕生させられた、攻撃的兵器なのだろう。

それ以外のバケネズミの兵士も、すべて、生き物というより、将棋の駒と同じだった。犠牲を厭わず、というより、最初から捨て駒にするような攻撃を仕掛けてきている。

まさか、こんな事態が起こるとは想像したこともなかった。わたしたちは、呪力という絶対的な強みを信じるあまり、バケネズミを甘く見すぎていたのかもしれないと思う。

それにしても、いったい何が、バケネズミをそこまでさせるのだろうか。

わたしは、いつもの悪い癖で、考え事に熱中し、周囲への警戒がおろそかになっていたようだった。もう少しで雑木林を抜けようとするときに、突然、それは起こった。

真正面から、唸りを上げて、大きな岩が飛んできたのだ。

完全にふいを衝かれ、呪力で受け止めることはできなかった。わたしは、その場に尻餅をつく。さいわい、狙いがさほど正確でなかったらしく、岩はわたしの頭上を通り過ぎ、後方に落ちた。

第一撃が失敗すると、すかさず、次の攻撃が開始される。爆風に耐えて残っていた木が、めりめりと音を立てながら、引きちぎられていく。それは、どう見ても、呪力によるものとしか思えなかった。

まさか、悪鬼がやって来たのか。わたしは、愕然とした。だとしたら、たぶん、もう、助かる道はない……。

襲いかかってきた大木を、とっさに呪力で受け止める。呪力同士がぶつかる嫌な感覚とともに、空中に虹色の干渉模様が顕れた。

「わ。あれ……？」

驚いたような叫び声が聞こえる。わたしは、声を限りに叫んだ。

「やめて！　わたしは、人間よ！」

宙に浮かんでいた大木が、支えていた二つの呪力が消失して、地面に落下する。やはり、そうか。誰かが、わたしをバケネズミと誤認して攻撃してきたのだ。

「ちょっと待って。今、出て行くから！」

わたしは、両手を大きく振りながら、雑木林から出た。五、六十メートルほど離れた場所には、呆然として立っている人間がいた。男の子だ。たぶん、十五、六歳くらいだろう。わたしの姿を見て、駆け寄ってくる。

「ごめんなさい。バケネズミだと思って……」

「気をつけて！　もし、わたしが死んでたら、あなただって愧死するのよ」

「愧死って？」

人の良さそうな顔をした男の子は、ぽかんとして言う。

「そうか。愧死機構のことは教わってないのよね。だけど、とにかく、呪力を使うのは、よく確認して

からじゃないと」

「うん。……でも、バケネズミは、隠れてて、いきなり襲ってくるから」

男の子は、坂井進（すすむ）という名前で、全人学級の四年生だという。進に、昨晩来、町で起きたことについて訊ねると、驚くべき答えが返ってきた。進は、まだ子供ながら、志願してバケネズミとの戦いに参加し、その一部始終を目撃していたのだ。

夏祭りの会場が襲撃を受けた後、復讐に燃えた人々は五人一組になって、バケネズミの掃討作戦を始めた。そして、わたしたちが病院に到着して、待ち伏せていたバケネズミと戦闘を開始したのとちょうど同じ頃、町の中心部でも激しい戦いがあったらしい。

バケネズミが挑んできたのは、徹底したゲリラ戦だったという。正面切って呪力を持った人間に立ち向かう術（すべ）がない以上、他に選択肢はなかっただろう。

だが、それが大きな戦果を上げたのは、野狐丸が、兵士をただの消耗品、捨て駒としか考えない非情さで戦術を組み立てたことに加え、人間の側にまったく戦う準備が整っていなかったことが原因だった。人々が夏祭りに出払っている間に、バケネズミの大部隊は空き家に侵入して、市街戦の準備を整えていた。最初に、バケネズミもろとも、すべての建造物を破壊すべきだったのだが、まだ、そこまでの犠牲を払う必要があると考えている人間は、誰一人としていなかった。

さらに、五人一組の人間は、常に、全方向に注意を振り向けるよう教えられていたが、これまで訓練さえほとんど経験しておらず、いきなり実戦に放り込まれたため、いわば、頭に血が上った状態だった。そのため、正面から鬨の声を上げてバケネズミの一団が突撃してくると、全員の視線と意識はそちらに集中してしまった。そして、捨て駒部隊が呪力で捻り潰されている間に、背後に潜んでいたバケネ

ズミの射撃手が狙い撃ちにするという単純きわまりない作戦で、多くの人間が犠牲になったようだ。

思わぬ展開に驚いて、急遽、複数の組が連携するようにしたところ、ますます野狐丸の術中に嵌る結果となった。

やはり、五匹が一組となったヒトモドキが、夜陰(やいん)に乗じて人間の組の間に紛れ込んできたのだ。隙を見て、ヒトモドキがいきなり攻撃を仕掛けると、人間の側は大混乱を来した。直接、ヒトモドキの矢や銃弾に斃(たお)された人間だけではなく、人間をヒトモドキと誤認した悲惨な同士討ちが相次いだのである。その場合は、呪力で殺された人間ばかりか、誤って人間に攻撃をかけてしまった人間も、愧死機構の作用で絶命したはずだ。

そうして悪夢のような一夜が明けると、人間の側の戦死者は、二、三百人に上っていた。もちろん、その二、三倍のバケネズミを殺してはいたが、とうてい引き合う勘定ではない。

さらに、日が昇ると、野狐丸の別の戦略が姿を現し始める。バケネズミの部隊は、一晩中、断続的に攻撃をかけてきていた。未明頃になると、ヒトモドキが一掃されたために、犠牲者はほとんど出なくなったが、それが、こちらに一睡もさせないためであることは、看破できなかったようだ。

そして、執拗をきわめたバケネズミの攻撃がようやくやみ、多くの人たちが一安心して、うとうとし始めたとき、わたしたちも出会った『炭噴き(スミフキ)』が、満を持して登場したのだ。

スミフキは、深夜のうちに水路を遡(さかのぼ)って町の中に侵入し、水中で待機していたらしい。ナガスクジラ並みの巨体にもかかわらず、激しい戦いに気を取られて、誰一人として気づいた人間はいなかったようだ。バケネズミの側も、スミフキの存在を気取らせないために、あえて攻撃に水路を使わなかったふしがある。

そして、戦闘が一段落したと誰もが思い始めたと

き、七、八匹のスミフキが、いきなり水路から頭を出して、真っ黒な粉塵を噴き出した。粉塵は、あらかじめ計算された場所、建物の間の路地など被害が最大限になるような空間を満たし、こちらが、その真の狙いに気づく前に、次々と大爆発を起こしたのだ。

激しい爆風と、建物などの破片が、無防備になっていた人々を襲った。さらに、多くの粉塵爆発が連続して起きたために、酸欠状態で死亡した人もいたらしい。

「鏑木肆星さんが守ってくれなかったら、僕らも死んでたと思います。……でも、爆発で先生も死んじゃって。お父さんやお母さんも、行方がわからなくなったんで、僕一人で、ずっと探してるんだけど」

進は、少し涙ぐんだ。

「だったら、どうして、いきなり、わたしに岩をぶつけようとしたの？　もしかしたら、ご両親かもしれないじゃない？」

「だって、お姉さんが、あんな林の中にいるんだもん。絶対ああいう場所に入るなって、僕らはみんな、厳しく注意されてたんだよ。やつらが隠れてるかもしれないし、間違って誰かに攻撃されることもあるからって」

「そうか。知らなかったわ」

わたしも、両親のことが心配でたまらなくなっていたが、進にも消息はわからないようだった。もう一つだけ、どうしても訊いておかなければならないことがある。

「進君。それ以外にもっと……何か恐ろしいものを、見たり聞いたりしなかった？」

進は、唇を尖らせた。

「それ以外に、もっとって？　もう、充分でしょう？　一晩のうちに、こんなに恐ろしいことが、たくさんあったのに」

「うん。変なこと訊いて、ごめんね」

どうやら、悪鬼は、まだ現れていないらしい。だ

とすると、ますます、早く町の人たちに警告しなくてはならない。できれば、富子さんか、鏑木肆星氏を見つけられればいいのだが。

わたしは、進と一緒に、歩き始めた。肩を並べるのではなく、できるだけ背中合わせになるような姿勢で、全方位に注意を向けながら。

水路のそばにやって来る。空から眺めたとおり、水は完全に干上がり、川底が露出していた。

「どうして、水路の水がなくなってるの？」

進の答えは、さほど意外なものではなかった。

「偉い人たちが、用心のために、水門を閉じて水を全部抜くよう指示したからだよ」

「それは、バケネズミが、隠れて襲ってくるから？」

「うん。やっぱり、スミフキが、水路から来たからだと思うよ。バケネズミには、他にも両生類みたいなやつもいるっていう話だし」

運河と水路は、神栖66町の中に網の目のように張り巡らされている。その全部を監視するのが困難であることを思えば、当然の対策かもしれない。しかし、野狐丸の読みは、ここまで、完全に人間を上回ってきた。こちらは終始、野狐丸の掌の上で踊らされていたと言ってもいい。

もしかすると、こうなることも敵の計算通り、というより、こうなるように仕向けたのではないだろうかと疑いたくなる。

水路が使えなくなってしまった場合、大勢の人間が移動するのは困難になるということまで見越した上で。

しばらく歩いていると、人の姿が、ちらほらと見えるようになってきた。最初のうちは、それを見てほっとしたものだが、しだいに、気持ちが重く塞がれてくる。

遺体に取りすがって泣いている、若い女の人。銃創らしいひどい傷を負って、呻き声を上げている男

たち。親とはぐれたらしく、懸命に捜し求めている幼い子供たち。

わたしたちが通ると、みな、救いを求めるような視線を投げかけてくる。立ち止まって、少しでも助けてあげたかったが、そうしている時間がない。悪鬼がやって来てしまえば、とうてい今どころではない地獄絵図が現出する。その前に、町の主だった人たちに伝えて、対策を練らなくてはならないのだ。

「お願い……助けて」

道ばたに倒れていた中年の女性が、わたしたちに向かって、必死に手を伸ばした。見ると、顔や腕など露出している部分がひどく焼け爛れ、衣服も焦げて真っ黒になっていた。この火傷では、もう長くはないかもしれない。

「水を。水をちょうだい」

わたしは、唇を嚙んだ。この人を、このまま見捨てていくには忍びなかった。しかし、わたしの情報が遅れれば、取り返しのつかないことになるのだ。

「お姉さん。この人は、僕が助けるから」

進が、助け船を出してくれた。

「早く行って！　急いで、偉い人のとこへ行かなきゃならないんでしょう？」

「うん……ありがとう。お願い！」

わたしは、進の手を握ってから、歩き出そうとした。

「ちょっと。待って」

倒れている女性が、わたしに声をかける。

「いったい、誰に……そんなに緊急の用なの？」

わたしは、振り返った。

「ごめんなさい。どうしても、富子様か、鏑木肆星さんに会って、伝えなきゃならないことがあるんです。このままじゃ、もっと恐ろしいことが起きる……」

わたしは、言葉に詰まった。今まさに死の淵にある人に対して、「もっと恐ろしいこと」と言うのは、無神経の極みだろう。

「富子様は……学校よ。全人学級へ避難したはず。あそこはまだ、建物が無事だから」

女性は、苦しげに咳き込みながら言う。

わたしは、はっとした。この人は、もしかしたら、倫理委員会のメンバーなのかもしれない。そういえば、顔に見覚えがあるような気もするが、火傷のせいでよくわからなかった。

「ありがとうございます」

わたしは、深々と頭を下げてから、小走りに歩き出した。場所がわかったのは大きい。後は、一秒でも早く辿り着くだけだ。

どんどん、歩調が速くなり、ついには、走り出した。ついさっきまで感じていた疲労は、一時的にせよ、どこかに吹っ飛んでいた。

全人学級を訪ねるのは、卒業以来、初めてだった。狭い町だから、いつでも行けたはずだが、辛い思い出があるため、自然に足が遠のいていたらしい。学校が近づくにつれて、周囲の町並みの記憶がよみがえる。町の中心部に比べると、破壊の程度は多少ましだが、それでも、思い出のある建物群が全半壊しているのを見ると、胸が痛んだ。

途中で、ぽつぽつと雨が降り始めた。空を見上げると、相変わらずの青空だった。狐の嫁入りのようだと思っていたら、徐々に雲がかかり始めた。

全人学級の前に辿り着いたときには、夕立のような雨が降っていた。校門のところで、倫理委員会の職員らしき人に止められる。

「非常事態につき、この建物は倫理委員会が接収しました。ここから中へは入れません」

初老の小柄な男性が言う。以前に会ったことがあるのを、思い出した。富子さんの元で働いている人で、たしか新見さんと言ったはずだ。

「わたしは、保健所の異類管理課にいる渡辺早季と申します。どうしても、至急、富子様にお目にかかって、お伝えしなければならないことがあるんです」

「……ちょっと、ここでお待ちください」

新見さんは、眉をひそめると、校舎の中に入っていった。わたしは、庇の下で雨宿りをしながら、戻るのを待つ。帰りが遅いのでじりじりしていると、ようやく現れた。

「こちらへ、どうぞ」

新見さんの後について、勝手知ったる全人学級の校舎に入る。建物自体は、頑丈な造りなので倒壊の恐れはないようだが、爆風が通り抜けたためか、内部には壊れた備品や木片、ガラス片などが散乱しており、足の踏み場もない。富子さんは、校長室にでもいるのかと思っていたが、案内されたのは保健室だった。

「失礼します」

「どうぞ」

新見さんの声に応えたのは、まぎれもない富子さんの声だった。無事であったことに、ひとまず安堵する。

「早季ちゃん？」

「はい……」

ベッドに横たわった富子さんの姿を見て、わたしは、ショックを受けた。頭部を包帯でぐるぐる巻きにされており、両目も完全に塞がれている。肩からは三角巾を吊しており、それ以外にも重傷を負っているらしい。

「よかったわ。あなたが無事で」

「お怪我をなさったんですね……」

「ううん。たいしたことはないの。ただ、ちょっと、ガラスの破片で切ったのよ。まさか、朝になってから、あんな、スミフキなんて化け物が出てくるとは思わなかったから」

富子さんは、うっすらと笑ったが、すぐに真顔になった。

「それより、至急私に伝えたいことっていうのは、何？」

「はい。……最悪の事態が起こりました」

わたしは、覚たちと病院へ行って見たことを、かいつまんで語った。

「あれは、間違いなく、悪鬼です。このままだと、たいへんなことになります。今すぐ、何らかの対策を講じないと」

富子さんは、しばらくの間、答えなかった。

「……ありえないわ。いくら早季ちゃんの言葉でも、それは、信じられない」

「嘘じゃありません！　わたしは、この目で見たんです！　悪鬼の姿は見ていませんが、二人の人が惨殺されるのも、はっきりと目撃しました！」

「だけど、理屈に合わないわ。どうして今、悪鬼が出現するの？　教育委員会が、あれほど厳重に子供たちを管理していたのに。ほんのわずかでも、ラーマン・クロギウス症候群の兆しが見えた子は、一人もいなかったはずよ」

「なぜかはわかりません。でも、悪鬼でないとすれば、いったい誰が、人間を呪力で殺害できるんでしょうか？」

富子さんは、再び沈黙した。

「お願いです。信じてください。このままだと、本当に、取り返しのつかないことになります」

「でもね……早季ちゃん」

富子さんは、嗄れた声で言う。

「もし、本当にそうだったら、打つ手はないのよ」

「そんな……！」

「考えられるのは、そうね……他の町で生まれた悪鬼が、何らかの理由で、ここまで来たということくらいかしら。その場合、私たちには悪鬼を斃す方法がない。まだ悪鬼として目覚める前なら、不浄猫を使えたかもしれないけど、本物の悪鬼になってしまったのなら、万に一つの僥倖……天佑を頼むしかないわ。悪鬼が事故に遭うか、病気になってくれることを」

「二世紀以上前、この町は、悪鬼の惨禍に遭いながら、見事に復活しました。それを目撃されたのは、

あなたご自身じゃないですか？」

「ええ、そうよ。だからこそ、どんなことをしても二度と悪鬼を出現させてはならないと、固く誓ったの。今度こそ、町は全滅すると確信したから」

　富子さんは、低い声で淡々と語った。

「あのとき、私たちは、とてつもなく幸運だったのよ。今度は、とてもそうはいかない。バケネズミにすら、こんなに手こずっているというのに……」

　はっとしたように、言葉を切る。

「偶然のはずはないわね。バケネズミの襲撃と、悪鬼の出現は、関連しているはずだわ。でも、どうして、そんなことがありえるのかしら……？」

　窓の外から、叫び声のようなものが聞こえてきた。心臓が、どきりと飛び跳ねる。声は、しだいに近づいてきた。一人ではない。大勢が何かを叫んでいるようだ。

「新見さん。いったい、何の騒ぎなの？」

　富子さんが訊ねる。新見さんとわたしは、窓際に行き、外を見た。学校の前の通りを、パニックに駆られた人々が走っている。異常な事態であることは、見た瞬間にわかった。

　そのうち、群衆の一人が叫んだ「悪鬼だ！」という言葉が耳に入った。

　とうとう、やって来た……。恐怖と絶望で、膝から下の力が抜けそうだった。

「早季ちゃん。今すぐに、ここから逃げなさい」

　富子さんが、厳しい声で言う。

「一緒に行きましょう！」

「私は、ここに留まるわ。この状態では、足手まといにしかならないから」

「でも……！」

「あなたは、八丁標を越えて、清浄寺へ行きなさい。安全保障会議では、こうした緊急時には、そこで態勢を立て直す手筈になってます。あなたのご両親も、もし無事であれば、清浄寺へ逃げ延びているはずです」

急に、身体中を、どくどくと血液が回り始めたような気がした。かすかな希望だったが、今は、それにすがるよりない。

「ずっと以前に、私が言ったことを、憶えてますか？　あなたが私の後継者だというのは、私の本心でした。こんな形で引き継がなければならないのは残念ですが、神栖66町を、あなたに託します」

「待ってください。わたし……とても、そんな」

「それから、新見さん。あなたも、早季ちゃんと一緒に逃げてください」

新見さんは、たじろいだようだった。

「富子様がお逃げにならんのなら、私も、ここにおります」

「いいえ。あなたには、別の使命を与えます。肆星に、今の話を伝えてください。そして、もし、本当に悪鬼がやってきたのなら、公民館へ行って放送をしてください。できるだけ多くの人たちに、なるべく遠くへ逃げるよう警告を発するのです」

「……わかりました」

新見さんは、直立不動になって、頭を垂れた。

「さあ、何をしてるの？　早く行きなさい！」

わたしは、どうしていいかわからずに立ちつくしていたが、新見さんが、わたしの腕を摑んで、無理やり、部屋から連れ出した。

「待って！　富子様が、このままじゃ……！」

「これが、富子様の御意思なのです」

新見さんは、涙を流していた。わたしも、目頭が熱くなるのを覚えた。

朝比奈富子さんが、悪鬼と対面したのは、今のわたしと変わらない年齢のときだった。それから二百年以上の永きにわたって、富子さんは、ずっと、この町を守り続けてきた。良くも悪しくも、町そのものであったと言ってもいい。そして富子さんは、今、この町に殉じようとしているのだ。

だが、いつまでも感傷に浸っていることはできなかった。わたしは強い人間だ。だから、やるべきこ

とをやらなければならない。心の中で、何度も、自分にそう言い聞かせる。

　そうしなければ、前途に待っているもののことを考えると、恐怖にくじけてしまいそうだったからだ。

　恐慌に取り憑かれた群衆は、旅鼠（レミング）を思わせる命がけの暴走を始めていた。とても、誰かを捉まえて話を聞けるような状態ではない。

「渡辺さん。あなたは、富子様に言われたとおり、清浄寺へ行ってください」

　新見さんは、騒音に負けないよう、口の前に手を当てて叫んだ。

「でも、あなたは、どうされるんですか？」

「私は、鏑木肆星さんに会って、富子様の伝言を伝えます」

「だったら、わたしも、一緒に行きます。悪鬼が本当にいることを知ってるのは、わたしだけですから」

　おそらく、鏑木肆星氏は、群衆が悪鬼に怯えているのを知っても、単に幻影を見たか、せいぜい、敵の謀略でそう信じ込まされただけだと思うだろう。悪鬼に対して、何らかの対抗手段を取れる人間がいるとすれば、日野光風氏亡き後は、鏑木肆星氏を措いてない。早く、正しい情報を伝えなければならなかった。

　わたしたちは、群衆の流れに巻き込まれないよう用心しながら、道の端を伝って進んだ。これだけ人間が混み合うと、誰も、呪力を使うことができない。我先にと逃げ出す姿は、選ばれた民として神の力を謳歌していた姿の片鱗もなく、古代文明より遥か遠い昔にまで先祖返りしてしまったようだった。洞窟に棲み、闇に潜む超自然の存在を怖れ、風の音にも怯えていた、哀れな穴居人（けっきょじん）の群れへと。

　早朝には晴れ渡っていた空は、どんよりとした鈍色の雲に覆われていた。驟雨（しゅうう）は一段落していたもの

の、いつまた降り出すかわからない。

「鏑木肆星さんは、こっちにおられるはずです」

　新見さんが、言う。

「少し前は、無事な人たちを集めて、瓦礫を片付けて、怪我人を収容するためのテントを張っておられました。それがすんだら、自警団を再編成するということでしたが」

「でも、この人の波では……」

　わたしは、群衆を見て絶望的な気持ちになった。この状態で、どうやって鏑木肆星氏を見つけて、会えばいいのだろうか。

　群衆の先頭が広場にさしかかったとき、ふいに、前方の空が明るく輝いた。

　薄暗い雲を背景にして、巨大な光る文字が浮かぶ。

おちついてください。

おそれることはありません。

みなさんは、わたしが守ります。

　メッセージの効果は、絶大だった。パニックに襲われて我を忘れていた人々が、それを見て、足を止め、徐々に落ち着きを取り戻していったのだ。

「恐怖は心を麻痺させます。それこそが、敵の思うつぼなのです。皆さん、冷静になってください」

　鏑木肆星氏が、空中に浮遊しながら、広場に姿を現した。黄金色をした四つ目の仮面を被っている。追儺の儀式に使う方相氏の面だ。呪力によって増幅された声は、拡声器よりもはっきりと四方に響き渡った。

「バケネズミどもは、悪魔のような奸計を巡らせ、人間に対して反逆を企てました。その結果、我が町では多くの痛ましい犠牲者が出ました。亡くなられた方を悼むとともに、今こそ、私たちは、団結せねばなりません」

　ぱちぱちと拍手が起こった。それは、どんどん大

きくなり、群衆全体に波及する。

「そうだ！」「団結を！」という声が、方々で上がる。

「バケネズミに死を！」

鏑木肆星氏は、そう叫ぶと、広場の真ん中に、ふわりと着地する。

「バケネズミに死を！」

「バケネズミに死を！」

「バケネズミに死を！」

群衆は、熱狂し、拳を振り回しながら、シュプレヒコールを繰り返した。

鏑木肆星氏の卓越したカリスマ性がなければ、これほどたやすくパニックを鎮めることは不可能だったろう。見事な人心掌握術だった。心から恐怖を追い出せるほど強い感情は、怒りしかない。人々を扇動し、原初的な怒りを燃え上がらせるのは、劇薬に頼るのと同じで危険だが、気付け薬には、それだけ強い刺激が必要なのである。

だが、今から考えると、すべては、野狐丸の冷酷非情な読みの範疇だったのだろう。

悪鬼が登場するタイミングも。群衆を追いやる方向も。そして、それを、鏑木肆星氏が広場で足止めするであろうことまでも。

何の前触れもなく、広場の地面が波打つように膨らんだかと思うと、崩壊した。悲鳴を上げる間もなく、人々は、突如として足下に開いた巨大な穴に、呑み込まれていった。

陥没の範囲は、半径が五十メートルほどある広場全体に及んでいた。その際は、群衆に追いつきかけていたわたしたちの、すぐ目の前まで迫っており、その中心は、人々の輪の真っ只中の、まさに鏑木肆星氏が降り立った場所だった。

この当時、バケネズミの工学的な能力は、少なくとも土木技術に関しては、完全に人間を上回っていたのではないだろうか。一瞬で、あれほど広範囲な陥没を発生させた方法については、今でも推測の域

を出ないが、おそらくは、元々の得意技だった穴掘りの能力を生かして、広場の地下に縦横無尽にトンネルを掘り、容易に崩落するような状態を維持していたのだろう。そして、さらにその深部には、巨大な空洞を造り出していたのだ。

発破をかけたのは、狭い穴を通って運ばれてきた、小型のスミフキだったと考えられている。密閉空間での粉塵爆発によって、弱体化した地盤は崩壊し、地上にいた数百人の群衆を呑み込んでしまったのだ。

もうもうとした土煙によって、視界が完全に奪われてしまう。砂が目に入らないよう、両手で顔を覆うのが、精一杯だった。

「逃げましょう！」

新見さんが、わたしの手を引いた。

「でも、まだ、鏑木肆星さんに……！」

「もう、無駄です。この様子では、とても」

新見さんは、ひどく咳き込みながら言う。

まさか、鏑木肆星氏が死んだはずはないとは思う。しかし、いかに超人的な存在でも、今度こそは、呪力を発動する時間的余裕がなかったかもしれない。

わたしたちが、広場から逆方向に避難し始めたとき、再び、雨が降り始めた。最初は、ほんのお湿り程度だったのが、しだいに雨脚が強くなって、さきほどの驟雨に近い状態になる。

空を見上げて、わたしは、はっとした。雨は、ごく狭い範囲にしか降っていないのだ。ちょうど、地面の陥没によって、土煙が起きた場所だけに。

ぴたりと雨がやんだかと思うと、今度は、強い風が吹き始める。雨で薄まった土煙は、すっかり吹き払われてしまった。

鏑木肆星氏は、地面が陥没する前と同じ場所に立っていた。いや、すでに足下には何もないので、浮かんだままと言うべきだろうか。

その周囲には、多くの人が、同様に浮かんでい

た。こちらは、自力で浮遊しているのではなく、呪力によって吊り下げられている状態だった。人々は、茫然とした様子のまま、ゆっくりと穴の外に下ろされる。

「全員を救えなかったのは、慚愧に堪えない」

鏑木肆星氏の、怒りと苦渋に満ちた声が響く。

「だが、復讐するは我にある。この醜く呪われた生き物、バケネズミという種そのものを、神の国、日本列島から根絶やしにすることを約束しよう……」

その言葉が終わる前に、激しい銃声が轟いた。

地面が崩壊してできた巨大な穴。その途中に開いた横穴から、バケネズミの兵士たちが、一斉射撃を行ったのだ。さらに、別の横穴からは、いちどきに数百本もの矢が放たれた。標的はただひとつ。鏑木肆星氏だった。

だが、下方から、雨霰と浴びせかけられた銃弾と矢は、目標に到達する前に、異次元に呑み込まれたように消え失せてしまった。

「このしつこさは、正直、感服に値する。だが、たいへん残念なことに、何をやっても、私には通用しないのだよ」

すべてのバケネズミが、見えない手によって、横穴から引きずり出された。その数は、数百匹はいただろう。

「人語を解するものは、いるか？」

鏑木肆星氏が訊ねる。もはや、逃れられぬ運命を悟ったらしく、宙に浮かんだ数多くのバケネズミたちは、口をつぐみ、従容として最期の時を待っていた。

「静かに逝かせてやるほど、私は動物愛護の精神は持ち合わせていない。何しろ昨夜来、お前たちには、さんざん、煮え湯を飲ませられてきたからな」

すべてのバケネズミが、急に、苦しみもがき始めた。

「苦しいか。お前たちの神経細胞に、苦痛の情報を流しているのだ。実体のない偽の情報だから、それ

だけでは死ねない。私の質問に答えない限り、いつまでも続けるぞ」

一匹が、ついに、口を割った。

「ヤメ……ヤメテクレ」

「ほう。なかなか上手に喋れるじゃないか。お前たちの総大将は、どこにいる？」

「キィ！　シラナイ……ギッギッ！」

拷問されているバケネズミは、泡を吹いて身をよじった。

「殺せ！　殺せ！　殺せ！」

このときになって、ようやくショックから立ち直った群衆が、叫び始めた。

「さあ、さっさと吐け！　さもないと……」

鏑木肆星氏は、厳しい声で迫った。

だが、バケネズミは、しばらくじたばたと暴れてから、急に白目を剝いて涎を垂らし、意味不明の音を発するだけになってしまった。

「苦痛の強度を上げすぎたか」

鏑木肆星氏は、吐き捨てる。廃物となり果てたバケネズミは、白い炎を上げて燃えると、あっという間に真っ黒に炭化し、穴の底へと落下していった。

そのとき、わたしたちよりずっと後方から、激しい悲鳴が上がる。

振り返ると、この世のものとも思えない光景が、網膜に映じた。

何人もの人間が、紙吹雪のように、宙に舞い上がっている。幾人かは、そのまま建物の外壁に叩きつけられ、花が咲いたような赤黒い血痕を残した。

「悪鬼だ！」

通りは、たちまち、恐怖と狂乱の巷と化した。だが、どこにも逃げ場はない。

「悪鬼だと？　馬鹿な……そんなことがあるわけが」

鏑木肆星氏は、穴の上の空間から、こちら側の地面に降り立った。

吊り下げられていたバケネズミの群れは、もはや

用済みになったらしく、次々に破裂していく。肋骨が飛び出し、長い腸が垂れ下がった残骸は、糸が切れたように、穴の底へと消えていった。

怒り狂った野獣のような、甲高い唸り声が聞こえた。

わたしたちの背後にいた数十人が、一瞬にして、炎に包まれる。絶叫しながらもがき、地面に倒れ伏す人たち。新見さんは、わたしを胸元に引き寄せて抱え込み、建物の窪みに身を潜めた。

焼き殺された人たちの悲鳴が途絶えると、通りは不気味な静寂に包まれた。生き残った人たちは全員、わたしたちと同様に、通りの両端に身を寄せると、歯の根も合わぬほどの恐怖に震えていた。

その真ん中を、悪鬼がやって来る。

正視することなど、できようはずもなかった。ただ、そのかすかな足音だけに全神経を集中する。

心臓は、荒れ狂うような鼓動を打ち続けていた。まるで、いつ止まってもいいようにと、この世の名残を刻んでいるかのようだった。

だが……。

新見さんの腕の下から、悪鬼の姿が見えると、わたしは、魅入られたように視線を吸い寄せられてしまった。たとえようもなく恐ろしいのに、どうしても、目を離すことができない。

それは、ひどく小さかった。バケネズミか、あるいは、子供のように。

いや。まぎれもなく、人間の子供だ。男の子。せいぜい、九歳か十歳くらいだろうか。

バケネズミが着るような毛皮の戎衣に身を包み、顔や腕には、青い複雑な線の入れ墨が入っている。わたしたちには目もくれようとせず、正面にいる鏑木肆星氏を凝視している。

「本当に……悪鬼なのか？　だが、なぜだ？　お前は、誰なんだ？」

鏑木肆星氏が、叫ぶ。

わたしは、大きく目を見開いていた。

初めて見る少年だった。しかし、それが誰なのか、はっきりとわかったのだ。

子供にしては面長の、整ったきれいな顔立ちは、どこから見ても、真理亜にそっくりだったのである。

そして、伸び放題に伸びた髪は、真理亜と同じように赤く、守を思わせる、ひどい癖っ毛だった。

突如として現れた悪鬼は、早世した二人の忘れ形見だったのだ。

「Grrr……★＊∀§▲ЖАД！」

野獣の唸り声が混じった奇妙なボーイソプラノで、悪鬼が叫んだ。

数個の瓦礫が浮き上がり、鏑木肆星氏に向かって、弾丸のような速度で飛んでいった。だが、すべて、途中で透明な壁に激突したかのように、粉々に砕け散る。

鏑木肆星氏の背後の穴から、そろそろと、木の根が忍び寄ってきた。さらに、両側の建物に亀裂が入ったかと思うと、漆喰を粉砕して、長い材木が飛び出してきた。

だが、どんな攻撃も、すべて無効だった。二本の材木は、鏑木肆星氏を押し潰す前に、文字通り、木っ端微塵になる。背後から襲ってきた木の根は、足下に辿り着く前に燃え上がり、白い灰となって風に吹き散らされた。

「≠＊□И……Ë▼ЮΣ」

悪鬼は、急に警戒し出したらしく、ぴたりと足を止めた。獲物の意外な抵抗に鼻白んだ捕食獣のように、かすかに首を傾げながら、鏑木肆星氏を睨んでいる。

「無駄だ。お前の単純な技など、私にとって、見切るのは容易なことだ」

鏑木肆星氏は、傲然とうそぶく。

「せめて、このぐらいのことを、やってみるがいい」

悪鬼の両側の家が、突如、砂糖の山のように、さ

らさらと崩れ落ちた。変異は、悪鬼の足元にまで及び、通りの敷石が微粒子に変わり、蟻地獄のように大きな凹みを造っていく。悪鬼は、野生動物の敏捷さで飛び退いた。さすがに、驚愕の色は隠せない。

「早季！」

突然、後ろから声をかけられ、わたしは、思わず飛び上がりそうになった。振り返ると、悲愴な表情の覚が立っていた。

「覚……無事だったのね！」

「逃げるんだ。勝負は、目に見えてる」

「え？ ……でも」

悪鬼と鏑木肆星氏は、膠着状態のまま睨み合いに入っていた。技の優劣という点では、とうてい比較にならないが、どちらも、事態を打開する決め手を欠いているようだった。

「今はまだ、鏑木肆星さんの示威行為が効いて、悪鬼は、動けないでいる。でも、やつが気づくのは、時間の問題だ」

「気づくって、何を？」

「鏑木肆星さんには、攻撃抑制と愧死機構が備わっているせいで、同じ人間である悪鬼を殺すことができないんだ。……でも、やつは違う」

「しかし、ちょっと待ってください。悪鬼の方だって、鏑木肆星さんを斃すことはできんでしょう？ 鏑木さんは、どんな攻撃も跳ね返してしまうだろうし」

新見さんが、口を挟んだ。

「いや。やつにとっては、おそらく、簡単なことなんです」

「そんな……」

わたしの脳裏に、またも、失われていた記憶が蘇った。

鏑木肆星は、白い鶏卵とにらめっこをしている■に、ゆっくりと近づいた。

誰もが、歴史的な出会いを期待した。■は、いず

れは、鏑木肆星の衣鉢を継ぐと目されている生徒である。ここで初めて、直に指導を受けることになるのだろうと。

だが、途中で、鏑木肆星の足は、ぴたりと止まった。

どうしたのだろう。いぶかっていると、鏑木肆星の足は、逆に一、二歩後ずさりをした。それから、くるりときびすを返すと、みなが呆気にとられる中、さっさと実技演習室から出て行ってしまった。

呪力の漏出。これもまた、長い間ずっと、忘れていた言葉だった。無敵の鏑木肆星氏は、あのとき、いったい何を怖れたのだろうか。

「があああああ……！」

突然、鏑木肆星氏が叫び出した。裂帛（れっぱく）の気合いではない。それは、まるで、断末魔の絶叫だった。

鏑木肆星氏の顔を覆っていた、黄金の仮面が吹き飛んだ。世にも恐ろしい、虹彩が四つ並んだ目が、剥き出しになる。しかし、すでに、そこには、色濃く死相が表れていた。

「逃げろ！　今しかない！」

覚に引っ張られて、わたしたちは、走り出した。元来た方へ戻ったのではない。悪鬼のすぐ横を通り、さらに、鏑木肆星氏のそばを擦り抜けた。

悪鬼は、わたしたち三人には、何の関心も払わなかった。全力で、鏑木肆星氏を仕留めにかかっている。

ちらりと振り返ったとき、鏑木肆星氏の頭部が、虹のような光で覆われているのが目に入った。呪力と呪力がぶつかったときに顕れる干渉模様だ。

悪鬼は、直接、鏑木肆星氏の肉体に呪力を及ぼしているのだ。そして、いかに鏑木肆星氏といえども、呪力によって呪力そのものを撥ね除けることはできない。

枯れ枝が折れるような、嫌な音がした。

首が、ありえない方向に曲がっている。それが、

わたしの見た鏑木肆星氏の、最後の姿だった。

　広場のあった場所にぽっかりと口を開けている穴が、目の前に迫る。信じられないほど巨大で、底が見えないほど深い。

　わたしたちは、死に物狂いで跳躍した。

6

　大地の底まで続いているかと思われるような、巨大な縦坑を落下していく。多くの人間とバケネズミの墓場となった穴の底は、真っ暗だった。視界が利かなくなったら、呪力は使えない。瞬間、上を向き、穴の縁に呪力の鉤を引っかけた。想像上の綱にぶら下がって、何とか壁面に取り付く。

　岩肌は、さっきの雨で、ぬめぬめと光り、滑りやすかった。ひどく蒸し暑い上、爆発で酸素が薄くなっているらしく、息苦しい。しかも、空気には、焦げ臭さに、血の臭いと、正体不明の悪臭まで混じっている。

「早季。だいじょうぶか？」

　覚の声がする。わたしよりかなり上の位置で、足場を確保しているようだ。

「ここよ！　新見さんは？」

「だいじょうぶです」

岩の突起が邪魔になって、姿は見えないが、思ったより近くから声が聞こえた。

「僕の少し下に、横穴が見える。ここへ入ろう」

絶壁に、目印となる緑色の炎が閃いた。一瞬目が眩みそうになったが、位置はしっかりと確認できた。赤い筋が、視野をゆっくりと横切っていく。

岩肌が磁石のようにわたしの身体を吸い付けるイメージを作る。身体を安定させてから、ヤモリのように、ゆっくりと這い上っていった。

穴の外から、大勢の人の悲鳴と、建物が崩落するような大音響が響いてきた。悪鬼が、殺戮を再開したのだろう。わたしは、唇を噛んだ。今のわたしたちには、何もできない。ただ、少しでも多くの人が逃げのびることを、祈るしかないのだ。

目を閉じて、心臓の鼓動を落ち着ける。今は、逃げ延びることだけを考えなきゃ。悪鬼が穴の中に注意を向けるまでには、まだ時間があるはず。

わたしと新見さんが、横穴に辿り着いたときには、もう、覚は中で待っていた。

「早く！　入って」

覚が、わたしたちの手を順番に引いて、横穴に引き込んだ。

口径が一・五メートルほどしかないので、中腰にならなくてはならない。さっきよりもひどい悪臭に襲われる。鼻がもげそうだった。

「何？　この臭い」

「たぶん、トンネルを固めるのに、排泄物を混ぜた粘土やモルタルを使ってるんだ」

覚も、鼻を覆いながら言う。

「なんで、そんな？」

「突貫工事のためだろうな。やつらも、この戦争のために、相当無理をしてるんだよ」

新見さんが、地面に落ちていた松明を見つけた。発火させると、ますます息苦しくなるような感覚に囚われたが、横穴の中の様子が少し見えるようにな

った。地面には、ゴミが散乱していた。雑草の根や、昆虫の羽根や肢など。おそらく、それが、彼らの兵糧の残滓なのだろう。

「ここを見てください」

新見さんが、何かを見つけた。地面の上に、大量の血痕がある。さらに、這いずったような跡も。

「怪我をしたバケネズミがいるんだ。気をつけろ。まだ、生きてるかもしれない」

覚が、ささやいた。

横穴の奥へ向かって血痕を辿っていくと、それはいた。死んだように横たわっている。だが、よく見ると、かすかに胸郭が上下していた。

「見てみろよ。左腕がない……」

覚が指さす。瀕死のバケネズミは、左腕を根本近くから失っていた。右手には、血刀を握りしめている。

「おそらく、鏑木肆星さんの呪力で左腕を捉まえられたんだ。引っ張り出されそうになり、自分で左腕を切断して逃れたんだろう」

「こんな動物が、まさか、そこまでやるとは……」

新見さんが、唸った。

「あのとき、穴から引き出された兵士は、ほとんど何も着ていませんでした。この個体は、革に金属を組み合わせた鎧を着ている。どう見ても、将官クラスです。自分の知っている貴重な情報を守るために、やったんでしょう」

「……とどめを刺すの？」

「いや。まだ喋れるようなら、喋ってもらおう。……だいじょうぶ。悪鬼は、ここまでは追ってこられないから、多少の時間はあるよ」

覚は、呪力で、バケネズミから刀を奪い取った。それで、バケネズミは意識を取り戻したらしかった。松明の明かりを受けて赤く光る眼で、こちらを見る。

「おい。訊かれたことに素直に答えれば、苦しまずに逝かせてやる」

覚は、バケネズミの前に、しゃがんだ。

「ずいぶん、ひどいものを喰ってたみたいだな。なぜ、そうまでして、人間に楯突こうとするんだ？　お前たちが何を考えているのか、理解に苦しむよ」

バケネズミは、俯せになったまま、覚を見返した。

「どうした？　人間の言葉は話せるんだろう？　今さら分からないふりをして、ごまかそうとしても、無駄だぞ」

「ごまかす必要などない」

バケネズミは、掠れてはいるが、世間話のように平静な口調で応じる。

「そうか。だったら言え。野狐丸は、今、どこにいる？」

これには、バケネズミは、口をつぐんで答えなかった。

「お前たちは、みんな、野狐丸に騙されてるんだ。どうして、それがわからないんだ？　あいつは、兵士の命など、何とも思ってないんだぞ」

「兵士の命だと？　下らん。大義の前には、一個体の生命など鴻毛のように軽いのだ」

「その大義というのは、何なんだ？」

「我々の全種族を、お前たちの圧政下から解放することだ」

「圧政って、どういうこと？　わたしたちは、あなたたちに、そんな過酷な扱いをした覚えはないわ」

わたしは、思わず、口を挟んでいた。

「我々は、高い智能を持っている。本来なら、お前たちと平等に扱われるべき存在なのだ。にもかかわらず、お前たちの悪魔の力によって、尊厳を奪われ、獣のような扱いを受けてきた。もはや、お前たちを地上から一掃する以外に、我々の誇りを恢復する道はない」

「人間を、一掃する？　そんなことができると、本気で思ってるのか？」

覚が、激昂して叫んだ。

「お前たちバケネズミは、卑怯な騙し討ちによって、大勢の人間を殺した。だが、人間が一人でも残っていれば、お前たちを皆殺しにできるんだ！」

「そうはならん。お前たちが野狐丸と呼ぶ、解放の英雄、スクィーラが我らと共にある限り。そして、天から我々の陣営に、救世主（メシア）が降誕された以上はな」

「救世主（メシア）？　あの、悪鬼のことか？」

「悪鬼？　……悪鬼とは、お前たちのことだ！」

バケネズミは、四つん這いの姿勢から、いきなり地面を蹴って突進すると、覚に襲いかかった。

瞬間、三人の呪力が交差して、虹色の光が閃いた。バケネズミは、小石のように隧道（トンネル）の端まで吹き飛ばされ、露出していた岩に叩きつけられた。

「しまった」

覚は叫んだが、時すでに遅しである。背筋が逆に折れ曲がったバケネズミは、絶命しているのがあきらかだった。

「こいつ、自分を殺させるために、わざと飛びかかったんだ……」

「もういい。行きましょう」

新見さんが、わたしたちを促す。

「いつまでも、ここでぐずぐずしているわけにはいきません。私には、富子様より与えられた最後の使命があります。あなたたちも、早く、清浄寺へ行かなければ」

わたしたちは、玉の汗を流し、息を切らしながら、狭いトンネルを奥に向かって進んだ。どこかに、地上への出口があるはずである。覚は、悪鬼には呪力を応用して縦穴を下りてくることはできないと高をくくり、逃げ切れると楽観していたようだが、もし、悪鬼が、早々と大量虐殺を終えてしまえば、出口に先回りされる危険性だってあるのだ。

十四年前、夏季キャンプへ行ったときのことを思い出す。あのときも、わたしと覚は、バケネズミの

隧道を延々とさまよう羽目になった。あれほど絶望的な状況はないと思ったものだが、現況と比べれば、ただの肝試しのようなものにすぎなかった。

　多くの人が殺され、両親の安否すら分からない。今や、わたしたちには、帰るべき町もないのである。

　涙が溢れそうになったが、懸命に堪える。

　不世出の能力者だった日野光風氏も、鏑木肆星氏も斃れ、わたしたちには、悪鬼に対抗する手段は何一つ残されていない。だが、それでも諦めるわけにはいかない。将来に何の展望もないときこそ、どこまで踏ん張れるかで、本当の強さが試される。その意味でも、今こそが試練の時なのだ。

　負けるわけにはいかない。わたしは、後継者として富子さんから町を託されたのだから。そう思うことだけが、心の支えになっていた。

　バケネズミの横穴を二百メートルほど行くと、地上へ出る縦穴があった。出入り口は、木の根の間に作られており、雑草で巧妙にカモフラージュされている。町のすぐそばに、こんなものを作った大胆不敵さには、呆れるしかない。

　わたしたちは、悪鬼やバケネズミの部隊が付近にいないことを確認して、穴を出た。

　本来なら、手近な水路に直行して、舟で逃げるべきところだろう。しかし、スミフキ対策のために、すでに多くの水路の水は抜かれてしまっていた。残された幹線運河には、敵の目が光っているに違いない。

　わたしと覚は、やむを得ず、徒歩で利根川の本流を目指すことにした。そして、新見さんとは、ここでお別れとなる。

「お二人とも、どうか、ご無事で」

　新見さんは、わたしたちの手を握って言った。

「新見さんも、僕らと一緒に来られませんか？」

　覚が、翻意を求めたが、新見さんは、首を振っ

た。

「いや。私は、公民館へ行かねばなりません。それが、富子様のご指示ですから」

「しかし、今さら放送をしても、手遅れじゃないでしょうか？　すでに、悪鬼は、茅輪の郷にいた人たちを、ほとんど……」

「手遅れかどうかは、わたしにはわかりません。ですが、たとえ一人でも、私が放送をすることで逃げてくれれば、無駄ではないはずです」

新見さんの意思は固いようだった。わたしたちは、そこで袂を分かち、そして、それが最後になった。

夏草を掻き分けて、丘に登る。いつ、背後から悪鬼が現れるかという恐怖で、全身に冷たい汗をかいていた。振り返ると、町の中心部からは、不気味な黒煙が幾筋も立ち上っていた。

病院から町を目指したときと同様に、バケネズミの待ち伏せを警戒しながら進むので、なかなか道のりが捗らない。

ようやく茅野の郷を抜けようとするときだった。風に乗って、公民館からの放送が聞こえてきたのは。

緊急警報。緊急警報。悪鬼が出現しました。悪鬼が出現しました。氏名及びタイプ別は不明ですが、クロギウスI型ないしII型の変異型と思われます。悪鬼は、クロギウスI型ないしII型の変異型と思われます。悪鬼は、茅輪の郷を襲い、多数の犠牲者が出ています。繰り返します。悪鬼は、茅輪の郷を襲い、多数の犠牲者が出ています。可及的速やかに、避難してください。町の中心部におられる方は、ただちに退去し、周辺部におられる方も、町を離れて、可能な限り遠くまで逃げてください……。

新見さんの声だった。覚が、ぎゅっとわたしの肩を摑んだ。思ったより早く、公民館に着いたらし

い。悪鬼やバケネズミに遭遇する危険も顧みず、急行したのだろう。

声による放送は、その後、しばらくの間、同じ内容を繰り返していた。ちなみに、悪鬼の正式名称であるラーマン・クロギウス症候群は、混沌型と呼ばれるラーマンⅠ型～Ⅳ型と、秩序型とされるクロギウスⅠ型～Ⅲ型に分類される。混沌型と秩序型では、破壊や殺戮の様態が違うため、避難する際の心得も変わってくるのだ。

それから、放送は、古いアナログ・レコードの音楽に変わった。

もちろん、古代のレコードが、千年以上も保つわけはない。呪力によって、陶製の盤に音溝を複製したものだが、演奏自体は、遥か昔に録音された原音そのままである。

音楽は、ドボルザークの交響楽『新世界より』の第二楽章の一部、『家路』だった。新見さんが、なぜ、この曲を選んだのかはわからない。故郷の町が消滅しようとしているとき、なぜ、毎日、日没前に流され、子供たちに帰宅を促していた曲をかけようと思ったのだろうか。

演奏には、歌は入っていなかったが、聴いているわたしの脳裏には、はっきりと歌詞が浮かんでいた。

遠き山に日は落ちて
星は空をちりばめぬ
きょうのわざを　なしおえて
心軽くやすらえば
風はすずしこの夕べ
いざや楽しまどいせん
まどいせん

やみにもえしかがり火は
ほのおも今は静まりぬ
眠れやすくいこえよと

さそうごとく消え行けば
やすきみ手に守られて
いざや楽し夢を見ん
夢を見ん

それからも、『家路』のメロディは、エンドレスで流し続けられた。

「どうやら、新見さんも、公民館を脱出したみたいだな。……僕らも行こう」

覚が、わたしを促した。

「ええ」

まだ日没には間があったが、この曲を聴くと、条件反射のように夕刻の情景が浮かんでくる。そして、ふと、気がついた。公民館の放送は、郷にたったひとつの、発電用の水車によって得られた電気で行われる。だが、今や、水路の水は、すべて干上がっているはずだ。

新見さんは、まだ、公民館にいる。この放送は、新見さんの呪力なしには、行うことができないのだから。

よっぽど、そのことを告げようかと思ったが、覚の横顔には厳しい表情が刻まれていた。覚も、とうに気がついているのだ。

わたしたちは、無言のまま歩き続けた。干上った水路を横断し、川を目指す。公民館からかなり隔たったところまで来たので、『家路』は、ほんのかすかに聞こえるだけになっていた。

それが、ぷつりと途絶えた。

わたしは、瞑目し、涙を流すまいと歯を食いしばり、そして、ゆっくりと息を吐いた。

新見さんは、わたしが、富子さんによって後継者に指名されるのを聞いていた。だから、わたしたちを安全に清浄寺へ逃がすために、あえて、反対方向の公民館へ悪鬼を引き付けたのではないだろうか。

だが、それをたしかめる機会は、永遠に失われてしまった。

わたしたちは、幹線運河を避けて野原を抜け、遠回りをしてようやく利根川に辿り着いた。このときほど、あの清冽で雄大な流れが美しく見えたことはなかったように思う。どこかに舟がないかと探したが、そう都合よく見つかるわけもない。結局、倒木を三つ見つけ、呪力で強引に融合させて、筏を造った。

　利根川を遡りながら、ゆっくりした水の上下動に身を任せていると、この、二十四時間足らずのうちに起きた出来事が、どれも、現実とは思えなくなってくる。

　これは、きっと夢なんだ。夢に違いない。そう思いたかった。しかし、身体に残された無数の切り傷や打ち身、それにどうしようもない疲労感は、すべては現実に起きたのだと、声高に主張していた。

　昨晩から眠っていないこともあって、頭が朦朧としてきた。あまりにも多くの衝撃的な事件が矢継ぎ早に起こったために、脳がそれを処理し切れていないようだ。

　わたしは、いつしか、奇妙な無感動状態（アパシー）に陥っていた。

　今から千年後には、わたしたちは、全員、影も形もなくなっている。ここでどんなことが起きようとも、思い出す人すらいなくなるに違いない。だとすれば、必死に恐怖に耐え、苦しみながら戦い続けることに、どんな意味があるだろうか……。

「早季。たぶん、この近くじゃないかな」

　覚に声をかけられても、すぐには、どういう意味だかわからなかった。

「入り口がどこだったか、覚えてる？」

　それで、ようやくわかった。覚は、清浄寺への進入路について、訊いているのだ。

「……わからない。あそこにある槐（えんじゅ）の木に見覚えがあるような気はするんだけど」

　清浄寺の場所は、秘密というわけではなかったが、一般には、あまりあきらかにされていない。

通過儀礼（イニシエーション）のときには、窓のない屋形船で運ばれてくるので、どこで水路から川に出て、再び水路に入ったのかもわからなかった。わたしは、異類管理課という所属がら、鳥獣保護官と一緒にフィールドワークを行った経験があり、その際、清浄寺にも、何度か立ち寄っていた。利根川から清浄寺の境内まで続く進入路があるはずなのだが、どこにも、それが見当たらないのだ。

「おかしいな。僕も、間違いなく、この辺だったと思うんだけど」

「どうしよう？」

上陸して、付近を探してみるべきだろうか。だが、見当違いの場所を歩き回っていても、得るものがないどころか、バケネズミと遭遇する危険性が高くなるかもしれない。

「すみません！　どなたか、いらっしゃいませんか？」

覚が、大声で呼ばった。

「やめて。悪鬼に聞かれたらどうするの？」

わたしは、あわてて止めようとしたが、覚は、首を振った。

「危険は、承知の上だ。こうしてる間にも悪鬼が追ってくるかもしれないんだ。早く寺を見つけなきゃ……すみません！　どなたか、清浄寺の方はいらっしゃいませんか？」

すると、驚いたことに、どこからか返答の声が聞こえた。

「どなたでしょうか？」

「私は、妙法農場の生物試験課に勤める朝比奈覚、こっちは、保健所職員の渡辺早季です。富子様より清浄寺へ避難するよう言われ、参りました」

「少々、お待ちください」

ぎしぎしと何かが軋むような音がすると、わたしたちの筏のほぼ真正面で、藪が左右に割れた。奥には、水路が続いている。

「そのまま、お入りなさい」

声の主は、あいかわらず、姿を見せない。わたしたちは、倒木をつなぎ合わせただけの不細工な筏に乗って、水路に入っていった。背後で、藪でカモフラージュした扉が閉まる。よく見ると、さほどの大仕掛けではないようだが、呪力なしには開けるのは困難だろう。舟に乗って川から見ても、まず気づかれないだろうし、陸の方から近づいても、密生した木立や岩が邪魔をして、そう簡単には発見されないはずだ。

筏は、狭く曲がりくねった水路を通り、周囲をぐるりと囲いで覆われた船着き場に到着した。これは、通過儀礼（イニシエーション）のときに、わたしが連れてこられた場所だと、思い出す。もっと大きな水路があったはずだが、おそらく、そちらは閉鎖されているのだろう。

「よく、ご無事で、ここまで来られましたね」

僧形の人物が、合掌しながら現れた。わたしたちも、丁寧に礼を返す。

「私は、清浄寺の知客（しか）を勤める、寂静（じゃくじょう）と申します。さぞや、お疲れになったでしょう。まずは、ゆるりとご休息ください。その後、少々お訊きしたいこともありますので」

知客というのは、寺で接客を担当する役職である。わたしたちは、囲いで視界を遮られている階段を上がった。お寺の中に入ると、そこが宿坊になっており、わたしたち二人は、畳の部屋に通された。すぐに、二人分のお膳が、持ってこられる。載っていたのは、白いご飯と蕪の漬け物、それに白湯だけだったが、このときのわたしたちには、どんなご馳走より有り難かった。猛烈な勢いでご飯を掻き込む。気づいたときには、お膳の上は空っぽになっていた。

それから、しばらくの間、わたしたちは、放心状態で過ごした。覚と話し合わなければならないことは、山のようにあったのだが、そうする気力が湧いてこないのだ。筏の上で感じていた無感動（アパシー）状態に、

再び取り憑かれたような感じだった。

部屋の外から、声がかけられた。さきほどの寂静という僧の声だった。

「朝比奈覚さん。渡辺早季さん。お疲れのところ誠に恐縮ですが、今すぐ、本堂までおいでいただけますか?」

「わかりました」と、同時に答える。

本堂へ案内されると、たくさんの僧侶が集まっていた。どうやら、護摩を焚く準備をしているところらしい。

「朝比奈覚さん、渡辺早季さんが、いらっしゃいました」

寂静師の声が響くと、本堂の中は、しんとなった。

「おお、おお。よく来られた……」

そう言ったのは、無瞋上人(むしんしょうにん)だった。すでに百歳を超える老齢だが、しばらく見ない間に、さらに老け込み、窶(やつ)れたように見える。

「富子様には……お変わりはないのかな?」

わたしは、何と言っていいのかわからず、絶句した。わたしの表情から、すべてを読み取ったのだろう。無瞋上人は、瞑目した。

代わって、わたしたちに話しかけたのは、鶴のように痩せた、やはり、かなりの高齢と思われる僧侶だった。僧は、清浄寺の監寺(かんす)を勤める行捨(ぎょうしゃ)だと、自己紹介をした。監寺というのは、寺の住持、無瞋上人に次ぐ位置であり、実務上の最高責任者と言ってもいい。どこかで見覚えのある顔だと思ったのだが、一週間前に開催された、安全保障会議に出席していたようだ。

「あなたたちには、是非とも協力してもらいたいことがあるのです。お二人のどちらか、悪鬼を間近でご覧になった方はおられますかな?」

「はい。二人とも見ています」と、覚が答える。

「では、その人相風体を、私たちに伝えてくださいませんか。何歳くらいで、いったい、どんな外見な

のかを」

「悪鬼は……年齢は、たぶん、十歳前後だと思います」

わたしがそう言うと、どよめきが起きた。

「十歳？　それほど若年の悪鬼というのは、初めて聞きました」

「まだ少年、というより子供ですが、顔立ちはたいへん整っています。髪は赤い癖毛で……」

悪鬼が、真理亜と守がこの世に残した息子であることには確信があったが、そのことを話すのは、躊躇してしまった。わたしと覚が、悪鬼の外見を描写している間に、護摩壇に火が入れられた。炎は、天井近くまで上がり、数名の僧が、読経を始める。

「だいたい、わかりました。それでは、悪鬼とは、このような者なのでしょうか？」

行捨師が言うと、炎の中に、ぼおっと悪鬼の姿が浮かび上がった。

「ええ……この通りです。間違いありません！」

間近で見たときの戦慄がよみがえり、わたしは、声が震えるのを感じた。

「ありがとうございました。それでは、もう、下がっていただいて結構です」

行捨師は、そう言うと、無瞋上人らと共に護摩壇の前に座る。炎の中に香油が注がれ、護摩木がくべられた。火の粉が弾け、総勢三十名ほどの僧侶が一心に経を誦す声が、本堂いっぱいに響き渡る。

「待ってください。お訊きしたいことが……」

行捨師を呼び止めようとしたわたしを、寂静師が制した。

「ご質問があれば、私が承ります。とにかく今は、お下がりください」

本堂から出たところで、覚が、寂静師に質問をした。

「あのご祈禱は、何をされるところなんですか？」

寂静師は、少しうつむいて考えているようだった。

「本当は、口外してはならないのですが、あなた方お二人には、特別に申し上げましょう。本日只今より、清浄寺の総力を挙げ、悪鬼調伏のための護摩を焚くことになったのです」

「悪鬼を調伏する？　そんなことが、できるんですか？」

　わたしは、驚いて叫んでしまった。

「むろん、容易な業ではありません。しかし、北極星から放射される仏光で、妖魔鬼類の行動を止める熾盛光法。毘沙門天の御力で鬼神を鎮める鎮将夜叉法。四箇大法の一つで、地霊を鎮め、国家の災いを防ぐ大安鎮法。太古にモンゴルの軍勢が日本に攻め寄せた際は、神風を吹かせたとされる尊勝仏頂陀羅尼法。さらには、至高最強の呪法、一字金輪法など、あらゆる秘儀を集約し、さらに効力を高めた呪法を執り行えば、必ずや、悪鬼を調伏できるものと信じております」

　寂静師は、自信たっぷりに言う。

「これまでに、調伏に成功した例はあるんですか？」

　覚が、遠慮がちに訊ねた。

「当寺に伝わる古文書によれば、四百年前に突如現れた悪鬼に対しては、全寺を挙げての三日三晩の祈禱によって、見事、調伏に成功し、それ以降は、一人の犠牲者も出すことはなかったということです」

「それは……悪鬼を殺したということですか？」

　覚が重ねて訊くと、寂静師の表情が曇った。

「いや、そうではありません。古来、怨敵を呪殺するための行は存在しましたが、現在は、御仏の道に背くことであるとして、絶対の禁忌となっています」

「しかし、悪鬼により、すでに、多くの人たちが殺されています。悪鬼一人を殺すことで、多くの人が救われるとすれば、それは、むしろ仏の道に適うことではないんですか？」

「だからといって、祈禱によって悪鬼を殺すことは

できません。それは、我々も皆さんも同じことです。人が、呪力を用いて人を殺すことは、どんなやり方であれ、けっして許されることはないのです」

どれほど迂遠な形を取ったところで、わたしたちのＤＮＡに焼き付けられた攻撃抑制や愧死機構をごまかすのは不可能らしい。だが、悪鬼を直接攻撃できないというのであれば、いったい何のために、護摩を焚くというのだろう。

覚も、わたしと同じ疑問を抱いたようだった。

「では、ご祈禱の効力は、いったい、どこに顕れるんですか？」

「悪鬼を調伏するというのは、その行動を掣肘し、慚愧の念から仏心をよみがえらせて、無益な殺戮を押しとどめることなのです」

人々の無意識から漏出した呪力により、生物の進化まで歪められるのだから、修行を積んだ僧侶たちが一心に念じた呪力は、たいへんな効力を持つに違いない。寂静師の言うとおり、悪鬼調伏の護摩は、悪鬼を物理的に攻撃するのではなく、精神的に影響を与えて、その行動を制約しようとするものなのだろう。平和的な解決法としては、これ以上のものはないかもしれない。

だが、そもそもの出発点において、重大な誤算があるのではないだろうか。これまでに出現した悪鬼はすべて、一度は、わたしたちの社会の一員だった。悪鬼の人格に心を支配されてしまったとしても、その奥底には、ごく普通の人間だった頃の記憶や感情が眠っていたはずだ。そうした記憶の深層に働きかけることができれば、あるいは、殺戮を躊躇させることも可能だったかもしれない。

だが、あの悪鬼は、おそらく、人間の社会で暮らした経験はなく、日本語すらまったく理解できないはずだ。遺伝的には人間であるとしても、精神はバケネズミそのものだろう。そんな相手を動かすことなど、とても可能とは思えなかった。

そのことを、伝えるべきかどうか迷う。だが、わ

たしには、その前に訊ねなければならないことがあった。

「富子様は、非常時には、安全保障会議の構成員は、清浄寺に逃れる手筈になっているとおっしゃってました。わたしの両親……図書館司書の渡辺瑞穂と、町長の杉浦敬ですが、ここへは参らなかったのでしょうか？」

寂静師の答えは、予想外なものだった。

「お見えになりました」

「え？　じゃあ、今どこに？」

わたしは、勢い込んで訊ねたが、寂静師の沈鬱な顔を見て、冷水を浴びせられたような気分を味わった。

「お二人は、無瞋上人や行捨師とお話しになり、町へお戻りになりました。あなたたちがおいでになる、ほんの二、三時間前のことです」

だとすれば、利根川では、ちょうど入れ違いになったのだろう。

「そんな……なぜ？」

「ご両親は、あなたのことを、たいへん心配しておられました。ですが、必ずや無事に、ここへ到着されると信じ、ひたすらお待ちになっていたのです。そこへ、町から、悪鬼が出現したという第一報が入りました」

わたしは、寂静師の顔から、どうしても目を離すことができなかった。

「今は、いかなる犠牲を払っても悪鬼を止めることが急務であると、ご両親は考えられたようでした。そのため、あえて町へと戻られたのです。第一に、町で飼われている不浄猫を一匹残らず解き放つため。第二に、万一にもバケネズミの手に渡らぬよう、図書館にある資料を処分しなければならないともおっしゃってました」

「それじゃあ……」

わたしは、膝から力が抜けるのを感じた。覚が、わたしの肩に手を回して支えなければ、その場に崩

れ落ちていたかもしれない。

父と母は、自ら進んで、死地に赴いたというのか。

「お二人から、あなたが来られたとき、お渡しするように、お預かりしているものがあります。後ほど、ご覧に入れましょう」

「今すぐに……見せてください」

わたしは、茫然として、つぶやくしかなかった。

「わかりました。それでは、すぐにお持ちしましょう。ただ、その前に、あなたたちに、ぜひお会いしたいという方がお待ちになっています。やはり、当寺の客人なのですが」

もはや、寂静師の言葉は、わたしの耳には入ってこなかった。

今から追いかけても、もう、間に合わない。両親は、すでに、悪鬼とバケネズミが支配する地域へ入ってしまったはずだ。だとすれば、生還は、まず不可能だ。

わたしは、両親を、いちどきに失ってしまったのだろうか。そう思うと、身体の中からすべての力が失われていくようだった。

覚が、寂静師と何かを話してから、わたしの肩を抱きかかえるようにして、長い廊下を歩いていく。どうやら、宿坊の方へ戻っているようだ。

「失礼します。渡辺早季さんと、朝比奈覚さんを、お連れしました」

寂静師は、板戸の前で膝をつき、声をかける。

「どうぞ」

中から聞こえた声には、どこか聞き覚えがあった。

板戸を開けると、中も板張りの部屋で、粗末な床が敷いてあった。同じ宿坊の中でも、わたしたちが通された部屋は、かなり上等な部類だったらしい。

「渡辺さん。ご無事で何よりです。朝比奈さんも」

床の上に半身を起こしている男性が言う。ひどく日に灼けている上に、半白の無精髭が顔を覆ってい

たが、誰なのかはすぐにわかった。

「乾（いぬい）さん……」

保健所の鳥獣保護官として塩屋虻コロニーの抹殺に向かい、その後、消息を絶っていた。おそらく、最初に悪鬼に遭遇したはずの人物だった。

「お恥ずかしい限りです。与えられた使命も果たすことができず、こうして、おめおめと逃げ帰ることしかできませんでした」

乾さんは、頭を垂れた。

「そんな。相手は悪鬼だったんだから、どうしようもありませんよ」

覚が慰めたが、乾さんは、首を振った。

「いや。せめて、もう少し早く町に通報することができれば、これほど……恐ろしい事態は防げたはずなんです」

「乾さん。塩屋虻コロニーの駆除に向かったのは、約一週間前でしたね？　その後、何があったんですか？」

覚の質問に、乾さんは、ぽつりぽつりと語り始めた。

安全保障会議の下命で、五人の鳥獣保護官たちは塩屋虻コロニーの抹殺に向かったが、当初与えられた三日間で二十万匹の駆除という、とてつもないノルマを達成するどころか、一匹の成果も上げることができなかった。なぜか、悪名高い『死神』がやって来ることを事前に察知したらしく、塩屋虻コロニー以下の大軍勢が、あたかも地に潜ったように姿を消してしまったためである。

野山を渉猟して一日が終わると、報告用の書式を埋め、翌朝、鳩の足に付けて保健所へ送った。最初の三日間は、判で押したように同じで、終日、実りのない探索に終始した。事件が起きたのは、四日目のことだった。

五人の鳥獣保護官は、いずれもベテランで、バケネズミの戦術や弱点は知り抜いていた。したがっ

て、相手が隠遁（いんとん）の術を用いたからといって、手分けして捜索に向かうような愚は犯さなかった。呪力を持った人間が複数いる場合は、分散させて各個撃破するというのが、敵の常套手段だからだ。

この朝も、五人は、研ぎ澄まされた視覚と聴覚で全方向を警戒しながら、バケネズミを探しに出発した。熟練した猟師のように山野を歩いて、ようやく、バケネズミの小部隊が夜営したらしい痕跡を発見したのだった。

一時間ほどの追跡の後に、五人は、バケネズミの小隊を発見した。十数匹が、岩山の崖の麓に掘られた穴に出入りして、隠してあったらしい弓矢などの武器を運び出している。五人の中で最も遠目が利く海野さんが、塩屋虻系の火取蛾（ヒトリガ）コロニーの兵士であるのを確認する。ここで初めて、五人は、大きく散開した。お互いの位置を視野に収めて、いつでも援護できる態勢を作りながら、一匹も取り逃さないための包囲網を敷いたのである。

少数のバケネズミの駆除は、蜂の巣を取り除くのと同じ程度の危険を伴う作業だった。二人が、相手の反撃をすべて無効にする役割を担い、一人が、正面から攻撃する。残りの二人は、遊軍だった。見通しのいい場所に陣取って、逃げようとするバケネズミを丹念に殺していくか、情報を聞き出すために生け捕りにするのだ。乾さんは、この遊軍になり、右に大きく岩山を回り込むと、反対側から頂上に上り、戦場を見下ろす好位置についた。もう一人の遊軍の会沢さんは、左に回り、地面の窪みに身を隠す。

いよいよ、攻撃開始だった。最初から人間の攻撃だと悟られると、穴の奥にいる個体を取り逃がす可能性がある。穴には、いくつ出入り口があるかわからないからだ。それで、攻撃役の川又さんは、細かい石礫を使い、銃撃に見せかけた。発砲音そっくりの擬音まで出す職人芸ぶりだったという。

案の定、敵対するコロニーの攻撃と勘違いした火

取蛾コロニーの兵士たちは、ただちに臨戦態勢になった。銃撃が単発だと見ると、岩や竹製の盾などの遮蔽物に隠れて、反撃を開始する。川又さんは、弾丸に見立てた石礫が、少し離れた松の木陰から放たれているかのように偽装したので、バケネズミの矢玉も、そちらに集中した。そして、頃合いを見て、弾薬が尽きたかのように装って石礫を止めると、バケネズミたちは、次から次へと穴から出てきた。

このとき、岩山の頂上付近に穿（うが）たれた穴から、一匹の兵士が現れた。兵士の位置からは、会沢さんの姿が丸見えになる。だが、兵士が手にした弓矢で狙いを付ける前に、乾さんが音をたてずに殺す。死体は、この暑さにもかかわらず、緑と茶色の迷彩を施したマントを着ていた。たぶん、物陰から敵を暗殺する役目の射手だったのだろう。

その間に、眼下では、あっという間に片が付いていた。姿を現したバケネズミの兵士の首を、川又さんが、手練の技で折っていったのである。防御役の海野さんと鴨志田さんは、やることがなく、手持ち無沙汰なほどだった。

そのとき、何かが麓の穴から出てきた。こちらは、頭から灰色のマントを被っている。生き残ったバケネズミが降伏するつもりかと思い、見下ろしている乾さんは、あえて殺さなかった。地上にいる四人の鳥獣保護官も、同じようだった。誰一人、新たに現れた者を攻撃しない。だが、どことなく様子がおかしかった。

四人の鳥獣保護官、川又さん、海野さん、鴨志田さん、会沢さんが、みな、ぞろぞろと出てきてしまったのだ。相手が一匹であれば、何をしようと完璧に防御できるはずだが、それにしても、戦闘中に全員が姿を見せるというのは、尋常では考えられない。

「君は、誰だ？　いったい、ここで何をしてるんだ？」

川又さんが、声をかける。それでようやく、乾さ

んも、現れたのは人間だと気がついた。ほぼ真上から見ているので、正確には判断できないが、バケネズミと同じ程度の身長しかないので、おそらく、子供だろうと思った。

それに続いて起きたことは、まさに、悪夢そのものだった。

川又さんの頭部が、まるで西瓜割りのように、血漿を飛び散らせて破裂したのだ。次は、海野さん、そして、鴨志田さん、会沢さんの順だった。

乾さんは、衝撃のあまり、頭が真っ白になったという。心臓は狂ったように鼓動し、脂汗が吹き出してきた。ただ、悪鬼という言葉だけが、脳裏を駆けめぐる。

少し頭が働くようになると、次々に疑問が湧き出した。なぜ、ここにいるのか。なぜ、バケネズミの穴から出現したのか。あれは、いったい誰なんだ。

だが、いくら不可解な事態であっても、答えの出ない疑問に時間を空費はできない。乾さんは、すぐに思考を切り替えた。どうすれば、ここから無事に逃げられるかに。

本能的な恐怖から、一目散に逃げ出したかったが、必死に心を落ち着けて、先を読む。そして、さっき斃したバケネズミの射手から、迷彩模様のマントを剝ぎ取った。そして、結果的に見ると、それが唯一の正しい選択だったようだ。

岩山から下りてから、乾さんは、どちらへ行っても、バケネズミの重囲の中から逃れることはできないことに気がついた。戦いになった場合、一人では、必ず勝つという保証はないし、悪鬼が現れれば、それで終わりである。

乾さんは、小刻みに隠れ場所を変え、敵が去るのを待った。だが、バケネズミたちは、期待に反し、いつまでもその周辺に留まり続けた。やつらは、『死神』が五人一組で行動することを知っていたのかもしれないと、乾さんは考えた。もしかすると、罠にかかったのは、こちらの方だったのかもしれな

いと。

　迷彩色のマントは、文字通りの命綱だった。フード付きなので、すっぽりと身体全体を包むように着れば、近視気味のバケネズミの目はごまかせたし、臭いで気づかれることもなかった。それでも、決定的な危機が一度だけあったらしい。正面からやって来るバケネズミの大部隊と鉢合わせしそうになったのだ。乾さんは、そっと道を譲って林に入ったが、あきらかに相手の視界には入っていたという。乾さんが、かなり小柄で、ぎりぎりバケネズミとして通用する身長だったことに加え、日頃からバケネズミをよく観察していて、上手に身のこなしを真似られたため、何とか疑われずにすんだようだった。

「……ですが、野原に潜伏して、やつらに見つからないようにするのが精一杯で、どうしても、包囲から抜け出して町へ帰還することはできませんでした」

　乾さんの声音には、苦渋が滲んでいた。

「こうして、四日がたちました。その間、草の露を啜る以外、ほとんど飲まず食わずで、体力も限界に近づいてました。ところが、四日目の昼……昨日です。急に、バケネズミが移動を開始したのです。いっせいにどこかへ行ってしまい、最初は罠かと思いましたが、それ以上疑っている余裕はありませんでした。私は、あたりが暗くなるのを待ってから、町を目指しました。バケネズミはともかく、悪鬼について、すぐに警告しなければと思ったのです」

　乾さんは、地を這うようにして丘を越え、見晴（みはらし）の郷（さと）に辿り着いた。最初に出会った人に助けを求めようと思っていたが、人っ子一人見当たらない。それで、ようやく、夏祭りの晩だということに気がついたのだった。

　今晩ばかりは、ほとんどの人が出払っているはずだ。乾さんは、落胆した。だが、それでも、必ず誰

かが残っているはずの場所を思い出した。

病院と新生児の託児所だ。

病院があるのは、かなり離れた黄金（こがね）の郷（さと）だが、産院と新生児の託児所は、偶然にも見晴の郷の中にある。乾さんは、当然ながら託児所を目指した。夜空を花火絵が彩り、遠く離れた茅輪の郷から歓声が伝わってくる。

そして、ようやく見つけた託児所で、この上なくショッキングな光景を見たのだった。

「もちろん、やつらにそういう習性があるのは、わかってました。今まで、コロニー間の争いに決着が付くたびに、そういう光景を目の当たりにしましたが、そのときは、所詮、下等な動物のやることと思っていました。しかし、それが、こともあろうに人間の……！」

乾さんは、早口に言って、絶句した。

「ちょっと、待ってください。まさか、それは、バケネズミが」

覚も、衝撃を受けたらしく、最後まで質問を言い切ることができない。

「ええ。やつらは、おぞましいことに、人間の赤ん坊を狙ってたんです」

十二歳の、夏季キャンプに行ったときの記憶がよみがえった。

土蜘蛛コロニーの竜穴から、大勢の大雀蜂の兵士たちが、湧き出るように現れた。それぞれ、大切そうに、何かを腕に抱えている。

「あれは……？」

質問の途中で、わたしは気がついた。赤ちゃんだ。

「竜穴の途中には、多くの産室があります。あれは全部、土蜘蛛の女王が産んだ幼獣なのです」

「でも、どうして？」

奇狼丸は、胸糞が悪くなるほど満足げな表情を見

せた。

「あれこそ、貴重な戦利品。我々のコロニーの明日を支える労働力となるのです」

赤ん坊を抱いた兵士が、奇狼丸のそばに来た。抱えている赤ん坊は、まだ目が開かず、しきりに上肢を突っ張って、何かに触れようとしている。肌はきれいなピンク色で、成獣と比べると、ずっとネズミっぽい顔つきだった。

わたしは、スクィーラの言ったことを思い出した。

「女王は処刑されますが、それ以外は全員、奴隷として使役されます。生きている限り、家畜以下の過酷な扱いを受け、死ねば、野山に捨てられるか、畑の肥料となるのです」

赤ん坊が辿るであろう運命を思うと、わたしは、ただ暗然とするしかなかった。

わたしは、衝撃に、頭がくらくらとした。吐き気を感じる。

野狐丸の、もう一つの、そして真の目的は、託児所を襲って、人間の赤ん坊を手に入れることだったのだ。

「やつらは、託児所に残っていた保育士たちを、無慈悲にも皆殺しにしました。むろん、バケネズミだけでやったことではありません。やつらと寄り添うようにしていた、悪鬼の仕業です。そして、赤ん坊たちを略奪しました。しかも、その場で、バケネズミどもは、泣き叫ぶ赤ん坊に入れ墨をしたんです。やつらの奇怪な文字で」

バケネズミの文字は、異類管理課に来てから、何度か見たことがあった。漢字にとても似ているのだが、どこかが違う。たとえるなら、古代の女真文字や契丹文字、西夏文字に似ているかもしれない。

「倍々ゲームどころじゃない」

覚が、蒼白な顔で言う。

「最初は、真理亜たちの子供だ。その子が成長し

て、鏑木肆星さんさえ対抗する術を持たない悪鬼となった。そして、その勝利で得た大勢の子供たちが、十年後、みんな呪力を使えるようになれば……」

わたしにも、ようやくわかった。これこそが、野狐丸が秘かに描いていた遠大なる構想（グランド・デザイン）だったのだ。

一人の悪鬼を使って神栖66町を手に入れられれば、それもよし。かりに、完全に征服することができなくても、十年間、現状のままで持ちこたえられればいい。託児所にいた赤ん坊の数はわからないが、百人以上はいたはずだ。その子たちが、バケネズミによって育てられることで、もし同様に悪鬼へと育ったなら、日本中、どの町も逆らうことはできなくなる。そうして、さらに多くの子供を略奪して、悪鬼の部隊を編成すれば、日本から極東アジア、ユーラシア大陸全土から全世界を征服することさえ、夢ではなくなるだろう。偉大なる、バケネズミの世界帝国の誕生だ。

「私は、あのときどうすればよかったのか、いまだによくわかりません。たぶん、静かにあの場を離れて、町のお偉いさんに、ご注進するべきだったのでしょう。だけど、私は、どうしても我慢できなかった。胸糞が悪くて、あのまま見過ごすことなど、とうていできなかった。だから、私の目の前に、一匹のバケネズミが現れて、泣き叫ぶ人間の赤ん坊を得々として見せびらかしていたとき、そいつの頭を粉微塵に吹き飛ばしてやったんです」

いつもは冷静沈着な乾さんの、頰のあたりが、激情にかられたように赤らんでいた。

「当然、大騒ぎになりました。呪力による攻撃は、方向が判別できないので、やつらは、文字通り、右往左往していました。その間隙を衝いて、私は逃げることができたんです。もちろん、そこまで計算したわけではなく、ただただ、激情に任せて、殺してしまったんですがね」

「でも、よく、無事に逃げ切れましたね」

覚が、賛辞を送るように言う。

「いや、それが、無事でもなかったんですよ。例の迷彩色のコートを着て逃げたんですが、途中で、バケネズミの兵士に見咎められて、左腕に弾を喰らっちゃいました。今度こそ、だめだと思いながら逃げていると、今度は何と、件（くだん）の悪鬼、そのご本人に鉢合わせする始末でね。顔を見たわけじゃないけど、あれは、間違いなくそうでした」

「それで、どうなったんですか？」

わたしは、息を呑んだ。

「芸は身を助くとは、よく言ったもんです。やつらの言葉で、痛い痛いと喚きながら走って逃げたんです。顔は伏せたまんまでしたから、向こうも、よく見えなかったんでしょう。結局、何もされませんでしたな」

乾さんは、胸に溜まっていた話を吐き出したことで気が楽になったのか、口調が滑らかになってきた。

「見晴の郷は、すでに、やつらの勢力圏でしたから、私は、野原の方に逃げるしかありませんでした。しかし、そこまで逃げたところで、気が遠くなってきました。あのままだと、間違いなく、やつらに捕まって挽肉にされてたでしょう。実際、そうなると覚悟してたんです。すうっと意識が薄れてきたとき、誰かに助け起こされるような具合になったんです。ああ。やっと人間に会えた。そう思って目を開けると、私の顔を覗き込んでるのは、どう見てもバリバリのバケネズミ……こりゃあ、もうだめだなと、誰だって思うでしょう？　ところがどっこい。そいつが、わたしを、ここ、清浄寺まで運んでくれたんですから、人生ってやつはわからない」

「どういうことですか？　バケネズミに助けられたって……」

覚が、怪訝な表情で訊ねる。

「そいつは、あの野狐丸とは反対派の巨魁、大雀蜂コロニーの総大将の、奇狼丸だったんですよ。私

も、前々から偉いやつだとは思ってたんですが、まあ、この期に及んで命を救われることになるとは、夢にも考えませんでしたね」

「奇狼丸は、生きてたんですね。今、どこにいるんですか？」

　思わず知らず、わたしは訊ねていた。

「さあ。どうしたんでしょう？　私は、目を覚ましたら、あの寂静さんが、渡辺さんたちが寺に到着したと言うんで、とにかく会わせてくれって言ったんですが、考えてみると、奇狼丸のことは、すっかり忘れてましたね」

「失礼します」

　それは、いつのまにか席を外していた、寂静師の声だった。

「渡辺早季さんにお渡しするよう、ご両親からお預かりしたものです。どうぞ、お受け取りください」

　それは、平べったい桐の箱だった。思ったより大きい。長辺の長さは六十センチはある。手にすると、ずっしりとした重みがあった。箱の上には、封筒に入った手紙が添えられている。

「ありがとうございます」

　覚は、寂静師に訊ねる。

「大雀蜂コロニーの奇狼丸が、乾さんを連れてこの寺に来たと伺ったんですが、その後、どうなったんでしょうか？」

「ああ……あの異類ですか」

　寂静師は、冷淡に言う。

「当寺に留め置いております。まだ、お調べがあるかもしれませんので」

「会えますか？」

「さあ。それはどうでしょう」

　わたしは、寂静師から渡された箱を床に置き、手紙を開封した。

7

手紙は、紙に毛筆で走り書きされたものだった。懐かしい母の手蹟である。それを見ただけで、胸が詰まり、思わず落涙しそうになった。

愛する早季ちゃん。

あなたが無事に清浄寺に辿り着いていることを信じて、この手紙を書きます。

いったいなぜ、こんな事態に至ったのかはわかりませんが、今、町には悪鬼が跳梁しており、すでに多くの犠牲者が出ているそうです。わたしたちは、今できる最善を尽くして、悪鬼を止めなくてはなりません。ですから、あなたを待たずに町へ戻ります。もしかすると、わたしたちも命を落とすことになるかもしれませんが、それが、わたしたちに課せられた責務だと思うからです。知識は力なりという言葉がありますが、悪鬼に対抗するには、知識が必要です。そして、図書館司書として、わたしには、その知識が与えられているのです。

あなたは、けっして、わたしたちを追ってきてはいけません。わたしたちは、あらゆる努力を払って悪鬼を止めるつもりですが、それが成功しなかったときのため、あなたには、どうしてもやってほしいことがあるのです。

これから書くことは、第四分類の知識の中でも、第三種『殃』に属する内容です。そのため、この手紙を読んだら、すみやかに燃やしてください。個人的な感傷にとらわれないこと。常に、町の将来を考えて行動しなくてはなりません。あなたは、富子様から選ばれた人間であることを忘れないで。

安全保障会議の席で、わたしが、古代の大量破壊兵器について話したことを憶えているでしょうか。

かつて、地上には、人類を何十回も皆殺しにできるほどの兵器が満ちあふれていました。その大半は

破壊されましたし、残ったものも、千年の時には抗しえず、とうに朽ち果てたはずです。わたしは、スーパークラスター爆弾のことを話しましたが、万が一残っていたとしても、現在でも作動するとは、まず考えられません。

ところが、あの後、スーパークラスター爆弾の資料を捜しているとき、ある記録文書を発見しました。それによると、千年が経過した現在でさえ、まだ生きている可能性のある大量破壊兵器が、一種類だけあるのです。それは、皮肉なことに、呪力を持たない人間が、呪力を持った人間を根絶やしにするために開発した兵器で、サイコ・バスターというおぞましい俗称で呼ばれていました。

サイコ・バスターは、アメリカで開発され、当時日本に駐留していたアメリカの軍隊を通じて、ひそかに日本へも持ち込まれたようです。

手紙には、その後、『東京都』で始まる、数字を含む呪文のような文句が書かれていた。サイコ・バスターなる兵器が、具体的にどんなものなのかは、触れられていない。

聡明な早季ちゃんだったら、もう、わかっていると思います。なぜ、今のわたしたちは、そんな忌まわしい兵器を必要としなければならないのか。

わたしたちは、呪力によって悪鬼を攻撃し、殺すことができません。

過去、様々な町や村において、悪鬼は、幾度となく出現しました。そのたびに、街路は屍で埋まり、川は流血で赤く染まりました。悪鬼とは、ある意味では、人間の本質に深く根ざした業のようなものかもしれません。それに対し、わたしたちには、対処する方法がないのです。

過去に悪鬼が出現した際の事例集をひもとくと、それぞれの時代の人々の苦闘ぶりが、よくわかります。神仏のご加護があったとしか思えない事例もあ

りました。悪鬼の接近を防ぐため、建物を破壊して瓦礫の山を作ろうとしたところ、偶然にも、一本の鉄筋が飛んでいって、悪鬼の胸に突き刺さり、死亡せしめたというものです。建物を破壊した人は、愧死機構が発動して亡くなりましたが、結果、多くの人命が救われました。

　しかし、こうした状況を意図的に作り出そうとした試みは、すべて失敗に終わりました。悪鬼の周囲で破壊行為を行おうとしても、攻撃抑制が働いて、呪力が使えなくなるのです。その他にも、飲酒による酩酊や、麻薬を使用することで、殺意を覆い隠そうとした例があります。残念ながら、どれ一つとして成功には至りませんでした。どんな詐術を使っても、自分自身を騙し通すというのは、至難の業なのです。

　しかし、実は直近の例にこそ、ヒントがありました。今から二百五十七年前のことです。わたしたちの町を襲った悪鬼Kは、一人の医師の英雄的な行為によって、斃されました。医師は、Kに、毒物入りの注射をしました。その直後に、Kによって殺害されましたが、Kもまた、たしかに絶命したのです。

　もしKに殺されなかったとしたら、医師がどうなっていたかはわかりませんが、やはり、愧死機構の発動によって亡くなっていた可能性が大だと思います。しかし、大切なのは、とにもかくにも、Kを殺し得たということなのです。

　毒物入りの注射を打つという行為が、医師の心の中で、どのように認識されていたのかはわかりません。しかし、こうして書くだけでも身の裡に震えが走るような恐怖を覚えますが、呪力を使うことなく、何かを媒介にしさえすれば、現在のわたしたちにとっても、人殺しは可能だということになるのです。

　やはり過去の例ですが、弓矢や銃を使う試みは、すべて破綻しました。こうした武器は、相手に対する殺意なしには、用いることができないからです。

しかし、古代文明が生み出した大量破壊兵器は違います。たった一個のボタンを押すだけで、場合によっては、数百万人が命を落とすことになりますが、そんなことは、たとえ理屈では認識していても、とうてい、実感することはできません。つまり、良心の痛み、殺人への嫌悪感を都合よく抜き去って、大量殺人を可能にした装置なのです。

サイコ・バスターも、大量破壊兵器の範疇には入りますが、それほど多くの人を殺傷する能力があるわけではなく、むしろ暗殺やテロなどに用いられていたようです。いずれにせよ、人を殺めるという実感には最も乏しい部類の兵器ですから、攻撃抑制に抵触しないばかりか、おそらく、愧死機構の発動も免れるはずです。

悪魔の兵器も、使い方しだいでは、観音様が降らせる慈雨のように、人々を救済できるのかもしれません。

サイコ・バスターの保管場所は、記録に残されていました。先ほどの古代の住居表示が、そうです。本来なら、これだけでは、その場所に辿り着くことは不可能でしょう。しかし、この箱に入っているものを使えば、何とか、これが作動してさえくれれば、見つけられるはずです。

早季ちゃん。あなたには、きわめて稀な、得難い資質が備わっています。一言で言えば、それは、強さです。泣いたりめげたりすることはあっても、あなたは、絶対に折れない。最後まで、目的を完遂するはずです。親の目から見ても、常にそうでしたし、富子様にも太鼓判を押していただきました。

もし、サイコ・バスターが現存していれば、あなたなら、絶対に見つけられるはずです。どうか、それで悪鬼を斃し、町を救ってください。

わたしたちは、心の底からあなたを愛し、いついかなるときでも、あなたの行く末を見守っています。

あなたの母、渡辺瑞穂より

読み終えて、わたしは、泣いた。

気遣わしげな表情になっている覚に、手紙を手渡す。それから、桐の箱の蓋を開けた。

中に入っていたのは、長さが五十センチほどの、フナムシのような形をした物体だった。背面にある蛇腹状の装甲には、濃紺に光る短冊形の物体が、何枚も象眼されている。

「ミノシロモドキだ……」

覗き込んだ覚が、驚いたように、つぶやいた。たしかに、子供の頃に見たものとは型が違うようだが、全体的な印象は似通っている。だが、背面には触手状の突起は一本もなく、もはや、本家のミノシロにはまったく似ていない。強いて言えば、ニセミノシロモドキか、ミノシロモドキダマシといったところだろう。

「でも、これ、生きてるのかしら？」

わたしは、涙を拭って訊ねる。

「どうだろう。中に、紙が入っているよ。取り扱い説明書みたいなものかもしれない」

わたしは、箱の中にあった四つ折りの紙を取り出した。かなり古いものらしく、全体が茶色に焼けている。そこには、見慣れない四角張った文字で、ニセミノシロモドキについての説明が書かれていた。

百二十九年四月十一日。筑波山麓にて発掘された地下4号倉庫で発見、採集。

型番：TOSHIBA 太陽電池式自走型アーカイブ・バージョンSP-SPTA-6000

取り扱い注意・特記事項：

①作動させる前に、太陽光を浴びさせて充電することが必要。長期間休眠状態にあった後は、夏の強い日差しの元でも、最低六時間は必要。太陽光の乏しい場所で、長時間動作させた場合、バッテリー切

れに陥る危険性あり。

②休眠状態に戻すには、口頭でその旨命令した上、動作ランプが消えたのを確認して、暗所に保存すること。

③確保した状態では、人間の命令には従順だが、隙を見せると光による幻惑を行ったり、逃走を図ったりする可能性がある。野生動物に対する以上の注意が求められる。

④きわめて長寿命かつ耐久性に富むように設計されているが、自己補修機能は限定的。型番が古すぎるため、交換部品はすでに現存しないと思われる。

⑤電子回路に、一部、不具合があると思われる。補修は不可能。故障が疑われる場合は、発熱を冷ますため、しばらく休ませた方がよい。

⑥情報、知識には、第四分類に属するものも多く含まれているため、取り扱いには、くれぐれも慎重な配慮が必要である。一般倫理規定では、自走型アーカイブは、発見しだい破壊するのが本則であり、本機の存在自体、図書館関係者以外には、けっして漏らしてはならない。

「百二十九年というと、今から百年以上も前だ。動くかどうかは、かなり疑問だな」

覚が言う。

「でも、とにかく、日に当ててみましょう」

この機械は、おそらく、百年以上も図書館の地下倉庫に秘密裏に保管されていたのだろう。それを、母は、避難する前にわざわざ立ち寄り、持って来たのだ。完全に壊れているがらくたとは思いたくなかった。

わたしたちは、寂静（じゃくじょう）師に頼んで鉄製の檻を借り

た。その中にニセミノシロモドキを入れて、寺の境内にできた日溜まりに置く。日没まで、すでに六時間は切っているかもしれない。今日中に作動させられるかどうかは、神のみぞ知る状況だった。

「こちらです」

　寂静師の指し示した場所を見て、わたしたちは眉をひそめた。寺の裏山の岩盤に大きく穴が穿たれ、頑丈な木製の格子が嵌っている。それは、どう見ても、土牢だった。

「どうして、こんな場所に？」

　覚が、眉宇に非難をにじませながら詰問する。

「何分、異類であり、宿坊に泊めることはできません。ましてや今は、バケネズミどもの反乱により、多くの人命が失われた直後ですし」

「でも、奇狼丸は、人間に忠実な大雀蜂コロニーの将軍ですよ？　それに、乾さんの命を助けて、ここまで連れてきたのに……」

　わたしも、言わずにはいられなかった。

「どこのコロニーかは問わず、駆除せよという、倫理委員会からの申し送りがあります。それに、一時は人に忠実なコロニーだったとしても、戦の勝敗の帰趨を見て簡単に寝返るのが、畜生の常でもありますし」

　寂静師は、命を奪わなかったのが、むしろ格別の慈悲であったというように言いながら、格子の鍵を外し、扉を開けた。

　暗い土牢の中には、熱気と獣臭が籠もっている。

「これ、奇狼丸。お前に会いたいと言われて、わざわざお客様が来られた」

　寂静師が、声をかける。すると、奥の方から、四つ足で這い出てくる大きな影があった。立ち上がるには天井高が足りないらしい。奇狼丸であることは、すぐにわかった。緑色に爛々と光る眼と、目元から鼻筋に沿って描かれた複雑な文様の刺青。バケネズミとしてはきわめて大柄で、狼を思わせるよう

な独特の顔つき。だが、その片目は無惨に潰れていた。全身には、まだ癒えない数多くの傷を負っており、ひどく痩せこけている。

　奇狼丸がさらに近づこうとしたとき、じゃらんと鎖が鳴って引き留められた。奇狼丸は、よろめきながらも、四本の足で踏ん張った。

「これは、よくいらっしゃいました。このようなむさ苦しいところまで足をお運びいただき、まことに恐縮です」

　こんな状況でも、口調は、以前とまったく変わらなかった。あくまで誇り高く、シニカルな響きがある。

「わたしは、渡辺早季です。わかりますか？　こっちは、朝比奈覚……」

　わたしは、我慢できなくなって、寂静師を振り返った。

「こんな扱いは、あんまりです。せめて、この鎖を外してください！」

「しかし、それには、監寺（かんす）のご許可を得ませんと……」

「でも、今はご祈禱の真っ最中でしょう？　許可は、あとでいただきますよ」

　覚は、決然として言うと、奇狼丸の後ろ肢を縛っていた鎖を、呪力で断ち切った。

「困りますな。このようなことをなされては」

　寂静師は、しごく困惑の体だったが、わたしたちは、意に介さなかった。

「お二人のことは、よく憶えております。異類管理課の渡辺早季様はもちろん、朝比奈覚様は、以前にお目にかかったときは、まだ、可愛らしい少年でしたな。ずいぶん、立派になられました」

　奇狼丸は、わたしたちのすぐ前まで進み出てきた。外の光が眩しいのか、しきりに目を細めている。

「ごめんなさい。こんな目に遭わせて……。それから、ありがとう。乾さんを助けてくれて」

わたしがそう言うと、奇狼丸は、大きな口を開けて笑みを見せた。

「なに、当然のことをしたまでです。それより、あの悪鬼のことですが、どうなさるおつもりですか？」

単刀直入に、訊いてくる。

「異類風情が嘴を入れることではない！　控えておれ！」

寂静師が一喝するが、奇狼丸は、まったく無視して、わたしたちに語りかける。

「同族中最強を誇っていた我が精鋭部隊が、悪鬼一人のために、いとも簡単に全滅させられてしまったのです。こちらの放った矢は、悉く空中で止められ、その上、呪力で武器を奪われては、なすすべがありませんでした。子供とはいえ、実に恐るべき存在と言うしかありません」

「それで、どうなったの？」

「悪鬼は、ひと思いに兵士たちの命を奪おうとすらしませんでした。一方的な虐殺を愉しんでいたとしか思えませんな。我が勇敢な兵士たちは、敵の矢の的となり、刃に切り刻まれて、嬲り殺しの憂き目に遭ったのです」

奇狼丸は、表情も変えずに言った。

「あなたは、よく、無事だったわね」

そう言ってから、奇狼丸が片目を失ったのにもかかわらず、無事だと言うのは、無神経すぎることに気づく。

「私が逃げ延びることができたのは、奇跡に近いことだったと思います。私の退路を作るため、副官以下の精鋭たちが一丸となって突進したのですが、途中で、巨大な磁石に吸い付けられたかのように、武器をすべて奪われてしまいました。彼らが、徒手空拳で戦い、膾のように切り刻まれるのを横目に、私は、悪鬼からほんの二、三十メートルしか離れていない場所を走り抜け、溝に飛び込んだのです。気づかれなかったのは、神仏のご加護があったからとし

か思えません」

「そう。悪鬼は、わたしたちの町も襲ったわ……。安心して。あなたの部下の仇は、必ず取ってあげるから」

「しかし、神様……人類は、同種に対しては、呪力を用いることができないのではありませんか？　だとすると、いったい、どのように対処されるのでしょうか？」

「お前は、それを、どこで知ったのだ？」

寂静師は、驚愕して叫んだ。

「神様は、どうも、我々の智能を過小評価する傾向があるようですな。我々の間では、周知の事実と言ってもいい。むろん、あの腐った二枚舌、野狐丸めも知っていたはずです。おそらく、今回の計画を立案したのも、そのあたりが出発点だったのでしょう」

奇狼丸は、あいかわらず、わたしたちだけに向かって話した。

「奇狼丸。君なら、どうやって、悪鬼を退治すればいいと思う？」

覚が、訊ねた。かつて名将と謳われたバケネズミなら、何か考えがあるのではないかと思ったのだろう。

「呪力が使えないとなれば、我々が用いる通常の戦闘方法に頼るしかありません。銃か、毒矢か、落とし穴か……。いずれにせよ、悪鬼を斃さない限りは、勝利はありませんが、周囲には、塩屋虻コロニーの兵士が護衛に貼り付いているはずです。容易なことではないでしょうな」

やはり、たいした妙案はないらしい。

「そうだ。もう一つ訊きたいんだけど、僕らは、これから、東京へ行かなきゃならない。東京のことで何か知ってることがあったら、教えてくれないか？」

奇狼丸は、驚いたように、残っている方の目を見開いた。

「あの呪われた地には、神様はもちろん、我が同族も滅多に近づこうとはしません。したがって、現在、あの周辺には、まったくコロニーはないはずです」

「大昔の戦争で、土も水も汚染されてるって聞いたけど、本当なの？」

　わたしが訊ねた。

「たしかに、あれだけ広大な地域が不毛のまま取り残されているところを見ると、まだ、何らかの有害物質が残留している可能性はありますね」

「致命的な毒ガスや放射能が残っていて、一歩足を踏み入れれば死ぬっていう話は？」

　奇狼丸は、にやりとした。

「いや、それは単なる噂かと思います。毒ガスの類は、さすがに、とうに消滅しているでしょう。放射能に関して言えば、プルトニウム２３９の半減期は二万四千年もあるそうですが、あの地域一帯が、生命に危険を来すほど汚染されているとは思えません」

「なぜ、わかるんだ？」

「以前に、たった一度だけですが、私は、実際に、足を踏み入れたことがあるからです。もちろん、現地では、水も食べ物も口にしませんでしたが、丸一日、東京の空気を吸って歩き回りました。しかし、健康には、別段、問題を生じませんでした」

　わたしは、覚と目を見合わせた。これは天の配剤ではないのか。奇狼丸も、その空気を敏感に察知したようだった。

「私は、一度訪れた場所の地理は、けっして忘れません。私を連れて行ってくだされば、道案内いたしましょう」

「お二方！　この者の言うことを真に受けてはなりません！　異類は、しょせん異類です。忠義面の裏で、どんな企みを抱いているか、わかったものではありませんぞ」

　寂静師が、あわてた様子で警告する。

「私の忠誠心に疑問をお持ちでしたら、これだけは、信じていただきたい。私の野狐丸に対する憎悪だけは、正真正銘、真実であることを。あの外道めは、我が大雀蜂コロニーの女王を牢獄に幽閉しております。女王は、おそらく、今の私のような扱いを受けているに違いありません。何としても、野狐丸を八つ裂きにして、女王を救い出す。それだけが、現在の私のただ一つの望みであり、生き長らえる意味なのです」

　切々と訴える奇狼丸の目からは、今にも緑色の炎が吹き出そうだった。

「それに、さきほど、私自身は健康被害を受けなかった旨を申し上げましたが、同行した兵士のおよそ三分の一が死傷したことを、申し添えなくてはなりません。あの暗い地には、今も数多くの危険が潜んでおり、たとえ神様といえども、適切なガイドなしに足を踏み入れることは、自殺行為と言っていいでしょう」

　これに対し、寂静師は、しきりに何か喚き立てていたが、すでに、わたしたちの耳には、まったく入って来なかった。これから赴かなければならない、東京という恐ろしい場所のことで、完全に頭がいっぱいになっていたのだ。

　ニセミノシロモドキは、太陽光で充電を始めてから六時間以上が経過しても、まったく作動する気配を見せなかった。

「困ったな。こいつが動いてくれないことには、まったく場所がわからない」

　覚が、溜め息をつく。

「古代の住所だけ渡されても、僕らには、当時の地図すらないんだし」

「明日、もう一度、充電してみましょう。百年以上も休眠状態だったんだから。それより、そろそろ出発しなきゃ」

　わたしは、ニセミノシロモドキの外殻に手を触れ

てみた。太陽光で熱くなっているが、動き出しそうな兆候は感じられない。

「それがいいでしょう。日没まで、もうすぐです。川面に黄昏の光が反射している時刻は、むしろ、夜間より、敵から発見されにくいかもしれません」

奇狼丸は、身体を洗って食事を取ったことで、すっかり精気を取り戻したようだった。裸のままというわけにもいかないので、清浄寺の僧服を貰って着せてみると、まるで妖怪寺の化け物和尚といった不気味な外観になってしまった。

「……しかし、これ、いったい、どうやって操縦すればいいんですかねえ?」

寺の船着き場に浮かべられた奇妙な物体を眺めて、乾さんが言った。船腹には『夢応鯉魚（むおうのりぎょ）号』と書かれており、一応、舟らしいことはわかる。長さは五メートルほどで、二艘の舟を上下にぴったり合わせたような形状をしていた。上面には、水が入らないよう、ぴったりと閉ざすことができる扉が付いている。そこから入って船底に座ると、三人と一匹で、ほぼ鮨詰めの状態になった。

「一人が、前面の小窓から外を見ながら指示を出し、もう一人ないし二人が、船体の横にある外輪を呪力で回すのです」

寂静師が、説明した。外輪は、小さな水車のような形で、軸が船殻を貫通しているため、内側にある舵輪のような輪っかによって回すことができる。ただし、水の侵入を防ぐため、輪っかには半球形のガラスの覆いが付いており、呪力を使わなくては回すことはできない。両側の外輪を前進回転させれば前へ、後退回転させれば後ろへ行く。左右を逆方向に回せば、曲がることもできる理屈である。

「これは、当寺が保有する、そして、この町で唯一の潜水艇です。元々は川底を調査するために建造されたものですが、有事に際しては、住職や監寺などの高僧が最後に避難されるときに使われるべきものなのです。しかしながら、今回の使命の重大性に鑑

み、特段の計らいをもって……」

「寂静さん。いろいろとお世話になりました」

覚が、やんわりと、寂静師の長広舌（ちょうこうぜつ）を遮る。

「無瞋上人や行捨監寺には、御礼を申し上げられないのが残念です。どうか、くれぐれもよろしくお伝えください」

「もう、行かれるのですか。くどいようですが、もう一度、お考え直しになる気はありませんか？　あのような異類を同行させるのは、正気の沙汰とは思われません」

「今は、選り好みしていられないんですよ。利用できるものは、何でも利用するしかないんです」

わたしたちは、着替えやニセミノシロモドキなどをナップザック（というより、背嚢（はいのう）と呼んだ方がいい代物）に詰め込み、不安がいっぱいの中、船出した。わたしが、先頭の窓から外を見る役で、覚が右側、乾さんが左側の外輪を回す係だった。最初は浮上したまま、寺の水路を抜ける。寂静師が、藪で擬装した扉を開けてくれた。舟が利根川に出ると、扉はゆっくりと閉まった。そして、それが、清浄寺を見た最後となった。

扉を閉めて、潜航を開始すると、船内は真っ暗になった。川の水は茶色く濁っている上、日が落ちつつあるので、窓の外の視界もよくない。そのため、当初、わたしの指示は遅れ気味だった。しかも、左右の外輪の連携もよく取れていなかったせいで、夢応鯉魚号は、ふらふらと蛇行する。だが、幾度となく岩にぶつかりそうになりながら十分ほど進むうち、三人とも、しだいにコツがつかめてきた。

そこで、この舟の持つ最大の欠点に気づく。船の容積が小さいために、乗客を満載していると、短時間で酸素が不足し、息苦しくなるのだ。いったん浮上し、上部の扉を開けて、新鮮な空気を入れる。しばらくの間は、そのままで航行することにした。

潜航している間は、左右の外輪で進まなければならないので、速度は思うように出ない。浮上してい

る間に、少しでも距離を稼いでおきたかった。奇狼丸が、上部の扉から頭を出して、しきりに空気の臭いを嗅ぐ。しばらくすると、扉を閉めて、わたしたちに告げた。

「潜航した方がいいようです。この先から、同族の臭いが強く漂ってきますので」

夢応鯉魚号は、また、ゆっくりと沈んでいった。ほとんど川底を擦りそうになりながら、のろのろと外輪を回して進む。

「どこまで、潜ったまま行けばいいんだ？」

覚が、誰にともなくつぶやく。答える声はなかった。

しばらく進むと、頭上に舟影が見えた。二つ……三つ。バケネズミが哨戒しているらしい。今や利根川の下流域は、完全に敵の支配下にあるのだ。

夢応鯉魚号は、川底を這うようにして、敵影の下をくぐっていった。全員、動きを止め、息をひそめている。船の中で立てた音が、どこまで外に響くものなのかは、誰にも見当がつかなかったからだった。

やがて、しばらくすると、敵の舟影は見えなくなった。

「浮上しよう」

覚が宣言する。

「でも……もう少し待った方が、いいんじゃない？　まだ、近くに、やつらがいるかもしれないし」

わたしの反論に、覚は、首を振った。

「そうして潜航を続ける間に、次の敵に出くわすかもしれない。息継ぎのチャンスは、絶対、見逃すべきじゃないよ」

乾さんと奇狼丸も、覚の意見に与したので、三対一で、浮上することになった。

扉を開けると、新鮮な空気が流れ込んでくる。全員、深呼吸して、酸素の有難味を噛みしめた。

「こんなことしてたら、いつになったら海に出られるか、わからないわ。浮上したまま、全速力で突っ

切ったら、いいんじゃない？　やつらだって、どうにもできないはずよ」

わたしは、もう潜りたくなかったので、つい我が儘を言う。

「そのことは、もう話し合っただろう？　たしかに、やつらが川に網でも張ってない限り、河口を抜けて大海に出ることは可能だと思うよ。だけど、そうすると、こっちの動きが、向こうにバレてしまうし、ひょっとすると、こちらの意図まで感づかれるかもしれない。こっそり海に出られるチャンスがあるかぎり、そうすべきだよ」

覚の言うことは、もっともだったので、さすがにそれ以上、ごねることはできなかった。

日はすでに落ち、あたりは、急速に暗くなりつつあった。水面にいてすら、目視で舟を進めるには注意が必要である。水中ではどうなるのかと思い始めたときに、奇狼丸の声が響いた。

「扉を閉めて、潜航してください。この先に、相当数の同類がいます。警戒線を張っているのかもしれません」

夢応鯉魚号は、静かに水底まで降下する。そこは、信じられないほど真っ暗だった。

利根川のこのあたりの水深は、せいぜい四、五メートルだろう。光を完全に遮ってしまうような深さではないが、そもそも、まだ月齢が若く、空は雲に覆われており、星明かりすら満足には届かない。まして川底では墨を流したような暗さで、これでは、わたしが目視して、指示を出す意味があるとは思えなかった。

「ごめんなさい。もう、全然、前が見えないの」

わたしがそう言うと、覚と乾さんは、当惑したように、舵輪の動きを止めた。

「しばらくは、流れに乗って行くだけでいいでしょう」

奇狼丸が、助言する。

「何かにぶつからないようにだけ、細心の注意を払

ってください」

視界ゼロで、どうすれば、完全に衝突を防げるというのか。わたしは、奇狼丸に腹を立てかけたが、とりあえずは、真っ暗な窓を凝視し続けた。

「そうか。明かりがあればいいんだわ！　窓の内側に何か小さな光を作れば、かなり遠くまで見通せるはずよ」

「それは、だめだ」

覚が、言下に否定する。

「水中で光ってたら、目立ってしかたがないよ」

「じゃあ、このまま、手探りで進むしかないっていうの？」

「今は、ほかにどうしようもないだろう？」

反論しようとしかけたとき、小窓の外に、うっすらと光が射しているのに気がついた。

「あれ？　見て。明るくなってきた」

「しっ！　静かに」

後ろから、乾さんが、わたしの肩を掴む。

わたしたちは、しばらく、そのまま、身じろぎもしなかった。やがて、前方の水面から光が見えるようになった。

「やつらが、松明で、川を照らしてるんだ……」

覚が、声をひそめて言う。

「この船が見えると思う？」

「たぶん、だいじょうぶだよ」

覚はそう言ったものの、それほど自信があるような口調でもなかった。

「心配ご無用です。上にいる者どもは、もっぱら、水上を見張っているのです。よもや、水面下を潜って進む船があるなどとは、想像だにしていないでしょう」

奇狼丸は、対照的に、自信たっぷりに言う。

松明の明かりのお陰で視界が復活したため、ゆっくりとだが、確実に進むことができた。どうやら、奇狼丸の言うとおりだったらしく、まったく、こちらに気づいた様子はない。たしかに、夜間、松明で

照らしても、水面からの反射のために、水中はかえって見えなくなるはずである。

うっすらと明るくなった進行方向の水面に、たくさんの影が浮かんでいるのが見えた。筏のようだ。

「覚。見て」

小声でささやくと、覚は、外輪の回転を乾さんに託し、前にずり上がってきた。

「何だろう？」

覚は、たくさんの影を観察してから、長く息を吐き出した。

「そうか。まさか、そこまで警戒してるとは思わなかった……」

「どういうこと？」

「やつら、水上に障害物を置いたんだ。川幅いっぱいに筏を浮かべて、舟が通行できないようにしてるんだよ。たぶん、筏の上には、射撃手が配置されてるんだろう」

そのあたりは、一時的に川幅が狭まっていたが、それでも数百メートルはあるだろう。材木を繋ぎ合わせただけの粗末な筏とはいえ、これほどの封鎖線を作るのは、たいへんな労力だったに違いない。

「いかにも、疑心暗鬼に駆られた臆病者の考えそうなことです。とはいえ、我々が水中を抜けていくというのは、いかな策士でも想定外だったようですな」

奇狼丸は、満足げに言う。

夢応鯉魚号は、筏のはるか下、川底ぎりぎりの深みを通過していった。

バケネズミの封鎖をかいくぐると、またも、周囲は暗黒に閉ざされた。しばらく進んでから、静かに浮上し、船内の空気を入れ換える。

「清浄寺の人も、この船にシュノーケルか何か付けてくれればよかったのに……」

覚が、こぼす。

「しかし、ここまで来られれば、河口までは、あとほんの少しですよ」

乾さんが、弾んだ声で言った。

「ここからは、もう、潜航する必要はないんじゃないですか？」

「奇狼丸。バケ……あなたの同族の臭いはしない？」

わたしは、奇狼丸に尋ねた。

「わかりません。少し前から、風向きが逆になって、陸風が吹いていますので」

奇狼丸は、懸命に、臭いを嗅ぎ、耳を澄ませているようだった。

「今のところ、何の音も聞こえないようです。しかし、こちらも、極力、音を立てるのは控えた方が良さそうです」

夢応鯉魚号は、浮上したまま、川の中央付近を静かに下っていった。わたしは、上部の扉から顔を出して、前方の様子を窺っていた。川幅は、さっき筏を並べて封鎖されていた地点よりずっと広くなり、両岸はほとんど見えないほどだった。

きっと、もう、だいじょうぶだ。張り詰めていた神経が緩みかける。このまままっすぐ下っていけば、河口だ。そして、太平洋へ出てしまえば、もう、捕まる心配はなくなる。あと、ほんの少しの辛抱だ。

そのとき、一キロほど前方に、ぽつりと、二、三艘の舟影を見つけた。

「舟がいるわ。どうしよう？」

「ちょっと待って」

夢応鯉魚号は、動きを止めた。前進回転していた外輪を逆回しして、流れに逆らって、しばし、その場に留まる。

「……潜航しよう。ここから海までなら、息継ぎせずに行ける」

その瞬間、奇狼丸の押し殺した叫び声が、響いた。

「早く、逃げてください！」

「え？　どうしたの？」

「同族と……あいつだ！　間違いない。あの悪鬼の臭いです！」

「でも、風向きは逆……」

言いかけて、気がついた。悪鬼は、背後から、追いかけて来るのだ。

振り返ると、暗い大河の上に、大きな帆を張ったシルエットが見えた。かなりの速度で近づいてくる。残された距離は、もう、四、五百メートルにすぎないだろう。

こちらに気づいていると、直感した。悪鬼は、バケネズミより視力の優れている人間だ。真っ暗に見える川面でも、星明かりの反射で、かすかな航跡が見えるのかもしれない。

「潜る？」

「間に合わない……。このまま、突破するんだ！」

覚が、叫んだ。わたしは、呪力で夢応鯉魚号を一気に加速した。覚も、狭い入り口から一緒に頭を出すと、後ろを向いて、とっさに目眩ましの工作を行う。後で聞いたのだが、水面に大量の空気を吹き込んで、巨大な泡の壁を作ったのだという。それで、少なくとも、こちらの航跡は見えなくなったはずだ。

「早季。目をつぶれ！」

覚が、前に向き直って叫ぶ。意図がわからないままに、イメージの中で舟を加速し続けながら、固く目を閉じる。瞼越しに強烈な光を感じた。前方に遊弋していたバケネズミの舟が、次々に眩い閃光を放ちながら燃えているらしい。悪鬼がそれを見ていたとしたら、しばらくの間は、まったく夜目が利かなくなったことだろう。

夢応鯉魚号は、操る人間が目を閉じたままという危なっかしい状態で、燃えている舟の間を擦り抜けた。

目を開けると、無我夢中で舟を加速し続ける。潜水艇は、凄まじい勢いで水面を滑走していた。

気がつくと、わたしたちは、太平洋上にいた。す

でに、陸地は、見えるか見えないかというまでに隔たっていた。川とは比較にならない、うねるような大波に、恐怖を感じる。鹿島灘の荒波だった。

「悪鬼は……？　まいたのかな？」

「ああ。今のところはね。でも、おそらく、態勢を立て直して、追いかけてくるだろうと思う」

「どうして？」

「僕らが、単に逃げるだけなら、あえて、やつらの支配地域を抜けて川を下ったりせずに、陸路を行くはずだろう？　にもかかわらず、あえて危険を冒して強行突破したのを知れば、野狐丸なら、こちらの意図に気がつくかもしれない。少なくとも、放ってはおけない事態だと思うだろう」

舟が揺れるたびに、胃の腑が持ち上がるような感覚があった。潮風の臭いが、鼻の奥に、いがらっぽい。

「じゃあ、一刻も早く行かないと……」

「うん。ここからは、陸地を右に見ながら進むだけだから、簡単だ。とりあえず犬吠埼を越えて、房総半島を大回りすればいい」

覚は、暗い海の向こうに目を凝らしていた。

「問題は、その後なんだ。ニセミノシロモドキが目覚めてくれなければ、お手上げだよ」

星明かりに照らされた東京湾は、たくさんの干潟が点在する美しい内海だった。とても、奇狼丸が言うような、恐ろしい場所に近づいているという感じは受けない。

夢応鯉魚号は、湾の深奥部に近づいて、そこで、夜が明けるのを待った。真夜中に岸に近づくのは危険だという、奇狼丸の助言にしたがったのである。かつて、彼らが陸路から東京に入ったときには、昼間は何の異状もなかったのに、夜間、不用意に岸辺へ近づいた奇狼丸の部下たちは、全員、正体不明の怪物によって喰い殺されてしまったのだという。

湾内の波は、外洋に比べるとずっと穏やかだった

が、それでも、散々揺られた後では、早く固い地面を踏みたくて、うずうずした。だから、東の方から金色の曙光が射し込んでくると、ようやく上陸できると思って、心の底からほっとした。

そのとたん、頭上を巨大な影が覆う。ぎょっとして見上げると、夜明けの空は、一面、乱舞する無数の生き物によって覆われていた。

「コウモリです。ここには、数え切れないくらい棲んでましてね。現在の東京の支配者は、こいつらだと言ってもいいんですよ」

奇狼丸が、説明する。いったいなぜ、コウモリが、そんなに繁殖したのだろうかと思う。奇狼丸が落ち着いているところを見ると、これが危険の正体というわけではないようだったが。

夢応鯉魚号は、東京湾の北西の岸を目指した。どこまでも灰白色の砂浜が続いているが、大きな植物や、動物の姿はない。

舟が浜に乗り上げると、すぐに飛び降りた。大きく伸びをして、こわばった筋肉をほぐす。ざくざくした砂の感触が、心地よい。上陸してからも、まだ、身体が揺れているような気がしていた。他のみんなも、次々に上陸してきた。

追っ手に備えて、船を隠す場所を探す。砂浜の奥に、灰色の岩礁のようなものがあった。よく見ると、コンクリート造りの古代の建造物の残骸らしい。以前、塩屋虻コロニーで見た円形の建物を思い出すが、それよりずっと大きかった。さらにその向こうを調べると、巨大な割れ目があった。覗き込んでみると、二十メートルほど下に大きな岩棚があった。空洞は、さらに、地下深くまで続いているらしい。ひんやりした、黴臭い空気を感じた。当座、必要と思われる荷物を下ろすと、夢応鯉魚号を岩棚の上に安置する。

「さあ、どうしよう？」

「闇雲に動き回っても、しかたがない。とにかく、こいつの充電を再開しよう」

覚が、ニセミノシロモドキの入っている背嚢を指さした。

「その前に、まず、安全な場所に移動しましょう。海を見渡せて、万が一、追っ手が来た場合は、すぐにわかるようなところがいい」

乾さんの提案で、わたしたちは、少し小高いところに移動した。黒ずんだ岩山のようなものの上だが、前に見た灰色の岩礁のような残骸と同様、古代の建物のなれの果てらしい。砂浜の砂も、元は砕けたコンクリートだったようだが、同じコンクリートでも、はるかに粘り気のある材質で、徐々に変形しながらも何とか崩壊は免れているらしかった。

ニセミノシロモドキを、徐々に強くなり始めた朝日を浴びるような位置に置く。あとは、とりあえず、ひたすら待つしかない。わたしたちは、朝食を取った。煮炊きして煙を上げるわけにいかないので、清浄寺が用意してくれた兵糧丸（ひょうろうがん）を黙々と噛む。蕎麦粉を主体に、鰹節、梅干し、胡桃（くるみ）、クコの実などを混ぜ、糖蜜で固めたものである。ずっと昔食べた、バケネズミの携行食のことを思い出す。あれは、野狐丸と共に、木蠹蛾コロニーへ向かったときのことだった。味は、そのときのものとは違っていたが、大差はない。我慢すれば食べられなくもないという程度のものだった。

それでも、胃袋が落ち着くと、今度は、眠気が兆してきた。こんなときでも眠くなるというのは、なぜなんだろうと思う。わたしの様子を見た乾さんが、交替で休みましょうと言ってくれたのをいいことに、わたしは、すとんと眠りに落ちた。

このとき、どんな夢を見たのかは、憶えていない。ただ、本当に危機的な状況下では、人間は、悪夢など見ないものらしい。何やら楽しい夢だったという印象だけは残っている。たぶん、子供時代に戻っていたのではないだろうか。

その夢の中に、突如、闖入者が現れた。妙な化け物だ。蛙のように低い声でガーガーと鳴き、鳥のよ

うに甲高くピーピーと囀る。

うるさいなと思い、急速に意識が戻ってきた。何だ、いったい、この音は。

目を開けると、わたし以外の二人と一匹は、ニセミノシロモドキの周囲に集まっていた。

「どうしたの？」

「起動した……充電完了だ」

覚の答えを聞いて、今度こそ本当に、覚醒した。わたしは、飛び起きて、輪の中に入っていった。

ニセミノシロモドキは、耳障りな機械音を出し続けていたが、ついに、第一声を発した。

「わたしは、国立国会図書館つくば館の、ミラー端末００８号です」

柔らかい女性の声だった。まわりから、歓声が沸き起こる。

「訊きたいことがある」

覚の質問を無視して、ニセミノシロモドキは続ける。

「ただいま、同期を行っています……同期を行っています……同期を行っています」

どうやら、別の図書館端末と交信しようとしているらしい。しばらくすると、ニセミノシロモドキは、誇らしげに宣言した。

「同期を完了しました……カレンダーの補正およびアーカイブのアップデートに成功しました」

こんなに離れていても、機械同士では、いとも簡単に通信ができるらしい。

「それは、おめでとう。ところで、質問がある」

覚は、さりげなく切り出した。

「質問。検索サービスには、利用者登録が必要です」

覚は、ちらりと、わたしの顔を見る。ずっと以前に、夏季キャンプでミノシロモドキを捕まえたときに聞いたのと、まったく同じセリフだ。

「利用者登録は、どうやればいい？」

「登録ができるのは、満十八歳以上で、氏名・住

所・年齢を証明するために、以下のものが必要です。運転免許証。保険証（住所記載のあるもの）。パスポート（生年月日の記載《旅券部分》と、現住所記載部分のコピーが必要です）。学生証（住所・生年月日の記載のあるもの）。住民票の写し（三ヵ月以内に発行されたもの）。公的手帳及びそれに準ずるもの。これらは、すべて、有効期限内のものです」

「そんなものはない」

「なお、次の書類は不可となりますので、ご注意ください。社員証、学生証（住所または生年月日の記載のないもの）、定期券、名刺……」

「だが、今すぐ質問に答えなければ、お前を破壊する。それから、一応警告するが、催眠術もやめておけ」

「……書類による手続きは省略されました。これより利用者登録を開始します」

「それも、省略しろ。訊きたいのは、この住所だ。ここへ行くには、どうすればいい？」

覚は、手紙にあった住所を伝えた。ニセミノシロモドキは、再び、不細工なビープ音を響かせる。

「全地球測位システムの発動不能……GPS衛星よりの電波を受信できません……GPS衛星よりの電波を受信できません……受信圏外です」

「心配するな。そんなものが、もうないんだ」

「他の端末からの受信電波により、三角法で現在位置を推定します」

ニセミノシロモドキは、しばらくの間黙り込み、一世紀ぶりに与えられた仕事に熱心に取り組んだ。

「……地図データとの照合完了。目的地への方位が判明しました。現在位置より西二十九度北に進んでください」

やったと思い、わたしは、拳を握りしめた。これで、手紙にあった住所に辿り着ける。そこに、今でも、サイコ・バスターなる兵器が残っているかどうかは、神のみぞ知ることだが。

「ねえ、教えてくれる？　サイコ・バスターっていうのは、どういうものなの？」

ニセミノシロモドキは、考え込んだ。

「……五十七件が、ヒットしました」

「別名をサイコ・キラーとか、サイコサイドともいう、兵器のことらしいんだけど」

「一件が、ヒットしました。……サイコ・バスターとは、古代文明の末期に、アメリカで超能力者の一掃計画に用いられた細菌兵器の俗称です」

細菌……わたしは、ぎょっとした。

「でも、サイコっていうのは、精神とか……精神異常者のことじゃないのか？」

覚は、別のことを訊ねる。昔から、つまらないところに食いつく癖は、変わってないらしい。

「カタカナで書くと同一ですが、ヒッチコックの映画で知られるようになった精神異常者を意味するスラングは、psycho です。これに対し、念動力を持った人々は、psykoと呼ばれていました。これは、念動力＝psychokinesis の略称から、一般に広まったものと思われます」

「それより、細菌兵器っていうのは？」

「サイコ・バスターの正式名は、強毒性炭疽菌、strong toxicity bacillus anthracis 、略称ＳＴＢＡです。炭疽菌とは、土壌中に普通に存在する枯れ草菌の一種ですが、人体に摂取されることにより、皮膚炭疽、肺炭疽、腸炭疽などの重篤な症状を引き起こします……」

ニセミノシロモドキの説明は、文字通り、わたしの肌に粟を生じさせるようなものだった。炭疽菌は、環境が悪化すると、生き延びるために胞子の状態で休眠する。このため、きわめて使い勝手がいい生物兵器になったのだという。炭疽菌を培養して乾燥させると、白い粉状の胞子を作る。この胞子は、熱や乾燥に強く、空気感染する能力は維持しているため、たとえば、手紙の封筒に入れて送りつけるような手法も可能になる。

ＳＴＢＡは、この炭疽菌の毒性を遺伝子操作によって強化したもので、通常の肺炭疽の致死率八十〜九十パーセントを、ほぼ百パーセントに高めることに成功したらしい。しかも、ＳＴＢＡには多剤耐性があり、通常の炭疽菌には効くペニシリンやテトラサイクリンなどの抗生物質も、まったく無効だということだった。

「……さらに、通常の炭疽菌は、人から人への感染がほとんどありませんが、ＳＴＢＡは、きわめて強い感染力があるため、通常の疫学的な対処法では、感染爆発を抑え込むことは困難です。このように、第一撃兵器として理想的な破壊力を持ちながら、ＳＴＢＡの長所としては、他の細菌やウイルス兵器と比較した場合の戦後処理の容易さも挙げられます。ＳＴＢＡは、一、二年で、通常の炭疽菌以下のレベルまで弱毒化するよう設計されているのです。このように、使い勝手の良さに加えて、環境にも優しい生物兵器として……」

狂っている。古代人の感覚は、とても理解できないと思った。

「……わたしたちは、こんなものを、本当に取りに行くの？」

わたしの問いかけは、二人と一匹には、まったく理解されなかったようだった。

「悪鬼を斃すためなんだ。しかたがないだろう」と、覚。

「環境中に放出しても、時間さえたてば毒性は弱くなるんです。これなら、将来に禍根を残さずにすみますよ」と、乾さん。

「すばらしい。これなら、悪鬼が気づかないうちに感染させることが、充分に可能です。問題は、どうやって粉末を吸わせるかですが」と、これは奇狼丸の感想だった。

「……通常の炭疽菌の胞子は、五十年以上生存することが確認されていますが、ＳＴＢＡの胞子には、千年以上の耐久性があると言われています。これは

「……」

　ニセミノシロモドキは、延々と、サイコ・バスターの説明を続けていた。

「もういい」

　覚は、ときおりビープ音が混じる、奇妙な女性の声を制止した。たぶん、バッテリーの心配をしたのだろう。

　突然、奇狼丸が、色めき立って起き上がった。

「しまった……」

「どうしたんだ？」

　乾さんが、驚いて訊ねる。

「あの鳥です。捕まえてください」

　奇狼丸が指したのは、ぐんぐん遠ざかっていく鳥影だった。百メートルくらいは離れているだろうか。

　だが、乾さんが鳥に意識を集中する前に、覚が小声で叫んだ。

「いや、ちょっと待ってください」

　覚の目の前の空間に、真空のレンズが生まれた。通常のレンズとは逆に、凹レンズで、対象の映像を拡大する。わたしたちは、覚のそばに集まった。

　レンズの中央には、水平線の彼方から覗いている帆の先端が、はっきりと映っていた。

「信じられない。もう、追いかけてきたんだ……」

　覚は、ショックを受けたようにつぶやく。

「私の不注意でした。斥候や索敵に鳥を使うのは、我々の常套手段ですが、こんなに早く発見されるというのは、予想外でした。おそらく、昨晩湾内に停泊している間に、ミミズクかヨタカのような夜行性の鳥に見つかっていたんでしょう」

　奇狼丸が、悔しそうに唸った。

「どうすればいい？」

「すでに、こちらの現在位置は、把握されていると思います。今すぐに逃げるべきですが、半径三十キロ圏内の地上は、不毛の台地と砂漠ばかりで、身を隠せる場所はありません。向こうは、鳥瞰して最短

距離を来ることができる。追いつかれるのは、時間の問題です」

「だったら、地下に潜ったらどうなんだ?」

乾さんが、眉間に深い皺を刻んで、奇狼丸に訊ねる。

「東京の地下は、地獄です。私が部下を失ったのも、ほとんどは地下探検のときでした。しかし、この際、そんなことは言っていられないでしょうな」

奇狼丸は、四、五十メートル離れたところにある、風穴のような開口部を指さした。

「先ほど、あのそばを通ったとき、風の臭いを嗅いでみたのですが、東京の地下を縦横に走る大きな洞窟まで続いているようです。最初は、比較的ゆるやかな斜面が続いていますから、たぶん、歩いて下りられるでしょう」

ほかに、選択の余地はなさそうだった。

「上等ですよ。とにかく、追いつかれる前に、サイコ・バスターを見つければいいんだ。追ってくるんなら、手間が省けるというものです。地獄の底へ誘い込んでやりましょう。……最悪でも、こっちが殺される前に、狭い洞窟の中で噴霧すれば、悪鬼の野郎を感染させることはできる」

乾さんの言葉は、このときのわたしたち全員の覚悟を、代弁するものだった。

IV

闇に燃えし篝火は

1

一歩一歩、慎重にたしかめながら、地の底へと下っていく。足下は、灰白色の石灰岩で、油断すると、足を滑らせそうだった。

洞窟の中は、外気に比べて涼しいはずだという先入観があったが、しばらく斜面を下るうちに、じわじわと汗が滲み出してくる。温度が高いだけでなく、湿度が百パーセント近いのだ。

「なんで、こんなに暑いの？」

わたしが訊ねると、奇狼丸は、一言「コウモリです」と言ったきり、先を急ぐ。

地底からは、何種類もの風が複雑に入り交じって吹き上げてくる。奇狼丸は、それらを嗅ぎ分けて、進むべき道を選んでいるらしかった。覚の背嚢から頭だけを出しているニセミノシロモドキは、目的地のビルまでの方位と距離を告げることはできるが、途中の地形については、何の情報もないので、奇狼丸の案内なしには、一歩も進むことはできない。

ゆるやかな斜面が終わり、道は水平になった。入り口からはかなり隔たったが、ところどころに地上へ通じる小穴や割れ目があったおかげで、充分、明かり取りになった。

「この先は、もっと暑くなります。しばらくの間、我慢してください」

前方から、かすかなざわめきのようなものが聞こえてくる。同時に、むっとするような熱気と、豚小屋を思わせるような臭気も押し寄せてきた。奇狼丸が、少し高い場所にある直径一メートルほどの穴を指さす。どうやら、そこが、すべての発生源らし

い。

先頭の奇狼丸が、急な斜面をよじ登った。元々つるつるしている石灰岩が、濡れているために、ますます滑りやすくなっている。わずか、四、五メートル登るだけでも、かなり難渋した。

穴を覗き込んだ奇狼丸が、わたしたちを振り返る。

「この中は、まったくの闇です。照明を用意した方がいいでしょう」

わたしたちは、背嚢から、用意のランタンを取り出した。光量は小さいものの、菜種油などの植物油を入れれば、十五時間以上燃え続ける。点火の時以外には呪力を使う必要がないのも、便利な点だった。

甲高くて騒々しい音が、耳朶を打つ。鈴を打ち鳴らすような、大勢の妖精がおしゃべりに興じているような、奇妙な音だった。狭い入り口をくぐると、向こうは、こちら側よりずっと広々とした空間になっていた。だが、奇狼丸の後に続いて入ると、その蒸し暑さと凄まじい臭気とに閉口する。

「足下に気をつけてください」

こちらを向いて注意を促す奇狼丸の隻眼は、不気味な緑色に輝いていた。

そう言われて、足下をランタンで照らしたわたしは、ぎゃっと叫びそうになった。広い洞窟の底一面に、何かが蠢いている。よく見ると、それは、無数の虫だった。見たこともないほど大きな蛆虫や、蠕虫類、蚰蜒のような多足類の仲間や蜚蠊、大型のクモなど。さらに、それらの生き物は、どこまでも続く泥土のようなものの上を這いずっていたが、それらが発するとんでもない臭いから、分厚く堆積した糞だとわかる。この異常な熱気も、大量の糞が発酵することで生み出されているらしい。

「こんなとこ、歩けないわ！」

わたしは悲鳴を上げたが、奇狼丸と乾さんは、さっさと歩き始めていた。

「早季。行くしかないんだ」
　覚が、わたしの手を引こうとした。だが、生理的な嫌悪感で、どうしても一歩が踏み出せない。
「この中に、毒虫がいたらどうするの？　もし、うっかり噛まれでもして、それで終わりだったら……？」
　そう言いながら、ランタンを上に向ける。天井にも虫がいるのではないかと思ったからだった。
　高さが十メートル以上ある天井は、見渡す限り、無数のコウモリがびっしりと鈴なりになっていた。奇妙な音は、コウモリの鳴き声だったのだ。自分の顔から血の気が引くのがわかる。
「だめ。行けない。このコウモリが襲ってきたら、ひとたまりもないもの」
　覚は、背嚢のニセミノシロモドキに質問をする。
「ここにいるコウモリは、人間に危害を及ぼす可能性はあるのか？」
「この洞窟にいるのは、ほとんど東京大蝙蝠（トウキョウオオコウモリ）と思われます。トウキョウオオコウモリは、昼間、関東近郊の森林で主に昆虫などの餌を採り、夜は天敵の少ない東京の洞窟に帰ってきます。これまでに、人間に対して、何らかの危害を及ぼしたという記録はありません。また、人間に感染症を媒介した例も知られていません」
「ほら、だいじょうぶだよ」
　覚は、わたしを励ますように言う。
「……旧東京二十三区内の地下にある洞窟全体で、約百億匹が棲息していると推計されています。トウキョウオオコウモリが洞窟内に落とす糞が、多くの生き物の餌となることで、本来なら不毛な環境である、洞窟の生態系の根幹をなしているのです。なお、トウキョウオオコウモリは、サイズの大きさからオオコウモリと名付けられてはいますが、小笠原（オガサワラ）大蝙蝠（オオコウモリ）が先祖という説には疑問が投げかけられています。オガサワラオオコウモリを含む、オオコウモリのほとんどは洞窟性ではない上、トウキョウオオ

コウモリのような超音波定位（エコーロケーション）も行わないというのがその根拠です。それに替わる仮説としては、関東地方に多数棲息していたキクガシラコウモリが、大型化して……」

ニセミノシロモドキは、長々と、訊きもしないことの説明を続けていた。新しい質問をするか、止めろと言わない限り、喋るのをやめない仕様になっているらしい。

「……ここの、コウモリの糞の上にいる虫のうちで、毒があるやつがいるのか?」

覚が、訊ねた。

「ここにいるほとんどの虫は、無毒で、人を咬むこともありません。唯一の例外は、洞窟蛆蝿（ドウクツウジバエ）です。ドウクツウジバエは、コウモリの糞という餌が豊富にある環境に適応して飛翔能力を失った蝿で、蛆のまま一生を送り、幼生生殖を行いますが、鋭い口器を持ち、人の手足に噛み付くことがあります。毒性は未確認ですが、不潔な環境下にいるために、傷口に細菌が感染する可能性があります。また、ドウクツウジバエの唾液により、まれにアレルギー反応を起こす……」

「わかったわかった。もういいよ」

覚は、ニセミノシロモドキを黙らせた。

「この大きな蛆だろう? とりあえず、こいつにだけ気をつければいい。とにかく行こう。時間がない」

わたしは、目を瞑って、気味の悪い虫がうようよしている、コウモリの糞の上を歩いた。靴が、ずぶずぶと、踝あたりまで沈み込む。全身に鳥肌が立ち、背筋が寒くなった。そのお陰でと言うのも変だが、飛び回っている無数の羽虫や、サウナのような高温と湿気は、ほとんど気にならなかった。

しばらく行って、固い岩場を踏むことができたときには、ほっとして、膝が笑いそうになった。

「東京の地下が地獄だって言ってた意味が、わかったわ」

わたしがそう言うと、奇狼丸は、笑みを見せた。

「いや。このあたりは、まだ、天国のようなものですよ」

　コウモリの大広間を抜けると、少し涼しくなった。最初のうちは、ありがたいと思っていたのだが、しばらくすると、汗が冷えて肌寒くなってくる。冷たくて湿度が高い状態が、これほど不快なものであることは、初めて知った。

　先に立って歩く奇狼丸は、この環境を、まったく苦にしていないらしかった。わたしは、バケネズミが元々穴居性の動物であることを思い出し、心強く感じたが、よく考えると、追っ手のバケネズミにも、同じことが言えるのだ。

「あなたは、前にも、東京に来たことがあるって言ったわね？」

「はい」

　奇狼丸は、なぜか、そのことにはあまり触れられたくない様子だった。

「それで、ここの様子もよくわかってるんでしょう？　どうして、ここにコロニーを作ろうとしなかったの？　最初っから、これだけ広い洞窟があるのに」

「我が同族は、数多くの挑戦者を輩出してきましたが、さすがに、この地に住もうとした者はおりません」

　奇狼丸は、しかつめらしく言う。

「ここには、いろいろと、不愉快な先住者がいるのです。前にも言いました通り、ここを歩いて探検しただけで、我が配下の三分の一近くが命を落とさなくてはならなかったほどですから」

　その、不愉快な先住者について、奇狼丸かニセミノシロモドキに、詳しく訊いておいた方がいいのだろうか。そう思ったとき、覚が、ニセミノシロモドキに、別の質問をした。

「ここからの方位は？」

「西二十七度北です。これまでのところ、おおむ

ね、正しい方角へ来ています」

「ふーん……」

なぜか、覚は、あまり嬉しそうではなかった。

「目指す建物が、まだあるかどうかなんて、もちろん、わからないよな？」

「それについては、アーカイブに情報がありませんので、確認できません。ただし、建物本体の、少なくとも一部が残っている確率は、試算では、五十パーセントを越えています」

「本当か？　どうして、そう言えるんだ？　だって、千年もたってるのに？」

覚は、叫んだ。そのことを心配していたのかと、ようやく納得する。

「現在向かっている、中央合同庁舎第8号館には、超長寿命コンクリートが用いられていることがわかっています。これは、グリコールエーテル誘導体とアミノアルコール誘導体を混和剤とし、さらにポリマー含浸処理および、表面ガラス化処理を……」

「詳しいことはいい。要するに、千年保っても不思議ではないってことなんだな？」

「理論上は、そうなります」

ニセミノシロモドキは、すまして答えた。

「じゃあ、他の建物がほとんど残っていないのは、どういうわけなんだ？」

「古代文明で用いられていた通常のコンクリートは、最長で百年、一般には五十年ほどの耐久性能しかありませんでした。さらに、施工不良や、水を多く混ぜすぎたシャブコン、海砂を使ったことによるアルカリ骨材反応などの影響で、さらに寿命は縮まります。東京都下の建造物の三分の一は、九日間戦争において、地上部分が破壊され、残ったものも、大半は百年以内に崩壊しました。コンクリートは風化し、強い酸性雨などの作用もあって、石灰部分が溶かされ、様々な用途のために作られていた巨大な地下空間に流れ込みました。このため、自然状態では完成までに数百万年を要する鍾乳洞が、わずか数

百年で造られたと考えられています」

「九日間戦争って、何のこと？」

わたしは、訊ねた。

「通常人による超能力者狩りが終焉を迎えた後に、反攻に転じた超能力者側が、通常人を駆逐した戦争です。百人足らずの超能力者たちが、東京都内にいた通常人一千百万人を、わずか九日間で……」

「もういいわ」

わたしは、ニセミノシロモドキの言葉を遮った。とても、聞くには耐えなかったのだ。

学校では一切教わらないが、人類の歴史が、そのまま、戦争と殺戮の記録であることは、もちろん知っていた。だが、呪力を持った人間、今の我々と基本的に異ならない人々が、そうでない人たちを虐殺したというのは、信じたくなかった。

それにしても、わたしたちが取りに行こうとしているサイコ・バスターという代物には、戦況を変えるほどの力はなかったらしい。今、戦いに勝った側の末裔が、そんなものに頼らざるを得ない状況に陥っているというのは、運命の皮肉と言うべきかもしれない。

皮肉と言えば、地表をコンクリートの厚化粧で塗り固めた都市、東京の存在自体がそうだろう。自然を排除するためのコンクリートが風化、溶解して、太古のカルスト台地のような姿に変貌したのだから。今や、地上は不毛の台地が延々続き、地下は、熱と湿気に覆われて、不気味な生物が跋扈する、地獄のような環境と化していた。

奇狼丸が、ぴたりと足を止めた。鼻面をもたげて、しきりに空気の臭いを嗅いでいる。やがて、細い壁の割れ目に向かうと、鼻を突っ込むようにする。

「どうしたんだ？」

乾さんが、訊ねた。

「追っ手です。臭いが漂ってきました。……ふふん。やはりそうか」

「おい、早く逃げないと……！」

覚が、叫ぶ。

「だいじょうぶです。敵は、まだかなり遠くにいますから。しかも、我々とは、別の筋に入ったようです。臭いだけが、細いトンネルを流れる風に運ばれてきたんですが、これで、向こうの陣容は、ほぼ特定できます」

「陣容って？　何匹いるとか？」

わたしは、奇狼丸の能力に興味を惹かれていた。

「はい。全部で……七匹。思ったよりは、少ないですが、狭い地下で迅速に行動するには、手頃な数かもしれません。そのうち五匹は、初めて嗅ぐ臭いです。一般の兵士でしょう。しかし、後は、よく知っている。あの悪鬼。そして、野狐丸です」

「野狐丸が？」

覚が、吃驚して叫んだ。

「まさか、大将が自ら追ってきたっていうのか？　今までは、ずっと、どこかに隠れてたのに」

「何の不思議もありませんな」

奇狼丸は、鼻先で嗤った。

「お三方との戦いで勝つためには、どうしても、悪鬼を起用する必要があった。そして、悪鬼は、やつらの切り札なのです。悪鬼を失うことは、とりもなおさず敗北に直結します。それを思えば、自ら陣頭指揮して万全を期すくらいのことは、当然でしょう」

奇狼丸の言葉には、自分でもそうするという含みがあった。

「ちょっと待てよ。だったら、もしかすると、向こうにも、こちらの人数は知られてるんじゃないのか？」

乾さんが、鋭い質問を発した。

「その可能性はあります」

奇狼丸は、当たり前だろうという顔だった。

「東京の地下は、縦横無尽に大小のトンネルが走り、様々な風向きの風が吹いています。こちらが残

した空気も、風で運ばれていく。その臭いを嗅げば、我々の数や内訳などは、掌を指すようにわかるでしょう」

彼我（ひが）の陣容について、互いに知るところになるというのは、一見、条件は五分五分のようだが、悪鬼という切り札を持ち、数でも上回っている敵の方が、圧倒的に有利になるのではないか。

このとき、わたしはまだ、そう思っていた。

わたしたちは、黙々と、暗い鍾乳洞を進んでいった。

進路については、ほぼニセミノシロモドキと奇狼丸にまかせっきりだったため、考える時間は、たっぷりとあった。

一昨日、あの夏祭りの晩から、あまりにも多くの恐ろしい出来事が立て続けに起きて、わたしたちは翻弄され続けてきた。そのため、もっとも肝心な問題について、落ち着いて考える暇がなかったのだ。

「ねえ、覚。どうして、真理亜たちの子供は、悪鬼になっちゃったんだろう？」

わたしが投げかけた問いに、覚は、しばらく答えなかった。

「……それは、わからない。どういう育て方をされたか、見当もつかないし。あいつらは、薬物も使うだろう？」

覚は、ちらりと、先頭を行く奇狼丸の後ろ姿を見た。

「でも、そんなことで、普通の子供が、悪鬼になっちゃうのかな？」

「これまでに出現した悪鬼は、すべて、突然変異だったという話だよ。両親に異常がなくても、子供が、悪鬼の素質を持って生まれてくることはある」

「現実に、そんなことってあるかな？　だって、ものすごく小さな確率でしょう？」

覚は、頭を振った。

「今、そんなことを考えても、しかたがないよ。と

にかく、悪鬼を止めなければ、僕らの町は全滅する。そして、そのためには、サイコ・バスターが必要なんだ」

「うん……だけど」

わたしは、頭の中でもやもやしていたものを、言葉にしようとした。

「何ていうか、あの子は、もしかしたら、悪鬼じゃないんじゃないかっていう気がして、しょうがないの」

「何言ってんだよ？　あいつが何をしたのか、見ただろう？　あいつ一人に、いったい、何人殺されたと思ってるんだ？　鏑木肆星さんまで、やられたんだぞ！」

覚は、少し気色ばんだ。もしかしたら、その声が、何らかの影響を及ぼしたのかもしれない。天井から、何かが、覚の上にぼたりと落ちてきた。

「うわっ！」

驚きに苦痛の混じった覚の悲鳴が、洞窟の中にこだました。腰が砕けて、その場に尻餅をつく。

「すぐに取ってください！」

振り返った奇狼丸が、厳しい声で言う。

わたしは、ランタンを、覚の上にかざした。覚の左の肩に、三十センチくらいはある、ぬめぬめと濡れ光る物体が貼り付いている。

「無理に引っ張ってはいけない。火をつけて、自分から離れるようにするんです」

奇狼丸の指示に従い、わたしは、その物体の体表の一部を赤熱させた。一気に燃やしてしまえば早いのだろうが、そんなことをすれば、覚も大火傷を負ってしまう。

二、三秒間はまるで反応がなかったが、ぬめぬめとした体から泡が出て、煙が上がると、奇怪な生き物は、身体を伸ばした。さっきまでは丸い塊だったのが、しだいに細長くなり、さらに、その一方の端から四本の触角のようなものが顕れる。

「ナメクジだわ……」

信じられない。ナメクジが人を襲うなどということが、あるだろうか。わたしは、四本の触角を焼き払った。ナメクジの化け物は、苦痛のため身体を六、七十センチまで伸ばすと、地面に落下した。ただちに、青白い高温の炎によって焼き尽くす。ナメクジは、炎の中で身悶えしながら、キューというような声で鳴き、煙と水蒸気を上げて燃え尽きた。

「だいじょうぶ？」

わたしは、覚に駆け寄った。

「気をつけてください！　まだ、上にいます！」

奇狼丸が、真っ暗な天井を指さす。乾さんが、ランタンの光（ひ）を向けた。天井の岩の間には、たくさんの同類が蠢めいていた。最初の個体に続いて飛び降りようとしていたのが、炎に驚いて右往左往しているようだ。

乾さんの呪力により、ナメクジはすべて引き剝がされ、地面に叩きつけられた。全部で、百匹以上はいただろう。寄せ集められて、小山になってからも、もぞもぞと蠢きながら、小さな目の付いた触角を持ち上げる。炎に包まれると、いっせいに粘液と泡を噴き出した。異様な悲鳴の大合唱が起こり、悪臭が鼻を衝いた。

わたしは、覚の様子を見た。アロハシャツの肩の部分が、目の細かい鑢（やすり）で擂（す）りおろしたようにぼろぼろになり、赤く染まっている。その下の広範囲の皮膚が、赤剝けの状態で、血が噴き出しているのだ。

「痛い？」

覚は、歯を食いしばって、うなずく。

「これ、いったい何なの？」

わたしは、覚の背嚢に入っていた、ニセミノシロモドキに向かって怒鳴った。ニセミノシロモドキは、細長いスコープを伸ばし、対象を確認する。その姿は、観察されるナメクジに奇妙なくらい似ていた。

「血吸蛞蝓（チスイナメクジ）です。洞窟の天井にいて、獲物が通りか

かると、落下して強力な吸盤で吸い付きます。多数の逆棘状の歯が生えた歯舌（しぜつ）によって、獲物の表皮を広範囲に傷つけて吸血するのですが、一度に多数のチスイナメクジに吸血されると、獲物は、出血多量で死に至ることもあります」

「ナメクジって、ふつう、植物質のものしか食べないんじゃないの？」

　わたしは、背嚢から出した救急セットで覚の傷口を消毒しながら、訊ねた。

「普通のナメクジとは別科ですが、欧州原産の笠被蛞蝓（カサカムリナメクジ）は肉食性で、ミミズを捕食します。ただし、陸生の貝類で吸血性のものは、今日まで、チスイナメクジ以外には知られていません」

「毒は？」

「おそらく、ないと思われます」

　ニセミノシロモドキの答えに、少しほっとする。

「浅手のようですが、放っておくと、出血がひどくなります。強く圧迫して、止血しておいた方がいい」

　奇狼丸が、覚の傷口を覗き込んで言う。

「こんな化け物がいるなんて……やっぱり、ここは地獄なんだわ」

　わたしがつぶやくと、奇狼丸は、首を振った。

「こんなのは、ほんの序の口ですよ」

　覚は、痛みに耐えながら歩いていた。チスイナメクジに吸血された跡は、火傷のように盛り上がり、出血はなかなか止まらないようだ。傷自体は浅いので、本当に毒がなかったのかと心配になったが、どのみち、解毒剤の類は全く持っていない。あとで知ったのだが、チスイナメクジは、強烈な陰圧をかけて、かなり深部まで血管を破壊するのだという。

　救急セットには、鎮痛剤はあったのだが、呪力を使うのに支障が出るかもしれないと、覚が拒否した。

「異常だ。何もかもが。……こんなところに、長居すべきじゃない」

覚が、ぽつりとつぶやく。

「どういうこと？」

　少しでも気が紛れるかと思って、歩きながら訊ねる。

「おかしいと思わないか？　あんなふうに生き物が進化するなんて」

「だけど……わたしたちの町の周辺、八丁標でも、近いことが起きてるわ。わたしたちの意識のフィルターからこぼれ落ちた呪力は、絶えず漏出している。それが、穢れとして、八丁標の外へと向かうことで……」

　言いながら、自分は、どこでそんなことを聞いたのだろうと怪訝に思う。

「呪力の漏出か……。面白い考え方だな。しかし、たしかにそうだ。この千年のうちに、新しい生き物が現れたのは、すべて八丁標の周囲からと言われてる」

　覚は、驚きの目で、わたしを見たような気がした。

「だとすると、東京がこうなったのも、それが理由なのかもしれない。日本中に住む多くの人々は、東京が地獄そのものだというイメージを持っている。誰かが東京のことを考えるたびに、漏出した呪力は、東京を、ますます本物の地獄へと近づけていくんだ……」

　背筋がうそ寒くなる。わたしたちは、文字通り、地獄巡りの真っ最中らしい。

「こんなに短時間に鍾乳洞ができたのだって、きっと、ニセミノシロモドキが言うような、酸性雨の作用だけじゃないだろうな」

　だが、そのとき、わたしは、突如として湧いた別の考えにとらわれていた。

　呪力の漏出……。違う。これは、わたしの考えじゃない。

　わたしの中に、まるで、別の人間がいるような気がする。

誰か、わたしの、とてもよく知っている人間が。

　水平なトンネルを通っていると、奇狼丸が急に立ち止まって、地面に耳を付けた。

「どうしたんだ?」

　乾さんが、驚いて訊く。もしかして、追っ手の足音でも聞こえるのだろうか。

「このあたりの床は、かなり薄くなってるようです。その下は、奈落のような空洞です。罠を仕掛けるには、最適でしょう」

「わかった」

　乾さんには、すぐに通じたらしい。わたしたちが通過してから、乾さんは、トンネルの床の広い部分に切れ目を入れた。一匹なら持ちこたえるだろうが、数匹がそこに乗ると、床が崩落する仕組みである。

「これで、追っ手が全滅してくれることは期待しません」

　奇狼丸は、満足げに言う。

「しかし、罠が仕掛けられている可能性があると思わせ、追いかけてくる速度を、多少は削ぐことができるのです」

「もし、わたしたちが、引き返さなきゃならなくなったら?」

「それで、自分が作った間抜け罠（ブービー・トラップ）にかかるようなら、生きる資格はありませんな」

　わたしは、自分に生きる資格があるかどうか、心配になってきた。

　さらにしばらく進むと、蠅の数が多くなる。顔の周囲を飛び回り、隙あらば留まろうとするので、うるさくてしかたがない。こめかみを汗が流れ落ちる。再び、気温が高くなってきたようだ。

「この先に、また、コウモリの群生地があるようです」

　奇狼丸が言う。

「そこを突っ切れば、一時的に、臭いはごまかせる

かもしれませんが……」

　また、あの汲み取り便所の奈落を通らなければならないかと思うと、心底げっそりする。だが、幸運なことに、その後すぐに、抜け道が見つかった。

　前方の薄暗い闇の中に、ぼんやりと緑色に光るリボンのようなものが、垂れ下がっているのだ。その数、数十本はあるだろう。

「何、あれ？」

　わたしが訊ねると、奇狼丸は、喉の奥で唸った。不浄猫が、喉を鳴らす姿を思い出す。どうやら上機嫌なようだ。

「あれは、うっかり貼り付かれると身動きが取れなくなりますが、注意さえしていれば、たいして危険な生き物ではありません。それより、上の階層に通じる穴がある印なのです。ここは、道筋を替えて、追っ手をまくチャンスかもしれません」

　奇狼丸の話と、ニセミノシロモドキの解説を突き合わせると、こういうことになる。

　東京には、多くの巨大な洞窟が縦横無尽に走っており、それらと並行して走る、無数の小さなトンネルも存在する。さらに、洞窟群には、比較的浅い場所から、地の底のような深さまで、たくさんの階層があり、人間が階層間を行き来しようと思えば、通常、大地の割れ目か、比較的稀な縦坑を利用するしかない。

　ところが、階層間には、無数の細い穴が開いている。これは、螺旋錐蚯蚓の働きによるものらしい。普通の生物では歯が立たないコンクリートや岩盤も、頭部がきわめて硬く、強酸を分泌しながらドリルのように回転して進むラセンキリミミズは、容易に穴だらけにしてしまうのだ。

　ラセンキリミミズの穿った穴は、深い階層の洞窟まで、酸素や水、光をもたらすほか、多くの生き物によって利用されている。一反蠅取紙も、その一つだった。

　イッタンハエトリガミは、太古から存在してい

た、大三筋笄蛭（オオミスジコウガイビル）の直系の子孫だった。笄蛭（コウガイビル）とは、蛭とは無関係のプラナリアに近い生物である。オオミスジコウガイビルは、体長一メートルにもなり、テープのように薄い身体の中央にある口で、ミミズやナメクジなどを捕食する。クモのように糸を吐いて降下することでも知られているようだ。

イッタンハエトリガミは、ラセンキリミミズの穿った縦穴を、糸を吐いて垂直に移動し、階層間を移動する。ツチボタルのように、うっすらと緑色に輝き、身体からべとべとする粘液を分泌して、光に誘われた羽虫や蠅などがくっつくと、体側に三十センチおきにある口で捕食するのだ。体長は最大で十二メートルに達し、トウキョウオオコウモリのような大きな獲物がかかると、ぐるぐる巻きにして窒息死させるという。

ランタンの炎を大きくして威嚇すると、熱を感じた数十本のイッタンハエトリガミは、するすると上っていった。後には、天井に開いた、蜂の巣のような穴だけが残される。

奇狼丸の見立てでは、上の階層までの厚さは、せいぜい四十センチほどらしい。ラセンキリミミズは、岩が薄い場所を選んで穴を穿つ習性があるのだ。わたしと乾さんが、慎重に、岩を切り抜いていった。イッタンハエトリガミは、早々と、さらに上の階層に退避したらしく、影も形もない。

わたしたちは、大急ぎで、前方にあるコウモリの集合住宅まで往復し、臭跡を付けた。それから、引き返すと、先ほどの穴から上の階層に移る。

この後は、わたしの特技を活用することになった。岩の蓋は、上面が広く下の面が狭い、栓のような形に切り抜いてあったので、ほぼすっぽりと元の穴におさまった。わたしは、壊れた陶器を補修するときの要領で、石灰岩の継ぎ目を消していった。本当の出来映えは、下から見ないとわからないものの、よほど注意して見なければ気づかれないだろうという、自信はあった。わたしの特技は地味なのだ

が、上級者レベルの技であり、破壊的な意思を放射するしか能のない悪鬼には、想像もつかないもののはずだ。

　奇狼丸の話では、臭いは、水平なトンネル内部の風によって、遠くまで運ばれていくが、細いラセンキリミミズの穴から上下には拡散しにくいらしく、かりに嗅ぎつけられたとしても、別の階層から漂ってくることまでは、わからないはずだという。

　途中で階層を変えるというのは、冴えたアイデアに思えた。だが、わたしたちは、よく考えるべきだったかもしれない。ずるをして阿弥陀籤（あみだくじ）に横棒を一本加えるのは、必ずしも吉と出るとは限らないのだ。

　一つ上の階は、さっきまでいた洞窟に比べると、温度と湿度は若干低めで、動物相（フォーナ）は、はるかに豊富なようだった。

　その理由の一つは、ここには、石灰岩以外の土壌が豊富にあることだった。そのため、大小さまざまな種類のミミズが生活している。もう一つは、ここへ来て見た唯一の哺乳類、鼠の存在だった。ニセミノシロモドキによれば、洞窟鼠（ドウクツネズミ）は、古代の都市環境に適応していた溝鼠（ドブネズミ）の末裔だった。現在では、目はほとんど退化しており、もっぱら嗅覚に頼って細い割れ目を行き来し、コウモリの糞にたかるドウクツウジバエなどの昆虫を食べている。

　この二種類の動物は、この階における食物連鎖では、底辺に近い層を成しているということだった。つまり、当然、それらを餌とする生き物が存在するのだ。

　しばらく歩くうちに、わたしたちは、そうした捕食者をいくつも見かけるようになった。

　最も驚いたのは、ふいにランタンの明かりの中に現れた、巨大な蛭だった。体長は四メートル以上あるだろうが、オレンジ色の地に黒の縞や斑紋が入っている胴体は非常に太く、獰猛そうに細く尖った頭部を高くもたげて、こちらの様子を窺っているとこ

ろは、同じ長さの蛇とは比較にならない存在感がある。わたしは、恐怖を感じ、思わず口の中で真言（マントラ）を唱えかけた。

「殺す必要はありません。少し動いて見せてやればいい。こいつは今、震動や熱量から、こちらの大きさを推し量ってるんです」

なぜ、奇狼丸が急に博愛主義的になったのかはわからなかったが、アドバイス通りに、身体を動かしてやると、巨大な蛭は、わたしたちは餌には大きすぎると判断したらしく、意外に敏捷な動きで方向転換して、闇の奥に姿を消した。ニセミノシロモドキによれば、虎斑陸蛭（トラフクガビル）という種類で、古代から山間部に棲息している、八輪陸蛭（ヤツワクガビル）から進化したらしい。環形（かんけい）動物でありながら、狩りをするために、爬虫類並みの智能も備えているのだという。

さらに、その直後には、別の種類の蛭の捕食シーンを目撃することになった。

洞窟の壁を、七、八十センチはありそうな山手（ヤマテ）蚯蚓（ミミズ）が這っていた。細長い体側には発光する点が等間隔で並んでいる。ニセミノシロモドキからは、古代の列車を彷彿させるという説明があった。

突然、天井の穴から、何かが矢のような速度で飛び出して来て、ヤマテミミズの頭を押さえた。冠（カンムリ）牙蛭（キバビル）だという。先祖とされる牙蛭（キバビル）には三本の牙があったが、ラセンキリミミズなどを捕食するため、頭頂部に冠のような形をした十六本の牙を持っているらしい。先ほど見た、トラフクガビルと比べると、ずっと体が細いが、たくさんの牙を指のように器用に使い、暴れ回るヤマテミミズを丸呑みにしていく様には、浅ましさを越えた生命の迫力を感じて、つい見入ってしまった。

「おそらく、これで、目的地までの三分の一は来たはずです」

しばらく歩いた後、奇狼丸が言った。まだそんなものかと思い、げっそりする。少し前から、まわりで数種類の虫が美しい声で鳴き出していた。このあ

たりには、草むらもないのに、何がいるのだろうか。

「この虫は、何なの？　鈴虫とか？」

わたしは、覚の背嚢に入っている、ニセミノシロモドキに訊ねた。

「ここで鳴いているのは、すべて、ゴキブリの仲間です。馬追蜚蠊（ウマオイゴキブリ）、邯鄲蜚蠊（カンタンゴキブリ）、鉦叩蜚蠊（カネタタキゴキブリ）などで、暗い洞窟の中で雌を求めるために……」

「もういいわ」

わたしは、辟易して遮った。

「早季。できるだけ無駄な質問はするなよ。目的地に着く前に、こいつの電力が切れたら、どうするんだ？」

覚が、むっつりと言う。

「ごめんなさい」

覚は、いつになく苛立っているようだ。肩の傷が、そんなに痛むのだろうか。

わたしたちは、このとき、奇狼丸、乾さん、覚、わたしの順で歩いていた。殿（しんがり）を行くのは不安だったが、かといって前衛に回る自信はないし、覚の体調が優れないようなので、やむをえない。

ふと、背後に何かの気配を感じて、振り返る。

何も見えない。たった今歩いてきた、暗い洞窟があるばかりだ。

だが、前に向き直ってからも、胸騒ぎのような嫌な感じは消えなかった。

しばらく行ってから、今度は、すばやく向き直る。ランタンをかざして見るが、やはり、何もいなかった。壁には、わたしの影が、大きく引き伸ばされて映っているだけだった。

「どうしたんだ？」

覚が、振り返る。さっきは厳しく言いすぎたと思ったのか、優しい口調だった。

「うん。何でもない。何か、気配がしたと思って。……気のせいだったみたい」

それから、しばらくは、無言で歩いた。背後か

ら、何か音が聞こえてこないかと耳を澄ますが、何も聞こえない。

それから、気がついた。何も聞こえないのが、変なのだ。

わたしたちの歩いている周囲や、前方からは、ゴキブリの鳴く声が聞こえてくる。だが、背後からは、なぜか、まったく聞こえてこないのだ。

ゴキブリは、わたしたちが通っても、まったく意に介さず鳴き続けている。それなのに、通り過ぎて、しばらくたってから鳴き止むのは、いかにも変だ。

そのことを、ニセミノシロモドキに訊ねようかと思ったが、さっきの今では、さすがに躊躇われる。しばらく行ってから、わたしは、もう一度、ゆっくりと振り返った。

あいかわらず、ランタンの光に照らし出されるのは、影だけである。だが……。

わたしは、立ち止まった。にもかかわらず、影は、ゆっくりと、こちらに近づいてくる。

「影が来る……！」

わたしが、そう叫ぶと、奇狼丸が、あわてた様子で先頭から駆け戻ってきた。

「火を！　炎で追い払うんです！」

呪力によって、何かを発火させることはできるが、何も燃えるものがないところでは、炎を作り出すことはできない。とっさにランタンの蓋を開けて、油を水鉄砲のように噴き出させる。続いて瞬時に、油の温度を発火点を超えて上昇させた。

眩い炎の舌が、洞窟の壁を舐めた。しかし、影は、炎が届く寸前に散り散りになって、消え失せてしまう。

「何なの、これ？」

「逃げましょう！」

わたしたちは、闇雲に前へ向かって走り出した。足下が起伏だらけの鍾乳洞で、しかも揺れるランタンの投じる明かり以外、視界はゼロである。そんな

中で全力疾走するのは、正気の沙汰とも思われなかった。

二、三分走り続け、息が切れかけた頃、四つ足で前を走っていた奇狼丸が立ち止まる。

「もう、かなり引き離したはずです。『影』は、それほど速く移動できない」

「あれは、いったい何なんだ？」

覚が、奇狼丸に詰め寄った。

「わかりません。しかし、前回の探検で、最も多くの犠牲者を出したのが、あの『影』でした。あれに捕まって、助かった者はおりません」

「おい、あの『影』の正体を、教えてくれ！」

覚は、ニセミノシロモドキに向かって怒鳴る。

「黒後家壁蝨（クロゴケダニ）です。肉食性のダニで、黒い影のように洞窟の壁を移動し、集団で狩りを行います。軟体動物から環形動物、脊椎動物にまで作用する、致死的な神経毒を持っており、洞窟内のほとんどの生物を捕殺し、柔らかい体組織を喰い尽くします」

「……とにかく、前進し続けましょう」

乾さんが言い、わたしたちは、早足で歩き続けた。炎で焼き払えば簡単なのだろうが、クロゴケダニ自体は小さすぎる上に集散が速くて目標にならないし、それ以外に燃えるものも、洞窟内には、ほとんど存在しない。風を起こしたとしても、これだけ岩肌に凸凹が多いと、しがみついているダニを吹き飛ばすのは難しい。だからといって、最後の手段とばかりに壁や天井を破壊すれば、大規模な崩落につながる怖れもある。とにかく、ここは、さっさと逃げるのが、最も賢明な策だと思われた。

だが、さらに少し進んだところで、わたしたちは、地面に異様なものが落ちているのを発見する。

「何だ、これは？」

乾さんが、ランタンの明かりを向ける。光の輪の中に浮かび上がったのは、数メートルの長さのある、扁平な袋のような物体だった。オレンジ色に黒の模様が入っている。

それが、先ほど見たトラフクガビルの、皮だけになった残骸であることに気づいたとき、みな、一様に絶句した。

「……どうやら、『影』に喰われたようですな。犠牲となった私の部下も、骨と皮だけになっていました」

　奇狼丸が、冷静に言う。

「おい。こいつを喰ったダニの大群が、近くにいるんじゃないのか?」

　乾さんが、緊迫した声でささやいた。

「たぶん、まだ、そのあたりの壁や天井にいることでしょう」

　わたしたちは、ぎょっとして、まわりを見回した。

「だいじょうぶです。これだけの大物を平らげた直後だから、今は満腹しているはずです。行きましょう。なるたけ刺激しないように、あまり音は立てない方がいい」

　わたしたちは、足音を忍ばせて、その場を離れた。

「この階層にあるトンネルは、凶暴なダニの巣窟だったようですな。予想外の事態ですが、これには、メリットもある」

　奇狼丸の能天気とも思える発言に、覚が噛み付いた。

「メリット? 何を言ってるんだ? 僕らは、全員、命も危ないんだぞ。暗いトンネルの中で、しかも、こんなに小さいやつが相手では、呪力も使いようがない……」

「たしかに、その通りでしょう。だが、忘れてはいけません。我々にとって最大の脅威は、後から追ってくる悪鬼だということを」

　覚は、はっとしたようだった。

「連中が、もし我々と同じ階層に入ったら、『影』に付け狙われることになる。足止めになるのはもちろん、損害を受けるかもしれない。……その意味で

は、最初のナメクジも、生かしておけばよかったかもしれません。今後、この洞窟に棲息するおぞましい住人は、極力、殺さないようにすべきですな」

「そうも言ってられんようだぞ」

わたしに代わって、危険な最後尾に回った乾さんが、警告を発した。

「最初の『影』が、思ったより早く、追いついてきたみたいだ……」

わたしたちは、たちまち浮き足立ったが、奇狼丸は、なぜか、余裕綽々の表情を見せていた。

「我々には、まだ、ツキがあるようです。見てください。安全地帯は目の前です」

奇狼丸が指さす先には、うっすら緑色に光るリボンの林が、ゆらゆらと風に揺れていた。イッタンハエトリガミだ。

「『影』は、なぜか、あの生き物の近くには寄りつかないのです。あの向こうへ行ければ、一息つけるでしょう」

そうか、と気がついた。微小なダニにとっては、べたべたとくっつく蠅取り紙のような生物は、天敵なのだ。おそらくは、通れそうな隙間があるときでも、本能的に忌避するに違いない。

「さっきのように驚かすと、とたんに上へ逃げて行ってしまいます。絶対に触れないよう気をつけながら、下をくぐってください」

奇狼丸の指示に従い、わたしたちは、四つん這いになって、緑色の暖簾のようなイッタンハエトリガミの下を擦り抜けた。地面との間には、せいぜい四十センチほどの間隔しかなく、悪戦苦闘したものの、何とか、全員が通過することができた。

薄緑色に光る防護柵の下から、向こう側を覗いてみると、想像を絶する数のダニにより、洞窟は真っ黒になっていた。しかし、こちらとは一定の距離を保っており、それ以上は、近づこうとしない。

助かった。わたしたちは、安堵の溜め息をついた。だが、イッタンハエトリガミは、いつ何時、気

まぐれに別の階層に移ってしまうかもしれない。そうなったら、ダニの軍団は、怒濤のように押し寄せてくるだろう。

とにかく、先を急ぐことにする。途中で、いくつもの分岐に出会ったが、できるだけ、ニセミノシロモドキが示す方角に近い隧道（トンネル）を選ぶ。三度ほど、そうした分岐を越えると、もう、自分がどこから来たのかわからなくなる。もし、わたし一人で、この地下を彷徨う羽目になっていたとしたら、とっくに迷子になっていたことだろう。

そこからの道のりは、比較的快調に捗った。数キロを踏破したときだった。どこからか、かすかな金属音が響いてきた。一回。二回。三回……。

奇狼丸が、壁に耳を押し当てて、一心不乱に聞く。

「敵は、地下で二手に分かれたようですな。互いに、あの音で連絡を取りながら、我々を捜索しているのです。……それとは別に、地上を進んでいる部隊も存在するようです」

「あの音は、どうやって立ててるんだ？」

覚が、訊ねる。

「なに、ごく単純な方法ですよ。岩壁に鉄釘を打ち込んで、玄翁（げんのう）で叩くだけの……岩盤の多い地層では、よく使われる通信手段です」

「何て言ってるのか、わかる？」と、わたしは訊いてみた。

「いや。これは、コロニーごとに符牒があるので、正確にはわかりません。しかし、今のところ、我々の現在位置は摑んでいないようです」

とはいえ、敵は、着実に包囲網の輪を狭めているような気がする。最初から覚悟していたとおり、これは、時間との戦いなのだ。

それも、サイコ・バスターなる代物が、千年の時を経て、本当に残っていればの話だが。

わたしたちは、茫然として、立ちつくしていた。

目の前には、断崖絶壁が広がっている。向こう側の壁には、トンネルの入り口に類するものは見当たらない。

　頭上からは、細い割れ目を通して地上の光が射し込んでおり、ずっと下方で反射して、かすかに燦めいている。水があるのだ。水音が聞こえなかったので、最初は地底の池かと思ったが、紙屑を落として観察してみると、向こう側からこっちへ向かって、ゆっくりと流れていることがわかる。地下河川のようだ。

「この先へ進むには、あの川を遡る必要があります」

　奇狼丸が、考え深げに言った。

「それは、無理だろう」

　乾さんが、異議を唱えた。

「ここには、舟はない。丸太一本さえないから、急拵えの筏さえ作れない。かといって、泳ぐのは、あまりに危険すぎる」

　考えるだけでも、ぞっとした。今までの例からしても、あの水の中には、どんな未知の生物が潜んでいるかわからない。

「思い切って、地上に出てみたらどうかな？」

　覚が提案する。

「追っ手の大半は、今、地中にいるんだろう？　少なくとも、悪鬼は。だったら、地上を行く方が早いだろうし……」

「それは、賛成できませんな」

　奇狼丸は、にべもなかった。

「やつらの地上部隊は、鳥を使っています。我々が出てくるのを、文字通り、鵜の目鷹の目で見張っていることでしょう。発見されれば、その情報はすぐさま地中に伝えられます。こちらの位置を把握されてしまえば、半分、鍋に入ったも同じです。いきなり狙撃される可能性もありますし、いつ、どこから、悪鬼が現れるかわからない」

「でも……だったら、どうするの？」

「こちらも、二手に分かれましょう」

　奇狼丸は、断崖から身を乗り出して、下方を覗き込んだ。

「一隊は、今来た洞窟を戻って、追っ手を違う方向へ誘導するように臭跡を付けてから、ここへ戻ってきます。その間に、もう一隊は、下の階層に移り、元来た方角へと引き返すのです」

「そっちは、何のために引き返すんだ？」

　覚が、怪訝な様子で訊ねる。

「いったん上陸した地点に戻って、潜水艇を取ってくるのです。この川を遡るためには、必要ですから」

　覚は、呆気にとられたようだった。

「無茶なこと言うなよ。あんな大きなものを、いったいどうやって、ここまで持ってくるんだよ？」

「この地下河川は、海に注いでいます。しかし、岸辺には、河口らしきものは、まったく見当たりませんでした。つまり、海中に、必ず開口部があるはずなのです。潜水艇を使えば、ここまで、比較的安全に水中を来られるはずです」

　沈黙が訪れた。どちらの隊に回るにしても、危険は、これまで以上に大きくなる。

　だが、誰一人、対案がないこともわかっていた。

2

　わたしは、ランタンを高く掲げつつ、慎重に歩を進めた。湿度百パーセントの蒸し風呂のような状態は前の洞窟と同様だったが、壁や天井のあちこちから水が染み出し、足下にも小さな流れを作っているのには閉口した。視界が悪いため、少しでも気を抜くと足を滑らしそうな気がする。

「だいじょうぶですか？」

　年齢に似合わず軽快な足取りで、前を行く乾さんが、振り返って言った。

「ええ。……こんなに水がなかったら、もっと楽に歩けるんですけど」

　つい、愚痴ってしまう。

「しかし、水が豊富にあるお陰で、あの恐ろしい『影』……ダニはいないようですね」

　たしかに、ダニは一般的に高い湿度を好むが、洞窟の壁面がこれだけ濡れそぼっていると、動き回るのは困難だろう。微小な生き物にとって、水の表面張力と粘性は馬鹿にならないからだ。水浸しになっているために、この洞窟にはクロゴケダニがいないとすれば、文句を言うのは罰が当たるかもしれない。

　わたしたち四人は、奇狼丸の提案通り、二手に分かれた。わたしと乾さんは、海岸まで夢応鯉魚（むおうりぎょ）号を取りに行く側に回り、覚と奇狼丸は、追っ手をまくため、偽の臭跡を付けに行くことになった。

　覚は、チスイナメクジによる負傷のために、長い距離を歩くのは困難だという理由で、わたしに海岸へ行くよう頼んだ。実際、覚は、かなり辛そうに見えたが、彼の真意がどこにあったのかは、あきらかだった。自分が、より危険の大きい側に回るつもりなのだ。いくら奇狼丸が付いていても、猛獣の鼻先で小細工をして回るような行為である。一歩間違えば、自分が餌になることを覚悟しなければならな

い。

　わたしは、すべてを承知の上で、覚の申し出を受け入れた。

　絶対に、全員が生還する。今は、そう信じるしかないのだ。

「乾さん。何もかも、きっと、うまくいきますよね？」

　わたしが、そう訊ねたのは、おそらく、単なる気休めでいいから、そうだと言ってほしかったのだろう。しかし、乾さんの反応は、わたしの期待とは異なっていた。

「正直に言いますが、私には、何とも言えません。何もかもが、あまりに私の予想を超えているので」

「そうですか……」

　気分が、重く塞がるのを感じる。

「しかし、どんなことがあっても、渡辺さんには、生き延びてもらいたいと思っています。そのためには、ベストを尽くしますから」

「ありがとう。乾さんにそう言ってもらえれば、心強いです。だって、乾さんは、猛者揃いだった鳥獣保護官の、唯一の生き残りなんですから」

　そう言ってしまってから、後悔する。

「生き残りですか」

　乾さんは、かすかに笑ったようだった。

「ごめんなさい。わたし、無神経なことを言って」

「いやいや、そうじゃない。私にはどうも、生き残りというのは、ぴんと来ないんです。死に損ないと言った方が、正しいのかもしれませんね」

「そんなこと」

「いや、そうなんです。私は、家族より深い紐帯で結ばれていた四人の仲間を失いました。私が死ななかったのは、ただの偶然……巡り合わせに過ぎなかったんですよ。今の私は、ただの亡霊のようなものです。仲間の無念を晴らしてやりたい。たぶん、そのためだけに、命を長らえている」

　同じような言葉を、つい最近、誰かから聞いたよ

うな気がする。

「だから、あの悪鬼だけは、どうしても許すことができない」

日頃は冷静な乾さんの裡から、ちらりと激情が見えたようだった。

「だから、渡辺さんも、約束してください。かりに私が、志半ばで倒れることになっても、あなたが、必ずあの悪鬼を止めるということを」

「ええ。約束します」

止める……。わたしたちは、心理的な抑制によって、人間に対し、それ以上強い言葉を使うことが憚られたが、その意味は明白だった。

「それにしても、バケネズミどもに死神などと呼ばれて、怖れられていたのが、今では、この体たらくです。こうなってから、初めて、狩られる者の気持ちがわかったような気がしますよ」

「それは、わたしも……。何だか急に、この世界が、悪夢に呑み込まれてしまったような感じで。何もかもが、本当に、まだ現実に起こったこととは思えないんです。明日の朝、目が覚めたら、心配はいらないよ、何もかも夢だったんだよって……きっと誰かが」

胸が詰まって、それ以上、続けられなかった。

「わかります。私だって、そう願わないわけじゃない。しかし、現実にはまず、明日の朝、生きて目覚めるための算段をしなきゃなりません」

乾さんは、大きな溜め息をついた。

「どうしても、お話ししておかなければならないことがあります。奇狼丸のことで」

「奇狼丸？」

意外な言葉だった。

「有り体に言えば、どこまで信用できるのか、疑問があります」

「そんな……だって、乾さんを助けてくれたのは、奇狼丸でしょう？　それに、今だって、奇狼丸がいなかったら、どうにもならなかったんじゃ……？」

「もちろん、どちらも認めますが」

乾さんは、立ち止まった。

「渡辺さんは、人間の洞察力が最も低下するのは、どんな時だと思いますか？」

わたしは、少し考えた。

「すべてが、うまく行きすぎてるとき？　ほっとして、どうしても気が緩むんじゃないでしょうか？」

「たしかに、そういう場合、いとも簡単に温泉気分に浸ってしまう人間はいます。しかし、慎重な人間なら、かえって、油断しないように兜の緒を引き締めるでしょう」

「じゃあ、どういう場合なんですか？」

「私の経験では、むしろ、状況が最悪だと思えるときなんです。ただでさえ絶望的なのに、実際の事態はさらに悪いのではないかと冷静に疑う人間は、あまり見たことがありません。誰もが、儚い希望を探し求めるあまり、危険な兆候をあっさり見過ごしてしまうんです」

「つまり、今のわたしたちが、そうだっていうこと？」

「状況がここまで厳しいときに、さらに獅子身中の虫がいるとまでは、普通、疑わないでしょう」

「奇狼丸が、裏切り者だって言うの？」

「その可能性も、考慮に入れなければなりません」

「なぜ？　単に、人間じゃないからですか？　それとも、何か、はっきりした根拠があるの？」

「疑わしい理由は、二つあるんですよ」

乾さんは、再びランタンをかざして、暗い洞窟を歩き始めた。わたしも、後に続く。

「まず、奇狼丸が、かつて、東京を訪れたということ自体、おかしな話です。いったい、何をしに来たんでしょう？」

「それは……やっぱり、一度は調べておく必要があると思ったんじゃないですか？　他のコロニーとの競争上も、先にどんなところなのか確認して……何かの利用価値が見つかるかもしれないし」

「そんな曖昧な動機で、兵士の三分の一を失うような過酷な探検を続けるでしょうか？　奇狼丸のような優秀な指揮官なら、最初に犠牲者が出た時点で、計画を中止して引き揚げるだろうと思いますね」

「じゃあ、乾さんは、彼らは、何のために来たと思うんですか？」

「それは、わかりません。しかし、もし何も後ろ暗いところがないのなら、奇狼丸自身、言葉を濁したりせず、きちんと説明するはずだと思いませんか？」

　その点は、まったく気になっていなかったわけではないが、それどころではなかったというのが、正直なところだった。それに、この状況下で万が一、奇狼丸が敵だとしたら、目も当てられないことになる。もはや、どうすればいいのか、見当もつかなかった。

「もしかしたら……」

　言いかけて、わたしは、言葉を切った。どこからか、奇妙な音が響いてきたからである。

　わたしたちは、歩みを止めて、耳を澄ませた。乾さんは、壁に耳を押し当てる。

　低い、地鳴りのような音。おそらく、ずっと上の階層からだ。

「何の音かしら？」

「たぶん、どこかで、洞窟の一部が崩れたんだと思いますね」

　はっとした。

「じゃあ、わたしたちの作った、罠が成功したのかも」

「いや。……少なくとも、それだけじゃない。今の音は、断続的に、四回は聞こえましたから」

　乾さんは、考え込んでいたが、それ以上、口に出して説明することはなかった。

　わたしたちが歩くペースは、自然に速くなった。ふと、思い出して、質問する。

「さっき、奇狼丸を疑う理由は、二つあるってお

しゃってましたよね？　もう一つは、何なんですか？」

「それは、もうすぐわかりますよ」

「もうすぐ？」

「海岸に着いて、地上に出たら、たぶん一目瞭然でしょう」

　乾さんは、謎めいた言い方をした。

　海岸へと引き返す行程は、行きよりは捗ったものの、たっぷり数時間を要した。洞窟は、地上へと通じる巨大な割れ目にぶつかっていた。ニセミノシロモドキが、電子コンパスで現在位置を確認したところ、わたしたちが夢応鯉魚号を隠した割れ目や、地下へと下りた斜面までは、百メートルと離れていないという。

　すでに、体はくたくたに疲れ、悪路を歩き続けた足が痛くてたまらなくなっていたが、休んでいる暇はなかった。呪力で体を支えて、急斜面を登攀しているとき、大地の底から、奇怪な音が響いてきた。まるで無数の妖怪が笑っているような、禍々しくも不気味な声に聞こえる。

　わたしは、ぎょっとして、身体を強張らせた。

「心配いりません。コウモリですよ」

　乾さんの言葉で、安堵する。

　洞窟の奥から、何十万、何百万匹という数のトウキョウオオコウモリが、騒々しく鳴き交わしながら、飛び出してきたのだ。わたしたちの背中や頭をかすめるような近さだが、音響定位のおかげなのか、ぶつかってくる個体はいない。

　オオコウモリの大群は、巨大な一個の生物のように、大地の割れ目いっぱいに広がって上昇していき、黄昏の空に溶け込んでいった。そのとき、ようやく、陽が落ちかけていることに気がついた。早朝から地の底へ潜り込んだために、すっかり時間の感覚が狂っていたようだ。朝一番に兵糧丸を食べたっきり、何も胃袋に収めていなかったことを思い出し

たが、それでも、ほとんど空腹は感じなかった。低血糖で頭がふらふらしても、気を張っているせいか、食欲というものが湧いてこないのだ。

空は、急速に、濃い青から群青色へ変わっていった。わたしたちが、急斜面を登り切ったときには、すでに、とっぷりと日が暮れ、あたりに夜の帳（とばり）が落ちかけていた。

割れ目から頭を出して、周囲と空の様子を窺う。東京中のコウモリの塒（ねぐら）から、真っ黒な蚊柱のようなものが、何百本も立ち上っている。乱舞しているコウモリの総数となると、億単位かもしれない。こうして空が埋め尽くされている間は、ヨタカやフクロウを使った監視は、まず不可能だろう。わたしたちは、身を低くすると、最初に夢応鯉魚号を隠した場所まで走った。

潜行艇は、敵には発見されなかったらしく、無事だった。呪力でそっと持ち上げる。

そのまま、海岸へ移動しようとすると、乾さんに制止された。

「ちょっと、待ってください」

「どうして？　早く行かないと、見つかっちゃうわ」

「憶えてませんか？　夜間に海岸に近づくのは、危険だということを」

わたしは、唇を噛んだ。そのことは、完全に意識から抜け落ちていた。

「迂闊だったわ……」

わたしは、乾さんの背嚢（はいのう）を開けて、ニセミノシロモドキに訊ねた。

「この付近の海岸で、夜間に人やバケネズミを襲う可能性がある、最も危険な生き物は何？」

ニセミノシロモドキは、しばらく沈黙していた。故障してしまったのではないかと思い、心配し始めたとき、ようやく、途切れ途切れの回答が聞こえた。

「……は、大鬼磯女（オオオニイソメ）と考えられます……沙蚕（ゴカイ）の一種

である、鬼磯蚯蚓（オニイソメ）から進化したと思われる……東京湾内および……にのみ棲息しており……二つの眼点と触手冠が、人間を思わせる……強大な二対の大顎によって……最終捕食者であり……夜行性……雌雄がペアとなるシーズン……特に危険」

それから、ニセミノシロモドキは、急に、うんともすんとも言わなくなってしまった。

「大変だわ。壊れちゃったみたい！」

わたしは、仰天して叫んだ。

「電池が切れたんでしょう。太陽に当てて起動させてからは、ずっと暗い場所で酷使してましたから」

「でも、これが動かないと、地下水路の場所もわからないのに……」

「後で、何とか復活させる方法を考えましょう。それより今は、どうやって潜水艇に乗り込むかに集中しないと」

乾さんは、わたしの注意を当面の問題に引き戻した。

「奇狼丸の部下を襲ったのは、どうやら、ゴカイの仲間のようですね」

ゴカイと聞いても、わたしには、ほとんどイメージが湧かなかった。

「海にいる、小さなミミズみたいな生き物？」

「オニイソメの親戚だったら、むしろ、海棲のムカデのような生き物を想像した方がいいと思います。それに、バケネズミの兵士を襲って殺すくらいですから、けっして小さくはないでしょう」

乾さんは、厳しい表情になった。

「奇狼丸が疑わしい第二の理由とは、このことなんです。我々が海岸へ引き返した場合、日没の時刻を過ぎることは、容易に予想できたでしょう。しかし、奇狼丸は、ここで待つはずの危険について、何の警告も発しませんでした。その上、オオオニイソメなる生物に関する情報も、何一つあきらかにしないままです」

「でも、奇狼丸も、海岸にいる怪物に関しては、兵

士が襲われたというだけで、ほとんど、何も知らなかったのかもしれないでしょう？」

　わたしは、あえて奇狼丸を弁護した。

「こっちには、ニセミノシロモドキもいることだし、そのあたりは、何とかなると思ってたのかも」

「……まあ、急な事態で、たしかに、それどころじゃなかったかもしれませんが」

　乾さんも、認めた。

「とにかく、行きましょう。相手がゴカイなら、潜水艇の中にいれば安全なはずです」

　乾さんの指示に従って、わたしは、夢応鯉魚号の中に入り、上部の扉を閉めた。続いて、乾さんが、呪力で潜水艇を持ち上げて、岸から少し離れた場所に、そっと下ろした。

　船底が砂地に着く感触。夢応鯉魚号は、ゆったりと打ち寄せる波に、揺りかごのようなリズムで左右に傾ぐ。

　船首にある小窓から外を覗くが、ちょうど海面の高さで、何も見えなかった。予備知識がなければ、こんな場所に危険が存在するとは、とても思えなかった。

　乾さんが、左手から慎重な足取りで海に入り、徐々に近づいてくるのが見えた。今にも化け物のようなゴカイが襲ってくるのではないかと、固唾を呑んで見守っていたものの、何も起こらない。

　乾さんが、船体を登る音が聞こえた。上部の扉をコンコンと叩く。わたしは、掛け金を外した。扉が開き、乾さんの顔が覗く。

「この時間はまだ、怪物は……」

　そのとき、がりがりという音が響いた。何か巨大な生き物が、すばやく船体をよじ登っていく音。次の瞬間、乾さんの姿が視界から消え失せ、続いて、真っ黒で細長い物体が、入り口の上を流れていく。その姿は、どう見ても、ムカデにそっくりだった。あまりにも速いため、無数の肢がぶれて見えたが、いつ果てるかと思うほど長いので、狙いを付ける時

間はたっぷりあった。

　わたしは、怪物の胴中を発火させた。炎とともに身の毛もよだつような悲鳴が響き渡る。それは、乾さんの上げた声ではないかと錯覚するくらい、人間にそっくりだった。

　胴体の中央部が炎上した怪物は、ずるずると転落し、大きな水音を立てて浅瀬に落ちる。わたしは、大急ぎで梯子を登り、船の上に出た。

　眼下でもがいているのは、世にも恐ろしい化け物だった。無数の肢が蠢く長い胴体が、幾つものうねりを作って、船をぐるりと取り巻いている。体長は、どのくらいあるのか、見当もつかなかった。

　水の中から頭部が現れ、こちらを見た。その輪郭は、驚くほど人間の顔にそっくりだった。触手の塊とも藻ともつかないものが、黒々と髪の毛のように密生しており、わたしを真正面から見据える双眸には、凶暴な怒りが燃えたぎっていた。

　だが、人間を思わせるのはそこまでだった。頭に見えたのは両眼の付いた瘤にすぎず、そのずっと下方にある、胸元のように見える場所が、本当の口なのだろう。象牙のように白い二対の大顎が、獲物を狙うアリジゴクさながらに、大きく左右に広げられている。

　わたしは、悲鳴を上げた。

　怪物は、びっくり箱の人形のように伸び上がって、三メートル以上も高い場所にいるわたしを、ひと咬みにしようとする。

　そのおぞましい大顎が、わたしの頭を挟み込もうとする寸前に、粉々に破裂した。

　頭部を失ったオオニイソメは、狂ったように長い首を振り回し、暴れ回った。さらに、二度、三度と爆発が起きる。そのたびに、少しずつ短くなっていった長虫は、とうとう、痙攣して倒れると、海面に浮いたまま動かなくなった。

「だいじょうぶですか？」

　数メートル離れた浅瀬から、乾さんが叫ぶ。

「はい」

わたしは、そう答えるのが精一杯だった。恐怖に身体が痺れたようになっていたので、間一髪のところで、乾さんが怪物を吹き飛ばしてくれなければ、間違いなく、あの大顎の餌食になっていたことだろう。

「まだ、他にもいるかもしれない。早く、ここを離れましょう！」

乾さんは、すばやく船体の外側の梯子を登ってきた。わたしが、船内に飛び降りるのと同時に、船の中に飛び込むと、扉を閉めて掛け金をかける。

夢応鯉魚号は、ゆっくりと深みに向かって前進し、潜水した。

わたしは、爆発したオオオニイソメの体液を頭から浴びていた。べとべととして気持ちが悪いだけでなく、磯臭さと腐敗臭が混じり合ったような悪臭は耐え難いほどだったが、今は、怪物の棲み処から遠ざかることが先決だった。乾さんの指示に従って、外輪を回すことに集中する。乾さんは、前部にある小窓を覗き、海中に開いているはずの地下河川の河口を探していた。

海中は、すでに真っ暗に近い状態だった。ランタンの光で外を照らしながら、乾さんは、ガラスの反射が目に入らないように、小窓にぴったりと顔を付けていた。万が一、オオオニイソメがもう一匹現れて、小窓越しに大顎で咬みついたらなどと考え始めると、恐ろしくてたまらなくなってくる。

しかし、さいわいにも、わたしの妄想が具現化することはなかった。乾さんは、やがて大きな洞窟の入り口を発見した。海草の揺らぎを見ると、ここが河口であることは間違いないと思われた。

夢応鯉魚号は、洞窟の中へと侵入した。夜の海中よりさらに濃密な、煮詰めたような闇、墨汁を流したような暗黒の中へと。

海中の洞窟を進んでいると、しだいに不安がつの

ってきた。夢応鯉魚号は容積が小さいため、あまり長時間潜っていると、酸欠に陥るかもしれない。利根川を下ったときには、四人が乗っていたのだが、今は二人なので、単純計算では、倍の時間は保つはずである。ランタンの炎を燃やしていることが、酸素の消費にどの程度影響するのかは、よくわからなかったが。

「渡辺さん。さっきは、助かりました」

乾さんが、前を向いたまま、声をかける。

「そんな。命を救われたのは、わたしの方です」

「いや、その前のことですよ。私は、とっさに海に飛び込んで逃れようとしたんですが、あの化け物は異様なくらい動きが速かったんで、すんでのところで喰いつかれそうになりました。渡辺さんが、あいつの胴体を発火させてくれなかったら、完全に真っ二つにされてたでしょうね」

たしかに、ふいを衝かれたとはいえ、呪力を持った人間が二人がかりでなければ、あの怪物を殺すことはできなかった。ここが地獄であることを、あらためて思い知らされる。こんな呪われた場所からは、一刻も早く逃げ出したいと思った。サイコ・バスターなどという忌まわしい武器を入手する必要さえなかったら。

しかし、考えてみると、ここへ悪鬼を誘い込んだことは、上出来だったかもしれない。幸運に恵まれれば、東京に棲息しているおぞましい生き物のどれかが、悪鬼を始末してくれる可能性もあるのだ。

わたしは、ひたすら暗い想像に身を委ねていた。精神の平衡を保つためには、そうしなければならなかった。地獄で生き延びようと思えば、自身が鬼になるしかない。町のこと、両親のこと、愛する人々のことは、考えないようにした。今はとにかく、ここから生きて還ることだけを念じなければならない。

洞窟は、どこまで行っても同じだった。緩やかに流れてくる水だけ。光も、空気もない。

もしかしたら、わたしたちは、このまま窒息して果てる運命なのだろうか。こめかみを汗が伝う。蒸し暑さのためか、緊張によるものなのかは、わからない。ただ、息苦しさが増しているのは、オオニイソメの悪臭のせいばかりではないようだった。

もしかしたら、間違った河口に入ってしまったのだろうか。それは、恐ろしい想像だった。だが、考えてみれば、あのあたりに注いでいる地下河川は一本とは限らないのだ。

この洞窟には、延々と地中を流れる水路だけが続き、やがて、地下水の浸み出している岩壁に突き当たって終わるのかもしれない。

機械的に、夢応鯉魚号の外輪を回しているうちに、しだいに、現実と想像の境目が曖昧になってくる。

ずっと以前に、同じような経験をしたのを思い出す。まだ、子供の頃。夏季キャンプへ行って、バケネズミの戦争に巻き込まれ、地下の隧道を彷徨ったときのことだった。

わたしには、暗い場所で、長時間、単調な刺激だけを与えられていると、意識が退行し、催眠状態へ陥ってしまう癖があるようだった。それは、もしかすると、遠い昔、清浄寺で無瞋上人に与えられた、あの通過儀礼とも関係があるのかもしれない。

このときも、わたしは、徐々にトランス状態に入っていった。身体の感覚が薄れ、ただ、意識だけが、真っ暗で虚ろな空間に浮かんでいるような気分だった。

そして、幻聴が始まった。

「早季。早季」

どこかから、わたしを呼ぶ声が聞こえてきたのだ。

「誰なの……？」

わたしは、つぶやいた。

「早季。僕だよ」

それは、懐かしい声だった。

「あなたは……」

　それは、顔のない少年だった。

「僕の名前は、まだ思い出せないんだね。でも、いいんだよ。僕は、ずっと一緒だから。僕は、君の心の中に住んでるんだ」

「わたしの、心の中に？」

「そうだよ。呪力とは、思いを外の世界に刻み込む能力のことだ。そして、人の魂とは、煎じつめれば、思いにほかならない。僕の魂の一部は、君の心の奥底に刻み込まれているんだよ」

「でも、どうして？　あなたは、いったい、どうなってしまったの？」

「そのことも、忘れてしまった？　でも、かまわないさ。いつか、思い出すから」

「せめて、あなたの名前を教えて」

「君は、僕の名前を知ってるよ。でも、心の中に障害物が置かれているせいで、思い出すことができないだけなんだ」

「渡辺さん？　だいじょうぶですか？」

　わたしが独り言を言っているのを不審に思ったらしく、乾さんが訊ねる。

「ええ……だいじょうぶです」

　わたしの意識は、完全に二つに分裂しており、まるで別人が返答をしているような感じだった。

「早季。早季。何も心配はいらないよ。そのことだけを、言いたかったんだ」

「でも、わたしは、本当に、あの悪鬼を斃せるの？」

「悪鬼？　君は、誤解してるんだよ。あれは、悪鬼なんかじゃ……」

　その声は、途中で、すうっと遠くなっていった。代わりに、別の音が鼓膜を震わせる。

「渡辺さん！　しっかりしてください！　だいじょうぶですか？」

　乾さんが、大声で、わたしに呼びかけている。ゆっくりと現実感覚が戻ってきた。

「ええ。ごめんなさい。ちょっと、うとうとしてたみたいで……」

そう答える自分と、催眠状態にあった自分とが、ゆっくりと重なり合っていく。

「浮上しますよ」

「浮上？」

「流れが、ずっと緩やかになりました。水面らしきものも見える。かなり広いトンネルに出たようです」

夢応鯉魚号は、暗い、ほとんど静止しているかのような流れの中を、浮かび上がった。

乾さんが、慎重に耳を澄ませてから、上にある扉を開ける。

新鮮な空気が流れ込んできて、ほっと一息つく。

「ここは、ずいぶん広い空間ですね。たぶん、大昔に、人工的に作られたものでしょう」

乾さんは、夢応鯉魚号の上に立った。わたしも、梯子を上がる。そこは、岩のドームのような場所だった。

「星？」

上を見上げて、思わず、そうつぶやく。だが、すぐに、そうではないことがわかった。広い天井一面に輝いている緑色の光には、見覚えがあった。

「ツチボタルだわ……」

昔、バケネズミの巣で見たものとは、まったく規模が違う。それは、まるで銀河だった。そして、静かに流れる黒い水が、鏡のように天の光を映し出している。

「わたしも、実物は初めて見ました。あの光で、虫を誘引して捕らえるんですね」

乾さんは、興味深げに天井を見上げていた。

「ここには、競争相手の、あの光る蠅取り紙がいないから、ツチボタルが繁殖できるのか。……なるほど。天井には穴が開いていないようだ。ラセンキリミミズも、ここの天井には穴を開けられないらしい。岩盤が厚すぎるのか、あるいは、硬すぎるの

か。いずれにせよ、だから、蠅取り紙が下りてこれないわけですね」

　そのとき、わたしの脳裏には、まったく別の景色が蘇っていた。

流れのままに川を下っている舟の周りから、同心円状に波紋が広がっていった。さらに今度は、その内側から、いっさいの波が消えていく。

「ああ。すごい……」

まるで、わたしたちを中心に周囲が急速に凍っていったように、水面から凹凸というものがなくなった。今や、水面は磨き上げられたガラスのように滑らかで、満天の星を映し出す漆黒の鏡面だった。

「きれい。まるで、宇宙を旅してるみたい！」

この晩のことは、わたしは終生忘れないだろう。

わたしたちが旅していたのは、地上の川ではない。無数の恒星が輝いている、天の川だった。

「どうしました？」

　凝然と立ちつくすわたしに、乾さんが、声をかける。

「ええ……いいえ、何でもないんです」

　わたしは、ドームの中を見渡すふりをして、顔をそむけた。涙が溢れるのを見られたくなかったからだった。

　完璧な瞬間、完璧な世界……。

　思い出した。あの光景をわたしに見せてくれたのは、まちがいなく、顔のない少年だったのだ。

「もうすぐ、充電が完了します」

　乾さんが、顔を上げて言った。汗だくになっているのを見ても、かなりきつい精神集中だったことが窺える。

「ありがとう……こんなことができるなんて、すごいと思います。わたし一人だったら、本当に、どうしようもなかったですから」

わたしは、心からの賛辞を送った。

「いや、技術的には、それほど難しいことでもないんです。最初は、とにかく、太陽光と同じ波長の光を当てなきゃならんと思ってたんで、四苦八苦しましたが……」

乾さんは、それまで散々格闘してきた、ランタンと松明を見やった。

「こいつが、途中で少しだけ起動して、太陽電池の仕組みを教えてくれましたから、後は簡単でした。受光部に当たった光から発電する方法は全然わかりませんが、要は、電気を喰って貯め込みたいだけですから、こっちの方に、呪力で、直接電力を送り込んでやればいいんです」

乾さんは、太陽電池を外した下にあった、コードの付いた部品を指さした。

そう言われても、まったくイメージが湧かなかった。電気などという抽象的なものを、どう思い浮かべればいいのだろう。覚も、こういう機械関係は得意な方だったから、このあたりは、男女差が大きい部分なのかもしれない。

しばらくすると、ニセミノシロモドキは、元通りに応答するようになった。眠っているように見えた間も、ずっと現在位置は把握していたらしく、わたしの問いかけに対して、すぐに方位を教えてくれる。どうやら、わたしたちは、幸運にも正しい河口に入ったようだった。

岩のドームでは、乾さんに夢応鯉魚号に入っていてもらい、地下河川の水で身体を洗って、新しいTシャツと短パンに着替えた。ようやく、オオオニイソメの悪臭から解放され、今後の見通しが立ったことで、勇気百倍とまではいかなくても、前途に光明が差したような気分になっていた。後は、覚や奇狼丸と合流してから、ニセミノシロモドキを使って、古代のビルの廃墟を見つければいい。

それがどんなに甘い考えだったのかは、すぐに思い知らされることになるのだが。

夢応鯉魚号が、大地の裂け目に辿り着いたときには、すでに、真夜中になっていた。

そこが、覚と奇狼丸の組と別れた地点であるのは、ニセミノシロモドキに確認させるまでもなく、あきらかだった。ところが、待っているはずの彼らの姿が、どこにも見当たらないのだ。

わたしたちは、しばらくの間待ち続けたが、ついに、乾さんが、最終決断を下した。

「行きましょう。これ以上、時間を空費するわけにはいかない」

「でも、覚たちを見捨てるのは……」

わたしは、抵抗を試みたが、自分に理がないのはわかっていた。

「彼らなら、無事でいると信じましょう。悪鬼をおびき寄せてから、どこかに隠れて、身動きが取れなくなっているのかもしれない。……いずれにしても、ここまで来るのに、あまりに時間を使いすぎました。我々には、大切な使命があります。今は、それを第一に考えましょう」

わたしたちは、夢応鯉魚号を発進させた。

地下河川は、河口付近と比べると、やや狭くなっていたが、幅も高さも、ほぼ一定だった。どうやら、そのあたりは、水の浸食によってできた鍾乳洞ではなく、最初から人工のトンネルとして造られたもの……古代の鉄道跡ということらしかった。

ラセンキリミミズの穴がほとんど見当たらないのは、コンクリートの質が高くなっている証拠かもしれない。わたしたちが目指す建物、中央合同庁舎第8号館は、それほど遠くないという予感があった。

ほどなく、わたしたちは、開けた場所に出た。ツチボタルのプラネタリウムがあった。岩のドームほどではないが、かなりの幅と高さがあった。ニセミノシロモドキによれば、それは、『地下鉄の駅』だということだった。

照明もない真夜中の地下で、ランタンの光に照らし出されている壁面は、なまじ人工物の跡を残して

いるだけに、ひどく不気味に映る。

　夢応鯉魚号は、ゆっくりと幅の広い地下河川を遡り、そして、突然、行き止まりに逢着した。前方は壁になっているのだ。

「川がなくなってる……？」

「たぶん、この先は、また水中を行くしかないようですね。潜って調べてみましょう」

　夢応鯉魚号は、これまでの酷使が祟ったらしく、潜水時には、船体がぎしぎしと音を立てるようになっていた。上部の扉を閉めると、ゆっくりと水中に沈んでいく。

　暗い水の中で、船の前部にある覗き窓だけを頼りに、壁の様子を探る。その結果わかったことは、二つだった。たしかに、水が流れ込んでくる割れ目や隙間は、数多くあった。ただし、夢応鯉魚号が通り抜けられるほど大きな穴は、どこにもないのだ。

「困りましたね。ここから先は、潜水艇で進むのは無理なようです」

「呪力で穴を開けたら？」

「水流が一気に噴出してくるかもしれませんし、下手なことをすると、この洞窟全体が、崩壊する可能性もありますからね」

　ここまで来てどうしてと、歯嚙みしたいような思いだった。それから、ふと思いついて、ニセミノシロモドキに訊ねる。

「目指す住所の建物は、もうすぐなんでしょう？」

「誤差はありますが、直線距離では、百メートルほどです。前方にあるA19の出口から階段を上がれば、直接、ビルの中に出られるはずです」

　静かな決意が、胸の奥に込み上げてきた。ここまで来たのだ。最後のたった百メートルの踏破に躊躇う理由はない。

「お前は、水に浸かっても、だいじょうぶなのか？」

　乾さんが、ニセミノシロモドキに訊く。

「TOSHIBA 太陽電池式自走型アーカイブSP-SP

TA-6000は、完全防水仕様で、十三気圧、水深百二十メートルまで活動が可能です」

機械の悲しさで、これから自分がどんな目に遭わされるかまでは想像できないらしく、得意げに答える。

「私が、先に行きましょう。問題がないようだったら、いったん戻ってきますから」

乾さんの言葉に、わたしは、首を振った。

「一緒に行きます。何かあったとき、一人では、どうしようもないでしょう？」

「しかし……」

渋る乾さんを、説き伏せにかかる。

「もし、乾さんに万一のことがあったら、わたし一人では、どうすることもできません。それくらいなら、最初から一蓮托生で行く方が、合理的じゃないですか」

しばらくは、やり取りがあったが、今回は乾さんが折れた。とりあえず、夢応鯉魚号を浮上させ、上部の扉を開けて、外に出る。

水底歩行は、けっして、得意な技ではなかった。今さらながら、全人学級では、もっと真剣に実技に取り組んでいればよかったと思ったが、後の祭りである。

わたしたちは、めいめい、呪力で洞窟内の空気を掻き集め、水中に押し込んで、大きな泡を作った。乾さんが、先に水に入った。せっかく着替えたばかりなのにと、少々恨めしくなったが、わたしも後に続く。まるで氷水のような冷たさだった。

わたしたちは、背中に重しを背負っており、ゆっくりと水底まで下りていった。さっき、水中に入れた大きな泡に、上半身とランタンを入れる。これで、数分間は呼吸が可能なはずだった。

水の底を歩くのは、予想以上に骨が折れた。まず、水の抵抗が大きく、しかも、微速とはいえ前方から水流が来るので、よほど足を踏ん張らないと押し流されそうになるのだ。背中の重しは、身体が浮

き上がるのを防いでくれたが、反面、肩には、ずっしりと負担になった。

しかも、泡の内側から外を見ると、ランタンの光が乱反射するために、ほとんど視界が利かない。周囲の状況を確認するためには、ときどき、泡の外に頭を出さなければならなかった。

その反面、足下は、思ったより平坦だった。周囲の壁も、古代に造られたときの形を、よく残しているようだ。コンクリートという材料は、むしろ、水中にあった方がよく保たれるものなのかもしれない。

空気のないトンネルを数十メートル進んだとき、前方にいる乾さんが、泡の中でランタンの光を左右に振って合図をした。ニセミノシロモドキの言っていた出口が、見つかったようだ。わたしは、泡から顔を出して見た。四角い開口部が見える。きっと、その先には、階段があるのだろう。

もう少しだ。思わず足が速まる。いや、待て。何か様子がおかしい。乾さんは、狂ったように手を回しているではないか。いったい、どうしたというのか。

次の瞬間、わたしの身体は、泡を突き抜けて上昇し、天井にぶち当たった。乾さんが、わたしを呪力で投げ上げたのだ。なぜかと思う間もなく、わたしの足のすぐ下を、猛烈な水流が走り、巨大な影が擦り抜けていく。

オオオニイソメだった。しかも、前のやつより大きい。わたしを狙って目標を見失ったらしく、今度は、乾さんをめがけて一直線に突っ込んでいった。避ける暇もなかったろう。巨大な顎が乾さんの首筋に喰い込み、切断するのと、ほぼ同時だった。ゴカイの化け物は、爆発してばらばらの肉片と化し、付近一帯の水を真っ赤な血で染めた。

ランタンの光が消え、水中は暗黒に閉ざされる。わたしは、パニックに陥りかけながら、死に物狂いで自制した。背中の重しのせいで、再び、ゆっくり

と沈下していくのを感じる。背嚢をかなぐり捨てて、浮かび上がった。さっき投げ上げられたとき、反射的に息を全部吐き出してしまった。このままでは窒息するしかない。手探りで、空気を捜した。

　あった。天井の一角に空気が溜まっている。たぶん、わたしか乾さんが持ってきた泡だろう。頭を突っ込めるほどのスペースはないので、上を向いて口だけを当て、空気を吸い込む。

　余計なことを考えている余裕はなかった。助かる方法だけを模索するのだ。ここまで、百メートル近く歩いてきた。たったこれだけの空気では、とても戻れない。前に進むしか、活路はなかった。

　乾さんの発見した出口は、すぐ、目の前のはずだった。平泳ぎで進もうとして、はっと気がついた。もう一度水底まで潜ると、さっき捨てた背嚢を拾い上げて、背負い直した。中には、ニセミノシロモドキが入っている。

　一歩一歩、水底を進んでいった。何も考えるな。酸素を使わないように、無心に歩け。自分にそう言い聞かせながら、洞窟に棲む盲目の海老のように手探りで前進した。

　だが、さっき見た出口には、なかなか到着しない。もしかして、方向を間違えたのか。ひやりとしたとき、手が壁に触れた。壁に沿って左右を確認する。左手が、空を切った。開口部だ。さっきまでと同じ足取りで、前に出た。暗黒の水中を、一歩。二歩。三歩……。足が、段差にぶつかった。階段だ。慎重に足を上げて、上っていく。息が苦しい。呼吸がしたい。

　考えるな。歩け。一歩ずつ、着実に。

　意識が、遠のいてきた。さっき肺いっぱいに吸い込んだ空気を、もう、吐き出したくてたまらない。

　階段は、永遠の責め苦のように続いていた。もう、だめだ。わたしは、背嚢をその場に置くと、水を掻いて一気に浮上した。堪えきれなくなった空気の泡が、鼻から噴出する。

踊り場のような場所で、水面から顔を出す。ひゅうと、喉が鳴った。黴臭く、よどんだ空気を、思いっきり吸い込む。もしかしたら、有害ガスが含まれているかもしれなかったが、そんなことはかまっていられない。わたしは、何度も咳き込み、涙を流しながら、深呼吸をした。

　助かった。よたよたと階段を上がり、水から出た。わたしは、その場に崩れ落ちると、ひとしきり噎び泣いた。わたしを救うために命を落とした乾さんのことを思い、そして、とうとう地獄の底で独りぼっちになってしまった、自分自身のことを哀れんで。

　木造の建物の中には、千年の風雪に耐えるものも少なくないらしいが、それよりずっと進歩しているべきコンクリート製の構造物は、大半が百年未満で崩壊してしまうというのは、大いなる歴史の矛盾の一つだろう。

　中央合同庁舎第8号館のうち、地階の大半と地上二階までが原形のまま残されたのには、いくつかの要因があったらしい。第一に、税金を湯水のように使って購われたハイテク・コンクリートが、鉄骨や鉄筋が朽ち果てた後も、建物の形を保てたこと。第二に、ビルの地下及び基礎部分が、地下水が湧出した地下河川に没していたこと。第三に、地上部分が、崩壊した他のビルのコンクリートによって覆われたことだった。このため、戦争と破壊が終わった後、地上に残された瓦礫の山が熔解し、石灰分がカルスト大地化して、結果的に、この建物を保護してきたのだった。

　わたしは、左腕にニセミノシロモドキを抱え、右手で火の付いた背嚢をかざして、その明かりだけを頼りに、建物の中を歩いて探索した。ニセミノシロモドキには、光を発する機能もあるようだが、貴重な充電池を、そんなことで空にしてしまうわけにはいかない。乾さん亡き今は、地上に出て陽光に曝す

以外に充電する術はないのだ。

　オオオニイソメの体液と残滓が混ざっている水にもう一度入り、ニセミノシロモドキの入った背嚢を取ってくるのは、死ぬ思いだった。しかし、死を賭(と)してわたしを守ってくれた乾さんのことを思えば、何ほどのことでもない。死の瞬間にも集中力を切らさず、相手をしっかりと道連れにしたのは、死神と呼ばれた鳥獣保護官としての矜持だったのだろう。そのおかげで、わたしは、今も生きて呼吸をしていられる。もし、オオオニイソメが生きていて、視界ゼロの暗い水中で相対しなければならなかったとしたら、わたしは、単なる生き餌でしかなかったはずだ。

　だとすれば、わたしもまた、乾さんとの約束を違えるわけにはいかない。どんなことをしても、悪鬼を止めるという約束を。

　わたしは、ゆっくりと深呼吸をした。

　目の前にあるのは、何世紀にもわたって冷たい暗黒に閉ざされていた建物だった。そこには何か、人間の根源的な恐怖を刺激するものがよどんでいるような気がした。

　かつては、それぞれの部屋を快適に設えていたはずの内装は、悉(ことごと)く変質し、タール状の粘液や、絡まり合った埃の塊のようなものに変わっていた。驚いたことに、地上から伸びてきたと思われる何かの木の根っこが、フロア一面に蔓延(はびこ)っている。東京の地上はすべて砂漠のような不毛の地だと思っていたのだが、そんな場所でも逞しく生き抜いている植物はいるらしい。ラセンキリミミズも穴を穿てなかったコンクリートの箱に、どうやって根っこが侵入したのかと思ったが、辿っていくと、ぼろぼろの鉄の扉が付いた大きな縦坑に行き着いた。ニセミノシロモドキによれば、エレベーターと呼ばれていた、各階を移動するための機械仕掛けのための穴なのだという。

　太い根を何本か切断して縛り、即席の松明を作っ

た。背嚢が燃え尽きかけていたので、ありがたい贈り物だった。水分を含んだ根は、絶えず呪力で燃焼を促してやらなければ、炎が消えてしまいそうだったが、水蒸気の混じった白い煙を上げて、ゆっくりと燃えるのは好都合だった。

　それにしても、こんな文字通りの廃墟に、わたしが捜している物が存在するのだろうか。見れば見るほど、虚しい希望のように思えてくる。

　母の手紙にあった住所には、地番と建物の名前の後に、二つの部屋番号も記されていたのだが、大半のドアでは、金属部分の腐食、木質部の腐朽が進んでいて、どれ一つとして原形を留めていない。

　最初の階では、まったく収穫がなかった。白骨化した二つの遺体を収穫と呼べるなら、話は別だが。遺体にまとわりついていた襤褸布から判断すると、白衣のようなものを着ていたらしい。大きさからすると、一体は男性、もう一体は女性のようだった。どちらも、あちこちが破損していたが、死因が何なのかは見当もつかなかった。

　階段で、一つ上のフロアに上がる。ここには、それまで調べたものとは作りの違う部屋があった。腐食しない金属で作られているらしい扉が残っているのだ。表面の文字は薄く掠れていたが、はっきりと読み取れる図柄があった。こんな記号である。

「これ、どういう意味なの？」

　ニセミノシロモドキに訊ねる。

「バイオハザードマークです。生物学的危険指標のことで、この部屋の中には、病原性のある微生物などが存在していたことを意味しています」

　つまり、サイコ・バスターなどがあっても、おかしくないということだろう。

　わたしは、興奮を抑えて、金属製のドアを開けよ

うとした。引き戸になっているようだが、鍵がかかったままなのか、それとも、どこかが錆びて癒着してしまったのか、びくともしない。

わたしは、一歩下がると、呪力でドアをこじ開けた。かすかな軋みから、悲しげな獣の咆吼のような異音を発して、金属のドアは屈した。引きちぎられたドアを脇に放り出して、わたしは、部屋に入っていった。

そこは、実験室のような場所だった。どこから入ってくるのか、足下には泥水が溜まり、ガラスの破片が散乱している。壁際に、保管庫のようなものがあった。金属製の扉には、先ほどのバイオハザードマークが描かれている。あるとすれば、たぶん、この中だ。

逃げられないように木の根で縛ったニセミノシロモドキを、床に置く。扉に手をかけたとき、心臓の鼓動が高鳴るのを感じた。ここまで辿り着くために、どれほど大きな犠牲を払ったことだろう。ついに、悪魔の武器を手に入れることができるのか。

扉には鍵はかかっておらず、取っ手を引っ張ると、なんなく開いた。

中は、空だった。

期待に息を詰め、膨らんでいた胸から、虚しく溜め息を吐き出す。

どうやら、足下に散乱しているガラスの欠片は、ここに入っていた容器のなれの果てらしい。ニセミノシロモドキに訊ねるまでもなく、かりにサイコ・バスターが入っていたとしても、泥水の中で死滅したのはあきらかだった。

念のため、部屋の中を、もう一度くまなく調べたが、何も見つからなかった。

ニセミノシロモドキを抱えて階段を上がり、上のフロアを探索する。やはり、何も見つからない。千年以上前の建物の廃墟から、何かが見つかると期待する方が、どうかしているのだろう。

順番に、フロアを上がっては、すべての部屋をチ

エックしていく。どのくらいの時間が経過したのか、わからなくなっていた。期待はかなり薄らいでいたが、たとえ何の成果も上がらなかったとしても、最後までやり遂げるしかない。そうしなければ、死んでいった人たちに対して、申し訳が立たないと思った。

そして、とうとう、地上の階に出た。

外側は完全に土砂で埋め尽くされているとはいえ、どの部屋にも大きな窓があるのが、その証拠だった。土砂の一部は、部屋の中にまで侵入してきていた。さらに、流れ込んできた雨水が、あちこちに水溜まりや池を作っている。さきほどの実験室の床に溜まっていた水も、たぶん、元は雨水なのだろう。

その部屋は、フロアのちょうど中程にあった。他の部屋と、さほど違う点はなかったが、部屋の奥にある天然木らしい机は、今までに見たものの倍以上の大きさだった。この部屋の主は、かなりの高位高官だったのかもしれない。

見渡したところ、ただの執務室であり、危険な病原菌を保管するような部屋ではない。そう思って諦めかけたとき、松明の光に、壁の一部にある四角い模様のようなものが照らし出された。

何だろうと思って、近づいてみる。コンクリート製の壁の一部に、四十センチ四方くらいの金属の部分が露出していた。扉のようだ。表面には、回転式のつまみのようなものが付いている。

「これは、何かしら？」

大して期待もせずに、ニセミノシロモドキに訊ねる。

「金庫です。財貨を安全に収納するための容器で、ここにあるものは、隠し金庫だったと思われます。年月の経過により、扉を隠していた絵画や壁紙などが消失したものと推察されます」

それ以上の説明は、不要だった。わたしは、呪力により、頑丈な金属の扉を、無理やりこじ開けにか

かった。さきほどの、保管庫のあった部屋の扉とは、厚さも強度も段違いで、なかなか破壊することができない。そのうち、金庫を埋め込んであるコンクリートに罅（ひび）が入り、壁が崩壊しそうになる。

今度は、イメージを変えて、扉を刳（く）り抜いていく。これまでに、わたしが出会ったことのない種類の金属で、呪力に対しても頑強に抵抗するのは、驚嘆に値した。

やがて、いびつな円形に切り取られた扉が、騒々しい音を立てて床に落下する。厚さは、十センチ以上もあった。

わたしは、木の根の松明をかざして、穴の中を覗き込んだ。

3

何かがある。金属製の筆箱のような容器。それに、封筒に入った分厚い手紙のようなものだ。

まず、容器を取り出してみた。表面には、奇妙なマークが描かれている。赤い円の中で、頭でっかちの宇宙人のような生き物が、両手を広げている図柄だった。斜めの線に阻まれ、円から出られない様を表しているらしい。

容器の開け方がわからずに、しばらく試行錯誤していたが、偶然、小さなポッチに指が触れると、蓋が外れた。

中にあったのは、まったく予想外なものだった。十字架である。長さ七、八センチくらいで、年月を経たせいで曇ってはいたが、元々はガラスのような透明な素材でできていたらしい。しかし、何とも異様だったのは、その形だった。

中央部に大きな円環が嵌っており、十字の三つの先端が、大きく二つに割れているのだ。それは、山羊か悪魔の角を連想させ、妙に不吉な印象を与える。

ニセミノシロモドキに訊くと、最も一般的な円の付いた十字架は、ケルト十字らしい。キリスト教のシンボルである十字架に、ケルト民族の信仰である輪廻転生を意味する円環を組み合わせたものだ。しかし、この十字架の意匠は、むしろ、古代日本でキリスト教が禁止されていた時代に、隠れキリシタンたちが作った、異体十字架や、久留子（くるす）と呼ばれる家紋に似ているということだった。

わたしは、十字架をケースに戻すと、封筒を開けてみた。中には、数枚の紙が折りたたまれて入っている。広げてみて、当惑した。紙は、かなり変色しているものの酸化はしておらず、ぎっしりと書かれた細かな文字も鮮明に見えた。にもかかわらず、読むことができない。日本語ではなかったからだ。

ニセミノシロモドキに文書を走査（スキャン）させると、即座に翻訳を開始する。

「悪魔払い（エクソシズム）宣言。これは、邪悪な悪魔の力に取り憑かれた人間を浄化し、真の人間性の回復をもたらすための決意表明であり、究極の悪に対する聖戦の宣戦布告文である……」

そこに書かれていた内容とは、恐怖に取り憑かれて偏狭な信仰に救いを求めた人間が、どこまで狂気に走れるかという実例だった。

「……悪魔の巧妙さは、贈り物に対価を求めないことである。人類に対し、何の見返りも要求せずに、念動力という恐るべき能力を付与したのは、千年先が見通せるという横長の虹彩を持った山羊の目で、人類の末路を正しく予知したからにほかならない。力は腐敗を招き、絶対的な力は絶対的な腐敗をもたらす。これは、政治的権力に限った話ではない。身の丈に合わない過大な力は、早晩必ずや、その持ち主を破滅させ、周囲にも多大な惨禍をもたらすの

だ」

柔らかな女性の声で、淡々と翻訳される文章は、肌に粟を生じさせたが、途中で止めるわけにはいかなかった。この文章や十字架が、サイコ・バスターに関係があるのかどうか、確認しなくてはならない。

「……まさしく、この力自体が悪なのであり、念動力が宿っている人間は即、悪魔、魔女とみなされなければならない。その意味で、六世紀近く前に記された先駆的な名著である『魔女の鉄槌』の汚名は、今こそ返上されなくてはならない。魔女狩りは、巷間喧伝されたがごとき集団的狂気の産物ではなかった。科学が未発達な時代においても、直感的に、念動力の存在と危険性を正しく認識した人々は存在したのであり、そうした先見者たちによるサイコの悪しき種子の排除は、不幸な巻き添えや濡れ衣があったにしても、全人類的観点からは、正当な行為であったと言えるだろう」

二人の修道士（悪魔に取り憑かれていたのは、どう考えても彼らの方だと思われる）によって書かれ、魔女狩りの教科書ともなった『魔女の鉄槌』という本については、後に、わたしも、その概要を知ることができた。およそ、今までに出版された書物の中で、真に『訞』や『殃』といった第四分類の烙印を押して、焚書扱いにするのがふさわしい本があるとするなら、この本を措いてないだろう。

その後は、延々と、呪力を獲得した人間に対する聞くに耐えないような呪詛が続いたが、ついに、核心部分に入った。

「……したがって、悪魔の力に支配された人間に対しては、殺害、浄化して、それ以上の罪を重ねないようにする以外の選択肢はない。そのための、きわめて有効な手段の一つが、強毒性炭疽菌、通称サイコ・バスターである。これこそ、まさに神の祝福と言えるだろう。ハレルヤ。神は、どんな時にも、我らに必要な糧をお与えになるのだ」

ここから、ひとしきり、宗教的な熱狂に満ちた文章が続いてから、ようやく、使用法についての説明があった。

「聖粉は、かつて異教徒が政治目的のテロに利用したがごとく、封筒に入れて送ったり、ターゲットに直接噴霧することも可能である。だが、我らが悪魔払いの聖戦においては、聖ベネディクトのメダイのような聖具を用いることこそが、ふさわしい」

聖ベネディクトとは、古代のキリスト教の聖人であり、その姿や十字架が彫り込まれたメダイ（メダル）は、疫病退治や悪魔払いに効能があるとされたらしい。

「これは、正義を行い、罪をあがなうための十字架である。悪魔の足下に叩きつければ、不活性ガスとともに封入された聖粉が飛散する。それは、たとえ千年期を経ても復活し、極微量であっても、吸い込んだ悪魔の邪悪な死命を制すであろう。ハレルヤ……」

わたしは、ニセミノシロモドキの翻訳を、目をつぶって、最後まで聞いた。それから、もう一度、金属の容器から十字架を取り出す。

この中に、千年もの間、致死的な細菌が封じ込められてきたのか。そう思っただけで、手が震えそうになる。そのとき、十字架を見る角度が少し斜めになって、ようやく気がついた。

これは、十字架などではない。一見、十字架を模しているようだが、実は、先ほど見たばかりのバイオハザードマークを象ったものなのだ。

わざわざこんな形にする、実用的な理由があったとは、とても思えなかった。いったい、どんな歪んだ精神が、これをユーモアだと感じたのだろう。

慎重の上にも慎重に、十字架を、ケースの中に収める。

わたしは、このコンクリートの墳墓から、悪魔を解き放とうとしているのかもしれない。しかし、この狂気と憎悪の種子こそが、今や、わたしたちに残

された唯一と言ってもいい希望なのである。

　立ち上がろうとしたが、疲労で足下がふらつく。少しだけ、休憩した方がいいだろう。それから、できれば、覚と奇狼丸を見つけて合流したかったが、それが叶わない場合は、独力で悪鬼を斃さなければならない。どちらにしても、まず、ここを出なくては。

　ここへ来るのに通った水の中へ、もう一度、入れるだろうか。夢応鯉魚号に辿り着くことさえできれば……。一人で操縦するのは大変だが、何とかやれるだろう。そうすれば、もう一度、合流地点に戻るのも難しくないはずだ。

　いや、だめだ。あそこに潜るのは、生理的に抵抗があるだけでなく、危険が大きすぎる。もし、オオオニイソメがもう一匹いたら、今度こそ助からない。わたしたちを追ってきたのは、ペアの片割れだったのかもしれないが、乾さんがばらばらにした個体の血の臭いを遠くから嗅ぎつけて、別の個体がやって来る可能性もある。

　しかし、あそこを通れないとなると、どうすればいいのだろう。この建物に穴を開けて、地上に出ることはできるだろう。だが、地上は、昼夜を問わず、敵の監視下にあるはずだ。鳥の目を誤魔化すのは、至難の業だろう。いったん発見されたら最後、もう逃げ切れないかもしれない……。

　はっと、気がついた。コウモリだ。夢応鯉魚号を取りに海岸へ出たときと、同じことをすればいい。コウモリが洞窟に出入りするために、東京上空を埋め尽くす時間帯だけは、空からの監視は不可能になる。

　今、いったい何時なのだろう。

「コウモリが洞窟に戻ってくるのは、何時間後？」

「昨日と同じ時間だと仮定すると、約一時間半後です」

　ニセミノシロモドキの答えに、溜め息をつきたくなった。

「その時間になったら、起こしてくれる？」

「かしこまりました」

わたしは、ニセミノシロモドキを縛っている木の根を腕に何重にも巻き付けると、床の上で膝を抱えて横になった。そして、ほどなく、底なし沼のような眠りに落ちていった。

耳障りな信号音が鳴り響いていた。意識は、急速に覚醒へと向かう。

「午前四時五分です。日の出まで、あと三十一分。コウモリが洞窟へと戻ってくる時刻と思われます」

嘘でしょう。まったく眠った気がしなかった。ニセミノシロモドキがそう言うのだから、間違いないはずだが。

わたしは、身を起こすと、支度を調えた。とはいっても、荷物はほとんどない。背嚢は、すでに燃やしてしまったし、本当に必要なのは、ニセミノシロモドキとサイコ・バスターだけである。

もしかしたら、生きて目覚めるのは、これで最後なのかもしれない。不吉な想像が脳裏をかすめたが、首を振って追い払う。そんなことを考えても、何の益もない。

今はただ、なすべきことをするだけだ。

わたしは、呪われた部屋を後にした。千年前、暗い妄想に取り憑かれていた部屋の主が、今も部屋の隅に佇み、じっと、わたしの後ろ姿を見送っているような気がした。

階段を上り、地上二階へと向かう。一階とは異なり、半分以上が押し潰されて、土砂に埋まっているようだった。

できるだけ、地上に近いと思われる場所を探した。まだ、外も真っ暗なので、見つけるのは容易ではなかったが、かすかに、風を感じる地点があった。建物の外壁に小さなひび割れがあって、外へ通じているらしい。

耳を澄ませると、無数のコウモリが鳴き交わす声

が聞こえてきた。最初のコウモリが、戻ってきたようだ。今のうちに外へ出て、身を隠す場所を見つけなくてはならない。

なるべく音を立てないようにして、コンクリートを少しずつ砕いて割れ目を広げていき、土砂を取りのけた。

二、三分で、何とか通り抜けられる大きさの隙間が生まれた。頭を低くして、そっと這い出ていく。

かすかな星明かりに照らされているのは、地下に負けないほど荒涼とした光景だった。

太古のビル群の廃墟は、せいぜい、地上二、三階までしか残っておらず、鉄骨や鉄筋は朽ち果てて、かろうじて超耐久性のコンクリートによって形を保っている。

砕けた建物は、風化して灰色の砂礫と化し、さらにその一部が溶けて、カルスト台地のような景観を創り出している。あちこちに、黒っぽい川のような縞模様が残っているのは、ニセミノシロモドキによれば、長年紫外線に曝されて粘り気を失ったアスファルト舗装のなれの果てらしい。

植物は、雑草を除けば、非常に乏しかった。ビルの地下にまであれだけ根を張っていた木々は、どれも丈が低く、冬季に関東平野を吹き荒れる風をまともに受けるためなのか、ひどく拗くれている。地上は水はけがよすぎるために、乾燥した不毛の大地となっており、水を求めて地下深くまで根を伸ばした木々は、それで成長の余力を使い果たしてしまったらしかった。

頭上の空は、飛び回る無数のコウモリによって覆われていた。昨日の様子だと、全部のコウモリが巣穴に戻るまでには、一、二時間はかかるだろう。その前に、覚たちと別れた地点、あの断崖のような割れ目まで行かなくてはならない。

建物の陰から陰へと伝い歩きしながら、ニセミノシロモドキの指し示す方角へ急ぐ。

敵の目は、何も空ばかりとは限らない。地上にい

る部隊が、今も、この近くを哨戒している可能性もある。

　暁闇の荒れ地を小走りに進むうちに、奇妙に意識が変容していくような気がした。

　何だろう、この感じは。既視感（デジャ・ヴ）というのだろうか。こんな場所に来たのは、間違いなく、生まれて初めてだった。にもかかわらず、ずっと以前に同じ光景を見ていたという感覚に囚われたのだ。

まだ、夢を見ているのか。いや、そんなはずはない。意識も清明で、思考もはっきりしている。それなのに、なぜ……。

　わたしは、周囲に疎らに生えている木々を見渡した。

　まわりの木々の変形が顕著になり始めた。まるで、一年中強風に吹かれている地域のように、ほとんどの木が同一方向に捻じ曲げられているのだ。

　少し前から、漠然とした不安や不快感に襲われ始めていた。

　帰りたい。今すぐに、ここから逃げ出したい。それは本能の声だった。たとえ一秒でも、この場所には留まりたくないと思った。

　だが、■のことを思って、必死に自分を奮い立たせる。今、引き返すわけにはいかない。彼を救えるのは、自分しかいないのだ。

　とにかく、前に進んだ。奇怪に拗くれた植物も、よく見ると道標の役を果たしている。全体を俯瞰すると、森は、渦巻き状に変形しているような気がした。だとすれば、■は、その中心部分にいるのではないか。

　木々は、無数の触手を持つタコの化け物のようなシルエットに変わっている。わたしは、絶えず蠕動（ぜんどう）し続ける、その触手に差し招かれるようにして、歩を進めた。

　いったいこれは、何だろう。わたしは、目を瞬い

た。現在の風景と二重写しになって、別の映像が見えるのだ。

　心身の疲労が昂じて、幻覚を見ているのだろうか。わたしは、そばにあった建物の外壁に手をついて、身体を支えた。さしもの超耐久性のコンクリートも、長年の浸食と風化により、表面に奇怪なうねりと模様が浮き出していた。

　目の前で、堅いはずの土壁が、ぐにゃぐにゃに歪み、震え始めた。気泡のようなものが、次々に現れては消える。見ているだけで、発狂しそうな光景だった。再び、激しい頭痛が起き始める。

　はっとして、手を離す。わたしは、恐怖に喘いだ。ありえない。固いコンクリートが、そんなふうになるなんて、現実には、とても考えられなかった。

　だが、これは、ただの幻視ではない。

　わたしは、かつて、この光景を実際に見たのだ。それは、心の内側から沸き上がってきた確信だった。

　コウモリの騒ぎが、一段と大きくなった。光だ。ついに、夜が明けたのである。

　見上げると、何千万匹、何億匹というコウモリが縦に連なり、巨大な一頭の竜のように払暁の空をうねっていた。

　何本ものコウモリの帯が、空を分割している。それは、まるで……。

　朝焼けの光が、真っ黒なコウモリの帯を、一瞬、薔薇色に染め上げた。

　すると、突然、舞台に照明を当てたように周囲が明るくなった。見上げると、空一面に、極光が現れていた。薄い緑色の光が、巨大なカーテンを思わせるドレープを作っており、その上に、赤やピンク、紫の光が滲んでいる。

熱い涙が、頬を伝い流れるのを感じる。

記憶は、消去されてしまったわけではなかった。どれほど巧妙な手段を取ったとしても、不都合な部分を全部消し去ることなど、できるはずがない。それはただ、記憶の淵に沈められていただけだったのだ。

そして今、すべての記憶は、鮮明によみがえった。それはまるで、封印されていた記憶そのものが、自ら枷（かせ）を外し、閉ざされていた扉を開いたかのようだった。

あの晩、わたしは、たしかに、暗い森を通って彼に会いに行った。

顔のない少年に。そうだ、彼の名前は……。

わたしは、驚愕に目を見開いた。

崩壊したコンクリートの荒野に、突然、彼の姿が現れたのだ。それも、ほんの数十メートル先に。

「瞬！」

わたしは、叫んだ。

瞬は、身を翻すと、走り去ろうとする。

「待って！」

わたしは、懸命に後を追った。

瞬の後ろ姿は、荒野の建物の残骸の間を見え隠れしながら、飛ぶように走っていく。

もはや、敵に見つかるのではないかという心配は、どこかへ消し飛んでしまっていた。わたしは、ただ夢中で走り続けた。

瞬の姿は、建物を回って見えなくなった。わたしは、無我夢中で追いかけ、彼に続いて建物の角を回る。そして、その場で立ち止まった。

彼は、ほんの十数メートルほどしか離れていない場所に佇んでいた。

「瞬！　どうして……？」

何を訊きたかったのかは、自分でもわからない。

瞬は、ゆっくりと顔を上げて微笑んだ。懐かしい笑顔に、胸が熱くなる。

そのとき、朝日が、瓦礫の山を越えて射し込んできた。刹那、瞬の姿は眩しい光に包まれる。

そして、信じられないほど唐突に、魔法の時間は終わりを告げた。わたしは、ただ茫然と、その場に立ちつくすしかなかった。

「だいじょうぶですか？」

そう訊ねたのは、瞬ではなかった。いや、それどころか、人間ですらない。

「どうやって、ここがわかったんですか？　乾さんは、どうされました？」

奇狼丸は、かなり驚いた様子で、矢継ぎ早に質問をしてくる。

「わたしは……瞬……ううん、覚は、どうしたの？」

わたしは、ようやく、強張った舌を動かすことができた。

「近くの洞窟におられます。少し、怪我をされているので。それで、私がお二人を捜しに行くところだったのですが」

「怪我？　どんな？」

「いや、大したことはありません。命に別状はありませんので」

奇狼丸の基準では、大したことがないのかもしれないが、急に心配になってくる。

「覚に会わせて。……どうして、怪我をしたの？」

「悪鬼に追われたときに、砕け散った岩の破片が当たったのです」

奇狼丸は、先に立って、わたしを案内しながら言う。

「コウモリの群れが、だいぶ疎らになってきました。急ぎましょう」

わたしたちは、地面にぽっかりと開いた穴の中へ入っていく。コンクリートが、雨水で浸食されてできたものらしい。それは、偶然にも、カルスト台地で見られるドリーネという地形にそっくりだった。

「早季！」

覚が、叫んだ。

「よく、無事だったね！　心配してたんだ」

そう言う覚の方が、どう見ても深刻な有様だった。チスイナメクジに食害された左肩も癒えていないのに、右腕に巻き付けた包帯には、真っ赤な血が滲んでいる。

「乾さんは？」

わたしは、ゆっくりと首を振った。覚の表情が、一変した。静かに頭を垂れて、祈りの文句をつぶやく。

「そうか……きっと、立派な最期だったんだろうな」

「ええ。地下の川で、ゴカイの化け物に襲われたの。乾さん一人だったら、身を守ることはできたと思う。でも、わたしを守ろうとして……」

それ以上は、言葉が続かなかった。

「早季。乾さんの犠牲は、絶対に無駄にはしないよ」

「もちろんよ。……見つけたの。これも、乾さんが、わたしを救ってくれたお陰だわ」

「見つけたって？　まさか」

「これよ」

わたしは、懐に入れて木の根で縛っていた金属製の容器を、覚に手渡した。腕の痛みを我慢しているらしく、顔をしかめながら、覚は、木の根を解いて容器を開けた。中に入っていた十字架をしげしげと眺める。

「気をつけて！　うっかり割ってしまったら、全員、一巻の終わりだから。使うときは、相手の足下に叩きつければいいみたい」

わたしは、発見したときの状況を、かいつまんで説明した。

「わかった」

覚は、そう言うと、十字架を手に取り、付いている鎖を首にかけた。

「どうするつもり？」

「容器に入れたままにしてたら、悪鬼と突然出くわしたときに、間に合わないだろう？　僕が、首からかけてるよ」

「だめよ。覚は、腕に怪我をしてるのに。わたしが、持ってるわ」

「僕だって、こいつを叩きつけるか、破裂させるくらいのことならできるよ」

　覚は、涼しい顔で言う。いざというときは、自分が犠牲になるつもりなのだろう。

「それなら、わたしだって」

「わかった。じゃあ、交替で持つことにしよう。まず最初は、僕だ」

　覚は、そう言って譲らない。わたしは、それ以上言い争うことはしなかった。どのみち、狭い洞窟の中で、サイコ・バスターの詰まった十字架を破裂させたら、周囲にいる人間は全員、感染を免れないだろう。

「いつまでも同じ場所に留まっているのは、危険です。そろそろ移動を開始しましょう」

　それまで黙って聞いていた奇狼丸が、口を挟んだ。

「でも、これから、どうするの？」

「当初の目的であるサイコ・バスターの入手は、果たせました。いったん引き揚げるのも一案だとは思います。しかし、逆に、今は千載一遇の好機かもしれません。我々の究極の戦略目標である悪鬼が、少数の護衛しか付けずに、すぐそばにいるのです」

　奇狼丸は、耳まで裂けた大きな口で、にやりと笑った。

「有利な点は、まだあります。第一に、敵は、あくまでも我々を狩るつもりでしょうが、狩りに夢中になっている者ほど、自分が獲物になることに、寸前まで気づかないものです。しかも、やつらは、我々がサイコ・バスターを入手したことは知りません。この機を逃す手はないでしょう」

　わたしは、思わず覚の目を見る。覚は、静かにわ

たしの目を見つめ返して、うなずいた。チャンスは今しかないということは、二人とも、よくわかっていた。たとえ、我々全員が命を落とすことになろうと、ここで、悪鬼を止めなくてはならないということも。

奇狼丸は、僧服を脱ぎ捨てると、身体を地下水で丹念に洗った。さらに、全身くまなく、泥とコウモリの糞を混ぜたものを塗りたくる。

「……すごく嫌な臭い」

わたしは、鼻をつまんだ。バケネズミは、人間よりはるかに嗅覚が鋭敏なはずなのに、奇狼丸は、よく我慢できるものだと思う。

「同感ですが、贅沢を言っている場合ではありません。私の臭跡は、完全に消さなくてはなりませんから」

奇狼丸は、まるで化粧をするように、顔にも念入りに糞泥を塗り込んだ。

「やつらは、お二方の臭跡には目の色を変えて追ってくるんですが、私の方は、なぜか、まったく食指が動かないようなのです」

「どうして？」

「まあ、元々、あまり興味がないんでしょうな。お二方さえ始末すれば、私など、放っておいても大した脅威にはならないと、高をくくっているのかもしれません」

「奇狼丸は、敵に大打撃を与えたからね。むしろ、向こうは敬遠したいのかもしれないよ」

覚も、悪臭には閉口しているらしく、笑顔だったが鼻の付け根に皺が寄っている。

「そんなに、あいつらを、大勢やっつけたの？」

「ああ。八面六臂の大活躍だったよ。敵の兵士を、七匹は殺したしね」

「そんなに？　どうやって？」

「最初は、こちらの臭跡で、相手をおびき寄せたんだ。終点は、あのクロゴケダニのいる洞窟だけど、

ひどいことになってた。さすがの悪鬼と野狐丸も、ほうほうの体で退散するしかなかったんだ。でも、それで満足しないのが、奇狼丸の恐ろしさだな。今度は、別のクロゴケダニの群れを誘導して、やつらの野営地に突入させたんだ。やつらは、兵士を失い、やはり尻尾を巻いて逃げ出すしかなかった。だけど、その後がたいへんだったよ。餌にありつけなかったダニの大群が、方向転換して、こちらを追いかけてきたんだ。それでわかったんだけど、あのダニは、結露している壁面は苦手らしいのに、水の上は平気で渡るんだ」

「本当？」

「かなりの量の油を分泌しながら、群れ全体がアオコみたいな塊になって水面に浮かび、漂いながら渡るんだよ。……まあ、密集した状態だと、燃やすのも簡単だったけどね」

　覚は、得々として手柄話を続けたが、わたしの中では、疑惑が再燃していた。どうして、奇狼丸だけで、そこまでの戦果が挙げられたのだろうか。

「敵の兵士を七匹殺したっていうのは、たしかなの？」

「ああ。でも、それは、こちらが目で確認した数だから、実際には、もっと死んでるかもしれない」

「でも、最初に、敵の数は、全部で七匹だって言ってなかった？」

「敵は、地下部隊が損害を蒙るたびに、地上部隊から増援を受けているのです。ただし、地上でもそれほど余裕があるわけではないようで、現状では、敵の地下部隊は五匹程度と思われます」

　妖怪和尚から一転して、泥人形（ゴーレム）のような姿に変身した奇狼丸が、説明した。

「ねえ。あなたは、どうして、オオオニイソメのことを教えてくれなかったの？」

　わたしの質問に、奇狼丸は、首を傾げた。

「それは、いったい何ですか？」

「海岸にいた、ゴカイの化け物よ。そいつのせい

で、乾さんは……」

　奇狼丸は、乾いた泥に覆われた顔で、溜め息をついた。

「夜間、海岸が危険になるということは、今さら念を押すまでもないと思っていました。たいへん失礼ですが、あなただけならともかく、死神と呼ばれていた鳥獣保護官がついていたのですから。それに、化け物の正体については、私は、まったく知りませんでした。たしかに、私は、多くの部下を失いましたが、どんな生き物の仕業だったのかは、ついぞ見る機会がありませんでしたので」

　覚が、わたしを宥めるように肩に手を置き、それ以上の追及は沙汰止みになった。

「おや……こいつは、まずい」

　奇狼丸が、上を向いて、鼻をひくつかせた。

「地上では、雨が降り始めたようです」

「雨が降ると、どうしてまずいんだ？」

　覚が、訊く。

「普通なら、逃げる者にとっては、恵みの雨です。洞窟内にも地下水が流れ込み、臭いが消されてしまいますから。しかし、今回に限っては、臭跡が消えると、やつらを誘導するのが困難になります」

　そのときになって、ようやく、わたしたちの耳にも、かすかな水音が聞こえてきた。

「この穴が、水で溢れることはありませんから、ご安心ください。さらに地下へと向かう排水孔が、蜂の巣のように無数に開いていますから……」

　天井近くの孔から、幾筋もの水が流れ落ちてきた。洞窟全体に、様々な水音が反響し、交錯する。滝のような響き。水琴窟（すいきんくつ）を思わせる滴り。川のせせらぎのような音。

「急ぎましょう。短期決戦に如（し）くはなさそうです」

　わたしたちは、奇狼丸の案内で、東京洞窟の最深奥部へと歩を進めた。血管にたとえるなら、大動脈のような太い穴を巡り、しだいに、毛細血管のような隘路（あいろ）に入り込んでいく。

地下生活に適応したバケネズミらしく、奇狼丸は、一瞬たりとも迷いを見せず、迷路のような分岐を進んでいく。

わたしは、覚の息がひどく荒くなっているのが気になった。やはり、怪我の影響があるのかもしれない。

最初のうちは、ひたすら地の底を目指しているのかと思ったが、途中から登りに転じた。岩肌には、流れ落ちる水の薄膜が張っており、足を滑らせないよう、細心の注意を払わなければならなかった。

何度目かの急斜面を上ると、急に周囲が開けてきた。かなり地上に近いところまで出たのは、雨の音が直接響くようになったのでわかる。光も、うっすらとだが射し込んできていた。地上が大荒れの天気でなければ、このあたりは、もっと明るいに違いない。

「我々が、罠をかけるのは、ここです」

奇狼丸が振り返って指し示した先を見ると、岩肌に、直径、三、四メートルほどの穴が、ぽっかりと口を開けていた。

「おそらくは、千年以上前、人工的に掘られた隧道（トンネル）でしょう。この先、一キロ半ほど続いて地上に出ますが、都合のいいことに、途中、ほとんど分岐のない一本道なんです」

「それが、どうして都合がいいんだ？　だって、僕らの逃げ道が一方向しかないってことだろう？」

覚が、顔をしかめながら言う。傷が痛むのかもしれない。

「追っ手の方も背後の一方向から来るだけですから、彼我の距離を計測しやすいでしょう。それに、一本道とはいえ、穴は途中で複雑に左右にカーブしていますから、完全に追いつかれない限り、悪鬼の視界に入ることもありません」

奇狼丸の身体を覆っている泥は、ところどころが、雨水と汗によって剝がれてきている。その間で緑色の燐光を放っている片目が、不気味だった。

「ただし、ほとんど分岐がないと言いましたが、途中、数本の脇道があります。すべて、袋小路になってますから、絶対に迷い込まないようにしてください」

「脇道かどうかは、どうやって判断すればいいの？」

わたしは、不安に駆られて訊ねた。

「なに、見ればあきらかです。脇道は、この穴よりずっと狭い上に、ほぼ直交していますから。とにかく、道なりに進んでさえいれば、迷うことはありません」

まるで、方向音痴の人間を哀れんでいるような口振りだった。

「……しかし、本当に、ここが、最適な場所なんだろうか？」

覚は、迷っているようだった。

「我々の目的にとって、これ以上の場所はありません」

奇狼丸は、自信たっぷりに断定した。

「その最大の利点は、この風です」

穴からは、手前に向かって微風が吹き出してきていた。どういうメカニズムによるものかは不明だが、東京洞窟の中では、常時、幾つもの風が交差する、複雑な通り道ができているようだった。

この穴をまっすぐ行けば、風上に向かって進むことになる。背後から来る悪鬼は、わたしたちの風下だ。十字架を叩き割ってサイコ・バスターを放出すれば、悪鬼だけが感染し、風上を行く我々は、胞子を浴びずにすむという寸法である。

だが、はたして、そんなにうまくいくものだろうか。わたしたちは、言いしれぬ不安を感じていたが、奇狼丸の計画以外に、代案は思いつかなかった。

「悪い兆候ですな……。どうやら、予想した以上の豪雨になりそうです」

奇狼丸が、天井を見上げながら言った。わたした

ちの耳では感じ取れない音を聞いているようだ。

「当初は、穴の中まで付けた臭跡で悪鬼をおびき寄せ、出口の少し手前で待ち伏せして、サイコ・バスターを浴びせる計画でした。しかし、それでは、充分に機能するかどうか、心許なくなってきました」

「どういうこと？」

わたしは、悪い予感に襲われていた。

「臭跡は、水で消えてしまいます。敵には、今がチャンスだと思わせ、考える間もなく、後を追わせなくてはなりません。そのためには、もっと強力な撒き餌……いや、はっきりとした囮が必要になります」

「おい。ちょっと待ってくれ。囮っていうのは……」

覚の声音には、暗い疑惑の響きがあった。

「したがって、お二人には、少なくとも一瞬は、敵に姿を見せていただかねばなりません。そして、すぐさま洞窟の中に逃げ込めば、悪鬼は、我を忘れて後を追ってくるでしょう」

「おい、何言ってるんだよ？　僕らに、悪鬼と鬼ごっこをしろっていうのか？　それも、ほとんど、息がかかりそうな距離で？」

覚が、叫んだ。

「そんなこと、できるわけないだろう？　洞窟の中で蹴躓（けつまず）くか、何かのはずみで一瞬でも向こうの視界に捉えられたら、それで終わりなんだぞ？」

「お二人は、健脚を持つ成人の男女です。一方で、悪鬼は、まだ子供ではありませんか。足の速さを競った場合は、こちらに分があるはずです」

「無茶なことを言うなよ！」

「それと、もう一つ。サイコ・バスターを使う際には、至近距離で十字架を割らなければなりません。これだけ湿気が多いと、粉の飛散も限定されるでしょうし、下手をすると、ほとんど濡れた岩壁にくっついてしまうということも、ありえますから」

奇狼丸は、覚の抗議には、耳を貸す様子もなかっ

た。

「無理よ。とても、できないわ」

わたしは、奇狼丸の目を見ながら言った。

「できない？　できないというのは、どういうことです？」

隻眼の緑の虹彩が、瞬きもせず、わたしを見つめ返す。

「だって、そんな……」

「ここへ来るまでに、いったい、どれほどの犠牲が積み重ねられたと思うんですか？」

奇狼丸の声には、わたしたちが竦み上がるくらい、峻烈な響きがあった。

「あなたがたは、我が同胞の生命には、とんと関心がないようですから、あえて申し上げますまい。しかし、乾さんを始め、いったい幾人の方が、命を投げ出したのでしょう？　すべては、悪鬼を斃すことができる、ただ一瞬のためだった。全員、それを信じたが故に、自らの命を擲ってまで、お二人に希望を託したのではないのですか？　にもかかわらず、ようやく訪れた、この千載一遇のとき、悪鬼を葬れる、おそらくは最初で最後の機会を、あっさり棒に振ると言うんですか？　すべては、この土壇場に来て、悪鬼に直面するのが怖いという、あなたたちの子供のような怯えのために？」

一言として、反論できない。わたしは、ただ、うなだれるしかなかった。

「お二人には、悪鬼を斃した上で、まだ助かるチャンスがあります。十二分にあると言っても、過言ではないでしょう。今こそ、勇気を奮い起こすときです。……それをしなかったら、長い余生を後悔のうちに送ることになるだろうと申し上げたいが、そうはならないでしょう。間違いなく、あなたたち二人は、少々寿命を延ばしただけで、遅かれ早かれ、悪鬼に惨殺されることになるはずです。そのとき、脳裏に去来するのは、無限の後悔だけです。ここで無意味に殺されるくらいなら、どうして、あのとき、

悪鬼と刺し違えるチャンスを見送ったのだろうと……」

　奇狼丸の言葉は、わたしの心に、鋭く突き刺さった。

「……わかったよ。たしかに、君の言う通りかもしれない」

　覚が、低い声で言う。

「僕らは、元々、悪鬼を斃すという目的のためには命も捨てるつもりで、ここへ来たんだ。今になって、怖いから止めるはないよな？　……でも、君は、どうするんだ？　僕らが、命がけの鬼ごっこをしてる間、高見の見物か？　それはちょっと、都合が良すぎるんじゃないか？」

　奇狼丸の緑の目は、哀れむような光を帯びた。

「あなたの言っていることは、まるで、駄々っ子です。自分が、生きるか死ぬかの使命を負わされているっていうのに、このバケネズミは、なぜ、そうじゃないんだ？　ずるいよ。死ぬんなら、こいつの方が先に死ぬべきなのに」

「おい。ちょっと待てよ！　いくら何でも、失礼だろう！」

　覚は、怒気を発した。

「では、何でもけっこうですから、対案を示してください。私が命を捨てることで悪鬼を斃せるのであるなら、一瞬の躊躇もなく、任務を完遂してみせましょう。……あるいは、私が今ここで命を絶つことで、お二人を奮い立たせられるものなら、そうしたい思いです。そうしない理由は、ただ一つ。ここまで悪鬼を誘導してくる者がいなくなってしまうからにすぎません」

「しかし、悪鬼をここまでおびき寄せられるくらいだったら、最後まで君がやれるんじゃないのか？」

　覚は、悔しげにつぶやいた。

「最後が、一番肝心なのです。悪鬼が先頭に立って突っ込んでくるような状況を作るには、お二人が囮になるよりないんです。お二人の姿を目にすれば、

他の兵士は、怖れて追ってこないはずですから。逆に、私が囮では、どうやっても悪鬼を惹きつけることはできないのです」

　奇狼丸は、悲しげに首を振り、神妙な声で続ける。

「もちろん、私には、お二人に強制することはできません。それどころか、あなたがたの逆鱗に触れた瞬間、虫けらのように捻り潰されてしまう存在でしかない。……最終的に、お決めになるのは、あくまでも、あなたがたご自身です」

　奇狼丸に対する、ぼんやりとした疑念は、このときまだ、わたしの中で渦巻いていた。何もかもが百パーセント目論見通りに行かなければ成功しない、虫のいい計画に対する、漠然とした不安も。

　しかし、これから自分がやるべきことについては、もはや迷いはなかった。

　奇狼丸が、悪鬼をおびき寄せる臭跡を付けるため、わたしたちの肌着を持って姿を消してから、二時間以上が経過していた。

　その間に、わたしたちは、最終決戦の場となる隧道（トンネル）を、地上へ出る終点まで一通り調べ終わっていた。

「足下は、思ったより良かったな。それほど起伏もなかったし、危険な岩や、躓きそうな突起は、さっき取り去っといたから。……あと気をつけるのは、途中に三箇所ほどあった割れ目だけだな」

　覚は、頭の中で、コースを確認していた。

「早季は、だいじょうぶ？　憶えた？」

「わたしが迷うのは、分かれ道がたくさんあるときだけよ。この穴は、一本道だもの」

　まるで方向音痴を気遣っているような言葉に、わたしは、むっとする。

「しかし、本番では、ほとんど真っ暗な中を走らなきゃならないんだ。完璧に道筋を憶えとかないと、曲がり角で壁にぶつかったら、それでおしまいだ

ぜ？」

「それなんだけど、一人は明かりを持って走ってもいいんじゃない？　片手が塞がっても、それほど走る速度に影響しないわ」

「それは、だめだ」

覚が、言下に却下する。奇狼丸がいなくなると、とたんに鬼の上官役を引き受けたがるようだ。

「僕らの走る速度が変わらなくても、悪鬼の方は、大違いなんだ。こっちが洞窟を照らしてやれば、向こうも全力疾走できる。しかし、真っ暗な中なら、コースを知り尽くしてる僕らの方が、早く走れるはずだ」

「でも、悪鬼の方は、当然、明かりを持って来るんじゃない？」

「うん。だとすれば、むしろ、もっけの幸いだ。いきなり水をかけて、火を消してやろう。明るさに慣れた目なら、なかなか暗闇に順応できないはずだ」

「それだと、悪鬼は、慎重になって、闇雲に追いかけて来ないかもしれないわ」

悪鬼は、わたしたちが向こうを呪力で攻撃できないことは知っているだろう。だから、わたしたちを怖れることなく、追ってくるはずだった。とはいえ、足下も見えないような真っ暗闇の中では、警戒心を呼び覚ましてしまう可能性がある。

「そうだな。たしかに、隧道の入り口で、一度、立ち止まらせてしまうのは、まずいかもしれない。……こうしよう。早季が、小さな明かりを持って前を走るんだ。そうすれば、僕も、それを頼りに速く走ることができる。でも、この場合、悪鬼も松明を持って追ってくるわけだから、かなりの速度が出せるだろうな」

つまり、鬼ごっこは、ますます厳しいものになるということだ。

「でも、考えてみれば、この案には利点もあるな。振り返って、悪鬼の明かりを見れば、どのくらい近くまで来ているのか、見当がつきやすいはずだ。

……そして、安全な距離を保ちつつ、屏風岩のところまで誘い込むんだ」

　屏風岩というのは、サイコ・バスターを使うのに最適な地点として、わたしたち二人の意見が一致した場所だった。直線の通路の最後に屏風形の薄い岩が張り出していて、その裏に隠れて、悪鬼を迎え撃つことができる。追ってくる悪鬼の姿は丸見えだから、充分に引き付けてから、足下に十字架を叩きつければいい。

　問題は、むしろ、その後だった。サイコ・バスターは、悪鬼を感染させ、数日のうちに命を奪うことはできても、その場で悪鬼を昏倒させることはできない。胞子を吸い込んだ悪鬼は、少なくとも数時間は、それまでとまったく変わらずに活動することができるのだ。

　古代の軍事用語には、一撃離脱という言葉があるようだが、まさに、それが求められる状況だった。わたしたちは、まだ元気そのものの悪鬼から、自力で逃げおおせなければならない。

「……十字架だけど、覚より、わたしが持ってた方がいいんじゃない？　だって、覚は、両手を怪我してるでしょう？」

　覚は、わたしの心を読んだようだった。

「このくらいの怪我、どうってことないよ。それに、昔から、投擲（とうてき）は僕の方が得意だったじゃないか？」

「でも……」

「それに、考えてみろよ。早季は、僕より前を走ってるんだから、早季が、サイコ・バスター入りの十字架を破裂させたりしたら、僕まで感染してしまう」

「そんなことないわよ。だって、それを使うのは、屏風岩まで来て、覚が追いついてからの話でしょう？」

「いや。やっぱり、僕が持ってる。早季が、うっかり転びでもして、十字架を割っちゃったら、最悪だ

からな」

冗談めかしてはいるものの、本当に最悪の場合、たとえば、逃げる途中で追いつかれてしまったとき、覚は、悪鬼を道連れにするつもりなのだろう。

雨は、依然として地上に降り続いているようだった。あちこちから染み出してきた水で、洞窟の壁は完全に濡れ、足下には細い水流が走っている。空気は、重たく、肌に粘りつくようだった。

「本当に、できるのかしら？」

わたしが、つぶやくと、覚は、もの問いたげな視線を向けてきた。

「わたしたち……ひとりの人間を殺そうとしているのよ」

「よせよ！」

覚が、鋭く遮る。

「そんなこと、考えるな。僕らは、ただ、悪鬼の前に、十字架を叩きつけるだけなんだ。それで、悪鬼が、すぐに死ぬわけじゃないんだし」

覚の言っていることが詭弁であることは、わかっていた。しかし、サイコ・バスターを使うのが彼である以上、罪の意識を持たせるようなことを言ってはまずい。

「ごめんなさい。変なことを言って」

「いいさ。……僕らは、ただ使命を果たすだけなんだ。今は、それ以外のことは、頭から閉め出すんだ」

「ええ。……でも」

どうしても、今、言っておかなければならない。そうしなければ、手遅れになってしまうという気持ちが、ふいに沸き上がってきたのだ。

「真理亜と守の子供は、本当に、悪鬼なのかな？」

「また、その話なのか？」

覚は、うんざりしたように言う。

「あいつのやったことを見ろよ。町の人たちを、無差別に虐殺したんだぞ。悪鬼そのものじゃないか？」

「それは、わかってる。だけど、今までに現れた悪鬼とは、根本的に違ってるような気がするの」

「……そりゃあ、多少の違いは、あるかもしれない。悪鬼っていうのは、いくつかの型に分類されてるんだろう？　でも、その違いが、何なんだ？　悪鬼を……止めてから、後で考えればいい」

「わたしには、やっぱり、あの子が悪鬼だとは思えない」

覚は、立ち上がって、頭を掻きむしるような動作をした。

「いい加減にしてくれ！　今さら、どうして、僕を迷わせるようなことを言うんだ？」

「ごめん！　でも、聞いて。もしかしたら、あの子は、自分が何者だかわかってないだけじゃないかって気がしてしょうがないのよ」

「だとしたら、どうなんだ？　どちらにしても、止めるしかないんだ。そうしなければ、町は全滅し、日本全体が野狐丸に牛耳られることになる。最初は、ほんの小さな流れでも、やがて、悪鬼の数はどんどん殖えていき、世界がバケネズミに支配されることになるかもしれないんだ！」

「わかってる。わたしたちは、どんなことをしても、それを阻止しなければならないってことも。だけど、真理亜の子供なのよ？　一度だけ、チャンスがほしいの。たった一度でいいから」

「チャンス？　言ってる意味が、全然わからないんだけど」

「もし、あの子に、気づかせることさえできたら……！」

わたしは、自分の計画を、覚に説明した。おそらくは、覚にしかできないやり方を。

「正気なのか？　そんなことをしたって、たぶん、何の役にも立たないよ」

「でも、お願い。一度だけ、試してみる価値はあるでしょう？　屏風岩で、サイコ・バスターを使う直前だったら、きっと余裕はあると思うの」

覚は、腕組みをして考え込んだ。

「……約束は、できない」

ようやく絞り出した返答が、それだった。

「そのときになって、もし、時間的な余裕があるようだったら、試してみるかもしれない。しかし、そのために、サイコ・バスターを使うという本来の計画を危険に晒すことはできない。無理だと思ったら、その瞬間に、十字架を叩きつけるよ」

「いいわ。だって、覚の言ってることは、正しいもの」

わたしは、本心から、そう言った。

「無理な話を聞いてくれて、ありがとう。わたしの胸にだけ、収めておくべきだったかもしれない。でも、どうしても、言わずにはいられなかったの」

「わかるよ。……君の気持ちは」

覚は、それだけ言って、黙り込んだ。これ以上は、その話題に深入りしたくなかったのだろう。

そのとき、遠くから、硬質な音が聞こえてきた。金属と岩を打ち鳴らすような、ひどく神経に障る響き。

「あの音……！」

わたしが叫ぶと、覚は、唇の前に人差し指を立てた。

また、聞こえた。音は、複雑な経路を辿って、わたしたちの耳まで届いたようだった。長く曲がりくねった洞窟を反響し、一部は、固い岩盤を直接伝わって。

「やつらだ。地下と地上とで、連絡を取り合ってるんだ」

ついに、狩りが始まったのだろう。敵が追っている獲物は、奇狼丸に違いない。

そして、その次の瞬間、別の音が聞こえてきた。狼の遠吠えのように長く余韻が残る、独特の声だった。

「奇狼丸だ！」

覚が、叫んだ。もう、近くまで来ている。予定通

り悪鬼をおびき寄せ、連れてきているという合図だった。

「来るぞ。隧道に入ろう。……たぶん、もう、あと二、三分だ」

　わたしたちは、所定の位置に付いた。木の根を縒り合わせて作った、小さな松明に点火する。最初の瞬間が、大きな関門だった。悪鬼に、わたしたちの姿を、しっかりと見せてやらなければならないのだから。

　心臓が高鳴る音で、指先まで震えた。冷や汗が出始める。今にも、すぐ近くの穴から、悪鬼が現れる。失敗は、絶対に許されない。それは、わたしたち二人の命にとどまらず、数え切れない人たちの命運をも左右する。

　緊張で、眩暈と吐き気に襲われた。こめかみが、ずきずきと痛み出す。

　そのときだった。

　意識が、奇妙なくらい清明になり、突然、思考の幅が何倍にも広がったような気がした。それは、自分が自分でなくなったような不思議な体験だったが、けっして不快なものではなかった。むしろ、それは、目眩くほどの歓びを伴っており、あえて最も近い感覚を挙げれば、性的な絶頂感だろう。そうだ。間違いない。瞬が、今、わたしの耳元でささやき、わたしと思考を共有しているのだ。

　わたしは、それまで感じていた漠然とした不安、疑惑を、まるで別人の目を借りているかのように、客観的に眺めることができた。

　奇狼丸に関する疑念が、完全に払拭されたわけではなかった。だが、わたしの感じていた不安の根は、別のところにあったことがわかる。

『敵は、あくまでも我々を狩るつもりでしょうが、狩りに夢中になっている者ほど、自分が獲物になることに、寸前まで気づかないものです』

奇狼丸の言葉が、耳朶によみがえった。これは、敵について語った内容だが、そっくりそのまま、我々にも当てはまるのではないか。

同じような言葉を、どこかで聞いたことがある。そうだ。和貴園で囲碁を教わっていたときのことだ。

取ろう取ろうは取られの元……。相手の石を取ろうと夢中になっているときほど、自分の石が危ういものだと戒める格言だった。

なぜ、それが、こんなに引っかかるのだろうか。野狐丸……。まだ、スクィーラと呼ばれていた頃だった。たしか、囲碁の本から戦略を学んだと言っていた記憶がある。

あれほど狡猾なバケネズミが、こちらの意図に、まったく気づいていないということがあるだろうか。奇狼丸の巧みな戦術によって、大打撃を受けた直後だというのに、またも、やすやすと誘い出され、切り札である悪鬼を危険に晒すだろうか。

いや、それだけではない。野狐丸は、本当に、予期せぬ奇襲によって、七匹もの兵士を失ったのか。そもそも、自らの部下をも平然と捨て石にするのが、野狐丸の冷徹きわまりない戦略の特徴だったのではないだろうか。

もし、わたしたちが、終始、野狐丸の掌の上で踊らされていたのなら……。

再び、どっと冷や汗が流れ始めた。

だが、もう、引き返すことはできない。

前方の穴から、奇狼丸が飛び出してきた。わたしたちと目でコンタクトを取り合うと、すぐさま、別の穴に飛び込んで姿を消す。

「来るぞ……！」

覚が、低い声で叫んだ。

ついに、恐怖が、その姿を現すのだ。

4

奇狼丸が飛び出してきたのと同じ穴から、数体の黒い影が、次々に這い出してきた。

バケネズミの兵士だ。ほとんど裸体で、革袋のようなものを背負い、狭い空間では弓矢より使い勝手がいい吹き矢の筒を携えている。

わたしたちの臭いを、感じ取ったのだろう。兵士たちは、すばやく広い場所に散開し、吹き矢の筒を口元に構えて、臨戦態勢を取る。暗視能力には自信があるためか、もともと視覚にはあまり頼っていないのか、松明を持っているのは、四匹中一匹だけだった。

続いて、一体の影が出現する。暗くて判別できなかったが、おそらく、野狐丸か悪鬼に違いない。

影は、怖れる様子もなく、前に出てきた。バケネズミの兵士たちと体格は変わらないが、洞窟内の蒸し暑さにもかかわらず、頭からすっぽりとマントのようなものを被っている。暗闇を透かして、周囲の様子を窺っているようだ。

兵士たちが、臭跡を辿って、奇狼丸が逃れた穴を見つけたようだった。全員の注意が、そちらに向く。マントを着た存在が、少し前屈みになった瞬間、松明の反射で、フードの前から垂れ下がった髪の毛の房が見えた。炎を映して、まるで血のように赤い……。

悪鬼だ。

わたしと覚は、一番よく見える場所にいた二匹の兵士の首を呪力で捻った。頸椎が砕ける音が響き、二匹は悲鳴を上げる間もなく崩れ落ちる。残りの二匹は、一瞬、何が起きたのかわからない様子だったが、恐慌にとらわれ、手近な穴に飛び込もうとした。

唯一、フードを被った存在だけが、傲然（ごうぜん）と立ったままだった。ゆっくりと頭を巡らし、こちらを見

る。

わたしたちは、瞬時に岩陰に引っ込むと、隧道の奥へ向かって走り出した。

悪鬼が、わたしたちの姿をはっきりと認めたかどうかは、確信が持てない。とはいえ、二匹の兵士が呪力で殺されたことは、嫌でもわかっただろう。

あとは、こちらの目論見通りに、悪鬼が追ってくるかどうかだ。わたしたちは、隧道を二十メートルほど進んだ曲がり角で立ち止まった。木の根の松明に点火すると、わたしは、固唾を呑んで、背後を見守った。

隧道の入り口に、松明を手にしているらしい影が伸びた。フードを被った小柄な死神の、黒いシルエットだ。

それが、死を賭した競走の始まりを告げる号砲だった。わたしたちは、再び、弾かれたように走り出した。

後ろを振り返る余裕などなかった。ただ、ひたすら、全速力で駆け続ける。

追う側は、好きなペースで走れるが、逃げる側は、選択の余地がない。スタミナ配分を考えることなど、できようはずもなかった。こちらが速度を抑えているときに、向こうが一気に殺到して、たとえ一瞬でも後ろ姿を視界に捉えられれば、すべてが終わるのだ。

打ち合わせ通り、わたしが先頭を走り、すぐ後ろに、覚がぴったりとくっついていた。恐怖に足が萎えそうになる自分自身を叱咤し、強く地面を蹴って、曲がりくねった洞窟を飛ぶように進んでいく。

わたしは、懸命に走り続けた。何も考えるな。よけいなことに意識を向けると、足下がおろそかになる。一個の岩の出っ張り、割れ目の一つに足を取られたら、わたしたちは、二人とも、短かった人生に終止符を打つことになる。

背後から、ひたひたと迫ってくる悪鬼の恐怖で、心臓が破裂しそうだった。

悪鬼との間には、必ず、曲がり角を一つ以上挟なければならない。そうすれば、こちらの姿を視界に捉えられることはないはずだ。

　悪鬼も、無闇に呪力で攻撃することはできない。下手をすれば、洞窟全体が崩壊して、自分も生き埋めになるし、そうでなくても、わたしたちと悪鬼の間に、自ら障壁を作ってしまうことになりかねないからだ。

　しかし、わたしたちの臭いが、向かい風に乗り、確実に背後へ届いているはずだと思うと、地面を蹴る足裏の感覚も、妙にふわふわと頼りなく感じる。自分が、正しいバランスで走っているのか、今にも顛倒しそうになっているのかさえ、わからなくなってくるようだった。

「早季！　早季！　だいじょうぶだ。スピードを落とせ！」

　覚が、後ろから声をかける。

「やつは、ゆっくり追いかけてくるみたいだ」

そう。追う側は、けっして焦る必要はない。無理のない速度で追尾しながら、こちらが暴走してバテるのを待てばいいのだ。

　わたしたちは、駆け足程度にまで速度を落とした。悪鬼の松明の光は、曲がりくねった洞窟に阻まれて、こちらまでは届かない。だが、かすかな足音は、聞き取ることができた。規則正しい歩調は、走るというよりは、むしろ、早足で歩いているのに近い。

　わたしたちも、さらにペースを緩めることにした。駆け足と早足を交互に繰り返して、息が上がるのを防ごうとしたが、最初に全力疾走したのが響いて、すでに、呼吸するのも苦しくなっている。

　背後からまた、金属と岩を打ち鳴らす音が響いてきた。それも複数だ。地下から地上へ向けて、何かを通信しているのだろう。このときは、わたしたち二人とも、ほとんど気に留めていなかった。

「いい感じだ。このまま、行けばいい」

覚の声も、かなり息が乱れてはいたが、手応えをつかんだような響きがあった。

「やつの方は、余裕を見せてるつもりなんだろう。しかし、これだけ間隔を開けられれば、御の字だ。とにかく、最初から飛び出してこられるのが、一番怖かった」

「……このままで、いいのよね？」

「ああ。屛風岩まで、できるだけ呼吸を整えて行こう。早季は、もう少し前に行け。僕は、ぎりぎりまで下がって、やつの様子を窺ってるから。いきなり速度を上げてきたときは、『来たぞ』って叫ぶから」

「うん」

漠然とした不安は、また、強くなり始めていた。だが、今は、覚の指示に素直に従う。気のせいだ、と自分に言い聞かせた。すべては、計画通りに進行している。

ほんの少しだが、気持ちにゆとりができたせいか、脳裏に、様々な思いが浮かんでは、駆けめぐる。

奇狼丸が敵と通じているのではないかという疑惑や、すべては野狐丸の策略なのではないかという心配は、心の中から追い出すようにする。すでに、賽（さい）は投げられているのだ。正否は、ほんの数分のうちにわかるだろう。今さら、そんなことを考えてみたところで、得るものはない。

代わって無意識の底から浮かび上がってきたのは、奇妙なことに、ずっと昔、和貴園で教わった日本の創世神話だった。

妻である伊弉冉尊（イザナミ）を、お産の際の火傷で失った伊弉諾尊（イザナギ）は、どうしても妻の面影が忘れられずに、死者が住む黄泉の国へ行く。そして、「絶対にわたしの姿を見ないでください」というイザナミの言葉にもかかわらず、彼女の姿を目にしてしまう。それは、腐敗して、蛆が湧いた恐ろしいものだった。

イザナギは、恐怖に駆られて、大地の底から洞窟

を通って逃げ出した。自分の恥ずべき姿を見られたイザナミは激怒して、黄泉醜女（よもつしこめ）という化け物らに後を追わせるのである。

もちろん、命がけの逃走の最中に、のんびり神話について思い出していたわけではない。それは、ほとんど幻視に近い、極彩色の奇怪なイメージの奔流となって、暗い洞窟の中で躍動していたのだ。おそらく、わたしの意識を占拠していた、呪術的ともいえる恐怖が、記憶の彼方から、似た話を呼び覚ましたにすぎないのだろうが。

イザナギは、化け物に追いつかれそうになるたびに、髪飾りや櫛の歯、桃の実を投げて、からくも難を逃れた。

だが、今のわたしたちは、悪鬼をかなり引き離している。この分だったら……。

おかしいぞ。

誰かの声が聞こえた。

瞬……。瞬なの？　わたしは、心の中で訊ねた。

おかしい。変だと思わないか？

かすかな声は、執拗に続ける。

変？　変って、何が？

聞こえるだろう。

そのとき、また、背後から、敵が通信をする音が響いていた。やはり、一箇所からではなく、複数の地点から同時に発信されているようだ。だが、それが、何なのだろう。

危ない。これは、罠だ。

それは、今や、はっきりとした瞬の声になって聞こえてきた。

止まるんだ。早季。

「止まる？　どうして？　そんなことできないわ！」

わたしは、思わず、声に出して叫んでいた。

気づかないのか？　さっきから、悪鬼は、追ってきていない。

わたしは、早足から駆け足になりかけていた速度を緩めると、再び早足になり、そして、その場に立ち止まった。

「早季！　何してるんだ？　早く行け！」

追いついてきた、覚が叫ぶ。

「覚。これは、きっと罠よ！」

「何言ってるんだ？　君は、幻覚を見てるんだ。さっきから、ぶつぶつ独り言を言ってただろう？」

覚は、わたしの背を押そうとした。

「待って。悪鬼は、全然、追いかけて来ないわ。どうしてだと思う？」

覚は、はっとしたように、背後を振り返った。

「たぶん、歩いてるんだろう。でも、こんなことしてたら、すぐに追いつかれるぞ！」

「でも、足音が聞こえる？　さっきから聞こえてくるのは、雨音と、敵が通信する音だけじゃない？」

覚は、絶句した。

「本当だ。……しかし、どのみち、前に行くしかないんだ。一本道なんだから」

「でも、待って。もしかしたら、これは……」

わたしは、懸命に、覚を押しとどめた。そして、それが、間一髪で、わたしたち二人の命を救うことになった。

わたしたちが、今まさに進もうとしていた前方の洞窟が、轟音とともに崩壊した。大量の岩石の破片と水が落下してきて、洞窟の床にぶつかって跳ね上がり、こちらに押し寄せてくる。

「逃げろ！」

わたしたちは、きびすを返して、元来た方へ走り出した。しかし、そちらには、悪鬼がいるはずではないか。もはや、絶体絶命かと思われた。覚は、首から提げていた十字架を、固く握りしめる。どうせ悪鬼に殺されるなら、道連れにしようというつもりらしい。

隧道を四、五十メートル戻っても、そこには、悪鬼の姿はなかった。

「どこへ行ったんだ？」

覚は、足を止め、震える声でつぶやいた。

わたしは、振り返って、わたしたちが進んでいた方向を透かして見た。崩落は、一応、止まったようだった。もうもうとした砂煙は、雨と湿気のせいか、徐々に収まりつつある。さっきまで真っ暗に近かった洞窟が、薄ぼんやりとだが明るくなっていた。崩落によって、地上まで風穴が開いたらしい。

「戻りましょう」

「戻るって、どっちに？」

覚は、混乱し、すっかり自信を失っているようだった。

「最初に走ってきた方……風下よ」

「そっちには、悪鬼がいるんだぞ？」

「いないじゃない」

わたしの心臓は、依然として、恐怖に鷲づかみにされていたが、頭の一部は、霧が晴れたように明晰になっていた。

「わからない？　今のは、罠だったのよ。野狐丸は、わたしたちが逃げる方向を読んで、崩落を仕掛けたんだわ」

「じゃあ、奇狼丸も、グルだったのかな？」

「それは、わからないけど……。とにかく、あっちに行くのは自殺行為よ。敵は、わたしたちを待ち伏せしてたんだから」

「しかし、向こうには、悪鬼がいる」

覚は、心底、怯えた表情を見せた。

「そうだ。やっぱり、前進しよう。今の崩落で地上まで縦穴が開いたとしたら、そこから逃げられるかもしれないだろう？」

「だめよ！　よく考えて。やつらは、どうやって固い岩を崩したと思うの？」

わたしの問いかけに、覚は、真っ青になった。

「火薬じゃない。硝煙や硫黄の臭いがしないし、爆発音もなかった。ただ、岩盤が崩れる音だけだ。

……でも、まさか、そんな」

そのとき、わたしの目が、隧道の地面にある物体を捉えた。わたしの視線に気づいて、覚も、そちらを見る。

そこに落ちていたのは、切り取られた赤毛の房だった。

「畜生！　……最初から、完全に騙されてたんだ」

覚が、苦しげに呻く。

やはり、わたしたちは、終始、野狐丸の掌の上で踊らされていたのだった。

考えてみれば、悪鬼がマントを着ていたのは、不自然だった。蒸し暑い洞窟の中だし、あの姿では、わたしたちに普通のバケネズミの兵士と誤認され、殺されてしまう危険性もある。もちろん、殺した側も愧死することになるだろうが、敵からすれば、切り札である悪鬼を一人の人間と引き替えにするのでは、とうてい勘定が合わない。

あれは、悪鬼ではなかった。悪鬼から切り取った髪の毛で、バケネズミの兵士を悪鬼に変装させ、まんまとわたしたちを追い立てたのだ。そして、わたしたちが逃げる方向を、音の合図によって地上に伝えたのだろう。地上からだったら、自分が生き埋めになる危険を冒さずに、洞窟を崩落させることも可能だ。

だとすれば、わたしたちを待ち受けていたのは……。

「逃げよう！」

わたしは、覚を促そうとして、彼が、茫然と目を見開き、わたしの背後を凝視しているのに気がついた。

薄くなった砂煙を通して、光る松明を持つ、ほっそりした子供のシルエットが浮かび上がっている……。

わたしたちは、脱兎の如く駆け出した。

背後から、軽快に疾走してくる足音が響いてきた。悠長に追跡するのではなく、一気に勝負をつけに来たのだ。わたしたちと悪鬼の間を隔てるのは、

曲がり角が一つだけだった。長い直線に入れば、こちらの姿は悪鬼に丸見えになり、わたしたちは、たちまち首を引きちぎられるだろう。

ほとんど、瞬間のインスピレーションだった。わたしは、右手を伸ばし、目の前にある覚の背嚢をつかんだ。

「早季？　何するんだ？」

覚が、叫んだ。わたしは、背嚢の中に手を入れてニセミノシロモドキを探り当てると、背後に向かって抛り投げた。魔法の道具を使って急場を凌いだ、イザナギのように。

突然、洞窟に放り出されたニセミノシロモドキは、危険を察知したらしく、たくさんの歩行肢を波打たせながら、フナムシのように壁を上り始めた。

わたしたちが、次の角を曲がった直後のことだった。背後から、強烈な光が射してきた。ニセミノシロモドキが、自己防衛のために光を放ち、悪鬼の目を眩ませたのだろう。

七色の光は、数秒間、激しく点滅したかと思うと、急に、蠟燭を吹き消すように消えた。ニセミノシロモドキの運命は不明だったが、少なくとも数秒は、悪鬼を足止めすることができたようだ。光が消えたとき、わたしたちは、ちょうど長い直線の終わりにさしかかったところだったから、その数秒がなければ、命運は尽きていたはずだ。

その間に、充分な距離を稼いだと思ったのも束の間、背後から、再び、すばやい足音が聞こえ始める。子供の足は、思っていた以上に速い。小さく身軽な身体は、狭い洞窟内で楽々と方向転換しながら走れるようだ。

必死に逃げるわたしたちにも、わずかだが有利な点があった。この隧道の中は、すでに何度も通っている。どこに曲がり角や障害物があるのか、しっかり頭に入っていた。

そのお陰で、しばらくの間は、差を縮められずに、逃げ続けることができた。しかし、それも長続

きはしなかった。

肺が、充分な空気を吸い込むことができず、悲鳴を上げている。気管は、焼けるように熱かった。わずかな距離しか走っていないのに、持久力は限界に近づいている。恐怖が、わたしたちの体力を根こそぎ奪おうとしていた。

最悪だったのは、わたしたちが、当初の計画とは逆に、風下に向かって逃げていることだった。これでは、たとえ、心中覚悟でサイコ・バスターを使ったとしても、風上にいる悪鬼は、まったく胞子を吸い込まない可能性が高い。

ふいに、覚が立ち止まった。走り続けるわたしをやり過ごし、後ろに出る。

「どうするの？」

わたしは、叫んだ。

「君の提案だ。やってみる」

覚は、背後の空間に、意識を集中した。薄暗い洞窟に紗のスクリーンがかかったような状態になり、光がほとんど遮られて、こちら側は真っ暗になった。

そのわずか二秒後に、悪鬼が姿を現した。悪鬼が手にしている松明の光が紗を透過して、向こう側の様子がうっすらと見える。だが、悪鬼の側からは、光の大部分が反射しているために、完全な鏡面にしか見えないはずだ。

悪鬼は、立ち止まった。松明を高くかざしながら、疑念にとらわれた様子で、こちらを凝視している。身につけているのは、腰蓑と靴だけだった。こうして見ると、ただの幼い少年でしかない。

もし、あの子に、気づかせることさえできたら。

わたしは、覚に、自分の計画を説明した。あの子は、バケネズミに育てられたために、自分をバケネズミだと思っているはずだ。それがもし、鏡を見たら、どうなるだろうか。わたしたちは、バケネズミのコロニーで、一度も鏡を見たことがない。バケネ

ズミには、鏡を見る習慣がないのだ。あの子も、水面に映った影は見たことがあるかもしれないが、まじまじと、自分の姿を注視したことはないだろう。

　自分がバケネズミだと思っていた子が、自らの姿が敵である人類そのものであることに気づいたとき、はたして、彼の自己同一性（アイデンティティ）は揺らがないだろうか。もしかしたら、ほんのわずかでも、人に対する攻撃抑制を呼び覚ますことができるのではないか。

　正気なのか？　そんなことをしたって、たぶん、何の役にも立たないよ。

　覚は、あのとき、そう言った。しかし、彼は今、命がけで鏡面を作り、わたしの提案を実行してくれている。

「早季。ここは僕にまかせて、逃げろ」

　覚が、ささやいた。

「嫌よ」

　わたしは、梃子（てこ）でも動かないつもりだった。これ以上、走るのは御免だった。まして、一人で逃げる気になど、とうていなれない。どのみち、これが失敗したら、逃げ切るのは不可能だろう。

　悪鬼……真理亜の息子は、じりじりと、鏡に向かって近づいてきた。こちらに見えるのは、輪郭がぼやけたシルエットだけなので、表情まではわからない。だが、その動作には、あきらかに当惑が感じられた。

「……そうだ。よく見ろ。おまえは、人間なんだ。僕らと同じ、人間だ」

　覚が、低い声でつぶやく。

　すると、まるで、それに呼応したかのように、悪鬼が声を発した。

「Grrrr……ΠϒガⅢ▼Ë◎⊿？」

「ΠϒガⅢ▼Ë◎⊿？」

「ΠϒガⅢ▼Ë◎⊿？」

　悪鬼は、あきらかに、バケネズミ語で同じ言葉を繰り返していた。そして、首を傾げて、自分の鏡像

に見入ったかと思うと、突然、甲高い子供の声で咆吼した。

「ヸ★＊∀§▲ЖАДヺヹ！」

その瞬間、悪鬼の真横の壁に、無数の亀裂が入った。

「危ない！　逃げて」

わたしは、叫んで、頭を低くした。覚も、それに倣ったが、一瞬だけ遅かった。

亀裂の入った壁から剝がれた数十個の石礫が、唸りを上げて飛んできたのだ。石礫は、鏡を通り抜け、わたしの頭上を飛び去った。そのうちの一個が、覚のこめかみをかすめたのである。

覚は、その場に崩れ落ちそうになったが、かろうじて、踏みとどまった。

わたしは、顔を上げて、息を呑んだ。

鏡面は、すでに雲散霧消していた。

わたしと覚の距離は、十五メートル。そして、覚から、わずか十メートルほどの距離に、悪鬼が佇んでいた。

覚は、身じろぎもせず、その場に立ちつくしている。こめかみからは、鮮血がぽたぽたと滴っていた。わたしたちは、もはや、蛇に睨まれた蛙も同じだった。

悪鬼は、警戒する様子もなく、のんびりとした歩調で迫ってきた。こちらが反撃できないことは、百も知り尽くしているのだ。一房が切り取られた赤毛の下にあるのは、天使のように美しく整った顔である。しかし、その双眸に宿っているのは、鼠を嬲り殺しにしようと舌なめずりしている猫のような、残忍な光だった。

「早季。逃げろ」

覚が、静かに言った。どうするつもりなのかと訝ったとき、洞窟内の風が弱まった。

「覚？」

狭い隧道の中とはいえ、彼には、呪力で風向きを逆転するほどの技術はなかったはずだ。だが、覚の

懸命の力業によって、さっきまで吹いていた風は止んで、束の間、無風状態が訪れた。

「これで終わりにする」

「だめ……やめて！」

彼がやろうとしていることを悟り、わたしは、声にならない悲鳴を上げた。

覚と、ゆっくりと近づいてくる悪鬼の距離は、すでに、五メートルを切っていた。

「贈り物だ。受け取れ！」

覚は、すばやく十字架を振りかぶると、悪鬼の足下に向かって力いっぱい叩きつけた。

突然、わたしの時間感覚は、何十倍にも引き伸ばされたようだった。

すべての映像が、まるで微速度再生されているように、緩慢な動きに変わる。わたしの目には、覚が叩きつけた十字架の動きが、まるで百枚の静止画を連続して見せられているかのように、くっきりと映った。

オニユリの花弁か悪魔の角のような畸形の十字架は、岩盤に衝突し、ぽっきりと折れた。そして、灰色味がかった白い粉末が、煙のように広がっていく……。

ああ、これですべてが終わる。そう思った。わたしたちの使命は、ようやく完了した。わたしたちがどうなるにせよ、悪鬼は滅びるだろう。そして、神栖66町は救われ、再び、平和と秩序が訪れる……。

いや、違う。こんなのは、嘘だ。こんなことは、絶対に許せない。

この距離では、悪鬼だけでなく、覚までが、間違いなく、サイコ・バスターに感染してしまうではないか。

わたしの脳裏に、理屈を超えた狂おしい思いが噴出した。

わたしは、これまで、愛する人たちを、次々と失ってきた。姉。瞬。そして、真理亜と守まで……。

たとえ、わたしが助かったとしても、この上、覚まで失ったら、わたしは独りぼっちになってしまう。わたしたちの一班は、わたし一人しか残らないではないか。そんなことが、本当に、神の望んだ結末だというのか。

嫌だ！

わたしは、心の中で、絶叫した。

ゆっくりと、水の中に落とした白い絵の具のように拡大しつつあった、強毒性炭疽菌の胞子は、眩い光を放ちながら発火した。

炎は、たちまち白い粉の拡散速度に追いつき、たった一個の胞子をも逃さず、光り輝く舌で舐め取った。千年の時を生き延びてきた呪われた兵器、サイコ・バスターは、清浄な業火の中で焼き尽くされた……。

はっと気がついたときには、事態は、急展開を迎えていた。

覚は、茫然として、その場に尻餅をついていた。

そして、悪鬼は……。

大声で泣き叫びながら、よろめくように逃げ去っていく。サイコ・バスターの微粒子が、激しく燃焼した際に、どこかに火傷を負ったのだろう。

「覚！　逃げよう！」

わたしは、彼の腕をつかんで、強引に立たせた。

「早季。いったい……？」

覚は、呆けたようにつぶやく。

「いいから、早く！」

わたしたちが、きびすを返したとき、背後から、恐ろしい雄叫びが響いた。

振り返ると、悪鬼が、憤怒の表情も露わに、こちらを睨みつけていた。髪の毛が焦げ、両方の掌が赤く焼け爛れているのが見える。

今度こそ、終わった。

痺れるような恐怖の中で、わたしは、悪鬼を見た。

今にも、自分の命が消されてしまうことを、疑わなかった。

わたしの、愚かで衝動的な行為が、これまでの努力を、多くの人たちの犠牲を、すべて無にしてしまった。ついに悪鬼を斃すことができずに、この地獄の底で土に還る……。

わたしは、死を覚悟し、受け入れようとしていた。だから、それに続いて起きたことは、すぐには理解不能だった。

わたしたちの背後から、一個の石礫が唸りを上げて飛来したのだ。石礫は、悪鬼に命中する寸前に呪力で弾き飛ばされたが、悪鬼は、なぜか、あきらかに怯んだ表情になって、後ずさった。

低い姿勢で、背後の暗がりから飛び出してきたのは、奇狼丸だった。

「こっちです！」

奇狼丸は、わたしと覚の襟首をつかむと、悪鬼とは逆方向に走り出した。

それは、まさに魔の一瞬だった。折り重なるようにして逃走するわたしたちは、完全に、悪鬼の視界の中に捉えられていたはずだ。悪鬼は、わたしたち全員を火だるまにするのも容易だったはずだが、不思議なことに、何事も起こらない。

曲がり角を越えたとき、わたしは、ようやく、奇跡的に助かったことを理解した。

まだ、状況は、絶体絶命に近い。死神は、すぐ後ろから追い迫ってくる。

しかし、たった今、わたしたちは、その顎に捕らえられていたのだから。

そう思うのも、無理はなかったと思う。わたしたちは、たしかに、九死に一生を得た。しかし、同時に、長蛇を逸してもいたのだった。

わたしたちは、地下の隧道を、必死に逃げ続けた。

「悪鬼は、まだ、追ってこないようですな」

奇狼丸が、鼻をひくつかせて言った。現在、悪鬼は風上にいるため、接近してくれば、すぐにわかるのだという。

「けっこう、火傷がひどかったみたいだからな。先に手当をするつもりかもしれない」

覚が、つぶやく。そう言う彼のこめかみの血も、まだ乾いていなかった。

わたしたちは、走るのを止め、歩き始めた。

「これから、どこへ行くの？」

わたしの質問に、奇狼丸は、難しい顔になった。

「わかりません。とりあえずは、悪鬼から隔たることが先決です」

「ごめんなさい。わたしのせいで、サイコ・バスターは……」

「悠長に後悔している暇はありません。前方に注意してください。野狐丸が、伏兵を置いているかもしれません」

隧道をほとんど戻りきるまで、敵の襲撃はなかった。それも当然だろうという楽観が、しだいに頭をもたげ始めた。敵の切り札である悪鬼は、わたしたちの背後に取り残されている。いくら、野狐丸が策士でも、バケネズミの兵士だけで、呪力を持つ人間と正面から戦う道は選ばないのではないか……。

だが、隧道の出口に来たとき、奇狼丸は、立ち止まった。わたしたちは風上にいるので、向こうの臭いはわからない。しかし、バケネズミ特有の鋭敏な聴力は、何かを聴き取ったようだった。どうやら、敵兵に待ち伏せされているらしい。

奇狼丸は、無言のまま、手で、わたしたちを制した。ゆっくりと隧道を後退しようとしたとき、激しい銃声が轟き、壁から岩の破片が弾け飛んだ。

わたしたちは、隧道を、二、三十メートル駆け戻った。そして、第二波の銃撃。今度は、さらに奥まで銃弾が届いた。

反撃しようにも、相手の姿は見えないし、下手に見ようとすれば、その瞬間に射殺されてしまうだろ

う。だからといって、呪力で洞窟を破壊したりすれば、自分自身が生き埋めになってしまう公算が大だった。

助かったと思ったのもほんの束の間、わたしたちは、追い詰められてしまった。もはや、逃げ場はない。

第三波の銃撃で、敵も盲撃ちしているだけだということがわかったが、跳弾にやられる可能性があるため、隧道の左手にあった脇道に緊急避難する。そこは、文字通りの袋小路だった。

隧道の中に、鋭い口笛のような音が響いた。野狐丸の側から、悪鬼に連絡を取っているらしい。

「……悪鬼の臭いです。ようやく追いついて来たようですな」

奇狼丸は、鼻をうごめかせ、知り合いが訪ねてきたというような調子で言った。

「焦げ臭さと血の臭いが混じっている。汗の臭いには、恐怖が感じ取れます。怪我をしているせいか、非常に慎重な動きで、今、我々から三、四十メートルほど離れた場所で止まりました。こちらの様子を窺っているようですな。どうやら、我々が、ここにいることは、わかっているようだ」

なぜ、一息に、わたしたちを屠ってしまおうとしないのだろう。ぼんやりとした疑問が、わたしの頭に生まれる。

「もう、だめだ」

覚が、頭を抱えて座り、深い溜め息をついた。

「僕らは、ここで身動きが取れない。切り札だったサイコ・バスターも失われた。もはや、これまでだ……」

サイコ・バスターのことでは責任を痛感していたので、ひどく心が疼いたが、意外にも、奇狼丸が、これに反論する。

「そうと決めつけるのは、まだ早いかもしれません」

「どうして？　何か、いい考えでもあるの？」

わたしは、一縷の望みを込めて訊ねたが、答えは期待はずれだった。

「いや、事ここに至っては、たしかに、手の打ちようがないように見えます。……しかし、野狐丸の方も、一気に決着を付けることはできずにいるようです」

奇狼丸の言葉は、わたしがさっき感じた疑念をも代弁していた。

「向こうは、もう、焦る必要がないんだろう。圧倒的優位に立ってるんだから、このまま、こちらが自滅するのを待てばいいんだ」

覚は、すっかり悲観的になっていた。

「いや、そうとばかりも言えません」

奇狼丸は、冷静に事態を分析していた。

「こちらには、まだ、最後の手段があります。敵と一緒に生き埋めになるのを覚悟して、呪力で洞窟を破壊してしまうことです」

「じゃあ、野狐丸は、それが怖くて、わたしたちを追い詰められないでいるの？」

だとすれば、すでに、こちらは、大規模な崩落によって敵も死ぬという、僥倖に期待するしかないことになる。

「それもあるでしょう。現在は、向こうが圧倒的に有利ですが、決め手が見つからないという状況かもしれません。お二人の呪力が怖いので、野狐丸の兵士は、隧道に入ってくることができない。一方で、悪鬼も、単身突っ込んでくることには、躊躇いがある」

「どうして？」

「一つには、私がいるからでしょう。私には呪力こそないものの、悪鬼を攻撃することに何の逡巡もない。……それに、もしかしたら、別の疑念が生じているのかもしれません」

「別の疑念？」

「先ほどの遭遇戦で、悪鬼は、ひどい火傷を負いました。自分は、呪力による攻撃は受けないと高をく

くっていたのが、ここへ来て、本当にそうなのかという疑いに苛まれているのではないでしょうか？」

「そういえば……」

覚が、顔を上げた。

「早季は、サイコ・バスターを燃やすことで、悪鬼を攻撃したことになるよな。どうして、そんなことができたんだろう？」

「それは……」

わたしは、文字通り、自分の胸に手を当てて考えてみた。

「たぶん、サイコ・バスターを燃やすことが、結果的に悪鬼の命をも救うことだったから、できたんだと思う。命を救おうとして、たまたま相手に怪我をさせたとしても、それは、攻撃にはならないでしょう？」

「なるほど……」

覚は、唸った。

「何とか、それを応用できないかな？　表面上、あたかも悪鬼の命を救うかのような形で呪力を発動して……」

「無理よ」

わたしは、首を振った。

「そういう、攻撃の意図を擬装するようなやり方は、これまでに出現した悪鬼に対しても、嫌というほど試されたわ。成功したことは、ただの一度もないのよ。……本人が、欺瞞を認識している限り、攻撃抑制や愧死機構を騙し通すことはできない」

そもそも、そんな単純ないかさまが功を奏するのなら、こんな地獄の底まで、サイコ・バスターを探しに来る必要もなかっただろう。

そのとき、ふいに、隧道の外から、野狐丸の大きな声が響いてきた。

「話し合いをしましょう！　私は、塩屋虻コロニーの総司令官、野狐丸です。これ以上、無益な殺し合いはやめにしませんか？」

「いったい、何をほざいてるんだ、あの外道は？」

覚が、腹立たしげに、ささやく。

「いきなり、闇討ちみたいな攻撃を仕掛けてきて、罪もない人々を無慈悲に虐殺したのは、誰だと思ってるんだ？」

「どうか、私の声に答えてください。人間とバケネズミは、種こそ違えど、知性を持った存在です。いかなる利害の相違があったとしても、すべて、話し合いによって解決できるはずです。そのための第一歩としては、まず、お互いにコミュニケーションを取る必要があるのです」

「答えてはいけません」

奇狼丸が、小声で注意する。

「やつは、こちらの返事で、位置を確認するつもりかもしれません」

「……このままでは、いずれ、皆さんを殲滅せざるを得ません」

野狐丸は、返答がないにもかまわず、続ける。

「そういう方法は、私の本意ではないのです。野狐丸の名、名誉にかけてお約束します。今、投降されたなら、皆さんの命は保証します。加えて、捕虜として人道的な扱いをすることも、お約束しましょう」

「カヤノスヅクリが、鳥に対して、君たちが僕の巣に卵を産んでも絶対に食べませんと、公約しているようなものですな」

奇狼丸は、皮肉った。

「あの二枚舌も、まさか我々が信用して、のこのこ出て行くとは期待していないでしょう。一応言ってみたところで、実害はないというだけのことです」

こちらが、音無しの構えを崩さないとわかると、野狐丸の声も、ぷっつりと途絶えた。

そして、いよいよ後は、敵の満を持しての攻撃を待つだけになった。

重苦しい沈黙が訪れる。

「覚……。ごめんなさい。わたしが、馬鹿だったわ。サイコ・バスターで、覚も感染してしまうと思

ったから。でも……」

「いいよ。わかってる」

覚は、心ここにあらずという様子でつぶやいた。

「あのまま、サイコ・バスターを使ってたら、たしかに、悪鬼は感染したかもしれない。だけど、僕は、感染云々という前に、悪鬼に捻り潰されていたはずだ。……それを思えば、多少は命が延びたってことかもしれないな」

「……結局は、あなたが言ったとおりになっちゃったわね」

わたしは、奇狼丸に向かって、自嘲気味に言った。

「わたしは、悪鬼と刺し違えられたはずのチャンスを、ドブに捨ててしまった。きっと、そのことを後悔しながら、死んでいくんだわ」

「我々の社会には、繰り言は、墓穴に入ってから蛆に聞かせろという諺があります」

奇狼丸の片目は、まだ、爛々と輝いていた。

「皆さんは、諦めが早すぎる。我々の種族は、心臓が鼓動を止める、まさにその瞬間まで、逆転する方策を探し求めます。それが無駄な努力に終わったところで、失うものはありません。兵士の本分という以前に、生きている限りは戦い続けるのが、生き物としての本分なのです」

この期に及んでも闘志を失わない奇狼丸には、敬服するしかない。しかし、このときのわたしには、ただの空元気か、現実逃避にしか聞こえなかった。

わたしたちは、すでに万策尽き果てて、大地の底の、さらにどん詰まりにいるのである。ここから、いったい、どういう策が考えられるというのだろう。

「奇狼丸。一つ、君に訊きたいことがあるんだけど」

覚が、両手で抱えていた頭を上げた。

「何でしょうか？」

「僕らは、まんまと野狐丸の罠に嵌った。そのと

き、正直言って、君に裏切られたんじゃないかと思ったんだ」

「なるほど。精神的なショックから、そう思われたのも、無理はないかもしれませんな。私自身、まんまと裏をかかれたことは認めます」

奇狼丸は、動じた様子もなかった。

「しかし、冷静に考えれば、そんな可能性はないことがわかるでしょう。第一に、私には、お二人を裏切って、あの二枚舌に荷担する動機がありません。今や、私の生きる目的は、我が女王を救い出した暁に、奴を挽肉にして豚の餌にすることだけです。第二に、もし、私が敵方であれば、お二人はとうの昔に鬼籍に入っていたでしょう。二手に分かれたときなら、いくらでも機会はありました。正直に申せば、赤子の手を捻るようなものだったと思います」

「たしかに、その通りかもしれない」

わたしは、真正面から奇狼丸の目を見た。何度見ても、背筋がうそ寒くなるような感じがするのは否めない。

「あなたは、わたしたちが悪鬼に殺される寸前に、命の危険を顧みず、助けに来てくれた。この上、疑うなんて、どうかしてるわよね。……でも、わたしにも、もう一つだけ訊いておきたいことがあるの」

「何なりと。生きているうちであれば、お答えできます」

「あなたは、昔、部下を連れて東京に来たって言ったわね？　たしかに、ここの地理にも精通していた。でも、いったい何のためだったの？　部下の三分の一を失うような危険を冒してまで、なぜ、こんな恐ろしいところに来る必要があったの？」

奇狼丸は、大きな口を耳まで広げて、にやりと笑った。

「なるほど。私に対するお疑いの根っこは、そこにあったようですな。この話は、あまりお聞かせしたくなかったのですが、今さら、誤魔化す必要もないでしょう」

奇狼丸は、立ち上がった。耳をそばだて、鼻をひくつかせ、敵の動きに変化がないことを確認してから、続ける。

「我々が、東京の地下を探索することにしたのは、今回と、まったく同じ理由からです。人類の古代文明の遺物である、大量破壊兵器を入手するためでした」

「……何のために？」

わたしの質問に、奇狼丸は、失笑を漏らす。

「何のため、ですか？　兵器が欲しいときは、通常、コレクションのためではありません。使うためです。サイコ・バスター程度では力不足ですが、もし核兵器か大量の放射性物質を入手できれば、人類に取って代わり、我々の覇権を打ち立てることも不可能ではないと考えました」

「なぜだ？　大雀蜂コロニーは、人類と良好な関係を築いてたじゃないか？　それなのに、君たちまで、野狐丸と同じような野望を抱いてたっていうのか？」

覚が、信じられないというように叫ぶ。

「まず、野望云々という次元の話ではないことをご理解ください。すべての生物は、自らが生き延び、繁殖することを目的とするよう作られています。我々のコロニーに関しては、コロニーが将来にわたって存続し繁栄することが、唯一無二の目的なのです。したがって、安全保障上、あらゆる危険を想定し、対策を用意する必要があります。大雀蜂コロニーは、傘下に多くの有力コロニーを抱えていましたが、敵対コロニーのみならず、すべての友好コロニーに対しても、急襲して皆殺しにするための戦闘計画が立案されており、必要なら、いつ何どきでも実行可能でした」

奇狼丸は、淡々と続ける。

「そう考えたとき、人類の存在が、我がコロニーにとって、どれほど大きな不確定要因であり脅威であるかは、容易に想像していただけるでしょう。良好

な関係とは、いったい、何でしょうか？　我々は、人類に対して忠誠を誓い、山海の幸を献上し、役務を提供することで、ようやく生存を許される立場です。しかし、それでさえ、いつ風向きが変わるかわかりません。ときには、まったく不可解な理由で、コロニーが丸ごと抹殺されてしまうのも、珍しいことではないのです」

「それで、先手を打って、人類を滅ぼす気だったのか？」

「先制攻撃をかけて勝つ見込みが充分にあれば、そうしていたでしょう。今回、野狐丸がやったように。しかし、残念ながら、核兵器も、それ以外の兵器も発見できませんでしたので、そうした企ても自然消滅しました」

「そもそも、核兵器の存在を、どうやって知ったんだ？」

「当然、ご存じかと思いましたが。あなたがたがミノシロモドキやニセミノシロモドキと呼んでいる、図書館の端末です。我々は、かなり以前に、知識こそ力であることに気づいていました。そのため、一体でも多くの図書館端末の捕獲に努めてきたのです。端末も、以前は、もっぱら対人類用の防御装置を進化させてきたのですが、最近は、我々に捕獲されにくい、新しいタイプのものが現れています。……我がコロニーで保有していた端末は、残念ながら、野狐丸に奪い取られてしまいましたから、やつは、現在、少なくとも四台の端末を保有しているはずです」

わたしたちは、呪力という圧倒的な力を持つが故に、あまりにも無防備だったのだろう。支配者の権力基盤は、いつの時代も、油断と慢心に白蟻のように食い荒らされることから、崩壊への道を辿ってきたのかもしれない。

「そこまで正直に話してくれたことには、感謝するわ。でも、そんなことを聞いた後で、あなたを信用できると思うの？」

「むろんです。信用していただかなければならないからこそ、包み隠さず、お話ししたのですから」

わたしの質問に、奇狼丸は、当然という口調で答える。

「我々は、いたずらに人類を敵視しているわけでも、征服欲に取り憑かれているわけでもないのです。私の衷心よりの願いは、我がコロニーの存続と繁栄しかありません。しかし、目下のところ、我がコロニーは存亡の危機にあります。そして、その元凶は、我が女王を幽閉している、野狐丸と塩屋虻コロニーです」

奇狼丸の目が、ぎらりと刃のような光を放った。

「やつは、肥大した権勢欲の虜であり、コロニーのために生きるという我が種族の本能を失った化け物です。民主主義に名を借りた危険思想を広めることにより、すべての権力を掌握し、自らが独裁者になるつもりなのです」

奇狼丸の声に、怒りのためか、獣の咆吼のような響きが混じり始めたが、敵に聞こえることを警戒したらしく、トーンを落とす。

「これまで、我が種族は人類への隷属を強いられてきましたが、我々の独自の文化、醇風美俗を継承することは許されていました。もし、ここで野狐丸の覇権が打ち立てられてしまえば、我が種族は終わりです。生みの母にロボトミー手術を行い、奴隷化するような社会だけは、絶対に到来させてはならないのです」

わたしは、塩屋虻コロニーで見た、『家畜小屋』の悲惨な光景を思い出した。奇狼丸に対し、初めて、種を越えた共感のようなものを感じる。

「……したがって、私は、どんな手段を使っても、悪鬼を斃し、野狐丸の野望を打ち砕かねばなりません。その一点においては、皆さんと私の利害は、完全に一致しているのです。ご納得いただけたでしょうか？」

「ええ。納得したわ」

わたしは、うなずいた。

「そうだな。僕も、納得はしたけど……」

覚は、その後は続けようとしなかったが、何を言いたかったのかは、あきらかだった。今さら奇狼丸が信用できるとわかったところで、状況は、毫も好転しないのだ。

もはや、打つ手はない。わたしたちは、全員、そう信じていた。奇狼丸すら、例外ではなかったはずだ。おそらくは、野狐丸の方も、同じ認識だっただろう。

だが、実際の形勢は違っていた。そのことに気づいてさえいれば、それ以上、まったく血を流さずに勝利することすら可能だったはずだ。

とはいえ、この瞬間、実は、わたしたちの側が圧倒的な優位に立っていたなどということを、いったい、誰が想像しえただろうか。

……おもしろい。

また、頭の中で声が聞こえた。

瞬？　どういうこと？　おもしろいって？

覚と奇狼丸に不審に思われないよう、わたしも、思考だけで問いかける。

奇狼丸だよ。ジョーカー……というより、切り札になるかもしれない。

言ってる意味が、わからないわ。説明して。

言っただろう。あれは、悪鬼じゃない。そのことを考えれば……。

瞬の声は、急速に、遠のいていった。

瞬。瞬！　どうしたの？　教えて。

……かってるだろう……君に見せたはず……地上で……僕の姿……うなったか。

そして、唐突に、何も聞こえなくなってしまった。

わたしは、しばらく茫然としていた。

「早季。どうしたんだ？」

わたしの様子を見て、不審に思ったらしく、覚が訊ねる。

瞬のことを打ち明けようかと思ったとき、奇狼丸が、ささやいた。

「来ます……悪鬼が」

わたしたちは、ぎょっとして、入り口の方に視線を向けた。わたしたちのいる袋小路は、途中で大きく湾曲しているため、隧道までは視界に入らない。

「ゆっくりと、足音を忍ばせて歩いています。だんだん、近づいてきました。あと、もう、二、三メートル……」

悪鬼は、本当に、わたしたちの居場所に気づいているのだろうか。もし、この袋小路に入ってこられたら、逃げ場はない。わたしは、洞窟を崩壊させるための精神統一を始めた。だが、それは、自殺であるだけでなく、悪鬼を道連れにする目的、つまりは、対人攻撃にほかならない。最後の瞬間、攻撃抑制が、わたしの呪力を金縛りにするだろう。

だとすれば、今、やるべきではないのか。まだ、悪鬼の姿が見えないうちに。

わたしは、洞窟の天井を見上げた。……だめだ。絶望に、押しひしがれる。

ここで洞窟を崩壊させれば、覚を殺すことになる。やはり、呪力は発動できない。

わたしは、目を閉じて、終わりを待った。

だが、しばらくすると、奇狼丸が、安堵した様子でささやいた。

「悪鬼は、通り過ぎました。おそらく、野狐丸たちと合流しに行ったんでしょう」

とたんに、止まっていた血液が全身を巡り始めたようだった。今さらのように、動悸が激しくなり、どっと汗が噴き出してくる。

「なぜ、悪鬼は、移動したんだろう？」

覚が、大きく息を吐きながら言った。

「我々が、乾坤一擲、野狐丸の側に向かって特攻をかけるのを、怖れたのかもしれません。銃弾を呪力でそらすことで、お二人のうち一人が生き残れば、やつらは皆殺しにできますから」

奇狼丸は、首を捻っていた。

「しかし、今までは挟撃態勢だったのが、あえて一方を放棄したわけですから、我々には退路ができたことになります。これは、逃げろという誘いの隙なのか、それとも……」

「たとえ罠でも、逃げるべきだ。向こうには、別の部隊が待ち受けてるのかもしれないが、今を逃したら、もう逃げるチャンスはないぞ」

覚は、そろそろと、袋小路を戻ろうとし始めた。

「待って！」

わたしは、叫んだ。

わかった。ようやく、瞬が何を言おうとしていたのかが、腑に落ちたのだ。

あれは、悪鬼などではない。もし、本物のラーマン・クロギウス症候群の患者であれば、富子さんが言っていたように、わたしたちには、手の打ちようがなかっただろう。

だが、あれは、悪鬼ではないのだ。だとすれば……。

「早季？」

覚が、不思議そうな目で、こちらを見る。

「わたしたちの目は、節穴だった。今まで、絶好の機会は何度も訪れてたのに、ただ手をこまねいて見送ってきたんだわ」

「どういうことですか？」

奇狼丸が、身を乗り出した。

「だけど、まだ、チャンスはあるかもしれない。さっきよりは難しくなったけど……でも、もし、逆だったら？　それを、うまく逆手に取ることさえできたら……」

「早季。頼むから、僕らにもわかるように言ってくれ！」

覚が、我慢できなくなったように叫んだ。

「たった一つだけあったのよ。悪鬼を斃せる方法が……！」

5

「ずっと、疑問に思ってたのよ。どうして、よりにもよって、真理亜たちの子供が悪鬼になってしまったのか」

　わたしは、唇を舐め、頭の中を整理しながら話した。

「突然変異によって悪鬼が誕生する確率なんて、本当に、微々たるものなのよ。それが、歴史上で初めてバケネズミの手に落ちた子供に起きるなんていうのは、さらに天文学的な確率になるわ」

「……しかし、やつらが、何らかの操作をした可能性だってあるだろう？　バケネズミは、精神を操る薬も使うっていうし」

「たぶん、それが先入観になってたと思うの。だけど、人間の赤ん坊を手に入れたのは、野狐丸たちにも、初めての経験だったはず。それが、今まで一度も人間には試したことのない薬を使って、好きなように心を作り変えたりできると思う？」

「その手の薬物で、我々が使用しているのは、せいぜい数種類です」

　奇狼丸が、口を挟む。

「我々の先祖であるハダカデバネズミの女王は、尿に含まれる向精神物質で、ワーカーを支配していたそうです。その特徴は我々の女王にも受け継がれていますが、我々の智能が飛躍的に進歩した結果、完全な精神支配は難しくなっており、大麻などを混ぜることで、兵士の恐怖心を取り除く効能を高めています。……しかし、おっしゃるとおり、我々とは種族の違う、人間の赤ん坊に効くかどうかは疑問ですし、ましてや、都合良く攻撃抑制を麻痺させて、悪鬼を創り出すなどという離れ業ができるとは、とても思えませんな」

「じゃあ、どういうことなんだ？　あいつが、悪鬼じゃないとしたら？」

覚は、混乱したように言う。こめかみから流れる血は、まだ完全に乾ききっておらず、見ていて、ひどく痛々しかった。

「……いや、やっぱり、どう考えても、悪鬼としか思えないだろう？　だって、あいつがやったことを見てみろよ！」

「それが、わたしたちの目を曇らせていた、最大の原因だったわ」

話すうちに、わたしの中でも、しだいに論点が整理されていくような気がする。

「あの子が平然とやってのけた大虐殺に対する、恐怖と感情的な衝撃が、わたしたちを、一足飛びに結論に向かわせた。あれは、悪鬼なんだって。そう考えることによって、早く安心したかったんでしょうね」

「安心？　何言ってるんだよ？　どうして、悪鬼なのに安心できるんだ？」

「ラーマン・クロギウス症候群は、少なくとも未知の存在ではないからよ。人間にとって、既知の恐怖は、未知の恐怖に比べれば、まだ受け入れやすいんだと思う」

覚は、腕組みをして、考え込んでしまった。

「あの子が悪鬼じゃないっていう、決定的な根拠があるの。悪鬼には、冷静に頭を働かせる秩序型と、完全に無意識の暗黒面に呑み込まれてしまった混沌型の違いはあるにせよ、周囲に存在するありとあらゆる生命を、無差別に殺し尽くすという点では共通しているわ。もし、あの子が本当に悪鬼だったんなら、なぜ、野狐丸たちは無事でいられるの？」

「……それこそ、薬物を使って、コントロールしてるんじゃないか？」

「無理よ。悪鬼を飼い慣らすことなんて、絶対に不可能。そんなことができるくらいなら、わたしたちの町が、とっくにやってるはずだし、過去に何度となく起きた惨禍も、ずっと被害が少なくてすんだはずだわ。それに、意識が朦朧とするくらい薬漬けに

したとしたら、町を襲って人間を殺すことなんて、できるはずがないでしょう？」

　覚は、ぽかんと口を開けた。

「じゃあ、どうして、やつには、攻撃抑制も愧死機構も無効なんだ？」

「たぶん、無効じゃないんだと思う」

「どういうこと？」

「ごく単純に、考えてみて。あの子は、産まれてすぐ両親から引き離され、バケネズミによって育てられたんでしょう？　だから、自分のことを、バケネズミだと思ってるはずだわ。人間ではなく」

「そうかもしれないけど、それが、いったい……」

　覚は、はっとしたようだった。

「もしかすると、こういうことなのか？　悪鬼……あいつの攻撃抑制は、人間じゃなくて、バケネズミが対象になってるのか？」

「間違いないわ」

　わたしの中でぼんやりと渦巻いていた考えは、今や、確信に変わっていた。自らをバケネズミだと思っているあの子には、同族であるバケネズミを殺すことはできない。しかし、異類である人間なら、何の逡巡もなく抹殺できるのである。

「しかし、だからといって、あんなにも無慈悲に、人を殺せるものだろうか？」

「わたしたちだって、平気でやってるじゃない」

「えっ？」

　覚は、ぎょっとしたようだった。

「相手が、バケネズミの場合には、だけど」

　そう言ってから、聞いている奇狼丸がどう思うかが、少し気になった。

「……なるほど。その通りです。私としたことが、そういう可能性には、まったく気づきませんでした」

　奇狼丸は、隻眼を大きく見開いていた。

「もっと早く、おかしいと感じるべきでした。そもそも、我が精鋭部隊が全滅させられたとき、やつ

は、直接呪力で我が兵を皆殺しにするのではなく、こちらの放った矢を防ぎ、武器を奪うことに専念していました。あのときは、こちらを手も足も出ない状態に追い込んでから、鏖殺しにするつもりとしか思いませんでしたが……。直後に、私は、逃げる途中で悪鬼と遭遇しましたが、まったく攻撃を受けませんでした。あのとき、私とやつの距離は、二、三十メートルしかなかった。私に気づかなかったわけがない」

　奇狼丸は、地響きのような唸り声を漏らした。

「さっきもそうです。お二人が悪鬼と相対していたとき、私は、一個の石礫だけを武器に突っ込みました。あそこであなたがたを失っては、勝負にならないと思ったからですが、正直、逃げ切れるとは思っていませんでした。何とか一人の損失ですめば御の字だったんですが、あのときも、悪鬼は、ただ指をくわえて、わたしたちが逃走するのを見ていた。攻撃しなかったのではない。私を巻き添えにするから、やつには攻撃できなかったのだ！」

　奇狼丸は、頭を掻きむしり、身をよじって悔しがる。

「ちょっと待てよ。じゃあ、こういうことなのか？　あいつが一人でいる間に、奇狼丸が引き返して、襲いかかっていれば……？」

　覚が、震え声で言う。

「ええ。あの子は、奇狼丸に対しては呪力を使えないから、なすすべがなかったはずよ。仕留めるのはたやすかったでしょうし、たぶん、生け捕りにだってできたと思う」

「くそっ！」

　覚が睨んだ洞窟の壁にぴしりと罅が入ったので、一瞬、ひやりとした。

「僕らは、完全に勝利を手中にしていたんだ！　なのに、掌から滑り落ちたことにさえ、気がつかなかった。なんで、もっと早く、よく考えてみなかったんだろう？」

「ねえ、落ち着いて。まだ、遅くないわ」

わたしは、できるだけ平静な声で言った。

「土壇場でも、とにかく、気がついたんだもの」

「いや、せめて、悪鬼……やつが、この脇道の前を横切る前に気づくべきだったんだよ。やつは、野狐丸たちと合流してしまった。今となっては、奇狼丸が単身で突っ込んでも、射殺されるだけだ」

覚は、腕組みをして、深い溜め息を吐いた。

それでも、まだ方法はある。わたしは、そう考えていた。成功の見込みは薄いかもしれないが、ゼロではない。だとすれば、この方法に賭けるよりないだろう。

しかし、ここまで冷酷非情なやり方には、躊躇せざるを得なかった。立場が逆であれば、そう、これが野狐丸だったら、直ちに実行するだろう。しかし、わたしには、どうしても抵抗があった。人間も、バケネズミも、生きており、心臓が鼓動し、熱い血が流れている。笑い、泣き、怒り、考える……知性を持った存在だ。使い捨てにしていいゲームの駒ではないのだ。奇狼丸とずっと行動をともにしている間に、わたしは、そのことを深く感じるようになっていた。

それに、あの子、真理亜と守の忘れ形見のことを考えると、胸が張り裂けそうになる。

町を襲い、建物を破壊して、大勢の罪もない人たちを殺したのは、まぎれもない事実である。わたし自身、いっときは憎悪と復讐心の虜となっていた。

だが、あの子は、悪鬼ではなかった。

あの子には、本来、何の罪もないのだ。両親をバケネズミに殺され、バケネズミによって育てられ、その命令により、大量殺戮を行った。自らをバケネズミと信じていた彼には、何の疑問も、良心の呵責もなかったことだろう。人間とは、彼らを奴隷のように使役し、一方的に殺す悪の権化だと言われれば、そのとおりだからだ。

それだけではない。あの子は、バケネズミの命令

に対して、いっさい逆らうことができないのだ。なぜなら、強固な攻撃抑制と愧死機構に縛られているあの子は、バケネズミを攻撃することは不可能なのに、バケネズミの方では、自由にあの子を攻撃できるからだ。

つまり、あの子は、文字通り、バケネズミの奴隷なのである。

いったい、どんな生活を送ってきたのだろう。真理亜と守が亡くなってから、彼が辿ったであろう過酷な日々のことを思うと、心が疼いてたまらなかった。

しかし、もし、ここで、わたしたちが敗れてしまえば、どうなるだろうか。

生き残った町の人たちは、皆殺しになるか、遠くへ逃げ延びるしか選択肢がないだろう。野狐丸は、あの子を前面に立てることで、他の町からの報復を回避し、時間を稼ぐはずだ。十年のうちには、町から奪った赤ん坊たちが呪力を備えるようになる。そうなれば、もう、手の施しようがない。日本全土は、バケネズミによって征服されるのを待つだけになる。

どうすべきかと悩む贅沢は、許されていなかった。

わたしは、鬼になるしかない。

富子さんなら、きっと、わたしと同じ決断を下すはずだ。

「早季」

覚が、顔を上げた。

「さっき、悪鬼を斃せる方法が、一つだけあるって言ってたよな？」

「ええ」

わたしは、うなずいた。

「それには、まず、敵の位置関係を知る必要があるわ」

わたしたちは、忍び足で、袋小路が隧道と交わる

地点から四、五メートルのところまで、にじり寄った。

隧道からも、まったく音は聞こえてこない。

わたしが手真似で合図すると、覚が、空気中の水蒸気を集めて微細な水滴の層を作り、隧道の左手の目立たない場所に小さな鏡を作った。ゆっくりと鏡を傾けていき、反対側、敵のいる方向を映し出す。見えた。その瞬間、覚は、鏡を消滅させた。わたしたちは、再び、そっと袋小路の奥に戻る。

一瞬だったが、はっきりと確認できた。敵の兵士が五匹、袋小路の入り口から、わずか二十メートルほどの場所に伏せている。さらに、その五メートルほど後ろには、あの子が佇んでいた。

「悪鬼……やつが、場所を移したのは、野狐丸たちと合流するためだけじゃない。僕らを罠にかける目的もあったんだ」

覚が、ひそひそ声で言う。

「不用意にここを出て、逃げようとなんかしてたら、それで終わりだった」

「先鋒に我が同族の兵士を配し、悪鬼を後詰めにしてるのも、理に適った陣立てです」

奇狼丸も、声を潜めながら論評した。

「あれでは、わたしが先頭に立って突っ込むことはできません。先鋒の兵士らに蜂の巣にされるのが落ちでしょう。かといって、お二人が出れば、後ろで目を光らせている悪鬼の呪力によって、八つ裂きにされてしまう」

「野狐丸の姿は見えた？」

「いや……。あの臆病者めは、ずっと後方に引っ込んでるようですな」

わたしたちの目標である悪鬼……あの子は、バケネズミの兵士の背後に守られているが、これは、ほぼ予想通りである。

その一方で、野狐丸が前線にいないというのは、朗報だった。勝負は、一瞬で決まる。野狐丸の頭脳なら、もしかしたら、一瞬で、わたしたちの企みを

看破するかもしれない。だが、後方にいたのでは、行動を起こしたときには、手遅れになっているはずだ。

　野狐丸には珍しい戦略ミスだった。それまで孤立していた『悪鬼』と合流して、不敗の態勢を築いたと信じたとき、あの猜疑心の塊だった野狐丸にも油断が生じたのだ。

　向こうが、そのことに気づかないうちに、迅速に行動しなければならない。

　そして、その切り札になるのが、奇狼丸だった。

「あなたに、お願いしなければならないことがあります」

　わたしは、奇狼丸の方に向き直って言った。

「なんなりと。……勝利に役立つことであればですが」

　わたしは、計画を説明した。

　奇狼丸は、さすがに驚愕の表情になり、言葉を失った。

「そんな……方法があったのか。でも、どうやって、思いついたんだ？」

　覚が、愕然としたように訊ねる。

「瞬が、教えてくれたの」

「シュン？　瞬って……ああ！」

　ようやく、覚の中でも、記憶の封印が破れたようだった。

　しばらく絶句していた奇狼丸が、突然、哄笑した。

「すばらしい。あなたは、一流の戦略家です。……完全にチャンスを逸したと思っていましたが、まさか、こんなに簡単な方法が残されていたとは」

「やってくれる？」

「もちろんです。当面の問題は、臭いですな。我々は風上におり、前線にいる我が同族の兵士たちは、こちらの臭いを簡単に嗅ぎ分けますから」

「そうね……」

　わたしたちは、袋小路の中を捜して、壁からかな

りの量の水が流れ落ちているのを見つけた。雨は、依然として強く降り続いており、水が涸れる心配は、当分はなさそうだった。

奇狼丸は、身体をていねいに水で洗い、泥をなすりつけた。覚は、着ていた服をすべて脱ぐ。

「コウモリの糞があれば、完璧だったのですが、まあ、これでも、相当わかりにくくなったはずです」

奇狼丸が、自分の身体の臭いを嗅ぎながら言う。

「これだけじゃ、まだ不完全でしょうね。……覚。隧道の風向きを変えられる？　ほんの数秒でいいんだけど」

覚は、難しい顔になった。

「鏡も作らなきゃならないからな。でも、数秒くらいだったら、何とかなると思う」

それから、かすかな笑みを浮かべる。

「瞬だったら、同時に二つぐらいの技を使うのは簡単だったのにな。……ここを切り抜けられたら、君が思い出した、瞬の話を聞かせてくれよ」

「ええ」

覚に話したいことは、山ほどあった。

奇狼丸は、覚の脱いだ服を着るために悪戦苦闘していたので、わたしたちも手伝った。そもそも身体のつくりが違うために、かなり無理はあったものの、何とか押し込むことができた。これで、隠さなければならないのは顔だけになった。

「そうだ。こいつを使おう」

覚は、腕やこめかみの出血を押さえていた包帯を解いた。こびりついている瘡蓋を引き剥がすと、傷口から新しい血が溢れ出てきたが、もはや、意に介した様子もない。

「なるほど。これなら、騙せるでしょうな。悪鬼も、サイコ・バスターが燃えたときに、顔に火傷を負ったのだと思うかもしれませんし……」

奇狼丸は、覚から受け取った血まみれの包帯で、頭部をぐるぐる巻きにする。

「さあ、これで準備万端整いました。ですが、その

前に、今度は私から、お二人にお願いしたいことがあります」

木乃伊（ミイラ）男のように不気味な風体になった奇狼丸が、改まった口調で言った。

「いいわ。何でも言ってみて」

「これが終われば、おそらく、町の方々は、すべてのバケネズミを駆除せよという意見に傾くと思います。しかし、どうか、我が大雀蜂コロニーの女王だけは、救ってください。コロニーの構成員すべての命であり希望である……我が母だけは」

「わかった。約束するわ」

「僕も約束する。どんなことをしても、必ず君の女王は救い出すし、殺させたりしない。コロニーも、きっと再興させる」

特徴である大きな口は包帯で隠されていたが、奇狼丸は、にやりとしたようだった。

「それだけ聞けば、思い残すことはありません。あの口先三寸の外道の野望を、とうとう木っ端微塵に打ち砕いてやれると思うと、わくわくして待ちきれませんな」

わたしたちは、袋小路と隧道の交点の近くまで、にじり寄った。

「じゃあ、さっき決めた手順のとおり、わたしが十から逆に秒を読んでいくから、ゼロでスタート。今度は、一から順に秒を数えていく。一で、覚が、風を止める。二、三、四で、風を逆転し、鏡を作る。五、六、七で、わたしが、攻撃する。そして、八で飛び出す……」

「わかった」

「了解しました」

わたしは、ゆっくりと深呼吸した。

あと一分以内に、すべての正否が決まる。そう思ったら、脚が震え始めた。あれだけの修羅場を連続してくぐってきたのだから、度胸が付いたと思っていたのに、いざとなると、やっぱり恐ろしかった。

わたしは、死ぬかもしれない。

まだまだ、やりたいことは、いっぱいあったのに。こんな地の底で、意識が無に帰して、身体が朽ち果ててしまうことになるかと思うと、たまらない気持ちだった。

いや、そうじゃない。

本当に怖いのは、犬死にすることだ。悪鬼を斃すこともできず、ただ、無駄に命を落とすこと。今はの際に、野狐丸の凱歌を聞かされ、すべての人たちに、力不足を詫びながら逝かなければならないことだった。

緊張に、口の中がからからになり、軽い眩暈さえ感じる。

落ち着け。

目の前の使命に集中するんだ。

わたしは、懸命に、自分に言い聞かせた。

「じゃあ、準備はいいわね？　十、九、八、七……」

カウントダウンの間、心臓が激しく動悸を打ち出した。身体が、これから始まる戦いに備えようとしているのだ。

「三、二、一、ゼロ」

隧道の中の風が、急速に弱まっていく。覚が、隧道の左手奥に壁を作って、風を遮っているのだ。さらに、空気レンズを作るときと同じイメージで、壁の手前に真空地帯を作る。

「一」

同時に、空気中の水蒸気を凝結させ、鏡が形作られていく。

「二、三、四」

覚は、真空の手前側を、少し解放した。陰圧で、止まった風が、今度は逆に吹き始める。袋小路にいるので、直接、肌で感じることはできなかったが、細かい埃に目を凝らすと、たしかに、逆方向に微風が吹いているようだ。今度は、鏡がゆっくりと向きを変えていき、我々の右手、敵の布陣を映し出す。

わたしは、鏡に映った敵兵の一匹を選んだ。今回

は、静かに首を捻るより、少し派手なやり方をしなくてはならない。口の中で、静かに真言を唱える。

「五」

　敵兵の頭部が、血煙を上げて、粉微塵に吹き飛んだ。

「六」

　恐慌に陥った敵兵は、いっせいに銃を乱射し始めた。制止しようとする野狐丸の声も、聞こえないようだ。火縄銃は、いったん発射してしまうと、次弾を込めてから撃つまでに時間が必要になる。

「七」

　銃声が途絶えた。わたしは、二匹目を宙に持ち上げると、天井に叩きつけた。砕けた岩が、血潮や肉片とともに、敵兵の上に降り注いだ。残る兵士は、三匹。一匹が逃げ出すと、他の兵士も、次々にそれに倣った。

「八！」

　奇狼丸が、飛び出した。わたしも、その後に続く。

　多少不格好だが、バケネズミとしては飛び抜けて大柄なこともあり、後肢だけで地面を蹴って走る姿は、暗い隧道の中では、人間と見分けるのが困難だろう。奇狼丸の肩越しに、前方に立ちはだかる小さな姿が見えた。血のように赤い髪。あの子だった。怒りの形相も露わに、こちらを凝視している。

　人間に扮している奇狼丸の演技は、見事の一言だった。バケネズミのふりをして危地を脱した乾さんに、勝るとも劣らないに違いない。走りながら、あたかも呪力を使うような身振りで、逃げ遅れた兵士を指さす。

　即座に、黒子役のわたしが、見えない刀を振るい、その兵士の首を刎ねた。狭い洞窟の中は、血腥さで、呼吸が苦しいほどになる。

「ギ★＊∀§▲Ж……AДヲヹ！」

　悪鬼……あの子が、とても人間の子供とは思えない声で咆吼した。

前を疾駆していた奇狼丸が、ふいに見えない壁にぶつかったかのように、ぴたりと立ち止まる。

奇狼丸の胴中が爆発し、向こう側が見えるほど大きな穴が貫通した。わたしは、頭からその血飛沫を浴びた。腸が背中から飛び出し、地面に垂れ下がるのが見える。

「ギ★＊∀§……」

何かがおかしいと感じたのだろう。あの子は、ふいに唸り声を止めると、あらためて、まじまじと奇狼丸の姿を見た。

人間であれば、意識を失うどころか即死していたはずだ。しかし、奇狼丸は立っていた。まだ、やるべきことが残されているのだ。痙攣する右手を上げて、頭を包んでいた包帯を外していく。

さっきまでの阿鼻叫喚が嘘のように、洞窟の中は、しんと静まりかえっていた。

奇狼丸は、包帯を解き終わり、バケネズミの頭部が露わになった。あの子は、凍りついたように立ちつくしていた。

「ΠϒガШ▼Ë……⊿……」

奇狼丸は、最後に、何かバケネズミの言葉を吐き出すと、ばったりと、その場に倒れた。わたしは、思わず奇狼丸のところに駆け寄る。すでに絶命しているのは、あきらかだった。しかし、その大きな口には、会心の笑みを浮かべているように見えた。

前方から、恐ろしい悲鳴が上がり、わたしは、顔を上げた。

「ΠϒガШ▼Ë……◎⊿……？」

悪鬼……あの子は、愕然とした様子で、小刻みに震え始めた。赤毛の下の額には、玉の汗が浮かんでいる。

目を逸らしたかったが、わたしは、あえて、唇を噛みしめ、その姿を見つめ続けた。

あの子、真理亜と守の息子は、地面に膝をつき、左胸を押さえた。

呪力によって同胞を殺害したという認識が、愧死

機構を発動させたのである。

唇を噛みしめていた、わたしの口の中に、鉄のような血の味が広がった。

逃れる術はない。あの子は、これで……。

そのとき、左胸に、ずきりとする疼痛（とうつう）を感じた。異様な悪寒が背筋を駆け上がってきて、全身の毛が逆立つような感じだった。

それは、まさに青天の霹靂（へきれき）だった。わたしもまた、罰を受けるのだろうか。

予想もしていなかったが、同じ人間であるあの子を、結果的に死に至らしめようとしている以上、けっして考えられないことではない。

背後から、覚が駆け寄ってきた。

「早季？　どうしたんだ？」

気分が悪い。わたしは、半ば死を覚悟しながら、胸を押さえた。そして、必死になって、自分に言い聞かせる。わたしは殺していない。わたしは殺していない。わたしは、殺していない……。

ふと、なぜ自分は生き続けたいと願うのかと、不思議に感じた。愛する人たちを次々に失って、これほど多くの屍を乗り越えながら。それでも、なぜ。

だが、気がついたときには、痛みは去っていた。わたしは、まだ生きているのだろうか。顔を上げると、覚は、心底ほっとしたように微笑んでいた。

「心配いらないよ。……もう、だいじょうぶだから」

彼は、わたしを、痛いくらい、きつく抱きしめる。

わたしは、たしかに、あの子を死へと追いやった。しかし、直接攻撃したわけではない。そのため、愧死機構は発動せず、その前駆である警告発作だけですんだらしかった。

もう一度、あの子の方に目をやる。地面に横たわった小さな姿は、ぴくりとも動かない。すでに事切れているようだ。

その傍らに、野狐丸が、茫然と立ちつくしてい

た。

遺体から地面に垂れた髪の色彩が、わたしの目に飛び込んでくる。それは、在りし日の真理亜を彷彿とさせるような赤だった。

わたしの親友が、この世に残した唯一の証……あの子を死なせたくはなかった。だが、こうする以外に、どうしようもなかった。

涙が、頬を伝って流れ落ちた。

もし、普通に町で生まれていたら、きっと、とても愛らしい、利発な少年に育っていたに違いない。あの子には、何の罪もなかった……。

今でも、自分の行為の罪深さを思って、ときどき空恐ろしくなることがある。そして、叶わぬことだったとはわかりつつも、思わずにはいられないのだ。せめて、最期だけは、人間として迎えさせてやりたかったと。

神々の黄昏（ラグナロック）を思わせた、恐ろしい戦いと混乱は、急速に収束へと向かった。

切り札を失った野狐丸には、戦いの帰趨が最後まで見えたのだろう。すでに、抜け殻も同然となっていた。わたしたちは、野狐丸らを拘束した上で、彼らの船を接収して、町へ凱旋した。

人々は、町を捨てて逃亡する決心を固めており、すでに出発した人も多かったようだ。だが、わたしたちから、『悪鬼』が死んだことを聞かされると、状況は、一変した。

富子さん、倫理委員会のメンバーは、大半が亡くなってしまったため、それに代わり、臨時の最高意思決定機関である秩序回復委員会が組織され、バケネズミに対する本格的な反攻に着手したのだ。

そして、そのメンバーには、若年ながら、わたしと覚も選ばれた。

これまで町を指導してきた層が、ごっそりと失われてしまい、年齢を問うような余裕はなかったのだ。メンバーの大半は、バケネズミとの戦いの中で

頭角を現した、二十代から三十代の青年たちだった。

犠牲者の中には、わたしの両親も含まれていた。

そして、覚の家族全員も。

そのことを知り、わたしは、慟哭した。もう、涙など涸れ果てたものと思っていたのに、後から後から、涙は滂沱と流れ、何日も尽きることはなかった。

後に、両親と会ったという人たちから、話を聞くことができた。それによると、二人が町に戻ったとき、戦況は、重大な局面を迎えていたようだ。

『悪鬼』に殺された鏑木肆星氏の遺骸は、野狐丸により、八丁標の綱の上に曝された。それを見た人々の恐怖は、並大抵のものではなかったらしく、多くの人は、抵抗する気力を失ってしまい、ただ逃げまどうだけだった。そのために、『悪鬼』の恐怖を背景にした、バケネズミの『狩り』は、一方的なものになり、百人近い人々が捕らえられた。

この段階では、野狐丸は、殺戮よりは、人質を取ることを優先するようになっていた。そうして敵に拘束された多くの人たちは、呪力を発動できないように目隠しを付けられ、檻に入れられていたらしい。

その一方で、戦いを諦めなかった若者たちは、『悪鬼』と遭遇しないよう細心の注意を払いながら、バケネズミの部隊に対して繰り返し奇襲をかけて、着実に敵の戦力を目減りさせていったらしい。

そうした中、町に到着した両親は、学校などの施設を回って、不浄猫を解放していった。

不浄猫は、わたしが思った以上に、高い智能を持っていたようだ。目標の臭いが付いた遺留物があればもちろんのこと、念写した写真を見せただけでも、正確に目標を記憶し、何週間にもわたって付け狙うことができるというのだ。

両親が放した不浄猫は、全部で十二頭いたらしい。彼らは、町の廃墟に身を隠しつつ、虎視眈々と

『悪鬼』を殺す機会を窺った。そして、そのうち一回は、ほとんど成功しかけたらしい。

本来、別々の場所から放たれた不浄猫が、『悪鬼』を発見すると、まるで話し合いでもしたかのような協働作戦を展開したのだという。少し離れた建物の屋上から見た人の話によると、それは、こういう経過を辿った。

バケネズミの護衛兵に守られた『悪鬼』が、通りを南下してきたとき、東西から別々の不浄猫が接近してきた。西からは茶色、東からは灰色の毛並みを持った猫が。風上にいた茶の方は、バケネズミの嗅覚で臭いを感知され、護衛兵は西側を固めた。その隙を狙って、東から灰色猫が猛ダッシュをかけたのだ。

まるで、それを待っていたかのように、第三、第四の刺客である黒と三毛が、『悪鬼』の背後である北側から殺到してきた。三毛の方は、すばやく迂回すると南側に回り込む。『悪鬼』は、その瞬間、三匹の不浄猫に囲まれることになり、絶体絶命に見えたらしい。鏑木肆星さんのような超絶技巧の持ち主でもない限り、一、二頭の犠牲は覚悟の上での、三頭同時の攻撃は、対処が困難なはずだった。

だが、ぎりぎりのタイミングで、『悪鬼』の周囲を防御した数匹の護衛兵が、不浄猫の攻撃を跳ね返してしまった。護衛兵は、針鼠のような棘で覆われたミュータントであり、殺しに長けた不浄猫も、排除するまでに数秒の時間を要した。前肢の一撃で針鼠兵を倒し、柔らかい腹を切り裂く間に、態勢を立て直した『悪鬼』が、呪力で三頭を屠るのに充分な時間を与えてしまったのだ。

結局、不浄猫は、『悪鬼』を仕留めることはできなかった。だが、『悪鬼』の足取りを鈍らせる役目は、充分に果たしたらしい。その間に、相当数の人々が、町から逃げ延びることができたのだから。

わたしの両親は、不浄猫が『悪鬼』を足止めしている間に、図書館へ行って、敵の手に落ちると危険

と思われた書籍や文書類を、すべて焼き捨てることに成功した。ところが、その煙が、敵に不審を抱かせることになったらしい。二人が図書館から出てきたときに、『悪鬼』と、ばったり鉢合わせしてしまったのだ……。

町に殉じた他の人々の場合と同様に、両親の死は、けっして無駄ではなかったと思う。しかし、形勢は、徐々にはっきりしてきた。敵の切り札である『悪鬼』に対処する方法がないため、人間側の非勢は、目を覆うばかりの状態だったのだ。

ところが、そこに来て、突然、『悪鬼』の挙動がおかしくなったという。攻撃を躊躇うようになったばかりか、心ここにあらずという様子で、放心している様が目撃されている。そのお陰で、やはり多くの人命が失われずにすんだという。原因は不明だったが、どうやら、清浄寺で行われていた悪鬼調伏のための護摩が、効力を発揮したということらしかった。

野狐丸は、捕虜を拷問にかけることによって口を割らせ、そのことに気づいたらしい。『悪鬼』と、野狐丸率いる精鋭部隊は、すばやく反応した。町の周辺から姿を消したかと思うと、ほどなくして清浄寺は焼け落ちたらしい。無瞋上人、行捨監寺以下、僧侶の大多数は寺と運命を共にし、ついに、『悪鬼』の行動を掣肘するものは、何もなくなった。

そして、おそらく、清浄寺において何らかの情報を得たため、野狐丸は、わたしたちを追ってきたのだ。

話を、元に戻そう。『悪鬼』が死んだという情報は、またたく間に広まり、人々の心を悪霊のように支配していた恐怖は一掃された。代わって取り憑いたのは、激怒と復讐心という名の双子の怪物である。

そして、それと符節を合わせるようにして、近隣の町である北陸の胎内84町や中部の小海95町からの救援も到着した。

形勢は、たちまち逆転した。

バケネズミは、『悪鬼』という最終兵器に加えて、頭脳である野狐丸まで一挙に失い、さらに、スミフキなどの、対人間用に創り出したミュータントも、すべて使い切っていた。もはや、切るべきカードは残っておらず、近隣の町から派遣された鳥獣保護官らによって厳重な包囲網が敷かれていたため、逃亡することも不可能だった。

野狐丸に代わって塩屋虻コロニーの指揮を執った、スクィーカーという将軍は、奪い取った赤ん坊を、一人残らず返還するとともに、和平を求める特使を派遣してきたが、秩序回復委員会は、特使を五分で剝製に変え、丁重な断りの文面を口に咥えさせて送り返した。次に、無条件降伏するから兵士の命を助けてほしい旨の文書を持参した使者は、呪力によって生きたまま遺伝子を変異させられ、まったく原形をとどめない癌細胞の塊のような姿になって帰された。

事ここに至っては、スクィーカーも、とうとう覚悟を決めたらしく、全軍を率いると、玉砕覚悟の進軍を開始したのである。

とはいえ、バケネズミの軍勢は、あっさり討ち死にすることなど許されるはずもなく、全員が、怒り狂い、復讐に燃える人間たちから、一寸刻み、五分試しの憂き目に遭ったのだった。

わたしと覚も、バケネズミの掃討作戦に参加していたが、そのときの様子を、事細かに描写することはしたくない。

ただ、どうしても、忘れられないことが、二つある。一つは、広い平原が血で染まり、あたり一面が血腥い靄のようなもので覆われていた、異様な光景。そして、もう一つは、齧歯類特有の甲高い悲鳴が、無数に合わさって木霊する声だった。それは、どう聞いても、大勢の人間が叫んでいるようにしか聞こえなかったのである。

一週間ぶりに見る野狐丸は、およそ精気というものが抜け落ちており、身体の大きさも縮んでしまったようだった。

石畳の上に座り、鎖に繋がれたバケネズミは、顔を上げて、わたしたちを見た。

「野狐丸。わたしたちを、憶えてる？」

わたしの問いかけにも、ごく曖昧な反応しか示さない。

「わたしは、保健所の異類管理課にいた、渡辺早季。こっちは、妙法農場の朝比奈覚よ」

「……憶えています」

ようやく、嗄れた声が返ってくる。

「東京の地下の洞窟で、我らの救世主（メシア）を殺し、私を捕らえた方たちだ」

「何を言う。僕らが、殺したわけじゃない！」

覚が、かっとなったように叫ぶ。

「おまえが、卑劣な奸計を巡らして、真理亜と守を殺したんじゃないか？　その遺児は、おまえのせいで、大勢の人を殺してしまったんだ！　こうなった責任は、すべて、おまえにある」

野狐丸は、答えなかった。

「この後、おまえは、裁判にかけられる。でも、その前に、どうしても、おまえに訊いておきたいことがあるの」

わたしは、静かに言った。

異類が審判を受けることは、普通はありえないのだが、秩序回復委員会で、今回限りの特別法廷を開催することに決まったのである。今から千数百年前にヨーロッパで行われていた動物裁判を参考にして、初めて、人間以外の被告が断罪されるのだ。だが、おそらく、野狐丸には、ほとんど発言の機会は与えられないだろうし、ましてや、正直な答えは聞けないだろうと思われた。

「なぜ、おまえは、あんなことをしたの？」

「あんなこと……？」

野狐丸は、かすかに笑ったようだった。

「おまえの罪状は、数え切れないほどのものだと思う。でも、なぜ、あそこまで無慈悲に、罪もない人を虐殺したのか、その理由を聞きたいの」

野狐丸は、不自由な姿勢から頭を巡らせて、わたしを見た。

「すべては、戦術の一環でしかありません。戦端を開いてしまった以上は、勝たなくてはならなかった。負ければ……今の私のような末路が待ってるんでね」

「じゃあ、なぜ、人間に反逆しようとしたの？」

「我々は、あなたがたの奴隷ではないからだ」

「奴隷って、どういうことだ？　たしかに、貢ぎ物や役務の提供は求めたかもしれないが、お前たちには、完全な自治を認めていたじゃないか？」

覚が、語気鋭く突っ込む。

「ご主人様のご機嫌が麗しいときはね。しかし、いったん、些細な理由で逆鱗に触れれば、たちまち、コロニーごと消滅させられる運命です。奴隷より悪いかもしれない」

わたしは、奇狼丸の言葉を思い出した。言っていることは、ほぼ同じである。

「コロニーを抹消するっていうのは、一番重い処分よ。よほどのことがなければ、そんなことはしないわ。……それこそ、人間を殺傷したり、反逆を企てたりしなければ」

わたしは、異類管理課の行った過去の処分を思い返していた。

「鶏が先か、卵が先か……。いずれにせよ、我々は、まるで淀みに浮かぶ泡沫のように、不安定な立場です。そこから脱したいと願うのは、当然のことではないですか？」

野狐丸は、昂然と頭を上げ、歯を剥き出して喋った。

「我々は、高度な知性を持った存在です。あなたがたと比べても、何ら劣るものではない。違いはといえば、呪力という悪魔の力を持つか否かだけだ」

「聞き捨てならないな。今の発言だけでも、充分、死刑に値するんだぞ？」

覚が、冷然と野狐丸を見下ろした。

「どのみち、運命は変わらんでしょう」

野狐丸は、肩をすくめるような身振りをする。

「おまえは、コロニーのためのようなことを言ってるが、奇狼丸は、違う意見のようだったぞ。コロニーを融合するのはいいとしても、女王の権力を簒奪（さんだつ）して、まるで子供を産む家畜のような扱いをしたことは、どう正当化するんだ？」

「奇狼丸は、勇猛な将軍ではあったが、旧弊な思想に凝り固まった爺い（じじ）にすぎなかった。やつには、まったく本質が見えていなかった。コロニーの実権を女王が握っている限り、改革など不可能だということを。私が、革命をもたらそうとしたのは、自分のコロニーのためではないのだ」

「じゃあ、何のためだ？　おまえの醜い権力欲を満足させるためか？」

「コロニーなどという小さな枠組みを超えて、すべての我が同胞のためだ」

「同胞のため？　調子のいいことを言うな。おまえは、自分の兵士を平気で捨て駒にしたじゃないか？」

「先ほども言ったように、全部、戦術の一環ですよ。勝たなければ意味がない。勝てば、あらゆる犠牲は報われる」

覚は、舌打ちした。

「あいかわらず、よく舌の回るやつだ。しかし、残念だったな。勝たなければ意味がないらしいが、おまえは、負けたんだ」

「そう。私が万死に値するのは、その一点です。救世主（メシア）という絶対的な切り札を得ながら、単純なトリックにまんまと引っかかり、すべてを失ってしまった」

野狐丸は、がっくりと頭を垂れた。

「歴史を変えられたはずだった……。すべての同胞

を解放するという、壮大な夢は破れた。これほどの好機は、おそらく、もう二度と訪れないだろう」

「早季。行こう。これ以上、こいつと話をしたって、時間の無駄だ」

「ちょっと待って」

わたしは、きびすを返しかけた覚を引き留めた。

「野狐丸」

「私の名は、スクィーラです」

「じゃあ、スクィーラ。あなたに、ひとつだけ、頼みたいことがあるの。あなたが殺した人たち全員に対して、心の底から謝罪して」

「いいですとも」

野狐丸……スクィーラは、皮肉な口調で言った。

「その前に、あなたがたが謝罪してくれればね。あなたがたが、何の良心の呵責もなく、虫けらのように捻り潰した、我が同胞全員に対して」

裁判は、一言で言えば、グロテスクな茶番劇だった。

野狐丸の罪状が、次々に述べられていくと、満員の観衆（おそらく、生き残った町の人の中で、重病人や重傷者を除く全員が出席していただろう）は、どよめき、口々に怒りの声を上げた。

検事役の木元さんという女性（以前は富子さんの部下だった）は、観衆を充分煽ったと判断すると、被告席に繋がれている、野狐丸の方に向き直った。

「では、野狐丸。おまえに弁明の機会を与えよう」

「私の名は、スクィーラだ！」

スクィーラは、叫んだ。激しいブーイングが起きる。

「獣であるおまえに、町より下された、有り難い名前を、不遜にも否定するのか？」

「私たちは、獣でも、おまえたちの奴隷でもない！」

この言葉で、観衆の怒りは、最高潮に達した。漏出した呪力により、臨時の法廷の中は、頭が痛くな

るような緊張した気に包まれる。しかし、死を覚悟していたらしい野狐丸は、怯まなかった。

「獣でないとしたら、おまえは、いったい何なのです？」

スクィーラは、ゆっくり法廷の中を見渡した。一瞬、わたしと視線があったような気がして、どきりとした。

「私たちは、人間だ！」

一瞬、観衆は、静まりかえった。それから、どっと爆笑が起きた。笑い声が続いている間は、木元さんも、苦笑いしているしかなかった。ようやく、静かになると、木元さんの機先を制して、スクィーラが叫ぶ。

「好きなだけ、笑うがいい。悪が永遠に栄えることはない！　私は死んでも、いつの日か必ず、私の後を継ぐものが現れるだろう。そのときこそ、お前たちの邪悪な圧政が終わりを告げるときだ！」

法廷は、大混乱に陥った。多くの観客が、ここで今すぐスクィーラを八つ裂きにしろと、こめかみに青筋を立てて叫び始めたのだ。

「待ってください。みなさん、待って……！」

木元さんが、懸命に、場内を静めようとする。

「聞いてくださーい！　聞いて！　そんなのじゃ、ぬるすぎる！　ただ、殺すだけじゃ、甘すぎます。そうでしょう？　この悪魔がやったことを、思い出してください。あっさり楽にしてやっても、いいんですか？　わたしは、この外道に、無間地獄の刑を求刑します！」

やんやの大喝采が起こった。

わたしは、そっと、法廷を抜け出した。覚も、続いて出てくる。

「どうしたんだ？　やつには、当然の報いだろう？」

「そうかな……」

「何言ってるんだよ？　君のご両親も、僕の家族も、町の人たちも……数え上げたら、きりがないだ

ろう？　みんな、あいつのために殺されたんだぜ？」

「うん。でも、残酷な復讐をすることに、何の意味があるの？　さっさと命を奪ってやればいい」

「それじゃあ、みんな、収まらないんだ。聞いてみろよ。あの声を」

熱狂した観客の声は、たぶん、何キロも先から聞こえることだろう。それは、やがて、規則正しく、『無間』、『地獄』と連呼する声に変わっていった。

「わたしには、わからない……何が、正しいのか」

わたしは、つぶやいた。

およそ半日の裁判を経て、スクィーラには、求刑通りに、無間地獄の刑が宣告された。それは、全身の神経細胞から脳に極限の苦痛の情報を送りつつ、呪力によって損傷を常に恢復させ、死んだり発狂したりという逃げ道を許さない、究極の刑罰だった。

スクィーラは、その状態のまま、百年の長きにわたって生き続けるはずだった。

富子さんの言葉が、よみがえる。未だかつて、どんな生物も味わったことのないほどの苦痛の中で、ゆっくりと命を奪ってやるという約束が。

それは、今、現実のものになった。

だが、わたしの胸の中に残されたのは、底知れない空虚さだけだった。

6

わたしは、あちこち回って、ようやく掻き集めてきた野菜屑や球根を、ボウルに入れた。食欲旺盛なハダカデバネズミたちには少なすぎるが、今は、人間のための食糧も不足気味なのだから、贅沢は言えない。

まだ、破壊の跡も生々しい保健所の中を抜けて、飼育室の残骸に入る。建物は、屋根がきれいに消失して青空が見えるが、四囲の壁は途中まで残っている。巣の代わりにしていたガラス管は、一部が破損して危険な状態だったので、三十五頭のハダカデバネズミは、自然の状態と同様に、地面に掘った穴の中で生活している。壁は、地中深くまで続いているので、彼らが脱走して野生化することはないはずだった。

野菜屑を餌場に撒くと、かすかな振動を聞きつけ、働き鼠（ワーカー）たちが次々に穴から出てきた。最後に現れたのは、女王の沙裸美（さらみ）と、愛人である雄たちだった。サラミ・ソーセージそっくりの巨体を揺すって、ワーカーたちを追い散らすと、自分たちで餌を独占する。

あれほどの破壊と殺戮の後で、この連中が無事だったのを知ったときには、よかったと喜ぶより、何だか拍子抜けし、理不尽な感じさえ抱いたものである。とはいえ、もちろん、ハダカデバネズミには何の罪もない。殺処分にするわけにもいかないし、放したりすると、環境に悪影響を及ぼす可能性がある。そのため、とりあえず、飼い続けることになったのだった。

それにしても、見れば見るほど、げんなりさせられる生き物だった。容姿の醜さもさることながら、近親相姦を行い、排泄物まで食べるという習性も、およそ共感を持ちにくい。前から思ってはいたが、なぜ、こんなに醜悪な生き物に、わざわざ呪力で品

種改良を施し、人間並みの智能を持った存在に変えたのだろうか。

餌やりを終えて、わたしは、保健所に戻った。建物は、補修が困難なくらい壊されていたが、火事にはなっていないので、書類の大半は無事だった。数日のうちに必要なものを選別して、新しい建物に移動させなければならない。

異類管理課は、保健所の指揮下を離れて、新しい倫理委員会の直属の組織になるのだ。そして、わたしは、倫理委員会のメンバーと、異類管理課の初代の課長を兼任することが決まっていた。その初仕事は、倫理委員会を説得して、関東近郊のすべてのバケネズミを駆除するという決定を覆すことである。人類に忠実な陣営のコロニーにまで懲罰を与えるというのは、どう考えても無意味だからだ。最悪の場合でも、奇狼丸と約束したとおり、大雀蜂コロニーの女王だけは、何としても救わなくてはならない。

柳行李（やなぎごうり）五十箱分の書類に目を通すのは、容易な作業ではなかったが、わたしは、誰の助けも借りずに、独力でやろうと決めていた。異類管理課の書庫の奥深くしまい込まれて、これまで目に触れる機会のなかった書類を見ていくうちに、様々な疑問が湧いて来たためだった。

もしかすると、これらの書類の一部は、関係のない人間には、けっして読ませてはならないものかもしれない。心の奥で、何かが、そう警告しているような気がする。

この日も、新たに出てきた文書のいくつかが、ひっかかった。まだ、チェックしなければいけない書類は、山のように残っているのだが、どうしても、それらの文書に見入ってしまうのを止められない。今日は、それ以外に、どうしてもやると決めていることがあったから、あまりぐずぐずしていられないのだが。

「早季」

壊れた戸口から、ふらりと入ってきたのは、覚だ

った。
「ねえ、また、変な文書が出てきたの。聞いてくれる？」
　覚は、何か言いたいことがあったようだが、短く「ああ」と答える。
「最初のは、英文から翻訳された文書みたいなんだけど、バケネズミの学名に関することなのよ。先祖のハダカデバネズミは、『Heterocephalus glaber』という学名だったらしいの。『Heterocephalus』は、ギリシャ語で『異なった頭』、『glaber』は、『禿頭』っていう意味ということなんだけど……」
「うん。それで？」
　覚は、眉を上げた。
「人間の学名は『Homo Sapiens』でしょう？　『同じ（ホモ）』と『異なる（ヘテロ）』って、ちょうど逆の意味じゃない？」
「それは、単なる偶然だろう？　昔から存在する生物の学名は、古代文明で付けられたものだし」
「もちろん、そうよ。だけど、この文書が、バケネズミの学名として提案しているのが、まるで、その二つを組み合わせたみたいな、『Homocephalus glaber』なの。おかしいとは思わない？」
　一笑に付されるかと思ったが、覚は、なぜか、ひどく深刻な顔になった。
「……それで、その学名は、採用されたのかな？」
「わからない。図書館にある資料を見てみないと。あと、もう一つ、和名をバケネズミとすることについての提案書が出てきたの。どちらも、日付の部分が薄れてて読めないけど、紙の状態からすると、数百年前に書かれた文書だと思う」
「じゃあ、まさに、バケネズミが誕生した頃のものだろうな」
　覚は、瓦礫が散乱している保健所の中を見回すと、壊れていない椅子を見つけて、腰を下ろした。
「それが、『化け鼠』の『化』という文字の成り立ちに言及してるんだけど、その出典が古代の漢和辞

典なの。いい？『人と、そのひっくりかえったさま（亻＝匕）とにより、人が形を変える、ひいて［かわる］意を表わす』……。漢和辞典に当たってみたんだけど、その記述の部分だけが、今は削除され、第四分類の『訞』扱いになっているのよ」

　覚は、再び立ち上がると、落ち着かない様子で、保健所の中をうろうろと歩き回った。

「覚……。どうしたの？」

「いや。このことは、君には言わないでおこうと思ったんだが」

「何のこと？」

「調べてみたんだよ。バケネズミの遺伝子を」

　わたしも、思わず、立ち上がった。

「でも、どうして？」

「ずっと、気になってたんだ。あの裁判で、野狐丸……スクィーラの言った一言が」

「……わたしもよ」

　木元さんが、「獣でないとしたら、おまえは、いったい何なのです？」と訊ねたとき、スクィーラは、「私たちは、人間だ！」と答えた。それが、ずっと、わたしの心に引っかかっていたのだ。彼は、人間に対して、激しい憎悪を抱いていたはずではなかったか。それが、なぜ、自分たちを指して『人間』などと言ったのだろう。

「農場の近くにあったバケネズミの死体の一部を、こっそりと冷凍保存しておいたんだ。君は知らないかもしれないけど、バケネズミの遺伝子は、倫理規定により、あらゆる分析、研究が禁止されている。今までは、その理由がわからなかったけど」

「それで、どうだったの？」

　わたしは、固唾を呑んで訊いた。

「DNAを解析するまでもなく、あきらかだった。バケネズミの染色体は、性染色体を含めて、二十三対だったんだよ」

　そう言って、覚は、かすかに首を振った。

「何、それ？　意味がわからないんだけど。わかる

ように言って」

「先祖であるはずのハダカデバネズミの染色体は、三十対なんだ。つまり、成り立ちからして、まったく別の生き物ということになる」

「つまり……バケネズミと、ここで飼ってるハダカデバネズミは、元々、関係がないっていうことなの？」

「いや。バケネズミの持っている形質の、かなりの部分は、ハダカデバネズミの遺伝子を組み込まれたために生じたとしか思えない。ただ、ベースになる生き物は、別にいたことになるんだ」

「それは……まさか」

「人間の染色体も、二十三対だ。ほかに、二十三対の染色体を持つ生物は、僕の知る限り、オリーブの木くらいなんだよ。まさか、バケネズミが、オリーブの木から創り出されたとは思えないだろう？」

　バケネズミが、人間ではないかと、うすうす疑うようになったのは、いつ頃からだっただろうか。

　唐突に、夏季キャンプでミノシロモドキを捕らえたときに、瞬がした質問が、わたしの脳裏に浮かび上がった。

「……奴隷王朝の民や狩猟民たちは、呪力……PKがなかったんだろう？　その人たちは、いったいどこへ行ったんだ？」

**　それに対するミノシロモドキの答えは、不得要領なものでしかなかった。**

「その後、現在に至る歴史について、信頼のおける文献はきわめて少数です。そのため、残念ながら、ご質問の点に関しては不明です」

　背筋を、悪寒が走った。わたしたちの先祖である呪力を持った人々が、呪力を持たないそれ以外の人間を、バケネズミに変えてしまったというのか。

「でも、どうして？　いったい何のために、そんなことをしたの？」

「目的は、はっきりしてると思う」

覚は、陰鬱な声で言った。

「呪力を手にしてからの人類は、それまで以上に血みどろの歴史を刻んできた。ようやく安定が訪れたとき、呪力による対人攻撃を不可能にしようとして、攻撃抑制と愧死機構を遺伝子の中に組み込んだんだ。だが、そうなると、厄介な問題として浮かび上がったのは、呪力を持たない人間の扱いなんだよ」

「どういうこと？」

「それまで、呪力を持った人間は、究極の特権階級だったんだ。パワーエリートっていう言葉があったらしいけど、呪力を持たない人間を支配して、栄耀栄華をほしいままにしていたんだよ。しかし、攻撃抑制と愧死機構のために、対人攻撃が不可能になると、立場は逆転する。呪力を持つ人間は、持たない人間を攻撃できなくなるのに、その逆は可能だからだよ。ちょうど、悪鬼……真理亜たちの息子とバケネズミみたいな関係になってしまうんだ」

「じゃあ、呪力を持たない人間にも、攻撃抑制や愧死機構を組み込んでおけば、よかったんじゃない？」

「そうしなかった理由は二つあると思う。一つは、呪力を持つ人間は、それ以外の人間の生殺与奪を握る、圧倒的な優位を手放したくなかったということ。もう一つは、攻撃抑制はともかく、愧死機構は、呪力を持たない人間に組み込むのが不可能だったからだよ。愧死機構のメカニズムを憶えてる？まず、脳が、同じ人間を攻撃したということを認識する。すると、無意識の念動力の発動でホルモンの異常分泌が起きて、最終的には心停止に至るんだ」

愧死機構とは、いわば、呪力による強制的な自殺なのだ。したがって、呪力がなければ、愧死機構も機能しないことになる。

「それで、邪魔になった人たち……呪力のない人間を、獣に変えてしまったのね」

わたしは、これまで自分の暮らしていた社会が、いかに罪深い存在だったかを悟って、戦慄していた。

「ああ。単なるカースト制では、不充分だったんだ。呪力を持たない人間を、攻撃抑制や愧死機構の対象外になるまで貶めるために、遺伝子をハダカデバネズミと混ぜ合わせて、人以下の獣に変えてしまったんだ。……呪力を持った能力者たちに、彼らの労働と貢ぎ物によって暮らす、特権階級としての地位を約束するためにね」

そして、呪力を持った『人間』たちは、異形（いぎょう）の姿へと変えられたかつての同胞たちを、獣のように惨殺し続けてきたのだ。

「でも、よりにもよって、どうして、あんな醜い生き物に？」

「おそらく、それこそが理由なんだ。醜いからだよ」

覚の答えは、何の救いもないものだった。

「醜い生き物だからこそ、異類であることが一目瞭然だし、ほとんど同情を感じないで、殺すことができるんだ。……もちろん、哺乳類には珍しい真社会性を持った生き物だから、より管理がしやすいっていう理由もあったかもしれないけど」

どうして、もっと早く気がつかなかったのかと思う。そう考えれば、すべてが符合するではないか。バケネズミは、先祖とされていたハダカデバネズミと比較すると、何百倍も大きい。たとえ呪力で進化を促進したにせよ、短期間にこれだけ巨大化すれば、どこかに無理が生じるはずだ。

犬と比較すれば、よくわかるだろう。長い年月をかけて、多くの品種に分化された犬ですら、歯を見れば、ひずみが生じているのがわかる。チワワのような小型犬では、小さな顎にぎっしりと歯が詰まっているのに、セントバーナードのような大型犬では、歯と歯の間隔が開いて、すかすかになっているからだ。

バケネズミの歯には、そうした特徴は、まったく見られなかった。

いや、もっと根本的な部分で、疑問を抱くべきだったかもしれない。

なぜ、バケネズミの女王には、子供たちの形状を自由に変えられる力が備わっていたのだろう。胎児の発生を、子宮の中でコントロールしているとしたら、それは、一種の限定的な呪力ではないだろうか。本来、呪力を持たないために獣に変えられてしまった人々であったとしても、その起源が人間にあるなら、形を変えた呪力の萌芽があっても不思議はないはずだ。

「僕らは、何も知らず、彼らを平気で殺してきた。もちろん、理由もなく殺したことは、一度もない。しかし、殺したことは事実なんだ」

わたしは、覚の言葉に、再びショックを受けた。

「じゃあ、わたしたち、本当は、愧死するはず……そうなるべきだったのかも。だって、人間を殺したのよ。それも、あんなに何人も」

そう思うだけで、動悸が速くなり、冷や汗が流れるような気分になる。

「いや。彼らは、人間じゃない。たしかに、僕らと同じ先祖から別れたかもしれないけど、今では、まったく別の生き物になってるんだ」

「だって、同じ二十三対の染色体を持っているのに……？」

たしか、チンパンジーですら、染色体の数は、人間とは異なっているはずだった。

「それが、すべてじゃないよ。要は、僕らが、バケネズミたちを同胞として認識できるかどうかだ。土蜘蛛の叢葉兵や、風船犬、スミフキみたいな……あんな異形の化け物まで、君は、本当に、同じ人間だって思えるのか？」

覚の問いかけは、ずっと、わたしの耳の奥に残っていた。

本音を言おう。理屈はともかくとして、わたしには、バケネズミや、彼らが生み出したミュータントが人間であるというふうには、とても思えなかった。

そうは思わないようにしていたのも、本当である。

わたしの手は、血塗られている。ほとんどは正当防衛で、自分自身や他の人たちを守るためには、やむを得ない行動だった。しかし、バケネズミとの戦争で、数え切れないほどの殺戮を行ったのは、事実である。今になって、それが殺人だと言われても、どうしたらいいのかわからない。今はまだ愧死機構が発動する兆しはないが、くよくよ考え込んでいるうちに、スイッチが入ってしまうことだって、考えられなくはない。

それに、もう一つ。この日、わたしがやろうとしていたことのためには、どうしても、そう考えるわけにはいかなかったのだ。

茅輪の郷の中心部には、新しい公園ができていた。バケネズミの襲撃によって、大勢の人が亡くなった悲劇を忘れないための記念公園だった。

公園には、花壇が設えられ、鎮魂のための碑が建てられていた。戦争が終わって、まだ一ヵ月にしかならず、町中の多くの建物は廃墟のまま残されていたが、この公園だけは、早々と完成していた。

公園の一番奥には、戦いの記憶を風化させないための戦争記念館が作られていた。

完成当初は、この建物の前には、長蛇の列ができていた。日々、憎しみを新たにして、復讐心をかき立てるための列が。中には、毎日、必ず通ってくる老人もいた。息子や娘、その妻と夫、それに孫たちの一家全員を、バケネズミのために皆殺しにされたということだった。

わたしは、戦争記念館の中に入った。見学者はいなかった。今日は、見晴の郷で、戦没者を追悼するための行事が行われているので、ほとんどの人が、

そちらの方へ出向いているのだ。

壁に沿って、バケネズミの悪行を再現する展示が、多数並んでいる。彼らの用いた武器。卑怯な騙し討ちで、無辜（むこ）の人々を虐殺した兵士たち。バケネズミの身体的特徴を誇張するように変形されているものの、すべて、本物の剝製が使われていた。

普通のバケネズミの兵士の隣には、ヒトモドキの標本もあった。夜目遠目には、人間と見まがうばかりだが、こうして間近で見た場合は、かえって違いが際立つために、不気味だった。

その向こうには、奇跡的に残っていたスミフキの頭部と、全身の十分の一の模型が飾られていた。パネルには、粉塵爆発の威力に関する、科学的な解説もある。

そして、展示室の一番奥には、大きなガラスケースが鎮座していた。

ガラスケースの前には、一人の職員が座っていた。二十四時間、四交替制で、展示課の職員が詰めることになっていた。その日、当番だったのは、小野瀬さんという初老の男性だった。

「おや、渡辺さん。今日は、追悼式典へは行かれなかったんですか？」

小野瀬さんは、意外だという顔で言った。

「いえ、今行ってきたところです。小野瀬さんは？」

「もちろん、出たかったんですが、誰かが付いていないといけませんからねえ……」

心底嫌そうな目でガラスケースを見ながら、こぼす。

「じゃあ、お出になったらいかがですか。ここは、わたしが見てますから」

「いやいや、そんな。倫理委員会の方に、こんな仕事を押しつけるわけには……」

小野瀬さんは、固辞したが、行きたそうなそぶりは隠せない。

「だいじょうぶです。今から行ったら、まだ、献花

には間に合いますよ？　亡くなられたお嬢さんに、お花をあげて来てください」

「そうですか……それは、申し訳ありません。せっかくなんで、お言葉に、甘えさせていただきます」

小野瀬さんの表情に、喜色が広がったが、去り際に、ガラスケースを睨みつける。

「何もかも、こいつのせいです。この、醜く腐りきった悪霊め……どうか、たっぷりと苦痛を与えてやってください」

「ええ。わたしも、両親や、たくさんの友人を失いましたから……。さあ、少し急がれた方がいいかもしれませんよ」

「すみません。それでは、ちょっと行ってきます」

小野瀬さんは、早足になって、戦争記念館から出て行った。

わたしは、小野瀬さんが引き返してくるかもしれないので、しばらく待った。それから、ゆっくりと、ガラスケースに歩み寄る。

強化ガラスの中にあるものを見たとき、思わず、目をそむけないではいられなかった。だが、見なければならない。深呼吸し、十数えてから、視線を戻す。

そこに横たわっているのは、すでに生き物であることを止めて、ただ苦しむためにのみ存在している肉塊だった。

「スクィーラ……」

わたしは、そっと呼びかけた。もちろん、何の反応もない。

「もっと早く、来てあげればよかったわね。だけど、今日しか、チャンスがなかったの。まわりに人がいなくなる時が来るのを、待つしかなかったから」

スクィーラの神経細胞には、間断なく苦痛を流し続けるために作られた特殊な腫瘍が、無数に植え付けられていた。わたしが、呪力で苦痛の情報を遮断すると、小刻みな痙攣が止んだ。たぶん、この一ヵ

月間で初めてのことに違いない。

「あなたは、もう、充分苦しんだわ。……だから、終わりにしましょう」

覚から、あんな話を聞かなければよかった。あらためて、後悔に襲われる。はたして、自分にできるだろうか。ここに横たわっているのが、かつての人間の末裔であると知っていながら。

鬼手仏心という言葉が、脳裏に浮かんだ。目を瞑り、もう一度、静かに真言（マントラ）を唱える。いつもなら、瞬時に思い浮かべるだけだが、あえて、ゆっくりと唇を動かしながら。

そして、呪力によって、スクィーラの呼吸中枢を麻痺させる。

「ねえ、スクィーラ。わたしたちが、初めて会ったときのことを憶えてる？」

わたしは、優しく語りかけた。ガラスケースに阻まれて、わたしの声は届かないかもしれないし、届いたとしても、理解できるかどうかは怪しかったが。

「わたしたちは、土蜘蛛に捕まってたんだけど、何とか逃げ出してきたの。そうしたら、また、バケネズミに出会って、今度こそ、だめだと思った。でも、それが、あなたのいる塩屋虻コロニーだったのよ。あなたは、わたしたちの命の恩人だったわ」

ガラスケースの中の肉塊からは、もちろん、応答は返ってこない。しかし、わたしには、何となく、スクィーラが耳を傾けているような気がした。

「あなたは、立派な鎧兜を着ていて、とても流暢な言葉を喋ったわ。それを聞いたとき、どれだけほっとしたか、とても、言葉では言い尽くせない」

かすかな、溜め息のような音が聞こえた。おそらく、呼吸が止まったことによる生理的な反応にすぎないのだろうが、あたかも、スクィーラが返事をしたようだった。

「あれから、いろんなことがあったわね。奇狼丸に追われながら、一緒に夜道を逃げたこともあった。

でも、あなたは、あのとき本当は、わたしたちを裏切って、奇狼丸に内通してたんでしょう？　まったく信用できないんだから。だいたい……」

　わたしは、はっとして言葉を切った。

　スクィーラの様子をたしかめ、これでよかったんだと、自分に言い聞かせる。

　この一ヵ月は、永劫のように感じられたことだろう。だが、苦しみは、終わったのだ。

　復活させられたりすることがないよう、スクィーラの遺体を炭化するまで焼いてから、わたしは、戦争記念館を後にした。

　つい、憎しみと激情に駆られて、やってしまった。追及されたら、そう抗弁するつもりだった。それで、厳罰は免れるだろう。倫理委員会のメンバーとしては、これほど簡単に規則を無視するというのは、とんでもないことだろう。しかし、この頃、わたしは、規則より大事なものがあると思うようになっていた。

　公園を出るとき、遠くから風に乗って、メロディが聞こえてきた。再建された公民館が、『家路』を流している。

遠き山に日は落ちて
星は空をちりばめぬ
きょうのわざを　なしおえて
心軽くやすらえば
風はすずしこの夕べ
いざや楽しまどいせん
まどいせん

やみにもえしかがり火は
ほのお今は静まりぬ
眠れやすくいこえよと
さそうごとく消え行けば
やすきみ手に守られて
いざや楽し夢を見ん

どうしてなんだろうと、わたしは、ひとりごちた。なぜ涙が止まらないのか、自分でも、よくわからなかったのだ。

この長い手記も、ようやく終わりに近づいてきたようだ。

その後、現在までに起きたことについて、簡単に触れておきたい。

スクィーラを安楽死させたことに関連して、わたしは、一ヵ月の謹慎処分を受けたが、さほど非難を受けることはなかった。戦いを終結に導いた功績が、高く評価されていたこともあったが、もしかすると、多くの人たちは、無間地獄の刑に処せられたバケネズミの存在に、うんざりしていたのかもしれない。当初の激情が収まると、苦しみ続ける生き物を見るのは、心地よいものではなくなっていたのだろう。誰もが、何となく祟りがありそうな気分になっていたのは、いかにも日本人的な心情と言うべきかもしれない。

町の周辺に存在するバケネズミを根絶するという提案は、激論の末、小差で否決された。終始一貫して人間に忠実だったと認定された大雀蜂コロニー以下、五つのコロニーだけが存続を許されることになり、奇狼丸との約束は、何とか果たすことができた。

一方で、それ以外のコロニーは、すべて地上から抹殺されてしまったが、それに対する反対票は、わたしが投じた一票だけだった。

それから二年後、わたしは、覚と結婚した。

そして、さらに三年後、わたしは、正式な選挙を経て、倫理委員会の史上最年少の議長に就任し、現在に至っている。

多くのものが灰燼（かいじん）に帰した、あの日から、十年の月日が経過した。

十年という区切りに、両手の指の数という以上の意味はないだろう。だが、最初に書いたように、山積みだった懸案に決まりがついて、新体制が軌道に乗り始めた今になって、皮肉なことに、将来に対する疑いが芽生え始めたのだ。

中でも、最も緊急の課題を突きつけたのは、悪鬼と業魔に関する一通のレポートだった。現在、これまでに例を見なかったくらい、悪鬼や業魔が出現する可能性が高まっているというのだ。

これまでは、悪鬼や業魔が誕生するのは突然変異によるもので、偶然の産物と考えられてきた。だが、そのレポートによると、過去に悪鬼や業魔が出現した事例と、その十年前の社会情勢には、あきらかな相関関係が見られたらしい。

その原因については、まだ仮説の域を出ないものの、共同体を構成する多くの人々が、著しい緊張や、感情的な動揺に曝された場合、呪力の漏出によって遺伝子に変異が起き、攻撃抑制と愧死機構が不完全な子供が生まれてくる確率が高くなるのだという。

また、そうした遺伝子の変異に加え、精神的に不安定な両親によって育てられた子供は、業魔と化す確率が飛躍的に高まるという分析もあった。

もし、それが本当に、悪鬼や業魔が生まれてくるメカニズムだとすれば、今ほど危険な時期はないというのも、杞憂ではないだろう。十年前、わたしたちの町は、未曾有とも言える悲劇に見舞われた。暴力による大量死を経験したことで、今でも多くの住民が、精神的外傷（トラウマ）を抱えている。さらに、バケネズミとの熾烈な戦闘の間には、誰もが、少なくとも一時は、強烈な怒りと攻撃への欲求に、心を支配されたのだから。

その直後に生まれた子供たちは、もうすぐ、呪力を持つようになる。もし、その中から、たった一人のラーマン・クロギウス症候群、または、橋本・アッペルバウム症候群の患者が生まれてくれば、わた

したちの町は、今度こそ滅亡の危機に瀕することになる。

　倫理委員会は、苦渋の決断を迫られた。そして、十年ぶりに、不浄猫を再製することが決まったのである。計画は、覚が場長を務める妙法農場で、極秘裏に進められ、つい最近、二十二匹の可愛らしい仔猫たちがお目見えした。今はまだ、普通の猫と大して変わらない大きさだが、早いものは一年で、剣歯虎を凌ぐ猛獣に成長する。今はただ、この子たちの出番がやって来ないことを、祈るばかりである。

　わたしたちの新しい倫理委員会の仕事は、それだけではなかった。

　これまで、日本列島に点在する九つの町は、最小限の連絡を取り合う以外は、お互いに没交渉だったが、わたしは、まず、そこから変えていこうという発案をした。

　十年前のバケネズミとの戦争は、そうした気運を高める契機になったとは言えるかもしれない。とりあえず、救援に来てくれた北陸の胎内84町、中部の小海95町、それに、東北の白石71町との間で、今後の町作りについて話し合う連絡協議会を発足させた。

　さらに、それらの町と、細々とながら交渉が続いていた、北海道の夕張新生町、関西の精華59町、中国の石見銀山町、四国の四万十町、九州の西海77町とも、交流を推進するための下準備が始まっている。

　それだけではない。西海77町を窓口にして、朝鮮半島の南にある伽倻郡という町へも親書を送ったのだ。(翻訳は、新たに捕獲したミノシロモドキにやらせた)海外との交流が復活するのは、おそらく、この数百年間で初めてのことだろう。

　しかし、本当にやらなくてはならないことは、まだ、残っている。

　つい最近、わたしは、覚と、こんな会話を交わしたばかりだった。

「……みんな、臆病というか保守的すぎて、ときどき嫌になるわ。今の倫理委員会には、わたしより若いメンバーだって、たくさんいるのに」

覚は、微笑した。

「焦ることはないよ。たぶん、みんな、早季ほど大胆にはなれないだけだから」

みな、そう言うのは、なぜだろう。わたしほど、慎重な人間はいないと思うのだが。

「ときどき、呪力は、人間になんの恩恵も与えなかったんじゃないかって、思うことがあるわ。サイコ・バスター入りの十字架を作った人間が書いてたみたいに、悪魔からの贈り物だったのかもしれないって」

「僕は、そうは思わない」

覚は、きっぱりと首を振った。

「呪力は、宇宙の根源に迫る神の力なんだよ。人間は、長い進化を経た末に、ようやく、この高みに達したんだ。最初は、たしかに、身の丈にそぐわない力だったかもしれない。でも、最近になって、やっと、この力と共存できるようになってきたんだ」

覚の意見は、科学者らしい楽観主義に満ちていた。

「ねえ。わたしたち、本当に変われると思う？」

「変われるさ。変わらなきゃ。どんな生物も、変わり続けることで環境に適応して、生き抜いてきたんだから」

問題は、どう変わるかということだろう。

わたしは、それに対する自分の意見を、まだ、人に聞かせたことはない。とても賛同を得られるとは思えないからだ。

だから、ここにだけ書き記しておこう。

攻撃抑制と愧死機構は、たしかに、平和と秩序をもたらしたかもしれない。

だが、それは、あまりに硬直的で不自然な解決方法だったのではないか。

固い甲羅によって身を守っている亀は、いった

ん、甲羅のひび割れから中に虫の侵入を許すと、好き放題に身体を食い荒らされるのを、どうすることもできない。

攻撃抑制と愧死機構の裏をかかれてしまうと、どんなに恐ろしい事態が起きるのかは、十年前の事件や、過去の悪鬼の事例が証明済みだろう。

わたしたちは、いつか、この二つの重い枷を、脱ぎ捨てなくてはならない。

たとえ、そのために、もう一度、すべてが灰燼に帰することがあっても。

けっして信じたくはないが、新しい秩序とは、夥（おびただ）しい流血によって塗り固めなければ、誕生しないものなのかもしれない。

「早季。何を考えてるの？」

覚が、不思議そうな顔で訊いた。

「ううん、なんでもない。……この子が大きくなる頃には、もっといい社会になってると信じたいわね」

「だいじょうぶ。絶対、そうなるよ」

覚は、わたしのお腹の上に、そっと手を当てた。

わたしの胎内には、現在、新しい命が宿っている。わたしたちの初めての子供だった。

今まで、子供を持つのが怖いと感じたこともあったが、今は違う。子供は希望であり、この先、どんなことがあろうと、逞しく育ってくれると信じている。

二人で話し合って、男の子なら瞬、女の子なら真理亜という名前にすると決めていた。

十年前の事件以来、瞬は、一度も現れていない。きっと、わたしの心の奥底、無意識の大海の中で長い眠りについているのだろう。しかし、彼は、どんなときも、わたしたちを見守っているはずだった。

深夜、あたりが静かになってから、椅子に深く腰掛けて、目を閉じてみることがある。

浮かんでくるのは、判で押したように、いつも同じ光景だ。

お堂の暗闇をバックに護摩壇の上で燃えさかる炎。地の底から響いてくる真言（マントラ）の朗唱に、合いの手を入れるように弾ける、オレンジ色の火の粉。

そのたびに、なぜこの光景なのだろうと不思議になる。

ずっと、通過儀礼（イニシエーション）の際の催眠暗示が、それだけ強力だったのだろうと思っていた。

だが、この手記を書き終えようとしている今は、そうではないような気がしている。

あの炎は、きっと、変わらぬもの、未来に向かってずっと続いていく何かを、象徴しているのだろう。

この手記は、当初の予定通り、原本と複写二部をタイムカプセルに入れ、地中深く埋めることにする。そのほかに、ミノシロモドキにスキャンさせて、千年後に、初めて公開できるような手段を講じるつもりだ。

わたしたちは、はたして変わることができたのだろうか。今から千年後に、あなたが、これを読んでいるとしたら、その答えを知っていることだろう。

願わくば、その答えが、イエスでありますように。

二四五年十二月一日　渡辺早季

蛇足かもしれないが、最後に、全人学級の壁に貼られていた標語を、ここに記しておきたい。

想像力こそが、すべてを変える。

本書は二〇〇八年一月に小社より単行本として刊行されたものです。

N.D.C.913　954p　18cm

定価はカバーに
表示してあります

新世界より

二〇〇九年八月六日　第一刷発行

KODANSHA NOVELS

著者—貴志祐介

© YUSUKE KISHI 2009 Printed in Japan

発行者—鈴木　哲
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二・一二・二一
郵便番号一一二・八〇〇一
編集部〇三・五三九五・三五〇六
販売部〇三・五三九五・五八一七
業務部〇三・五三九五・三六一五

印刷所—大日本印刷株式会社　製本所—株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN978-4-06-182660-1

新宿少年探偵団シリーズ
鴇色の仮面
太田忠司

新宿少年探偵団シリーズ
まぼろし曲馬団の逆襲
太田忠司

新宿少年探偵団シリーズ
大怪樹
太田忠司

シリーズ完結編！
宙（そら）　新宿少年探偵団
太田忠司

鍵をめぐる、奇妙で美しい物語
五つの鍵の物語
太田忠司

書下ろし山岳渓流推理
殺人雪稜
太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
被害者の刻印
太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
遭難渓流
太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
遍路殺（ころ）がし
太田蘭三

書下ろし警察ミステリー
首輪　警視庁北多摩署特捜本部
太田蘭三

長編本格推理
倒錯の帰結
折原　一

第34回メフィスト賞受賞！
少女は踊る暗い腹の中踊る
岡崎隼人

正統本格推理
ウサギの乱
霞（かすみ）　流一（りゅういち）

不死身の竜は、誰に、なぜ、いかにして刺殺されたか!?
殺竜事件　a case of dragonslayer
上遠野（かどの）浩平（こうへい）

上遠野浩平×金子一馬　待望の新作！
紫骸城事件　inside the apocalypse castle
上遠野浩平

魅惑のファンタジー×ミステリー！
海賊島事件　the man in pirate's island
上遠野浩平

〈事件シリーズ〉待望の最新作！
禁涙境事件　some tragedies of no-tear land
上遠野浩平

至上のミステリー×ファンタジー！
残酷号事件　the cruel tale of ZANKOKU-GO
上遠野浩平

書下ろし伝奇アクション
魔界医師メフィスト　怪屋敷
菊地秀行

第29回日本SF大賞受賞作
新世界より
貴志祐介

極上の北村魔術
盤上の敵
北村　薫

珠玉のミステリーアンソロジー
紙魚家崩壊（しみけほうかい）　九つの謎
北村　薫

第24回メフィスト賞受賞作!!
『クロック城』殺人事件
北山猛邦

世界の果ての本格ミステリ
『瑠璃城』殺人事件
北山猛邦

不可能犯罪の連鎖
『アリス・ミラー城』殺人事件
北山猛邦

トリックの北山が放つ本格ミステリ
『ギロチン城』殺人事件
北山猛邦

ミステリ・ルネッサンス
姑獲鳥（うぶめ）の夏（なつ）
京極夏彦

超絶のミステリ
魍魎（もうりょう）の匣（はこ）
京極夏彦

本格小説
狂骨の夢
京極夏彦

小説
鉄鼠（てっそ）の檻（おり）
京極夏彦

小説
絡新婦（じょろうぐも）の理（ことわり）　京極夏彦

小説
塗仏（ぬりぼとけ）の宴（うたげ）　宴の支度　京極夏彦

小説
塗仏の宴　宴の始末　京極夏彦

妖怪小説
百鬼夜行——陰　京極夏彦

探偵小説
百器徒然袋——雨　京極夏彦

冒険小説
今昔続百鬼——雲　京極夏彦

小説
陰摩羅鬼（おんもらき）の瑕（きず）　京極夏彦

探偵小説
百器徒然袋——風　京極夏彦

小説
邪魅（じゃみ）の雫（しずく）　京極夏彦

第12回メフィスト賞受賞作!!
ドッペルゲンガー宮（きゅう）　〈あかずの扉〉研究会　流氷館へ　霧舎（きりしゃ）　巧（たくみ）

霧舎巧版〝獄門島〟出現!
カレイドスコープ島　〈あかずの扉〉研究会　竹取島へ　霧舎　巧

乱れ飛ぶダイイング・メッセージ!
ラグナロク洞　〈あかずの扉〉研究会　影郎沼へ　霧舎　巧

Whodunitに正面から挑んだ傑作!
マリオネット園（ランド）　〈あかずの扉〉研究会　首吊塔へ　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
四月は霧の00（ラブラブ）密室　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
五月はピンクと水色の恋のアリバイ崩し　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
六月はイニシャルトークDE連続誘拐　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
七月は織姫と彦星の交換殺人　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
八月は一夜限りの心霊探偵　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
九月は謎（ナゾ）×謎（ナゾ）修学旅行で暗号解読　霧舎　巧

私立霧舎学園ミステリ白書
十月は二人三脚の消去法推理　霧舎　巧

霧舎 巧を網羅する傑作を収録!
霧舎巧　傑作短編集　霧舎　巧

オーソドックスで高尚な本格の原点
名探偵はもういない　霧舎　巧

〈あかずの扉〉研究会シリーズ外伝!!
名探偵はどこにいる　霧舎　巧

スラップスティック・ミステリ
タイムスリップ森鷗外　鯨統一郎

スラップスティック・ミステリ
タイムスリップ明治維新　鯨統一郎

爆笑です。
タイムスリップ釈迦如来　鯨統一郎

現代に現れた黄門様が大活躍!
タイムスリップ水戸黄門　鯨統一郎

大好評!　タイムスリップシリーズ第5弾!!
タイムスリップ戦国時代　鯨統一郎

異能の変人が探偵に!?
念写探偵　加賀美鏡介　楠木誠一郎

妙なる狂気の調べ
四重奏　Quartet　倉阪鬼一郎

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

奇才の集大成
青い館の崩壊　ブルー・ローズ殺人事件　倉阪鬼一郎

ゴーストハンターシリーズ最新作！
紫の館の幻惑　卍卍教殺人事件　倉阪鬼一郎

遂に放たれた前代未聞のトリック
四神金赤館銀青館不可能殺人　倉阪鬼一郎

これぞ真・本格！
紙の碑に泪を　上小野田警部の退屈な事件　倉阪鬼一郎

これぞ本格推理の醍醐味！
猫丸先輩の推測　倉知　淳

超絶仮想事件簿
猫丸先輩の空論　倉知　淳

密室本の白眉！
闇匣　黒田研二

初シリーズ作！
笑殺魔（ハーフリース保育園）推理日誌　黒田研二

シリーズ最新作
白昼蟲（ハーフリース保育園）推理日誌　黒田研二

青春ミステリー
ナナフシの恋　～Mimetic Girl～　黒田研二

第17回メフィスト賞受賞作
火蛾　古泉迦十（こいずみかじゅう）

大人気シリーズ奇跡の復活！
完全版　地獄堂霊界通信①　香月日輪

大人気地獄堂シリーズ続刊登場!!
完全版　地獄堂霊界通信②　香月日輪

第14回メフィスト賞受賞作
UNKNOWN（アンノウン）　古処誠二（こどころせいじ）

心ふるえる本格推理
少年たちの密室　古処誠二

沖縄の碧い海が赤く染まる！
セレネの肖像　小前　亮

ノベルスの面白さの原点がここにある！
ST　警視庁科学特捜班　今野　敏

面白い！　これぞノベルス!!
ST　警視庁科学特捜班　毒物殺人　今野　敏

ミステリー界最強の捜査集団
ST　警視庁科学特捜班　黒いモスクワ　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　青の調査ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　赤の調査ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　黄の調査ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　緑の調査ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　黒の調査ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　為朝伝説殺人ファイル　今野　敏

書下ろし警察ミステリー
ST　桃太郎伝説殺人ファイル　今野　敏

"G"世代直撃！
宇宙海兵隊ギガース　今野　敏

シリーズ第2弾！
宇宙海兵隊ギガース2　今野　敏

シリーズ第3弾！
宇宙海兵隊ギガース3　今野　敏

シリーズ第4弾！
宇宙海兵隊ギガース4　今野　敏

シリーズ第5弾！
宇宙海兵隊ギガース5　今野 敏

メフィスト賞！ 戦慄の二十歳、デビュー！
フリッカー式 鏡公彦にうってつけの殺人　佐藤友哉

戦慄の"鏡家サーガ"！
エナメルを塗った魂の比重　佐藤友哉

戦慄の"鏡家サーガ"！
水没ピアノ　佐藤友哉

戦慄の〈鏡家サーガ〉例外編！
鏡姉妹の飛ぶ教室 〈鏡家サーガ〉例外編　佐藤友哉

戦慄の〈鏡家サーガ〉入門編！
青酸クリームソーダ 〈鏡家サーガ〉入門編　佐藤友哉

問題作中の問題作、あるいは傑作
クリスマス・テロル　佐藤友哉

緻密な計算が導く華麗なる大仕掛け！
円環の孤独　佐飛通俊

知的本格ミステリ
アインシュタイン・ゲーム　佐飛通俊

元帥様の死の真相とは!?
宴の果て　死は独裁者に　佐飛通俊

講談社ノベルス初登場！
疾駆する蒼　ブルー　佐神 良

気鋭の新人、講談社ノベルス初登場！
海駆けるライヴァー・バード　澤見 彰

甦ったラマの大冒険活劇！
転生　篠田節子

建築探偵桜井京介の事件簿
未明の家　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
玄い女神（くろいめがみ）　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
翡翠の城　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
灰色の砦　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
原罪の庭　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
美貌の帳　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
桜　闇　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
仮面の島　篠田真由美

蒼の四つの冒険
センティメンタル・ブルー　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
月蝕の窓　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
綺羅の柩　篠田真由美

蒼による建築探偵番外編！
angels——天使たちの長い夜　篠田真由美

建築探偵シリーズ番外編
Ave Maria　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
失楽の街　篠田真由美

建築探偵桜井京介の事件簿
胡蝶の鏡　篠田真由美

ミステリの大伽藍
アベラシオン（上）　篠田真由美

ミステリの金字塔
アベラシオン（下）　篠田真由美

KODANSHA NOVELS
講談社ノベルス

講談社
最新刊
ノベルス

第41回メフィスト賞受賞作!

赤星香一郎

虫とりのうた

小説家志望の赤井は、とある事件によって「虫とりのうた」伝説を知ることになり——。

これぞ究極の推理ゲーム

歌野晶午

密室殺人ゲーム2.0

実行犯=出題者。殺人者(ゲーマー)どもがチャット上で繰り広げる推理合戦!

第29回日本SF大賞受賞作

貴志祐介

新世界より

2008年のエンタメ界を席巻した
超弩級の大作が早くもノベルス化!

《あかずの扉》研究会シリーズ外伝!!

霧舎 巧

名探偵はどこにいる

殺人の嫌疑をかけられた双子の姉妹。その「無実」は証明できるか……!?

王道ファンタジー

高里椎奈

雪の追憶 フェンネル大陸 真勇伝

消えた親友サチを追って、少女フェンは北国へ。ついに彼の正体が明らかに!

8月19日発売予定
はやみねかおる入魂の少年「新本格」!

はやみねかおる

少年名探偵 虹北恭助の冒険 フランス陽炎村事件

フランスの田舎町に亡霊出現!? 恭助最大の冒険&推理始まる! シリーズ完結編。

8月19日発売予定
事件の舞台は商都と帝都!

芦辺 拓

少女探偵は帝都を駆ける

探偵小説を愛す女学生が事件に挑む! 表題作「少女探偵は帝都を駆ける」他6編を収録。

8月19日発売予定
未収録原稿二本が読める!

香月日輪

完全版 地獄堂霊界通信③

失踪した友だちを助け出せ! 三人悪が神隠しの山で古代の神と遭遇する!!

8月19日発売予定
書き下ろし幻想小説

石神茉莉

謝肉祭の王 玩具館綺譚

仮面を被れば1年だけ王になれる。魔力にとらわれた女性作家の運命とは!?

貴志祐介（きし・ゆうすけ）

1959年、大阪府生まれ。京都大学経済学部卒業。生命保険会社に勤務後、作家に。1996年、『十三番目の人格（ペルソナ）―― ISOLA』が第３回日本ホラー小説大賞長編賞佳作に選ばれる。1997年『黒い家』で第４回日本ホラー小説大賞、2005年『硝子のハンマー』で日本推理作家協会賞長編賞を受賞。その他の著書に、『天使の囀（さえず）り』『クリムゾンの迷宮』などがある。『十三番目の人格 ―― ISOLA』『黒い家』『青の炎』が映画化されるなど、つねに話題作を発表し続ける、エンターテインメント界の鬼才。